

---

**遊戯王** The Ultimate GOD Force

機皇帝プラシド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王 The Ultimate GOD Force

### 【Nコード】

N8054S

### 【作者名】

機皇帝ブラシド

### 【あらすじ】

注意 この小説は前作『遊戯王 ～絶望と希望の神々の物語～』の続編になります。前作を読む手を省きたいという方は『キャラ設定Ver.3』から完全オリジナル編が始まりますので、ここから見始めるとよいと思われます。2章からの世界観はGX終了後となっております。

あらすじ(2章より)

デュエルアカデミアを卒業したアルフォスとソラは、そのままデュ

エルアカデミアドミノ大学校へ進学する。大幅に力が消えてしまったアルフォスは新たな脅威を前に、どう対処するのだろうか？

## 注意（前書き）

初めましての人も、そうでない人も、今回も（または『は』ですね）よろしく願います。  
相変わらずの中二病ですがね…。

先にキャラ設定を読んでおくことをお勧めします。

…感想待ってます。

## 注意

注意 この小説は『遊戯王 ～絶望と希望の神々の物語～』の続編になります。

前作を読まなくてもある程度分かるようにあらすじを載せます。が、前作を読んだほうが理解度は上がると思います。

要注意 前作は第2章まで、文章構成、物語構成ともに超黒歴史的存在です。

## 前作第1章

デュエルアカデミア入学から三幻魔撃破。オリカとオリ敵登場、究極神お披露目。幻魔のオリカなど登場。

主人公の姿『ヘルカイザーの完全黒Ver』から『黒いアポリア（外見的な意味で）』に。名前もリヨウ デイスペアへ。

リリカルなのはの3人娘との出会い（？）

それ以外には特に原作から外れたところは無し

## 第2章

スーパー黒歴史。恥ずかしくて語れない。

## 第3章

光の結社編。カイザーがヘルカイザーに。オリカ『サイバー・ゴッド・ドラゴン』など多数登場。

ロキの片思い中の相手セレナの墓参りの話。

トールvsラミエル、ラミエルのデッキであるオレイカルコス系

のオリカ多数登場。トール敗北、ラミエル逃亡。

v s 斎王戦、スクルドの切り札『エターナル・ローズ・ドラゴン』  
覚醒。

v s Enemy、ロキの切り札『クリムゾン・スーパーノヴァ・  
ドラゴン』覚醒。

修学旅行編。デイスペアの過去と暗黒神との戦いのループについて  
の真実を知る。いろいろ気づいたデイスペアの一人称が『我』か  
ら『わたし』へ。

## 第4章

修学旅行編最終話。デイスペアが固有デツキ（この小説中で、その  
キャラクターしか扱えない特殊なデツキのこと。そのほか、固有  
カードや固有デイスクなどがある）『機皇』を入手。『機皇神帝エ  
クシニクル』など、オリカ多数登場。なお、この時にノルンの三  
姉妹『ウルズ』『ヴェルザンデイ』がレギュラー入り。スクルドは  
もともとデイスペアの嫁としてレギュラー。

v s 墮天使軍団、デイスペアが瀕死状態になりスクルドがキレる。  
バレンタイン特別編

ジエネックス編スタート。途中、生徒からラミエルの手掛かりを  
入手。

トールv s ラミエル2回目、死闘のなかトールの切り札『ダーク  
ネス・ウィング・ドラゴン』覚醒。トールの勝利、死んだと思われ  
ていたロキの片思いの相手セレナが生きていることがラミエルより  
知らされ、一行は墮天使の本拠地『墮天城』へ。

墮天城にて、ロキv s 墮天神。ロキの勝利後、セレナ救出。

斎王戦、デュエル直前に主人公『デイスペア』から『スレイ』に。  
見た目は『黒いアポリア』から『肌の露出がなく、服（厳密には違  
う）の色が黒いパラドックス』。圧倒的なパワーでスレイの勝利。

## 第5章

2年から3年への長期休暇編。オリキャラ『イリア』『アレク』がこの話の中でのみ仲間に。スクルドとスレイは京都へ旅行。北欧の神のもとに『三元聖』が現れ、圧倒的な力を持った『極元聖』を使い攻めてくる。その最中、オーデインの切り札『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』覚醒、『極元聖』を退けることに成功。後日、イリアとアレクが旅立ち、そのあとに主人公陣もデュエルアカデミアへ向かった。

ここから先がこの小説での話になります。  
次回はキャラ設定を載せます。

## 注意（後書き）

次回「キャラ設定」

ウルズ「さて、久しぶりかもしれないしはじめましてかもしれないけど、ノルンの三姉妹の1人ウルズよ」

ヴェルザンディ「ヴェルザンディです」

スクルド「よろしく！あとがきでは主にその話で出た最強カードを紹介するよ。もしくはその話を斜め上から見て感想を言ってみたりとか」

ウルズ「正直言うと最強カードのチョイスのほう斜め上よね」



## キャラ設定 第1章Ver (前書き)

どうもです。

前作からの変更点がありますので、一応見ておいてください。

最近の出来事

GWは忙しくなりそうです。友人と遊んだり遊んだり遊んだり……  
ダメ人間じゃないか！

## キャラ設定 第1章Ver

名前 スレイリアルアス

性別 無し

年 不明

誕生日 不明

身長 2m5cm

体重 75キロ

性格 好戦的 デュエルも基本的にはアグレッシブな戦術をとる。

一人称 『わたし』 女は私、男はわたしで分けています。性別がない場合も『わたし』です。ただし、ノルン三姉妹に限り『私』です。

見た目：パラドックスの不思議な形をしたほうの眉毛を、普通のほうの形に直して、髪の毛、眉毛、目の色を黒にしている。

また、右目の形を『』に変えることで（作中では『無限眼の起動』）戦闘能力を飛躍的に上昇させることができる。この状態では冷徹な戦い方をするが、今では三元聖が敗れたことでこの無限眼の起動状態でのみ発生する『殆どのプラスの感情の消滅』が常に起こっている。

実際には、『スクール以外の生命体に対する感情』が殆ど無い。

服装：パラドックスがもともと着ていた上半身と、腕の部分から離れている例の服を、腕と肩をつなげて色を黒にした容姿。早い話が首より下の肌の露出部分はまったく無い。手もアポリアがつけていたような手袋(?)の緑の結晶無しVerで覆われている。基本的に服の色は黒。ただし、白かった部分は白のままであり、肩についていた金属(?)の色はそのままである。

∴ 結局のところ服は着ていないのであり、『服に見える身体(作中では『器』)』すべての細部まで神力の供給はなされている。人間というよりも機械のほうが近い。また肩に飾りがあるせいで動きにくいかもしれない…と思ったがそうでもないようだ。

デュエルディスク(固有ディスク)：黒いエネルギー体が金属から扇状に広がってできており、一般的なデュエルディスクとは形が違う。(アポリアのような感じ。ただし、デッキと墓地はこのディスクに付属している)

備考：時々爆弾発言をすることがある。

3つの心臓を持っており、器(体)のどこかにある。人格も見た目も男。見た目はパラドックスさんだが、CVはアポリアさんのまま。基本デッキはツールとはタイプの違うX-セイバー。と機皇、三極神などなど。

スレイはスクルドのことを『妻』というよりも『親友、恋人』として見ているようだ。

この時、新たな力を手にしており、究極神が10倍の大きさになったり、新たな魔術を覚えたりした。

なお、前作の終盤まで『最高神の1体』だったが最高神をやめた。切り札は3体の究極神。

究極神オシリス 全長750km 見た目は常に赤い光を纏っている『オシリスの天空竜』

レベル12 神属性 究極神族 攻撃力X000 守備力X000  
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体とライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードの攻撃力と守備力は自分の手札×2000ポイントになる。このカードは魔法・効果モンスターの効果・コストを受けず、畏の効果・コストは1ターンのみ有効とする。このカードが戦闘を行う場合ダメージステップ時に相手はカードの効果を発動できず、自分への戦闘ダメージは0になる。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールド上を離れた場合エンドフェイズにライフを半分払い、このカードを自分フィールド上に戻す。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合そのモンスターの攻撃力と守備力を2000ポイントダウンする。このカードがフィールド上に存在する限り自分フィールド上に存在するレベル11以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

攻撃名が『アルティメット・サンダーフォース』、攻守ダウンの効果名が『サンダー・プレッシャー』  
前口上「神の鼓動、永き時を経て封印を解かん。究極の力よ、光臨せよ！『究極神オシリス』」  
攻撃のモーションは、下の口から雷の砲撃を吐き出す。効果は上の口から雷の弾丸をぶつける。

究極神オベリスク 全長500km 見た目は常に青い光をまとっている『オベリスクの巨神兵』  
レベル12 神属性 究極神族 攻撃力8000 守備力8000  
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体とライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは畏・効果モンスターの効果・コストを受けず、魔法の効果・コストを1ターンのみ有効とする。このカードが戦闘を行う場

合相手はダメージステップ時にカードの効果を発動できず、自分への戦闘ダメージは0になる。このカードが戦闘以外の方法でフィールド上を離れた場合エンドフェイズにライフを半分払い、このカードを自分フィールド上に戻す。自分または相手のターンにこのカード以外のモンスター2体を生贄に捧げること、このターンこのカードは相手モンスター全てに攻撃することができない。このカードがフィールド上に存在する限り自分フィールド上に存在するレベル1以下はモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

攻撃名は『アルティメット・クラッシュャー』、効果を使用した時の攻撃名が『ゴッド・ジェノサイド・エナジー』

前口上「あらぶる巨神、究極の力を以って我が敵を粉碎する！光臨せよ、『究極神オベリスク』！」  
攻撃モーションは、拳に青い神力をまもって殴りつける。

究極神帝ラー 全長1000km 見た目は常に白金の光を纏っている『ラーの翼神竜』

レベル12 神属性 究極神帝族 攻撃力 守備力

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体とライフ半分を生贄に捧げた場合のみ特殊召喚できる。

このカードは自分フィールド上に「究極神オシリス」「究極神オベリスク」が存在する時のみ効果が適用され攻撃可能になる。このカードはこのカード以外のいかなる効果・コストも受けず戦闘では破壊されない。このカードがフィールド上に存在する限り相手のカードの効果は無効になり、このカードのコントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在している限り、お互いのプレイヤーはサレンダーできない。1ターンに1度、相手のカードを全て除外し のダメージを与える。このカードの特殊召喚と効果は

無効化されない。このカードの元々のレベルは として扱う。このカードの効果のスペルスピードは として扱う。

攻撃名は『ゴッド・アルティメット・フレア』、 のダメージを与える効果名が『ゴッド・アブソリュート・ノヴァ』

前口上「限りなき力、究極の神々を束ねその全てを放つ！時空を滅せよ！『究極神帝ラー』！！」

ダメージ効果のモーションは、ラーの口に白金の神力が凝縮され、超爆発を起こす。射程距離は のため、ゴッドモーメントで召喚した状態で使用すると時空の極地である最高神界も消してしまう。通常攻撃のモーションは、巨大な炎を吐く。

究極神は（地球に収まりきらないので）宇宙に出現します。

名前 スクルド

年齢 ？

性別 不明

誕生日 ？

身長 175センチ…だが…5話目から大変なことに…

体重 ものすごく軽い。

スリーサイズ 本人により削除。胸は普通。

性格 ドジな面がある。

一人称『私』

見た目と服装：『女神スクルドの託宣』（遊戯王DMオリジナルカード）参照。ただし、目の色は青に変更。服装は色を多少変更しただけで、あとは同じ。髪はツインテールだったが、今は縛っておらず、スレイからもらったティアラをつけている。ティアラについてはチームラグナロクの回想のブレイブがつけてたアレを思い出してくれるとありがたい。

デュエルディスク（固有ディスク）：デッキを杖に取り込み、手札は自身の前に浮かせる。墓地も杖の中、召喚するカードは空中に浮き、基本的には消えている。（Z・ONEとのライディングデュエルのような感じ）

備考：ノルンの三姉妹の一人で末っ子、スレイの妻。告白はスクルドから。スレイ同様、誕生の時よりかかっている魔法で、風呂などには（ry

食べた物は直接神力に変換される。

外見は女性だが、性別がない。人格も女性。

CVは明るい女のひと。想像に任せます。

戦女神をやめてから、その無理がたたって体が弱くなってしまった。ちなみに、2人の姉も合わせて決して面倒だからという理由で容姿はカードのイラストから採用したわけではない。

なお、スクルドはスレイのことを『夫』としてよりも『友達、頼れる人、恋人』として見ているようだ。

切り札は『エターナル・ローズ・ドラゴン』。

エターナル・ローズ・ドラゴン

シンクロモンスター レベル12 神属性 ドラゴン族 ATK4

000 DEF4000

『ブラック・ローズ・ドラゴン』+レベル4の植物族チューナー1体+『エボリューション・ローズ』

このカードは上記の素材でしかシンクロ召喚できず、このカードはシンクロ召喚以外の方法で特殊召喚できない。また、このカードの召喚条件を無視することもできない。このカードは相手のカードの効果では自分フィールド上を離れず、コントロールも変更されない。1ターンに1度、墓地のモンスターカードを1枚除外する。このカードの攻撃力は除外したモンスターの攻撃力分アップする。このカードが相手モンスターを破壊した場合、このカードの攻撃力分のダメージを与える。このカードが戦闘によって破壊されたとき、フィールド上のカードをすべて破壊する。

攻撃名は『エターナル・ローズ・ストリーム』、ダメージを与える効果名が『エターナル・フレア・ストリーム』、フィールド上のカードをすべて破壊する効果名が『エンド・オブ・エターナル』  
前口上「永き封印が解かれ、黄金の薔薇が開花する！シンクロ召喚！大いなる7つの希望、その1つ！『エターナル・ローズ・ドラゴン』！！」別バージョンあり。

名前 ヴェルザンデイ

年齢 スクルドより上、ウルズより下

性別 不明

誕生日 ?



身長 180cm

体重 軽い

スリーサイズ 本人により削除。胸は普通。

性格 お嬢様

一人称 『私』

見た目：『女神ヴェルダンディの導き』参照。ただし、目の色は淡いグリーン。服装の細部の装飾を多少豪華にしている。

デュエルディスク（固有ディスク）：スクルドと同じ。

備考：ノルンの三姉妹の1人、次女。誕生時よりかかっている魔法の効力で服や身体が汚れることがない。性別なしで、女性人格。食べたものなどは直接神力に変換。切り札は今のところエンシェント・フェアリー・ドラゴン。CVはおとなしい女の人。想像に任せます。名前の英語読みは『ヴェルダンディ』。本来名前のあとには伸ばさないうが、スレイ達にはヴェルダンディーと伸ばし音を付けて呼ばれている。

名前 ウルズ

年齢 ヴェルザンディよりも上。

性別 不明

身長 185cm

体重 軽い

スリーサイズ 本人により削除。胸は普通。

性格 大人の女性？

一人称 『私』

見た目：『女神ウルドの裁断』参照。服の装飾を多少豪華にし、目の色を淡い黄色に変更。

デュエルディスク（固有ディスク）：スクルド、ヴェルザンディーと同じ。

備考：備考：ノルンの三姉妹の1人、長女。誕生時よりかかっている魔法の効力で服や身体が汚れることがない。性別なしで、女性人格。食べたものなどは直接神力に変換。切り札は今のところ『ブラック・ブルドラゴ』。CVはおとなしい声の女の人。想像に任せます名前の英語読みは『ウルド』。

名前 オーディン

年齢 ？

性別 無し

誕生日？

身長 2メートル10センチ

体重 70キロ

性格 5D'sのホセ…つまり、ツールとロキのまとめ役。

一人称 『わたし』

見た目と服装：ハラルド。チームラグナロク参照。ちなみに、髪の毛と眉毛は直結してない。

デュエルディスク（固有ディスク）：神力によって、完全にその場で創りだす。デザインはその時々で自由に決められるが、基本的には遊戯王DMで使われていたのと同じモデル。

備考：いろいろ省略。スレイで殆ど全部書き終わってしまった…C Vはハラルドさん。

切り札は不明、今現在は『極神聖帝オーディン』と『機皇帝グランエル』と『機皇帝クラフィリア』。前作134話で『エクस्पロージョン・デス・ドラゴン（大きさは全長30〜40km）』が追加された。

『機皇帝クラフィリア』

レベル10 光属性 機械族 ATK10000 DEF10000

『機皇帝グランエル』 + 『機皇帝スキエル』 + 『機皇帝ワイゼル』

このカードは『融合』による融合召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。1ターンに1度、相手フイ

ールド上に存在するシンクロモンスターをすべてゲームから除外することができる。このカードはシンクロモンスターの効果を受けない。このカードの効果は無効化されない。

エキスプロージョン・デス・ドラゴン

レベル12 神属性 ドラゴン族 ATK4000 DEF4000

『Sinパラドクス・ドラゴン』+『エキスプロージョン・ノヴァ』  
+『インフェルノ・エボリューション』

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。このカードは相手のカード効果ではフィールドを離れず、自分のターンでは戦闘によって破壊されない。1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力を4000にすることができる。このカードが相手モンスターを破壊した場合、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターの攻撃力の合計分のダメージを相手プレイヤーに与える。このカードが相手モンスターを破壊した場合、エンドフェイズまで破壊したモンスターの攻撃力をこのカードに加え、もう1度攻撃することができる。

名前 トール

年齢 ?

性別 男

誕生日 ?

身長 1メートル95センチ

体重 67.5キロ

性格 ジャック・アトラス（ときどき傲慢なところが）

一人称 『我』

見た目：チームラグナロクより、ドラゴン。服装は基本的に一般的な私服に見えるが重装備。

デュエルディスク（固有ディスク）：自らの得物、ミヨルニルを変形させてデュエルディスクにする。形は一般的な物に近い。

備考：スレイ達と違って性別があるので、スレイ達と違って男湯に入らないとぶつ飛ばされて警察行きになる。食べた物は（ry  
モテないという不遇の神。

CVはドラゴンさん。

今現在の切り札は『極神皇トール』と『機皇帝ワイゼル』、『X  
XX-セイバーオメガブラスター』、『ダークネス・ウィング・ドラゴン』。

ダークネス・ウィング・ドラゴン

レベル12 神属性 ドラゴン族 ATK4000 DEF4000  
『ブラックフェザー・ドラゴン』 + 『エボリューション・フェザー』  
+ 『レボリューション・ウィング』

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。1ターンに1度、相手のモンスター1体を除外することができる。このカードに黒翼カウンスターを1つ置くことで、相手の発動・適用したカードの効果を無効にすることができる。

きる。この効果に対して魔法・畏・モンスター効果を発動することはできず、この効果はスペルスピード3として扱う。このカードに乗っている黒翼カウンター1つにつき、このカードの攻撃力と守備力は1000ポイントダウンする。このカードは戦闘では破壊されない。1ターンに1度、自分のメインフェイズまたは相手のバトルフェイズ開始時に、このカードに乗っている黒翼カウンターをすべて取り除くことで、エンドフェイズまで相手フィールド上のモンスターの攻撃力・守備力を0にする。

攻撃名は『ダークネス・ブレイズ・ストリーム』  
相手モンスターの攻撃力を0にする効果名が『ダークネス・フォー  
ル』

前口上「黒き羽根、闇の翼に進化する！大いなる翼よ、その闇を以つて闇を払え！シンクロ召喚、7つの希望、その1つ！！『ダークネス・ウィング・ドラゴン』！！」

名前 ロキ

年齢 ?

性別 無し

誕生日 ?

身長 157cm

体重 43キロ

性格 ルチアーノ

一人称『僕』

見た目と服装：機械化されていないルチアーノ。普段からルチアーノが被っていたフードやマントを装備している。中の服はルチアーノと同じ、ライディングデュエル時は、ルチアーノは髪の毛の先に帽子のようなものをつけていたがロキはつけていない。

デュエルディスク（固有ディスク）：ルチアーノと同じ。ただし、緑色のエネルギーの部分は、白になっている。名前は『デルタフォース』。

備考：外見は男で、人格も男。性別がないの（ry

食べた物は（ry

CVはルチアーノさん。

ノルンの三姉妹のウルズと仲がいい。

切り札は『クリムゾン・スーパードラゴン』、『極神皇ロキ』、『機皇帝スキエル』。

クリムゾン・スーパードラゴン

レベル12 神属性 ドラゴン族 シンクロモンスター ATK4

000 DEF4000

『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』+『スカーレット・ノヴァ・フェアリー』+『フォース・ノヴァ・フォーチュン』

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できず、素材は上記のカードでなければならない。このカードの攻撃力は自分の墓地に存在するチューナー×1000ポイントアップする。このカードが攻撃する場合、ダメージステップ終了時まで相手はカードの効果を発動できない。このカードがコントローラーのフィールドを離れる場合、代わりにコントローラーの墓地のチューナー1体をゲームか

ら除外することができる。この効果のスペルスピードは4として扱う。このカードがフィールドを離れた場合、自分の墓地から『レック・デーモンズ・ドラゴン』1体を特殊召喚することができる。また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分のターンのメインフェイズ2終了後、もう1度だけバトルフェイズを行うことができる。

攻撃名は『エクストリーム・クリムゾン・ソウル』

名前 セレナIIハーヴ

性別 女

年齢 ?

誕生日 2月29日

身長 157cm

体重 40キロ

性格 素直でおとなしい

一人称『私』

見た目：目の色を空色にしたリリカルなのはのフェイト。2人並んだら紛らわしい。

デュエルディスク：ノーマルVer。普通に人間が使ってるアレ。



備考：ロキのことが好きな人間の女の子。ただし告白はしていない。ロキからもされておらず、先は長そうである。切り札は不明。また、普通のディスクでも現実にもダメージを発生させる能力を持っている。モンスターや魔法・畏の実体化も可能。CVはやっぱりフェイトと同じで、紛らわしい。

名前 ハイムダル

性別 男

年齢 ?

誕生日 人間時間で1月23日

身長 178cm

体重 60キロ

性格 リア充を茶化す、所謂自分が目立ちたがり屋で、他人の不幸を喜ぶタイプ。よほどのことであれば喜んだりはしない。

一人称 『俺』

見た目：銀髪で紫色の目の、調子に乗りそうな顔。服は、中世ヨーロッパの貴族のような感じ。

デュエルディスク（固有ディスク）：ギャラルホルンを変形させてデュエルディスクにする。デッキの内容は基本的に『エロゲデッキ』と呼ばれる。

備考：性別があるので男湯に入らないと女性の方々にボコボコにされて警察行きになる。本小説での、最強のネタキャラ。スクールドに昔というか今も恋心を抱いているが、茶化すたびに『最低』と言われて首を吊ろうとする。誰か止めてあげてくれ。最近ではスクールドもいいが、『世界は広い、自分のパートナーを探しに行く』と言って出掛けたので、番外編以外の出番はスレイ達がいる世界に偶然いたときのみとなる。

## キャラ設定 第1章Ver (後書き)

次回「第1話 新学年スタート」

ウルズ「大きな変更点が3つあるわ。1つはオーディン様の切り札の効果を載せたこと。2つ目はスレイの感情について。3つ目は究極神の大きさの変更よ。10倍になったわ」

スクルド「さて、最強カード紹介行ってみよう！」

『青眼の天龍』

レベル12 光属性 ドラゴン族 ATK4000 DEF4000

『青眼の白龍』 +レベル1チューナー+『レジェンド・ドラゴン』

このカードは上記のカードでしかシンクロ召喚できない。このカードが戦闘を行う場合、ダメージステップ時に戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする。このカードがフィールドから離れる場合、代わりに手札・デッキ・フィールド・エクストラデッキ・除外ゾーンからドラゴン族モンスター1体を墓地へ送ることができる。このカードの効果を無効にすることはできず、このカードの効果を無効にするカードの効果が発動・適用した場合、その効果を無効にして破壊する。

ウルズ「この小説で社長が使うモンスターよ。って、キャラ設定で出てきてないじゃない」

スクルド「一応紹介しておこうかなって思ったんだ。この先でもしかしたら進化形が…でるかもね」

## 第1話 留学生登場（前書き）

とりあえず記念すべき（？）第1話です。（実際には135話だよ

）

…感想待っています。

最近の出来事

日曜日にカードショップに行ってきました。友人連れて4人です。

## 第1話 留学生登場

〽〽〽デュエルアカデミア校舎・廊下〽〽〽

「……この廊下、かなり久しいな。」

スレイは1人で廊下を歩きながら独り言を言っていた。基本的に他の仲間たちは自由にしているため、1人でいることが多いのだ。そしてスレイが廊下を曲がるうとしたとき…

「うわっ！」

スレイは一人の少年と曲がり角でぶつかった。青い髪で、中性的な顔立ちをしている。

「（…こんな人間、デュエルアカデミアにいたか？）」

デュエルアカデミアの生徒の人数が、4年分増えているから校舎も一回り大きくしたようだ。食糧庫や各設備なども、今までの20倍は大きくしたらしい。どう考えても食糧20倍は必要ないと思うが…。

「すみません…急いでいるので失礼します！」

おそらく使い慣れていない敬語で一言謝罪すると、その少年は走り去ってしまった。スレイはその少年が走り去っていった方向を振り返らずに歩き出す。そもそもぶつかったこと自体を何とも思っていない

ない。

「(…どうでもいい)」

スレイは懐に手を入れ、3枚のカードを取り出してデッキに入れた。ちなみにスレイの器は、服に見えるところも含めているが、上着の部分などは感覚が無いため、触れた感じは人間が来ている服に触れたものと同じだ。

スレイは教室に向かって歩く。新入生と留学生の歓迎会と紹介の会場だからだ。ちなみに、すでに会場にはスレイを除く生徒が全員集まっていたりする。スレイが一番最後なのは、単純に1人で会場に向かいたかったから。他の生徒と話したい気分ではなかったからだ。

「(……………ここか)」

スレイは閉じている扉を開けた。ちょうど留学生がステージに出てきたタイミングだ。留学生の中には、先ほどの少年もいた。留学生全員の視線がスレイに集まる。ちなみに、オーディン達はバラバラの席に座っており、スレイが入ってきたところで微笑を浮かべた。

「(プロフェッサー・コブラ、ヨハン・アンデルセン、ジム・クロコダイル・クック、オースチン・オブライエン、アモン・ガラム…だが、あの少年は一体何者だ?)」

「俺の名前はリマ・テュージュだ。よろしく！」

少年が明るい声で自己紹介する。敬語はやはり基本的には使わないらしい。

その後はプロフェッサー・コブラの堅苦しい話が続ぎ、エキシビジ

ヨンマツチを行うことになった。当然ヨハンvs十代なのだが、ここで十代が…

「スレイもこの学園じゃ、俺よりも遥かに強いぜ？」

と言った。するとコブラが

「ではスレイ！リマとデュエルしてくれないか？」

「（…十代、余計なことを…だがいいだろう）」

スレイは静かに階段を下りてステージに上がった。そして、コブラからデスベルトを渡された。

「これはわたしからのプレゼントだ。」

「（何がプレゼントだ…くだらん）」

スレイは腕にデスベルトをはめた。だが、はめた直後にデスベルトがショートして崩れ去った。

「何!？」

コブラは予想外の出来事に驚き、眼を見張る。十代とヨハンはもうデュエルをスタートした。

「すまないが、どうやらわたしには合わないプレゼントのようだ。わたしはこのベルトなしでデュエルする。来い、リマ・テュージュ」

教室からデュエル場に移動して、スレイは海馬からデュエルアカデ

ミアに来た時に受け取っていた、バトルシテイなどで使用された形のデュエルディスクを腕に付けて展開させ、デッキをセットした。後頭部についている輪のような固有ディスク『ゴッドモーメント』は使用しない。固有ディスクは召喚したモンスターや発動した魔法・罠が実体化する。現実のダメージが必要ない場合は使用しない。

「行くぜ！」

「デュエル！」

Slay vs Lima

「先攻は俺がもらう！ドロ、俺は『黄泉ガエル』を守備表示で召喚！ターンエンド！」

Lima

LP4000

手札×5

フィールド

黄泉ガエル DEF100

「わたしのターン。わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚。そして魔法カード『機皇召集』発動。このカードは自分フィールド上に『機皇』モンスターが存在する時に発動でき、デッキ『機皇』モンスター1体を特殊召喚する。デッキより『機皇神マシニクル？』を特殊召喚する！」

機皇神マシニクル？ ATK4000

「攻撃力4000…！」



いきなり最上級モンスターを特殊召喚してきた…この学園最強のデューリストというだけのことはあるな。

「『機皇神マシニクル？』の攻撃宣言時に『機皇兵ワイゼル・アイン』のモンスター効果発動。機械族モンスターの攻撃宣言時に、その攻撃モンスターに貫通能力を与える。ザ・キューブ・オブ・デイスペア！」

機皇神マシニクルは、無数の立方体を砲撃として射出し、黄泉ガエールを攻撃した。

「うわあああああー!!」

L i m a   L P 4 0 0 0   1 0 0

『ワアアアアアア！』

周りのアカデミアの生徒から歓声上がる。いきなりライフを100まで削れば、この学園では普通こうなるだろう。

「『機皇兵ワイゼル・アイン』でダイレクトアタック。クオーク・カーブ」

この攻撃が通ればわたしの勝利が決定する。だが留学生である以上、これしきの事で終わるはずがない。

「手札から『バトルフェーダー』を特殊召喚するぜ。このモンスターは相手のダイレクトアタック宣言時に手札から特殊召喚でき、バトルを終了させるカードだ！」

鐘の音が聞こえ、機皇兵が攻撃を中断した。スレイは1枚のカードを掴んでディスクに差し込む。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

S l a y

L P 4 0 0 0

手札×3

フィールド

機皇神マシニクル？ ATK4000

機皇兵ワイゼル・アイン ATK1800

伏せカード×1

「俺のターン！スタンバイフェイズに、墓地にいる『黄泉ガエル』を守備表示で特殊召喚！さらに魔法カード『二重召喚』発動！このターン、2回の通常召喚を可能にする！」

「ほっ…」

奴の後ろにいる精霊…あれは神獣王バルバロスか。

「さらに墓地にモンスターがないことで、手札から『ガーディア・エアトス』を特殊召喚！行くぜ、まずは『クリッター』を召喚だ。そして『黄泉ガエル』『バトルフェーダー』『クリッター』の3体を生贄に『神獣王バルバロス』を召喚！」

召喚されたバルバロスが、その槍の先端より螺旋状の波動を放ち、スレイのフィールド上のカードをすべて破壊した。

「『神獣王バルバロス』が3体の生贄を捧げて召喚された場合、相

手フィールド上のカードをすべて破壊する。墓地に送られた『クリッター』の効果でデッキから2体目の『バトルフェーダー』を手札に加えるぜ！俺のエース『神獣王バルバロス』でダイレクタアタック！トルネード・シエイパー！」

「破壊されたトラップ『コア・リザーブ』発動。このカードはフィールドから除去されたターン、任意のタイミングで墓地から発動できる。デッキから『スカイ・コア』を守備表示で特殊召喚、破壊する。」

スカイ・コアは特殊召喚された直後に爆発して破壊されてしまった。

「自分のモンスターを召喚して破壊？」

「『スカイ・コア』がカード効果で破壊された時、デッキ・手札・墓地から『機皇兵スキエル』、『スキエルT』、『スキエルA』、『スキエルG』、『スキエルC』を特殊召喚する。合体しろ、機皇帝スキエル！」

5つのパーツが変形して合体し、1つの龍のような形の機体になった。

「機皇帝スキエルの攻撃力は各パーツの合計になる。」

機皇帝スキエル	ATK2200
スキエルT	ATK400
スキエルA	ATK1000
スキエルG	DEF300
スキエルC	ATK600

「なら、バルバロスでスキエル本体を攻撃だ！」

「『スキエルG』効果発動。1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃を無効にする。」

「『ガードイアン・エアトス』で『機皇帝スキエル』を攻撃！精霊のオペラ！」

「……………本体が破壊されたことで、他のパーツはすべて破壊される。」

S l a y    L P 4 0 0 0    3 7 0 0

「カードを伏せてターンエンドだ！」

L i m a

L P 1 0 0

手札×1

フィールド

神獣王バルバロス    A T K 3 0 0 0

ガードイアン・エアトス    A T K 2 5 0 0

伏せカード×1

「わたしのターン…。」

リマの手札はバトルフェーダー。あと1回、確実にダイレクトアタックを防がれる。だが、ダイレクトアタックする必要がなかったとしたらどうする？

「わたしは永続魔法『機皇連召』を発動する。このカードは、自分

フィールド上のモンスターがカード効果によって破壊された場合、デッキまたは手札より『スカイ・コア』『ワイズ・コア』『グランド・コア』のいずれか1体を特殊召喚し、破壊するカード。」

「成程、さっきの核が破壊されるとあのロボットが召喚できるのか！」

「わたしは『ワイゼルT』を召喚。このモンスターは『』の名を持つモンスターがフィールド上に存在しない場合破壊される。」

この人間…勘が鋭いのか。だが勘が鋭くても効果は止められない。

「自分フィールド上のモンスターがカード効果によって破壊されたことで、デッキから『グランド・コア』を特殊召喚し、破壊する。そして『グランド・コア』がカード効果で破壊されたことで、デッキ・手札・墓地から『機皇帝グランエル』『グランエルT』『グランエルA』『グランエルG』『グランエルC』を特殊召喚する。合体せよ、機皇帝グランエル！」

機皇帝グランエル     ATK3700  
グランエルT     ATK500  
グランエルA     ATK1300  
グランエルG     DEF1000  
グランエルC     ATK700

「機皇帝グランエルの攻撃力はわたしのライフと同じ…つまり3700だ。」

「くっ、トラップ発動『アタックドレイン』！相手フィールド上のモンスターの攻撃力の合計が自分のライフを上回っている時、相手

フィールド上のモンスターの攻撃力の合計分、自分のライフを回復する！」

L i m a    L P 1 0 0    6 3 0 0

「『機皇帝グランエル』で『神獣王バルバロス』を攻撃。グラ  
ド・スローター・キャノン！」

「くっ…っ…」

L i m a    L P 6 3 0 0    5 6 0 0

「速攻魔法『A・アサルト』！自分フィールド上に機皇帝の本体が  
存在し、更に『A』と名のつくパーツが存在する場合、『A』と名  
のつくパーツ1体を破壊して本体はもう1度攻撃することができる。  
グラド・スローター・キャノン第2打！対象は『ガーディアン・  
エアトス』だ！」

グランエルAが分離して、分離したグランエルAからグラド・ス  
ローター・キャノンが発射されて反動で破壊された。

「うあああああ！」

L i m a    L P 5 6 0 0    4 4 0 0

「わたしは魔法カード『機皇神の宝札』を発動。手札が2枚以下の  
時、墓地から『機皇神』1体を除外し、デッキからカードを5枚ド  
ローする。そして、この効果によって除外されたモンスターは、自  
分のエンドフェイズで数えて3ターン後に墓地に戻る」

「一気に5枚もかよ!?」

「……………わたしは『グランエルA3』を召喚。ターンエンドだ。」

Slay

LP3700

手札×5

フィールド

機皇帝グランエル ATK3700

グランエルT ATK500

グランエルA3 ATK1800

グランエルG DEF1000

グランエルC ATK700

機皇連召

「俺のターン!…来たぜ、『天よりの宝札』を発動!互いに手札が6枚になるようにドロウする!」

リマはカードを5枚ドロウし、スレイが1枚ドロウした。

「更に速攻魔法『ワン・ロスト・ドロウ』を発動。手札のレベル1の効果モンスター『バトルフェーダー』を除外して、デッキから3枚ドロウ。さあ行くぞ、手札から『デビルズ・サンクチュアリ』を2枚発動!『メタルデビル・トークン』2体を特殊召喚!魔法カード『死者転生』を発動して、手札を1枚捨てて墓地から『神獣王バルバロス』を回収。魔法カード『死者蘇生』発動、墓地から『クリッター』を復活させる!」

再びリマのフィールドに3体のモンスターが並ぶ。

「3体のモンスターを生贄に『神獣王バルバロス』を召喚！『クリッター』の効果で、デッキから『速攻のかかし』を手札に加えて、バルバロスの効果で相手フィールド上のカードをすべて破壊する！」

「……『機皇連召』は相手のカード効果ではフィールドを離れず、効果は無効にならない。わたしのフィールド上のモンスターがカード効果で破壊されたことにより、デッキから『ワイズ・コア』を特殊召喚して破壊。デッキ・手札・墓地から『機皇帝ワイゼル』、『ワイゼルト』、『ワイゼルA』、『ワイゼルG』、『ワイゼルC』を特殊召喚。合体しろ、機皇帝ワイゼル！」

今度は人型の機体だ。常に光の粒子を出して飛んでいる。

「『機皇帝ワイゼル』の攻撃力・守備力は各パーツの合計だ。」

機皇帝ワイゼル     ATK 2500  
ワイゼルト     ATK 500  
ワイゼルA     ATK 1200  
ワイゼルG     DEF 1200  
ワイゼルトC     ATK 800

「『神獣王バルバロス』！『機皇帝ワイゼル』を攻撃だ！」

「『ワイゼルG』効果発動。相手モンスターの攻撃対象をこのモンスターに変更する。」

バルバロスの槍を、ワイゼルの腕が防いで代わりに破壊された。

「まだまだ！俺は相手フィールド上に2体以上同じ属性のモンスターが存在することで、手札から『神禽王アレクトール』を特殊召喚！」



「そのモンスター…ようやくお前のデッキが理解できた。お前のデッキは神に仕える神獣を集めたデッキ…この世界では滅多に出回っていない幻のシリーズ。」

だが機皇帝の本体は相手のカード効果の対象にすることはできない。アレクトールの効果はフィールド上のカード1枚を選択し、そのカード効果をエンドフェイズまで無効にする効果。この効果によってわたしの機皇帝の効果が無力化されることは無い。

「へえ、よくわかったな。『天使の施し』発動。3枚ドローして2枚捨てる。カードを伏せてターンエンド」

L i m a

L P 4 4 0 0

手札×3

フィールド

神獣王バルバロス ATK3000

神禽王アレクトール ATK2400

伏せカード×1

「わたしのターン。手札より魔法カード『ハイパーチェンジ』発動。自分フィールド上に存在する『ワイゼルA』『ワイゼルT』を破壊し、デッキから『ワイゼルA5』『ワイゼルT3』を特殊召喚。更に欠けているパーツがある場合、そのパーツを墓地から除外することでパーツの強化形態をデッキから特殊召喚する。現れる『ワイゼルG3』！」

機皇帝ワイゼル ATK2500 3400

ワイゼルT3 ATK600

ワイゼルA5    ATK2000  
ワイゼルG3    DEF2000

「くっ…攻撃力が3400に上がった…」

「『機皇帝ワイゼル』で『神獣王バルバロス』を攻撃！」

「させるか！トラップカード『聖なるバリアー-ミラーフォース-』  
発動だ！相手の攻撃宣言時に発動し、相手の攻撃表示モンスターを  
すべて破壊する！これでお前のモンスターは全滅するぜ！」

「甘い、『ワイゼルA5』のモンスター効果発動。『機皇帝ワイゼ  
ル』が攻撃する時、相手が発動したトラップカードの発動と効果  
を無効にして破壊する。」

ミラーフォースはワイゼルA5から放たれた電撃で破壊された。

「何！バルバロス！」

L i m a    LP4400    4000

「カードを3枚伏せてターンエンド」

S l a y

LP3700

手札×3

フィールド

機皇帝ワイゼル    ATK3400

ワイゼルT3    ATK600

ワイゼルA5    ATK2000

ワイゼルG3 DEF2000

ワイゼルC ATK800

機皇連召

伏せカード×3

「俺のターン！」

「トラップ発動『コール・ラヴィリティ』。相手はカードを1枚ドロップ、『ワイゼルC』を破壊し、デッキから『スキエルC5』を特殊召喚。機皇帝ワイゼルと合体させる。」

機皇帝ワイゼル ATK3400 3400

スキエルC5 ATK800

「なっ！別の機皇帝のパーツ!?」

「機皇帝は他の機皇帝のパーツとの合体が可能だ。当然、パーツの効果も有効になる。」

スキエルC5のモンスター効果は1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃を無効にし、機皇帝が相手モンスターを破壊した時に300ポイントのダメージを与える。

更にワイゼルT3の効果により、奴の魔法・罠の効果は1ターンに1度無効になり、機皇帝の攻撃時にワイゼルA5の効果で奴が発動した罠を無力化でき、2倍の貫通ダメージを与える。そして、例えば奴が攻撃力3401以上のモンスターで3回の攻撃を仕掛けようと、ワイゼルG3の効果で攻撃対象をこのカードに変更し、1ターンに1度破壊されない。

つまり、機皇帝ワイゼルを倒すには通常は4回以上の攻撃をする必要がある。…が、神禽王アレクトールの効果で一体どのパーツの能

力を無効化してくるか…。

「俺は『神禽王アレクトール』の効果で『ワイゼルG3』の効果は無効にする！」

「やはりか！」

「そして、手札の『神機王ウル』と墓地の『神獣王バルバロス』を除外し、手札から『獣神機王バルバロスU r』を特殊召喚！」

獣神機王バルバロスU r    A T K 3 8 0 0

「だがそのモンスターが相手に与える戦闘ダメージは0だ。」

「わかっている！装備魔法『愚鈍の斧』！『獣神機王バルバロスU r』に装備し、効果を無効にして攻撃力を1000ポイントアップする。」

獣神機王バルバロスU r    A T K 3 8 0 0    4 8 0 0

「攻撃力4800…。」

「カードを伏せて魔法カード『命削りの宝札』を発動だ！この効果で、手札が5枚になるように…つまり5枚ドロー！」

「『ワイゼルT3』のモンスター効果発動。1ターンに1度、相手の魔法・罠カードの発動と効果を無効にして破壊する！」

ドロー補助をしてくることなど大体予想がつく。だが、あの伏せカードも多分ドロー補助だろう。

「なら、伏せカードオープンだ。『神獣の天札』！『神獣』または『バルバロス』と名のつくモンスター1体を、除外ゾーンまたは墓地からデッキに戻し、手札が5枚になるようにドロォー。」

リマは除外されたバルバロスをデッキに戻してカードを5枚ドロォーした。

「よし、来たぜ。魔法カード『神獣の宝玉』発動！このターン、『神禽王アレクトール』『神獣王バルバロス』のどちらか1体は、自身の効果をもう1度使用できる。俺は『神禽王アレクトール』の効果で『スキエルC5』の効果が無効にする！バトルだ、『獣神機王バルバロスU』で『ワイゼルA5』を攻撃！クラッグ・シヨット！」

「……………」

Slay	LP	3700	100
機皇帝ワイゼル	ATK	3400	1400

「止めだ！『神禽王アレクトール』で『機皇帝ワイゼル』を攻撃」

「……………トランプ発動。『ディフェンド・マシン』。この戦闘で発生する自分へのダメージを800ポイントダウン、その後デッキから1枚ドロォーし、『G』と名のつくモンスター1体を破壊する。」

スレイの前に、機皇帝から分離した腕の部分が現れてガードし、ワイゼルG3は破壊された。

「ターンエンド」

Lima

LP4000

手札×4

フィールド

獣神機王バルバロスUr ATK4800

+ 愚鈍の斧

神禽王アレクツール ATK2400

「わたしの…ターン！わたしは魔法カード『マシニクル』を発動。自分の墓地に存在する機皇帝のパーツを任意の枚数除外し、同じレベルのパーツをデッキ・手札・墓地から特殊召喚する。墓地から『ワイゼルA5』、『ワイゼルG』を除外！『スキエルG』と『スキエルA5』を特殊召喚する！」

機皇帝ワイゼル ATK1400 3000

スキエルG ATK200

スキエルA5 ATK1400

「『スキエルA5』のモンスター効果発動。自分フィールド上のモンスターは相手プレイヤーへ直接攻撃できる！『機皇帝ワイゼル』でダイレクトアタック！」

「うあああああ！？」

Lima LP4000 1000

だ、だがライフはまだ1000ポイント残ってる！ヨハンが負けた今、俺まで負けたら留学生としての面子が立たない！

「速攻魔法『ツイン・ブラスト』！『スキエルG』を破壊し、機皇帝はこのターン、もう1度攻撃することができる！」

機皇帝ワイゼル      ATK3000    2800

「何だつて!？」

「『機皇帝ワイゼル』のダイレクトアタック！」

「うわあああああああ！」

L i m a    L P 1 0 0 0    - 1 8 0 0

S l a y    W i n

「勝者、スレイ！」

『ワアアアアアアアア！』

「……………」

スレイはそのまま振り返らずにステージから降りて、デュエル場から出て行った。その後スクールがリマを見ると、リマのデスベルトが光ったのが見えた。

「（あれを生徒全員に渡してデスデュエルなんかするんだ…）」

エキシビジョンマッチ終了後、歓迎会と入学式が終了してとりあえず今日の学校は終わりだ。

くくく地下研究施設くくく

「むう…スレイに渡したデスベルトが壊れた…不良品か？」

研究施設で様々なモニターを見ている1人の男…プロフェッサー・コブラは、スレイのデスベルトが壊れたことに対して考えていた。

「ほかにも数人、デスベルトを装着した瞬間にデスベルトが壊れた連中がいる…」

まあいい、数人分のエネルギーが得られなくとも、この学園には大勢のデュエリストがいる。連中を利用すれば莫大なエネルギーが手に入るはずだ。

「ハーツハーツハーツハーツハ！」

次回へ続く。



## 第1話 留学生登場（後書き）

長さ的には毎回こんなものです。

8000〜9000文字くらいでしょうか。稀に13000文字くらい行く時とありますがね。

次回「クロノスvsスレイ」

ウルズ「さあ、相変わらずひどい文才だけどスタートね」

スクルド「今日の最強カード行ってみよー」

『ワイゼルA5』

レベル5 閻属性 機械族 ATK2000 DEF0

このカードは通常召喚できない。このカードは自分フィールド上に存在する『ワイゼルA3』を生贄に捧げることで手札から特殊召喚することができる。このカードはフィールド上に『』と名のつくモンスターが表側表示で存在しない場合破壊される。自分フィールド上に存在する『』と名のつくモンスターが攻撃する場合、相手が発動した罠カードの発動と効果を無効にして破壊することができる。また、『』と名のつくモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、守備力を攻撃力が超えていれば、その2倍の数値分相手にダメージを与える。

ヴェルザンディ「どう考えても『機皇帝ワイゼル』か『神獣王バルバロス』だと思うのですけれど…」

ウルズ「5D'sでは機皇神マシニクル？の効果で墓地に送られて、その効果を得たわね。2倍の貫通ダメージは侮れないわ」

スクルド「でもスキエルA5のほうが強いかも…」

『スキエルA5』

レベル5 風属性 機械族 ATK1400 DEF0

このカードは通常召喚できない。このカードは自分フィールド上に存在する『スキエルA3』を生贄に捧げることで手札から特殊召喚することができる。このカードはフィールド上に『』と名のつくモンスターが表側表示で存在しない場合破壊される。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在している限り、自分フィールド上のモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

ウルズ「ならなんでワイゼルA5を先に紹介したのよ…」

第2話 クロノスvsスレイ 古代の機械と究極神（前書き）

どうも。

最後のほづが雑になった：orz

最近の出来事

早く9月が来ないかな：金の力で極星天ヴァルキュリアを3枚集めて極神デッキを完成させませ！

## 第2話 クロノスvsスレイ 古代の機械と究極神

~~~~デュエルアカデミア~~~~

「……………」

リマ・テュージュ…奴は一体何者だ？ヨハンと同じくノース校代表のようだが…問題はあのデッキ…精霊はバルバロスだが、あのデッキから感じた力はバルバロスの物ではない。究極宝玉神といい勝負だ。

わたしが廊下を歩いてくると、向こうからコブラが歩いてきた。

「おっと、スレイ。」

プロフェッサー・コブラはわたしに声をかける。

「……………何の用だ？」

出来れば返事などしたくないし、関わりたくもない。ただでさえ始業式終了後に高町達に捕まっていたのだからな。

「お前はリマとのデュエルで本気を出していなかったな？」

「……………それがどうした？」

「デュエルアカデミアの生徒としてそれはあるまじき行為だ。よってお前にこの学園の実技最高責任者のクロノスとデュエルしてもらう。」

本当の目的はデスベルトが壊れた原因を調べることだ。精霊の力ならば余程巨大な力を持っていなければデスベルトが壊れることは無い。

「……随分と強引な要求だな。いいだろう、クロノスならばわたしが捻りつぶしてくれる。」

スレイはコブラに連れられ、生徒が全員集まったデュエル場に行った。

~~~~デュエル場~~~~

「…………行くぞ、クロノス。」

外野がうるさい。

教師である以上、手加減はできないノーネ。」

「デュエル!」

S l a y   v s   C r o n o s

「先攻はわたしがもらうノーネ。ドローニョ!」

「……………」

だいぶ前にクロノスにロキが渡したシンクロモンスター『アンティーク・ギア古代の機械原子巨人』…あれを召喚されれば苦戦は必至。

「わたしは『融合』を発動するノーネ。手札の『アンティーク・ギア古代の機械巨人』と『アンティーク・ギア古代の機械兵士』、『アンティーク・ギア古代の機械獣』を融合するノーネ。出でよー古代の機械究極巨人へ『アンティーク・ギア・アルティメット・ゴーレム』!」

古代の機械究極巨人 ATK4400

「……………」

1ターン目から切り札級モンスターか。だが甘い、攻撃力4400程度などわたしには通用しないぞ。

「ターンエンドなノーネ」

Cronus

LP4000

手札×2

フィールド

古代の機械究極巨人 ATK4400

「わたしのターン…わたしは『XX-セイバーフラムナイト』を攻撃表示で召喚、カードを4枚伏せてターンエンド。」

スレイは手早く自分のターンを終え、手札を見る。スレイの手には、裏面が普通のカードよりも赤いカードが握られていた。

Slay

LP4000

手札×1

フィールド

XX-セイバーフラムナイト ATK1300

伏せカード×4

「わたしのターン、ドローなノーネ。」

シニョールスレイの手札は『究極神オシリス』…召喚されればわたしの敗北が決定するようなものなノーネ。

「バトル。『古代の機械究極巨人』で『XX-セイバーフラムナイト』を攻撃！」

「…（そこは普通か。）『XX-セイバーフラムナイト』の効果発動。1度だけ相手モンスター1体の攻撃を無効にする。」

攻撃力4400の攻撃をそのまま受ければダメージは3100ポイント。さらに今フラムナイトを失えばわたしのフィールドはがら空き。次のドローがモンスターであるかどうかわからない以上、それを許すわけにはいかない。

「ここまでスレイとクロノスの戦況を見れば圧倒的にクロノスの有利だが…」

トールは観客席の一番上からスレイとクロノスのデュエルを見てい

る。

「キツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ、確かに傍から見ればそう見えるよね。だけどスレイの手札にあるあの赤いカードはオシリス…スレイのフィールドに3体のモンスターがそろった瞬間にこのフィールドは逆転するね」

特徴的な笑い方をするロキがトールの話に返事をする。

「…それにスレイの伏せカード…あれはおそらく、『ガトムズの緊急指令』と除去系カードが3枚」

オーディンは落ち着いた様子でデュエルを見守る。ロキとトールとオーディンが並ぶと、背が高すぎるオーディンだけが浮いてしまう。

「ターンエンドなノーネ」

Cronus

LP4000

手札×3

フィールド

古代の機械究極巨人 ATK4400

「わたしのターン。……」

XX-セイバーエマーズブレイドか…ならば一択しかあるまい。プロフェッサー・コブラ…わたしの力をよく見ておくがいい。本来な



「これほど大勢の人間の前では使用できないカードを使用するのだからな。」

「わたしは『XX-セイバーエマーズブレイド』を召喚する。バトル、『XX-セイバーエマーズブレイド』で『古代の機械究極巨人』に自爆特攻する。」

Slay LP4000 900

「……エマーズブレイドが戦闘によって破壊されたことで、デッキからレベル4以下の『XX-セイバーエマーズブレイド』を特殊召喚する。バトル終了……。レベル3の『XX-セイバーエマーズブレイド』にレベル3の『XX-セイバーフラムナイト』をチューニング、シンクロ召喚。『XX-セイバーヒュンレイ』！」

本来、ヒュンレイの召喚成功時に相手の魔法・罠を3枚まで破壊できるが、クロノスのフィールドに伏せカードは無い。よってヒュンレイの効果は不発。

しかしスレイの狙いはこれではなかった。スレイの伏せカードの2枚が表側になった。

ちなみに、初めてシンクロ召喚を見る留学生や新1年生は驚く。

「『ガトムズの緊急指令』『死者蘇生』。墓地から『XX-セイバーエマーズブレイド』2体と『XX-セイバーフラムナイト』を復活。」

「ありゃ、除去カードは3枚じゃなくて2枚か。」

ロキは多少驚いた表情で自分の予想が外れたことに反応した。

「ロキが外すとは…珍しいな。」

だが、ロキでもたまにはこういうこともあるだろう。

「目に焼き付けるがいい、コブラ！わたしは『XX-セイバーヒュンレイ』、『XX-セイバーエマーズブレイド』2体と、わたしのライフ半分を生贄に捧げる！」

4つの光の球が、天空を超え宇宙へと飛び出した。そして、4つの球が互いに衝突して爆発し、太陽と同じ程度のまばゆい輝きを放つ赤い球体が出現した。

「神の鼓動、永き時を経て封印を解かん。究極の力よ、光臨せよ！  
『究極神オシリス』！！！」

宇宙に出現していた赤い球体が膨張して地球と同じくらいの大きさになると、その赤い光が消えて中から全長750kmの究極神の1体である、究極神オシリスが出現した。

デュエルアカデミアのデュエル場のモニターから、衛星を通じてその映像が映し出される。1年生でデュエルを始めたばかりの者は、モニター越しでも涙目になるほどの迫力がある。数名の女子が、そのプレッシャーで既に泣き出してしまった。

「『究極神オシリス』の攻撃力・守備力はわたしの手札の枚数×2

000ポイントになる。だが、わたしの手札は0、よってオシリスの攻撃力・守備力は0だ。ターンエンド。」

Slay

LP450

手札×0

フィールド

究極神オシリス ATK0

XX-セイバーフラムナイト ATK1300

伏せカード×2

「わたしのターン！ドローニヨ！」

…正直逃げたいノーネ。あんなものの攻撃を食らったら、例えソリツドビジョンでも怖いに決まっているノーネ。もう足が震えているノーネ。

「わたしは『古代の機械兵士』を守備表示で召喚するノーネ。」

「この瞬間、『究極神オシリス』の効果発動。相手がモンスターを召喚・特殊召喚した場合、そのモンスターの攻撃力・守備力を2000ポイントダウンする。サンダー・プレッシャー！！」

オシリスの上の口から、雷の球が吐き出される。雷の球がアカデミアを包み込み、古代の機械兵士の攻守が2000ポイントダウンした。

古代の機械兵士 DEF1300 0

「（ものすごく怖かったノーネ。『サテライト・キャノン』の比じ

やないノーネ。」

クロノスの足がガタガタ震えている。プロフェッサー・コブラでも実は動じていないように見えて内心かなり動揺している。

「バトルなノーネ。『古代の機械究極巨人』で『究極神オシリス』を攻撃！」

「忘れたか！『XX-セイバーフラムナイト』のモンスター効果。1度のみ相手モンスターの攻撃を無効にする！」

「グヌヌヌヌ…ターンエンド…。」

Cronus

LP4000

手札×3

フィールド

古代の機械究極巨人 ATK4400

古代の機械兵士 DEF0

「わたしのターン！」

究極神オシリス ATK0 2000

「バトルだ！」

「（助けてほしいノーネ！もうオシリスの前に立っているだけでプレッシャーが半端じゃないノーネ！！）」

「『究極神オシリス』よ！『古代の機械兵士』を粉碎せよ。アルテ

イメット・サンダーフォース!!」

巨大な雷砲が宇宙より大気圏に突入し、デュエルアカデミア島どこるか、その周囲の海を広範囲で巻き込み古代の機械兵士を破壊した。オーデイン達は、これがもしもゴッドモーメントによって召喚された神が放っていたものだとしたら、と考えると少し身震いした。

「わたしはモンスターをセットし、ターンエンド。」

S l a y

L P 4 5 0

手札×0

フィールド

究極神オシリス ATK0

XX-セイバーフラムナイト ATK1300

伏せモンスター×1

伏せカード×2

「わたしのターン…ドロー。」

クロノスがドローした次の瞬間、スレイの伏せカードが表になった。

「トランプ発動、『強制脱出装置』。『古代の機械究極巨人』をエクストラデッキに戻す。」

クロノスは慌てるしかない。手札を4枚も使用して召喚した最上級融合モンスターを、たった1枚の罠カードでバウンスされてしまい、その上で古代の機械究極巨人の破壊された時に発動する、古代の機械巨人を墓地から特殊召喚する効果を封じられてしまったからだ。クロノスは伏せカードを奈落の落とし穴と次元幽閉だと予想してお

り、スレイの伏せカードは全く警戒していなかった。

「どうしたクロノス？」

スレイはクロノスを無表情で見る。

「グヌヌヌ…わたしは『古代の機械の再構築』を発動するノーネ。このカードの効果で、墓地に存在する『古代の機械巨人』を召喚条件を無視して全て特殊召喚するノーネ！！」

しかしクロノスの墓地にあるのは1体のみだ。クロノスのフィールドに、瓦礫の山が現れそれが古代の機械巨人を形作った。

古代の機械巨人 ATK3000

「『究極神オシリス』効果発動。サンダー・プレッシャー！」

再び宇宙から飛来した雷の球体がアカデミアの島を包む。

古代の機械巨人 ATK3000 1000

「わたしは『アンティーク・ギアチューニング古代の機械調律者』を召喚するノーネ。レベル8の『古代の機械巨人』にレベル2の『古代の機械調律者』をチューニング！シンクロ召喚！『古代の機械原子巨人』！！」

デュエル場が埋まりそうな大きさの、赤い古代の機械巨人がデュエルアカデミア校舎の外に出現した。モニターにそれが映し出される。

古代の機械原子巨人 ATK3500

「ついに召喚したか：『究極神オシリス』の効果により、攻撃力・守備力は2000ポイントダウン。」

「でも、『古代の機械原子巨人』の攻撃力は墓地の『古代の機械』と名のつくカード1枚につき600ポイントアップするノーネ。」

古代の機械原子巨人 ATK3500 1500 5100

しかし、古代の機械原子巨人は召喚ターンには攻撃できないノーネ。

「ターンエンド。」

Cronus

LP4000

手札×2

フィールド

古代の機械原子巨人 ATK5100

「わたしのターン。」

究極神オシリス ATK0 2000

「わたしはカードを伏せ、『メタモルポット』を反転召喚。互いに手札をすべて捨て、5枚ドローする。」

究極神オシリス ATK2000 10000

古代の機械原子巨人 ATK5100 6300

「そして『X-セイバーパシウル』を召喚。『X-セイバーパシウル』『XX-セイバーフラムナイト』『メタモルポット』の3体と

わたしのライフ半分を生贄に捧げる！」

4つの光が宇宙に飛び出し、円を描くように回る。その4つの球のエネルギーが互いに引かれ合い、円の中心に青い雷のエネルギーが集まりだした。

「あらぶる巨神、究極の力を以って我が敵を粉碎する！光臨せよ、  
『究極神オベリスク』！！」

やがて青いエネルギーは暴走して大爆発を起こした。爆発が収まると、そこには全長500kmを誇る青き巨神は姿を現していた。衛星を通じてデュエルアカデミアのモニターに2体目の神が映し出される。2体の神が放つプレッシャーは半端な物ではない。

究極神オベリスク ATK8000  
究極神オシリス ATK10000 6000

「バトルだ。『究極神オベリスク』で『古代の機械原子巨人』を攻撃する！アルティメット・クラッシュャー！！」

「我が『古代の機械原子巨人』が〜！」

Cronus LP4000 2300

「でもまだなノーネ。『古代の機械原子巨人』がフィールドを離れた時、エクストラデッキの『古代の機械究極巨人』1体を召喚条件を無視し、攻撃力を2000ポイントアップして特殊召喚できるノーネ！」

古代の機械究極巨人 ATK4400 6400



「だがオシリスの効果で攻守2000ポイントダウン、オシリスでアルティメットゴレムを攻撃！アルティメット・サンダーフォー  
ス！！」

「Noooooo!!」

Cronus LP2300 700

クロノスのフィールドには古代の機械究極巨人の効果で、墓地の古代の機械巨人が特殊召喚された。だが、特殊召喚された古代の機械巨人に巨大な雷弾が衝突し、その攻守を2000ダウンさせた。

古代の機械巨人 ATK3000 1000

「……………ターンエンド。」

クロノスのライフは風前の灯。究極神を2体披露してしまった手前、究極神帝…最後にして究極の切り札はこの段階では召喚したくない。今ここでプロフェッサー・コブラに知られるのは避けるべきだ。もちろん、召喚しようと思えばこのターンで究極神帝ラーを呼び出すのは可能だった。

Slay

LP225

手札×3

フィールド

究極神オベリスク ATK8000

究極神オシリス ATK6000

「あゝあ。これじゃあくロノスの負けかな？」

もうちょっと粘ってくれると思ったんだけどなー。まあ、人間にしてはよくやった方だと思うよ、僕はね。

「2体の究極神が並んだ今、スレイにクロノスが勝利する手段は無い。やはり古代の機械では神には対抗できなかったか？」

攻撃力6000と8000…その上オシリスの効果でクロノスのモンスターは2000ダウンする。普通ならば対抗手段なども無いはずだ。

「わたしのターン！わたしは、『古代の機械巨人』を守備表示に変更してターンを終了するノーネ」

もう手が無いノーネ。それに、究極神帝の攻撃は絶対に食らいたくないノーネ。デュエルに私情を挟んではいけないけれど、これだけは勘弁してほしいノ。結構長い間教師をやってきたけれど、こんな規格外の相手とデュエルするのなんて初めてなノーネ。

前にシニョーラ高町、テストアロッサ、八神ともデュエルしたけれど、あれ以上にやばすぎるノーネ。

「ラストターンドロー!!」

究極神オシリス ATK6000 8000

モニターに映っているオシリスとオベリスクが咆哮を上げ、その咆哮がデュエル場全体に響き渡る。心なしか、感情を持たない古代の機械巨人が怯えているように見える。

「『究極神オシリス』！『古代の機械巨人』を粉碎せよ、アルティメット・サンダーフォース！！」

巨大な雷砲がデュエルアカデミアの周囲の海ごと古代の機械巨人を包み破壊した。

「ここまでだクロノス。『究極神オベリスク』でダイレクトアタック！アルティメット・クラッシュャー！！」

究極神オベリスクの拳に青い神の魔力…神力が集まり、巨大な光線になってクロノスに向かう。

「ペペロンチー……ノツ！！」

Cronus LP700 - 7300

「しょ、勝者スレイ！」

コブラが慌てた様子で勝者宣言をする。

「（バカな…三幻神の名を持ったカード…あのようなカードはわたしの情報網の中にはなかった…その上攻撃力守備力は三幻神の比ではない…これでは下手に動けば計画に支障が…こいつの対策はあとで考えるところ）」

「……………（動揺しているな？コブラ。まあ、お前ではわたしどころか人間である高町の足元にも及ばないだろうが…だがこれでもわたしは切り札を召喚してはいない。」

今は互いに相手の手を探っている。スレイは黙ってデュエル場を去り、この戦いに勝利するために学園内では十代よりも高い実力を誇るなのは達を使おうとしていた。

次回に続く。

## 第2話 クロノスvsスレイ 古代の機械と究極神（後書き）

次回「なのはvsリマ 殲滅のレイジング・エンジェル」

ウルズ「さて、時間がかかったわね」

スクルド「その割には文字数も少ないしいつも通りだよ。さ、最強カード紹介行ってみよう」

『古代の機械原子巨人』

レベル10 地属性 機械族 シンクロ ATK3500 DEF3300

『古代の機械巨人』 + 『古代の機械調律者』

このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する『古代の機械』と名のついたカード1枚につき600ポイントアップする。このカードがフィールドを離れた場合、エクストラデッキまたは墓地から『古代の機械究極巨人』1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。この効果によって特殊召喚した『古代の機械究極巨人』の攻撃力は2000ポイントアップする。このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時までカードの効果が発動できない。このカードはシンクロ召喚したターン攻撃することができない。

ウルズ「クロノスの切り札ね。除去されても古代の機械究極巨人を残せるわ」

スクルド「ちなみに、これはこの世界でなのはさん達が使うカードだよ」

レイジング・エンジェル レベル10 神属性 天使族 効果モン  
スター 攻撃力4000 守備力4000

このカードは通常召喚できない。自分のライフが1000ポイントの時に、手札をすべて捨てた場合のみ特殊召喚できる。このカードはフィールド上に存在する限り、光属性としても扱う。このカードの特殊召喚に成功したとき墓地のレベル4の光属性・天使族モンスター1体を手札に加えることができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃したとき、守備力を攻撃力が超えていればその数値分だけ相手にダメージを与える。また、このカードの攻撃宣言時に手札の天使族モンスター1体を捨てることで、攻撃対象のモンスターの攻撃力と守備力を0にする。このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した場合、相手フィールド上に存在するモンスターをすべて破壊する。

ライトニング・エンジェル レベル10 神属性 天使族 効果モ  
ンスター 攻撃力4000 守備力4000

このカードは通常召喚できない。自分のライフが0になった時、手札をすべて捨てた場合のみ特殊召喚できる。このカードがフィールド上に存在する限り、コントローラーは敗北にならない。このカードがフィールド上に存在する限り、このカードは光属性としても扱う。このカードの特殊召喚に成功したとき、デッキから光属性・天使族のモンスター1体を手札に加えることができる。このカードがフィールド上に存在する限り、コントローラーはドローフェイズにカードをドローできない。このカードの攻撃力をエンドフェイズ終了時まで1000ポイントダウンして発動する。このカードはこのターン、相手プレイヤーに直接攻撃することができる。

フォーリン・エンジェル レベル10 神属性 天使族 効果モン

スター 攻撃力4000 守備力4000

このカードは通常召喚できない。3000ポイント以上の直接攻撃を受けて自分のライフが1000ポイント以下になった時、手札をすべて捨てた場合のみ特殊召喚できる。このカードの特殊召喚に成功したとき、自分のライフは0になる。このカードの特殊召喚を無効にすることはできない。このカードがフィールド上に存在する限り、このカードは闇属性としても扱う。1ターンに1度、自分の墓地のモンスター1体をゲームから除外することでこのターン、このカードが受ける魔法・罠・モンスター効果を1度だけ無効にする。このカードは1ターンに1度、破壊されない。このカードがフィールド上に存在する限り、コントローラーは敗北にならない。

ヴェルザンディ「初見の人でも誰がどのカードを使用するかは大体予想がつくと思いますわね」

第3話 なのはvsリマ 殲滅のレイジング・エンジェル（前書き）

どうも。

サブタイはレイジング・エンジェルですが…

最近の出来事

体中が痛いですw。・・・（ノ、）・・・。



### 第3話　なのはvsリマ　殲滅のレイジング・エンジェル

~~~~翌日、デュエルアカデミア校舎・廊下~~~~

「リマ、スレイの手の内を探れ。奴は2体のあの神の名を冠するカードを召喚したが、神は3体。本当にあれが三幻神を基にしていたものなら、あと1体：最高位の神が存在するはずだ。」

仮に3体目が存在するとして、どのような効果を持っているかで今後の計画や対策方法も変わってくる。あれ以上デスベルトのエネルギー収集力を阻害する能力を持った存在があるのでは計画に支障が出る。もちろんそんなものを持っていられたら対策などできず、ゆつくりとエナジーがたまるのを待たなければならんがな。

「プロフェッサー・コブラ。俺はあなたのすべての計画を聞いているが、賛同するとは言っていないし協力もするとは言っていない。オブライエンにでも頼んでくれないか？」

邪悪な力を持った精霊の力を頼る計画なんて俺は加わりたくない。それに、このエネルギー収集方法は下手をすれば人間が死ぬ。

それに俺がこの学園に来たのは、その神の名を冠する究極の存在を一目見たかったから駄科。

「……オブライエン一人では足りないからお前に頼んでいるのだ。バルバロスの精霊を見ることができるようになったのはわたしがお前の前に現れ精霊の影響が及んだためだろう。それがなければお前は精霊を見ることなどできていない。」

「ちつ…恩を返せと言っているのか？…気が向いたら乗ってやる。」  
俺がそういうと、コブラは少し不気味な笑みを浮かべて去って行った。俺はそれを、多分不快な顔で見えていたと思う。

「ねえ、君は今、プロフェッサー・コブラと話をしていたよね？」

「ん？君は…」

俺に話しかけてきたのはポニーテールの女生徒：確かデュエルアカデミア女生徒の中ではベスト5に入る実力を持っている…：名前は高町なのはだったっけ？ちなみに、名前だけは生徒に入ってるスクールドットをやつが女生徒では1番らしいな。

「あの人がデスデュエル大会を開催して、一体何を狙っているのかわからない？」

スレイ君に頼まれたのは、この狙っている計画の全貌。大体は知ってるって言っていたけど、より詳しいことが知りたいらしい。スレイ君が直接私に頼むってことは、余程自分の手の内は明かしたくないってことだね。

「確かに俺はあいつがやるうとしていた計画をすべて知っている。だが、タダで教えるわけにはいかないな。」

俺はデュエルディスクを見せる。学園の女生徒トップ5に入る生徒から要求を受けて、デュエルをしないなんてもつたいない。機会が巡ってきたのだからやるべきだ。トップ5の実力も知りたいしな。

「（まあ、そうなるだろうってスレイ君から聞いてるし、いいか。）

いいよ。私が勝ったら、コブラのことについて教えてね。」

「いいぜ。デュエルだ！」

互いにデュエル場に移動して、デュエルディスクを構えた。高町のデュエルディスク…オリジナルのやつか。

「デュエル!!」

L i m a v s N a n o h a

「先攻は俺がもらう。ドロ、俺は『神獣王バルバロス』を自身の効果によって生贄なしで召喚するぜ。さらに装備魔法『愚鈍の斧』を装備。装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップし、効果は無効になる。スタンバイフェイズに500ダメージ受けるけどな。」

神獣王バルバロス    A T K 1 9 0 0    4 0 0 0

「俺はこれでターンエンド。さあ来い、高町！」

L i m a

L P 4 0 0 0

手札×4

フィールド

神獣王バルバロス    A T K 4 0 0 0

+ 愚鈍の斧

「私のターン！」

リマ君のフィールドには攻撃力4000の神獣王バルバロス…たく

さんのカードを消費して召喚するデルタアクセルシンクロよりも、効果こそ勝ってないけどはるかに早い。

「私はモンスターを伏せるよ。魔法カード『天からの光』を発動！デッキからレベル10以下のモンスターを手札に加える！『レイジング・エンジェル』を手札に！」

「感じる…強大な精霊の力を。そいつがお前の最強の精霊か。」

へえ、姿は高町にそっくりなんだな。意外だ。

「私はカードを2枚伏せてターンエンド。」

Nanoha

LP4000

手札×3

フィールド

伏せモンスター×1

伏せカード×2

「俺のターン！『愚鈍の斧』の効果で500ポイントダメージを受ける。」

Lima LP4000 3500

さてと、伏せモンスターと伏せカード、ね。スレイならあれがXX  
-セイバーエマーズブレイドとガトムズの緊急指令、もしくは除去  
カードとかそこらへんなんだらうけど…。さて、高町は何を伏せて  
いるのか…。

「俺は永続魔法『神の威圧』を発動するぜ。1ターンに1度、『神』と名のつくモンスター1体を選択することで、そのモンスターの攻撃を放棄し、その代わりに相手はこのターン、トラップカードを使用できない。」

「え!?!」

「俺は『神機王ウル』を召喚。『神機王ウル』の攻撃を放棄することとで高町!お前はエンドフェイズまでお前はトラップを使用できない!そして『神の威圧』のもう1つの効果を発動。自分フィールド上のカード1枚をデッキに戻すことで、このターン『神』と名のつくレベル8以下のモンスターは貫通効果を得る。『愚鈍の斧』をデッキに戻す!」

神獣王バルバロス ATK4000 3000

「そんな!?!」

攻撃力3000の貫通攻撃!?!しかも私のトラップカードは封じられてる...!

「バトル。『神獣王バルバロス』で伏せモンスターを攻撃だ。トルネード・シエイパー!」

伏せモンスターは...なんだ?シャイン・エンジェルか?

シャイン・エンジェル DEF800

Nanoha LP4000 1800

「くっ...『シャイン・エンジェル』が戦闘で破壊されて墓地へ送ら

れたことで、デッキから『ロイヤルナイツ』を特殊召喚する！」

ロイヤルナイツ ATK1300

「ターンエンド。」

攻撃力1300のモンスターをリクルート？一体何を考えているんだ？

L i m a

L P 3 5 0 0

手札×3

フィールド

神獣王バルバロス ATK3000

神機王ウル ATK1600

神の威圧

「私のターン！」

まだ早いけれど…でも！やらなきゃやられる。

「私は『ロイヤルナイツ』で『神獣王バルバロス』を攻撃するよ。」

N a n o h a L P 1 8 0 0 1 0 0

「何ッ！」

これでは高町のライフは残り100…もう後がないぞ？

「これで…私の切り札が召喚できる。カードを2枚伏せて、私は手

札をすべて墓地に送って『レイジング・エンジェル』を特殊召喚！  
」

デュエル場を包み込むように桃色の光が現れ、なのはそっくりの女神があらわれる。なのはの得物であるレイジング・ハートによく似た大槍を構えている。

レイジング・エンジェル ATK4000

「『レイジング・エンジェル』の特殊召喚に成功した時、自分の墓地のレベル4の光属性モンスター『オネスト』を手札に加えるよ。」

リマ君相手に手加減はできない。スレイ君をライフ1000まで追い込むなんて、普通はできないことを簡単にやってのけてるんだから。

「私はこれでターンエンド。」

Nanoha

LP100

手札×1

フィールド

レイジング・エンジェル ATK4000

伏せカード×4

「俺のターン。」

リマは情報云々のことをまるで気にしておらず、単純にデュエルを楽しんでいる。リマの頭の中は、今どうやって自らの間に立ちふさがる女神を粉碎しようか考えている。確実にその方程式は刻一刻と成り立っており、リマはスレイのように、勝利の前の微笑をニヤリ

と浮かべた。だが、この方程式はまだ完全ではない。そう、リマはレイジング・エンジェルの効果を知らないのだ。この微笑も、スレイのそれとは意味合いが全然違う。

「（俺の方程式は、レイジング・エンジェルのカード効果でだいぶ変わってくるな。最悪、俺の切り札の出番もあるかもだしな。）」

リマは自分のことを見下すように見ているレイジング・エンジェルを睨む。そして、その女神の眼の奥を見据えると、手札からカードを1枚取り出す。

「お前が女神を使うなら俺は神獣で戦う。俺はフィールドの『神獣王バルバロス』、『神機王ウル』を除外！来い、『獣神機王バルバロスU r』！！」

獣神機王バルバロスU r    ATK3800

「（また軽いコストで攻撃力の高いモンスター…でも攻撃力は3800ポイント。私の精霊には勝てない。）」

ちなみにレイジング・エンジェルと獣神機王バルバロスU rでは、レイジング・エンジェルの方が遥かに大きい。だが、攻撃力差は200、威圧感も互いにそう変わらない。

「装備魔法『獣神の矛』を発動する。『獣神機王バルバロスU r』に装備し、攻撃力を200ポイントアップ。」

獣神機王バルバロスU rの近くに巨大な槍が現れて、レイジング・エンジェルに照準を定める。



獣神機王バルバロスU r    ATK 3800    4000

「たったの2000?」

「甘いな。『獣神の矛』は装備モンスターの制限はないが、攻撃力3000以上の『神』と名のつくレベル8以下のモンスターに装備されている場合、もう1つの効果を発揮する。装備モンスターの効果を無効化し、1ターンに1度、カードを2枚ドローできるのさ。」

リマはそう言ってカードを2枚ドローした。攻撃力アップ量は低いが、その名の通り獣神に装備すれば、2つの追加効果を得る。もちろん、普通に召喚した神獣王に装備しても効果は得られる。

「さあバトルと行こうか。俺は『獣神機王バルバロスU r』で『レイジング・エンジェル』を攻撃するぜ。」

獣神機王バルバロスU rの傍に浮いている槍がレイジング・エンジェルに向かって飛ぶ。

「トラップカード発動、『レイジング・フォース』。このカードは『レイジング・エンジェル』専用の罠カード…相手の攻撃宣言時に発動して、その攻撃を無効にし、発動後『レイジング・エンジェル』は魔法・罠・モンスター効果を受けない!」

私がいばらくこの世界から離れて、別の任務に就いていた時に偶然手に入れたカード。

「何だって!？」

「……………」

いつの間にかデュエル場に来ていたスレイが、誰にも気づかれな  
ような場所から2人のデュエルを見ていた。その眼は、デュエルの  
他にも、デュエル場の端にいるプロフェッサー・コブラを捉えてい  
る。

「そんなに怖い顔で見なくても…」

隣にいるスクルドが苦笑する。

「……………居たのか」

…正直言っただけ全く気付かなかった。

「……………ひどくない？」

「……………すまない」

「……………俺はカードを1枚伏せてターンエンド。」

L i m a

L P 3 5 0 0

手札 x 3

フィールド

獣神機王バルバロスU r A T K 4 0 0 0

+ 獣神の矛

神の威圧

伏せカード×1

「私のターン!」

なのはは力強くドロートした。

~~~~その頃、スレイ~~~~

あの後すぐにスクルドに気づかれないようにデュエル場を後にしたスレイは、レッド寮が近くにある海岸に来ていた。単純に2人の戦いを見ていてつまらなくなったただけだ。スクルドを置いてきたのは、楽しそうにデュエルを見ていたのを邪魔したくなかったから。昔から誰にせよ親友の楽しみを奪うことはしないのがスレイだ。

「……………む?ワニ?」

スレイの足元にワニがいた。別にスレイは、すぐ近くにワニがいることを何とも思っていない。この学園にワニが普通にいる理由を知っているから。

「ソーリー!」

そこに、ワニの持ち主であるジム・クロコダイル・クックがやってくる。

「ユーは確か…」

世界中で噂だった神獣の使い手を破ったスレイ…この男は…強い。マイフレンドカレンが敵対する意思を欠片も見せない分だけ悪ではないが、この威圧感は…多分心の闇からくるもの。だが、その闇を微塵も感じないのは一体何故なんだ？

「…わたしはスレイ…言葉を交わすのは初めてか。」

…この男…いや、なんでもないか。

「……………用が無いならわたしはそろそろ行かせてもらうぞ。」

「ソーリー、呼び止めて悪かった。」

スレイは一瞬だがプレッシャーを放ってその場を離れた。

「…どうやら、相当の力の持ち主らしいぜ、カレン」

『ガウウ…』

ジムはスレイの後姿を見て飼っているワニ…ジム曰くマイフレンドのカレンに言った。

~~~~~

「私は装備魔法『レイジング・シールド』を『レイジング・エンジエル』に装備！装備モンスターがフィールドを離れる場合、代わり

にこのカードを破壊する！」

レイジング・エンジェルに巨大な盾が装備される。

「バトル！『レイジング・エンジェル』で『獣神機王バルバロスU r』を攻撃！そしてこの時『レイジング・エンジェル』の効果発動。手札の天使族モンスターを捨てて、戦闘する相手モンスターの攻撃力を0にする。オール・ブレイカー！」

獣神機王バルバロスU r ATK4000 0

「と、トラップ発動！『神獣の加護』！この戦闘で発生する俺へのダメージを0にして、カードを1枚ドロウする。：さらに『獣神の矛』の効果発動：このカードを代わりに破壊し、『獣神機王バルバロスU r』の破壊を免れ1枚ドロウ……。」

レイジング・エンジェルの装備していた盾が割れ、再び両手で槍を構えた。

「私は伏せカードを発動：『レイジング・リターン』！『レイジング・エンジェル』がバトルを行った場合、もう1度バトルを行うことができる！『レイジング・エンジェル』で攻撃！シャイニング・ブレイカー！」

「ほう…どつやら、終盤に差し掛かっているようだな」

スレイはいつの間にかデュエル場に戻ってきていた。

「あ、戻ってきた。なんで終盤なの？」

「見てわからないか？互いに切り札級のモンスターを召喚してはいるが、リマはまだ切り札を出していない。」

「え？あれ切り札じゃなかったの？」

「……確かにパワーこそ神に近いがあれに切り札といえるだけの覇気は感じられん……。奴はまだ切り札を隠している。」

高町では奴には勝てないか……。コブラに後れを取りたくなかったが、どうせ異世界へ飛ぶのは決定事項……。どうでもいいというわけでもないが、高町が勝利しなくても大きな被害を被るわけでもない。精々プラスマイナス0だ。

「くっ……やるじゃないか……。でも、『神の威圧』の3つ目の効果によつてこのカードを墓地へ送ってダメージを0にさせてもらったぜ。そして、『神の威圧』が墓地へ送られたことで、デッキからカードを1枚ランダムに選択して手札に加える。」

L i m a   L P 3 5 0 0   3 5 0 0

リマのデュエルディスクからカードが1枚飛び出して、リマがそれを手札に加える。

「……ラッキーだな。」

手札に加えたカードを見て、リマは一言呟いた。  
なのははそれを怪訝な眼差しで見

「ターンエンド。」

と言った。

Nanoha

LP100

手札×0

フィールド

レイジング・エンジェル ATK4000

(レイジング・フォース適用中)

伏せカード×2

「俺の…ターンッ！！墓地にある『神の威圧』を除外して、手札を1枚捨てて1枚ドロウするぜ。」

リマは嬉しそうな顔つきでカードをドロウした。自分の切り札を召喚できるのがそれほど嬉しいようだ。

「あはは！リマって人スレイにそっくりだね！」

スクルドは屈託のない笑顔でスレイに向かって言った。

「どこがだ」

スレイは目を瞑って若干ムツとした顔つきで言う。スレイとしては人間と一緒にされたのが気に食わないらしい。

「だってスレイも切り札を召喚するとき、すごくうれしそうな顔してるもん！」

スクルドは人差し指を立てて笑顔で言った。

「……………」

スレイは顔に手を当てて頭を悩ませる。

「（わたしの妻は…親友は余計なことばかり覚えてるな…。わたしはそんなに嬉しそうに究極神を召喚していたのか？）」

「俺は墓地の『獣神の矛』『獣神の盾』『獣神機王バルバロスU r』を除外する！降臨せよ！『神竜王ドラグニル』！！！」

校舎外に三幻魔と同じくらいの大さきの巨大で、とにかく神々しい竜が出現する。白きその身には、体の関節部分に棘がついた輪を装備し、外見は究極宝玉神レインボー・ドラゴンに似ている。体に宝玉が埋まっていなかったり、角がないあたり全然違うが。最大の特徴は後頭部に巨大な白い輪が浮いていることだ。ラーの翼神竜の輪と同じようなものであると考えると、差し支えない。モニターにその映像が映し出された。



神竜王ドラグニル ATK4000

『ギャオオオオオオオオオオ!!』

「頼むぜドラグニル！」

『グルルルルルル…』

リマが完全に信頼しきった口調で神々しい竜に言葉をかける。ドラグニルも信頼しているようで、全力で咆哮を上げる。

「ほう…あれがリマの切り札か。随分強力な力を持った精霊だな。七聖龍と同等…くらいか？」

「へえ、『エターナル・ローズ・ドラゴン』と同じくらいの…すごいね！」

『確かにあの龍には強大な力を感じますね。』

スクルドの精霊（厳密には違う）であるエターナル・ローズ・ドラゴンが現れてそう言った。スレイには見えていないし聞こえてもいない。七聖龍は持ち主か、無限眼を起動した状態のスレイにしか認知できない。今のスレイは無限眼を起動していないので七聖龍の精霊の存在は認知できないのだ。

「そうだね…でも、エターナル・ローズはちょっと大きすぎるからあまり具現化しないでほしいかな…」

何しろ七聖龍の大きさは現時点で覚醒している4体すべてが40km前後だ。そんなものが具現化するためには屋外であることが最低条件であり、話す手段は念話以外ない。そのため、エターナル・ローズは今、外にいる状態だ。

『主…酷くないですか？』

「…………ごめんね。」

「『神竜王ドラグニル』効果発動！墓地に存在する『神』と名のつくモンスターをすべて除外し、1体につき攻撃力を1000ポイントアップする！除外するのは『獣神機王バルバロスU r』だ。」

神竜王ドラグニル ATK4000 5000

「攻撃力5000!!」

「おっと、ドラグニルはただのパワーバカじゃないぜ！ドラグニルの効果発動、墓地から『神』と名のつく罨カードを1枚除外することとで、相手フィールド上のカードをすべてデッキに戻す！俺が除外するのは『神獣の加護』！！ドラグニルストーム!!」

『ギャオオオオオオオオオオオ!!』

巨大な2枚の翼から嵐が放たれ、一瞬のうちになのはのフィールドのカードはデッキに戻ってしまった…レイジング・エンジェル以外は。

「『神竜王ドラグニル』で『レイジング・エンジェル』を攻撃！ドラグノフ・カノン！」

強大な熱線がレイジング・エンジェルを焼き尽くした。不屈の天使もその炎には耐えきれず、ついに力尽きて破壊された。

「きゃあああああ…!!」

Nanoha LP100 - 900

「…ま、デュエルは俺の勝ちだな。デュエル前の約束だから、教えるわけにもいかないけどな。」

そついつてリマは頭を掻きながらデュエル場を後にした。

~~~~~校長室~~~~~

「キツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ、で、失敗したんだ。」

最初はいつも通り笑っていたロキが、急にトーンを下げて一言言い放った。

「いっ、いめん…。」

「だが、収穫は十分にあつた。リマの切り札：神竜王ドラグニル：あれには七聖龍が味方するかもしれないほどのパワーがある。」

「そうなの？」

「ああ…まあ、気に留めておく程度でいいがな。強力な戦力になるかもしれないから一応チェックしておけ。」

とはいえ、コブラの計画は知ることができなかったが…正直言えば高町にそこまで期待はしていなかったからこれでも十分な方だ。ノルマ達成ということでもいいだろう。

次回に続く。

### 第3話　なのはvsリマ　殲滅のレイジング・エンジェル（後書き）

次回サブタイ未定

ウルズ「さてと、3話目だけ？ やっと終わったわね」

スクルド「リマ君、強かったね。今日の最強カードはこれ！」

『神竜王ドラグニル』

レベル10　光属性　ドラゴン族　ATK4000　DEF2000

このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する『獣神機王バルバロスU r』、『獣神の矛』、『獣神の盾』を除外した場合のみ特殊召喚することができる。このカードの召喚は無効化されず、このカードの召喚に成功した時に相手はカードの効果を発動できない。1ターンに1度、以下の効果を1回ずつ発動することができる。

自分の墓地に存在する『神』と名のつくモンスターをすべて除外することで、このカードの攻撃力を除外したモンスターの数×1000ポイントアップする。

自分の墓地に存在する『神』と名のつく罫カード1枚を除外することで、相手フィールド上のカードをすべてデッキに戻す。この効果をを使用したターン、このカードは直接攻撃できない。

自分の墓地に存在する『神』と名のつく魔法カード1枚を除外することで、相手の墓地に存在するカードをすべてデッキに戻す。この効果は相手ターンでも発動できる。

ヴェルザンディ「まさに切り札！という感じのカードですわね」

スクルド「それではまた！」

## 第4話 石化の霧（前書き）

たった1つの注意。超展開です！  
ちなみに、英語があっているかどうかはわかりませんw直訳しただけですので…

### 最近の出来事

さて、今日は（5月15日）池袋に行ってきましたw大して収穫はありませんでしたがね…。明日は学校…ちょっと疲れ気味ですorz

## 第4話 石化の霧

~~~~リマvsなのはより数日後、某国~~~~

とある町で…

「What this?」

「It doesn't understand」

2人の人間の前に、突如黒い穴が現れた。そして、黒い穴から紫色の霧が噴出す。

「!!!」

霧に触れた2人は、声を上げる間もなく石になってしまった。この町にいた人間のほとんど…地下室などの霧が入ってこない空間に居た人間を除いたすべての人が、石化していた。

また、北半球の某国の町や、南半球の島国のある町でも同様のことが相次いで起こっている。このニュースは、現在のテレビや新聞を騒がせて、話題を持ちきりにしている。

そして、南の島…デュエルアカデミア。

~~~~校長室~~~~

ホワイト寮からブルー寮に戻った今でも、スレイ達は校長室にいることが多くなった。スレイは1日のほとんどの時間を外出して過ごすために、夜間にその姿を見る者はあまりいないが、そのほかの仲間たちは基本的に1日の間で外出しない場合はこの校長室で過ごしている。

滅多に戻ってくることはないスレイだが、デュエルアカデミア校舎の屋上や、誰も登ることのないドーム状の建物の上に立っていると、ころをよく見ることが出来る。生徒でありながら授業には出ないし、勉強などしない。本人は元々、暇つぶしのために神界からデュエルアカデミアに来たので、自分から首を突っ込む以外の面倒なことはしたくないようだ。

今日は珍しくスレイが校長室に戻ってきて、椅子に座っていた。さらに珍しいことに、慌てた様子でロキが新聞を抱えて持ってくる。普段のロキならば、慌てることもないし新聞なんか持ってこない。

「お前が慌てるとは珍しい…何かあったのか？」

「無かったらこんなに慌てた様子で新聞なんか持ってくるわけないだろ。」

ロキに若干強引に新聞を渡されたスレイは、つまらなさそうに無表情で新聞を見る。しかし、ある記事を見つけると表情が一変し、驚愕の色を浮かべた。

「感情がほとんどなくてもこれは驚くだろ？こんな神界でも聞いたことないし。」



ロキが言っているのは、最近世界中を騒がせている、霧に触れた生命体すべてが石化するという事件。神でも生命体が石化するなどは、魔術以外では聞いたことがない。それに、その石化の魔術は生命体1体を対象としたものであり、広範囲に渡り石化させる呪術など存在するはずがない。

スレイは最高神界への報告を考えたが、最高神界は今、スレイが最高神を辞退したことでその力が大きく衰退し、立て直しに時間がかかっている。そこにこのような事件の報告が入ってくれば、パニックになることは必至。スレイは少し考えた後、報告はしないことにした。

「確かに聞いたことのない例だ。悪魔でもこのような呪術を使用できる者はいない。」

今まで数えきれないほどの数の悪魔と戦ってきた。その中には、奇妙な術や、天変地異を起こすほど強大な力を持つ者もいたが、石化の魔術：それもこのように広範囲に渡って効果を及ぼす術を使用できる者は1体もいなかった。それに、そのような悪魔がいればすぐに最高神界の連中で対策を立てるはずだ。

スレイは一瞬で様々なことを考え、結論を導き出す。しかし、これといった打開策は思いつかない。究極神を使用することも考えてみたが、破壊の力を安易に振って余計な被害を出せば、それこそ最高神界が大変なことになりかねない。

「とりあえず、わかっているのは霧が発生した時の天候が必ず曇りで、さらに発生する場所は人目にあまり触れない…でも必ず1人以上の人間が見ているってことぐらいかな。」

「なぜわかる？」

「何とかその霧から逃れて、密室空間に逃げる事ができたやつが言ってたんだよ。どの町でもこれだけが共通してるらしいね。」

「……………」

スレイがしばらく目を瞑る。だが、その静寂は一気に破られることになった。

「これは!!」

突然、この校長室にその黒い穴が出現したのだ。オーディンの驚愕の声と同時にスレイが目を見開く。

「スクルド。」

スレイはとりあえず近くにいたスクルドの手を掴み、自身の周りに球体状の結界を創る。オーディンもロキとトールを、ウルズはセレナを、ヴェルザンディは校長とクロノス、ナポレオンを近くに引き寄せて結界を張った。

「……………」

スレイ以外の全員が、苦しそうな表情を浮かべる。霧に触れなくとも、近くにいただけで何らかの効力なのか苦しくなるようだ。スレイ以外の全員は、一応生命体の概念に当てはまっているので効果が表れたということになる。

やがて霧が、デュエルアカデミア全体を包み込んだ後に消滅した。

「無事か？」

スレイはスクルドの無事を真つ先に確認し、そのほかの全員の生存を確認すると、結界を解く。

「何が起こったノーネ！？生徒たちはどうなったノーネ!？」

「落ち着けクロノス。新聞記事に書いてあることが本当ならば生徒は十代たちを除いて全員が石化している。」

十代達はコブラの居る地下研究施設に行っている。そこまでは霧が入り込んでいないはずだ。

スレイは空を見上げる。灰色の雲が島を包むようにして浮かんでいた。

スレイの言うことは本当のことだったが、これを目の当たりにしていて落ち着いていられたのはスレイだけだ。

「…わたしは外に出る。オーデイン、後は頼む。」

「……気をつける。何かあるかわからないからな。」

スレイはすぐに外に出る。辺りは生徒が石化しており、恐怖の表情を浮かべている者もいれば、霧に気づかなかったのか普通に会話をしていた者もいる。

「……………」

1時間ほど経っただろうか。スレイは島中を見て回ったが、これといって解決に導けるようなヒントを得ることはできなかった。

スレイは校舎の外に戻ってきた。そして、何を思ったのかふと自分がいつもいるドーム状の建物…デュエル場の屋根の上を見上げた。

するとそこには…

「表の世界の住人の…血は思った以上に力を蓄えているようだ。キツシャツシャ！」

何とも表現しがたい…悪魔でもないから魔物という言い方が一番しっくりくるだろうか。そんな感じの生命体があった。

「貴様は…何者だ？」

スレイはすぐに屋根の上にジャンプして上り、目の前にいる魔物に声をかける。その声は普段、自分が話している者に向けての感じではなく、滅ぼすべき敵に向けての口調だ。その言葉には聞いた者を震わせるプレッシャーが込められている。

「ん？何だ、表の世界の住人か…それも表の世界の神と来たか。」

「何のことだ？」

「ヒツハツハハ！お前たち神が創り出したこちら側の世界とは別に…お前たち表の世界の住人が絶対に来ることのできない裏側の世界が存在する。グツフツフ、お前たち表の世界の住人は今まで何度も世界をリセットし愚かな争いを続けているが、我ら裏側の世界の者は自らの力を高めていた。」

もつとも、我らもリセットの影響は受けている。しかし、転生の際に生前の記憶を呼び戻すことでさらなる力を得ることができなのだ。

「……。」

表の世界？裏の世界？そんなものは知らん。

「ならば今すぐにこの石化の呪いを解いて裏の世界に帰ってもらおう。」

スレイは相手の得物がわからないので、最悪の場合は究極神を召喚しようとしてゴッドモーメントを展開した。

「キツシャツシャ、決着の方法は我らと同じか。」

なんと、魔物は異形のデュエルディスクを展開した。

「…行くぞ。」

スレイは、若干驚いた表情を浮かべたが、すぐに冷徹な表情を取り戻した。

「デュエル!!」

S l a y v s E n e m y

「まずは俺から行かせてもらっせ。俺は『ワン・フォー・ワン』を発動。手札より『グローアップ・バルブ』を捨て、デッキの『グローアップ・バルブ』を特殊召喚する。さらに『ジャンク・シンクロナ』を召喚。」

「何ッ！」

スレイはこの2体のモンスターを見て、ある一つのモンスター召喚を考えた。レベル12、攻守4000で脅威の2回攻撃。さらに除去された時の後続特殊召喚。そして相手のカード効果を種類問わず1ターンに1度無効化する効果。…リミットオーバーアクセルシンクロモンスター『シユートイニング・クエーサー・ドラゴン』。

「よくわかつているという顔をしてるな…『ジャンク・シンクロン』の効果で墓地から『グローアップ・バルブ』を復活、自分の墓地のモンスターが復活したことにより手札の『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚する。そして手札から『ジャンク・サーバント』を特殊召喚する。」

たったの1ターンで奴のフィールドにはモンスターが4体…だが恐ろしいのはここからだ。奴の手札は今現在1枚。しかし…

「まずはレベル4の『ジャンク・サーバント』とレベル1の『グローアップ・バルブ』を素材としてシンクロ召喚する。来い、『TG・ハイパー・ライブラリアン』。そして、『ドッペル・ウォリアー』と『ジャンク・シンクロン』を素材としてもう1体の『TG・ハイパー・ライブラリアン』をシンクロ召喚、1体目のライブラリアンの効果で1枚ドローする。」

さらに、ドッペル・ウォリアーがシンクロ素材になったことで、魔物のフィールドには2体のドッペル・トークンが特殊召喚された。スレイの表情にわずかな焦りが見えた。

「デッキトップのカードを墓地へ送り、『グローアップ・バルブ』

を墓地から特殊召喚。レベル1の『ドツベル・トークン』と『ゲロ  
ーアップ・バルブ』を素材とし、『フォーミュラ・シンクロン』を  
シンクロ召喚する。2体のハイパー・ライブラリアンと『フォーミ  
ユラ・シンクロン』自身の効果によって3枚ドロウする。」

「……………」

あれだけ手札を使用しておきながら、手札は5枚に戻っている。だ  
が、ここからが本当の脅威。

「さあ行くぞ、レベル5の『T G - ハイパー・ライブラリアン』2  
体とレベル2の『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング!!  
リミットオーバーアクセルシンクロ!! 『シューティング・クエー  
サー・ドラゴン』!!」

「やはり来たか。」

「ターンエンド。これこそが裏の世界の実力! この程度倒せないよ  
うでは裏の世界の住人には絶対に勝利できない。キシヤシャシャ!」

「

もつとも、こちらの世界に渡る術を持たない者が力を持ったところ  
で意味はないがな。キシヤシャシャ!

Enemy

LP8000

手札×1

フィールド

シューティング・クエーサー・ドラゴン ATK4000

「わたしのターン！」

奴のフィールドにはおそらくこの世界で、その性能だけを考えれば現時点最強を誇るシンクロモンスター、シューティング・クエーサー・ドラゴンが存在する。その効果によって1ターンに1度、わたしのカード効果は無効にされ破壊される。

スレイの手札に、裏側も青いカードが1枚握られている。この力は絶対無比。召喚にさえ成功すればその力は瞬く間にフィールドという世界を支配する。

「わたしはカードを3枚伏せる。そして、『XX-セイバーフラムナイト』を召喚する。……ターンエンド。」

今のスレイには、シューティング・クエーサー・ドラゴンを倒すことができる。その手をすべて伏せて、スレイはターンエンド宣言した。

S l a y

L P 8 0 0 0

手札×2

フィールド

XX-セイバーフラムナイト ATK1300

伏せカード×3

「俺のターン！ゆけ、『シューティング・クエーサー・ドラゴン』よ、『XX-セイバーフラムナイト』へ攻撃！天地創造撃！！ザクリエイションバースト！！！」

巨大な聖龍はそのシンクロ素材となったモンスターを球体に封じ込



め、XX - セイバーフラムナイトへ放つ。

「甘い、『XX - セイバーフラムナイト』のモンスター効果発動！  
相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「甘いのはそちらだ、キシヤシャ、『シユールディング・クエーサー・  
ドラゴン』の効果によりその効果を無効にして破壊する。」

シユールディング・クエーサー・ドラゴンの身体が強く光る。その光  
は、XX - セイバーフラムナイトへ向かう。

「トラップ発動、『聖なるバリア - ミラーフォース - 』！！もう効  
果は無効にできまい、『シユールディング・クエーサー・ドラゴン』  
を破壊する！！」

「ナニイ！？だが、『シユールディング・クエーサー・ドラゴン』が破  
壊されたことでエクストラデッキの『シユールディング・スター・ド  
ラゴン』を特殊召喚する！」

普通は無理だが……デッキのこの魔法カード『クエーサー・ノヴァ』  
の効果でタイミングを逃すことなく特殊召喚させてもらった。

「……………」

スレイにはたった1つの疑問がある。それは、例え1回目の攻撃を  
フラムナイトによって無効にされようとも、2回目の攻撃ができ、  
その時点でのミラーフォースの発動を無効にすればよかつたはずだ  
と。どちらにしろくず鉄のかかしがあるために2回の攻撃ではフラ  
ムナイトを倒せないし、くず鉄のかかしを先に発動し、無効にしに  
来たところをミラーフォースで撃退すれば問題はなかつた。

「…キシヤシヤシヤ…なぜ『シユーテイング・クエーサー・ドラゴン』の効果を巧く使わなかったのか気になるか？なぜなら俺のデッキは「ジャンクドッペル」ではないからだ…『シユーテイング・クエーサー・ドラゴン』も『シユーテイング・スター・ドラゴン』も罠に過ぎない…キツシヤツシヤ。」

「何？」

あれほどの超大型モンスターが罠だと？

「俺の本当の力を見せてやる！速攻魔法『セメタリー・リソルーション』。」

その魔法カードが発動した瞬間、墓地からシユーテイング・クエーサー・ドラゴンが飛び出し、次元の彼方へと消えた。

「墓地からシンクロモンスター1体を除外、そのレベルと同じようになるように、デッキからレベルが均等なモンスターを可能な限り特殊召喚する！俺はデッキからレベル4の『石化騎士ストーンナイト』『石化魔導師ストーン・マジシャン』『石化魔獣ストーンビースト』を特殊召喚する。」

現れたのは、いずれも石化した生命体そのものだ。スレイは僅かに顔をしかめた。その理由は、この石化しているモンスターが、元は本当の生命体であったことがよくわかるからだ。

「このモンスター共は攻撃できず、また表示形式の変更もできない。そしてシンクロ素材、リリース、融合素材にできない。」

石化しているというのだからそのくらいは当然ともいうべき効果だろう。

「だが、お前たち表の世界の住人が未だに手に入れていない力というものがある。キツシャツシャ。レベル4のモンスター3体をエクシーズ素材としてエクシーズ召喚を行う!!」

「エクシーズ…召喚？」

3つのモンスターが時空の穴に吸い込まれ、その中から巨大なモンスターが出現した。

「エクシーズ召喚、『インフェルノ・ケルベロス』!」

巨大な石の塊のケルベロスが現れた。インフェルノという割には炎に包まれていない。

「『インフェルノ・ケルベロス』効果発動。1ターンに1度、このカードにあるオーバーレイ・ユニットを1つ使用し、次の自分のターンのスタンバイフェイズまで『インフェルノ・ケルベロス』は魔法・罫・効果モンスターの効果を受けず、戦闘によっても破壊されない。さらに戦闘ダメージは0になる。」

インフェルノ・ケルベロスの周りを飛んでいた光の一つが消え、インフェルノ・ケルベロスの中に入った。

「ターンエンド。」

Enemy

LP8000

手札×5

フィールド

インフェルノ・ケルベロス ATK0

シューティング・スター・ドラゴン ATK3300

「わたしのターン。わたしは『XX-セイバーフラムナイト』を守備表示に変更する。そして『XX-セイバーエマーズブレイド』を守備表示で召喚。さらに『XX-セイバーフォルトロール』を特殊召喚する。そしてこの3体のモンスターとライフ半分を生贄に捧げる。光臨せよ『究極神オベリスク』!!」

Slay LP8000 4000

「バトルだ! 『究極神オベリスク』、『シューティング・スター・ドラゴン』を粉碎せよ! アルティメット・クラッシュャー!」

宇宙から放たれた凄まじい波動がシューティング・スター・ドラゴンを狙う。

「『シューティング・スター・ドラゴン』の効果発動。キシヤシャシャ、こいつを除外して相手モンスター1体の攻撃を無効にする。」

もつとも、この効果で除外してもシューティング・スター・ドラゴンには蘇生制限がかかっているために戻ってはこないがな。

「『究極神オベリスク』の効果。神は効果モンスターの効果・コストを受けない。」

受けなくとも、ケルベロスは今は無敵状態。ラー以外の究極神では撃破不可能だ。オベリスクの攻撃はケルベロスに当たったが、ケル

ベロスは無傷だった。

「ターンエンド。」

Slay

LP4000

手札×0

フィールド

究極神オベリスク ATK8000

「俺のターン。俺はメインフェイズに『インフェルノ・ケルベロス』の効果を発動。このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、次のターンまで魔法・罫・モンスター効果をを受けず戦闘では破棄されない。さらに『インフェルノ・ケルベロス』によって発生する俺への戦闘ダメージは0になる。」

2つ目の光が消え、インフェルノ・ケルベロスの中に入っていく。すると、インフェルノ・ケルベロスの石像に罅が入り、中から紅蓮の炎が噴き出し始めた。

「……………」

成程…あのオーバーレイ・ユニットが全て無くなった時にインフェルノ・ケルベロスの真の姿が解放されるというわけか。つまりオーバーレイ・ユニットがある2ターンの間だけが相手に与えられた猶予。自分から石に封じておいてその封印を自分で解くのか。

「キツシャツシャ、ターンエンド。」

Enemy

LP8000

手札×6

フィールド

インフェルノ・ケルベロス ATK2000

「わたしのターン…。」

インフェルノ・ケルベロスの攻撃力が上昇している…封印が解かれると攻撃力が上昇するのか。

「わたしはモンスターを1体セットし、ターンエンドだ。」

……エクシーズモンスターの素材になったモンスターは墓地へは行かずにあのモンスターの周りを飛んでいるのか。意外と便利そうで、素材は同レベルのモンスター2体以上のようなだからランクが高ければ高いほど召喚の難易度も上がるか。

Slay

LP4000

手札×0

フィールド

究極神オベリスク ATK8000

セットモンスター×1

「俺のターン！さあ、最後のオーバーレイ・ユニットを取り除き、

『インフェルノ・ケルベロス』を開放する！！」

インフェルノ・ケルベロス ATK2000 5000

『インフェルノ・ケルベロス』

ランク4 エクシーズ 炎属性 獣族 ATK0 DEF0  
レベル4 モンスターx3

このカードは攻撃できない。1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除くことで、このカードは次の自分のターンのスタンバイフェイズまで魔法・罫・効果モンスターの効果を受けず、戦闘では破壊されない。また、このカードの戦闘によって発生する自分へのダメージを0にする。このカードのエクシーズ素材が1つになった時、このカードの攻撃力は2000になる。このカードのエクシーズ素材が無くなった時、このカードは攻撃可能になり、以下の効果を得る。

このカードの元々の攻撃力は5000になる。1ターンに1度、相手の魔法・罫・効果モンスターの効果の発動と効果を無効にして破壊することができる。このカードは相手フィールド上にモンスターが存在する場合、3回まで攻撃することができる。このカードが相手モンスターを破壊した場合、相手プレイヤーに2500ポイントのダメージを与える。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!』

全身を炎に包んだケルベロスが咆哮を上げる。かなりの迫力で、重いプレッシャーを放つがスレイは動じない。

『インフェルノ・ケルベロス』で伏せモンスターを攻撃、インフェルノ・ダツシュユ!』

伏せモンスターのメタモルポットが破壊され、そのリバーブ効果が発動した。魔物は少し考えたが、効果を無効にせず手札をすべて墓地へ送り5枚ドローした。

『インフェルノ・ケルベロス』効果発動。相手モンスターを破壊

した場合、2500ポイントのダメージを与える！インフェルノ・スパーク！」

インフェルノ・ケルベロスが口から雷をまとった火球を吐き出し、スレイに当てた。

Slay LP4000 1500

「ターンエンド。」

まあ、ご挨拶ならこのレベルで十分か。しかし究極神とは…挨拶のつもりで来たがいきなり世界の支配者と対面することになるとは思わなかったぞ。帰還したらアリアス女王に報告しなければな。わざわざ魔物の姿と笑い方でこちらの世界に来て、表の世界の住人の血を殺さずに集めたのだから、ある程度の褒美はもらわなければ割に合わないな。

Enemy

LP8000

手札×5

フィールド

インフェルノ・ケルベロス ATK5000

「わたしの…ターン！わたしは『XX-セイバレイジグラ』を召喚。その効果によって墓地から『XX-セイバーフォルトロール』を手札に加える。そして魔法カード『死者蘇生』、墓地のフラムナイトを蘇生しフォルトロールを手札から特殊召喚。3体のモンスターとライフ半分を生贄に、わたしは『究極神オシリス』を召喚する！！光臨せよ『究極神オシリス』！」



第2の神が宇宙に解放された。魔物の姿をした『何か』も、その圧倒的存在に戦慄する。

究極神オシリス ATK6000

「『究極神オシリス』で『インフェルノ・ケルベロス』を粉碎！アルティメット・サンダーフォース！！」

「グギャアアアア！！」

Enemy LP8000 7000

「『究極神オベリスク』でとどめだ。アルティメット・クラッシュ！！！！」

宇宙からの青い波動が魔物の姿をした者に直撃した。魔物は、攻撃が止まないうちに消えてしまい、最後に不気味な光がデュエルアカデミアの校舎に入り込み、スクールに直撃した。スレイはそれを感じ、急いでスクルドの無事を確認するべく校長室に向かつて走った。なお、石化した人間は、敵がこの世界から退避した瞬間にその呪いが解けた。

~~~~~校長室~~~~~

「スクルド、大丈夫か！？」

スレイは多少焦った様子で校長室を見回す。

「……………お前誰だ？」

スレイは、容姿こそよく見覚えがあるが、身長が小さい少女に何者かと問う。

「…わかんない？…」

涙目になってスレイのことを見つめる、身長146cmの少女は、紛れもなくスクルドだった。

「……………。」

スレイは頭を悩ませた。

「いろんな意味でよかったじゃん、スレイ。キツヒヤツヒヤツヒヤ  
！！」

ロキが茶化すように言う。スレイは厄介な呪いをかけてくれたものだと思った。石化の呪いは解けても、こういつた命には関係ない魔法…つまり嫌がらせに値する魔法は使用できる者こそ滅多にいないが、解くことができない。

「……………ゴクリ。」

トールが息を呑む。すると、どこからともなく鉄球が飛んできてトールが空に向かって飛んで行ってしまい、飛んで行った先にロキが瞬間移動しており、トールを蹴飛ばした。5分後にポロポロになったトールが校長室に戻ってきた。ちなみに、鉄球はスレイがアーテイスの形を変えて放ったものだった。

「な、なんで息を呑んだだけで…？」

「お前は怪しいんだよ、バカ。」

ロキはトールに向かって容赦ない毒舌を言い放つ。トールは軽く落ち込んだ。神でも世の中は理不尽だと、その場にいたロキとスレイ以外の誰もが思った。

「どうしたのか…：175cmから一気に146cm…これでは親子にしか見えんぞ…。」

オーディンが多少ズレたところで悩んでいるが、全員が無視する。問題は、裏の世界からやってきたというその生命体のことだった。

が。

なんと、いきなりデュエルアカデミア全体が強い光に包み込まれてしまった。

「な、なんだこれは!？」

「わからないか？トール。十代達はプロフェッサー・コブラとの決戦に赴いた。」

「そ、そうか！ではこれは…!!…うおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおお!!」

スレイ以外の全員が眩しさに目を瞑り、そしてデュエルアカデミア

は……

異世界に飛んだ。

次回へ続く。

## 第4話 石化の霧（後書き）

次回「異世界のデュエル」

ウルズ「トールの扱いは、今後こういう形で行こうと思いますww」

スクルド（ロリ化）「……………どうしてこうなったの？まあいいや（よくないけど）最強カード紹介行こう。」

『インフェルノ・ケルベロス』

ランク4 エクシーズ 炎属性 獣族 ATK0 DEF0

レベル4モンスター×3

このカードは攻撃できない。1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除くことで、このカードは次の自分のターンのスタンバイフェイズまで魔法・罫・効果モンスターの効果を受けず、戦闘では破壊されない。また、このカードの戦闘によって発生する自分へのダメージを0にする。このカードのエクシーズ素材が1つになった時、このカードの攻撃力は2000になる。このカードのエクシーズ素材が無くなった時、このカードは攻撃可能になり、以下の効果を得る。

このカードの元々の攻撃力は5000になる。1ターンに1度、相手の魔法・罫・効果モンスターの効果の発動と効果を無効にして破壊することができる。このカードは相手フィールド上にモンスターが存在する場合、3回まで攻撃することができる。このカードが相手モンスターを破壊した場合、相手プレイヤーに2500ポイントのダメージを与える。

ウルズ「なんで本編でカード効果を書いたの？」

スクルド「これから、その回限りの切り札または、効果を明かしてもいいカードの効果はその本編中に載せるらしいよ？」

ヴェルザンディ「多分文字稼ぎ…なのかしら？」

ウルズ「さあ？ちなみに次回はトールが戦うみたいね」

## 第5話 異世界のデュエル（前書き）

どうもです。

今回は多数カード効果を載せ、さらに多数のイメージBGMの指定があります…。

そして、ついにオリジナルの召喚方法を出してみた。…今までのと何が変わったんだろう。

最近の出来事

フォーミュラきたあああああ！！3パック買ったらきたぜ！！

## 第5話 異世界のデュエル

~~~~~校長室~~~~~

「で、異世界に飛んできた。十代達が戻ってくるのはもうしばらく先かな？それとも今はハーピー・レディの餌食かな？」

つていうのは冗談で、無事に戻ってくるんだけどね。

「で、スクルドのことはどうする？」

身長が28cm縮んだ。命に別状があるわけでもないし、身長は伸びるものだから別に構わんが……。ちなみに、ロキよりも10cm小さいということになる。

「正直、僕よりも背が小さいやつができたから僕的には満足してるんだけどね。キツヒヤツヒヤツヒヤ。」

「…すまないが、この呪いばかりはわたしにも解けないな。無理に呪いを解き、何か起こったら面倒だからな。………まるで噂に聞いたことがあるドワーフとかホビットとかと同じような身長の高さだな…ホビットは言いすぎか。」

身長の高さそのものは、もはや伝説の種族であるドワーフのレベルだろう。見た目がまだ人間であるため、別種族と勘違いされることがないだけまだマシというものだ。………そうか、人間と言われている時点で間違われているか。

ちなみにホビットの身長は60〜120cm程度…アーティスが2



m50cmだから半分程か。

「わたしは少し外に行く。何やら騒がしいのでな。」

先程の話の途中から：大体『すまないが：』の辺りから外が騒がしくなった。どうやら十代達ではないらしいが、別の何かがいるらしい。

「まあ待て、私の血も疼くのだ：我も連れて行ってもらおうか。」

さっきまでノックダウン状態だったトールが復活し、自信満々の顔でミヨルニルをその手に持つ。

「……………足を引く張るなよ？」

スレイは何の心配も無さそうにトールを連れて外に出た。鉄球にぶつ飛ばされて簡単に立ち上がるほどの雷神が、そう簡単にくたばるわけがないと踏んでいるようだ。

外に出ると、そこには鳥獣族モンスター2体と黒いデュエルディスクをつけた変態……………もといダーク・グレファアがいた。数人の生徒がやられる寸前なのが見て取れる。

「全く、嬉しくない歓迎だな。」

「トール、ダーク・グレファアは任せるぞ。」

スレイはこちらに向かって突進してくる鳥獣族モンスター2体を、鞭に変えたアーティスで薙ぎ払い、怯んだところを強く叩いた。更に、地面に落ちたところにアーティスを鉄球に変えて攻撃を叩き込

み、完全に撃破した。

アーティスの形を変えることに気づいたのはつい最近のことだ。オリハルコンの鞭と鉄球はかなり効いただろう。

「相変わらず冷酷な奴だな。まあいい、我があいつを軽く捻り潰してやろう。」

トールは物凄い勢いでジャンプすると、地響きのような音を立ててダーク・グレファアーの前に着地した。

「何だお前たちは…俺の子分どもを一瞬で…！」

「まあ、あいつ…スレイは異常だから不思議なことじゃない。とりあえず手荒な歓迎をしてくれた礼をしなければならんからな。」

トールはミヨルニルをデュエルディスクにする。質量を無視した変化だが、そんな法則が通用するほど神は規則にとらわれた存在ではない。

「少しは俺を楽しませろよ？」

「……………」

トールは邪な考えを全て抑えて臨戦態勢に入った。

「デュエル」

Thorvs Dark Grepher

「先攻は俺がもらうぞ。ドロー、俺は『終末の騎士』を召喚しその

効果を発動。デッキから『ヘルウェイ・パトロール』を墓地へ送り、その効果を発動。このカードを墓地から除外し、手札から攻撃力2000以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する。現れる『<sup>ヘルシ</sup>地獄<sup>エネラル</sup> 將軍メフィスト』！」

攻撃力はレベル4モンスタークラスでありながら、そのレベルは5という使い勝手は悪いモンスターが特殊召喚された。しかし、貫通能力を持っており、ダメージを与えた場合に相手の手札を1枚捨てさせる効果は強力と言える。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

Dark Grepher

LP4000

手札×4

フィールド

終末の騎士 ATK1400

地獄將軍メフィスト ATK1800

伏せカード×1

「私のターン！我は『XX-セイバーボガートナイト』を召喚。このモンスターの召喚に成功したことで、手札の『XX-セイバーフラムナイト』を特殊召喚する！レベル4の『XX-セイバーボガートナイト』にレベル3の『XX-セイバーフラムナイト』をチューニング。シンクロ召喚『XX-セイバーハルバードナイト』！！」

XXX-セイバーハルバードナイト ATK2400

完全武装のハルバードを持った騎士が姿を現す。そして、ハルバードの先端から光を放つ。

「ハルバードナイトの召喚に成功した時、デッキから『X - セイバー』の名を持つモンスターを5体まで墓地へ送る。そしてこの効果で墓地へ送ったモンスター1体につき攻撃力を100ポイントアップする。」

墓地へ送ったのは『XX - セイバーレイジグラ』 『XX - セイバー  
ダークソウル』 『XX - セイバーエマーズブレイド』 『XX - セイ  
バーフォルトロール』 『X - セイバーパシウル』の5体…。

XXX - セイバーハルバードナイト ATK2400 2900

「カードを3枚伏せてバトル！ 『XXX - セイバーハルバードナイ  
ト』で『地獄將軍メフィスト』を攻撃！ ハルバード・サイクロン！  
ハルバードナイトがハルバードを振り回し、真空の刃で地獄將軍を  
真つ二つに切り裂いた。」

Dark Grepher LP4000 2800

「『XXX - セイバーハルバードナイト』効果発動、相手モンスタ  
ーを破壊した場合、自分の墓地の『X - セイバー』3体をデッキに  
戻し、カードを2枚ドロウする。ターンエンド。さあ、貴様のター  
ンだ。」

デッキに戻したのは『XX - セイバーダークソウル』 『XX - セイ  
バーフラムナイト』 『XX - セイバーフォルトロール』だ。

Thor

LP4000

手札×3

フィールド

XXX-セイバーハルバードナイト ATK2900

伏せカード×3

「俺のターン。…俺はフィールド魔法『Dark of infinity』を発動する。」

フィールド全体が闇に包まれた。我も見ることがないフィールド魔法…一体どのような効果がある？

『Dark of infinity』

フィールド魔法

このターンのバトルフェイズをスキップすることで、相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える。このカードが自分フィールド上に存在している限り、相手モンスターの攻撃対象は自分が選択する。このカードが自分フィールド上を離れる場合、代わりに手札のレベル4以上の悪魔族モンスターを捨てることができる。

「このフィールド魔法の効果で、相手の攻撃対象は俺が選択する。さらに1ターンに1度、バトルフェイズを放棄することで相手のモンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える！」

「何だと！」

「トール、貴様あれだけ言っておきながら敗北するつもりか？」

手荒な歓迎の礼をするとか言っておきながら敗北など許さんぞ…。

「あ、スレイ見つけ」

「スクルド!?」

髪をツインテールにしたスクルドがスレイの横に歩いてくる。175cmの時は結んでいなかったが、身長が小さいならこちらの髪型のほうが似合う。スクルドはスクルドでもう身長のことにはあきらめており、スレイの身長が高いので肩車でもしてもらえばそんなに困ることはないと言っていた。スレイはやったこともない肩車をするのは不満があるようで、やるならお姫様抱っこ一択らしい。理由は単純で、それが一番楽であって慣れていているから。

「フン、スレイ。我が負けるとでも思っているのか!?」

ましてや少女：じゃなかった、女神の見ている前で敗北するなど雷神と戦神の名が廢る。

「ええい、うるさい!」Dark of infinity 効果発動、『XXX-セイバーハルバードナイト』を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える!」

闇の光がXXX-セイバーハルバードナイトに向かう。しかし、ここでトールの伏せカードが1枚表になった。

「トランプ発動、『セイバー・レイジ』!」XXX-セイバーハルバードナイト』を生贄にし、そのレベル以下の『X-セイバー』をデッキから2体まで特殊召喚する。我は『XX-セイバーダークソウル』2体を特殊召喚!」

闇の光は標的を失い、外れてそのままどこかへ飛んで行った。

「まだまだ、トラップ発動『セイバー・ブラスト』！自分フィールド上に『X・セイバー』モンスターが特殊召喚された場合、特殊召喚された数と同数の『X・セイバー』をデッキから特殊召喚する。我の場に特殊召喚されたのは2体、よってデッキから『X・セイバー・フラムナイト』『X・セイバーエマーズブレイド』を特殊召喚する！」

トールのフィールドには一気にモンスターが特殊召喚される。ダーク・グレファアはそれを見て、苦虫をつぶしたような表情を浮かべる。狙っていた効果破壊によるダメージはサクリファイス・エスケープによって回避され、さらにそれが原因でモンスターが4体も特殊召喚されたのではたまったものではない。

「くそ、ターンエンドだ…。」

Dark Grepher

LP2900

手札×4

フィールド

終末の騎士 ATK1400

伏せカード×1

「我のターン！レベル3の『X・セイバーダークソウル』2体と『X・セイバーエマーズブレイド』にレベル3の『X・セイバー・フラムナイト』をチューニング！大いなる魔剣、轟く雷鳴を纏い舞い降りる！古の力を解き放て、シンクロ召喚！『X・X・セイバーデビルズブレイド』！」

黒いXX - セイバーガトムズが、ルーン文字の刻み込まれた魔剣を持って出現した。レベル12の威厳と重圧は、究極神にこそ及ばないもののかんりのレベルだ。

XXX - セイバーデビルズブレード ATK3500

『XXX - セイバーデビルズブレード』

レベル12 地属性 戦士族 ATK3500 DEF2000

シンクロ

『XX - セイバー』と名のつくチューナー+『XX - セイバー』と名のついたモンスター2体以上

このカードのシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材にしたモンスターの数までデッキからカードをドローすることができる。この効果によってドローした『X - セイバー』と名のつくモンスターの数まで、相手フィールド上に存在するカードを手札に戻す。1ターンに1度、自分の手札に存在する『X - セイバー』と名のつくモンスターを任意の枚数見せることで、このカードの攻撃力はエンドフェイズまで見せたモンスターの数×500ポイントアップする。

「デビルズブレードの効果発動。シンクロ召喚成功時、素材にしたモンスターの数までデッキからカードをドロー、そのドローした中にあつた『X - セイバー』の数まで相手フィールド上のカードを手札に戻す。我は4枚ドロー！…ドローした中にあつたのは『XX - セイバーガルドストライク』のみ。よつてお前のフィールド上の『終末の騎士』を手札に戻す。」



もはやダークネス・ウィング・ドラゴンが出る幕が無さそうなほど強力なトールのデッキだが、それでも召喚される場面があるのは敵がそれ相応の能力を持っているからだ。それほどの力がないダーク・グレファアー相手には七聖龍の1体を召喚することはないだろう。ましてやダーク・グレファアーのフィールドはがら空き。XXX-セイバーデビルズブレードの効果も相まって、トールは勝利を確信した。

だが…

(BGM:ホセ 後半より)

「フハハハハハ!!」

突如天空より2体の竜騎士が出現し、スレイ達を囲む。そして、スレイとスクルドに向かってデュエルディスクを向ける。

「さあデュエルだ、貴様らを逃がしはしない。久しぶりの獲物だからな…特にそっちの女は料理のし甲斐がありそうだ。」

「ダーク・グレファアー1人に任せられないからな…俺たちも来てよかったぜ。」

どこその悪魔がこの世界には存在しないという力をくれたんだ…久しぶりに美味しいメシにありつけそうだぜ。

ちなみに、『そっちの女』とは当然スクルドのことだ。

「チツ…こいつらなど俺1人で十分だ！」

ダーク・グレファアは増援が気に入らないらしく、反論した。

「それはどうかな？手札のガルドストライクを貴様に公開し、デビルズブレードの攻撃力を500ポイントアップする。」

デビルズブレードの剣が光り、その力を増大させた。ダーク・グレファアはそれを見るや否や、焦りだした。

XXX - セイバーデビルズブレード    ATK 3500    4000

「ナニイイイイ!?」

「ダイレクトアタック、デビルズスパーク！」

Dark Grepher    LP 2900    - 1100

デビルズブレードが剣の先端から紫色の雷を撃ち出し、ダーク・グレファアを消滅させた。断末魔を上げる間もなく消えたダーク・グレファアを誰も気に留めない。

一方で、竜騎士2体とスレイ、スクルドのデュエルが始まる。両者ともに、違う意味で身長差がある。スレイは敵を見下ろし、スクルドは見上げる。

「すぐに片づけてやる。」「デュエル！」

Slay vs Dragon knight

「デュエル！」

Skuld vs Dragon knight

( BGM : イリアステルバトルモード )

~~~~~ S l a y v s D r a g o n k n i g h t ~~~~~

「先攻はわたしがもらう、わたしは『スターロード』を特殊召喚。レベル8のモンスターだが、フィールド上にカードが存在しない場合に特殊召喚でき、その攻撃力、守備力、レベルを1にする。」

星の王のような魔術師が出現し、その杖を天に掲げる。

|        |         |   |
|--------|---------|---|
| スターロード | ATK2000 | 1 |
|        | DEF2000 | 1 |

「手札よりチューナーモンスター、『バーニング・シンクロン』を特殊召喚する。レベル7のモンスターだが、攻守を0にすることで手札から特殊召喚できる。レベル1となった『スターロード』にレベル7の『バーニング・シンクロン』をチューニング。大いなる翼を羽ばたかせよ、シンクロ召喚『スターダスト・ドラゴン』！『スターロード』が『スターダスト・ドラゴン』のシンクロ素材になった場合、このターン2回の通常召喚が可能になる……。」

未来のデュエルキング…不動遊星が使用するエースモンスターが召喚された。

「わたしは手札から『チューニング・サポーター』と『グローアップ・バルブ』を召喚、レベル1の『チューニング・サポーター』と『グローアップ・バルブ』をシンクロ素材とし、『フォーミュラ・

シンクロン』をシンクロ召喚、『チューニング・サポーター』と『フォーミュラ・シンクロン』の効果で2枚ドロ。」

「……………」

悪魔からもらった情報の中にあつたアクセルシンクロか？シューティング・スター・ドラゴンなど今の俺の敵ではない！

「レベル8の『スターダスト・ドラゴン』にレベル2のシンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング。未来に羽ばたけ、アクセルシンクロ、『バーニング・フレア・ドラゴン』！」

天空が炎に染まり、その炎が龍を形作る。最後には全身が炎でできている、翼に巨大な炎を宿らせる龍になった。

スレイのデッキの中では、『究極神』>『機皇』と裏の世界の勢力に対抗するために創り出した『新たな境地』>『星界の三極神』その他：という順の強さになる。ちなみに、スレイは今機皇デッキを2つ持っており、1つは機皇神帝龍エクスブルムを切り札とした『機皇神帝』、もう1つは機皇神マシニクル？などの効果を生かし、各パーツを入れ替えながら戦う『純機皇帝』だ。スレイは後者を好んで使用する。

なぜ究極神という十分裏の世界の勢力に対抗できる力を持っているながら新たな境地を編み出したのか？それは自らの本当の切り札を、最後の手段として取っておくためだった。

バーニング・フレア・ドラゴン ATK3000

『バーニング・フレア・ドラゴン』

レベル10 シンクロノ効果 炎属性 ドラゴン族 ATK3000

0 DEF2500

シンクロモンスターのチューナー+チューナー以外のシンクロモンスター1体

1ターンに1度、バトルフェイズ中に発動したカードの効果を無効にし破壊することができる。また、このカードを相手ターンに除外することができる。この効果によってこのカードを除外した場合、このターン、相手モンスター1体の攻撃を無効にすることができる。1ターンに1度、このカードのシンクロ素材にしたモンスターを墓地から除外することで、このカードはこのターン、2回攻撃することができる。

「ターンエンド。」

Slay

LP4000

手札×4

フィールド

バーニング・フレア・ドラゴン ATK3000

「俺のターン、ドロ。俺はモンスターを裏側守備表示でセットし、カードを2枚伏せる。ターンエンドだ!」

Dragon knight

LP4000

手札×3

フィールド

伏せモンスター×1

伏せカード×3

「わたしの…ターン!」

…来たか、まだ一度も試していない新たな境地…！

「墓地に存在する『グローアップ・バルブ』の効果によって、デッキトップのカード1枚を墓地へと送り、墓地のこのモンスターを特殊召喚する。さらに、『バーニング・フレア・ドラゴン』のレベルを1つダウンし、墓地から『レベル・ステイラー』を特殊召喚する。」

アクセルシンクロモンスターとシンクロチューナー2体を素材としてシンクロする『ハイパーデルタ・アクセル』。どれ程の力を発揮するのか。…もつとも、編み出したのはハイパーデルタ・アクセルだけではないがな…。

「レベル1の『レベル・ステイラー』にレベル1の『グローアップ・バルブ』をチューニング、大いなる境地、新たな力を導き出す。極限の果てへ奔れ！シンクロチューナー『メテオ・シンクロン』！」

隕石を模ったようなモンスターが出現した。

「さらに『バーニング・フレア・ドラゴン』のレベルを1つダウンし、墓地の『レベル・ステイラー』を特殊召喚、そして手札の『アンノウン・シンクロン』を召喚、レベル1の『レベル・ステイラー』にレベル1の『アンノウン・シンクロン』をチューニング。極限の境地、その先に辿り着きし時、限りなき力をその身に得る。シンクロチューナー『スーパーノヴァ・シンクロン』！」

超新星爆発が体内で起こり続け、膨大なエネルギーを発し続けているシンクロチューナーが出現した。

( B G M 終了 )

「レベル8のアクセルシンクロモンスター『バーニング・フレア・ドラゴン』にレベル2のシンクロチューナー『メテオ・シンクロン』  
『スーパーノヴァ・シンクロン』をダブルチューニング！！聖龍超えし力、果ての境地にて誕生せよ！紅蓮の炎と超新星、太陽のごとき力を手にする！ハイパーデルタ・アクセルシンクロ！！無限の光  
『アルティメット・フレア・ドラゴン』！！」

スレイの手に握られた白いカードに絵柄が浮かび上がり、その効果も記される。この白いカードは、この世界に来る寸前に戦った裏の世界から来たという者が落としていったものだ。基本的に白紙のカードとは、その持ち主が何らかの力に覚醒した時に発現する。つまり、白紙のカードを持つ者によって浮かんでくるカードは違うということだ。当然、大変貴重なものであり、滅多に手に入る物ではない。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！』

全身が太陽フレアで完成され、その身の至る所からプロミネンスが噴出し、超新星爆発の青白い炎を纏った全長20km程度の巨大龍が姿を現した。この世界ではモンスターが現実化するために、まず究極神はデュエルアカデミアの周りでは使用できない。余程のことがない限りは機皇帝がこの新たな龍を召喚するだろう。

アルティメット・フレア・ドラゴン    A T K 5 0 0 0

『アルティメット・フレア・ドラゴン』

レベル12 ハイパーデルタ・アクセルシンクロノ効果 炎属性  
ドラゴン族 ATK5000 DEF5000

シンクロモンスターのチューナー2体+シンクロモンスターのチューナーを素材としたチューナー以外のシンクロモンスター1体

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。1ターンに1度、自分のメインフェイズ1に発動することができる。このカードはこのターン、自分の手札の枚数分攻撃することができる。1ターンに1度、このカードをゲームから除外することができる。この効果はスペルスピード5として扱う。この効果によってこのカードを除外したターン、相手のカードの効果も1度だけ無効にし、破壊することができる。この効果によって除外したこのカードは、エンドフェイズ時に自分フィールド上に戻る。

???

???

「な、なんだって?…ハイパーデルタなんて聞いてないぞ…。」

俺の伏せカードはデッキからモンスターを特殊召喚して、それを素材にしてシンクロ召喚を行う罫カードだけ…4回もの攻撃を耐えられるわけがない…。

「『アルティメット・フレア・ドラゴン』の効果、このカードは手札の枚数分までの攻撃が可能になる。わたしの手札は4枚、よって攻撃回数は4回だ。」

ハイパーデルタ…凄まじいまでの力だ。これほどの成果が得られるとは思っていなかったぞ。

「バトルフェイズ!!!『アルティメット・フレア・ドラゴン』で4



回の攻撃を行う！アルティメット・フレア・プロミネンス！」

守備表示モンスター…『ボルト・ヘッジホッグ』ごと竜騎士は炎に飲み込まれた。

「ギヤアアアアアアアアアアアア！…くっそおおお、ロリコンに負けた…だとおおおお！？」

Dragon knight LP4000 - 8000

誰がロリコンだ…こちらは終わったな。さて、スクルドは…まだ終わっていないか。…『アレ』を使うのか？スクルド。

~~~~Skuld vs Dragon knight (スレイのデュエルと同時に開始)~~~~

「先攻は俺がもらう。俺は『強欲な壺』を発動して2枚ドロし、手札よりチューナーモンスター『ゾンビキャリア』を召喚する。更に自分フィールド上にモンスターが通常召喚されたことで、手札の『ゾンビナイト』を特殊召喚するぞ。レベル5の『ゾンビナイト』にレベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング。シンクロ召喚、『アンデットキング』！」

アンデットキング ATK2500

名前の通り、ゾンビの王を思わせるようなモンスターが出現した。ボロボロの王冠がその雰囲気さらに増大させている。

「『アンデットキング』が存在する限り、レベル4以下のアンデット族モンスターは魔法・罠・モンスター効果を受けず、戦闘では破壊されない。そして『アンデットキング』がフィールドを離れる場合は代わりにフィールド上に存在するアンデット族モンスターを墓地へ送ることができるのだ。」

ミラーマッチならば相手のアンデット族モンスターを墓地に送ることとでフィールドを離れることはなくなる。相手もアンデットなら、こいつの真の性能が発揮されただろう。

例え情報にあつた七聖龍：こいつはエターナル・ローズ・ドラゴンだったな…今の俺の力なら召喚されようが十分撃破可能だ。

「ターンエンド。」

Dragon knight

LP4000

手札×5

フィールド

アンデットキング ATK2500

「私のターン。」

スクルドの目の前に6枚のカードが浮かぶ。デッキは杖の中に封じ込められており、墓地などの役割もすべてこの女神の杖が担っている。

「私は『夜薔薇の騎士』を召喚するよ。『夜薔薇の騎士』が召喚に成功した時、手札からレベル4以下の植物族モンスター『ロードポイズン』を特殊召喚！レベル4の『ロードポイズン』とレベル3の『夜薔薇の騎士』をシンクロ素材にして、『ブラック・ローズ・ド

ラゴン』をシンクロ召喚！」

現れた黒薔薇の竜は、周囲に嵐を作り出した。

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』のシンクロ召喚に成功した時、フィールド上にあるすべてのカードを破壊する！ブラック・ローズ・ガイル！」

フィールド上に存在するカードがすべて破壊され、互いのフィールドが空になる。スキルドがこの効果を使用するのは珍しく、本当に他に何もできない時に使用するのみだ。このターンで倒せないことを悟り、この手段をとったようだ。

「私はカードを2枚伏せてターンエンド。」

S k u l d

L P 4 0 0 0

手札×2

フィールド

伏せカード×2

「俺のターン！俺は『蘇りし屍』を発動する。このカードの効果によって墓地のアンデット族モンスター1体を特殊召喚し、手札のアンデット族モンスター1体を墓地へ送る。『ゾンビナイト』を特殊召喚し、手札より『ゾンビ・マスター』を墓地へ。『ゾンビナイト』の効果発動。1ターンに1度、エクストラデッキのアンデット族シンクロモンスター1体を特殊召喚する。ただし、この効果によって特殊召喚されたモンスターは攻撃できず、効果も無効になる。俺は『デスクイザー・ドラゴン』を特殊召喚するぞ。」

ゾンビナイト ATK2400

死してなお生者を襲う龍がフィールドに特殊召喚された。その身体からは常に瘴気が放たれており、対戦相手の気分を害する。

「『ゾンビナイト』は自分フィールド上に存在する時、シンクロモンスターとして扱うことができる。ただし、シンクロモンスターとして扱う場合はレベルが4になるがな。カードを1枚伏せターンエンド。」

さあ、エターナル・ローズ・ドラゴンをシンクロ召喚するがいい。俺の罠が、最強を超えるモンスターを特殊召喚させるぜ。

Dragon knight

LP4000

手札×3

フィールド

ゾンビナイト ATK2400

デスカイザー・ドラゴン ATK2400

伏せカード×1

「私のターン！私は手札から『死者蘇生』を発動、墓地から『ブラック・ローズ・ドラゴン』を復活！そして、手札からレベル4のチューナーモンスター『フォーチュン・ローズ』を召喚、その効果で手札の植物族チューナー『エボリューション・ローズ』を特殊召喚する！特殊召喚された『エボリューション・ローズ』の効果で1枚ドロ。レベル7の『ブラック・ローズ・ドラゴン』にレベル4の『フォーチュン・ローズ』とレベル1の『エボリューション・ローズ』をダブルチューニング！大いなる力、長き眠りよりその姿を現す！神々の力を示せ、シンクロ召喚！七聖龍『エターナル・ローズ・

ドラゴン』！！』

スレイと敵の決着は今ついた。こっちも早く倒さなきゃ。

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

スクルドの精霊…厳密には違うが、それが咆哮を上げて天空から光臨する。現実化している分だけ、その力を抑えているようだ。

黄金の薔薇を模り、全長約40kmを誇る巨大なドラゴンが、相手のドラゴンナイトを睨み付ける。

『私の出番ですね…久しぶりに血が疼きます。』

好戦的な龍は今にも戦闘を始めそうだ。

だが…

(BGM：光と闇)

「クッククック…ハーツハツハツハツハツハツ！トラップカード、『三重同調』！相手のフィールド上にレベル10以上のシンクロモンスターが特殊召喚された時に発動、エクストラデッキからシンクロモンスター1体を特殊召喚し、さらにシンクロ召喚が可能な場合はシンクロ召喚を行うことができる！エクストラデッキよりシンクロチューナー『アンデット・ガーディアン』を特殊召喚！レベル4の『ゾンビナイト』とレベル6の『デスカイザー・ドラゴン』にレベル2の『アンデット・ガーディアン』をチューニング！！」

2つの輪に、10個の星が入り込んで暗黒のごとき輝きを放つ。悪魔から譲り受けたその力が、ドラゴンナイトの姿をおぞましいものへと変化させ、その精神を暴走させた。

「デルタアクセル！ 『屍の支配者 - アンデット・ルーラー - 』！  
！」

まさにその名の通り、屍の支配者のごとき姿をした魔物が現れる。巨大な骸が冠と邪悪な錫杖を構え、黒い衣を羽織って黒い光を天に放ち続ける。

屍の支配者 - アンデット・ルーラー - ATK4500

『屍の支配者 - アンデット・ルーラー - 』  
レベル12 闇属性 アンデット族・シンクロノ効果 ATK4500 DEF3000

シンクロモンスターのチューナー+チューナー以外のアンデット族シンクロモンスター2体以上

このカードが墓地に存在する場合または自分フィールド上に表側表示で存在する限り、お互いにカードを除外することはできない。1ターンに1度、このカードを墓地へ送ることでこのターン、相手モンスター1体の攻撃または効果を無効にすることができる。エンドフェイズ時、このカードの効果によって墓地に送られたこのカードを自分フィールド上に攻撃表示で戻す。この効果は相手ターンでも使用できる。このカードが破壊され墓地へ送られた場合、このカードのシンクロ素材にしたモンスターを可能な限り墓地から特殊召喚する。

「こ、攻撃力4500… 『エターナル・ローズ・ドラゴン』を超え

た……」

でも、エターナル・ローズ・ドラゴンは墓地のモンスター1体を除外することでその攻撃力を得ることが出来る……！

「『屍の支配者 - アンデット・ルーラー -』の効果により、互いにカードを除外することはできない……」

「そんな!?!」

これじゃあ……屍の支配者を倒すには……デッキに1枚しか入っていないあのカードを引き当てなきゃいけない……。

「……………くつ、ターンエンド。」

S k u l d

L P 4 0 0 0

手札×1

フィールド

エターナル・ローズ・ドラゴン     A T K 4 0 0 0

伏せカード×2

「俺のターーン!! さあ、バトルだ! 小娘、貴様を俺の晩飯にしてやるぜ! 『屍の支配者 - アンデット・ルーラー -』で『エターナル・ローズ・ドラゴン』を攻撃! デスペラード・ダーク!」

錫杖の先端から放たれている闇がエターナル・ローズ・ドラゴンに向かう。

「晩御飯なんて嫌だし、私は小娘じゃない! トラップ発動『ローズ・

バリア』、『ブラック・ローズ・ドラゴン』または『ブラック・ローズ・ドラゴン』をシンクロ素材にしたモンスターが自分フィールド上に存在する時発動、相手モンスター1体の攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了、デッキから2枚ドローする！」

……お願い、来て……！

「……ドロー！」

……違う、このカードじゃない。

「小癩な手を使いやがって……だが次のターンこそ本当に貴様が俺の晩飯になる！」エターナル・ローズ・ドラゴン』を『屍の支配者』  
・アンデット・ルーラー』で破壊し、さらに俺の手札にある『アケセルドライブ』を使用することでもう1度攻撃でき、それで貴様のライフは0だ！ターンエンド！」

Dragon knight

LP4000

手札×5

フィールド

屍の支配者 ・アンデット・ルーラー ・ ATK4500

「私のターン。」

これが本当に最後の私のターン。もしも竜騎士が言ってることが本当なら、私は次のターンに負ける。嘘でもエターナル・ローズ・ドラゴンを破壊されたら私は本当に勝つ手段がなくなる。

「……ドロー！」



.....。

「万策尽きたようだな、ハッハッハッハッ！」

「手札から速攻魔法発動、『フルバスター・モード』！」

「へ？」

「『エターナル・ローズ・ドラゴン』を生贄に捧げる！」

エターナル・ローズ・ドラゴンは赤い光に包まれて消えた。エターナル・ローズ・ドラゴンが消えた衝撃で大爆発が起こる。

「バ、バカめ、何をするかと思ったら自滅か！」

「.....エクストラデッキから生贄にしたモンスターの名前を含む『フルバスター』と名のつくモンスターを特殊召喚する。『フルバスター・エターナル・ローズ・ドラゴン』を特殊召喚する！！！」

黄金の薔薇を模った龍は、首と手足のに白金の鎧を装備して再臨した。同時に、スキルドが持っていた白いカードにその姿と効果が記された。

フルバスター・エターナル・ローズ・ドラゴン ATK4000

『フルバスター・エターナル・ローズ・ドラゴン』  
レベル12 神属性 ドラゴン族・シンクロノ効果 ATK4000  
DEF4000

このカードはシンクロ召喚できない。『フルバスター・モード』の

効果でのみ特殊召喚できる。このカードの効果は無効化されず、ス  
ペルスピードは4として扱う。このカードは相手のカードの効果に  
よって自分フィールド上を離れず、コントロールを変更されない。  
また、墓地に存在するシンクロモンスター1体をゲームから除外す  
ることでバトルフェイズを終了することができる。1ターンに1度、  
墓地に存在するモンスター1体を選択することで、そのモンスター  
の攻撃力分このカードの攻撃力をアップする。このカードが守備表  
示モンスターを攻撃した場合、攻撃力が守備力を超えていればその  
数値分相手にダメージを与える。このカードが相手に与えるダメー  
ジは倍になる。

「だ、だが攻撃力はまだ『屍の支配者 - アンデット・ルーラー -  
』の方が上だ!」

「『フルバスター・エターナル・ローズ・ドラゴン』の効果発動、  
墓地の『エターナル・ローズ・ドラゴン』を選択して、その攻撃力  
分攻撃力をアップする!」

「何だと!?!」

フルバスター・エターナル・ローズ・ドラゴン ATK4000  
8000

「そして、『フルバスター・エターナル・ローズ・ドラゴン』が相  
手に与えるダメージは倍になる!『フルバスター・エターナル・ロ  
ーズ・ドラゴン』で『屍の支配者 - アンデット・ルーラー -』を  
攻撃、エクストリーム・エターナル・フレア!」

「そ、そんな……バカなああああああああ!」

(BGM終了)

「……『フルバスター・モード』… ついに使ったか。」

コブラがデスベルトを渡してきて、それを装着して直後に壊れた時にデッキに現れたらしい。相談を受けてはいたが、『君の自由にすればいい』と返したただだったからな。

「…何とか晩御飯にならずに済んだ…。」

「それはご苦労だったな。トールはもう先に戻ってしまったぞ。わたし達も戻るとしよう、そろそろ十代達がアカデミアに戻ってきた頃だろうからな。」

「そうだね。」

スレイはスクルドを連れてデュエルアカデミアに戻っていった。やはり全生徒が集まられてクロノスからの説明を受けたが、食料はあらかじめロキが大量に仕入れており、どんなに食い荒らしたとしても1年は持つらしい。抜け目のない奴だ。

まあ、どうせそう時を待たずしてデュエルアカデミアは元の世界に戻れるだろう。

次回に続く。



## 第5話 異世界のデュエル（後書き）

次回「動き出す影」

ウルズ「今回使用したオリカ『セイバー・ブラスト』、『セイバーレイジ』はユタ様のご投稿くださったものです。ありがとうございます！

スクルド「さあ、いくつか効果を載せたけど最強カード紹介行ってみよう」

『フルバスター・エターナル・ローズ・ドラゴン』  
レベル12 神属性 ドラゴン族・シンクロノ効果 ATK400  
0 DEF4000

このカードはシンクロ召喚できない。『フルバスター・モード』の効果でのみ特殊召喚できる。このカードの効果は無効化されず、スperlスピードは4として扱う。このカードは相手のカードの効果によって自分フィールド上を離れず、コントロールを変更されない。また、墓地に存在するシンクロモンスター1体をゲームから除外することでバトルフェイズを終了することができる。1ターンに1度、墓地に存在するモンスター1体を選択することで、そのモンスターの攻撃力分このカードの攻撃力をアップする。このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、攻撃力が守備力を超えていればその数値分相手にダメージを与える。このカードが相手に与えるダメージは倍になる。

『フルバスター・モード』  
速攻魔法

自分フィールド上に存在するレベル12のシンクロモンスター1体を生贄に捧げて発動する。エクストラデッキから生贄に捧げたシンクロモンスターのカード名を含む『フルバスター』と名のつくシンクロモンスター1体を特殊召喚する。このカードの発動と効果に対して魔法・罫・効果モンスターの効果を発動することはできない。

ヴェルザンディ「エターナル・ローズの進化体ですわね。かなり強力なものに仕上がっていますね。」

ウルズ「それはそうと、前々から作者が考えていたらしいんだけど、『Sin』のオリカがほしいそうよ（特にモンスター）。アイデアが出なくて悩んでいるらしいわ。採用したカードを投稿してくれた人は…この小説から誰か1人〜2人キャラクターを自由に使ってくれていいそうよ。」

スクルド「……………お礼が毎回誰かを自由に使ってくれていいっていうのはどうかと思うけど…それしか実際にできるようなことがないから仕方ないか…。」

ウルズ「『Sin』シリーズの投稿待ってるわ。複数枚投稿してくれてもOKよ。ただ、多すぎても全部出せるかどうかかわからないし、効果が極端すぎても採用はできないわ。モンスターを投稿してくれる場合はその姿を書いてくれるとうれしいわ。書いていなかったら姿はこちらで勝手に決めるそうね。」

スクルド「…この小説の切り札のほとんどが極端な効果だと思うけど…」

ヴェルザンディ「それにしてもハイパーデルタ・アクセルシンクロ…いくらなんでも無茶でしょう…」

ウルズ「あ、送ってくれるのがモンスターな時は、それがシンクロ  
モンスターでも融合モンスターでもOKよ。採用の決定は感想での  
返信として返すわ。」

## 第6話 動き出す影（前書き）

どうもです。…一週間と1日ぶりの投稿、遅れました。ゴメンナサイ。

理由は…単純に疲れていただけです。いつもなら一週間に2度程度は更新するペースで書いているのですがね…

ちなみに活動報告でのアンケートにご協力いただいた皆様、ありがとうございました。選んでいただいたデッキは、必ずスレイでなくともキャラに1回は使わせませう。

で、今回使ったデッキは…マシンガジェです。アンケートガン無視でごめんなさい。アンケートとった時にはもうマシンガジェで書いていたんです。

### 最近の出来事

ダンディライオンを手に入れてジャンクドッペルを完成させました。強い強いwwしかしマシンガジェに勝てないという不思議。



## 第6話 動き出す影

~~~~デュエルアカデミア校舎・体育館~~~~

たった今集会が終わり、クロノスによるそれぞれの対応の仕方についての説明が終了し、解散の指令が出た。生徒の中には既に絶望している者がいたり、体力が削られると分かって置きながらデュエルで気晴らしをしようとする者がいる。それを愚かだとは思わん。理解はできないし、どういう感情でそういった結論に達したのかもわからないがな。

「お、スレイじゃねえか」

感情についていろいろ考えていたわたしに十代が話しかけてきた。ちなみに今現在、わたしはスクルドを連れて行動している。

「あれ？スクルドに似てるけどそいつはお前の子供か？」

十代は背の小さくなったスクルドをスレイの子供と勘違いした。スクルドは顔を赤くして俯いたまま黙っている。

「……いや、スクルド本人だ。わけがあつてな……。」

「ふーん。まあいいや、久しぶりだなんて思って声かけただけだから。」

そう言うと、十代は仲間のところに行つて行つた。わたしはスクールドを連れて校長室に向かう。前もつてクロノスに集会が終わつたら来てほしいと頼まれていたからだ。ドアに近づくと自動的に開き、わたしは校長室に入る。既に呼ばれていたオーデイン達が集合していた。

「遅かつたな、スレイ。」

「フン…。」

スレイは全員から少し離れた位置に立ち、目を瞑つた。早く話して解散させるということだろう。スクールは苦笑いを浮かべて校長室のテーブルに近寄つた。

「…知つての通り、我がデュエルアカデミアはとんでもない事態に陥つてしまったノーネ。…本当ならば我々教師陣が解決しなければいけないノーネ。…でも、今のわたし達には何もできないノーネだから、神様の力を貸してほしいノーネ。お願いなノーネ！」

クロノスは頭を下げた。デュエルアカデミアの陥つた状況について考え、そして自分たちには何もできないと悔しながらも思い、クロノスはスレイ達に何とかしてほしいと頼む。

「……………頭を上げるがいい、クロノス。」

トールがクロノスに声をかける。頭を上げたクロノスに対し、トールはこう言つた。

「我ら神々は人間の願いを聞くことは殆ど無く、すべてをその気分で決定する。……………我は協力してやるぞ。」

珍しくトールが真面目なことを言っているのにロキが笑いを堪え、一言だけ「協力してあげるよ。」と言って最終的に笑いながら、困って笑った表情を浮かべたセレナを連れて校長室を出て行ってしまった。スレイは何の返事もせずにスクールを抱いて部屋を退室した。大抵返事がない時は、表で協力することはしないという意思の表れである。オーデインとウルズ、ヴェルザンデイはいかにも協力するといった表情で校長室を出た。

「スレイ、何の返事もしなかつたけど良かったの？」

歩幅の大きいスレイに、身長が縮んだことで追いつくのが大変なスクルドが聞く。スレイはそれに気づいたようで、歩くスピードを落とす。

「返事をする必要はない。わたしはわたしのやりたいようにやる。」

その自由な選択肢は、スクルド以外に向けての生命体に対する感情が無いからあるのだろう。何かしらの感情を持つていれば、そこまですべて自由な行動はできないからだ。

スクルドはそれを気にした様子もなくスレイについていく。スレイとの付き合いが誰よりも長いからこそ、この言葉が一体どんな意味を持つていのかわかるからだ。もはや互いが互いの考えていることがすぐにわかるくらいにこの2人は付き合いが長い。

「……………外を見る。」

不意にスレイが言った。スクルドが窓の外を見ると、そこにはこの前のダーク・グレファールと竜騎士の仲間と思われるモンスターがこちらに攻めてきていた。だが、雰囲気からして悪魔から何かを受け

取った様子はなく、単純に仲間を殺されたことによる怒りで突っ込んできたようだ。

「仲間意識が高いのは結構。だが、わたし達とお前たちとの『仲間意識』ではその定義が違うようだな。」

スレイはスクルドを連れて外に出る。外では既にオーディンが応戦しており、スレイはそれに加わった。

「老神が1人で無理をすることもあるまい。」

「誰が老神だ、わたしはお前よりは若いぞ！」

オーディンの言うことは正しい。実際に動いていた時間はオーディンの方が長い。スレイは生きていた時間だけを数えるならば圧倒的にオーディンやゼウス、その他の神々よりも長い。

「フツ、そういうセリフはわたしよりも多くの敵を倒してから言うてもらおうか。」

「（お前は戦闘神だろうが！）いいだろう、その勝負受けて立つ！」

2人は圧倒的な力を以って敵を倒していく。スレイは自身の武器であるアーティスを様々な形に変えて戦う。小型、中型のもので大剣や鞭、鉄球などで大型のものではロケットランチャーや対物ライフルなどだ。ちなみにライフルやランチャーの弾はスレイの神力である。

おそらく1分も経たない内に敵は残り2人となり、その2人はデュエルディスクを腕に装着している。

「ここまでではほぼ互角か…つまらん。オーディン、この2人をどちらが早く葬れるか勝負だ。」

当然方法はデュエルだ。普通に戦えばわたしが一瞬で勝利するのは目に見えているからな。

「面白い、その勝負のつた。」

2人の神は敵を倒すことを前提に話を進める。

「この…俺らを甘く見るなよ?」

「さっきまでの雑魚と俺たちを一緒にすれば痛い目を見る…もう引き返すことはできないぞ。覚悟しろ!」

「デュエル」

S l a y v s E n e m y

「デュエル」

O d i n v s E n e m y

だが、この2人がデュエルをしている間にデュエルアカデミアではユベルが巨大な心の闇を持つ加納マルタンに憑りつき、操るために動いていた…。しかし、ロキが執拗に追いかけるのでそう簡単にマルタンの居る場所に行くことができないでいる。

~~~~~ S l a y v s E n e m y ~~~~~

「先攻は俺がもらうぞ?」

「勝手にしろ。どちらを取るうが貴様は消える。」

話している時間が無駄だ。こうしている間にもオーデインはすでにデュエルを始めてしまっている。

敵も威圧感はかなりあるが、スレイはそれに対して退くどころかプレッシャーで返している。

「ほざけ、俺のターン、ドロ―!俺は『スナイプストーカー』を召喚、カードを1枚伏せてターンエンドだ!」

Enemy

LP 4000

手札×4

フィールド

スナイプストーカー ATK1500

伏せカード×1

「わたしのターン。」

この次元に飛ばされてくる際に次元の狭間で手に入れた心無き力を思い知らせてやる。

「わたしは『マシンナーズ・ギアフレーム』を召喚。『マシンナーズ・ギアフレーム』の召喚に成功した時、デッキから同名カード以外の『マシンナーズ』1体を手札に加えることができる。わたしは『マシンナーズ・フォートレス』を手札に加える。カードを2枚伏せてターンエンド。」

Slay

LP4000

手札×4

フィールド

マシンナース・ギアフレーム ATK1800

伏せカード×2

「俺のターン！」

「速攻魔法発動、『死者への供物』。表側表示で存在するモンスター1体を破壊し、次のわたしのターンのドローフェイズをスキップする。わたしは『スナイプストーカー』を破壊。」

長年追い求めてきたあらゆる戦術に一方的に負けることのない万能なデッキ…それが今わたしの目の前にある。わたしの固有デッキと違って敗北することはあっても完全封殺されることは無いだろう。

……さすがはガチデッキ。

「チツ…俺は『ダーク・ウォール』を守備表示で召喚してターンエンドだ。」

闇の波動の壁が現れ、召喚主の前に立ちはだかる。

Enemy

LP4000

手札×4

フィールド

ダーク・ウォール DEF2100

伏せカード×1

「わたしのターン。ドローフエイズはスキップだ。」

この次元に飛ばされた際に手に入れた複数のデッキ。なぜわたしの手元に来たのかはわからない。ものによっては使用することなど無いデッキも幾つかあった。

「『グリーン・ガジェット』召喚。このモンスターの召喚に成功した時、デッキから『レッド・ガジェット』1体を手札に加える。」

緑色の歯車のモンスターが現れた。召喚成功時にデッキから対応するガジェットを手札に加えられ、ハンド・アドバンテージを失うことがほとんどないのがこのデッキの利点。

「さらにわたしは手札の『レッド・ガジェット』と『マシンナーズ・フォートレス』を墓地へ送り、今墓地へ送った『マシンナーズ・フォートレス』を墓地から特殊召喚する。」

マシンナーズ・フォートレス ATK2500

高さ10m程度はあるだろう巨大な戦車のモンスターが現れた。装備されている重砲はいつでも発射の準備が完了している。時間をかけてはられない。早いところ勝負をつけさせてもらおう。

「で…でっけえ…」

「バトル。『マシンナーズ・フォートレス』で『ダーク・ウォール』を粉碎する。スローター・オブ・レールガン！」

重砲に超電導のエネルギーが充填され、巨大な砲撃が撃ち出された。



その重砲撃はいともたやすく壁モンスターを消し飛ばす。

「続いて『マシンナース・ギアフレーム』と『グリーン・ガジェット』によるダイレクトアタック！」

「チツ…」

Enemy LP4000 800

「わたしは『マシンナース・ギアフレーム』の効果を使用し、『マシンナース・フォートレス』にこのモンスターを装備する。ターンエンド。」

Slay

LP4000

手札×2

フィールド

マシンナース・フォートレス ATK2500

+マシンナース・ギアフレーム

グリーン・ガジェット ATK1400

伏せカード×1

「俺のターン…、俺は『サイクロン』を発動して伏せカードを破壊する！」

「フン…」

破壊されたのは『ソウルテイカー』…わざわざこのカードを採用する利点といえば、シューティング・クエーサー・ドラゴンを破壊してもシューティング・スター・ドラゴンが召喚されないのとユベル

の進化を止めることができるくらいだろうか。尤も、それを1000ライフで済ませることができるならば十分強力だとは思うがな。

「さらにチューナーモンスター『クレボンス』を召喚してターンエンドー!」

Enemy

LP800

手札×4

フィールド

クレボンス ATK1200

伏せカード×1

「わたしのターン…。」

こいつ…もう自分が詰まれていることに気づいていないのか。

「わたしは『マシンナーズ・ギアフレーム』のユニオンを解除する。

」

「あっ!」

……………詰んだ。というか、詰んでた。

「バトルだ。『マシンナーズ・フォートレス』で『クレボンス』を攻撃、スローター・オブ・レールガン!」

「ぎゃあああああああああ!」

………今までの雑魚と同じレベルだったな。さて、オーディンは……わたしの勝利か？敗北か？見に行ってみるとしようか。

}}}} Odin vs Enemy }}}

「先攻はわたしがもらうぞ。わたしはフィールド魔法罪深き世界『Sin World』を発動する。このフィールド魔法の発動下で敗北したプレイヤーは死に至る。そしてわたしの『Sin』と名のつくモンスターは2体以上フィールドに存在することができ、『Sin』モンスターの効果によって攻撃を制限されない。」

まあ、いつもの通りだな。この程度は我々のデュエルでは常識だろう。

「何ッ!？」

死に至るフィールド魔法!？聞いたことがねえぞ……。まあ要は勝てばいいんだろ、勝てば。

「わたしはエクストラデッキの『スクラップ・ドラゴン』、『サイバー・エンド・ドラゴン』、『スターダスト・ドラゴン』を墓地へ送り、『Sinスクラップ・ドラゴン』、『Sinサイバー・エンド・ドラゴン』、『Sinスターダスト・ドラゴン』を手札から特殊召喚する。さらに手札より『Sinパレルギア』召喚。このモンスターのシンクロ素材は手札の『Sin』でなければならない。」

1ターンで手札を使い果たすのもどうかとは思つが、気にする必要もないだろう。

「レベル8の『Sinnギガンテック・ファイター』にレベル2の『Sinnパラレルギア』をチューニング。次元の裂け目から生まれし闇、時を越えた舞台に破滅の幕を引け！シンクロ召喚『Sinnパラドクス・ドラゴン』！」

巨大な黒っぽい竜が現れた。赤い鱗が見える箇所があるのが特徴だ。

「『Sinnパラドクス・ドラゴン』の召喚に成功した時、墓地のシンクロモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。さらに相手フィールド上のモンスターは『Sinnパラドクス・ドラゴン』以外の自分のシンクロモンスターの攻撃力分攻撃力をダウンする！『スクラップ・ドラゴン』を特殊召喚し、ターン終了だ。」

Odin

LP4000

手札×0

フィールド

Sinnパラドクス・ドラゴン ATK4000

Sinnスクラップ・ドラゴン ATK2800

Sinnサイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

Sinnスターダスト・ドラゴン ATK2500

スクラップ・ドラゴン ATK2800

Sinn World

「俺のターン。」

やべえ…あいつのフィールドには下級モンスターどころか攻撃力2

500オーバーのモンスターしかいねえじゃねえか…。その上シンクロ召喚？ふざけんじゃねえ、なんで異世界から来たやつらがシンクロ召喚を使えるんだよ…。シンクロカードは人間共が平和にデュエルしているような世界には落ちてないはずなのに…。

「俺は手札を1枚捨てて『ライトニング・ボルテックス』を發動するぜ。相手フィールドの表側モンスターをすべて破壊する！」

「フン、『Sinnスターダスト・ドラゴン』の効果発動、このカードを生贄に捧げて破壊効果を無効にして破壊する。そしてエンドフェイズにこの効果で生贄にした『Sinnスターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する…！」

そこら辺の何の変哲もない『Sinn』と一緒にするなよ？対になったモンスターの効果のある程度コピーしているからな。

「クソ！俺は『アブソリユーター・シールド』を守備表示で召喚する！こいつはカード効果と戦闘では破壊されず、手札を1枚捨てることでデッキから1枚ドロウするモンスターだ。効果で手札を捨てて1枚ドロウ…ターンエンド。」

オーデインのフィールドに不気味な鎧と仮面をつけたスターダスト・ドラゴンが復活した。

Enemy

LP4000

手札×3

フィールド

アブソリユーター・シールド DEF100

「わたしのターン！バトルだ！」

「愚かな、こいつは戦闘でも効果でも破壊できないんだぞ！？」

「『Sinサイバー・エンド・ドラゴン』で貫通攻撃、エターナル・エヴォリューション・バースト！」

そんなことは承知の上だ。だが、ダメージは通るからな。

「ぐああああああああ！」

貫通だと！？…そうか、サイバー・エンド・ドラゴンは貫通効果を持っている…Sinは元のモンスターの効果がある程度保有しているのか…！

Enemy LP4000 100

だが俺のライフはまだ100ポイント残っている…！

「速攻魔法『罪の解放』。『Sin』モンスター1体を除外し、墓地に存在する対となるモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。『Sinサイバー・エンド・ドラゴン』を除外し、『サイバー・エンド・ドラゴン』を復活！」

「何！？」

「貫通ダメージは3900…それに対してお前のライフは100だ。……エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「アアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

さてと……わたしとスレイ、どちらが先に倒したのか楽しみだな。

「遅かったな、オーディン。余計なSinを展開していた時点で時間がかかりすぎたようだな。」

わたしはオーディンのいる場所に向かって歩く。

「ガチデッキばかり使う上に身長148cmの妻を持つロリコンに言われたくはないな。」

オーディンが多少嫌がらせのように言う。どうやら勝負に敗北したのがよほど気に食わないらしい。

「DM老神がそのような言葉を知っているとは恐れ入る。妻の言いなりになるような最高神など聞いたことがない。それこそ、そろそろ最高神引退の時期がやってきたということではないのかね？そもそも、一応わけありなのだから合法だと思うが？」

オーディンの挑発に対して余裕をもって返す。一瞬でも弱みを見せることなどわたしのプライドが黙っていない。それにわたしはロリコンじゃない。

さらに言うと、148cmは少しでもスクルドの身長を誤魔化そうとして言ったことだ。さすがに本人に本当の身長など言えないから

な……。  
実を言うと……10cmサバを読んでいる。つまり、138cm（多分小学3〜4年生レベル）ということに……。こんなことは口が裂けても言えないが……。それこそ本当にロリコンのレットルが貼られてしまいかねない。……というか、最近わたしもロクな目に遭っていないな。

「なにおう！？年齢ならばわたしの方がまだ若い！貴様に言われるほど老いてない。これ以上言うのなら、神界全体にスレイのロリコン疑惑を広めてやるぞ？」

「ほづ、面白い。やってみるがいい……但し、『やれるものなら』という条件が付くがな。」

尤も、そんなことをしてもナンセンスな結果で終わると思うがな。神界での信頼度はオーデインよりもわたしの方がはるかに上だからな。そんな脅しでわたしは退かない。

「……おのれ、これ以上は平行線だ。ここで終わりにさせてもらうぞ。」

オーデインは逃げるようにしてデュエルアカデミア校舎に戻って行った。

「……………フン（逃げたか）……………ん？」

スレイは先ほどまでオーデインが戦っていた敵のいた場所に何か落ちていたのを見つけて拾った。



それはあらゆる呪いを解くことのできる謎に包まれた宝石だった。オーデインの戦っていた敵は何か呪いをかけられていたのだろうか？まあ、使い方がわからないから肌身離さず持ち歩いていたのだろうか。この使い方がわかる者など数えるほどしかいないだろうしな…。

……… スクルドと不名誉なレッテルを貼られつつあるわたしにはいい知らせだな。

~~~~その頃、デュエルアカデミア校舎内部~~~~

「キツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ、そろそろ諦めな！」

ロキはユベルをひたすらに追いかける。他人の計画を邪魔するのが好きなロキにとって、これは良い退屈しのぎ程度でしかない。ユベルにとってはいい迷惑だ。

「くっ……しっこいな！」

「ヒヤツハツハツハツハ、それは僕にとっては褒め言葉ではないね！リアルトラップ発動、『時空断層』！一定空間内に存在するものすべてを別の空間に強制転移させる！」

『時空断層』  
リアル  
現実界

このカードはデュエルで使用することはできない。指定した一定空間内に存在するすべてのものを別の空間に転移させる。

すぐさまロキとユベルが別の場所に飛ばされた。飛ばされた場所は

デュエルアカデミアの校舎の裏側のようだ。

「何が起こったんだ!？」

「キツヒヤツヒヤツヒヤ、リアルトラップはデュエルでは使用できないけど、現実には効果を及ぼすトラップカード!この『時空断層』はその中の1枚なんだよ!」

ユベルは尚も逃げ続ける。だが、ここでロキが突然消えた。

「(そろそろやめてあげようかな?キツヒヤツヒヤ)お前を放置しても、影響があるのは学園の生徒だけだからね。僕はそろそろ、仲間のところに戻らせてもらおうよ。」

それに、追いかけている間に結構攻撃を加えたから、ある程度は消耗させただろうしね。

スレイから連絡もあったし、校長室に戻らせてもらおうと。

~~~~~校長室~~~~~

ロキがまず目にしたのは、身長が170cmまで戻っており、スレイの腕の中で静かに眠っていたスクルドだった。完全に戻ることはできなかったが、それでも100%呪いは解けたようだ。

「な、なんで…スクルドの身長が?」

「……まあ、いろいろあってな。」

あの呪いを解く宝石の使い方は……宝石を飲み込むだけだ。但し、呪いを解いた後は2時間の間深い眠りに陥るがな。ここにベッドや布団はないから、仕方なくわたしの腕を貸してやったが……。

「まあいいや、身長が一番低いのがまた僕になったのは不満だけだね。」

せっかくロリコンのレットルをスレイに貼れると思ってワクワクしてたのに。こんなこと言ったらセレナがまた何か言いそうだけど……。

「あ、そうそう。ユベルが動き出してるから。さっきまで追いかけてたんだけど、面倒になったから帰ってきた。」

ある意味『面倒だから』という理由で強大な敵を逃すあたり、ロキは大物だろう。まだ比較的若いというものもあるだろうが、その若い神の中でも頭一つ抜けて大物だ。もしかしたらロキはユベルのことを強大な敵などと思っていないかもしれない。

「……まあ、ヤンデレ精霊は放置でいいと思うぞ。我は悪魔を叩き潰すなら本気を出すか、本来の世界の住人が倒すべき敵を神が倒す必要はないと思ってるからな。」

トールが話したことに対して、誰も言葉を返さない。スレイは第一話を聞いていないし、そのほかのメンバーもそれは分かっているからだ。

しばらくの間、その静寂が続いた。が……

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

早乙女レイの叫び声が聞こえた。

「お、始まった始まった」

ロキとトールがやたらと楽しそうにしているのを見て、オーディンがため息をついた。

「はあ……まあいい、我々も動くぞ」

スレイとノルン三姉妹、そしてセレナを残して北欧の三神は校長室を出た。

次回に続く。

## 第6話 動き出す影（後書き）

次回「リマvs悪魔 神竜王ドラグニルvsシンクロモンスター」

ウルズ「今回のオリカ『Sinスクラップ・ドラゴン』はアストラ様、名前だけの登場だったけれど『Singガンテック・ファイター』は通りすがりのデュエリスト様からご投稿いただいたものです。ありがとうございます！次回の時には名前だけの登場なんてことをなくすつもりです。まだ『Sin』カテゴリのオリカは募集しています。締め切りは……次回以降のあとがきでお知らせします。」

スクルド「さあ、今日の最強カード紹介行ってみよう」身長が戻って上機嫌

『時空断層』

現実界

このカードはデュエルで使用することはできない。指定した一定空間内に存在するものすべてを別の空間に転移させる。

ウルズ「ちなみに転移先は同じ世界のどこかよ」

ヴェルザンディ「ちょっとまった、もっとツッコむところあるでしょ!?!」

スクルド&ウルズ「どこ??」

ヴェルザンディ「……………」

第7話 リマvs悪魔 神竜王ドラゲニルvsシンクロモンスター（前書き）

お久しぶりです。……更新に遅れました、ネタ切れです。どうもデユエルを長くしようとしても、スレイの場合は1〜2ターンで終わってしまうんですよね。ほかのキャラも大体3〜5ターンくらいですし……もうちょっと頑張ってみよう。

最近の出来事

体中が筋肉痛に襲われ、うなされています。

……助けてw

第7話 リマvs悪魔 神竜王ドラゲニルvsシンクロモンスター

「さて、楽しくなるね。キーヒヤッヒヤッヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

「静かにしろ。」

「……………」

フリーな行動を好むこの北欧の三神はスレイたちを置いて校長室を飛び出した。何かと事件があれば無理やり介入して滅茶苦茶にするのを好むときがある。ほかの周りの仲間から見れば迷惑なことこの上ない。

今までに起こした迷惑といえば、どこぞの時空管理局を壊滅させたり、戦闘を好む様々な世界に赴いて時空ごと大破させたりと、やりたい放題だ。その後にはゼウスの説教が待っているが。この3人曰く『いくらでも平行世界はあるんだから1つや2つぶっ壊したところで問題ないはず』とのこと。

一方で…

「行っちゃったね。」

3人が出て行った校長室の扉を眺めていたスクルドが一言言った。

「……………」（もうあいつらの仲間やめるべきだろうか？）

「

大体問題を起こす3人組に対して手を焼くのがノルンの三姉妹とロキの想い人のセレナ、そしてスレイだ。大抵の場合はスレイも一緒に暴れるが、頭を悩ませることの方が多い。最近はどう考えるのをやめたようだ。

「何をしに行ったのかしら？」

「さあ？」

「…………… 奴らがすることなどわたしの知ったことではない。わたしはとりあえず、外に来た久しぶりの悪魔という名の来客の相手をしてくるとしよう。」

~~~~校舎の外、リマ~~~~

「チツ、面倒な奴らだな！」

「フツハツハツハツハ、お前が学園内にいる神々の場所を吐けばお前に危害を加えるつもりはない！」

偶然外の見張りをしていたリマは、4匹の悪魔に見つかってしまい、苦戦を強いられている。

「あいにく、俺は仲間を売る質じゃないんでね！」

「悪いが、わたしはお前の仲間になった覚えはないぞ。」

そこにスレイが到着する。



「おいおい、酷いじゃないか。1回デュエルをしたら仲間じゃないのか？」

「……………お前は十代か。まあいい、あの3匹はわたしが引き受けよう。お前は1匹片付ければそれでいい。…相手は雑魚の中では最上級の悪魔だ、死んでも知らん。」

スレイはそれだけ言うと、場所を変更するために3匹の悪魔を吹き飛ばし、追いかけて行った。リマは残った悪魔に向けてデュエルデイスクを展開する。

「デュエルだ！」

「フン、人間ごときが俺に対してデュエルだと？身の程を知れ！」

「デュエル！」

L i m a v s D e v i l

「先攻は俺がもらうぞ。俺は『切り込み隊長』を召喚、このモンスターの召喚に成功した時、手札のレベル4以下のモンスター…：チューナーモンスター『ゾンビキヤリア』を特殊召喚！レベル3の『切り込み隊長』にレベル2の『ゾンビキヤリア』をチューニング、シンクロ召喚『A・O・Jカタストル』！」

A・O・Jカタストル ATK2200

「ターンエンド。」

D e v i l

LP4000

手札×4

フィールド

A・O・Jカタストル ATK2200

「俺のターン、ドロー。」

シンクロモンスター：厄介だな。確かスレイから聞いた限りじゃ、要注意シンクロモンスターの1体だ。閻属性以外のモンスターを容赦なく破壊する効果を持つてるんだっけ？だけど…そのくらいじゃ俺の神獣は倒せないぜ。

「俺は手札の『神機王ウル』と『神獣王バルバロス』を除外して、『獣神機王バルバロスUr』を特殊召喚！さらに装備魔法『獣神の矛』『獣神の盾』を装備するぜ。」

獣神機王バルバロスUr ATK3800 4000

獣神機王バルバロスUrの近くに巨大な矛と盾が現れ、浮遊する。そして、矛の先端はゆっくりとA・O・Jカタストルに向いた。

「『獣神の矛』を装備したモンスターの攻撃力は200ポイントアップして、モンスター効果を無効化する。さらに装備したモンスターがレベル8以下の『神』の名を持つ攻撃力3000以上のモンスターなら、1ターンに1度カードを2枚ドロウできる。この効果で2枚ドロウだ。行くぜ、バトル！『獣神機王バルバロスUr』で『A・O・Jカタストル』を攻撃！」

カタストルに向いていた矛がそのままカタストルに向かって飛ぶ。カタストルは一撃で粉碎され、爆発した。

Devil LP4000 2200

「チツ…」

「ターンエンド！」

Lima

LP4000

手札×3

フィールド

獣神機王バルバロスUr ATK4000

+ 獣神の矛

+ 獣神の盾

「俺のターン！よくもカタストルをやってくれたな…。俺は『ゾンビ・マスター』を召喚！その効果で手札の『レベル・ステイラー』を墓地へ送り、墓地の『ゾンビキヤリア』を蘇生。レベル4の『ゾンビ・マスター』にレベル2の『ゾンビキヤリア』をチューニング。シンクロ召喚、『大地の騎士ガイアナイト』！」

大地の騎士ガイアナイト ATK2600

「へえ、レベル6で攻撃力2600か…」

シンクロって便利だな。召喚簡単で高攻撃力か…。

「さらにガイアナイトのレベルを1つ下げて墓地から『レベル・ステイラー』を特殊召喚！そして速攻魔法『誘発蘇生』！墓地からモンスターが特殊召喚された時に発動し、自分の墓地からモンスター

「1体を特殊召喚し、そのレベルを1つ下げる。『ゾンビキャリア』を復活してレベルを1に！レベル1の『レベル・ステイラー』にレベル1となった『ゾンビキャリア』をチューニング！来い、シンクロチューナー『チューン・デーモン』！」

『チューン・デーモン』

レベル2 闇属性 悪魔族・シンクロ/効果 ATK100 DE  
F200

チューナー+チューナー以外のモンスター1体

このカードのシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル5以下のシンクロモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。この効果によって特殊召喚したモンスターの効果は無効になる。このカードをシンクロ素材とする場合、相手ターンでもシンクロ召喚することができる。

謎の輪を持つ悪魔が現れた。現れた悪魔は、手に持っている輪を5回振った。

「『チューン・デーモン』がシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル5以下のシンクロモンスター1体を効果は無効にして特殊召喚する。蘇れ、カタストル！」

5回の音響に反応して、墓地に送られたカタストルが再起動してフィールドに蘇る。

「3体のシンクロモンスター…まさか！」

「そうだ！レベル5のシンクロモンスター2体にレベル2の『チューン・デーモン』をチューニング！闇より生まれし邪の焔、大いなる聖者を完全に叩きのめさん！聖者を滅ぼし、我らの糧とするがい

い！デルタアクセルシンクロ、『煉獄邪王ダークフレア・デーモン』  
！』

黒き焰は巨大な悪魔の姿を浮かべ、そこで形を変えるのをやめた。焰によって完成された邪悪な化身はリマという聖者を睨み付けて、その身の焰で今にも焼き尽くそうとしているようだ。

煉獄邪王ダークフレア・デーモン ATK4000

『煉獄邪王ダークフレア・デーモン』

レベル12 闇属性 悪魔族・デルタアクセルシンクロ/効果 A  
TK4000 DEF0

『チューン・デーモン』+シンクロモンスター2体

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。このカードが戦闘を行う場合、モンスターの攻撃宣言時に相手モンスターの攻撃力がこのカード以下の場合、このカードはその戦闘では破壊されない。このカードが戦闘によって破壊される場合、相手に4000ポイントダメージを与える。このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にならず、カード効果によっては破壊されない。このカードが戦闘以外の方法でフィールドを離れた場合、このカードのシンクロ素材にしたモンスター1組を自分の墓地から特殊召喚することができる。

「これが悪魔のシンクロ…攻撃力4000…ヤバイな…」

ネーミングが単調のくせに攻撃力はバカみてえに高いじゃんかよ…！

「フン、小僧。これでも所詮我ら幹部の部下である下級の悪魔が使用するデルタアクセルシンクロ…幹部たちには遠く及ばん。バトルだ、『煉獄邪王ダークフレア・デーモン』で『獣神機王バルバロス

Ur』を攻撃、ダークフレアブラスト！」

焰の悪魔から巨大な火球が撃ち出された。

「チツ… 『獣神の盾』を代わりに破壊して、『獣神機王バルバロスU  
r』の破壊を免れる！さらに破壊された『獣神の盾』の効果で1枚  
ドロー！」

攻撃力は互角だった。ならばあいつのモンスターも相打ちで破壊さ  
れるはず……………！！

「なぜ『煉獄邪王ダークフレア・デーモン』が破壊されていない！  
？」

獣神機王バルバロスUrを憎しみの目でにらんでいるのは、揺らい  
で見える焰の悪魔だった。より強い憎しみをその力に変え、自身の  
焰をさらに強くする。

「『煉獄邪王ダークフレア・デーモン』が戦闘を行うモンスターの  
攻撃宣言時に、相手モンスターの攻撃力がダークフレア・デーモン  
以下の場合、その戦闘で破壊されないのだ。ターンエンド。」

Devil

LP2200

手札x2

フィールド

煉獄邪王ダークフレア・デーモン ATK4000

「俺のターン！」

…待ってたカードも来たし…そろそろ終わりにするか。

「まずは『獣神の矛』の効果で2枚ドロ。俺は魔法カード『神竜王の祭壇』を発動するぜ。自分フィールド上のカードを全て破壊し、デッキから『神竜王』と名のつくカードを1枚手札に加える。俺が加えるのは『神竜王ドラグニル』！」

リマのフィールドのカードがすべて光に変わり、デッキから1枚のカードを導き出した。

「む…自分フィールド上のカードを全て破壊してまでカードを1枚手札に加えるだと？」

「そう、その1枚でお前を倒すぜ！墓地から『獣神の盾』『獣神の矛』『獣神機王バルバロスU r』を除外！頼むぜ、『神竜王ドラグニル』！！」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

神竜王ドラグニル ATK4000

「攻撃力4000…ダークフレア・デーモンと同等か！」

だが攻撃力4000ではダークフレア・デーモンを倒すことなどできない、次のターン、俺の手札にある『デルタアクセル・アブソバー』を発動し、ドラグニルの攻撃力を0にしてダークフレア・デーモンの攻撃力を8000にし、そのまま攻撃すれば俺の勝ちだ！

「『神竜王ドラグニル』の召喚に成功した時、手札の魔法カード『神竜王の贄』を発動する。デッキから魔法カード『神竜の囁き』、

罨カード『神竜の怒り』、モンスターカード『神竜レグゼル』を墓地へ送る。」

「だからどうした？お前の切り札では我がデルタアクセルシンクロモンスター『煉獄邪王ダークフレア・デーモン』を超えることなどできんわ！」

「それはどうだろうな？『神竜王ドラグニル』の効果発動！墓地に存在する『神』の名を持つモンスターを全てゲームから除外することで、1体につき攻撃力を1000アップする！」

「何だと！」

神竜王ドラグニル ATK4000 5000

「それだけじゃない。『神竜王ドラグニル』の効果で『神竜レグゼル』が除外された場合、ドラグニルはこのターン、2度の攻撃ができる！これで終わりだ、『神竜王ドラグニル』で『煉獄邪王ダークフレア・デーモン』とお前を攻撃！ツイン・ドラグノフ・カノン！」

「！！！」

Devil LP2200 1200 -2800

「やれやれだな。シンクロ使えないのに、デルタアクセル使ってくるなんて…少しは手加減してくれよ。」

さてと、スレイなら心配はいらないだろうから、俺は警備に戻るか。



~~~~その頃、スレイ~~~~

「俺達3体を同時に相手するとかお前バカかよ？」

「御託はいい、早いところお前たちを葬り、戻らせてもらう。」

「ほざけ！」

アポリア流デュエルで俺達3人を相手にするなど、スレイといえど無理がある！

「行くぞ…！」 「デュエル」 「」

S l a y v s A c e l l & G o l f a & D o l l a

「わたしのターン。わたしは手札を1枚捨て『ワン・フォー・ワン』を発動。デッキからレベル1モンスター『グローアップ・バルブ』を特殊召喚、そして墓地へと送られた『ダンディライオン』のモンスター効果により、『綿毛トークン』2体を守備表示で特殊召喚する。」

スレイのフィールドに3体のモンスターが召喚された。

「レベル1の『綿毛トークン』とレベル1の『グローアップ・バルブ』をシンクロ素材とする。シンクロ召喚、『フォーミュラ・シンクロン』。このモンスターのシンクロ召喚に成功した時、デッキから1枚ドローできる。」

スレイがドローしたカードを確認すると、口の片方を釣り上げて笑った。その瞬間、すさまじいプレッシャーが3体の悪魔を襲った。

「わたしは手札を1枚捨てることで『THEトリッキー』を特殊召喚。そして、手札から捨てられた『魔轟神獣ケルベラル』を特殊召喚する。レベル1の『綿毛トークン』とレベル5の『THEトリッキー』、レベル2の『魔轟神獣ケルベラル』をシンクロ素材とする！出でよ、『フレイムドラグーン』！」

『フレイムドラグーン』

レベル8 炎属性 ドラゴン族・シンクロノ効果 ATK2200  
DEF1200

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードのシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材にしたモンスターの数だけデッキからカードをドローする。このカードが戦闘によって破壊された場合、相手フィールド上に存在するカードを2枚選択する。選択したカードを破壊し、自分は2200ポイントダメージを受ける。

鱗が炎でできている竜が出現した。悪魔たちはそれを見上げると、思わず息を呑んだ。

「『フレイムドラグーン』の効果により、カードを3枚ドローする。レベル8のシンクロモンスター『フレイムドラグーン』とレベル2のシンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』をシンクロ素材にする。大いなる炎の翼羽ばたかせ、未来への扉を開け！アクセスルシンクロ！光臨せよ、『バーニング・フレア・ドラゴン』！！」

バーニング・フレア・ドラゴン ATK3000

『バーニング・フレア・ドラゴン』（効果訂正Ver）

レベル10 炎属性 ドラゴン族・デルタアクセルシンクロノ効果

ATK3000 DEF2500

シンクロモンスターのチューナー+チューナー以外のシンクロモンスター1体

1ターンに1度、バトルフェイズ中に発動したカードの効果を無効にし破壊することができる。また、このカードを相手ターンに除外することができる。この効果によってこのカードを除外した場合、このターン、相手モンスター1体の攻撃を無効にすることができる。この効果によって除外したこのカードをエンドフェイズに自分フィールド上に戻す。1ターンに1度、このカードのシンクロ素材にしたモンスターを墓地から除外することで、このカードはこのターン、2回攻撃することができる。

天空が炎に染まり、その炎が龍を形作る。最後には全身が炎でできている、翼に巨大な炎を宿らせる龍になった。

「わたしはカードを2枚伏せてターンエンド。」

Slay

LP8000

手札×4

フィールド

バーニング・フレア・ドラゴン ATK3000

伏せカード×2

「俺のターン、俺は『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚する。こいつは相手フィールドにのみモンスターがいる時に特殊召喚できる。更にチューナーモンスター『グローアップ・バルブ』を召喚！」

「『バーニング・フレア・ドラゴン』効果発動、相手ターンにこのカードを除外する！」

レベル6のシンクロモンスターは強力な効果を持つブリューナクが存在する。ここでバーニング・フレア・ドラゴンをバウンスされるわけにはいかない。

「ちつ…逃げたか。レベル5の『サイバー・ドラゴン』にレベル1の『グローアップ・バルブ』をチューニング！シンクロ召喚『氷結界の龍ブリューナク』！…カードを伏せ、ターンエンド。」

悪魔がターンエンドを宣言した瞬間、スレイのフィールドに巨大な火球が現れ、それがバーニング・フレア・ドラゴンの姿に変わった。

Ac cell

LP8000

手札×3

フィールド

氷結界の龍ブリューナク ATK2300

伏せカード×1

「俺のターン、ドロー。」

「『バーニング・フレア・ドラゴン』は相手ターンに1度除外でき、エンドフェイズに帰還する。」

悪魔がドローすると同時にスレイはバーニング・フレア・ドラゴンを除外した。赤い炎に包まれ、バーニング・フレア・ドラゴンがこの次元から消え、次元の裂け目が閉じる。

「俺は永続魔法『調律の宝札』を発動！シンクロモンスターの特殊召喚に成功したプレイヤーはカードを2枚ドローできる。但し、こ

のカードは2回目の俺のスタンバイフェイズに破壊される。そしてチューナーモンスター『エクスロード・マスター』を召喚する。こいつはシンクロ素材をデッキのモンスターで代用できるのだ。」

エクスロード・マスターは召喚されたと同時にデッキに光の粒子を撒いた。そして、デッキの中から何枚かのカードが飛び出してきた。

「レベル1の『エクスロード・マスター』とデッキの『ダンディライオン』、『レベル・ステイラー』をチューニング！シンクロ召喚、『A・O・Jカタストル』！さらに、シンクロ素材にした『ダンディライオン』の効果で『綿毛トークン』2体を特殊召喚し、『調律の宝札』の効果で2枚ドロ。ターンエンド。」

「エンドフェイズに除外された『バーニング・フレア・ドラゴン』はわたしのフィールドに帰還する。」

次元の裂け目から巨大な火球が飛び出し、バーニング・フレア・ドラゴンが姿を現した。2回目のスタンバイフェイズに破壊される？ならばそれが破壊されることは無い。…お前達に2ターン後など存在しないからだ。

G o l f a

L P 8 0 0 0

手札×6

フィールド

A・O・Jカタストル ATK2200

綿毛トークン DEF0

綿毛トークン DEF0

調律の宝札

「俺のターン！俺はモンスターを1体伏せる。更にカードを2枚伏せてターンエンド！」

アシエルもゴルフアもバカだな…初手からそんなに展開しても意味ないんだから守りを固めるよ。

Dollia

LP8000

手札×3

フィールド

伏せモンスター×1

伏せカード×2

「わたしの…ターン！！」

このターンより攻撃が可能になる。その程度の布陣でわたしの攻撃をどこまで耐えることができるか見せてもらおう。

「わたしは『おろかな埋葬』を発動し、デッキから『レベル・ステイラー』を墓地へ送る。そして、『バーニング・フレア・ドラゴン』のレベルを1つダウンし、『レベル・ステイラー』を守備表示で特殊召喚する。」

背中に星が1つあるテントウムシが現れた。

バーニング・フレア・ドラゴン LV10 9

「そして『グローアップ・バルブ』のモンスター効果により、デッキの一番上のカードを墓地へ送り、このカードを特殊召喚する。レベル1の『レベル・ステイラー』とレベル1の『グローアップ・

バルブ』を素材にする。限界を超える力を覚醒させよ、シンクロチ  
ューナー『インフィニティ・ドラグーン』！」

インフィニティ・ドラグーン DEF200

自らの尻尾を銜えることができるほどに長い体を持つ竜が現れた。

「お前の『調律の宝札』の効果により、わたしはカードを2枚ドロ  
ーする。更に、『インフィニティ・ドラグーン』の効果により、1  
ターンに1度、自分フィールド上に存在するレベル8以上のシンク  
ロモンスターのレベルを1つ下げること、デッキからカードを1  
枚ドロースする。」

バーニング・フレア・ドラゴン LV9 8

「そして『金華猫』を召喚し、その効果で墓地の『グローアップ・  
バルブ』を特殊召喚する。レベル1の『金華猫』と『グローアップ・  
バルブ』をシンクロ素材とする。無限の境地へたどり着くための道  
を示せ！シンクロチューナー『ゼロ・ドラグーン』！『調律の宝札』  
と『ゼロ・ドラグーン』の効果により3枚ドロースする。」

∴ゼロ・ドラグーンはインフィニティ・ドラグーンが存在する時に  
シンクロ召喚できればカードを1枚ドロースできる。わたしの手札は  
10枚。完全に悪魔が発動した『調律の宝札』は裏目に出ていた。  
∴本来この2体のシンクロチューナーは『アルティメット・フレア・  
ドラゴン』を召喚するためのモンスターではないが、今回はフィー  
ルドに出ているのがアクセルシンクロモンスターのため∴ハイパー  
デルタ・アクセルで妥協するしかない。

スレイの脳裏に、そのカードの姿が浮かぶ。それは、究極神帝を超

えはしないが、2体の究極神の力を上回る。それは、シンクロモンスターに君臨する巨大な竜だ。しかし、一度も召喚したことが無い故に、スレイにもそれがどれほどの力を備えているのかわからない。シンクロ素材とステータスまでは分かっているものの、肝心の効果が全く書かれていないからだ。

『カオス・クリエイション・ドラグーン』

レベル16 神属性 ドラゴン族・アンリミットドオーバーシンク  
口ノ効果 ATK10000 DEF10000

『ゼロ・ドラグーン』 + 『インフィニティ・ドラグーン』 + デルタ  
アクセルシンクロモンスター1体またはリミットオーバーアクセル  
シンクロモンスター1体

以下の効果を1ターンの1度ずつ発動できる。

???

???

???

「その目で見届けるがいい、お前達への冥土の土産だ。レベル8となったアクセルシンクロモンスター『バーニング・フレア・ドラゴン』とレベル2のシンクロチューナー『ゼロ・ドラグーン』と『インフィニティ・ドラグーン』を素材にする。聖龍超えし力、果ての境地にて誕生せよ！紅蓮の炎と超新星、太陽のごとき力を手にする！ハイパーデルタ・アクセルシンクロ！無限の光『アルティメット・フレア・ドラゴン』！！」

アルティメット・フレア・ドラゴン ATK5000

『アルティメット・フレア・ドラゴン』

レベル12 炎属性 ドラゴン族・ハイパーデルタアクセルシンク

口ノ効果 ATK5000 DEF5000



シンクロモンスターのチューナー2体＋シンクロモンスターのチューナー1体とシンクロモンスターを素材としたチューナー以外のシンクロモンスター1体

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。1ターンに1度、自分のメインフェイズ1に発動することができる。このカードはこのターン、自分の手札の枚数分攻撃することができる。1ターンに1度、このカードをゲームから除外することができる。この効果はスペルスピード5として扱う。この効果によってこのカードを除外したターン、相手のカードの効果も1度だけ無効にし、破壊することができる。この効果によって除外したこのカードは、エンドフェイズ時に自分フィールド上に戻る。このカードが相手によってフィールドを離れた場合、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。このカードは相手のモンスター効果を受けない。

「『調律の宝札』の効果で更に2枚ドロ。『アルティメット・フレア・ドラゴン』の効果発動。このカードは自分の手札の枚数だけ攻撃できる。わたしの手札は12枚、よってこのターン、12回の攻撃が可能になる！」

「だ、だが『A・O・Jカタストル』は闇属性モンスター以外のモンスターをダメージ計算を行わずに破壊する能力がある！」

「無駄だ、『アルティメット・フレア・ドラゴン』は相手のモンスター効果を受けない。バトルだ！まずはドラの伏せモンスターを攻撃する！アルティメット・フレア・プロミネンス、第1打！」

巨大な炎の光線がドラに向かう。

「くっ…！トラップ発動、『魔法の筒』！攻撃を無効にしてその攻撃力分のダメージを与える！」

しかし、その炎は反射されてスレイにあたった。

「……！」

S l a y   L P 8 0 0 0   3 0 0 0

「4回目までの攻撃を全てドラを対象に放つ！アルティメット・フレア・プロミネンス！！」

2回目の攻撃が伏せモンスターを破壊し、残りの2回は直接攻撃となった。

「ギヤアアアアアアアア！！」

D o l l a   L P 8 0 0 0   - 2 0 0 0

「次に9回目までの攻撃をゴルフアを対象に放つ！」

綿毛トークン2体が粉碎され、カタストルも一瞬の内に炭になった。さらに、残りの二撃がダイレクトアタックとなってゴルフアを消し炭に変えた。

G o l f a   L P 8 0 0 0   5 2 0 0   - 4 8 0 0

「そして12回目までの攻撃を全てアシエルを対象に放つ。アルティメット・フレア・プロミネンス！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！??？」

A c e l l    L P 8 0 0 0    5 3 0 0    - 4 7 0 0

スレイの前にあるのは、炭の山だ。今の攻撃で紅蓮の業火に焼かれた悪魔はその姿を残さずに息絶えた。調律の宝札さえなければ、あと3ターン程度は耐えられただろう。

「……特に外には何もいなくなったか。あれだけ派手に暴れれば、小物なら逃げるか。」

……戻って少しだけ休ませてもらおう。こんなデッキ構築では、いざという時に要らないカードをドロウするだろうからな。

この先、スレイのデッキがクイダンとジャンドを合わせたようなデッキになるなど誰も予想しなかっただろう。

次回へ続く。

## 第7話 リマvs悪魔 神竜王ドラゲニルvsシンクロモンスター（後書き）

次回「バイオ ザード」……というのは冗談です。「デュエルズンビ襲来」

ウルズ「久しぶりね。駄作者が更新に間を開けすぎて、どんな展開にするか話を忘れたそうよ。」

スクルド「どうしようもないね。今日の最強カードはコレ！」

『アルティメット・フレア・ドラゴン』

レベル12 炎属性 ドラゴン族・ハイパーデルタアクセルシンクロ/効果 ATK5000 DEF5000

シンクロモンスターのチューナー2体+シンクロモンスターのチューナー1体とシンクロモンスターを素材としたチューナー以外のシンクロモンスター1体

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。1ターンに1度、自分のメインフェイズ1に発動することができる。このカードはこのターン、自分の手札の枚数分攻撃することができる。1ターンに1度、このカードをゲームから除外することができる。この効果はスペルスピード5として扱う。この効果によってこのカードを除外したターン、相手のカードの効果を1度だけ無効にし、破壊することができる。この効果によって除外したこのカードは、エンドフェイズ時に自分フィールド上に戻る。このカードが相手によってフィールドを離れた場合、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。このカードは相手のモンスター効果を受けない。

ヴェルザンディ「…これっていったいどうやって倒すのでしょうか

？除去カードを発動しても逃げられて、そのうえ自分のターンにも除外可能って……」

ウルズ「パワー押し」

スクルド&ヴェルザンディ「……………」

ウルズ「ところで、『Sin』シリーズの募集なんだけど、次回の投稿と同時に締切よ。結構集まったから何とかやっていけそうらしいわ。投稿してくれた皆様。ありがとうございました。」

スクルド「っていうか、今回の話のメインってリマ君じゃなかったの？」

## 第8話 デュエルゾンビ襲来(前書き)

今回は短いです。

なんということだ、裏の世界とこっちの世界じゃスレイが違い過ぎるじゃないか……。向こうは気楽にやっていきますが、こちらはもうじき鬱展開のどん底にする予定です。…今から気が重いか何事なんだ。

最近の出来事

フォーミュラの3枚目がほしい…。

## 第8話 デュエルゾンビ襲来

~~~~~デュエルアカデミア校舎・外~~~~~

「おい、そつちはどうだ？」

「いや、何も無いぜ？」

デュエルアカデミアの生徒の中でも、トップクラスの生徒が校舎の外の見張り役になる。いつモンスターが攻めてくるかわからないし、ある程度腕の立つものが見張りをしていれば抵抗もできるからだ。ちなみにこれを発案したのはオブライエンで、先程のスレイの戦闘を見て見張りを置くことにしたらしい。尚、十代達は潜水艦の中に薬を取りに行っている。

だが…

校舎内部にて

「今日はスープをゼリーにしてみたよ！」

購買部の2人は、残った食料で何とか食事を作る。ロキが仕入れた食材もあるが、それはデュエルアカデミアで仕入れた食料をす

べて使い切ってから使用するようだ。

しかし、さすがにスूपゼリー1個では生徒は腹を満たすことなどできず、いざこざが起こったりもする。

「……欲望のある人間というのは不便なものだな。」

いくら食べても、次の日には腹が減るのか。正直、食事をする必要のないわたしから見れば不思議なことだ。

「キツヒヤツヒヤ、まったくだね。でも、三大欲求全てが存在しないスレイも珍しいけどね。最低でも睡眠欲か食欲のどっちか1つくらいはあるはずなんだけどな……なんでないの？」

「……………」

ロキの質問を無視してスレイは体育館を出て行った。

「ちえ、無視かよ……。スクルド、なんでスレイには三大欲求が何も無いのさ?」

ロキが体育館に静かに座っていたスクルドを見つけて声をかけた。

~~~~~廊下~~~~~

「あんなのじゃ腹がいっぱいになるわけねえじゃねえか。」

生徒の1人が、体育館から出て、階段の途中で銀紙を破って隠し持っていたチョコレートを食べようとす。



「おい、一人で何食べようとしてんだよ！」

が、別の生徒に見つかってしまい、やはりというべきか喧嘩になる。

「ねえ、君たち、お腹が空いてるの？僕と食糧をかけてデュエルしないか？」

だが、そこにマルタンが現れた。：腕にはいくつものフランスパンを抱えて。そして、2人の生徒は思わず息を呑んでデュエルディスクを構えた。マルタンはそれを見て、不敵な笑みを浮かべて異形のデュエルディスクを展開した。

「『デュエル！』」

数ターン後…

「『うわああああああ！』」

Students LPO

2人の生徒は、なすすべもなく敗北した。マルタンは敗北した生徒2人に闇の瘴気を送り、どこかへ消えた。

そして……

「『ご飯なんかいらない…デュエルがあれば…！』」

「デュエル…デュエル…。」

その生徒2人は、まるでゾンビになったかのように立ち上がり、デュエルを求める。スレイ達神が介入した影響で、元の世界よりもデュエルアカデミアは高等部の上にもう1つ、大学部が付属となり、基本的に7年制となった。それにより、生徒の数は半端なものではなく多い。つまり、生徒がゾンビの餌食になるのは時間の問題だった。

2人のゾンビは、まずその場に歩いてきたスレイを標的にデュエルディスクを展開した。

「ついに……この時が来たか。…遅かったようだな。」

なんと、スレイは自らの固有ディスクとデュエルアカデミアの支給ディスクを破壊した。

そして、スレイは2人の生徒の前に静かに立つ。

「……………」  
「デュエル……………」  
S l a y   v s   Z o m b i e s

「先攻はわたしがもらう、ドロー。」

ゾンビ相手ならば、この次元に飛ばされた時に手に入ったデッキを使用しても勝利は可能だろう。

スレイの手にカードが5枚現れ、ドローした分…つまり1枚が追加で現れる。デュエルディスクを使用しなくなったため、手札とフィールド以外は漆黒の指輪にしているアーティスの内部に取り込まれている。

フィールドは、Z・ONEと同じような感じで直接カードからモンスターを呼び出し、魔法・罫は伏せればその場で消えるようだ。カードが石版サイズではないため、かなり動きやすい。

「わたしは『おろかな埋葬』を発動、その効果によりデッキから『レベル・ステイラー』を墓地へ送る。更に、カードを1枚伏せターンエンドだ。」

墓地に送られたカードが漆黒の指輪……つまりアーティスの中に格納された。伏せられたカードはそのまま空中で消える。

Slay

LP4000

手札×4

フィールド

伏せカード×1

「俺のターン……ドロー。俺は『ブラッド・ヴォルス』を召喚し、カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

ゾンビ生徒は口を開き、デュエルの時だけは普通にしゃべるようだ。それでも、普通の時に比べたら声はかなり低く、暗い。

「（デュエルに関してだけはしゃべることができるか……あまり苦勞しないで済みそうだ。）」

Zombie A

LP4000

手札×4

「俺のターン……俺は『デビルズ・サンクチュアリ』を発動、『メタルデビル・トークン』1体を特殊召喚する……。そして、『メタルデビル・トークン』を生贄に、『フロストザウルス』を召喚……ターンエ

ンド。」

Z o m b i e B

L P 4 0 0 0

手札×4

フィールド

フロストザウルス    A T K 2 6 0 0

「わたしのターン…わたしは、伏せカード『血の代償』を発動する。そして『ジェスター・コンフィ』を特殊召喚。このカードは手札から攻撃表示で特殊召喚することが可能だ。そして、『ジェスター・コンフィ』を生贄に『風帝ライザー』を召喚する。このモンスターの召喚に成功した場合、フィールド上のカード1枚を持主のデッキの一番上に戻すことができる。」

レベル・ステイラーを最初のターンに墓地へ送った理由は、帝の連続召喚をするためだ。

「……！」

「わたしが戻すのは『フロストザウルス』。ハイパーstorm！」

フロストザウルスは風帝の起こした嵐によって飛ばされてしまった。

「『風帝ライザー』のレベルを1つ下げ、『レベル・ステイラー』を特殊召喚する。」

風帝ライザー    L V 6    5

レベル・ステイラー    D E F O

「バトルだ、わたしは『風帝ライザー』で『ブラッド・ヴォルス』を攻撃する。ハリケーン・ブラスト！」

「…トラップ発動、『ヘイト・バスター』。」

「『ヘイト・バスター』だと!？」

あのトラップは悪魔族モンスターが攻撃対象になった時に、その悪魔族モンスターと相手の攻撃モンスター1体を破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを与えるカード…!!

突如互いのモンスターが爆発して破壊された。

「……………」

S l a y   L P 4 0 0 0   1 6 0 0

くっ…風帝の効果で戻すカードを間違えたか…だが、まだ立て直しは効く。

「……………ターンエンド。」

S l a y

L P 1 6 0 0

手札×3

フィールド

レベル・ステイラー   D E F F O

血の代償

「俺のターン…俺は『地割れ』発動。『異次元の女戦士』を召喚、

バトル。」

「（……ちつ、適当に打点の高いモンスターや効果の強いカードを詰め込んだトンドモデッキか。）」

こういった適当なデッキはシナジーこそまるでないが、単体が強力なため厄介なカードが多い。しかし…オベリスクブルーである以上トンドモデッキで居続けていいのか？

「『異次元の女戦士』でダイレクトアタック。ターンエンド。」

S l a y   L P 1 6 0 0   1 0 0

Z o m b i e A

L P 4 0 0 0

手札×3

フィールド

異次元の女戦士   A T K 1 5 0 0

「俺のターン…俺は『クリッター』を召喚、カードを1枚伏せてバトル。『クリッター』でダイレクトアタック…勝った。」

「そう簡単にわたしに勝てると思うなよ…相手のダイレクトアタック宣言時、『バトルフェーダー』を手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。」

バトルフェーダー   D E F F O

鐘の音が鳴り、クリッターはその攻撃を止める。あと100ポイント…もはや血の代償を使用するコストも残っていない…。

「ターンエンド。」

Zombie B

LP 4000

手札×3

フィールド

クリッター ATK1000

伏せカード×1

「わたしのターン。」

もう後はない。だが、このターンで決めるのも無理がある。仕方があるまい、もう1ターン耐えることはできる。どうにかするとしてよいか。

「わたしは『バトルフェーダー』を生贄に『邪帝ガイウス』を召喚！このモンスターの召喚に成功した時、フィールド上のカードを1枚除外する。わたしは『クリッター』を除外。」

サーチなどさせん。それが敗因につながる可能性があるならなおさらだ。だが、決してそれだけではない。ガイウスの効果を最大限に利用するためでもある。

「『邪帝ガイウス』の効果で除外したカードが闇属性モンスターだった場合、1000ポイントのダメージを与える。」

「ぐああ…」

Zombie B LP 4000 3000

「そして『邪帝ガイウス』で『異次元の女戦士』を攻撃。」

ガイウスはその手に闇の球体を作り出して放った。

「……『異次元の女戦士』の効果…ガイウスとこいつを除外する…」

「

Zombie A LP4000 3100

ガイウスと女戦士は、攻撃のぶつかり合いの最中に次元の彼方に除外された。

「カードを伏せターンエンド。」

Slay

LP100

手札×2

フィールド

血の代償

伏せカード×1

「俺のターン…『ニユート』召喚…」

「チツ、カウンタートラップ発動、『神の宣告』！ライフを半分払い、お前のモンスターの召喚を無効にして破壊する。」

Slay LP100 50

わたしのライフは元々100、すでに後はない。今更半分払ったと



ところで何も変わりはない。ゾンビ相手でもこの展開では多少厳しかったか。

「……ターン、エンド。」

Zombie A

LP3100

手札×3

フィールド

無

「俺のターン、ドロ……『キラー・トマト』召喚。攻撃……！」

「………手札より『バトルフェーダー』を特殊召喚する。」

これが本当に最後の一手だ。これを突破されれば敗北を免れることはできない。だが、奴らに透破抜きや威風堂々などの未来のカウンターラップはない。王宮の弾圧でもない限りバトルフェーダーを止めることはできない。

「ターンエンド。」

ゾンビは多少イラついたようにエンド宣言をした。

Zombie B

LP3000

手札×3

フィールド

キラー・トマト ATK1400

伏せカード×1

「……………ドロー！」

さすがはこの時代の禁止・制限リストか。

「わたしは『強欲な壺』の効果で2枚ドロー。そして魔法カード『二重召喚』発動、このターン、2回の召喚ができる。『バトルフェーダー』を生贄に『氷帝メビウス』召喚。その効果でお前の伏せカードを破壊する。」

ゾンビBの伏せカードが凍り付いて破壊された。…『聖なるバリア・ミラーフォース』か。フン、最後の最後で返り討ちにするつもりだったのだろうか無駄なことだ。

「さらにメビウスのレベルをダウンし、『レベル・スティーラー』を特殊召喚。そして、このスティーラーを生贄に『邪帝ガイウス』召喚、『キラー・トマト』を除外する。」

再び闇属性モンスターが除外されたことで、ゾンビBに1000ポイントのダメージが与えられる。

「ぐふうっ…」

Zombie B LP3000 2000

「そしてガイウスのレベルを下げ、『レベル・スティーラー』を特殊召喚する。バトルだ。まずは『邪帝ガイウス』でお前にとどめを刺させてもらおう、人間。」

「……………」

Zombie B LP2000 - 400

ゾンビは何の声も上げずに倒れた。

「さて…そろそろ終わりにさせてもらおう。『氷帝メビウス』と『レ  
ベル・ステイラー』でダイレクトアタック。」

「……………」

Zombie A LP3000 0

「……………」

スレイはすぐにその場を去る。なぜなら、既に倒した1人目のゾン  
ビが立ち上がるうとしていたからだ。早いところできるだけ多くの  
生徒に伝達するべく、体育館に向かう。

一方その頃…

「キツヒヤッヒヤッヒヤ、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』でダ  
イレクトアタック！アブソリュート・パワー・フォース！！」

「オオオオオオ……………」

Zombie LPO

「ロキ、ついに現れたようだな。」

「あ、ツール。……お前の方はどう？」

「我か？もう10人は倒したぞ。」

また一方で……

『シューティング・クエーサー・ドラゴン』で2回のダイレクトアタック。天地創造撃 ザクリエイションバースト。」

「……！」

Zombie LP - 4000

スレイは外の別ルートから校舎内に入る。モンスターが現実化するこの世界では、外だからシューティング・クエーサー・ドラゴンを使えるが、屋内ではまず使用できない。まず、それ以前にシューティング・クエーサー・ドラゴンでいくらゾンビ化しているとはいえ生身の人間にダイレクトアタックして大丈夫なのかも疑問なところだが。

「……………」

だが、そんな疑問の考えを途中で断ち切るかのように突然スレイの目の前に次元の裂け目が開いた。中から現れたのは、魔王軍最高幹部の中でも特に上位に位置する悪魔だった。外見は美青年そのものだが、不敵な笑みを浮かべて、周囲には不気味な雰囲気かまわりついている。

「貴様……何の用だ？」

「クッククッククツ…暗黒神より、伝言を預かって来ました。スレイ殿。」

「……………早いところその伝言とやらを言って、帰ってもらおうか。」

「こちらもそのつもりです。神と言葉を交わすことすら吐き気がする。……………では1度しか言いませんから、よく聞くように。』じき、5兆年の時が経過し、再び同じ歴史が繰り返される時が再び来る。神々の戦争の時は近い。』だそうです。では、わたしはもう帰らせたいいただきます。精々、暗黒神との決戦の前に死ぬことの無いよう。」

そう言って、悪魔は帰って行った。

「……………」

再び同じ歴史を繰り返す？そんなものはもう散々だ。わたしも最初はここまで絶望に打ちひしがれ闇に堕ちた存在ではなかったはず。永すぎる時がわたしを絶望に染め上げ、いつしか戦いという命の賭け事を好むようになってしまった…。希望を見つけても、それはすぐに絶望に変わる。

わたしの考えはここで断ち切られた。わたしの目の前には、どこから湧き出してきたのか大量のデュエルゾンビがいたからだ。

「……………いいだろう。」

ゾンビたちは数でデュエルを挑んでくる。負の感情だけが巡るわたしの力が同じ負の感情しか持たない者に劣るわけがない。

「デュエル！」

もうわたしを止めることなど誰にもできはしない。絶望の底に叩き落としてやる。

次回へ続く。

## 第8話 デュエルゾンビ襲来（後書き）

次回「絶望の先に」

ウルズ「久しぶりね。」

スクルド「そうだね。今日の最強カードはコレ」

「邪帝ガイウス」

レベル6 闇属性 悪魔族・効果 ATK2400 DEF1000

このカードが生贄召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを1枚除外する。この効果で除外したカードが闇属性モンスターカードだった場合、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える。

ヴェルザンディ「帝最強のスペックですわね。」

スクルド「変わったところだと、地帝グランマーグと一緒にデッキに入れて、ダークガイアの融合素材にもできるよ。」

ウルズ「相手のライフが1000以下なら、生贄召喚に成功したこのカードを除外して1000ダメージを与えれば勝利できるわ。」

ヴェルザンディ「あれ…珍しくあとがきが真面目に終わってる…。」

## 第9話 絶望の先に(前書き)

久しぶりに更新です。1か月以上も更新していなかったとは…しかも短めです。(6566文字)

超展開要注意!!

…やっぱりこっちはものすごく話が重いです…Another  
lay lifeのほつはこれに比べたらなんとという明るい作風…。



## 第9話 絶望の先に

~~~~~  
廊下  
~~~~~

「わたしは『バーニング・フレア・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

「!!!」

D u e l z o m b i e L P O

きりがない。…今は外で十代達が仮面の3騎士とかいうのと戦っているはずだ。今もゾンビはわたしに狙いを定めてデュエルディスクを展開する。まったくもってモンスターや魔法・罫にきりがないため、攻撃力が高く、耐性持ちのモンスターでなければ耐えられない。

「クッ…」

せめて究極神を使用することができれば話は別だが…。この世界でのモンスターの召喚は文字通り現実化する。攻撃で校舎が丸ごと破壊されてしまつては元も子もない。

「万事休すか…！わたしのターン。『バーニング・フレア・ドラゴン』、放て！」

バーニング・フレア・ドラゴンはスレイの指差した向き…壁に炎を放ち、大穴を開けた。

「仕方あるまい…戦略的撤退をさせてもらう。」

言っておくがどこが戦略的なんだとかそついったツツコミは受け付けんぞ。

「キツヒヤッヒヤッヒヤ。困ってるようだね。助けてあげようか？」

突然ロキが空間の裂け目から現れた。

「チツ…余計だ！」

壁の大穴から別の廊下に撤退する。早いところ十代にユベルを片付けてもらわなければ。

……力の浪費が激しい。少し回復する時間が欲しいな。

「スレイ、こちらは制圧完了だ。」

ツールが空間の裂け目から出てきた。苦戦しているのはわたしだけか。言い訳になるが、もう思考が所謂ネガティブ方向に向かっているから集中できんのだ。

「了解。」

無数の闇が、考えるたびに増える絶望がわたしの中を駆け巡ってゆく。だがまだだ。神々の真理を理解し、知ってしまった今、わたし自身がかなうことの無い願いを持っていたとしても、全てを失うとわかっていても退けない。

神は光と闇によって存在することができる。闇を消し去ると同時に、神という存在から外れたわたしと究極神以外の全てがわたしの周り

から消える。

わたしが何度もこの世界の歴史をループさせていたのは暗黒神に1歩力が及ばなかったからではない。倒すことができても、きつとその後の結末をわかっていたからだ。

深く考え込み、周りの声は耳に入らない。敵に囲まれても、気づけば敵は倒れている。

だが、1度決めたことを今変更する気にはなれない。全てを捨てても自分の未来を一目見てみたいと思ってしまったからだ。そして、その先にある『裏の世界』という場所に興味を持ってしまったから。

「キツヒヤツヒヤツヒヤ…。」

この時、ロキはスレイの思考を読んでいた。その結末をロキは理解する。だが、この気まぐれな神は決して自分をみすみす捨てるわけがない。

同時に助けるなら仲間も、とロキは思ったが、自らの神力では足りないことを理解し、自分だけでも助かるうとゆっくりと準備を始める。

神々の中で唯一、禁呪の知識を極めることに成功したロキは、自らを神から人間に格下げすることで消滅を回避する禁じられた魔法を創り始める。ちなみにこの魔法は自分以外の者にかけることができない。

「(ま、禁呪に指定された理由が神々の呪を回避するために人間になるなど外道って言う都合のいいものだから正直どうかとおもうんだけどね。オーディンやトール、ノルンの三姉妹やほかの神には悪いけど、僕は助からせてもらおうよ。僕が死んだら、たった1人残る

人間であるセレナに悪いしね。」

「ロキ…これからわたしが言うことをよく聞け。わたしはデュエルアカデミアがこの次元から元の次元に戻るエネルギーを利用し、お前達の中でまだ覚醒していない七聖龍を全て強引だが覚醒させる。お前にはそのエネルギー制御をせよ。もうすぐヨハン・アンデルセンはレインボー・ドラゴンを入手するためのデュエルを行うはずだ。そのヨハンのデュエルはわたしが代わりに行く。お前はヨハンをレインボー・ドラゴンが墜落する場所に連れて行け。」

「OK」

ロキは軽めに返事をする、早速剣で空間を切り裂いてどこかに行った。わたしはすぐにデュエルコートに向かい、その扉を開け、次元を超えるデュエル装置の準備を始めた。

そして、しばらくすると、わたしの予定通りにメンバーが集まる。ロキから事情を聞いていたのか、わたしがいることに驚く者は誰もいない。

準備を終えたモニターの向こうにはヘルカイザー亮。良くも悪くも深い因縁のある人間。わたしの作戦のために利用させてもらうぞ。

「あの時のデュエルの借りを返させてもらう。」

「……混沌の狭間に堕ちたわたしはお前にはすでに止められない。」

「デュエル!!!」

S l a y v s . H e l l K a i s e r

「先攻はわたしだ。わたしは『XX-セイバーボガーナイト』を召

喚。このモンスターの召喚に成功した時、わたしは手札から『X-セイバー』1体を特殊召喚する。来い、『X-X-セイバーフラムナイト』。更にわたしは『X-X-セイバーフォルトロール』を特殊召喚。そして、この3体のモンスターとわたしのライフ半分を生贄に捧げる。光臨せよ、『究極神オシリス』!!!」

究極神オシリス ATK4000

「1ターン目から神か。」

「わたしはカードを伏せてターン終了。」

Slay

LP2000

手札×1

フィールド

究極神オシリス ATK2000

伏せカード×1

「俺のターン。俺は魔法カード『パワー・ボンド』を発動。手札の3体の『サイバー・ドラゴン』を融合し現れる!『サイバー・エンド・ドラゴン』!!!」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK8000

「だが、その攻撃力は我が神オシリスの効果によって2000ポイントダウンする。サンダー・プレッシャー!」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK6000

それでも我が神を倒すだけの力はある。ヘルカイザー…人間ゆえの地獄の力か。わたしに人間を理解することは死んでもできなさそうだな。

「行け、『サイバー・エンド・ドラゴン』！エターナル・エヴォリユーション・バースト！」

サイバー・エンド・ドラゴンは宇宙に向けて光線を撃った。

「そう簡単に行くと思うな！トラップ発動、『次元幽閉』。相手の攻撃モンスター1体を除外する。」

「速攻魔法『融合解除』！『サイバー・エンド・ドラゴン』を融合デッキに戻し、3体の『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚！」

なるほど。

「だが『究極神オシリス』の効果は受けてもらう。サンダー・プレッシャー！」

これでヘルカイザーのフィールドには守備力0、攻撃力1000のサイバー・ドラゴンが3体。わたしは相手を完膚なきまでに叩き潰すのみ。たとえ命乞いをしようとする目的のためには手段を選ばない。…非情にならなければやりきれない。

サイバー・ドラゴン×3 DEF1600 0 ATK2100  
100

「ターンエンド。」

Hell Kaiser

LP4000

手札×1

フィールド

サイバー・ドラゴン DEF0

サイバー・ドラゴン DEF0

サイバー・ドラゴン DEF0

「わたしのターン。わたしは『究極神オシリス』で『サイバー・ドラゴン』を攻撃、アルティメット・サンダーフォース！」

「くっ…!!」

人間共、わたしに教えてくれ。お前達がこれほどの絶望から、どのようにして今まで這い上がってきたのかを。わたしが味わった絶望はわたしが進化を繰り返すことで消し去ってきた。しかも、その手で逃げることはできないのだ。わたしはこの絶望からどうのがれればいい？

「わたしはモンスターを伏せターンエンド。」

Slay

LP2000

手札×1

フィールド

究極神オシリス ATK2000

伏せモンスター×1

「俺のターン。『サイバー・フェニックス』を守備表示で召喚。ターンエンドだ。」

オシリスの雷でその守備力は0になる。

HeilKaiser

LP4000

手札×1

フィールド

サイバー・ドラゴン DEF0

サイバー・ドラゴン DEF0

サイバー・フェニックス DEF0

「わたしのターン。」

時間がない。決着を着けさせてもらおう。ロキが稼げる時間は少ない。神々の力は強大過ぎて、ユベルに感づかれかねない。

「わたしは『メタモルポット』を反転召喚。その効果で、互いに手札を全て捨て、5枚ドロ。」

……よし、今までの神の攻撃で、七聖龍を覚醒させるだけの力は溜まった。

「わたしは『XX-セイバーボガーナイト』2体目を召喚。この効果で、手札の『XX-セイバーダークソウル』を特殊召喚。そして、神以外の3体のモンスターとわたしのライフ半分を生贄に、2体目の神『究極神オベリスク』を特殊召喚!!」

究極神オシリス ATK8000

究極神オベリスク ATK8000



「2体の神で『サイバー・ドラゴン』2体を粉碎する！1枚伏せてターンエンド。墓地へ送られたダークソウルの効果で、デッキから『XX-サイバーエマーズブレイド』を手札に。」

Slay

LP1000

手札×4

フィールド

究極神オベリスク ATK8000

究極神オシリス ATK8000

伏せカード×1

「俺のターン。俺は『サイバネティック・フュージョン・サポート』を発動！ライフを半分払い、手札・デッキ・墓地から機械族の融合モンスターの素材を墓地へ送り、これらを融合素材にできる！『パワー・ボンド』発動！！来い、『サイバー・エンド・ドラゴン』！」

「だがオシリスの効果によって攻撃力守備力共に2000ポイントダウン！サンダー・プレッシャー！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK8000 6000

「甘い！速攻魔法『リミッター解除』。このカードは機械族モンスターの攻撃力を倍にする！！」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK6000 12000

「トラップ発動。『リビングデッドの呼び声』、墓地から『XX-サイバーフラムナイト』を攻撃表示で特殊召喚する。その効果によって、『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃を無効にする。」

「何!？」

「このターンのエンドフェイズ、ヘルカイザー。貴様は自身の発動した『パワー・ボンド』の効果によって4000ポイントのダメージを受ける。」

これでわたしは確実に勝利…。

「おい、次元デュエル装置がもう持たないぞ!！」

「何…うおおっ!？」

ここで次元デュエル装置が限界を迎え爆発し、ヘルカイザーとのデュエルは中断してしまった。だが……。

「な、なんだこの光は？」

辺りを強い光が包み、3方向に分かれる。それは七聖龍が覚醒するための最低条件を満たした者の場所に飛んでいく。やがてアカデミア中を強い光が包み、ウルズ、ヴェルザンデー、セレナの3人の前に白いカードが創り出され、七聖龍の姿が刻まれる。

向こうでは今頃、レインボー・ドラゴンをこちらに飛ばしたころだろう。ロキがヨハンを案内しているから心配はない。

「わたしの役目は終わった。少し休ませてもらうぞ。」

究極神を使用したことによる力の浪費が激しい。10分ほど神力を回復させなければ。

「キツヒヤツヒヤツヒヤ！！来たよ、『究極宝玉神レインボー・ドラゴン』！！！」

「こ、これがレインボー・ドラゴン……！！やったぜ！」

「喜ぶのは後にして、さっさと行くよ。もう十代とユベルはデュエルを始めているところだからね。」

ヨハンがカプセルからレインボー・ドラゴンを取り出して、その喜びを露にする。僕としては、さっさとデュエルを始めてほしいね。もうみんな予定通りのポジションに立ってるだろうから、暗黒神打倒の準備はできているんだ。

「おっ！」

待ってるよ、十代！

「……………始まったか。我らも行くぞ。」

トールの言うことにノルンの三姉妹とオーデインがうなずく。スレイとごく限られた神以外は暗黒神を倒した時に何が起きるのかわからない。そしてこの5人も何が起きるのかわからない。

そして、わたし達8人全員がデュエルアカデミアを中心として、等間隔で円形に立つ。更に自らの足元に神力変換魔法陣を展開する。これは神力以外の全てのエネルギーを神力に変換する魔法陣。

「三幻魔とレインボー・ドラゴンが召喚されたか。あと少しだな。」

残り65・35132765秒……。

「スレイ、全員準備OKだ!!」

ロキの声がかかる。残り30・89886742351秒……。  
レインボー・ドラゴンが効果を発動し、攻撃力を10000にあげた。

「来るぞ……!!」

残り5・4436782916秒……。

強い七色の光が辺りを包む。

0・3467829415秒……。

「……0!!」

デュエルアカデミアは元の次元に戻り、わたし達8人は通常の手段では絶対に行くことのできない暗黒世界に飛ぶ。

わたしの未来はすぐそこだ、暗黒神。今度こそ貴様を葬り去って、その先の未来を掴んで見せよう。

~~~~~  
暗黒世界    ~~~~~

わたし達8人は、海岸のようなところに飛ばされていた。海は黒く、黒い木は葉がついておらず枯れている。空は闇に包まれ、暗黒世界

の名に相応しい光無き漆黒の世界だ。はるか前方に見えるのはここからでも十分すぎるほど見える巨大な城。

「あれが暗黒城……」

オーデインたちは驚愕の表情を浮かべる。

「暗黒城の門をこじ開けるためには七聖龍の力が必要だ。お前達、頼むぞ。」

暗黒世界に光の世界から入り込み帰還したという前例はない。それは、暗黒世界に入ることではできてもそこから出る手段は悪魔しか持っていないからだ。但し、この世界は暗黒神が創り出した世界。だからその神たる存在が消滅すれば、自動的に光の世界に戻る。

「……もう引き返すことはできない。行くぞ。」

~~~~~  
暗黒城城門    ~~~~~

ついにここまで来た。暗黒城には暗黒神1人しか住んでいないという話を聞いたことがあったが、どうやら本当らしいな。

「お前達、七聖龍を解放しろ。」

スレイ以外の7人は、自らの七聖龍を解放する。オーデインは『エクスプロージョン・デス・ドラゴン』、トールは『ダークネス・ウイング・ドラゴン』、ロキは『クリムゾン・スーパードラゴン・ドラゴン』、スクルドは『エターナル・ローズ・ドラゴン』、ヴェルザ

ンデーはエンシエント・フェアリー・ドラゴンが基になっている  
『エンシエント・ロード・ドラゴン』、ウルズはブラック・ブルド  
ラゴが基になっている『ブラックストリーム・ドラゴン』、セレナ  
はスターダスト・ドラゴンが基になっている『アルティメット・フ  
レアスター・ドラゴン』。

巨大な7体の竜は、城門にプレス攻撃を放ち、闇の結界を破壊して  
門を開けた。階段を上り、最上階に向かう。

「……待っていたぞ、スレイアルアス。」

重く、暗い声が響く。

「5兆年の時を経て、再び我々の世界をリセットしに来たか。」

「冗談を！！わたしは貴様を葬り、その先にある未来を掴みに来た  
！！！」

闇が集まり、暗黒神の姿が人型に変わる。その姿は全身を真黒な服  
に包み、危険な笑みを浮かべた神。

「ほつ……。」

暗黒神は指をパチンと鳴らす。すると、城が歪み、その場にいた全  
員が闇と光の狭間の世界に飛ばされた。飛ばされた次の瞬間には、  
七聖龍の力がわたしの前に収束している。これはおそらく、暗黒神  
の強大過ぎる攻撃を防ぐための障壁だろう。

「ならばデュエルだ、5兆年の時を賭けた戦いを行う。」

「望むところ!!」

スレイの手に5枚のカードが現れた。

「デュエル!」

Slay vs. Darkness god (Normal Mode)

「先攻は我がもらう。我はフィールド魔法『暗黒世界』を発動。」

『暗黒世界』

フィールド魔法

このカードは相手のカード効果ではフィールド上を離れず、効果を無効にされない。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いにフィールド魔法カードを発動する事はできない。『暗黒魔神』と名のついたモンスターの攻撃力・守備力になる。

「我は『暗黒破壊者』を召喚。」

暗黒破壊者 ATK2100

「『暗黒破壊者』は手札を1枚捨てることで攻撃する事ができる。ターンエンド。汝のターンだ、スレイ。」

Darkness god (Normal Mode)

LP4000

手札×4

フィールド

暗黒破壊者 ATK2100

暗黒世界

「わたしのターン！！わたしは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚。そして魔法カード『機皇召集』を発動する。この効果により、デッキから『機皇神マシニクル？』を特殊召喚！さらに速攻魔法『リミッター解除』！！」

機皇兵ワイゼル・アイン    ATK1800    3600  
機皇神マシニクル    ?    ATK4000    8000

「何…！！」

「バトルだ！『機皇神マシニクル？』で『暗黒破壊者』を攻撃！  
！ザ・キューブ・オブ・デイスペア！！」

「ぬおおおおおおおおおおおおおお！！」

Darkness    god    (Normal Mode)    LP4  
000    -2900

「た、倒した…？」

トールが驚きの声を上げる。ここまで簡単にいくとは思っていなかったのだらう。

いや……実際にここまでうまくはいかないが。

「クッククック…どうやら我は汝の力を見くびっていたようだ。では見せてやろう、我が力を！！」

黒い稲妻が辺りに迸り、深き闇が竜の姿を創り出した。その闇の竜は、自分の目の前にカードを5枚浮かせた。スレイはそれよりも前



に、とつくと別のデッキと手札を用意していた。

「貴様をそう簡単に倒せるはずがないからな。」

「クツクツクツ…」

「デュエル!!」

Slay vs. Darkness god (Eternal  
Mode)

絶対にこいつを倒し、わたしは未来を手に入れる!!

次回へ続く。

## 第9話 絶望の先に（後書き）

次回「最終決戦 暗黒神究極形態」

ウルズ「久しぶりに更新してきたわね…遅過ぎよ。」

スクルド「まあ、頑張つて両立すればいいんじゃない？今回の最強カードはコレ」

『究極神オベリスク』

レベル12 神属性 究極神族 攻撃力8000 守備力8000  
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体とライフ半分を生贄に捧げた場合に特殊召喚できる。このカードは罠・効果モンスターの効果・コストを受けず、魔法の効果・コストを1ターンのみ有効とする。このカードが戦闘を行う場合相手はダメージステップ時にカードの効果を発動できず、自分への戦闘ダメージは0になる。このカードが戦闘以外の方法で自分フィールド上を離れた場合エンドフェイズにライフを半分払い、このカードを自分フィールド上に戻す。自分または相手のターンにこのカード以外のモンスター2体を生贄に捧げること、このターンこのカードは相手モンスター全てに攻撃することができる。このカードがフィールド上に存在する限り自分フィールド上に存在するレベル1以下のモンスターは攻撃できない。このカードの特殊召喚と効果は無効化されない。

ヴェルザンディ「究極神ですわね。まあ、これが登場してきたら最強カードはほとんどこれになるんでしょうけど…」

ウルズ「いよいよ『暗黒神打倒編』もクライマックスよ。ここまで来たら、暗黒神を倒した時に何が起こるのかわかる人が殆どだと思うわ。」

スクルド「というか、こっちの小説いくらなんでも暗すぎでしょ……」

## 第10話 最終決戦（前書き）

どうも。何とか更新できました。

前書きで書くことは特にはないですね。文章を理屈で考えていただくよりも直感で読んでいただいた方がわかりやすいかと。

### 最近の出来事

リチュア、機皇、スキドレバルバ。どれもわたしが遊戯王を初めてからであった素晴らしいデッキ。しかし、リチュアからはフィツシユボーグ・ガンナーを奪われ、機皇からは貪欲な壺を奪われ、スキドレバルバはサイクロンと大嵐の地獄絵図に巻き込まれる。許さない、わたしは今回の制限改定を許さない。

## 第10話 最終決戦

辺りを闇が包む。その闇にスレイと暗黒神だけが取り残され、残りのメンバー全員が元の次元：暗黒神の城に戻る。

「貴様：。」

「これでここに残ったのは我ら2人。邪魔をする者、助力する者は誰もいない。」

静寂が辺りを支配し、スレイの静かな怒りと暗黒神の闘気がぶつかる。

「我の先攻。」

「……。」

静寂の中、暗黒神はカードをドロウする。竜の姿をした暗黒神の力は、前形態の比ではない。

「我はフィールド魔法『時空の狭間』を発動する。」

発動したフィールド魔法によって風景が変わるはずが、ここでは変わらない。それはこの世界がその時空の狭間であることの証。果てしない恐怖と重圧がスレイを襲う。しかし覚悟を決めたスレイにはそれはもはや恐怖や重圧とは言えなかった。

「我は『ダーク・バルブ』を攻撃表示で特殊召喚する。」

暗黒の種が出現し、その花を咲かせる。

「このモンスターの特殊召喚に成功した時、汝は1枚ドロ。その種類によって効果を決定する。」

「……。」

スレイはただ沈黙。その手にはカードが1枚現れた。ドロしたカードをスレイは暗黒神に公開する。

「魔法カードの場合、我はこのターン、モンスター1体を生け贄無しで召喚する事が可能になる。但し、この効果によって生け贄無しでモンスターを召喚した場合、汝は手札からモンスター1体を任意の表示形式で召喚する事が可能。」

暗黒神の手札の1枚が黒く輝く。

「我は『インフィニティ・ダークネス』を召喚。」

召喚されたのはレベル8のモンスターだ。

「ならばわたしは手札から『罪の指導者』を守備表示で召喚する。このモンスターが召喚に成功した時、デッキから永續魔法を1枚発動できる。『Sin Sanctuary』を発動する。」

罪の指導者 DEF1000

『Sin Sanctuary』

## 永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、このカードのカード名を『Sin World』として扱う。『Sin』と名のつくモンスターはこのカードがフィールド上に存在する限り自身の効果によって破壊されない。このカードは自分フィールド上にモンスターが存在する場合、相手のカード効果を受けない。また、『Sin』と名のついたモンスターの「フィールド上に1体しか表側表示で存在できず、このカード以外のモンスターは攻撃宣言できない」効果は無効になる。

「『Sin』…?」

「そうだ…このデッキは彼らがここから飛ばされる寸前にわたしに預けたデッキ。」

デッキだけでもわたしと共に戦うという意味の表れ。

「絆と言う物か。面白い、神々や人間が大切にされるそれがどれほどの力を持つのか見せてもらう。我は『インフィニティ・ダークネス』の効果発動。1ターンに1度、デッキからカードを1枚ドロージ、汝に800ポイントのダメージを与える。」

黒い稲妻がスレイを襲った。

「……。」

S l a y L P 8 0 0 0 7 2 0 0

「ターンエンド。」

Darkness god (Eternal Mode)  
LP8000

手札：4

フィールド

インフィニティ・ダークネス ATK2700

ダーク・バルブ ATK200

時空の狭間

「ドロー。わたしはエクストラデッキから『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を墓地へ送り、『シンレッド・デーモンズ・ドラゴン』を特殊召喚する。」

頭部と翼に禍々しい鎧を装備した悪魔竜が出現した。

『シンレッド・デーモンズ・ドラゴン』  
レベル8 闇属性 ドラゴン族/効果 ATK3000/DEF2000

このカードは通常召喚できない。エクストラデッキから『レッド・デーモンズ・ドラゴン』1体を除外した場合のみ特殊召喚することができる。このカードが攻撃したダメージステップ終了時に表示形式を宣言する。このカードを除く、フィールド上に存在する選択した表示形式のモンスターをすべて破壊する。フィールド魔法が表側表示で存在しない場合、このカードは攻撃できず、効果が無効になり、自分は魔法カードを発動することができない。

「魔法カード『シンLost』、シンレッド・デーモンズを墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドローする。」

「何…。」



「そして、墓地の『Sinレッド・デーモンズ・ドラゴン』エクストラデッキの『スカレット・ノヴァ・ドラゴン』を除外し、『Sinスカレット・ノヴァ・ドラゴン』を特殊召喚。『Sinスカレット・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃力はこのカードを含む自分フィールド上と墓地の『Sin』モンスター1体につき500ポイントアップする。」

Sinスカレット・ノヴァ・ドラゴン ATK3500 4000

「行け『Sinスカレット・ノヴァ・ドラゴン』！『ダーク・バルブ』を粉碎せよ、バーニング・ソウル！」

全身に炎を纏い、赤き超新星の竜が闇の花に突進する。

「クックククツ…汝の甘さには反吐が出る。手札よりトランプ発動。『死神のダークデスサイズ』。これは『時空の狭間』がある時のみ手札より発動可能。攻撃対象となったモンスター1体を破壊し、相手モンスター1体を除外。その攻撃力の合計分、我がライフを回復し、その半分をダメージとして相手に与える。」

「ッ!!！」

Darkness god (Eternal Mode) LP

8000 12100

Slay LP7200 5100

初めてスレイがダメージに反応した。存在しない感覚を通りこして、直接コアにダメージが行ったらしい。

「まだわたしのバトルフェイズは終わっていない…速攻魔法『ロス

ト・フォース』。除外された『Sin スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』を復活する。『Sin スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』、『インフィニティ・ダークネス』を攻撃！」

「……。」

暗黒神は一切の反応を見せない。おそらく、リアルダメージは全く通用していないと言っていいレベルだろう。

Darkness god (Eternal Mode) LP  
12100 10800

「世界がかかっているというのに随分とぬるい攻撃だな、スレイ。汝は本気で我を倒そうとしているのか？」

「好きにほざけ！カードを1枚伏せターンエンド。」

Slay

LP5100

手札：2

フィールド

Sin スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK4000

罪の指導者 DEF1000

Sin Sanctuary

伏せカードx1

「我がターン。」

闇が蠢く。

「我はチューナーモンスター『ダークネス・ゲイナー』を召喚する。

「周りの闇を吸収する事で力を得るモンスターが出現した。姿は形容できない。」

「その効果によって、墓地からレベル7以上のモンスター1体を復活。」

闇が唸り、そこから先程のインフィニティ・ダークネスが出現した。

「レベル8『インフィニティ・ダークネス』にレベル1『ダークネス・ゲイナー』をチューニング。無限の闇が時空を包む。時空を我が手に、シンクロ召喚。出でよ、『ダークネス・アブソリューター』。」

巨大なキメラのような化け物が出現した。2つの翼からは、目に見えるほど濃い闇の瘴気とエネルギーを発しており、それが流れるだけで、もしも周りに自然があればすぐに腐って行きそうだ。

ダークネス・アブソリューター ATK3600

「『ダークネス・アブソリューター』はシンクロ召喚に成功した時、汝のフィールド上に存在するモンスターの効果をすべて無効化する。」

「何！」

Sin スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK4000 3500

「『ダークネス・アブソリューター』で『Sinnsカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃。ダークネスドレイン。」

巨大な化け物はSinnsカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを八つ裂きにして喰らいつくした。

S l a y   L P 5 1 0 0   5 0 0 0

「『ダークネス・アブソリューター』効果発動。800ライフ払う事で、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを汝に与え、相手モンスター1体を破壊する。アブソリュート・ブレイク。」

D a r k n e s s   g o d   ( E t e r n a l   M o d e )   L P  
1 0 8 0 0   1 0 0 0 0

巨大な闇の槍がスレイの腹と罪の指導者を貫いた。

「が……………はっ……………あぁっ……………!!」

S l a y   L P 5 0 0 0   1 5 0 0

「お…のれ…。」

D a r k n e s s   g o d   ( E t e r n a l   M o d e )  
L P 1 0 0 0 0

手札：3

フィールド

ダークネス・アブソリューター   A T K 3 6 0 0

時空の狭間

「まだ立つか。汝の体力にはあきれる。」

「当然…だ。この戦いには、わたしの…世界が、次元が懸かっているのだ…。」

「では問おう。この時空は汝にとってそれほど大切なものか？人間という存在はそれほど大切なものか…？汝を信じず、裏切った人間は数え切れぬほど存在していたはず。それを汝はまだ救おうというのか？」

暗黒神は精神に揺さぶりをかけようとしているわけではない。ただ単純な疑問を口にしていただけだ。暗黒神には理解不可能、いや、殆どの神にだつて理解はできないだろう。圧倒的に自らをだました人間の方が多いのに、まだ少数の穢れ無き人間を信じるスレイの姿は。

「……………」

「汝はこの5兆年の時を何度も繰り返してきたはず。人間の暗黒の心を直に感じてきたはずだ。汝の心はすでにその暗黒を受け、人間の暗黒の心以上に黒い。ただ一点に灯る光を追ってなんになる？」

「……………」

スレイの頭の中には、穢れ無き心を持つ数々の人間の姿が思い出される。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて。遊城十代、武藤遊戯、不動遊星、その仲間たち。その他数多の人間の姿。反面、自らをだましてきた人間の姿も思い浮かぶ。ある者は金を騙し取り、またある者はスレイを利用して復讐を成し遂げた。暗黒神の言う通り、穢れた心を持つ人間の方が圧倒的に多い。

「わたしはお前を倒した後、このわたしの世界から消えるだろう。わたしはわたしの世界だけではなく、あらゆる世界を回る目的ができた。」

「ほう…：汝と究極神が創り上げたこの世界以外の世界を旅しようというのか。それが汝の未来か。」

「……………」

スレイは答えない。自分でも、それがまだ自分の未来なのかわかっていないから。暗黒神を倒した後、裏の世界に行くつもりでも、果たしてこの世界から離れることができようか。

「汝はこの時空を我が手より守るといふ使命を全うするためにここまで生きてきたのか？」

「……………」

「そうではないだろう、我は汝の心がわかる。汝が表ならば我は裏、表の心読めずして裏は成り立たん。」

「だが、それでも……………」

「？」

「それでもわたしは、止まったわたし自身の時を進めるために1歩を踏み出すしかない！！貴様にその何がわかる、いや、わかってたまるものか！わたしのターンッ！！」

………！

「わたしは『スターダスト・ドラゴン』をエクストラデッキから墓地へ送り、『Sinスターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する！」

「『ダークネス・アブソリュター』の効果発動。1ターンに1度、相手が召喚・特殊召喚したモンスターを墓地へ送る。」

キメラは蛇の姿をした尻尾から闇のエネルギーを吐き出した。それがSinスターダスト・ドラゴンを飲み込んだ。

「まだだ、『Sin Selector』発動。墓地の『Sinスカレット・ノヴァ・ドラゴン』、『Sinスターダスト・ドラゴン』を除外し、『Sinスクラップ・ドラゴン』、『Sinギガンテック・ファイター』を手札に加える。更に魔法カード『咎の宝札』！除外された『Sinスカレット・ノヴァ・ドラゴン』、『Sinレッド・デーモンズ・ドラゴン』をデッキに戻し、『Sinスクラップ・ドラゴン』をデッキに戻す。」

「何…手札3枚の状況からここまで手札を増やすとは…。汝の闘気はまだ衰えていないということか。」

「エクストラデッキから『スクラップ・ドラゴン』、『ギガンテック・ファイター』、『デッキから』、『エビル・ナイト・ドラゴン』を除外し、それぞれのSinモンスターを特殊召喚！」

Sinギガンテック・ファイター ATK2800

Sinスクラップ・ドラゴン ATK2800

Sinエビル・ナイト・ドラゴン ATK2350

「だが、それでは我が『ダークネス・アブソリユーター』を破壊する事はできぬ。『ダークネス・アブソリユーター』はカード効果では破壊できない故、『Sinスクラップ・ドラゴン』、たとえ攻撃力を強化して『Sinエビル・ナイト・ドラゴン』の効果を使用しても無駄な話だ。」

「それはどうかな?」

「ん…?」

「トラップ発動、『Sin Hyper Storm』! ライフを半分払いこのターン、自分フィールドの『Sin』モンスター2体の攻撃力を1体に束ねる。『Sinエビル・ナイト・ドラゴン』、『Sinスクラップ・ドラゴン』の攻撃力を、『Sinギガンテック・ファイター』に加える! ただしこのターン、『Sinエビル・ナイト・ドラゴン』、『Sinスクラップ・ドラゴン』は攻撃できない。」

S l a y   L P 1 5 0 0   7 5 0  
S i n g i g a n t e c k ・ f a i t a r   A T K 2 8 0 0   5 6 0 0   7  
9 5 0

「バトル! 『Sinギガンテック・ファイター』、『ダークネス・アブソリユーター』を粉碎せよ!」

ダークネス・アブソリユーターの頭を思い切り叩き潰し、巨大なキメラは地に沈む。だが、倒れたキメラから闇のエネルギーが放出されSinギガンテック・ファイターを包み破壊した。

D a r k n e s s   g o d   ( E t e r n a l   M o d e )   L P  
1 0 0 0 0   5 6 5 0



「『ダークネス・アブソリューター』は破壊された場合、攻撃してきたモンスター1体を破壊する。汝がいかに努力しようとも無駄な事。」

「それは計算済みだ。『シングガンテック・ファイター』効果発動！破壊され墓地へ送られた場合、墓地の『Sin』モンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。蘇れ『シングガンテック・ファイター』！」

「何：。」

「バトルフェイズ中の蘇生により、まだ攻撃はできる。『シングガンテック・ファイター』でダイレクトアタック！」

「ぬうううううう！」

Darkness god (Eternal Mode) LP  
5650 2850

「更に、墓地の『Sin Lost』の効果発動。墓地のこのカードを除外する事で、手札を1枚捨て自分フィールド上の『Sin』モンスターを1体墓地へ送り、今攻撃した『Sin』モンスターの2度目の攻撃を可能にする。『Sinスクラップ・ドラゴン』を墓地へ送り、『シングガンテック・ファイター』は2度目の攻撃が可能となる！」

「だが汝のその攻撃を受けても我がライフは50残る。50あれば汝を次のターンで永遠の狭間に封印する事など容易い。」

「50残ればな…！」

スレイは口の片方を釣り上げて不敵に笑う。

「どついうことだ…：汝の手札は0、攻撃力を上げるカードなど無いはず…。」

闇の竜の姿をした暗黒神は初めて動揺を見せる。

「『S i n g i ガンテック・ファイター』は墓地の『S i n』モンスター1体につき攻撃力を100アップする効果がある！」

S i n g i ガンテック・ファイター     A T K 2 8 0 0     2 9 0 0

「なんだと…！？」

「終わりだ！『S i n g i ガンテック・ファイター』でダイレクトアタック！」

再度巨大な拳が暗黒神に重い一撃を食らわした。

「グオオオオオオオオオオオオオ！」

D a r k n e s s     g o d     ( E t e r n a l     M o d e )     L P  
2 8 5 0     -     5 0

暗黒神：闇は霧散し、辺りが見えるようになる。銀河が広がっているような光景だ。しかし、その美しさとは裏腹に殺風景で、風や大気などは一切存在しない。

「……これで終わったか。これでこの世界に残される神々はわたし一人……！？」

スレイは今度こそ終わったと思った。しかし、三度闇の霧が吹き出し、辺りに重い声が響く。

「汝、その程度で我を倒したと思ったのか？」

「バカな……」

スレイは驚愕する。なぜなら自分の目の前にいる暗黒神の姿は自分そのものだったからだ。ただただ黒い自分そのものであり、それ以外は何もかも同じ。しかし、その姿はすぐに周り……いや、時空全ての闇と混ざり合い、見えなくなった。

「我が究極の姿にて汝を葬らん……。これこそが世界の心理、影は光無ければ生まれん。だが、光が存在しない世界などありはしない。故に影の……闇の力もまた無限。」

その闇から暗黒神の声が聞こえる。今現在、時空中の闇が暗黒神と同化している。

「まだ余力があるというのか……」

スレイの精神状態はもはや限界が近い。

「最後の戦いだ。汝の世界が時空の狭間に消えるか、我が世界が時空の狭間に消えるか。」

「……最終決戦……か。いいだろう！」

「デュエル」  
Slay vs. Darkness god (Ultimate  
Mode)

「我が先攻。フィールド魔法『暗黒神の時空』発動。我がフィールドでは、我がライフは尽きることはない。更に我が世界は神の力以外によってフィールドを離れず効果を無効化されない。」

「何!？」

Darkness god (Ultimate Mode) L  
P8000 1000000

『暗黒神の時空』  
フィールド魔法

このカードが表側表示で存在する限り、フィールド魔法カードを発動する事はできない。このカードは神属性モンスター以外のカード効果によつてはフィールドを離れず、効果を無効化されない。このカードの発動時に自分のライフポイントを1000000にする。このカードが表側表示で存在する限り、コントローラーのライフポイントはエンドフェイズ毎に20000ポイント回復する。また、コントローラーはカード効果によって敗北しない。また、コントローラーの手札制限はなくなる。

これは暗黒神の全力。光ある限り闇もまた不滅、しかし光の無い世界は無い。だから闇が滅ぶこともない。しかし、闇はいずれ光を飲み込む。

「ターンエンド。」

Darkness god (Ultimate Mode)

LP1020000

手札：5

フィールド

暗黒神の時空

「わたしのターン…。」

ライフポイント1020000…これを削りきるには究極神帝ラーの効果を発動するしかない…。

「わたしはフィールドにモンスターがいないことで『シンクロン・サポーター』を特殊召喚する。」

チューニング・サポーターを反転した色のようなモンスターが出現した。

「更に、手札のこのモンスターはモンスターの特殊召喚に成功した時、特殊召喚する事ができる！現れる、『エターナル・リバーサー』！レベル7の『シンクロン・サポーター』にレベル1『エターナル・リバーサー』をチューニング。シンクロ召喚、『フレームドラグーン』。」

フレームドラグーンの効果でデッキから2枚ドロースる。シンクロ素材の数だけドロースできる効果だ。

「素材のコストを容易に取り戻すシンクロモンスターか。だがその程度の攻撃力では100回攻撃しようとも我がライフを削りきることはできん。」

「承知！『エターナル・リバーサー』効果発動。シンクロ素材として墓地へ送られた時、このカードを特殊召喚できる。ただし、この効果で特殊召喚したこのカードはチューナーとして扱わない。更に手札を1枚墓地へ送り、『ワン・フォー・ワン』！デッキより『グロリアップ・バルブ』を特殊召喚する。」

まずはデルタアクセルシンクロで攻める！

「『エターナル・リバーサー』に『グロリアップ・バルブ』をチューニング。シンクロ召喚、『ブラストキューブ』！」

立方体の中で無数の爆発が起きている謎のモンスターが出現した。

「このカードのシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上のシンクロモンスター1体につき1枚、最大2枚までドローできる。」

「再び汝の『エターナル・リバーサー』は蘇る…か。」

暗黒神は余裕を見せる。スレイの顔にはすでに疲れと焦りが浮かんでおり、早くしなければ拙い状況だ。先程のダークネス・アブソリユーターの一撃はかなり響いている。

「そうだ。そしてデッキの一番上のカードを墓地へ送り、『グロリアップ・バルブ』を特殊召喚する。このレベル1の2体で再びシンクロ召喚。シンクロチューナー『ブラストキューブ』！」

立方体から爆発の光線が放出されているモンスターが出現した。

「『ブラストキューブ』のシンクロ召喚に成功した時、デッキから

カードを1枚ドロロー！そして『フレイムドラグーン』『ブラストキ  
ューブ』に『バーストキューブ』をチューニング！尽きることなき  
炎、絶えず放ち、極炎の竜を召喚せよ！デルタアクセルシンクロ！  
！『カオスブレイズ・ドラゴン』！」

カオスブレイズ・ドラゴン ATK4500

「手札よりトラップ発動、『次元断層』。相手がシンクロ召喚を行  
った時、このターン我が受けるダメージを半分にする。更に次のタ  
ーンで我はモンスターを生け贄無しで召喚できる。」

「時空世界で次元断層とはシャレた真似を…。」

スレイは余裕そうなことを言っているが、だんだんと余裕はなくな  
ってきている。暗黒神の黒すぎる精神に影響を受けつつあるのだ。

「『カオスブレイズ・ドラゴン』の効果発動！このカードは手札の  
枚数分攻撃回数を増加する！よってこのターン、8回の攻撃が可能  
バトル！」

「ほう…。」

「カオスブレイズ・ブラスター！！！」

Darkness god (Ultimate Mode) L  
P1020000 1000200

「我が受けるダメージは半分となる。」

「おのれ…カードを2枚伏せターンエンド。」

今回はかりはだめかもしれない。いや、最初からあきらめていては勝てんか。わたしが今まで出会った人間の極僅かな穢れ無き人間は、誰もが窮地に陥ってもあきらめなかった。人間をも創り出した我が諦めてどうする…。

Slay

LP8000

手札：5

フィールド

カオスブレイズ・ドラゴン ATK4500

エターナル・リバーサー DEF0

伏せカード×2

「我がターン。我は『次元断層』の効果でモンスター1体を生け贄無しで召喚する。現れよ『暗黒帝ヴァラン』。」

暗黒帝ヴァラン ATK10500

『暗黒帝ヴァラン』

レベル10 闇属性 悪魔族・効果 ATK10500 DEF0

このカードは特殊召喚できない。このカードがフィールド上を離れた時、デッキから『暗黒神皇フレスヴェルグ』1体を攻撃表示で特殊召喚する。

「攻撃力10500…。」

「汝に問おう、まだ人間を信じるか？」

「……………」



「我は人間共、いや、あらゆる生命体の負の感情によって生まれた暗黒の神。だからこそ我にはわかる、この時空には穢れ無き人間など0・1%も存在しないことが。だから我にはわからぬ、汝がなぜそのたつた0・1%を信じるのか。だがこの絶望を目の前にすれば汝も気が変わるだろう?」

暗黒神の負の感情はそう、神をも含めた生命体によって完成した。その存在はやはり生命体の持つ闇だ。生きている限り、感情ある限り決して正の感情のみで生きていくことなどできない。この時空世界には数え切れないほどの生命体がいる。暗黒神は、その時空の壁を超えて集った負の感情によって生まれた存在。闇の力ならばスレイすら軽く上回る。

「やめろ…。」

「汝が眠ればすべては終わる。永遠の眠りにつけば世界などもうどうでもよいではないか?」

「やめろ。」

「汝が未来を求めたところで、行き着いたところで何も変わらん。どこの世界にせよ負の感情を持った生命体は存在する。我と同質の存在が必ずある。汝1人では、それだけではない。神々全ての努力をもってしても無駄な事だ。」

「やめろ!!!」

スレイは強く言い切った。

「む!？」

「確かに人間の負の感情はわたしの力をも超えるだろう。未来に行きつこうとも負の感情を持つ生命体は存在するだろう。だが!それを知っていたとしてもわたしは、この先にある『何か』をこの目で見るためにここに来た!」

「それがどうした?それを見たところで絶望しか残らぬ。我は常に汝の先を行っている。」

「だが貴様はその絶望に敗北したではないか!」

「!?!」

「わたしは違う。今まで幾度となく絶望を味わってきた。だが、わたしは孤独でもそれを振り切るだけの力が、心があったのだ!」

「しかし今の汝は偽の心しか持たぬ。汝本来の感情はすでに消え去っているぞ。」

「そんなことは百も承知!そこまでしてわたしを暗黒に引き込みたければわたしのライフを0にしろ!」

スレイの漆黒の瞳に光がともる。絶望しか残っていなかった瞳に、一筋の光が。それは、絶望を打ち破る強い意志。初めて見せたであろう、スレイ自身の、紛い物ではない『スレイ』という存在の意思。

「いいだろう、永遠の闇に引き込んでくれる。『暗黒帝ヴァラン』よ、『カオスブレイズ・ドラゴン』を葬り去れ。」

人型の帝王は、その錫杖から漆黒の闇を放ってカオスブレイズ・ドラゴンを闇に引き込もうとする。

「『カオスブレイズ・ドラゴン』は1ターンに1度、フィールドを離れない！」

「だがダメージは受けてもらっぞ。」

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

S l a y L P 8 0 0 0 2 0 0 0

「まだだ、まだ終わらん！」

スレイはすでに満身創痍。疲れや傷を知らない魂の器は、立つのも辛そうだった。

「まだだ…。」

「ほづ…ターンエンド。」

D a r k n e s s g o d ( U l t i m a t e M o d e )

L P 1 0 2 0 2 0 0

手札：4

フィールド

暗黒帝ヴァラン ATK10500

暗黒神の時空

「わたしのターン!!!……………!!!」

『さあ、解放しる力を。暗黒神を倒すのだろうか？自らの未来を手に入れるのだろうか？偽りの「スレイ」ではなく、本物の「スレイ」の新たな生を始めたいからもがき苦しんでいるのだろうか？ならばもがき苦しんだ先には悲しみあれど、その先にお前を受け入れてくれる人間はいる。さあ、1歩踏み出せ。わたしが力を貸してやる。』

頭の中に響いてきた声。偽物の、創りものの「わたし」に別れを告げて新たな自分を始めるための力。

「トランプ発動、『リミット・リバーズ』！墓地から『グロリアツプ・バルブ』を特殊召喚！『エターナル・リバーサー』に『グロリアツプ・バルブ』をチューニング！シンクロ召喚、シンクロチューナー『インフィニティ・ドラグーン』！『エターナル・リバーサー』復活。」

「まさかそのシンクロチューナーは…汝はこの輪廻の内で成長していたというのか…！！」

「当たり前だ！これだけの負の連鎖を繰り返して成長しないわたしではない。わたしの心は偽物でも折れることは無い！『スポーア』を召喚。『エターナル・リバーサー』に『スポーア』をチューニング！シンクロ召喚、シンクロチューナー『ゼロ・ドラグーン』！こいつは『インフィニティ・ドラグーン』が存在する時にシンクロ召喚した時、デッキから1枚ドローする。」

2つの竜は、中心にいるカオスブレイズ・ドラゴンの周りを飛び回る。まるで力が共鳴しているかのように。互いに呼び合っているかのように。それは喩で言えば絶対はないが暗黒神とスレイのように、表と裏…ゼロと無限が互いに呼び合っているのだ。

「レベル12のデルタアクセルシンクロモンスター『カオスブレイズ・ドラゴン』にレベル2のシンクロチューナー『インフィニティ・ドラゴン』『ゼロ・ドラゴン』をチューニング!!全てを司りし混沌、今未来のために神々の力を得、その意志を示せ!!」

「何が起るといふのだ…。」

「アンリミテッドオーバーシンクロ!!!」

辺りを、正の力を持つ闇と光が包み込む。

「現れよ、新たなる未来の使者!!『カオス・クリエイション・ドラゴン』!!!」

カオス・クリエイション・ドラゴン ATK10000

現れたのは未来のと過去、現在の全てを束ねる究極神に最も近い存在。それが齎すは、召喚した生命体の新たな生き方。

「これが暗黒神!貴様を倒す、我がキーカードだ!!」

次回へ続く。



## 第10話 最終決戦（後書き）

次回「訪れる運命の時」

スレイ「今回、このコーナーはわたし1人でやらせてもらう。まずは最強カード紹介だ。」

カオスブレイズドラゴン

レベル12 炎属性 ドラゴン族・デルタアクセルシンクロ/効果

ATK4500 DEF4000

シンクロチューナー+「フレイムドラゴン」+チューナー以外のシンクロモンスター1体

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する。このカードはこのターン通常の攻撃に加えて、自分の手札の枚数だけ攻撃することができる。このカードは1ターンに1度、フィールド上を離れない。このカードを対象とするモンスターの効果を無効にする。このカードがコスト以外でフィールド上を離れた場合、自分の墓地から「フレイムドラゴン」1体を特殊召喚する。

スレイ「デルタアクセルシンクロの中では最も攻撃力が高いだろう。今回使用したオリカ『シングガンテック・ファイター』は通りすがりのデュエリスト様が、『シンレッド・デーモンズ・ドラゴン』『シンスカールレッド・ノヴァ・ドラゴン』はユタ様が、『シンスクラップ・ドラゴン』はアストラル様が、『シンエビル・ナイト・ドラゴン』はE・N・D様が、『咎の宝札』は葦切様が投稿してくれたものだ。礼を言う、オーディンに投稿してくれた読者の皆様のオリカがわたしを助けてくれた。多少扱いが乱雑になってしまったオリカもあり、それを投稿していただいた読者様には本当に申

し訳ないことをしたと思っている。各カードの効果は、暗黒神打倒後に載せようと思う。ではまた次回会おう。」



## 第11話 訪れる運命の時（前書き）

一応これにて、前作も含めて第1部完了です。黒歴史だらけの前作も含めここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございます。た。

よろしければ第2部も生暖かい目で見守ってください。

## 第11話 訪れる運命の時

過去と現在、未来さえも司る究極神に最も近い存在カオス・クリエイション・ドラグーン。これがわたしにもたらすのは、一筋で儂い希望の光。しかし、わたしはこの混沌より生まれた希望の光を信じよう。

「『カオス・クリエイション・ドラグーン』の効果発動！！1ターンに1度、3つの効果を1度ずつ発動する事ができる。まず1つ目！このターン『カオス・クリエイション・ドラグーン』はわたしの墓地に存在するカードの枚数分だけ攻撃する事ができる！！更に、自分フィールド上のこのカード以外の全てのカードまたはデッキからカードを1枚墓地へ送る事ができる。フィールドのカードを墓地へ。」

混沌より生まれた巨大な帝竜は、その身から光と闇を同時に放つ。

「何！？……だが汝の操るそのモンスターの攻撃力は100000……  
『暗黒帝ヴァラン』には及ばん。」

「『カオス・クリエイション・ドラグーン』の2つ目の効果！相手モンスターの攻撃力を0にし、そのモンスターの効果を強制的にエンドフェイズにする。つまり、そいつがリクルーターでも発動するのはエンドフェイズ。」

「！！！」

「さあバトル！！『カオス・クリエイション・ドラグーン』で14

回の攻撃を行う！混沌の創造撃、カオスエクスプロージョン！！」

巨大な混沌の闇と光が暗黒神とその僕をしもへ包み込み、大爆発を引き起こした。

「グオオオオオオオオオオ！！」

Darkness god (Ultimate Mode) L  
P1020200 880200

「まだだ。『カオス・クリエイション・ドラグーン』の3つ目の効果！このカードを次の相手ターンのスタンバイフェイズまで除外し、このターン相手に与えたダメージの2倍のダメージ…つまり280000ポイントのダメージを与える。」

「なんだと…。」

「カオスダークライト・フレア！」

カオス・クリエイション・ドラグーンは光と闇の炎を暗黒神に放つてから消えた。

「ガアアアアアア！！」

Darkness god (Ultimate Mode) L  
P880200 600200

「……ターンエンド。わたしの手札は7枚、よって1枚捨てる。」

Slay

LP2000

手札：6

フィールド

カオス・クリエイション・ドラグーン ATK10000

「……クツクツクツ……」

暗黒神は不敵に笑う。

「何がおかしい？」

「汝のその力。確かに我が予想をはるかに上回っていた。だが、『暗黒帝ヴァラン』の効果発動。デッキから『暗黒神皇フレスヴェルグ』1体を特殊召喚する。更に『暗黒神の時空』の効果でライフを20000回復。」

Darkness god (Ultimate Mode) L  
P600200 620200

「!?!」

「現れる、フレスヴェルグ。」

漆黒の闇から、暗黒の皇帝が出現した。骸骨が皇帝の姿をしているに過ぎないが、その重圧は生きている皇帝の比ではない。完全に闇から生まれた存在。

暗黒神皇フレスヴェルグ ATK

『暗黒神皇フレスヴェルグ』

レベル15 闇属性 幻神獣族 ATK DEF

このカードは通常召喚できない。『暗黒帝ヴァラン』の効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードはカード効果では破壊されない。このカードがフィールド上を離れたターンのエンドフェイズ、このカードを自分フィールド上に戻し、デッキから『暗黒神皇メギンスレス』1体を特殊召喚する。『暗黒神皇メギンスレス』が自分フィールド上に存在する場合、このカードの効果によって『暗黒神皇メギンスレス』を特殊召喚する事はできない。

「攻撃力無限大…!!」

「我がターン。」

カオス・クリエイション・ドラグーンはこの世界の時空の外から再び姿を現した。究極神が創り上げたこの世界を超えて、別の時空に移動する事ができる。

「我は『暗黒神皇フレスヴェルグ』で『カオス・クリエイション・ドラグーン』を攻撃。バニシングダークネス！」

「そう簡単にわたしの希望を消すことなどできん!!『カオス・クリエイション・ドラグーン』の効果発動、1ターンに1度相手の攻撃を無効にする！」

「ならば我は永続魔法『暗黒の瘴気』を発動。このカードは手札を全て捨てて発動する。次のターン、我はカードを5枚ドロウできる。更に、『暗黒神の時空』による回復量が倍になる。ターンエンド。これで我がライフを40000ポイント回復する。」

Darkness god (Ultimate Mode)

LP660200

手札：0

フィールド

暗黒神皇フレスヴェルグ ATK

暗黒神の時空

暗黒の瘴気

「わたしのターン！！カオス・クリエイション・ドラグーン』の効果発動。『暗黒神皇フレスヴェルグ』の攻撃力を0にする！」

暗黒神皇フレスヴェルグ ATK 0

「永続魔法『カオス・トウランブル』！！シンクロモンスターによって発生する相手へのダメージを2倍にする！『カオス・クリエイション・ドラグーン』で15回の攻撃を行う！！」

「ぬううううううー！！」

Darkness good (Ultimate Mode) L  
P660200 360200

「これで『カオス・クリエイション・ドラグーン』の効果でこのカードを除外し、その倍のダメージを与えればわたしの勝利、覚悟はできたか？」

「……クッククック……。ならばやってみるがいい。」

暗黒神は余裕の調子を一切崩さない。まるで自分が負けることなど億の一にもあり得ないというように。スレイはそれに対し、微妙な感覚を覚える。

「…『カオス・クリエイション・ドラグーン』の効果により、貴様に600000ポイントのダメージを与える！」

「墓地からトラップ発動、『ダークネスドレイン』。このカードを除外し、受ける効果ダメージを0にし、ライフを100000ポイント回復する。」

Darkness good (Ultimate Mode) L  
P360200 370200

「チツ…外したか。」

ハッターではなかったのか…。無駄にライフを回復させてしまった…！

「ターンエンド。」

Slay

LP2000

手札：6

フィールド

カオス・クリエイション・ドラグーン ATK10000

「クツクツクツ…ハッハッハッハッハッハッ！！」

「!？」

「我は…この時を待っていた。待っていたぞッ！！」

突如、暗黒神は笑った。期は熟したと言わんばかりに。

「『暗黒神皇フレスヴェルグ』の効果発動。このカードがフィールドを離れたターンのエンドフェイズにこのカードをフィールドに戻し、『暗黒神皇メギンスレス』を特殊召喚!!」

Darkness god (Ultimate Mode) L  
P370200 410200

「何ッ!?!」

暗黒神のフィールドに、骨だけでできた竜が出現した。しかしその重圧はやはり普通の竜とは比べ物にならない。その竜の周りには、常に闇の瘴気が纏われている。

暗黒神皇メギンスレス ATK

「またしても攻撃力無限大のモンスター…!!」

『暗黒神皇メギンスレス』

レベル15 闇属性 幻神獣族 ATK DEF

このカードは通常召喚できない。『暗黒神皇フレスヴェルグ』の効果でのみ特殊召喚する事ができる。『暗黒神の時空』が存在し、自分のライフが50万以下の場合、デッキから『暗黒神』1体を特殊召喚する事ができる。この効果はデュエル中1度しか使用できない。このカードはカード効果では破壊されない。

「我がターン。」

暗黒神は闇から分離し、完全に闇でできた人型の物質となる。



「いよいよだ、スレイ。汝の努力は無駄になり、時空は再び無に帰し、究極神によってふたたび歴史は繰り返される。」

「……………」

スレイの顔に、いよいよ隠し切れない同様と焦りが現れる。スレイはこの時のために、ここまで惜しまない努力をしてきた。そのせいで精神は疲れ果て、器はすでに満身創痍。これ以上歴史を繰り返すようでは、スレイは本当に壊れてしまう。

「『暗黒神皇メギンスレス』の効果発動。『暗黒神の時空』が存在し、我がライフが50万以下の場合、デッキから我を特殊召喚する。出でよ、『暗黒神』！！」

「ついに……………現れたか。」

現れたのは『闇』。人型の闇。闇の剣を片手で持ち、無表情の青年。身長は190cmだが、その力は究極神をも凌駕する。

暗黒神    A T K

「我の効果発動。我は特殊召喚に成功した時、我がフィールド上に存在する『暗黒神』と名のついたモンスター以外の手札・デッキ・墓地・エクストラデッキのカードを全てゲームから除外する。更に私のライフは0になり、我がフィールド上を離れた時、我が敗北は決定する。」

『暗黒神』

レベル    神属性    暗黒神族・神 / 効果    A T K    D E F

このカードは通常召喚できない。『暗黒神皇メギンスレス』の効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードの特殊召喚に成功した時、自分フィールド上に存在する『暗黒神』と名のついたモンスター以外の自分フィールド上・手札・デッキ・墓地・エクストラデッキのカードを全てゲームから除外し、自分のライフを0にする。このカードがフィールド上に存在する限り、自分は敗北にならず、コントロールを変更されない。このカードは相手の神属性モンスター以外のカード効果を受けず、いかなる場合でも効果を無効化されない。このカードをリリースする事はできない。このカードが神属性モンスターと戦闘を行う場合、いかなる場合でもそのモンスターをゲームから除外する。相手はこのカードしか攻撃対象に選択できない。

「バトル。我で『カオス・クリエイション・ドラグーン』を攻撃。」  
暗黒神はその手に持った剣でカオス・クリエイション・ドラグーンを一刀両断した。

「我と戦闘する神属性モンスターは除外される。」  
そして、そのままカオス・クリエイション・ドラグーンは異次元に飛ばされた。

「…『カオス・クリエイション・ドラグーン』の効果発動…このカードが相手によってフィールドを離れた場合、デッキ・手札・墓地から『究極神オシリス』『究極神オベリスク』を召喚条件および制約を無視して特殊召喚し、『カオストーケン』3体を特殊召喚。更にこの効果によって特殊召喚されたモンスターはこのターン、いかなる方法でもフィールドを離れない。」

スレイは手札から2体の神を召喚した。全長500kmを超える2体の神。だが、それでもその力は暗黒神に届かない。スレイに残された手段は、やはりたったの1つ。全次元をリセットするラーの効果。

「我はこれでターンエンド。」

Darkness god (Ultimate Mode)  
LPO

フィールド

暗黒神 ATK

暗黒神皇メギンスレス ATK

暗黒神皇フレスヴェルグ ATK

「わたしのラストターン!!」

「さあ、召喚するがいい。汝の持つ最強の力。我を退け、時空を破壊しつつ、新たな歴史を繰り返す究極の神を。思い知つただろう？我こそは人間の持つ無限の闇そのもの。その力の前に汝は新たな力をもつても何もできなかったのだ。所詮汝1人の努力などその程度。」

「……………」

「汝は確かにここまで未来を見るための努力をしただろう。だが我が闇は、神々の闇をも含めた存在。そして汝も神、その闇は我が力となる。最初から汝に闇ある限り、我に勝利する可能性など無かつたのだ。汝に闇無き意思は無い。なぜならば、それは気が遠くなるような時を繰り返し続けてきたからだ。もう何も思う必要などない、何度でも世界をリセットするがよい。」

「……………」

……………  
……………  
……………  
……………  
……………  
……………  
……………

「それはどうかな？」

スレイは笑う。それは、諦めた顔ではない。未来を見るための、全ての準備が整った、邪念のない純粹な笑顔だ。誰も見たことが無い、戦いに明け暮れた悲しき神が初めて見せた、その本当の意思を持った笑顔。今まで、偽りの心で様々な者たちを愛し、恨んできた「スレイ」ではなく。まだ何も知らない、純粹無垢な誕生したばかりの真実を記憶している強き心を持った「スレイ」。その表情は、真剣であり純粹。たった今、この場所で、この世界で生まれ変わった存在。神ではなく、一介の生命体。人間でもなければ天使でもなく、悪魔でもなければ神でもない。精霊でもなければ魂だけの存在でもない。どの生命体の分類にも入らない、「スレイ」という生命体。

「バカな…貴様から闇のエネルギーが消えていく…グオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！」

暗黒神の闇の力は、たとえ生命体全ての闇を取り込もうと90%がスレイの物。そのスレイから『闇』が消え去った今、暗黒神の力は

大きく減少する。スレイは『神』としての記憶を自らの中からすべて排除し、『スレイ』として生きることにした。

「バカな…それでは貴様…貴様は…天使の事も…女神どもの…神々の事も忘れ去ることになるぞッ！！」

「それがわたしの……『スレイ』アルアス』の…いや、破壊の名は捨てる！オレの…オレの名は『アルフォス』、『アルフォス』ルヴオルグ』の選択だ！オレは今ここに…新たな存在として転生する！オレは『カオストークン』3体を神への供物とし

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

暗黒神が、辺りの光によって苦しむ。

「現れる！！我が最強にして、この時空の全てを司る神！！『究極神帝ラー』！！！！」

全長1000kmを誇る、この時空最強の神が出現した。

「だが！私の効果は神と戦闘を行う場合そのモンスターをいかなる場合でも除外する！更に私の効果は、たとえ神の効果でも無効にならない！！我に勝利したければ、汝の神の効果を使用するしかないぞッ！！」

「ああ、望みどおり発動してやる！！『究極神帝ラー』の効果発動！！1ターンに1度、相手のカードを全て除外し、のダメージを与える。ゴッド・アルティメット・ノヴァ！！！！」

ラーの口に黄金の炎のエネルギーが収束する。

「何……躊躇なくリセットだと……!!?」

「誰がりセットだと言ったア！この瞬間、『カオス・クリエイション・ドラグーン』の最後の効果を発動する！！このカードをゲームから除外する事で、ラーによる世界のリセットを無効にする！！」

これこそ混沌が司る、最高の防御壁。神の力をたった1度だけれども抑え込む。

『カオス・クリエイション・ドラグーン』

レベル16 神属性 ドラゴン族・アンリミテッドオーバーシンク  
口ノ効果 ATK10000/DEF10000

『ゼロ・ドラグーン』+『インフィニティ・ドラグーン』+デルタ  
アクセルシンクロモンスターまたはリミットオーバーアクセルシン  
クロモンスター1体

以下の効果を1ターンに1度ずつ発動できる。

自分のメインフェイズ1に発動できる。このカードはこのターン、自分の墓地のカードの枚数分だけ攻撃する事ができる。 相手モンスター1体の攻撃力をエンドフェイズ時まで0にする。 バトルフェイズ終了時にこのカードをゲームから除外する事で、このターンこのカードによって発生した相手への戦闘ダメージの2倍の数値分相手にダメージを与える。この効果で除外したこのカードを次の相手ターンのスタンバイフェイズ時にフィールド上に戻す。

このカードが相手によってフィールド上を離れた時、自分の手札・デッキ・墓地から『究極神オシリス』 『究極神オベリスク』 『カオストークン』 3体を特殊召喚する。このカードの持ち主の人生に1度、『究極神帝ラー』の効果が発動した時、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、時空消滅を無効にする。



変わろうとも、我々の魂は人間に転生するでしょう。しかし歩みなさい。それがあなたたち神々に託された運命です。……わたしも時間が来たようです。神々よ、よく聞きなさい！わたしはいつでも、あなたたちの幸運と幸福を願っています。どうか闇に堕ちることの無いよう、心に希望を持って転生し、新たな生を歩むのです。……全員の無事を願います。」

暗黒神……その正体は、この時空全ての昼や夜、時の流れ、数々の生命体を創り出したもの達…原初の神々の1人。最初はとても高貴で穢れなく、我ら聖なる神々と暮らしていた。しかし彼は、時の流れや昼、夜などを創り出した分だけ人間たち生命体に精神がリンクしていた。だからこそ、スレイよりも早く心が闇に沈み、あのような姿に…。

### 暗黒神の城

「な、なにこれ!？」

突如、ロキとセレナを除いた全員の体が光に包まれる。

「ウオオオオオオオオオオ!？」

「キヤアアアアアアアアア!」「」

そして、ロキとセレナ以外の全員が光の粒子になって消えた。そこには、それぞれの七聖龍が落ちている。更にトールの懐から落ちた、ラミエルの魂を封じた光の球。ロキは眠らせたセレナを連れて、ラミエルの光の球と七聖龍を持って消えた。



「キツヒヤツヒヤツヒヤ……。悪いね、みんな。やっぱり僕の神力じゃ、みんなを助けることはできなかったよ。」

でも、消えた皆は容姿は変わっても、人間として新しく転生するだろう。みんなきつと、新しい人生と言うものを満喫できる。だから悲しまないし、涙も流さない。

### 時空の狭間

「……………」

スレイはたった1人そこにただ俯いている。そのまま、元のデュエルアカデミアのある世界へと戻った。いままでの偽物の自分に別れを告げて。今のスレイ…アルフォスに、神々についての記憶は残っていない。唯一消えなかったロキ以外は。

。

……………ん？

「……は…。」

見覚えのある砂浜だ。間違いなく、デュエルアカデミアの砂浜。

「帰ってきたんだな……。これでわたしの……いや、オレの新しい未来が見える。…けど、オレは何か大切な記憶を失った気がする。」

『私の事は良いから、私が消えたら、新しく好きな人を見つけてよ。それはきつと、スレイの大きな支えになるよ。』

……この言葉……誰のだ？でも、そうさせてもらおう。自分の寿命が限らないから、相手の人間はオレにとっては短い人生だが、それでも楽しめることはある。きつと、人間が輝いて見えることがあるのは、有限の人生を精一杯生きているからだ。もうリセットしても、消えた記憶の中にあつた者たちは戻ってこない。これだけはわかる。

「……太陽がまぶしいな。」

汚れきつた偽の心を捨てて、転生したはずなのに、太陽は眩しい。それが教えてくれる。記憶が消えても、まだ記憶に残っている人間たちがいる。彼らなら、きつとオレの支えになってくれると。太陽はそう教えてくれている。

「スレイ」の壮絶な生き様を語る者……いや、語れる者は1人しかない。その1人も、語るつもりなどない。「スレイ」という1つの命は誰にも語り継がれることなく、しかし激しい生涯を終え、今新たに「アルフォス」となって、自らが望んだ「新たな未来」を見ることができらるだろう。

「さて、何から始めるか……。」

オレを縛る鎖は解き放たれた。本当の意味で自由を手に入れたんだ。

「しかし……オレ わたし オレか。原点回帰だな。さあ行くこうか。」

応える人は誰もいない。

アカデミアの廊下

「お、スレイじゃねえか。」

話しかけてきたのは十代。オレの事情を知らないから、スレイと呼ぶのも仕方ない。

「悪いな、十代。オレはスレイじゃないぞ。」

「へ？」

「オレはアルフォスという名だ。まあ、人違いじゃないがな。色々あって、こういう名になったのさ。」

神ゆえの威厳が必要なくなった今、堅苦しい口調で話す必要なんてない。だからオレは気軽に話せる。

「そうなのか。じゃあよろしくだな、アルフォス。」

「……ああ。」

「あ、スレイ君。」

今度は高町たち3人。

「今日は忙しいな。オレはわけあって、アルフォスって名に変えた。」

「

「ふん…。」

「ま、オレの自由だ。高町たちも覚えておいてくれ。」

「……じゃあアルフォス、そろそろ私達の事名前で呼んでくれても…。」

そついうのはテストタロッサ。まだそんなこと言ってる。余程名前で呼んでほしいようだな。

「じゃフェイト、何だ？」

「ふえ？あ、アルフォス、何かおかしい物でも食べた？？」

「そつだよ、いままでずっと苗字で…。」

「なんだお前ら、やっぱりそついう反応か。もういい、やっぱり苗字で呼ぶ。」

せつかく要望通りに呼んでやったのに…。

「ゴメン…。」

「ところで、いつもの皆は一緒じゃないんやね？」

はやてがそんなことを訊いてきた。

「いつもの皆？みんなと言ったって、ロキとセレナだけじゃなかつ

たか？」

「……！？」

その場にいた十代も含め、4人は驚愕した。それもそうだ。自分たちは覚えているアルフォスの身近な仲間を、その中心だったアルフォスは覚えていないのだ。

「…どうした？」

「冗談…だよな？」

フェイトは顔を青ざめて訊いてくる。なのはとはやても驚いて口が塞がらない。

「何が冗談なものか。ずっとオレは……オレは……？」

いや、あと5人…いたような気がする。しかし、思い出せるのはここまで。その先を思い出そうとすると、途端にわからなくなる。

「確かに…あと5人いたな…。」

そう、ここまでなのだ。それ以上の記憶は、偽の心と共に葬ってしまっただから。

「でも、過ぎたことはしょうがない…これだけは覚えている。その5人は、暗黒神を倒した時に人間に転生したってことだけ。」

「う……そ……」

フエイトは声に出して驚く。残り3人は、開いた口が塞がらない。

「後は…その仲間の1人に『自分の事は良いから、新しい好きな人を見つけて支えてもらえ』と…。オレが思い出せるのはここまでだ。」

「そんな!」

4人はBADENDではないことくらいわかる。しかし、BADENDではなくとも、これは十分、本人以外の周りから知っている人間から見れば十分悲しいものだった。

「まあ、なんとかなるさ。さて…その好きな人とやらを探しに行くか。」

その仲間の事は気にかかるが、その仲間本人が支えは必要と云ってくれているんだ。その優しさを無下にする事なんてオレにはできない。これがオレの結論。周りに間違っていると言われても、オレは自分の結論を曲げない。その仲間の事を思えば、やはり闇が迫るだろう。でも、今のオレには希望の光が満ちている。偽りではない「オレ」に。

「お前達が気にする事じゃない。それじゃあ、またあとでな。」

人間に転生した、か。そいつら、元気でやってるといいな。

「キツヒヤツヒヤ、随分楽観的になったね、アルフォス。」

「ロキ?」

「僕だけは暗黒神を倒した後の、神々の消滅から逃れさせてもらった。いや、どつちかっていうと、僕しか逃れられなかった。君が好きだった人のスクルドから伝言を預かってるんだ。」

「……オレが好きだった人はスクルドというのか、良いだろう話してくれ。」

「じゃ、言うよ。『スレイ到最后のお別れを告げられなかったのは残念だけど、後悔はしない。スレイ、あなたはきつと新しい生涯を始めることになると思う。新しい生涯には多分、好きなパートナーが必要だと思う。それは好きな人ならだれでもいい。自分が心を許せる人をたつた1人でもいいから見つけることができれば、本当の新しい生涯を歩むことができるよ。』だって。ま、好きにすれば？」

「……オレ、やっぱり1人で進むことにするかな。」

「!？」

「オレにもいろいろ考えがあるんだ。」

「そっか。…ところで、さっきから腰にぶら下がってるその水晶は何？」

ロキはアルフォスの腰にぶら下がっている水晶を指さす。水晶というより、ビー玉程度の大きさだが。ちなみにその色は白い。

「…アレ、ナニコレ？」

「へ？」

「いや、こんな物は持っていなかったはず。」

『…さつきから私の事を物のように扱うとは…無礼者ども…。』

「喋った!？」

『我は…暗黒神だ。』

「何っ!？」

スレイはそれを聞いた瞬間、アーティスを剣に変える。

『ちよ、ちよと待ってくれ!! 我は確かに暗黒神だったものだが、今は違う。我は…そうだな、お前達神々のランクで言えば原初神なのだ。』

「アルフォス、原初神ってどのくらい?」

「記憶に残ってる限りじゃ、最高神の上。」

「で、その素晴らしい階級の暗黒神が僕たちに何の用だよ?」

『その名で呼ぶな。我にはカオスという名があるのだ。我と究極神の誕生は同時。それから世界は時空と共に創り上げられ、時の流れによってここまできた。我は生命体の邪悪な精神によって暗黒神と化し、お前達神々を破滅に追いやってしまったが…な。用など無い。ただ、アルフォスさえよければ、このカオスをお前の言う未来に連れて行ってはくれまいか?』

「なるほど、絶望に敗北したがもう1度挑戦したいわけだ。オレは



構わないぞ。確かに貴様がその神々を滅ぼしたっていうのは許されることではないが…それはお前を倒したオレにも言えることだからな。」

『……恩に着るぞ。助言くらいならできるだろう、よろしく頼む。』

「うつわ…邪悪じゃなくなった暗黒神ってこんな性格なのか…。デュエルできんの？」

『ああ、アルフォスの器を借りれば可能だ。アルフォスが倒れた時には我に任せろ。それと、我が力で究極神を、裏の世界のアルフォス…まあ裏の世界ではスレイという名だが、その者の持つ究極神と同レベルにしておいたぞ。』

「そうなのか。……って、なんでお前が裏の世界の事を知っているんだ!？」

アルフォスは珍しくノリツッコミした。ロキでも見るのは初めてだ。

『だから言ったではないか、「お前の1歩先を行っている」とな。』

「それ、そのままの意味だったのか。じゃあ早速裏の世界に」

『バカか！お前あと4年以上この学園の授業が残っているだろう！』

「…。」

…倒した相手にバカと言われた。神々を滅ぼしたらしいバカにバカと言われた。オレ、この水晶割ってもいいよな？

『おいなにをするつもりだ!?!』

「水晶を叩き割る。」

『やめてくれ頼む!』

「……チツ、さっきの発言を取り消せ。」

『……わかった。』

この2人の漫才を、ロキを含めた十代達5人はポカンと口を開けてみている。特にロキに至っては顎が外れそうだ。それも当然。つい数日前まで（アルフォスが砂浜に辿り着くまで数日かかった）敵だった暗黒の神が、今日の前で自分たち最高神を束ねていた存在と漫才を繰り広げているのだから。

「ああ、カオス、貴様に1つ聞いておきたいことがある。神々の記憶はオレの中から消え失せてしまったが、天使たちが生きているのは分かっている。だが、神界はどうなった?」

『…神界は無事だ。天使たちは展開が我の魔王軍によって壊されたとかで、神界に移ったようだ。ちなみに、魔王軍はゼウスの一撃で全滅してしまったがな。』

「ゼウス?」

『最高神の中でもかなり強い力を持っていた1人だ。と言っても、お前はそのゼウスの比ではないがな。』

「アレ、オレってそんな強いっけ?」

『神々は死んだ人間を時々気まぐれで、チート能力をつけて転生させるんだが。』

「うん」

『お前はそのチートが10億人集まっても倒せん。』

「ふーん。」

『…………。』

仲間が消えたというのにこの楽観的な態度…アルフォス…汝は一体何を考えている？

「なあカオス、なぜオレがこんな楽観的でいられるかわかるか？」

『正直理解不能だ。』

「だろうな。教えてやろう。なぜかというとな…オレの記憶の中に残ってるんだよ、そいつらがしつかり転生して、そいつらなりの人生を歩んでるってな。」

『…………。』

「だから別に悲しくもなんともない。あいつらの魂は生きてる。それだけで十分なのさ。」

それらの肉体や器がオレと暗黒神に滅ぼされたのはよくわかってる。オレがこんなことを言ったところでそれは偽善にしかなりえない。

『そうか。だが、この世界には我まで加わり、増々イレギュラーが増えるぞ。それも、お前ですら一筋縄ではいかないような奴らがな。』

我らの影響での消滅を免れた神がロキを含め何体かいる。その殆どが邪な考えを持った神で、人間を支配しようだとかそう言ったくないことを考えているような奴らだ。

「わかってる。」

だが今のオレに挑むなどただの愚かな行為だということを見せてやるだけだ。この先にある未来を、オレはこの眼で見るだけだ。

次回へ続く。

## 第11話 訪れる運命の時（後書き）

次回「休暇」

ノルン姉妹はもう出ません。

アルフォス「お、手紙があるから読むぞ。」

ノルン姉妹「えーと、ここまでありがとうございました。これからのあとがきはカオス様とアルフォスに任せます。今までお世話になりました。」

アルフォス「だそうだ。というわけで、しばらくはこのコーナーはオレがやる。」

カオス「まずは今日の最強カード紹介だ。」

「究極神帝ラー」

レベル12 神属性 究極神帝族・効果 ATK DEF

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3対とライフ半分を生け贄に捧げた場合のみ特殊召喚することができる。このカードは「究極神オシリス」「究極神オベリスク」がフィールド上に存在する場合のみ攻撃可能になり、効果が適用される。このカードはこのカード以外のいかなる効果も受けず、戦闘では破壊されない。このカードはコストにできない。相手のカード効果はすべて無効になり、コントローラーは敗北にならない。また、お互いにサレンダーできない。1ターンに1度、相手のカードを全てゲームから除外し のダメージを与える。このカードの元々のレ

ベルとスペルスピードは として扱う。

アルフォス「Another slay lifeを呼んでくれる人は、今回の話でカオスが言っていた『神の強化形態』についての効果も大体わかると思うぞ。向こうでもまだ正式な効果は出ていないから微妙なところだが。」

カオス「ここまで、すべてのおまけ話なども含めれば186話だ。ここまですべて読んでくれた人及び途中からでも読んでくれた人、感謝する。」

アルフォス「次回からは少しほのぼのの編を入れようと思う。この時期だとユベルと決着をつけに行くんだが、今までが暗すぎたからな。」

カオス「それではまた次回に会おう。」

作者：ここまで読んでくださった読者の皆様方、本当にありがとうございます。ありがとうございました。書いていただいている感想はやはりやる気のもとです。ね。とりあえずここで第1機を終了という形にしようと思います。2期からのキャラ設定はもうしばらくお待ちを。新しいキャラクタ―などを出す予定ですので。あ、もしよろしければAnother slay lifeのほうも宜しく願います。そっちはチートと小説のあらすじに書いたのに全然チートじゃない…OTL

## 第12話 休暇と新たな出会い（前書き）

一応この話から第2部の始まりとなります。

相変わらず超展開ですがお願いします。あと、驚異的なグダグダです。ゴメンナサイ。

最近の出来事

アニメ見てるばかり…デュエルしたいです。

## 第12話 休暇と新たな出会い

オレはあれから校長室に行き、クロノスと鮫島両名に何があったのかを説明する。そして、疲れなどを考慮して3日間の休暇を取る、という待遇。悪くない。

「……しかし、一人称慣れないな。」

『まあ仕方ない。一人称を変えようとしても、なかなか変えられないものだ。』

「こういう時は、デュエルをすれば良いと聞いたことがあるな。十代なら普通に……いや、この時期の十代は期待しない方がいいな。」

『ならばあの3人ならば……。』

「相手にならん。まあ、とりあえずは草原に行こうか。」

アルフォスは女子寮の近くにある草原に向かう。

アカデミア島 草原

ここは普通に女子生徒が遊びに来ることがあり、普通の男子生徒が来るとまず女子寮の教師を呼びに行くのだが、アルフォスの場合は話は別だった。

「……少し寝る。」



そういつて草原に寝っ転がるアルフォス。寝る必要など一切ないのに、その時の気分次第では何でもする。

『…………なあアルフォス。』

「なんだカオス。」

『新しい未来…楽しいのか？』

「楽しくなかったらこの世界から移動する。」

『そうか。しかし汝は気まぐれだな。必要もないのに寝るのか。』

「カオス、神というのは気まぐれなものだ。」

そのままアルフォスは深い眠りについた。

### 5時間後

そう、この時間に。オレはある少女に出会ったのだった。

それは運命か、気まぐれか

。

もう日が沈んだ。アルフォスはふと目を覚ました。すると、自分の顔を覗き込む1人の少女…と言っても、アカデミアの制服を着ているあたり多分生徒だろうが…こんな生徒、学園にいたか？容姿は…アホ毛のあるロンググレー？アレだ、ストレートではないロング。

ふわりと広がってる感じの。ふくらはぎの少し上くらいまではあるんじゃないだろうか。たった今見た率直な感想。はっきり言う、世間一般から見たらかわいいぞこいつ。

「お前、誰？」

「……ソラ。ソラ・ラルニグス・レライア。」

『…。』

「（どうしたカオス？）」

テレパシーのようなものでカオスと会話する。目の前にカオスの声を聞けない者がいる時は、大体この手段だ。

『いや、ある少女の事を少し思い出したただけ。』

「（まあいい。）で、ソラはオレに用があるのか？」

「……こんなところで寝てたら、風邪ひくよ。」

「……アツハハハハハハハ！」

オレはソラの肩を軽くたたきながら起きた。

「…痛いじゃない。」

「ああ、悪い悪い。忠告ありがとう…とでも言うておくか。礼は…まあいいものじゃないが。」

アルフォスはそう言って、目の前の少女に常に1箱は持っているチョコレートを渡す。ソラはそれを黙って受け取ると、すぐにあけて一口だけ食べた。

「…美味しい。」

「そりゃよかった。」

ああ、そうか。ここは女子寮からは遠くないからな。この時間ここに来る女子生徒はまれにいるし、誰かと遭遇するのも珍しくない。

「で…あなたの名前は？」

「…アルフォス。アルフォスⅡルヴォルグ。」

デュエル以外の得意なことは狙撃…なんて言う必要はないだろうな。

『菓子作りはどこへ行った？今のチョコレートも手作りだろう。』

「（菓子作り？仮にも外見が男のやつが菓子作り得意ですなんて言えるかヴォケ。）」

『汝はだんだん口の利き方が悪くなってきたな…。』

「（お前と面識のないクスに対してだけだ。）」

「そう。ねえ、私とデュエルしてよ。」

「…は？いや、まあ構わないが。この時間でやると、消灯時間を過ぎるぞ？」

「その時はあなたのブルー寮の部屋を借りる。」

何とも強引な…まあいいか。どうせ普段からオレは寮には戻っていない。

「だが警備員はこの辺りを巡回している。やるなら、もう少し森の中に行く必要があるぞ?」

正直警備員ごとき永眠させて…いや、この考えはよくない。絶対によくない。

「いいよ。」

そういつて1人で森の中へと歩くソラ。いつの間にかアーティスをスナイパーライフルに変えていたが、すぐに指輪に戻してソラを追った。

で、ある程度進むと互いに対峙し、デュエルディスクを構える。アルフォスはどこからともなくディスクを取り出して腕につけた。

「デュエル」

Al f o s vs . S o r a

「先攻はオレが貰おう。オレは永続魔法『機皇強襲』を発動。」

『機皇強襲』

永続魔法

このカードは相手のカード効果を受けない。1ターンに1度、自分フィールド上に存在する『機皇』と名のついたモンスター1体を破壊する事ができる。自分フィールド上に存在するモンスターがカー

ド効果によって破壊された場合、自分のデッキまたは手札から『コア』と名のついたレベル1の機械族モンスター1体を特殊召喚して破壊する。また、自分のメインフェイズ時に自分の墓地に存在する『コア』と名のついたレベル1の機械族モンスターを全てデッキに戻すことができる。自分の墓地に『機皇帝』と名のついたモンスターが3種類存在する場合、このカードを墓地へ送り、自分のデッキ・手札・墓地から『機皇神マシニクル』？』1体を特殊召喚する。この効果は相手ターンでも発動できる。

「『ワイゼルC』を召喚。このカードは『インフィニティ』と名のついたカードがフィールドになければ破壊される。」

出現した機皇帝の足部は瞬く間に爆発した。

「『機皇強襲』効果発動。自分フィールド上のモンスターがカード効果で破壊された場合、デッキまたは手札から『コア』と名のつくレベル1機械族モンスターを特殊召喚して破壊する。オレはデッキの『グランド・コア』を特殊召喚して破壊する。」

「自分のモンスターを…破壊？」

ソラはアルフォスが何かを狙っていることを悟る。

「『グランド・コア』がカード効果で破壊された時、自分フィールド上のモンスターを全て破壊し、デッキ・手札・墓地から『機皇帝グランエル』『グランエルT』『グランエルA』『グランエルG』『グランエルC』を特殊召喚する。合体しろ、グランエル！！」

機皇帝グランエル     ATK 4000

「攻撃力4000。。。」

「グランエルの攻撃力はオレのライフと同じになる。カードを伏せてターンエンド。」

Alfos

LP4000

Hand: 3

フィールド

機皇帝グランエル ATK4000

グランエルT ATK500

グランエルA ATK1300

グランエルG DEF1000

グランエルC ATK700

魔法・罨

機皇強襲

伏せ: 1

「私のターン。私はチューナーモンスター『エキセントリック・ボ  
ーイ』を召喚。」

「チューナーだと!!?」

「バカな。」

カオスですら驚きを隠さない。

「フツッ…私はなぜだか知らないけど、1度死んで、デュエルとは  
無縁の異世界から飛ばされてきた。カードはその時に手に入れたの  
ものなの。」

「へえ 珍しい客人もいるものだ。転生者なんて、会うのは1、2年ぶりか？しかし、なぜオレにそんなことを話す？」

「あなただったら、私の事を拒絶せずに付き合ってくれそうだったから。」

「やけにオレのことを信用するじゃないか。」

何か企んでいるのか？もしそうならそれを聞きだすまでだが…。

『よかったじゃないかアルフォス。どうやら汝はあの少女に惚れられたようだぞ？』

「（いや、それは絶対ないから。あれで惚れるというなら世界中の大体のやつが誰かに惚れていると思う。絶対今の付き合いってくれそうってというのは告白じゃないだろう。）」

『仮に告白だったら？』

「（即OK）」

『……………』

アルフォスの素の性格ってこんなだったのか…。意外だ。神という点を除いたら単純に素直な奴だったのな。ああそうか、神だから素直じゃなかったというわけか。……どこかの人間に転生した女神様、お疲れ様です。

「続き…いい？」

「ああ、構わん。」

「私は右も左もわからない世界に来たのが怖いから…だから同じ感じのするあなたに頼るしかないの。」

「……。」

同じ感じ…な。

「1つ言おう、オレにはある魂が憑いてるんだが…そいつが言うにはオレはこの時空の神様ってことらしい。オレに頼るってのは神に頼るといふのと同じことらしいぞ。」

「驚いた…でも、それが？」

驚いたのはアルフォスが神様っていうのもそうだけど、何か魂が1つ憑いてるってこと。

「聞いたことはあるだろう？『神は気まぐれ』。オレの場合は、機嫌がよければ大抵の事には協力してやる。当然見返りなど求めないし、必要もない。だが機嫌が悪い時はどうなるかオレにもわからない。どうする？」

もしかしたら、オレのデッキに眠る神の力が爆発するかもしれない。そう、発動ではなく爆発だ。

「いいよ。それでも、1人でこの世界を彷徨うよりかは余程いい。」

「フツ、なら困った時はオレのところに来るといい。」



『まったく、汝も意地が悪い。素直に力を貸してやればいいものを。そうすれば簡単にフラグを立てれるというのに……。』

「（お前、本当に原初神か？）」

原初神がフラグとか意地が悪いとかそんなことを言っていていいのか？

『ああ、間違いなく原初神だ。』

「（そうなんだ）」

「……ありがとう。」

カオスにツッコミを入れて、その返事の直後にソラが礼を言った。

「オレに礼は必要ない。気まぐれで協力しているだけだからな。さて、お前のターンだったな。」

「……うん。私は手札の『サイバー・ドラゴン』に『エキセントリック・ボーイ』をチューニング。シンクロ召喚、『スターダスト・ドラゴン』。」

「『スターダスト・ドラゴン』か。ソラ、お前は転生前にデュエルモンスターズを知っていたか？」

大体転生者というのは、望んだ世界に神の手によって転生するのが基本。しかし、ソラは違うようだ。望んでもいない世界に飛ばされ

た場合、確かに右も左もわからないことはあるが、果たして星の数ほどある知らない世界の中で、知っている世界に飛ぶことができる確率は一体どれほどのものか。

「一応。」

「そうか。」

だがこれで、無意識にソラがこの世界へ飛ぶことを望んだという場合があることになる。何か1つ転生する際に知っておけば、その知っているものがある世界へ転生する事ができる。

……どうやら、殆どの神々を除いて神々は人間へと転生したが、オレだけが何の影響もなく生き残った理由があるようだ。新たな未来は、やはりオレに使命を与えるらしい。

「私はカードを2枚伏せてターンエンド。」

Sora

LP4000

Hand: 2

フィールド

スターダスト・ドラゴン ATK2500

魔法・罫

伏せ: 2

「オレのターン！！グランエルで『スターダスト・ドラゴン』を攻撃。受けてみる、グラウンド・スローター・キャノン！！」

「そうはいかない、『聖なるバリア・ミラーフォース』発動。」

相手は神様。手加減なんかしたら、一瞬でやられる。いくら普通のデュエルでも、やっぱり負けたくない。

「チツ… 『機皇強襲』の効果発動。手札から『ワイズ・コア』を特殊召喚して破壊する。現れる、『機皇帝ワイゼル』、『ワイゼルト』、『ワイゼルA』、『ワイゼルG』、『ワイゼルC』を特殊召喚。合体しろ、ワイゼル!!!」

機皇帝ワイゼル     ATK 2500

「メインフェイズに移行。機皇帝ワイゼルは1ターンに1度、相手のシンクロモンスター1体を吸収する。『スターダスト・ドラゴン』を頂くぞ。」

「そううまくいくと思わない方がいいわよ？ トランプ発動、『バスター・モード』。『スターダスト・ドラゴン』をリリース。『スターダスト・ドラゴン/バスター』をデッキから特殊召喚。『エキゼントリック・ボーイ』の効果で、『スターダスト・ドラゴン』は除外されるわ。」

スターダスト・ドラゴンに強靭な風の鎧を装備させたモンスターが出現した。あらゆる効果を無効にして破壊する、スターダスト・ドラゴンの進化の一派だ。

アリスは機皇帝の効果と攻撃をうまくかわす。かつてアルフォスの機皇帝の猛攻からここまでシンクロモンスターを守りきる者がいただろうか。

「へえ。」

『汝が舌打ちではなく、感心するとは珍しいな。』

「（まあな。というか、オレは女にキレた事は殆どないぞ。）オレはこれでターンエンド。」

Alfos

LP4000

Hand: 3

フィールド

機皇帝ワイゼル ATK2500

ワイゼルト ATK500

ワイゼルA ATK1200

ワイゼルG DEF1200

ワイゼルC ATK800

魔法・罫

機皇強襲

伏せ: 1

「私のターン。」

機皇帝ワイゼル: まだ強化パーツになってないからいいけど、強化されたら厄介ね。

「私は『禁じられた聖杯』を『ワイゼルG』を対象に発動。エンドフェイズまで攻撃力を400アップして、その効果を無効にする。」

ワイゼルG ATK0 400

機皇帝ワイゼル ATK2500 2900

「『スターダスト・ドラゴンノバスター』で『ワイゼルト』を攻撃

「！！アサルトソニック・バーン！」

「グッ……！」

Alfos LP4000 500

ソリッドビジョンと言えど、衝撃は少なからずくる。しかもアルフォスは、ディスクを改造して普通のの200倍は衝撃が来るようにしてある。でないとは実戦という感じがしないとのことだ。実際にはヘルカイザーが使う衝撃増幅装置の10倍以上の衝撃が襲ってくる恐怖のデュエルディスクである。

しかしそれでもこの程度の反応。本人には大した影響はないようだ。

「ダメージ優先で攻撃力の低い機皇帝の頭をつぶしに来たか。」

「後、単純に後続の機皇帝を呼ばせないため。」

「へえ……だが実際、現実はそこまで上手くいかないんだよねこれがカウンター罠『機皇帝の報復』。機皇帝の本体以外が攻撃で破壊された場合、自分フィールド上のモンスターを全て破壊し、相手に破壊したパーツの元々の攻撃力分のダメージを与える。」

ワイゼルはソラの目の前に移動すると自爆した。

「きゃあっ……！」

Sora LP4000 2000

「『機皇強襲』の効果で、デッキの『スカイ・コア』を特殊召喚して破壊。『機皇帝スキエル』、『スキエルT』、『スキエルA』、『ス

キエルG』 『スキエルC』を特殊召喚。合体しろ、スキエル。』

機皇帝スキエル      ATK0    2200

「でも攻撃力2200… 『スターダスト・ドラゴンノバスター』には届かない…。」

「ハハツ、承知の上だ。」

「…2枚伏せてターンエンド。」

Sora

LP2000

Hand: 0

フィールド

スターダスト・ドラゴンノバスター      ATK3000

魔法・罫

伏せ: 2

「オレのターン。」

『アルフォス、新しい究極神は試さなくていいのか?』

「（カオス、いきなりそんなもの出すわけにもいかないだろう。）  
オレは機皇帝スキエルを生け贄にして魔法カード『無情の虐殺』を  
発動。相手フィールドのカードを1枚破壊し、2000ポイントダ  
メージを与える。」

「『スターダスト・ドラゴンノバスター』の効果。このカードをリ  
リースして魔法・罫・効果モンスターの効果を無効にして破壊する。」

「

……… かった。まあ、どちらにしろここで発動しなければ2000ダメージが通り終わりだったわけだが。

「『機皇強襲』の最後の効果。このカードを墓地へ送り、デッキ・手札・墓地から『機皇神マシニクル？』を特殊召喚。」

「え……。」

白を基調とした人型のロボットが出現した。

機皇神マシニクル？ ATK4000

「……。」

「機皇神マシニクルでソラにダイレクトアタック。ザ・キューブ・オブ・ディスプレイア！」

「トラップ発動、『ガード・ブロック』。戦闘ダメージを0にして、デッキからカードを1枚ドローする。」

「面倒なカードを……。カードを伏せてターンエンド。」

「このエンドフェイズ、『スターダスト・ドラゴンノバスター』は特殊召喚される……。」

Alfos

LP500

Hand: 2

フィールド

機皇神マシニクル ? ATK4000

魔法・罫

伏せ：1

「私のターン。…永続魔法『強者の苦痛』発動。」

「!!!」

なるほど、確かにノバスターにしては攻撃力がそこまで高くないスターダスト・ドラゴンノバスターを守るためなら、良いカードだ。

機皇神マシニクル ? ATK4000 2800

『万事休すと言ったところか。』

「(フツ…)」

「『スターダスト・ドラゴンノバスター』で『機皇神マシニクル?』を攻撃。アサルトソニック・バーン!ダメージステップに速攻魔法『収縮』を発動。『機皇神マシニクル』の攻撃力を2000ダウン。」

機皇神マシニクル ? ATK2800 800

「フツ…」

Alfos LP500 - 1700

「か、勝った…」



「満足したか？オレはもう帰る。今なら消灯時間に間に合うし、お前も早く帰れ。」

アルフォスは踵を返した。

『アルフォス、なぜそれを使わなかった？』

「これか？まあ神は気まぐれってな。」

『超機動殲滅』

カウンター罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する。自分フィールド上の『機皇』と名のついたモンスター1体と相手の攻撃モンスター1体を破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力の合計分のダメージを相手に与える。

「『勝ちたい』って顔をしていたから勝ちを譲ってやった。それだけの話だ。オレがここで負けて死ぬわけじゃあるまいし、別に構わん」

死ななければいくら負けてもいい。普通のデュエルで本気を出して、切り札を公開するのが癪なだけでもある。

『そうか。汝らしいと言えば汝らしい。』

「それに奴は…他人の気がしない。」

『それはどういうことだ？』

「秘密だ。」

『はあ!?!』

「……………」

ソラ・ラルニグス・レライア……デッキより感じられる覇気は間違いなく神の物!

「まあ、ソラルート進行中というところで。」

『お、マジで?』

「さあ、マジかもな?」

『コホン、少し取り乱してしまった。我としたことが……。』

### 女子寮

「……………」

私はベッドに寝っ転がる。そして、買い溜めしておいたお菓子の袋を開ける。最近はいつものころ。まともな食事なんてあまり食べないで、お菓子ばかり。

「……アルフォス……怒るかな。」

草原で寝ていた青年の事を思い出す。彼は実際に人間に換算すれば

青年とは言えない歳だが、精神は青年そのもの。

「でも神様は気まぐれっていうし。…ていうか、アレはほんとに神様？」

私はそのまま、一晚睡眠もとらずに考えていた。

神様がいるなら、つらい思いをしなくて済むって思ってた。でも…。

“神は気まぐれってな。”

“オレの機嫌がよければ力を貸すけど、悪かったらオレもどうなるかわからない。”

…気まぐれ、か。

#### 次の日、デュエルアカデミア

「でね、はやてちゃんが…。」

オレは少し高町に捕まってしまったので話に付き合ってた。……が。

「……………」

壁に半分顔を隠して、オレをじっと見ているやつを1人見つける。

「悪いな、少し用事ができた。」

「あつ…。」

その場を離れて、その視線の主のところへ向かう。

「どうしたソラ、早速何か困りごとか？」

「…そういうわけじゃない。」

そう言ってそっぽを向く。

『ヤンデレの予兆』

「（んなわけあるかバカ！！）それならいいんだ。用がないなら、オレはもう行くからな。」

「待つて。」

アルフォスは歩を止めてから振り返った。

「何だ？」

「お昼ごはん奢って。」

「なんだそりゃ。オレはお前の財布じゃないぞ。まあ、昼くらいはいいぞ。」

と言っても、オレはソラの意図がわかる。オレに話したいことがあるのだから。

「……………」

オレの目の前にはお菓子ばかり積み上げられている。しかもこれで10000DPときたものだ。幸いデュエルディスクには10000000DPは溜まっているからいいんだが…。

「まさかとは思うが、それが昼飯か？」

「そう。」

「……聞いた話だが、人間の体にそれはよくないらしいぞ？」

「いいの。」

友達にもよく言われる。

「……はあ。」

こんな扱いづらい人間、オレは初めてだ。普通の人間なら適当に言いくるめればどうとでも扱えるんだが…。

「まあ、何も食べないオレに言えたことじゃない。オレに話したいことがあったんだろう？」

「うん。…って、アルフォス何も食べないの？」

「オレが食べる必要はない。さ、相談があるんだろう？」

「あ、うん。私、こっちに来て籍がないの。できるだけ早く入れないと、いつバレるかもわからない。」

「そうなのか。」

意外だったな。確かに神の手も借りずに転生となると、そうなるか。

「しかしな…お前1人籍を入れるとなると、かなり面倒だ。オレの籍なら確かスレイの名で入ってたな。ま、ものは相談だ。」

そう言い、アルフォスはノートパソコンを開いて海馬コーポレーション社長、海馬瀬人のメールアドレスに送信する。

“社長、久しぶりだな。スレイなんだが、少し頼みがある。オレの籍を『アルフォス』ルヴオルグ』に変えておいてほしい。もしかしたらもう1度頼みがあってメールするかもしれない。”

返信は5分もしないうちに来る。

“ふうん、いいだろう。”

「これでオレの籍は一応ルヴオルグの物になったわけだが…、ソラ、オレは新しくお前の籍を入れるのは面倒だ。」

主に社長が。社長は嫌な顔1つせず引き受けてくれるだろうが、オレもそこまで迷惑をかけようとは思わん。

「だから入れるならオレの妹になるが…それでいいなら入れておいてやる。姓はいろいろいじればそのままにすることもできるし…悪い提案だとは思わないがどうする?」

「じゃあお願い。名前はルヴオルグでいいよ。」

「ソラ…ルヴオルグか。ゴロもそんなに悪くないし、良いか。」

“社長、あと1つ頼み。ソラ・ラルニクス・レライアって女生徒がこっちにいるんだが。籍が入ってないからオレの妹として入れておいてくれ。ソラ＝ルヴォルグってことで。”

“わかった。”

「後は適当に生徒と教師の記憶を書き換えればいい。カオス、お前の出番だぞ。」

『了承した。』

カオスがそう言った次の瞬間、歴史改変の証拠である白い波動が世界中に広がった。カオスの歴史改変による記憶操作は強烈だ。人間では例外なく書き換えられる。ソラを除いて。

「じゃ、これで一応周りの生徒にはお前はオレの妹ってことになってる。オレもこの背じゃいくらなんでもアレだな…、よし。」

アルフォスが言うのが早いから、途端にアルフォスの身長は183cmまで縮んだ。容姿は全く違うが、時々そういう兄弟はいるから問題はないだろう。

「これが限界か。」

「それでも背が高いじゃない…。」

「そういうな、これでも20cmは縮んだんだから。それよりも、そう他人のように振る舞ってるようじゃ怪しまれるからな。オレの事を神だなんて思う必要はない。あ、そうそう、戸籍上だけだから

別に付き合ってもとやかに言われたりはしないかな。」

最後のこれはちょっとした冗談だ。

『それを本気で受け止めたらどうするつもりだ?』

「(昨日デュエルした時に言っただろう、告白だったら即OKって。

」

席を立つアルフォス。

「アルフォス食べないの?」

「オレはいい。」

「でも…。」

「いい。」

そのままスタスタと去ろうとする。

「…お兄ちゃんのいじわる。」

が、ここでソラは爆弾を投下した。

「!?!?!?!?!?!?!?!」

その場でアルフォスは頭からひっくり返った。

『ストラーーーーーーイク!!!!!!!!!!』



そして歓喜の声を上げるカオス。

「（くっそ…ソラめ、確信犯だな…!!?!?）」

『いいね、妹。我にはストライク。すごくいい!!』

カオスはかなり上機嫌だ。

「（死ねカス）……ソラ、いくらなんでも限度と言う物があっただな…。」

『なるほど、汝もあれには弱いか。やっぱりいいよな、妹。特に素直な子は』

「（テメエ、水晶を叩き割るぞ?）」

『もう死んでもいい。』

「（呆れた。）」

「じゃあお兄ちゃん、私のこと嫌いなんだ…。」

「テメエもテメエでいい加減にしろソラ!!」

涙目になるソラだが、オレにはわかる。実際は1度、この手に乗ってしまっている酷い目に遭わされた覚えがあったからな。

『……………。』

生徒たちの注目の的になる。構図はこうだ。『妹をいじめる兄』。ただそれだけ。『学園最強とは言っても、妹にやさしくできない下種野郎か。』とか聞こえてくる。

「……………」

アルフォスはこの空気が苦手だ。

「わかったよ、食べばいいんだろう、食べば。」

アルフォスは仕方なさそうに席に着き、カオスに今の出来事を見なかったことにする歴史改変をさせた。

「…ソラ、お前、転生前に家族は？」

アルフォスは今の行動の心理を問うためにこの質問をする。

「私が生まれた時にはいなかった。施設で育てられて、高校生になったと勝手に捨てられた。」

ソラは何ともなしに質問に答えるとチョコレートの銀紙をはがした。

「わかった、じゃあ今の事は許そう。」

『一応血縁関係皆無とは言え、その少女は汝という家族ができて少なからず喜んでいるのではないか？』

真面目に戻ったカオスが言う。

「（それはどうだか。）」

『いつか仮の家族ではなく本当になるかもしれないな。』

「（それはどういう意味だ？）」

『心に傷を負っている彼女の目の前から汝がいきなり消えたらどうなると思う？』

「（あ…）」

『フツ、そういうことだ。いつの間にか汝はこの少女と暮らしているかもしれないぞ？』

汝がスレイだったところに願ったことは全て叶わなかった。しかし、新しい未来を手に入れた汝なら、スクルドとはなくとも『誰かと2人、平和に暮らす』という願いは叶えられるはずだ。戸籍上兄妹だから付き合えない？社長を使えばいいだろう。

「ありがとう。でもアルフォス、どうして私にそこまで協力してくれるの？」

「…言っただろう？『神は気まぐれ』。それだけさ。今はその気まぐれで少女の仮の兄になってしまったがな。」

せっかく手に入れた自由と未来。少しくらいロキと同じように気まぐれになっても、誰も文句は言わないはずだ。

「…嫌？」

「さあ？気まぐれだって。嫌いになるかもしれないし、好きになる

かもしれない。全部オレの自由。」

アルフォスは再び席を立つ。

「そういうわけだ、ではな。」

そのままアルフォスはどこかへ気の向くまま歩いて行ってしまった。

「ねえソラ、今のソラのお兄ちゃんでしょ？」

「え？あ、うん。」

その瞬間に、さっきのアルフォスが言った『戸籍上だけだから別に付き合ってもとやかく言われたりはしないかもな。』という言葉が蘇る。

尤も、この学園の中では本当の兄妹で通っているから無理な話だが。

「すっごくかっこいいよね〜！！おまけに学園最強、言うことなしだよ。」

「そう…だね。」

ソラは少しだけ俯いた。

「兄…か。」

『アルフォス。汝は血縁関係くらいどうとでもできるのだろう?』

「当然。神力の情報を参考にした人間のものを書き換えれば。そう  
なると、参考にした人間にかなり似た兄弟になるんだが…。」

『そのくらいはしてやればいいだろう。』

「冗談。そこまでする必要はどこにもあるまい。」

『似ていないのでは怪しまれないか?』

「さあな。似ていない兄妹など星の数ほどいるだろう。」

「キツヒヤツヒヤ、歴史改変までするなんて、アルフォス。そうと  
うあのソラってやつのこと気に入ってるみたいだね。」

聞きなれた嘲笑するかのような笑い声が聞こえ、白いローブを身に  
まとったロキが現れた。

「オレの自由だ。」

『ロキか。どうだ、汝は我と賭けをする度胸はあるか?』

カオスはロキに賭けの話を持ちかける。

「内容によるね。」

『簡単だ。ソラがアルフォスの彼女ルートで終わるか妹ルートで終  
わるか。』

「へえ、面白そうだね。」

「何を賭け事に行っているんだか…。」

アルフォスはため息をつき、呆れ顔になる。

「じゃあ僕は妹ルートで。」

『では我は彼女ルートだな。』

「オレはアルフォスⅡルヴォルグ失踪&ソラⅡルヴォルグ自殺ルートで賭けるかな。」

アルフォスは何気なく言った。

「なんでそんなシリアスなルートでしか賭けができないんだよ!？」

ロキはアルフォスの事を軽く殴る。

「良いじゃないか、少しくらい冗談を言ったって。」

「ふざけんな、今のどこが『少し』なんだよ!」

「意外と現実になりそうだし。オレが裏の世界へ旅に出る時とか。」

『何!?あの少女は連れて行かないのか?』

「その時にならないとわからんな。」

その場に静寂が訪れる。聞こえるのは風の音のみ。3人…若干1名

はビー玉…もとい水晶だが、その表情に影が差す。

「…アルフォス。あの子の事、どうするつもりなの？」

「…何、見捨てやしないさ。約束してしまったからな。『困った時は力を貸す』って。」

「でもあの子は、アルフォスが居なくなったら途端に壊れると思うよ？」

「それなら、死ぬまでだろう？ソラの方がオレより早く寿命を迎えるのは確実だ。残酷な現実だがな。」

大体、出会ってからたった1日しか経っていないオレの事をここまです信用する人間がいるのも珍しい。

「これで恋まで発展したら…。」

ロキはいつになく真剣だ。神と人間のそういう関係では、やはりロキは実体験があることから表情が曇る。

「ああ、尚更残酷だろうな。オレは年を取らずに容姿もそのままだが、ソラは…年を取り、容姿も変わってくる。」

少なくともオレからソラへってことは無いだろう。しかし…決して自惚れしているわけじゃないが、ソラからとなると…。

『有限だからこそ美しいものがある…か。オーディンもゼウスも良いことを言ったとは思う。しかし、こういう事はやはり永遠を望んでしまうのだろうな、永遠の生命を約束されている我らとしては。』

「そうだろうね……。」

オレ達3人はやり場のないこの謎の感覚に戸惑いながら話していた。

「おや、お困りのようだね。」

しかし突然、新しい声が1つ聞こえた。聞き覚えのある声だ。

「この嫌な声は…ヘイムダル。」

「嫌な声って言うなよ、今回はこのオレ、ヘイムダルが助言しに来てやったつてのに。」

「お前がオレに助言？」

「そ、親友が困ってるんだから助けるのは当然だろ。」

ヘイムダルが神々の消滅から逃れた方法は、『神として存在している自分』を殺し、天使に転生する事。記憶と容姿を引き継げるのがこの転生の利点。なぜか真実を知っていたヘイムダルは、アルフォスが暗黒城に向かったと知るや否や、すぐにこの禁忌の術に手を出したのだ。

「オレはお前の親友になった覚えはない。が、助言はもらおう。」

親友以前に友になった覚えもない。

「よし、よく聞け。まずは義妹をヤンデレラにアベシッ!？」



「死にたいの？」

ロキがヘイムダルを殴った後、剣を突き付けた。

「だって現実的じゃないか？あんなにかわいい女性を妹にしたアルフォスはやはり非リア充の敵だとギャアアアア！」

「真面目に話せ。オレの機嫌が悪くなる前にな。」

アルフォスはヘイムダルを殴り飛ばした。

「…コホン、じゃあ言うぞ。要はあの子も不老不死にしてしまえばいいのだッ！！」

「不老不死に？」

「そう、不老不死だ。妹は良いぞ。ゼウス様は姉よりも妹の方がよかったと言ってたし。」

ヘイムダルは髪をなびかせて優雅に語る。

「言っておくがなヘイムダル。かなりかっこいいように見えるが話している内容はどうしようもないことだからな？」

「うう…。」

ヘイムダルは少し落ち込んだ。しかし、メンタルの回復が異常なまでに速いヘイムダルなら多少メンタルを痛めつけても大丈夫だろう。

「それに、良い着眼点ではあるが、不老不死にする方法はどうする



「僕としては、妹が欲しければ飲ませればいいし。いらぬなら放つておけばいいと思うよ。さて、次の授業もあるし、セレナも待ってるし。僕はもう行くよ。」

ロキもこの場から去った。

.....。

「なあ、カオス。」

『なんだ?』

「ロキはこの薬が偽物っていう線を考えなかったのか?」

『そつち!?!』

「冗談だ。妹欲しいか?」

『欲しい。滅茶苦茶欲しい。血が繋がっていないのが残念だな。』

「何を言う、繋がっているではないか。」

『なんだと?それはどういう意味だ?』

「オレ達は人間を創った。なら、血ではなくとも神力や意思は繋がっていると思わないか?オレは創り出した人間たちを1度としてオレの子と思ったことは無い。だが兄弟くらいなら良いと思ってる。」

『ああ、なるほど。』

「ん？なんだこの紙切れは？」

アルフォスは足元に落ちていた紙切れを拾った。

“そうそう、確か3人でルートの賭けをしたな。オレは妹&彼女ルートに賭けるぜ！！”

「……………なあ、カオス。」

『なんだ、アルフォス。』

「やはりヘイムダルは死ぬべきだったと思う。」

『ああ、我もそう思ったところだ。』

アルフォスとカオスはこの謎の虚しさにガツカリするのだった。

次回へ続く。

## 第12話 休暇と新たな出会い（後書き）

次回「タツグマツチ ソラ&アルフォス」

アルフォス「今回は珍しくヘイムダルが出てきたな。」

ロキ「あいつも消滅を逃れてたのかよ。しぶとい奴だな。」

ソラ「……新キャラのソラ・ラルニグス・レライア改めソラ＝ルヴ  
オルグです。」

アルフォス「別にここではラルニグス・レライアでいいんだぞ？」

ソラ「いいの……。／＼／」

カオス「これは彼女ルートなのか？いや、妹でも結構……」

アルフォス「水晶叩き割るぞ。」

カオス「すみません。」

ソラ「じゃあ今日の最強カード。今日はコレ。」

「スターダスト・ドラゴンノバスター」  
レベル10 風属性 ドラゴン族・効果 ATK3000 DEF  
2500

このカードは通常召喚できない。「バスター・モード」の効果及び  
このカードの効果でのみ特殊召喚する事ができる。魔法・罠・効果

モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。また、フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、自分の墓地に存在する「スターダスト・ドラゴン」1体を特殊召喚する事ができる。

ソラ「試作デッキの切り札。」

アルフォス「アレで試作なのか。」

カオス「これは本当のデッキが楽しみだな。」

ロキ「そうそう、本編で言ってたソラのルートの話だけど、読者の皆様も予想してみてくださいね。キッヒャッヒャッヒャー!!」

1、妹ルート

2、彼女ルート

3、アルフォス失踪&ソラ自殺ルート

4、彼女&妹ルート

5、その他

カオス「なんで読者まで巻き込むしww」

アルフォス「そもそも予想するのが間違っているのだと」ry

ソラ「じゃあ、また次回。」

### 第13話 ソラ&アルフォス（前書き）

どうもです。今回もぶっ飛んでいますw

いやー、シリアスゾーンを抜けてかなり気楽です、今現在は。

最近の出来事

ついに始まってしまった学校。疲れたよ、パトラ（ry



### 第13話 ソラ&アルフォス

#### 昼休みの購買

「アルフォスは何にするの？」

「オレは何も食べない。ほら、さっさと決める。」

オレは再びソラの財布だ。ソラ曰く『兄妹なんだからいいでしょ？』  
だそうだ。

『汝も懐かれたな。』

「（認めたくないが、そのようだ。仮の戸籍でもここまで懐かれるとな…。周りの視線と殺気が痛い。）」

今日も結局菓子ばかりだ。少しくらいはまともなものを食べた方がいいんじゃないのかと思うが、オレが言えたことでもないしな…。

「で、オレに話があるんだろう？」

アルフォスは軽い笑顔でソラに聞いた。

「今日のタッグデュエル、私と組んで。」

「……………って言うてもなあ…オレも多数の生徒（主に女子）から誘いがあって…。」

「そんなの断ればいいでしょ？」

「……………（なあカオス。）」

『なんだ、アルフォス。』

「（認めたくないがお前の言う通りソラがヤンデレ化してきた気がする。）」

『……………言うな、何も。（……………フフフフ、悪いがアルフォス。我が記憶改変でソラと汝に『ソラはアルフォスの実の妹』という設定を付け加えさせてもらった。汝には通用しなかったらしいが、これは我には好都合。グフフ）』

当然アルフォスは、ソラがこんなになってしまった理由の根源がこんなところにいるとは知る由もない。しかし、もしアルフォスにバシたら、『天地が裂け空と海が荒れ狂う制裁』を食らうだろう。だが今現在、カオスの『危険な妹計画』は確実にカオスの思惑通りに進んでいた。ある意味では暗黒神より夕チが悪い。

「……………退く気はないのか？」

「そんなの無い。」

「……………（まあ、他の連中はオレと組めば勝てると思っているような連中ばかりだ。）わかった。」

アルフォスは表情一つ変えずにただ了解の言葉を言う。

「それでいいの。」

ソラは満足したような笑顔になると、チーム登録をするためにデュエル場前に言った。

「カオス、ソラがああなった理由を知らないか？昨日別れる直前までまだ他人のよう振る舞いだったはずなのに、なぜか『元から実の兄だったような振る舞い』をしてくるぞ？」

『我は知らんな。』

カオスはただ知らないフリをする。

「そうか、ならいいんだ。」

しかしカオスは分かっていたいなかった。この計画が99%うまく行っても、残り1%で崩れ落ちることに。

「さて、ソラを怒らせないうちに行くか。」

なんだかんだ言っても、ソラの事を実の妹のように扱うアルフォスだった。

『なんだ、ソラの事気に入っていたのか。』

「悪い性格ではないからな。」

これが一見大人しそうに見えるあの容姿で暴れ馬だったらと考えるみるがいい。ゾツとする。

## デュエル場

「遅いッ！！」

デュエル場にきたアルフォスにソラが放った第一声がこれだ。

「…5分も経ってないぞ。」

実際にはソラが登録しに行ってから5分も経っていなかった。人はこれを理不尽と言わずしてなんとという？オレは人じゃないからどうともいえないが。

『タッグデュエル開始5分前です。第1回戦の生徒はデュエル場にかかるように。』

アナウンスが入った。15組の生徒がデュエル場にかかる。ちなみにクロノスは忙しいらしく、鮫島と共に校長室を離れられない。

「行くよ、アルフォス。」

ソラはアルフォスの手をつかんで引張ってデュエル場まで走った。これでアルフォス達を含め16組。ちなみに今回のタッグマッチ、実技成績優秀者上位32名がタッグを組んで参加するというもの。アルフォスは実技なら間違いなくトップなので、ソラを除く残り30名がアルフォスと組みたがるのは当然だった。

「やれやれ。」

『まあいいではないか、一応妹なのだからな。』

アルフォスがソラの事を本当の妹の様に扱うのは、ただ単にソラを気に入っているからではない。アルフォス自身の閉ざされた空の精神を埋めるためでもある。逆に言えば、スクールですら開けなかったアルフォスの固く閉ざされた心の扉をソラはこじ開けた。

「まあ一応な。」

しかしアルフォスは人前でそれを認めようとは絶対にしないが。

『そろそろ時間だぞ。』

「わかっている。」

既にオレ達の前にいる2人組は用意している。が、当然オレ達に勝てるはずもなく…というか、オレの出番はほとんどなかったが。決勝戦まで楽に勝ち上がることができた。

「決勝の相手、誰だ？」

デュエル場に上がりながらそんなことを呟く。しかしそれは相手に聞こえたらしく…。

「オレだぜ、アルフォス。」

良く聞きなれた声でした。決勝の相手はなんと、ロキとリマだった。

「キツヒヤツヒヤツヒヤ、ここまでアルフォスはほとんど何もせず



神獣王バルバロス ATK1900 2100

「『獣神の矛』の効果発動。レベル8以下の『神』と名のついたモンスターに装備されたこのカードは、1ターンに1度、装備モンスターの効果を無効にしてデッキから2枚ドローできる。」

神獣王バルバロス ATK2100 3200

「装備魔法『獣神の盾』。こいつをバルバロスに装備するぜ。こいつはバルバロスがフィールドを離れる場合、代わりに破壊し、デッキからカードを1枚ドローするカードだ。」

獣神機王バルバロスURだったら、ドラグニルの召喚条件が簡単に整ったんだが：ま、バルバロスが来ただけでも良しとしよう。

「ターンエンド。」

L o k i & a m p ; L i m a

L P 8 0 0 0

H a n d : 5

フイールド

神獣王バルバロス ATK3200

魔法・罨

獣神の矛

獣神の盾

「私のターン。」

ソラはドローすると、一瞬アルフォスを見てから手札を見た。

「チューナー『極天将ディオメデス』召喚。」

いかにも英雄という格好の人間の戦士が現れた。

「カードを2枚伏せてターンエンド。」

Alfos & amp; Sora

LP8000

Hand: 3

フィールド

極天将ディオメデス ATK1000

極星獣タンゲリスニ ATK1200

魔法・罫

伏せ: 4

「キツヒヤツヒヤ。僕の、ターン!! ソラ、所詮お前の力じゃ僕にかなわないことを教えてやる!僕は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚。そして『ダーク・リゾネーター』を召喚。レベル5『バイス・ドラゴン』にレベル3『ダーク・リゾネーター』をチューニング!王者の鼓動、今新たな世界の扉を開く!!修羅の波動と共に現れる、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』!!」

オレは見慣れた悪魔竜が出現した。だが、ロキはレッド・デーモンズ・ドラゴンを召喚しただけでターンエンドした事は無い。

「『紅蓮魔竜の壺』を発動、僕はデッキから2枚ドロ。そして『レッド・ノヴァ』『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に『レッド・ノヴァ』と『クリエイト・リゾネーター』をチューニング。真紅の超新星、悪魔と王者の波動と共に降誕せよ。シンクロ召喚、来い『スカーレット・ノヴァ』



ドラゴン『ッー!』

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK3500 5000

「カードを3枚伏せてターンエンド!」

Loki & Lima

LP8000

Hand: 0

フィールド

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK5000

神獣王バルバロス ATK3200

魔法・罫

獣神の矛

獣神の盾

伏せ: 3

「オレのターン。」

奴らのフィールドにはスカーレット・ノヴァ・ドラゴンとバルバロス、オレ達のフィールドにはタンギリスニと見たこともないソラのモンスター。

「オレはタンギリスニを守備表示に変更し、ターンエンド。」

Alfos & Sora

LP8000

Hand: 4

フィールド

極天将ディオメデス ATK1000

極星獣タンギリスニ DEF 800

魔法・畏

伏せ：4

「オレのターン。オレは『神獣の盾』の第2の効果を発動。バルバロスの守備力を攻撃力に加える。よって攻撃力1200ポイントアップ！」

神獣王バルバロス ATK 3200 4400 DEF 1200 0

「攻撃力4400だと!!!」

「バルバロスでディオメデスを攻撃。トルネード・シエイパー!!!」

「させない。トラップ発動、『天の加護』。ディオメデスへの攻撃を無効にして、デッキから『アローアダイ』と名のついたモンスター1体を特殊召喚。『アローアダイ・エピアルテス』。」

アローアダイ・エピアルテス ATK 1000

「!!!『神獣の矛』の効果でデッキからカードを2枚ドロし、1枚伏せてターンエンド。」

L o k i & a m p ; L i m a

L P 8 0 0 0

H a n d : 6

フィールド

神獣王バルバロス ATK 4400

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK 5000

魔法・畏

獣神の矛  
獣神の盾  
伏せ：4

「私のターン。『アローアダイ・オートス』を召喚。レベル3の『アローアダイ・オートス』、『アローアダイ・エピアルテス』にレベル4の『極天将ディオメデス』をチューニング。」

次の瞬間、神々しい光が天空に解き放たれた。

「遙か空、大地を眺める戦神よ。天地荒れ狂う戦に終止符を打つため、その力を振るえ。シンクロ召喚。光臨せよ、『天神皇アレス』」

天神皇アレス ATK3500

天が真つ二つに裂け、青銅の鎧を身に着けた恐ろしく不敵な美貌を持つ神が出現。しかし、その表情には狂乱の笑みが浮かんでいた。またその手には、巨大な槍が握られている。

『天神皇アレス』

レベル10 神属性 幻神獣族 ATK3500 DEF3500  
チューナー+チューナー以外のモンスター2体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを全てゲームから除外する。1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる。このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。このカードは相手のモンスター効果を受けない。このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを墓地から特殊召喚する。この効果によって特殊召喚に成功した時、このカードの攻撃力と守備力を500ポイントアップする。

「『天神皇アレス』…。」

ロキは目を丸くした。

「アレスの効果。1ターンに1度、相手モンスター1体を破壊する。  
『神獣王バルバロス』を破壊。ブレイクスピア。」

天神皇アレスはその手に持つ槍で、バルバロスを貫く。

「『獣神の盾』の効果発動！このカードを代わりに破壊し、デッキから1枚ドローする。」

だが、獣神の盾がひとりでバルバロスの盾になり、代わりに砕け散った。

神獣王バルバロス ATK4400 3200

「『天神皇アレス』でバルバロスを攻撃。ウォーエンド・スピア。」

アレスはその手に持つ巨大な槍で、再びバルバロスを貫いた。

「ぐああああああああああああああ！！」

その衝撃がリマを襲い、リマは吹き飛んだ。

L o k i & a m p ; L i m a LP8000 7700

「バ…かな、現実のダメージ!?」

「リマ、油断するなよ?」

ロキはリマに重い声で一言投げかけた。

「アレは普通じゃない。間違いなく神の力を宿してる。」

300のダメージであれだけの衝撃ってことは、三極神を圧倒的に超えるくらいの力はある。

「トラップ発動、『天の鼓動』。幻神獣族モンスターが相手モンスターを破壊した時、デッキまたは手札からレベル5以下のモンスター1体を特殊召喚。レベル5チューナー『極天将カリスト』。」

女神のような雰囲気を漂わす少女が現れた。

極天将カリスト ATK2000

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

Alfos & Sora

LP8000

Hand: 2

フィールド

天神皇アレス ATK3500

極天将カリスト ATK2000

極星獣タンギリスニ DEF800

魔法・罫

伏せ: 2

「僕のターン!!!」

まさか、ソラが神を持っていたとはね。流石の僕もびっくりだ。

「トランプ発動、『真紅の軌跡』、『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』がいる時、デッキからチューナーを1体特殊召喚する。来い、『フォース・ノヴァ・フォーチュン』。更に手札から魔法発動、『紅蓮魔竜の導き』。デッキから『スカーレット・ノヴァ・フェアリー』を特殊召喚。」

「来るか…!!」

ロキの切り札、七聖龍の1体が。

「レベル12の『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』にレベル0の『フォース・ノヴァ・フォーチュン』と『スカーレット・ノヴァ・フェアリー』をチューニング。七聖龍の一角、紅蓮の悪魔を進化の糧とし、この次元に姿を現せ。シンクロ召喚。光臨せよ!!『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』!!!」

天空が深い赤に染まり、天を覆い尽くすほど巨大な、濃く明るい赤の竜が出現した。

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン     ATK4000

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』の攻撃力は僕の墓地のチューナー×1000ポイントアップする。」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン     ATK4000     9000

「さあバトルだア!!! キツヒヤッヒヤッヒヤ!!!」

「バトルフェイズ開始時に『極天将カリスト』の効果発動。このターン、『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』は攻撃できない。」

「極天将カリスト」

レベル5 光属性 天使族・チューナー/効果 ATK2000

DEF1500

1ターンに1度、相手のバトルフェイズ開始時に発動する事ができる。相手モンスター1体を選択する。選択したモンスターはこのターン攻撃できない。

「何：！クソツ、僕はこのままターンエンド。」

L o k i & a m p ; L i m a

L P 7 7 0 0

H a n d : 0

ファイルド

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン ATK9000

魔法・罫

伏せ：2

「オレのターン。」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンの攻撃力は9000、対して天神皇アレスの攻撃力は3500。リマも攻撃力3500など軽く超えることができるだろう。：まあ、ソラも第1の切り札を出したことだし、オレがソラに切り札が何であるか秘密にしているのはフェアじゃない。

「オレは『極星霊リヨースアールヴ』を召喚する。このモンスター  
の召喚に成功したことで、『極天将カリスト』を選択。そのレベル  
以下の『極星』を手札から特殊召喚。来い、『極星天ヴァルクユリ  
ア』。」

「でもアルフォス。それじゃあレベルの合計は9、お得意のオーデ  
インは召喚できないよ？キツヒヤツヒヤツヒヤ。」

ロキは勝ちを確信した顔で言い放つ。だがわかっていなかった。

「ロキ、オレは三極神もシンクロモンスターも呼ぶとは言っていな  
い。」

アルフォスはすでに、ロキの想像をはるかに超えた力を持っていた  
ことを。

「『極星獣タングリスニ』『極星霊リヨースアールヴ』『極星天ヴ  
アルキュリア』を我が神の供物とし…。」

フィールドから、ソラの時とは比べ物にならない光が玉になって外  
に飛び出した。

「エクストラデッキから『究極神帝オベリスク』を特殊召喚する。」

そして、青い光がこの次元を一瞬だが包み込み、光が静まり、そこ  
には…。

究極神帝オベリスク ATK4000

0.5kmほどの神が出現していた。



「キツヒヤツヒヤツヒヤッヒャー！！究極神とは言っても攻撃力は4000、攻撃力8000だったころよりもはるかに弱体化してるじやん。キツヒヤツヒヤツヒャー！！その上、かつての地球に納まりきらなかった大きさはどこへ行ったのかな？」

「フツ、大きければいいと言う物ではない。」

そう、確かに究極神の大きさは大幅にダウンした。それこそ500km以上もあつた巨体が今は500m程度。ロキが笑うのも仕方ない。だが…

「しかしこれでも、一撃で恒星を粉碎するほどのパワーがある。かつての究極神とは比べ物にならないぞ？」

ラーに至っては効果を使用しなくとも攻撃だけで太陽系が吹き飛ばさるだろう。

「『究極神帝オベリスク』でリマにダイレクトアタック。アブソリュート・クラッシュャー！！」

オベリスクの拳はリマやアカデミアの校舎に触れることなく、ただ空を切るだけだった。だが、その衝撃波はリマを容赦なく襲いかかる。

「うああああああ！！？」

L o k i & a m p ; L i m a    L P 7 7 0 0    3 7 0 0

再度リマが吹き飛んだ。また、アカデミアの校舎そのものも多少だ

が揺れる。

「ソリッドビジョンでよかったな、ターンエンドだ。」

Alfos & amp; Sora

LP 8000

Hand : 3

フィールド

究極神帝オベリスク ATK 4000

天神皇アレス ATK 3500

極天将カリスト ATK 2000

魔法・畏

伏せ : 2

「オレの……ターン。…来たぜ！！魔法カード『おろかな埋葬』！  
デッキから『獣神機王バルバロスUr』を墓地へ送る。そして墓地  
の『獣神の矛』『獣神の盾』『獣神機王バルバロスUr』をゲーム  
から除外して、『神竜王ドラグニル』を特殊召喚！！」

神竜王ドラグニル ATK 4000

後頭部に白い輪が浮いており、体の関節部分には棘のついた輪を装  
備し、全体的に白い神々しい巨大なドラゴンが現れた。大きさはオ  
ベリスクにこそ及ばないがアレスと同等だ。

「ドラグニルの効果発動。墓地から『神』と名のつくモンスターを  
全てゲームから除外し、1体につき1000ポイント攻撃力をアツ  
プする。バルバロスとバルバロスUrを除外し、攻撃力2000ア  
ツプー！！」

神竜王ドラグニル ATK4000 6000

「更にトラップ発動。『神の施し』、ゲームから除外された『神』と名のつくレベル8以下のモンスター2体をデッキに戻して、デッキからカードを2枚ドローする。」

「『神』と名のついた罠が墓地に…。」

「そう、これでドラグニルの第2の効果が発動できる。墓地の『神』と名のついたトラップ1枚を除外し、相手フィールド上のカードを全てデッキに戻す！！ドラグニルストーム！！」

アレスはドラグニルの嵐を槍で防いだが、その他のカードは全てデッキに戻った。

「ドラグニルで『天神皇アレス』を攻撃。ドラグノフ・カノン！！」

今度はドラグニルの強大な熱線がアレスを襲い、アレスは耐えきれずに倒れた。しかし、ソラに向かうはずの衝撃は、ソラの目の前に出現した青い障壁によって防がれてしまった。

「ダメージが通らない！？なぜだ…！！」

「??？」

ソラも必要な事以外は一切喋らないが、驚いた表情をした。

「神は死してなお強大な守りを残す。神がフィールドを離れたターン、オレ達が受ける戦闘ダメージを0にする。」

「クツ：ターンエンド。エンドフェイズにオレの手札は8枚、手札から『神禽王アレクトール』『神機王ウル』を墓地へ送る。」

リマは顔をしかめて手札を2枚墓地へ送った。

「オベリスクはエンドフェイズ時、オレのライフ半分を払ってフィールドに戻る。」

「同時にアレスの効果も発動。墓地へ送られたターンのエンドフェイズに特殊召喚され、攻撃力と守備力を500アップ。」

Alfos & Sora LP8000 4000

オベリスクが時空の壁を破壊して出現した。アレスは天空より再度舞い降りた。

究極神帝オベリスク ATK4000

天神皇アレス ATK3500 4000

Loki & Lima

LP3700

Hand: 6

フィールド

クリムゾン・スーパードラゴン ATK9000

神竜王ドラグニル ATK6000

魔法・罫

伏せ: 1

「私のターン。魔法カード『純潔の啓示』を発動。幻神獣族モンスターがいる時、デッキ・手札からレベル5以下のモンスター2体を特殊召喚できる。但し効果は無効になって、攻撃力と守備力は0に

なる。『極天将カリスト』 『嘆きのイピゲネイア』を特殊召喚。そして『復讐のオレステース』を通常召喚。レベル3『嘆きのイピゲネイア』とレベル2『復讐のオレステース』にレベル5の『極天将カリスト』をチューニング。』

光が今にも消えてしまいそうに儚く舞う。しだいにその光は強く輝き、一瞬の閃光の後消え去った。

「月を司る遙か天空の女神よ。星の嘆きを聞き、天地を振るわせ光臨せよ。シンクロ召喚。『天神皇アルテミス』。』

遙か空より降誕したのは、神々しい光を放つ女神だ。その手には宝玉が埋め込まれた杖が握られている。

天神皇アルテミス ATK3500

『天神皇アルテミス』

レベル10 神属性 幻神獣族・シンクロノ効果 ATK3500  
DEF3500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体

1ターンに1度、デッキからカードを1枚ドロウする事ができる。

また、1ターンに1度、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択し、エンドフェイズ時まで選択したカードの効果を無効にする。このカードは相手のモンスター効果を受けない。このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを特殊召喚する。この効果によって特殊召喚した場合、相手フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力を次のエンドフェイズ時まで0にする。

「『天神皇アルテミス』の効果発動。1ターンに1度、デッキからカードを1枚ドロウ。更に第2の効果で『クリムゾン・スパーノ

ヴァ・ドラゴン』の効果を終フェイズ時まで無効にする。」

「なっ!！」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン ATK9000 4000

「『天神皇アレス』の効果発動。1ターンに1度、相手モンスターを破壊できる。『神竜王ドラグニル』を破壊。ブレイクスピア」

神竜王ドラグニルは槍の一突きで地に沈んだ。

「更にアレスで『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』に攻撃。ウォーエンド・スピア」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンが炎を吐き、天神皇アレスは槍でクリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンを貫いた。結果は相打ち、互いに破壊される。

「くっ…よくも僕の『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を…ッ!！」

本来クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンには墓地のチューナーを除外する事でフィールドを離れない効果がある。でも、それはアルテミスの効果で無力化された。よくもやってくれたな…ッ

「『天神皇アルテミス』でロキにダイレクトアタック。ジャツジメントブレイク」

「ぐあああああああっ!！」

L o k i & a m p ; L i m a L P 3 7 0 0 2 0 0

「そしてエンドフェイス、『天神皇アレス』復活。カードを伏せて  
ターンエンド。」

天神皇アレス ATK3500 4000

A l f o s & a m p ; S o r a

L P 4 0 0 0

H a n d : 0

フィールド

究極神帝オベリスク ATK4000

天神皇アレス ATK4000

天神皇アルテミス ATK3500

魔法・罫

伏せ：1

「僕のターン。」

ロキの緑色の瞳が紫に変わった。

「『クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴン』を倒すなんてやるじ  
ゃん…。『リビングゲットの呼び声』発動。『レッド・デーモンズ・  
ドラゴン』を蘇生。」

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を蘇生だと？」

奴は何を狙っている…。

「ソラ…この僕に対して傷を負わせたこと…後悔させてやる。」

ロキから重いプレッシャーが放たれる。ロキも神だ。人間がそのプレッシャーを受けてまともにはいられるわけがない。

「う……………あ…」

「大人げないな、ロキ。」

アルフォスは呆れた表情でロキを見る。

「僕は『シンクロ・チェンジ』を発動。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を除外して、エクストラデッキから同じレベルのシンクロモンスター『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する。そしてトランプ発動、『シンクロリンク』。墓地から『スカールレッド・ノヴァ・フェアリー』と『フォース・ノヴァ・フォーチュン』を除外して、デッキから2枚のチューナーを手札に加える。そして、『フレアスター・フォーチュン』と『スターダスト・フェアリー』を特殊召喚。この2体のチューナーは、フィールドにスターダストがいる時特殊召喚できる。」

「超重量級シンクロモンスターの七聖龍を2体も…。」

クリムゾン・スーパーノヴァ・ドラゴンだけでも召喚するための消費は重い。ロキはそれを超え、複数の七聖龍を操るつもりか…。

「レベル8の『スターダスト・ドラゴン』にレベル2の『フレアスター・フォーチュン』と『スターダスト・フェアリー』をチューニング。大いなる銀河の導き、燃え盛る炎と共に、我に進むべき道を示せ。シンクロ召喚!!!七聖龍が一角、『アルティメット・フレアスター・ドラゴン』!!!!」



天空が激しく燃え、全長50kmはあるであろう燃える星を胸の部分に埋め込んでいる巨大な竜が出現した。スターダスト・ドラゴンに似てはいるが、その体の鋭さや、翼や関節部分にある棘がその姿を見たものを恐怖させる。

アルティメット・フレアスター・ドラゴン ATK5000

「攻撃力5000…。」

「キツヒヤツヒヤツヒヤ！これが最強の七聖龍だ。シンクロ素材になった『スターダスト・フェアリー』『フレアスター・フォーチュン』の効果。こいつらが同時にシンクロ素材になった時、手札が5枚になるようにカードをドロー。」

ロキは手札が0だったために、カードを5枚ドローした。

「『アルティメット・フレアスター・ドラゴン』の効果発動。1ターンに1度、墓地に存在する七聖龍及びその素材になったシンクロモンスターを全てゲームから除外して、その攻撃力を『アルティメット・フレアスター・ドラゴン』に加える。『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』と『クリムゾン・スーパードラゴン』、『スターダスト・ドラゴン』を除外。」

アルティメット・フレアスター・ドラゴン ATK5000 15000

『アルティメット・フレアスター・ドラゴン』

レベル12 神属性 ドラゴン族・シンクロ/効果 ATK500

0 DEF5000

『スターダスト・ドラゴン』 + 『スターダスト・フェアリー』 + 『フレアスター・フォーチュン』

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。1ターンに1度、自分の墓地に存在するレベル12の神属性ドラゴン族シンクロモンスター及び、そのシンクロ素材になったシンクロモンスターを全てゲームから除外する事で、その攻撃力の合計分このカードの攻撃力をアップする。このカードの効果は無効化されず、コントロールを変更されない。また、このカードが相手の魔法・罠・効果モンスターの効果によって自分フィールド上を離れる場合、代わりに自分のライフを半分にする事ができる。このカードが自分フィールド上を離れた時、フィールド上に存在するカードを全てゲームから除外し、ゲームから除外されている『スターダスト・ドラゴン』1体を特殊召喚する。この効果によって特殊召喚した『スターダスト・ドラゴン』は魔法・罠・効果モンスターの効果を受けず、攻撃力が4000になる。

「バトルだア！！」アルティメット・フレアスター・ドラゴン」で  
『天神皇アルテミス』を攻撃！！」

「バトル開始時、トラップカード『ゴッドミラーージュ』を発動。このターン幻神獣族モンスターを攻撃対象にできない。」

「チツ：なら『究極神帝オベリスク』を攻撃！！悪いねアルフォス、これで11000のダメージが通れば僕の勝ちだ。ギャラクシー・エンド！！」

アルティメット・フレアスター・ドラゴンは胸の部分の燃える星から、巨大な炎の球を生み出し、オベリスクに向けて放った。

「神が戦闘を行うことによって発生するオレへの戦闘ダメージは0

になる。」

オベリスクは破壊されたが、その超過ダメージは青い障壁によって防がれた。

「どこまでも僕の邪魔を……！！ターンエンドッ！！」

「このエンドフェイズ、『究極神帝オベリスク』はライフを半分払いフィールドに戻る。」

Alfos & Sora LP4000 2000

Loki & Lima

LP200

Hand: 5

フィールド

アルティメット・フレアスター・ドラゴン ATK15000

魔法・罫

リビングデッドの呼び声

「オレのターン。ソラがここまで本気を出して戦ったからな。オベリスクの効果を披露してやろう。」

「オベリスクの効果だと……。」

ロキとリマは突如放たれたアルフォスからのプレッシャーに驚いた。

「『究極神帝オベリスク』の効果。『天神皇アレス』『天神皇アルテミス』を生贄とし、相手フィールドのモンスターを全て破壊する。オメガバースト……！！」

オベリスクは2体の生け贄から力を得て、自身の10000倍の大きさの竜に拳からエネルギー弾を放った。

「『アルティメット・フレアスター・ドラゴン』は相手の魔法・畏・効果モンスターでフィールドを離れる時、代わりに僕のライフを半分にする。残念だったね。」

エネルギー弾がアルティメット・フレアスター・ドラゴンに当たり、天空を覆い尽くす爆発が起き、何も見えなくなる。ソリッドビジョンであるにもかかわらず、大気が揺れるほどのエネルギーが働いた。そして煙が晴れると、そこにアルティメット・フレアスター・ドラゴンの姿はなかった。

「なっ!?なぜだ、モンスター効果でフィールドを離れる時には…」

「そう、『モンスター』効果によってはな。神はフィールド上・墓地・除外ゾーンに存在する時、モンスターとして扱わない。よって『アルティメット・フレアスター・ドラゴン』の効果を適用できなかったということだ。魔法カード『死者蘇生』。『天神皇アレス』をオレのフィールドに特殊召喚し、ロキにダイレクトアタック。残念なのはお前の方だったわけだ、ロキ」

『究極神帝オベリスク』

レベル10 神属性 究極神帝族・神/効果 ATK4000 D  
EF4000

このカードは自分フィールド上に存在するモンスター3体を生け贄に捧げた場合のみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。ゲームから除外されている・フィールド上・墓地に存在する神はモ

ンスターとして扱わない。このカードが自分フィールド上を離れた場合、エンドフェイズ時にライフを半分にしてこのカードを自分フィールド上に戻す。神がカード効果によって自分フィールド上を離れたターン及び戦闘を行う場合、自分が受ける戦闘ダメージは0になる。自分フィールド上に存在するモンスター2体を生け贄にする事で、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。この効果を使用したターン神は攻撃できない。神がフィールド上に存在する限り、お互いにサレンダーできず、自分フィールド上のモンスターは攻撃できない。神は1ターンに1度しか特殊召喚できない。神の特殊召喚と効果は無効化されない。

「うわあああああああああああああ!!!」

L o k i & a m p ; L i m a L P 2 0 0 - 3 3 0 0

『勝者!!!アルフォス!!ルヴォルグ&ソラ!!ルヴォルグ!!!』

「やったねアルフォス!!!」

ソラがライトグレーの髪を揺らしながらハイタッチの構えをするので、対応してハイタッチしてやる。

「……………チツ」

ロキは舌打ちをするとすぐにどこかへ消えた。

「<sup>ラブラブな</sup>仲のいい兄妹に乾杯ってな。」

リマも頭を掻きながらデュエル場を去って行った。

「…さて、今日はオレも休みたいし、そろそろ行くかな。」

『全く疲れていない癖によく言う。』

「（ハツ、最後に天神皇がオレに使われまいとして抗ってきた。そいつを抑えるので、大分神力を持って行かれたからな。回復くらいはしておくべきだ。）」

『天神皇は汝の味方ではないか。』

「（そのようだ。どちらかというと、オレそのものよりも『究極神への反発』のようだ。オベリスクのコストになる時が、最も反発を感じた。）」

もつとも、天神皇と言ったところで通常の神のカードの力程度で究極神の力を払いのけられるわけじゃない。反発するだけ無駄だ。

『新たな神のカード…そしてそれを持つあの少女はおそらく何らかのキー。』

「（また新たな脅威が迫っているのか。それも、オレでさえ下手をすれば死にかねない脅威が。）」

『そういうことだ。しばらくの間、＜最強＞を名乗るのはやめておいた方が良くはないか？』

「（オレの中から闇の力が消えた途端、オレの力は一般的な最高神どころか上級神クラスまで墮ちた。＜最強＞なんて名乗れたものじ

やない。」

以前は使用できた重力操作による隕石魔法など使えやしない。これから戦う時は、魔法に頼らずにアーティスを使うか。三元聖相手に魔法のみで戦ったら一瞬で死ぬな。

今の状態でロキと互角以上に渡り合えるのは、究極神の補助があるからだ。それにデュエルではなくとも、魔力以外の力は落ちていないからな。

「人間にも上級神程度なら倒せる奴はいる。究極神があるとはいえ、油断するなよ?」

「（重々承知。）」

「…ス……フォス……アルフォス!!!」

「な、なんだソラ??」

見ると笑顔のソラがいた。

「なんだじゃない。何かご褒美」

「…わかった。じゃあコレな。」

まあ甘やかしてもいいか。そんな気持ちでカードを1枚渡す。

「…何この白紙のカード?」

「時が来ればわかるさ。デッキに入れておけ。」

この白紙のカードは、手札にある時に想像したカードになるという代物。コレ40枚でデッキを組むとどうなるかはわかるだろう。十代も真つ青のチートドロどころか、デッキにすら入れていない好きなカードを好きな時に引ける。もっとも、一度具現化した白紙のカードは、デュエル終了時まで白紙に戻ることは無いし、オリジナルの神のカードなどは無理だ。更に当然、禁止制限は適用される。3枚具現化したカードは、デュエル終了まで4枚目以降のカードにする事はできない。たとえば、『サイクロン』を3枚使用した場合、そのデュエル中で白紙のカードを新たな『サイクロン』にすることは不可能。制限カードなら1枚、準制限カードなら2枚までだ。

「じゃあ夜ご飯も一緒に」

「オレは何も食べない。」

『で、何が来るかはわからないが新たな脅威に対する対抗策のようなものはあるのか？』

「（あるわけないだろう。その時はその時、その時が来たら考える。）」

「そんなあ…アルフォス…!!」

ソラはアルフォスの腕をつかんで離そうとしない。

『ソラに付き合ってやれ。神力の素早い回復には、外部からエネルギー摂取も高い効果がある。』

「（別に今すぐに敵が攻め込んでくるといつわけでもないだろうに…やれやれ。）わかった、行ってやるよ。」



「さっすがアルフォス！アルフォスの奢りね」

ソラはOKの返事を聞いて満足したのか、とびきりの笑顔でアルフォスの手をぐいぐい引っ張って寮ではなく共通の食堂に連れて行った。食堂というよりも、雰囲気は超高級レストランみたいところで、最近海馬コーポレーションが新しく学園の設備として付けたものだ。流石に寮だけではスペースが足りなくなったらしい。

「まったく。」

『汝が手を焼くとは…。新たなる脅威よりもこの少女の方がある意味脅威だな。』

「（ハハハツ、否定できないな。）」

笑い飛ばすアルフォスだが、その声は結構シャレにならなさそうな感じではある。だがどこか楽しそうだ。

「アルフォスは何にするの？」

メニューを見て考える素振りをしていたソラが聞いてきた。

「ソラに任せる。」

「え〜…（アルフォスが頼んだのと同じにしようと思ったのに…）じゃあ最高級仔牛のフィレステーキ〜フォアグラソース モッツアレラチーズを添えて〜ってやつ。」

ソラはシルバー、ゴールド、プラチナの色分けがされたメニューの

内プラチナメニューの本を開いていた。アルフォスは同じものを開いてソラの言ったメニューを見る。

『¥200000 or 500000DP』

「まあいいが、それだけか？」

「じゃあ普通のご飯とサラダつけて。」

「わかった。」

ちなみに、プラチナクラスのメニューを頼む生徒なんて企業の御曹司とかそういうレベルの生徒ばかりだ。シルバーはかなり一般的なもので、注文量では一番多い。

食事中……

「50000円、もしくは118000DPになりますか？」

「DPで」

デュエルディスクを差し出し、118000DP引いてもらう。デザート一品4500円……DP換算で90000DPってどういふことだ。あ、ライスとサラダは付け合せてことでタダだった。

「ごちそうさまでした。じゃあまたね、アルフォス。」

それだけ言うと、ソラはさっさと行ってしまった。

「嵐のような奴だ…。」

『良いではないか。仲が良いというのは。』

「まあそりゃあそつだが…。」

だが、その後珍しくブルー寮に戻ったアルフォスが自室で見たものは…。

「ソラアアアアアアアアアツ！！女子寮へ、戻れエエエエエエエエ！！」

なぜかブルー男子寮のアルフォスの部屋のベッドで寝ているソラだった。

次回へ続く。

### 第13話 ソラ&アルフォス（後書き）

次回「兄妹デート!?!」

アルフォス「…………あのさ、次回の「兄妹デート!?!」って、兄妹だとデートって言わくないか?」

カオス「知らん、そんなこと。」

ソラ「今日の最強カードはコレ。」

『究極神帝オベリスク』

レベル10 神属性 究極神帝族・神/効果 ATK4000 D  
EF4000

このカードは自分フィールド上に存在するモンスター3体を生け贄に捧げた場合のみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。ゲームから除外されている・フィールド上・墓地に存在する神はモンスターとして扱わない。このカードが自分フィールド上を離れた場合、エンドフェイズ時にライフを半分にしてこのカードを自分フィールド上に戻す。神がカード効果によって自分フィールド上を離れたターン及び戦闘を行う場合、自分が受ける戦闘ダメージは0になる。自分フィールド上に存在するモンスター2体を生け贄にする事で、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。この効果を使用したターン神は攻撃できない。神がフィールド上に存在する限り、お互いにサレンダーできず、自分フィールド上のモンスターは攻撃できない。神は1ターンに1度しか特殊召喚できない。神の特殊召喚と効果は無効化されない。

『アルティメット・フレアスター・ドラゴン』

レベル12 神属性 ドラゴン族・シンクロ/効果 ATK500

0 DEF5000

『スターダスト・ドラゴン』 + 『スターダスト・フェアリー』 + 『フレアスター・フォーチュン』

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。1ターンに1度、自分の墓地に存在するレベル12の神属性ドラゴン族シンクロモンスター及び、そのシンクロ素材になったシンクロモンスターを全てゲームから除外する事で、その攻撃力の合計分このカードの攻撃力をアップする。このカードの効果は無効化されず、コントロールを変更されない。また、このカードが相手の魔法・罫・効果モンスターの効果によって自分フィールド上を離れる場合、代わりに自分のライフを半分にする事ができる。このカードが自分フィールド上を離れた時、フィールド上に存在するカードを全てゲームから除外し、ゲームから除外されている『スターダスト・ドラゴン』1体を特殊召喚する。この効果によって特殊召喚した『スターダスト・ドラゴン』は魔法・罫・効果モンスターの効果を受けず、攻撃力が4000になる。

カオス「どちらも強力な効果を持ち合わせており、召喚もしやすい。現実であれば、制限か禁止だろうな。」

アルフォス「『モンスターとして扱わない』っていうのは特殊で、ブラック・ホールなどの『モンスターのみに影響を及ぼす効果』、究極神オベリスクを参照とする『モンスターの攻撃力増減』は効かないということになる。後者は主にオネストや邪神アバターなんかのことだな。」

カオス「最強の七聖龍、これどうやって倒せばいいのだ？」

ソラ「七聖龍って全部ロキが持つてるの？」

アルフォス「そのようだぞ。ところで『危険な妹計画』とはなんだ？」  
「ここで話しても本編では知りません。」

カオス「ふむ…つまり兄妹で恋愛させて『自主規制』に持つて行ってR-18タグをつけ」

アルフォス「よし、それ以上は言わなくていい。」

ソラ「変態。『自主規制』にはどんなに頑張ってもいけないから。何より、私、そこまでは行かないし。」

アルフォス「オレには生命体としての器官が無いからな。残念でした。目や鼻、耳、口、手足なんかは生命体じゃなくともアンドロイドやロボットとかあるからこの限りじゃないが。」

カオス「…そんな、バカな…。アルフォス、お前今すぐ男になれ。」

アルフォス「無理。まず生命体の概念から外れてるからな。」

カオス「…OTL」

とりあえず、今回はキャラクター紹介を挟みたいと思います。

## キャラクター設定Ver.2（前書き）

一応2部からのキャラクターの設定です。敵サイドはダークネス戦  
終了後に出現予定です。

### 最近の出来事

シリアスゾーンが終わって気分はハッピーですww

## キャラクター設定Ver.2

名前： アルフォスⅡルヴォルグ AlfossⅡLvorg

年齢： 0歳。スレイの時もカウントすれば5兆歳。戸籍にも年齢は載っていない。

性別：

誕生日： 不明、名義上2月9日

身長： 183cm

体重： 63Kg

性格： 気楽

一人称： オレ オレは基本カタカナ表記

容姿： パラドックスの不思議な形をしたほうの眉毛を、普通のほうの形に直して、髪の毛、眉毛、目の色を黒にしている。顔はパラドックス。

アンドロイドに近く、服などは器（人間で言えば肌）そのものであり、着脱不可能。手と顔の肌の色はかなり白い。

服： 全身真っ黒な服。白いのにはパラドックスがつけてたマントと腰についていた白い服のみ。腋から腕にかけて露出していた肌も、黒い服に覆われている。肩の金属のみ変更なし。



デュエルディスク：無し。Z・ONEとダークネスを足した感じのデュエルスタイル。（ドローはカードが直接手に現れ、モンスターの召喚などは空中にカードを置く。デッキや墓地など、手札以外のカードは盗まれないというメリットもあるのでアーティスに内蔵させている。また、学園でデュエルする時は支給されるデュエルディスクを使用するが、通常の200倍の衝撃が来るように改造してある。

リアルファイト：神力がスレイの時と比べて上級神クラスまで落ちており、強力だった殲滅魔法のほとんどが使用不可になった。そのため、神力は移動手段の補助や空中飛行など、攻撃以外の事に使用し、変幻自在な武器『アーティス』による接近戦、一撃必殺の狙撃を得意とする。また、器の素の力として異常な防御力・機動性・攻撃力を誇る。だが、神力が落ちた影響で『時空最強』を名乗るほどの力はなくなってしまった。

備考：スレイの闇が全て消え去った存在。人格、容姿共に男の物。地上の生物・神・悪魔・精霊・天使のいずれの類でもなく、見た目こそ人間や神だが、中身は神力がなくとも生き続ける永久機関のようなシステムを搭載し、更に魔法によって器は汚れない。そのため人間が日常で行うすべての行動・用品を必要としない。永久機関の働きで食したものを直接機動エネルギーに変換する。変身魔法で自らの身長を183cmまで下げているが、本来は2m5cm。体重が異常なまでに軽いのは中身が人間ではないため。ちなみに、勘的中率は99%。ほとんど予知能力に近い。上記の特徴もあってか、三大欲求が完全に消えた。また、そこら辺の人間よりもはるかに純情。

好きなもの：ソラ、戦闘、普通の平和的日常など

嫌いなもの： 絶望、負の精神など

弱点： 水。飲料水は別だが、20秒以上浴びたりすると器が破損する。魔法によって風呂などに入らなくても済むようになっているのはこのためでもある。

CV： プラシドより少し低めの声。

名前： ソラ＝ルヴォルグ Sorai＝Lvorig

年齢： 17歳

性別： 女

誕生日： 2月10日

身長： 150cm

体重： 37kg

性格： 明るい

一人称： 私

容姿： ライトグレーの、ふくらはぎの少し上辺りまである非常に長いふわりとした髪が特徴。目の色は紫。稀にツインテールになる

ことも。肌の色は不自然なほど白い。道を歩けば10人中8人の男が興味を示すだろう。まともに日光を浴び続けるのが苦手で、かなり華奢な体つき。

服： デュエルアカデミア制服。休日の際は、長袖で比較的薄めの生地、赤か白のワンピース。

デュエルディスク： アカデミアで配られたもの。アルフォスに手作りのデュエルディスクを作ってもらおう予定。

リアルファイト： そもそもしない。

備考： アルフォスが暗黒神と決着を終えて間もなく、この世界に神の手を借りずして転生した少女。戸籍について困っていたのをアルフォスに相談し、妹として入れてもらった。その後力オスの歴史改変によって本物の妹になった。歴史改変の影響を受けないアルフォスはこの事を知らない。いつも行動する時はアルフォスにくっ付いている。正直な話、カップルなんかの類にしか見えない。もしかしてもしかするとアルフォスに恋するかも……。アルフォス以外の人に対しては大抵の場合無愛想で、必要以上の事をしゃべらない。なのでアルフォス以外の人を雑談を持ちかけても返事は返ってこないだろう。また、表情の変化が乏しい。

ちなみに、アルフォスの妹になるまでの名前はソラ・ラルニクス・レライア。実は本来の髪の毛の色は真紅だが、ある理由でライトグレーになっている。

好きなもの： アルフォス、お菓子、高級食

嫌いなもの： 孤独、絶望、暗いところ

弱点：リアルファイトなんかしないし、彼女自身は至って普通の人間（ヘイムダルの薬によって不老不死になったこと以外は）なので、特筆すべき弱点は無し。なお、不老不死と言ってもやはり出血多量や心臓をやられてしまうと死んでしまう。完全な不老不死なんて存在しないという証明のようなものである。

CV：かなり静かで大人しい声。怒鳴ってもかわいい程度にしか思われないだろう。

名前：カオス Chaos

年齢：5兆歳

性別：

誕生日：10月16日

身長：1.5cm（ビー玉サイズの水晶）

体重：60g

性格：気楽

一人称：我

容姿：赤いオリハルコン製のビー玉。

服装：オリハルコン。

デュエルディスク：無し。ビー玉の前に手札が浮かんでデュエルするという何ともシニールな光景が見られるだろう。

リアルファイト：オリハルコン製の体を生かして猛スピードで突撃。食らったら風穴があくだろう。

備考：原初神。もともと3体の究極神とほぼ同時期に生まれた聖なる神だったが、スレイ同様生命体の闇の心によって深く負の感情に沈み、暗黒神となった。今は暗黒神としての力は消え去り、アルフォスの良きアドバイザー&歴史改変の助手である。結構勝手に計画を企てては実行している節がある。たとえばソラをアルフォスの本当の妹にしたのもカオスの計画だ。だが、邪悪なことをしようとはしないので信頼できる。

好きなもの：光の心を持つ人、素直な人など。

嫌いなもの：闇、負の感情など。

弱点：ビー玉を叩き割られると死ぬ。だがオリハルコン製なので通常的手段では割れない。ちなみに、マグマに落ちても大丈夫。

CV：ダークネスの声を少し高めにしたもの。

名前：ロキ Loki

年齢：4兆歳超え

性別

誕生日： ????

身長： 157cm

体重： 43Kg

性格： ルチアーノ

一人称： 僕

容姿：機械化されていないルチアーノ。ライディングデュエル時は、ルチアーノは髪の毛の先に帽子のようなものをつけていたがロキはつけていない。

服： 普段からルチアーノが被っていたフードやマントを装備している。中の服はルチアーノと同じ。

デュエルディスク： ルチアーノと同じ。ただし、緑色のエネルギーの部分は、白になっている。名前は『デルタフォース』。

備考：外見・人格共に男。食したものは直接神力変換される。階級は最高神。暗黒神が倒れた際、自らの消滅を避けるために自らの存在を人間にし、その後再び神に戻した。この手段で消滅を逃れた神が全体の1%ほど（1千万程度）存在する。また、仲間たちの消滅した後、七聖龍やデッキ、ラミエルの魂を回収し、全て所持している。アルフォスとカオスを除けば、間違いなく時空最強の存在。また、セレナからはアルティメット・フレアスター・ドラゴンを託された。現在は2人ともデュエルアカデミアの生徒。

リアルファイト： 異常なまでの防御力と機動性を誇る。剣で空間を切り裂いて移動する事が可能なので、これを利用して相手の背後から一撃で葬ることも。

好きなもの： セレナ、自分に勝負を挑んできた相手をいたぶる事。

嫌いなもの： 自分を下に見る者。

弱点： これと言って特筆すべきものはない。

CV： ルチアーノ

名前： 海馬瀬人

備考： アルフォスによって齎された新たな青眼を使用する。多分、2部ではアルフォス達の味方として登場するだろう。∴多分。細かい設定は公式に準ずるので記載しない。

## キャラクター設定Ver.2（後書き）

アルフォス「さて、キャラクター設定はこんなところだろう。」

カオス「もう1人くらいこちらのサイドでだれか登場させるかもだが。」

ソラ「…アルフォスにフラグ立てる女の子だったらやだよ？」

アルフォス「怖…。」

ロキ「今日の最強カードは無しね。何も登場してないし。」

アルフォス「とりあえず、主人公最強モノじゃなくなったということと言える。」

カオス「そうなのか。」

アルフォス「神とアーティスによる無双はあれど、リアルファイトでの神力の消費は激しいし、回復にも時間がかかるようになってしまったからな。ペースを考えなければすぐに尽きる。」

ソラ「じゃあまた次回。キャラクター設定は時々変更するかも。」

アルフォス「（ほんと必要以上のことはしゃべらないな…。）」

カオス「CVの変更をしたのだな、そういえば。」

アルフォス「オレの口調でアポリアやパラドックスって合わないだ



る。プリシダの口調がぴったりと聞こえ、少し低めにしたプリシダと聞こえた。」「

カオス「確かに。」

ロキ「じゃあね。」

## 第14話 兄妹デート!? (前書き)

……どうしてこうなった。

甘々な話を書くつもりだったのに、変な方向に流れて行ってしまっ  
たぞ…。

この話を更新する前にキャラ設定Ver2を多少修正しました。

### 最近の出来事

X-セイバーの時代きたあああああああああああああああああああ  
ああああああ!!

## 第14話 兄妹デート！？

### ドミノ町

今、オレとソラはドミノ町に来ている。今日は日曜日。暇を持って余っていたところにソラが町へ行きたいと言ったので連れてきた。ここまで来るのに所要時間は10秒。オレのD・ホイールに搭載されている時空間移動機能を使用すれば容易いことだ。ソラ1人で行かせればよかった話だが、この妹を説得するには1時間を要するだろうというオレの勘が働いたのであきらめた。そして今はちょうど昼時。

「アルフォス、飲み物買ってきて。」

買い物は一旦終了なのか、ソラはベンチに座るとそう言った。昼ごはんは食べるつもりがないようだ。

「人……遣いの荒い妹だ。少し待ってる。」

人じゃないが、表現の仕方が思いつかなかったから仕方ない。カオスにオレが神だっことをソラの記憶から消させたからな。かといって人でもないからこうい言葉の表現には困る。

アルフォスは自販機がある方に向かって歩く。

「あそこまで素直な人間、そうそういるものではないぞ？遠慮がちにならないだけ、こちらでも遠慮する必要がないから、気が滅入るこ

ともない。』

「わかつている。ソラがお前の歴史改変でオレの本当の妹になったり、転生前の苦い記憶をきれいさっぱり消されていたりしているのを除いてもな。」

『なっ！！』

「なぜわかった？とでも聞きたそうだな。オレが歴史改変の波動に気付かないとでも思っていたのか？」

『ならばそうした我が言うのもなんだが、なぜ歴史改変を止めなかった？汝にはそれができるはずだ。』

カオスは驚いた。当然だ。自分の目論み全てを知られていてなお、アルフォスはそれを邪魔しなかったのだから。

「…なんでだろうな？一人くらい、肉親と呼べるもの…身の拠り所（悩みの相談相手）が欲しいのかもな。」

アルフォスは、オレの体は所詮永久機関入りの魂の器で人間のそれではないが、と笑った。

『…まさかとは思うが、ソラに惚れたか？それで人間ではないことを引け目に思っているのか？』

「さあな。」

アルフォスは軽くはぐらかした。そういうことは秘密主義で、基本的にアルフォスは自分から明かそうとはしない。

「だが、ソラが実妹で良いのは本心だ。記憶にほとんど残っていないとはいえ、オレにも家族がいたのだろう？そいつを失ったこの空っぽの精神を埋めてくれるのは記憶の中にいる家族よりも、更にオレの閉ざされた精神の扉をこじ開けたあいつしかいないからな。」

過去に奢っていても何も起こらない。オレにはもう、神々を蘇生させるだけの力はないんだ。いや、思い返してみれば元からそんな力、誰にもなかったし、そんな権利も存在しなかったのかもしれない。

『それが、汝がああ少女…ソラを実妹とする所以か。』

「あと普通にかわいいところとか。」

アルフォスは冗談めいた口調で言うが、カオスにもその心を読めなかった。それを本気で言っているのかどうなのか、知るのはアルフォスただ1人だ。

『…汝は変わったな。』

「そうなのか？」

『ああ。スレイだったころの汝は、家族に対してでさえ心を開かず、偽の心で対応していた。しかし汝は、ソラに対して偽の心を使用することなく本心で関わっているだろう？』

「…単純に、もう偽の心なんて必要ないということだ。オレはオレ、気まぐれでいつ消えるかわからない雲みたいになれたらと、スレイの頃に密かに思っていた。それが叶った今、そんな空虚なものはいらん。」

偽の心が必死に願っていた、『家族との平和で静かな時間』という夢は散ったがな。」

『そうか、ではその真なる心に問いかけよう。汝はソラが好きか？』

「は？それはLikeか？Loveか？」

『Like』

「…それなら当然。」

Loveだと返事に困る。気まぐれなオレを唯一困らせる感情だからな。

『Likeでも素直に好きと言わない…いや、言えない辺り純情なのだな。』

「言つな。」

欲がなくとも、恋愛感情などは普通にある。究極神は何を思っただけを創り出したのか。だが感謝せねばなるまい。感情を持たせてくれたことにな。この場合は恋愛感情とは言わないらしいが。

『年頃の男ならいろいろ考えそうなものだが…。相手が妹でも』

「『本物の男』ならな。オレは人格と見た目だけだ。」

小銭を自販機に入れて、適当に暖かいコーヒーを買う。苦いのが苦手なソラには甘めのコーヒーで良いだろう。

『悪く言えば、軽くなっただが。』

「（言うな。）」

その言葉はオレの心を抉るには十分だった。

「（そういえばカオス、前にソラを一目見た際に、ある少女の事を思い出したと言ったな？何のことだ？）」

『少し裏の世界に飛んだ時にな。ソラの髪を金髪にして、翡翠色の眼にしたかのような少女を見かけたことがある。髪の長さこそ肩辺りまでのツインテールだったが…。性格も正反対で、誰にでも気軽に話しかけ、表情も一喜一憂する。』

「（で、それがどうかしたのか？）」

『いや汝から聞いてきたのだろうか。』

「（ああ、そうだった、スマン。）」

『……………。』

素で忘れていたのか。

「（じゃ、裏のオレみたく、オレも彼女見つけるかな。）」

『は？我は裏の汝に彼女がいるなどと言っていないぞ？』

「（今の文脈でわかるさ。そんなことをわざわざ言うのだから、オ

レが関係してるとな。」

『…ソラで良いじゃん。』

「（死ねカス。何が『ソラで良いじゃん』だ。『良いじゃん』で済ませられるレベルじゃないだろうが。少なくともオレにはもったいないくらい。）」

『…そつち？』

もつと違つところにツッコむべきだと思つが…。

「（ところで、その金髪ツインテールの俗にいうツンデレとか呼ばれそうな奴は一体なんて名前だ？）」

『確か…アリスだった気がするぞ。』

「（それはまた…それっぽい名前だな…）」

金髪ツインテールでアリス。思いつき典型的な感じの名と容姿から、容易にどんなキャラなのか想像がつく。裏の世界に言ったら是非見てみよう、ソラとどのくらい似ているのか気になるしな。最低でも4年後になるが。

「（さて、この時期は冷えるからな。早く戻つてやろう。）」

この時期は冬だ。じき卒業だから何ら不思議な事ではない。デュエルアカデミアが暖かすぎるだけだ。

『そうだな。ソラ、風邪をひいたらどんな行動に出るかわからんぞ』



『?』

「(女子寮に来てと言われた日にはオレは亡命するしかないな。)」

『アレ、襲うんじゃないの?』

「(襲うってどういうことだ?妹殺害などシャレにならないぞ。)」

『…やっぱり汝は人間の男になれ、つまらん。』

「(だから無理だ。)」

さてと、買い物はここで終わりにするか。後はソラ連れて…どこに行けばいいんだ?

……ん?

「黒いフードの男…。」

不意にオレの視界に黒いフードとローブをまとった男が捉えられた。だが次の瞬間には、もうその男は消えていた。あんな恰好をしていれば一般人は少なからず奇異の目で見るはずだが、普通の目で見るところか、一般人には見えていないようだ。

「カオス、あのフードの男…。」

『フードの男?そんなものいなかったらどう?』

「何ッ!?!」

カオスですら見えなかっただ…?!

「クツクツクツ、わたしの姿を捉えるとは汝只者ではないな。」

「!?!?!」

いきなりオレの後ろから声がした。振り向くと、そこにはさっきのローブとフードの男がいた。だがやはり、カオスにも一般人にも見えていないらしい。

「汝に一つ忠告してやろう。あの少女から離れる。」

「ソラから?」

「あの少女は、今晚汝に死を齎すだろう。汝、あの少女から離れる。あの少女は汝に死を告げる者。……わたしの名は絶望の執行者。闇滅びし時また会おう、なまじ真実を知るばかり捻じ曲げ、誕生せし新たなる真実に翻弄される哀れな者よ。」

「なっ…どういうことだ!?!」

「正確に言えば、あの少女は汝の味方だ。だが少女の持つ神は汝を、いや。あの少女の周りに存在する人間すべてを許さずに抹消する。少女の持つ神は少女の意識を乗っ取りつつある。今度こそさらばだ。また会おう。」

それだけ告げると、絶望の執行者と名乗った男は消えてしまった。…考えていても仕方がないので、ソラのいるところに戻る。カオスにもこの事は黙っておく。話をややこしくしたくない。

「ソラ、飲み物。」

ソラに声をかけて、温かいコーヒーを渡す。

「ありがとう。って、これコーヒー…。」

「安心しろ、甘めだ。」

『空気が？』

「（死ね）」

カオスとアルフォスはこんなやり取りをしているが楽しそうだ。実際、カオスもアルフォスも闇がなくなつた部分は空っぽの状態なので、こういうところは似るのだろう。

「…やっぱりちょっと苦い。」

僅かに顔をしかめて舌を出し、缶をオレに寄こすソラ。缶を受け取って少し飲んでみる。…甘めとは言ったが、実際は甘めどころかかなり甘い気がするが…。

『間接キスって甘い物らしいぞ。』

「（それで甘かったら誰も苦い物など味わわなくて済む。）」

懐から次元倉庫を開いて、さっき買ったビスケットを取り出して食べる。

「アルフォスずるいよ。私に秘密で勝手にお菓子買ってたなんて…。」

「

「財布……といってもカードだが貸したんだから、好きなだけ買えばよかっただろう。」

海馬社長に預ける限度額が云々と相談したらカードが送られてきたので有効活用させてもらっている。更にカオスの能力で、世界ごとに金を預けなくても使用できるようにしてある。その代わりに『青眼の琥珀』を3枚持つて行かれたが。

『青眼の琥珀』

カウンター罫

自分フィールド上に「青眼」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、相手が発動した魔法・罫・効果モンスターの効果を無効にして破壊する。

「……それを言われると 言い返せない。」

「なんていうとでも？お前の分も買ってある。服のコーナーばかり行くから、服以外は何も買ってないだろうと思ってな。」

ソラにチョコレートを渡す。この時期は溶けないから、長時間持つていられる。

「……抜け目がない。」

「そりゃそうさ、気まぐれには抜け目がないものだ。」

実際は何となくこうなる予感がしていただけだが。

『その変な予知能力を別の事に役立てる気はないのか？』

「（真面目な事については、実戦の時以外なぜか勘が働かない。）  
『そうなのか。それは残念だ。アルフォスが誰と結婚するのか予知してほしかったんだが…』」

「（お前もくだらないことに利用しようとしてるじゃないか！）  
さてソラ、行くぞ。」

ソラの手を掴んで立たせる。その後、オレ達は商店街やショッピングモールなんかを回る。と言っても、オレは殆ど、ソラが買い物をしている間、どこかで待っているだけだった。

「汝、あの少女から離れる。あの少女は汝に死を告げる者。」

先程のローブとフードの男の言葉が蘇る。………試してみよう。

そして、アルフォスはその男の言った言葉の真偽を確かめるため、考えたことを実行する事にした。

## 2時間後

今は午後の6時。冬なのでもう暗い。買い物袋をたくさん持ったソラを最新作のD・ホイール『グラントフォース』に乗せる。デザインはパラドックスのD・ホイールを白い部分を黒に、黒い部分を白にしたもの。カオスには『裏の汝と同じ』だと言われた。一から自分でデザインして作らないのは、それをすると時間がかかるからだ。だからD・ホイールを造る時は誰かのD・ホイールのデザインをそ

のまま使用し、配色だけ変えることにしている。

ソラが乗ったのを確認し、グラウンドフォースを起動。時空間移動システムを起動し、一瞬でデュエルアカデミアに戻る。

……奴の言ったことが本当なら、オレは今夜死ぬ。冗談じゃない。こんなところで、それも妹に殺されてたまるか。

オレは深夜12時に、デュエルアカデミアの砂浜に向かう。呑気にブルー寮で待機しているわけにもいかない。

「……………」

どれほどの時間に感じられただろうか。実際には1時間しか経っていないはずだが、オレにはこの時間がその3倍に感じられた。いい加減ブルー寮に戻ろうとしたとき、ついに現れた。

ライトグレーの髪：間違はなくソラだ。暗いのが苦手なソラがこの時間に外出などするわけがない。

「アルフォス、どうしたの？ブルー寮にいないから心配した。」

「……………お前こそどういうことだ。暗い場所が苦手なお前がこの時間に外出するわけがない。」

「……………何言ってるの？」

ソラはどうでもいいというような顔で言い放つ。

「貴様、ソラじゃないな？出て来い、天神皇共。」

カオスの水晶から光が放たれソラに当たる。すると、まばゆい光がソラの中から飛び出した。

「まさか貴様が我らの存在に気付くとは…。驚いたぞ、究極神の主人よ。」

出てきたのは3体の天神皇。

「あと少しでソラの意識を我らの物にできたというところで汝は、歴史改変によってソラの記憶を書き換えた。ソラを我らの物とするため、汝には消えてもらおう。」

ソラは意識を失っている。今のカオスの光で気絶させた。ここで天神皇を排除し、完全に天神皇をソラが従えるためには仕方がないことだ。

「究極神には向かうことがいかに愚かな事か教えてやろう。オレ直々になッ！！」

アルフォスの漆黒の瞳の鋭い眼光が天神皇を捉えた。

『気を抜くなアルフォス。いつものふざけた態度で戦えば一瞬で死ぬ。』

「百も承知ッ！！」

3体の天神皇がソラの体に入り込み、ソラが目を開けた。…意識はソラの物ではないが。

「人間ごときが我ら天神皇に刃向おうとは…笑止。」

「デュエル!!」

Alfos vs. Sora

「先攻は我が貰おう、我は『極天将ディオメデス』を召喚する。カードを3枚伏せターンエンド。」

Sora

LP8000

Hand: 2

フィールド

極天将ディオメデス ATK1000

魔法・罫

伏せ: 3

「オレのターン!!」

ソラから:「いや、ソラの中の天神皇から凄まじいプレッシャーがはなたれオレを襲う。」

「その程度のプレッシャーでオレを圧倒できると思うなよ!オレは『極星獣タンギリスニ』を召喚。ゆけ、タンギリスニ!ディオメデスを粉碎しろ。」

「トラップ発動、『天の加護』。ディオメデスへの攻撃を無効にし、デッキから我がしもべを特殊召喚する。現れよ『アローアダイ・エピアルテス』。エピアルテスが特殊召喚に成功した時、手札に『アローアダイ・オートス』が存在しない場合デッキから『アローアダイ・オートス』を手札に加える。」



天神皇はオレに手札を公開し、アローアダイが存在しないことを確認させるとデッキからオートスのカードを手札に加えた。

「カードを伏せ、オレはターンエンド。」

A l f o s

L P 8 0 0 0

H a n d : 4

フイールド

極星獣タンギリスニ     A T K 1 2 0 0

魔法・罫

伏せ：1

「我がターン。我は『アローアダイ・オートス』を召喚。このカードが召喚に成功した時、自分フィールド上にエピアルテスが存在する場合、デッキから『極天将』の名を持つカードをデッキから手札に加える。『極天将アマルティア』を手札に。」

「来るか。」

天神皇。…オレの目的は天神皇を全てフィールド上に引きずり出し、叩き潰すこと。いかに天神皇の攻撃を耐え、3体ともフィールドに引きずり出すかにかかっている。

「レベル3の『アローアダイ・エピアルテス』、『アローアダイ・オートス』にレベル4『極天将ディオメデス』をチューニング。シンクロ召喚、出でよ我が化身『天神皇アレス』。」

狂乱の笑みを浮かべて青銅の鎧を着、巨大な槍を持つ神が出現した。アルフォスは天神皇を憎悪の目で睨み付けた。しかし、天神皇はそ

れを無視する。

「我が効果を発動。1ターンに1度、相手モンスターを破壊する。  
ブレイクスピア！」

タンギリスニはアレスから放たれた槍に貫かれ破壊される。

「トラップ発動、『北辰の加護』！！『極星』または『極神』が破壊された時、デッキの『極星』を特殊召喚。そのモンスターはこのターン、破壊されない。来い、『極星獣タンゲニョースト』！」

「破壊できぬのであれば仕方あるまい。我はターンエンド。」

Sora

LP8000

Hand: 4

フィールド

天神皇アレス ATK3500

魔法・罫

伏せ: 2

「オレのターン。貴様、この前のソラとのタッグの時、既にソラを操っていたな？」

でなければあのタッグデュエルの時、先程のアローアダイの効果を  
使用しなかった示しがない。あの時効果を使用しなかった理由  
はおそらく、天神皇がオレに手の内を明かしたくなかったからだろ  
う。

「当然。ソラは我ら天神皇の物。あの時すでにソラの意識の7割は

我らがものとなっていた。」

「貴様、神でありながら主の意識を乗っ取るとはどういうつもりだ？」

「フハハハハハ！！おかしなことを言う。神だからこそ下等種である人間を我がものとして何が悪い？」

アレスは盛大に笑う。

「下等種は、貴様だア！！オレはタンクニョーストを攻撃表示に変更。その効果でデツキの『極星獣タンギリスニ』を特殊召喚する。更に『極星獣ガルム』を召喚。オレの場のモンスター3体を生け贄にし、『究極神帝オベリスク』を特殊召喚する！！」

いつみても見る者を圧倒する巨神が光臨した。心なしか、究極神から怒りの波動を感じ取れる。

「現れたな究極神、我ら天神皇に逆らうことがいかに愚かな事かその魂に刻み込んでやろう。お前達のせいで、ソラからは90%の感情を奪うことに成功していたというのにパーになった。お前達を叩き潰し、我らがこの世界を支配する。」

「支配欲の強い愚神め…オベリスク！天神皇を粉碎しろ。アブソリユート・クラツシャー！！！」

オベリスクはいつものように殴りつけるのではなく…  
天神皇の頭を掴み、容易に握りつぶした。

「グッ。」

Sora LP8000 7500

「ターンエンド。」

「このエンドフェイズ、我が化身『天神皇アレス』復活。攻撃力と守備力は500アップする。」

天神皇アレス ATK3500 4000

Alfos

LP8000

Hand: 4

フィールド

究極神帝オベリスク ATK4000

「我がターン。我が化身『天神皇アレス』の効果発動。1ターンに1度、相手モンスター1体を破壊する。ブレイクスピア!」

「オベリスク、叩き潰せ。」

オベリスクは飛んできたアレスの槍を掴み、片手でへし折った。

「バカな!？」

「究極神はゲームから除外されているか、フィールド上・墓地にある時モンスターとして扱わない。よってモンスターを破壊する貴様の効果は無効。」

「ならばトラップ発動。『天神の裁き』、我が化身の攻撃力をこのターンのみ1000ポイントアップ。」

天神皇アレス ATK4000 5000

「更に『極天将カリスト』を特殊召喚。このカードは我がフィールドに幻神獣族モンスターが存在する時、生け贄無しで召喚できる。我で『究極神帝オベリスク』を攻撃！！ウォーエンド・スピア！」

「神によるオレへの戦闘ダメージは0だ。」

「だが、我は1ターンに2度の攻撃が可能。貴様にダイレクトアタック。ウォーエンド・スピア！」

「チツ…！」

Alfos LP8000 3000

アルフォスはアークティスを剣に変え、飛んできた槍を防ぐ。流石に直撃すれば無事では済まないからだ。

「『極天将カリスト』でダイレクトアタック。」

「クツ…！」

Alfos LP3000 1000

「カードを2枚伏せてターンエンド。」

「このエンドフェイズ、オベリスクはオレのライフ半分をコストに復活する。」

Alfos LP1000 500

Sora

LP7500

Hand: 2

フィールド

天神皇アレス ATK4000

極天将カリスト ATK2000

魔法・罠

伏せ: 3

「オレのターン！」

ライフ差は7000、更に奴のフィールドには神と同等の攻撃力を持つ天神皇アレスと極天将カリスト。このターンでどうにかしなければ次のターン、アレスによって神は相打ち。更にカリストの攻撃でオレのライフは0。

『どうする？何か策はあるのか？』

「（当たり前だ。第2の神を呼ぶ。）オレは『死者蘇生』を発動。蘇れ『極星獣ガラム』。更に『極星霊リヨースアルヴ』召喚。その効果によって『極星獣ガラム』のレベル以下の極星モンスターを手札から特殊召喚する。来い、『極星天ヴァルキュリア』。」

『第2の神を解放するのか。どんな効果か楽しみだな。』

「3体のモンスターを生け贄に光臨せよ、第2の神『究極神帝オシリス』!!!」

天から赤い雷が降り注ぎ、次元の裂け目よりオベリスクと同等の大きさの赤い龍が現れた。

究極神帝オシリス ATK4000

「攻撃力4000、それでも我と同じ。」

「だがお前1人では我が究極神を葬るのは不可能だ。オシリスの効果を発動。1ターンに1度、自分または相手のターンに、相手モンスター1体の攻撃力と守備力をエンドフェイズまで2000ポイントダウン。『天神皇アレス』の攻撃力と守備力を2000ダウン。」

天神皇アレス ATK4000 2000

『究極神帝オシリス』

レベル10 神属性 究極神帝族・神/効果 ATK4000 DEF4000 D

このカードは自分フィールド上に存在するモンスター3体を生け贄に捧げた場合のみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。ゲームから除外されている・フィールド上・墓地に存在する神はモンスターとして扱わない。このカードが自分フィールド上を離れた場合、エンドフェイズ時にライフを半分にしてこのカードを自分フィールド上に戻す。神がカード効果によって自分フィールド上を離れたターン及び戦闘を行う場合、自分が受ける戦闘ダメージは0になる。1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力・守備力をエンドフェイズ時まで2000ポイントダウンする事ができる。この効果は相手ターンでも発動でき

る。神がフィールド上に存在する限り、お互いにサレンダーできず、自分フィールド上のモンスターは攻撃できない。神は1ターンに1度しか特殊召喚できない。神の特殊召喚と効果は無効化されない。

「『究極神帝オベリスク』で『天神皇アレス』を攻撃。アブソリュート・クラッシュャー!!」

オベリスクが再びアレスの頭を握りつぶして破壊した。エグイとは思うが、このくらいしなければオレの気は収まらない。

「トラップ発動。『天神の神託』。戦闘ダメージを0にし、その数値の合計以下になるようにデッキまたは手札よりチューナー以外のモンスターを2体特殊召喚する。現れよ『嘆きのイピゲネイア』。『復讐のオレステース』。」

嘆きのイピゲネイア ATK300

復讐のオレステース ATK500

「『究極神帝オシリス』で『嘆きのイピゲネイア』を攻撃。サンダージャッジメント!!」

たった500mの竜の口から、この星を軽く破壊する程度の威力はあるであろう雷が放たれる。

「速攻魔法発動。『天神生誕』!バトルフェイズ中の『天神皇』のシンクロ召喚を可能にする。レベル3『嘆きのイピゲネイア』とレベル2『復讐のオレステース』にレベル5の『極天将カリスト』をチューニング。」



ソラが使用した時は儂い光だったが、黒い光が辺りを満たす。

「シンクロ召喚。出でよ『天神皇アルテミス』!!!」

天神皇アルテミス ATK3500

現れたのは本来神々しい光を放つ女神。だが、天神皇がソラの意識を乗っ取りつつある今、その神々しい光はどす黒く染まっていた。

「構うか！オシリス、アルテミスを粉碎せよ!!!サンダージャツジメント!!!」

雷に飲み込まれたアルテミスは、一瞬も絶えることができずに破壊された。

「ぬう。」

Sora LP7500 7000

「ターンエンド。」

「このエンドフェイズ、我が化身『天神皇アレス』と『天神皇アルテミス』が蘇生する。アレスの効果で攻守500ポイントアップ。アルテミスの効果により、本来相手モンスター1体の攻撃力を次のエンドフェイズまで0にできるが...。」

天神皇アレス ATK3500 4000

「究極神にそんなものは通用しない。」

ソラ、じき助けてやる…あと少しの間我慢してくれ…!!

Alfos

LP500

Hand: 2

フィールド

究極神帝オシリス ATK4000

究極神帝オベリスク ATK4000

「我がターン。我は『極天将アマルティア』を召喚。このカードの召喚に成功した時、フィールド上に存在する幻神獣族モンスターの数まで『ティーターン』と名のつくモンスターをデッキから特殊召喚する。召喚、『ティーターン・クロノス』、『ティーターン・レア』  
『!!』」

「一気に3体のモンスターを召喚したと…。」

「レベル4の『ティーターン・クロノス』、『ティーターン・レア』にレベル2の『極天将アマルティア』をチューニング!!! 天神統べし王よ、神に反逆を企てる愚かな人間共を虐殺し、神々の絶対的な力をこの世に知らしめよ!!! シンクロ召喚。光臨せよ、天神の最高神、『天神皇帝ゼウス』!!!」

雷と共に、巨大な鎌を持った威厳のある神が出現した。深夜の暗い天空を、雷が絶え間なく鳴り響き、その明るい光で暗闇をまるで昼の様に明るくする。

天神皇帝ゼウス ATK4000

『天神皇帝ゼウス』

レベル10 神属性 幻神獣族・シンクロ/効果 ATK4000  
DEF4000

チューナー+チューナー以外のモンスター2体

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、表側表示の幻神獣族モンスターは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。1ターンに1度、エンドフェイズ時までこのカード以外の自分フィールド上に存在する幻神獣族モンスターの元々の攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする事ができる。このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを特殊召喚する。この効果で特殊召喚に成功した時、相手のライフを半分にする。

「ゼウスが存在する限り、幻神獣族モンスターは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。ゼウスの効果発動！ エンドフェイズ時までアレスとアルテミスの方々の攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする！」

「何ッ!!」

天神皇帝ゼウス ATK4000 11000

「行け、『天神皇帝ゼウス』!! 『究極神帝オシリス』を粉碎せよ!! ヘヴンズ・サンダーブレイク！」

「オシリスの効果発動、エンドフェイズ時までアレスの攻撃力を2000ポイントダウン！」

天神皇アレス ATK4000 2000

オシリス第1の口から雷の弾丸が発射され、アレスの攻撃力を下げた直後にゼウスの雷がオシリスを襲い、オシリスは破壊された。

「フン、ゼウス以外の攻撃力を4000未満にすることで敗北を免れたか。『天神皇アルテミス』の効果によって、我はデッキからカードを1枚ドロワー。そしてカードを伏せてターンエンド。」

「蘇生せよオシリス!!」

Alfos LP500 250

Sora

LP7000

Hand; 0

フィールド

天神皇帝ゼウス ATK4000

天神皇アルテミス ATK3500

天神皇アレス ATK4000

魔法・罫

伏せ: 2

「オレのターン!!」

「よし、天神皇を3体とも引きずり出した。後は天神皇を叩き潰して勝利し、ソラを助けるだけだ。」

「オレはオシリスの効果でアレスの攻撃力を2000ダウンする。」

天神皇アレス ATK4000 2000

「オシリスでアレスを、オベリスクでアルテミスを攻撃!!」

アレスは雷に飲み込まれ、アルテミスはオベリスクに首を掴まれ、腹に強大な一撃を入れられた。オベリスクの攻撃はアルテミスの腹を貫通し、地に沈める。

「ぐおおおお…ッ！！」

Sora LP7000 4500

「アルフォス、見たところソラを操ろうとしているのはアレスだけだよ。他の2つの神はアレスに操られているにすぎん。」

「よし。それさえ分かれば…！オレはカードを1枚伏せて、さらにモンスターを伏せる。ターンエンドだ。」

「このエンドフェイズ、『天神皇アレス』『天神皇アルテミス』が復活。」

Alfos

LP250

Hand: 1

フィールド

究極神帝オシリス ATK4000

究極神帝オベリスク ATK4000

伏せ: 1

魔法・罫

伏せ: 1

「我がターン。我はトラップ発動。『終焉の起源 天神の威光』を発動。次の相手ターンのエンドフェイズ時にフィールドの幻神獣族モンスターの攻撃力の合計分のダメージ…11500ポイントの

ダメージを貴様に与える。」

「なっ!?!」

『11500だと!?!これでは次のターンのエンドフェイズ時まで  
に決着をつけなければアルフォスのライフは尽きてしまう!?!』

「更に『天神皇アルテミス』の効果でデッキからカードをドロ…。  
手札より魔法カード『終焉の起源 天神の啓示』を発動。貴様は  
次のターン、バトルフェイズを行えない。更にもう1枚、『終焉の  
起源 天神の天命』。次の相手ターン、我が受ける効果ダメージを  
0にし、相手がドロ以外でカードを手札に加えた時、2000ポ  
イントのダメージを与える。」

「クッ…。」

絶体絶命か…。

「ターンエンド。」

Sora

LP4500

Hand: 0

フィールド

天神皇帝ゼウス ATK4000

天神皇アルテミス ATK3500

天神皇アレス ATK4000

「オレの…。ターン!?!…。!!トラップ発動、『リビングデ  
ッドの呼び声』!蘇れ『極星獣ガラム』!さらに手札から速攻魔法

ラスト ラゲナロク

『運命の終末』を発動。ライフを半分支払い、デッキから2体の『極星』を特殊召喚する。但し、効果は無効になり、攻守と攻撃力も0、シンクロ素材にもできない！来い『極星天ヴァナディース』、『極星霊デッキアールヴ』！」

極星天ヴァナディース ATK1200 0

極星霊デッキアールヴ ATK1400 0

Alfos LP250 125

「アレス、貴様を倒し、ソラを返してもらおう！」

「おかしなことを言う、ソラは汝の物ではない。我の物だ。汝が第3の神を召喚しようとバトルフェイズは行えず、効果ダメージも0、更にエンドフェイズに汝は11500のダメージを受け敗北。何ができるというのだ。」

『「アレス、貴様は究極神を甘く見ている！」』

カオスとオレは同時に言った。

「3体のモンスターを生け贄に、『究極終焉神ラー』を特殊召喚！出でよ、『究極終焉神ラー』！！」

もはや見慣れたというべき最強の神が姿を現した。やはり大きさはオベリスクやオシリスと同等くらいまで縮んだが、他の2体とは比べ物にならないほどの力を誇る。

究極終焉神ラー ATK

「攻撃力無限大…だが無駄な事、貴様に我を倒す手段はない。」

「それはどうか、ラーの効果を発動。1ターンに1度、相手のデッキ・手札・墓地・フィールド上・エクストラデッキのカードを全てゲームから除外する！」

「なんだと！！！！」

「エンドフォース・フレア！！！」

強大な炎がソラの除外ゾーン以外のあらゆるカードを焼き尽くした。ソリッドビジョンでなければそのままプレイヤーをこの星ごと焼き殺してしまうだろう。

「ターンエンド。お前が発動した『終焉の起源 天神の威光』の効果はフィールドの幻神獣族モンスターの攻撃力の合計のダメージをオレに与える事。だが貴様のフィールドに幻神獣族モンスターはいない、よってオレが受けるダメージは0だ！」

「それだけではない。今のラーの効果で天神皇アレス、貴様のデッキは0枚。よってドロウする事はできず、デッキ切れで貴様の敗北だ！！！」

「そんな馬鹿な！！我が敗北…あと少しで世界を支配するところで…計画が失敗だと！！ウォオオオオオオオオオ！！いやまだ、まだ終わらん！！」

敗北したのにもかかわらず、アレスは実体化して槍でアルフォスを襲った。だが…。

「そんな大振りな攻撃、オレには止まって見えるぞ！」



アルフォスはアーティースでアレスの邪悪な精霊を真っ二つに斬った。

「ギャアアアアアアアア！」

『哀れなものだ。』

アルフォスとカオスは、断末魔を上げて消えるアレスの邪悪な精霊の魂を見て、そう呟いた。

「……！！」

倒れているソラの方を見る。すると、ソラの髪がライトグレーから真紅に変わった。

「これがソラの本当の姿か。」

『なるほど、髪の色がライトグレーだったのは操られていたからなのか。………なあアルフォス。』

「なんだ？」

『…悶え死ぬくらいかわいい気がするんだが。』

「……認めたくないが同意だ。」

どうしよう、今まで冗談だったけれども本気で惚れそうだ。髪の色はここまで印象を変えるものなのか。初めて知った。

……ダメだ、精神を強く持て、オレ。オレは今までどんな困難にも打ち勝ってきた。このくらいどうとでもなるはずだ。なるはずなん

だ。

『この姿で最高の笑顔でいつも通り「アルフォス〜!!!」とか言われて抱きつかれた日にはもう…』

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!これ以上オレの精神を壊そうとするなああああああああああ!!!」

アルフォスの叫び声が砂浜に響いた。

次回へ続く。

## 第14話 兄妹デート!? (後書き)

次回タイトル未定

アルフォス「というわけで、ソラの髪がライトグレーだったのは操られていたからでした。」

ソラ「今回の最強カードはコレ。」

『天神皇帝ゼウス』

レベル10 神属性 幻神獣族・シンクロ/効果 ATK4000

DEF4000

チューナー+チューナー以外のモンスター2体

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、表側表示の幻神獣族モンスターは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。1ターンに1度、エンドフェイズ時までこのカード以外の自分フィールド上に存在する幻神獣族モンスターの元々の攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする事ができる。このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを特殊召喚する。この効果で特殊召喚に成功した時、相手のライフを半分にする。

ソラ「私の切り札。」

アルフォス「天神皇アレスの精霊も撃退したことだし、これからは思う存分使えるな。」

カオス「『終焉の起源』シリーズも終盤ではかなり強力なカードだ。合わせて使うことで強力な力を発揮するぞ。」

ソラ「どう？私の本当の姿」　いい笑顔

アルフォス「……………」　顔を直視したら死ぬので目をそらす。

カオス「実はキャラ設定にも書いていないがアルフォスはかわいいもの（ソラ）に弱いという裏設定がある。」

アルフォス「……………」

カオス「ますます妹&彼女ルートに進んでいる気がする……………」

1、妹ルート

2、彼女ルート

3、アルフォス失踪&ソラ自殺ルート　100%あり得ない、アルフォスが勝手に言った予想

4、彼女&妹ルート

5、その他

カオス「まだ受け付けているぞ。予想変更などはあるだから変更の際は気軽に感想欄にでも書き込んでくれ。」

ソラ「景品は？」

カオス「ソラを連れて行っていいぞ。」

アルフォス「は？」

カオス「んでもって監禁して（ry」

アルフォス「マジか。」

カオス「マジだ。しかも当てる必要はない。ただ予想を書き込んでくれるだけで連れて行ってもらうていいことにしよう。」

ソラ「アルフォス、助けて…。」

アルフォス「……無理。」

ソラ「…ぐすん。」

カオス「よし、こいつはもう監禁して 自主規制 するしかないな。もちろん今までに書き込んでくれた人もソラを連れて行って構わない。好きなように監禁して 自主規制 や 自主規制 を思う存分やってくれ。」

アルフォス「お前は監禁する事しか思いつかんのか…。」

カオス「ロキも連れて行ってくれていいぞ。」

アルフォス「ひでえww」

というわけで予想を書き込んでいた方にはロキとソラをお貸しします。好きなだけ監禁…じゃなかった、弄ってやってくださいww

## 第15話 ブルー寮の死神（前書き）

ついにやってしまった…

ソラが驚異のブラコン化しました。

感想欄でリア充なアルフォス死ねという方はどうぞ処刑してやってください。

アルフォス「マジ勘弁」

最近の出来事

学校の面倒さに疲れ果てたOTL

## 第15話 ブルー寮の死神

ブルー寮、アルフォスの部屋

天神皇アレスの精霊を葬り去ってから2日後。

「アルフォスう〜!!一緒に昼ご飯食べようよ〜!!」

アルフォスは自室の扉を鍵をかけたうえで引っ張り続ける。扉の向こうにはソラがいて、非力ながらも精いっぱい扉を開けようと健気に引っ張る。

「ダ・メ・だ!!」

真紅の髪に戻り、自我を取り戻したソラだが、アルフォス以外の者に対しての態度は相変わらずだった。しかし、何という事だろうか。その代わりにアルフォスに更に懐いてしまい、片時も離れようとしていない。2人で歩いている時に腕を組んでくるのは当然の事、下手をすればもう恋人にしか見えないような感じになる。で、その度にアルフォスは精神破壊の危機に陥るのだ。

「お前と一緒にいたらオレの精神が持たん!!」

ソラの力は弱い。なので、扉をこじ開ける事なんてとても出来やしない。

「…アルフォス、私のこと嫌いなんだ…。」

「げっ!!!」

来た…。ソラの対オレ用の一撃必殺技ッ!!

『どうせまたソラの勝ちだな。』

アルフォスはこの一撃必殺を耐えたことは一度もない。ソラはほかにもあと2つほど一撃必殺技（本人にはその意思無し）を持っている。1つはその手の物にはありがちだが、いきなり抱きつくというもの。2つ目は…至高の笑顔による神の一撃を超えた力。これはアルフォスどころか、学園中の男子が間違いないと終わる。我は3つ目の必殺技を受けて1時間意識が飛んだぞ。

「そ、その手には乗らないぞ!!!」

『お、アルフォスが抵抗している…。』

だがアルフォスはソラには弱いからな…。

「…ぐすん。」

「昼と一緒に食べないくらいで泣くな…。」

アルフォスが罪悪感で沈む。

『妹泣かせとは…何という兄だ。』

カオスはわざとらしくアルフォスの事を煽る。アルフォスもソラと



一緒にいるのは嫌ではないし、むしろ嬉しいほうなのだが、やはり精神崩壊は堪える。

「…わかったよ、今あけてやる。」

だがしかし、ついにアルフォスが折れた。ブルー寮の自室の鍵を開け、ドアを開けた。そして開けた瞬間にソラに抱き着かれる。

「ぐへっ!？」

実際は頭から突撃されたようなもので、無防備なアルフォスは後ろに吹っ飛んだ。傍から見ると小さな子どもが背の高い兄にタックルをかましているようにも見える。吹っ飛んだとは言っても立ったまままだが。

「やっと開けてくれた」

「し…死ぬ…」

抱きついてきた時の威力じゃなくて別の意味で。

「(カオス…助けて)」

『いいなあ…代わってくれないかな』

「(…の…)」



アルフォスは少しだけ真面目な表情になった。

「相談？」

「ああ。実は校長から高等部卒業後の進学路についての資料を盗…  
じゃない、拝借したんだが、卒業後、新たに海馬コーポレーション  
が建設したドミノ町の学校に行くか、この島の学園に残るか選択で  
きる。」

「うんうん。」

「発展的で自由度の高いのはドミノ町の方の学校で、基礎的な事を  
やるのはこのアカデミアだ。……で、オレが言いたいのは授業の内  
容なんかじゃなく、学校がどこにあるかだ。オレはドミノ町の学校  
の方に移ろうと思っているが、ソラはどうする？」

相談とはこれだ。オレはアカデミア島という、非常事態発生時に行  
動が大きく遅れる場所よりも、何らかの襲撃があつた時にすぐに対  
応できるドミノ町の学校の方がいい。そして、ロキに少し調べても  
らつたが、表向きは発展的な授業をやるなどと書いてはいるが、そ  
の実態は最近激化しつつあるデュエルモンスターズの特異な力につ  
いての研究と対処に関する授業が主らしい。

「私はもちろんアルフォスについて行くよ？」

「即答か…まあいい、ただ向こうの学園に移るには各自で住居を構  
える必要がある。学園側から多少なりとも金はでるらしい。オレの  
場合はドミノ町に以前使っていた別荘があるからいいんだが、ソラ  
はどうする？マンションにするか一戸建てがいいか。」

コーヒーを一口飲む。別荘は前にいた仲間たち…ロキの存在は覚えているからいいが、残りは思い出せない。まあともかく、仲間たちと使用したものだ。

「へ？一緒に住むんじゃないの？」

「…いいのか？お前だってオレに隠したいことの1つや2つくらいあるだろう？」

「うん。アルフォスと一緒に寝れるし 隠し事なんてしないよ。」

「いや、オレは鍵かけて自室で過ごすから。」

一緒に寝る？冗談じゃない。そもそも寝るかどうかなどその日の気分次第。

「えー、意地悪言わないで一緒に寝ようよお…」

この会話が男子の耳に入っているらしく、とにかく視線が痛い。何かアクションを起こせば、途端に飛び掛かってきそうなトラの視線を感じる。飛び掛かってきても、所詮人間の力じゃオレは止められないがソラもいるし危ない。

「冗談いうな。そんなことをしたらオレの精神力が持たずにオーバーヒートするだろうが。」

仮に寝たとして、朝起きた時にソラの顔が目の前にあるとかマジ勘弁。朝からオーバーヒートはシャレにならない。昨日珍しく寝て起きた時に、ソラの顔が目の前にあったのには驚いたぞ。オレより先に

カオスがオーバーヒートして1時間くらい意識が飛んでいたが。ちなみにカオスの場合オーバーヒート＝萌死という解釈。オレの場合悶死だろう。カオスの言う通りオレは可愛いものに弱いのか…。

「大丈夫 アルフォス強いから。」

「大丈夫 じゃねえ！」

その根拠はどこから出てくる！？今だって正直危険な状態だよッ！

「むう…」

いいもん、アルフォスが寝てるうちにこっそり部屋に入るから。

「とにかく、ソラはオレについてくるってことで良いんだな？」

「一応確認しておく。」

「うん。」

「よし、オレからの相談終わり。というわけでオレは寮に戻る。」

アルフォスは普通に席を立ち、寮に戻ろうとする。これこそアルフォスの防衛ライン。ある程度のところできりげなく帰ると言つもの。

「え、え！？待ってよー！」

ソラは走って追いかけてくる。いつもよりも対応が早い。「冗談じゃない、ここで捕まったらオレは死ぬ。」

そう思いブルー寮の方向に逃げる。そしてオレの方が圧倒的に足も

速く、更に疲れと言うものを知らない。ソラも何とか頑張るが華奢なああの体では……やはりバテたか。

……………オレも甘くなったものだ、折れてやるか。

「ほら、立て。」

アルフォスがソラの座り込んだところに戻って手を差し伸べる。ソラは嬉しそうにそれを掴んで立ち上がった。

「ありがとうアルフォス。」

「疲れさせたのはオレだから礼はいらない気がするぞ?」

ソラは首を横に振った。お礼は言いたいから言うもの、だそうだ。オレの返事はそっけなく、そうか。の一言。もう少し会話の相手になってやればいいんだがな。

「キツヒヤツヒヤツヒヤ!!……アレ、僕邪魔だったかな。何かゴメン、でもとりあえずアルフォスに報告があつてきたんだ。」

ロキが突然空間を裂いて、謝りながら現れた。ソラもこれは見慣れているためどうとも思わない。流星に初めて見た時は目を回したが。

「後3日で十代達が帰ってくるよ。十代はいないだろうけど。」

「へえ、そうなのか。」

「ソラは相変わらずだね。」

勝手にアルフォスに抱き着いているソラを見てロキが言った。

「ま、兄妹だろうが恋人だろうが止められないなら仕方ないことだ  
と思うよ。あるヤツの受け売りなんだけど、『好きなら相手が誰で  
も仕方ない』からね。」

「それで一日中こうされるオレの身にもなってくれ。オレの精神状  
態が危険なんだ。」

「それはアルフォスが悪い。嫌ならソラを突き放せばいいし、別に  
いいならそうさせてあげなよ。」

バツサリ言う。これは受け売り以前に僕の信条。自分がそれをやら  
れて嫌なら力づくで排除して、嫌じゃないなら好きなようにやる、  
もしくはやらせてやる。

「そう言われると、オレは弱いんだよな……。」

……はあ、オレもどうにかしなきゃならんのか。しかしソラを突  
き放したら……どうなるかなんて考えたくない。この前のオレの冗談  
が本当になってしまったら、オレも失踪するしかないだろう。

何というか……傲慢なわけではないし、自分に自信があるわけでもな  
い。しかし、オレの傍にいただけで無条件に笑顔になるソラを突き  
放すと、ソラが傷つくのは何となくわかる。

「じゃあ諦めるしかないね。」

「はあ……」

オレはため息をついた。

すると、ここで校長から預かっているオレの携帯が鳴る。メールらしい。

『件名：ソラさんの事で　差出人：ブルー女子寮監督　鮎川』

……ソラ？差出人は保健室及び女子寮の監督……。

「ソラ、悪いがオレの部屋で待っていられるか？」

「…何かあったの？」

「…ああ。ちょっとオレに相談がある人物がな。」

「わかった。」

ソラは納得してくれたようで、ブルー寮の方に歩いて行った。歩き方があどけなくて、どこか危なっかしい。

「かわいいヤツじゃん、ソラ。」

「そりゃオレの妹だからな。…じゃなくて、そうなんだが　いや違



う。だからそうではなくてだな…。」

自分で何を言ったのかすぐに理解し、何か言い訳をと思ったが言葉が出てこない。ダメだこりゃ。

「どっちだよ」

「わからん。とりあえず行ってくる。」

つつい自分の妹の事を自慢してしまったと。ロキなら確実にネタにしてくる。終わったな。

### ブルー女子寮前

呼び出しを食らった場所はここだ。

「やれやれ…ソラは一体何をしたのかな、っと。」

軽い口調、軽い気分。まあ、学生のうちに何かすると言ってもここはアカデミア島、違法行為なんてそうできるものではないし…なんだろうか？

「ルヴォルグ君」

声が出た方に振り返ると、オレを呼び出した張本人がいた。

「呼び出されたから来たぞ。」

オレの教師に対する口の利き方は大体こうだ。それは向こうもわかっている。特になにも言わない。

「はい、で早速なんだけど。昨日ソラさんの部屋の前を歩いていたから、ソラさんのうなり声が聞こえたの。」

「ソラのうなり声？」

「悪夢でも見ていたのかしら……とりあえず、今晩はルヴォルグ君の部屋で寝かせてあげてほしいの。」

「……わかった。寝かせるだけなら。」

話題もなくなつたし、これ以上何か話を振られてもおそらく返事に困るので、ブルー寮に戻る。

#### ブルー男子寮 アルフォスの部屋

「ソラ、戻ったぞ。」

ブルー寮の俺の部屋の扉を開けると、ソラが笑顔で待っていてくれた。それだけで日頃のマイナスの感情全てが吹き飛ぶ。

きつとこういうのを天使というのだろうか。やはりオレにソラを拒絶する理由なんてなかった。オーバーヒートも慣れればどうにでもなるだろう。というか、もう大分慣れてきたところだ。

「ソラ、今日はオレの部屋で寝る。お前の寮の監督からそう言われた。」

「ホント!? やったー!」

ソラはアルフォスに向かって抱き着こうと突撃した。

「ぐはっ…。」

いくらソラが軽いとはいえ、体重がかかり突撃を受けたアルフォスが少しよろめいた。

「わかった、わかったから抱き着くな。」

アルフォスはソラを引きはがした。

『もう義妹とは言え結婚も付き合う必要もあるまいに…』

「（あ、起きたのかカオス。）」

『たった今な。ブラコンとシスコンの兄妹とかどうしようもないな。』

「（…大輪シユの笑顔を見ていたら、オレのどうでもいい悩みが全部吹き飛んだ。それだけの話だ。ブラコンとシスコンってどういう意味だ?）」

本当にそれだけ。無駄に悩んでいた事全てがどうでもよくなった。

『でもちよっと苛めてみたくなるよな。』

「（ならねえよ。）」

そして……

深夜12時。

「アルフォス、お休み〜。」

「ああ。」

ソラはお休みと言ったかと思うと、すぐに寝てしまった。

『アルフォス。』

「なんだ？」

『一緒に寝てやれよ。』

カオスにそういわれてソラを見る。ソラはベッドの端の方に寝ていた。つまりどういふ事かというところ、オレの分を空けておいたという事か？

「まあ、添い寝くらいならいいか。」

アルフォスはソラの横に、ソラに背を向けて寝っ転がった。アルフォスはそのまましばらく、ソラに添い寝していたが。

深夜2時。

アルフォスは身を起こして机に向かった。本当にソラは悪夢を見ているのかを確かめるために。すると、アルフォスがソラから離れて間もなく、ソラの表情が苦しそうなものになる。

「うっ……くっ……アル……フォス。」

「（オレの名？）」

ソラの近くに行く。

「助……けて、アルフォス。」

「……カオス、ソラの夢の中にオレを入れる。」

『いいのか？下手をすれば戻れんぞ。』

「……ソラを助けてやりたいんだ。」

アルフォスは静かに、しかし周りに聞き取れるように言った。

『わかった。ソラの手を握ってくれ。』

カオスの言った通りにソラの手を握る。すると、オレの意識が光に沈み、次に目を開けた時は、ソラの夢の中にいた。

『ここがソラの夢の中のような。』

風景はブルー寮のオレの部屋そのもの。しかしそこに夢から入り込んだアルフォス以外の、本来夢の中にいるべきアルフォスの存在を感じられない。

「ソラ、どうしたんだ？」

まずはベッドの上で泣いているソラに声をかけた。ソラはこっちを振り返り、オレだと認識すると泣きながら抱き着いてきた。

「どうした？何があったんだ？」

「助けてアルフォス…死神が、死神が…」

ソラが言うには、ここ最近一人で寝ていると、毎晩のように夢に死神が出てきてソラの魂を狩ろうとするらしい。

「わかった、とりあえずこの部屋を出よう。」

ソラの手を離さないように握って部屋の扉を開ける。構造自体は夢の中と言えど、間違いなく男子ブルー寮だった。ただ1つ違うのは、消灯時間を過ぎても必ず少しはついている電気が全くついていないところだった。

暗いところが苦手なソラはより一層オレの手を握る力を強くした。

「前が見えないな。」

構造は覚えているからいいが、階段もあるため気を付けなければソラが危ない。昼間にも思ったが、ただでさえ歩き方があどけなくて放っておいたら何もないところで転んでしまいそうなヤツだ。

「アルフォス、大丈夫？」

「大丈夫だ。」

ソラが夢の中とは言え、この華奢な体で死神から逃げ続けていたと思うと、なぜもっと早く助けてやれなかったという思いになる。

そして1階に下りてブルー寮の玄関を開けようとする。だが、扉は開かない。

「死神をどうにかしなければダメか。」

どのみち、ここで逃げられたとしても、またソラを襲いに来るのは分かっている。ならばここで死神を撃退するのみ。

「出て来い死神!!!」

アルフォスが叫んだ。すると、周囲に黒い霧が集まり、骸骨が鎌を持った姿の…絵に描いたような死神が現れた。そして、その手に持つ鎌を振り上げ、ソラを斬ろうとする。

「やらせるものか！」

だがアルフォスもアーティスを剣に変えて鎌を防いだ。しかし、鎌の切っ先がアルフォスの肩に刺さった。再生能力と大幅に神力を失ったアルフォスには重いダメージだ。

「アルフォスっ！！」

「下がれソラ！」

鎌が刺さったオレの肩からは血に擬態した神力が流れる。だがここで諦めたら終わりだ。見たところこいつは、今はデュエルをする様子はない。やはり直接オレの手で片付けるしかない。

「くっ…いつまでもオレの肩に鎌を刺さったままにしてんじゃねえ！！」

死神を蹴り飛ばし、肩に刺さったままの鎌を無理やり引き抜く。このくらいの痛みは今までの戦いで経験済みでどうとも思わない。

吹き飛んだ死神との距離を一瞬で詰めて更に追撃する。武器を持っていなければ恐れる必要などない。

「（これ以上の追撃は逆に危険だな。）」



一旦退く。

「大……丈夫？」

ソラが震えた声で訊いてきた。

「心配するな。オレはそんなに弱くない。」

ようやく起き上がってきた死神が口を開いた。

「少女の魂を頂いて行くぞ。」

「やっと何か喋ったと思えば随分と物騒な事を……生憎こいつは、オレのたつた1人の可愛い妹でね。こいつの魂が欲しければオレを殺していけ！オレはソラをオレより先に死なせる気はない。」

オレの普段一緒にいる話し相手はビー玉カオスを除いてソラ1人。オレの帰る場所を奪わせるわけにはいかん。

「……よからう。」

死神は鎌を創り出したかと思うと、それをデュエルディスクに変形させた。

「覚悟しろよ？オレはデュエルの時……少しばかり気が荒くなア！！」

やっとやる気になりやがった。そうこなくては。

「デュエル」

Alfos vs. Death god

「我が先攻。『魂を削る死霊』を準備表示で召喚。カードを2枚伏せて魔法発動、『終焉のカウントダウン』、ライフを2000払い、20ターン後我はデュエルに勝利する。ターンエンド。」

Death god

LP2000

Hand: 2

終焉のカウントダウン: 1

Field

魂を削る死霊 DEF200

魔法・罫

伏せ: 2

「オレのターン。」

終焉のカウントダウン…面倒なデッキを…。

「オレは『X-X-セイバーボガーナイト』を召喚する。このモンスターが召喚に成功した時、手札のレベル4以下の『X-セイバー』を呼ぶ。来い、『X-セイバーパロムロ』。」

「あのデッキ…。」

私、まだアルフォスがあのでッキを使ってるのを見たことなかった。生徒の噂だとアルフォスの中で最強のデッキみたい。

「ボガーナイトにパロムロをチューニング。シンクロ召喚、出でよ『X-セイバーウエイン』。こいつがシンクロ召喚に成功したこと

で手札のレベル4以下の戦士族モンスター『XX-セイバーフラムナイト』を特殊召喚する。ターンエンド。」

「この瞬間カウントダウンが進む。」

Alfos

LP4000

Hand: 3

終焉のカウントダウン:2

Field

X-セイバーウエイン ATK2100

XX-セイバーフラムナイト ATK1300

「我がターン。永続魔法『平和の使者』を発動。攻撃力1500以上のモンスターは攻撃できない。ターンエンド。」

Death god

LP2000

Hand: 2

終焉のカウントダウン:3

Field

魂を削る死霊 DEF2000

魔法・罫

平和の使者

伏せ:2

「オレのターン！」

攻撃力1500以上のモンスターの攻撃を封じる平和の使者:それにおそらく、あの2枚もロックか召喚妨害。だが召喚妨害の線は薄

いか。

「オレは『X X - セイバーフォルトロール』を特殊召喚する。こいつは、『X - セイバー』が2体以上いる時のみ手札から特殊召喚が可能。その効果で墓地から『X - セイバーパロムロ』を特殊召喚。

『X - セイバーウエイン』に『X - セイバーパロムロ』をチューニング。シンクロ召喚、来い『X X - セイバーヒュンレイ』！」

X - セイバーの名が刻まれた女戦士が出現する。

「ヒュンレイはシンクロ召喚に成功した時フィールドの魔法・罫カードを3枚まで破壊する！貴様の3枚のカードを破壊！」

「ぬう…」

死神のカードは発動することなく破壊された。ミラーフォースとサイクロンか。

「カードを2枚伏せてターンエンド。」

Alfos

LP4000

Hand: 1

終焉のカウントダウン: 4

Field

X X - セイバーフォルトロール ATK2400

X X - セイバーヒュンレイ ATK2300

X X - セイバーフラムナイト ATK1300

魔法・罫

伏せ: 2

「我がターン。我はモンスターを1体守備表示でセットする。ターンエンド。」

Death god

LP2000

Hand: 2

終焉のカウントダウン:5

Field

魂を削る死霊 DEF200

伏せ:1

「オレのターン。」

チツ…さつきから死神は大して動かない。ならばこちらから攻め込んで叩き潰す。

「オレは『XX-セイバーヒュンレイ』に『XX-セイバーフラムナイト』をチューニング。シンクロ召喚、出でよ!!!『XX-セイバーガトムズ』!!!」

堅牢な甲冑を来た、恐るべき迫力を持つ戦士が現れる。レベル9のシンクロモンスターの中ではきわめて異質なシンクロ素材制限を持ち、その攻撃力は3100。このデッキにおけるオレのエースモンスター。

「更に『XX-セイバーレイジグラ』を召喚。こいつの効果で墓地からフォルトロールを回収、特殊召喚。フォルトロールの効果を使用して墓地の『XX-セイバーフラムナイト』を蘇生する。」

手札は尽きたがフィールドはまずまずだろう。

「『XX-セイバーレイジグラ』に『XX-セイバーフラムナイト』をチューニング。シンクロ召喚『アームズ・エイド』！」

爪の形をした装甲のモンスターが現れた。

「『アームズ・エイド』の効果発動。こいつを『XX-セイバーガトムズ』に装備し、その攻撃力を1000アップする！」

XX-セイバーガトムズ ATK3100 4100

神を除けば、このデッキでアクセルシンクロも使用せずに叩き出せる最高攻撃力はこの4100ポイント。攻撃力でこのガトムズを超えるのはパワー押しのデッキでもない限り困難だ。

「ガトムズで裏守備モンスターを攻撃！！グランドスラッシャー！」

ガトムズの巨大な剣の一撃が裏守備モンスターに叩き込まれたが、その剣は弾かれた。

「何!？」

「我が伏せモンスターは『マシユマロン』。戦闘では破壊されず、裏守備のこのカードに攻撃たプレイヤーに1000ダメージ与える。」

マシユマロンがアルフォスの腕に噛みついた。

「チッ…!」

実体化してオレに噛みついてきたマシユマロンを、腕を振って振り  
払った。

Alfos LP4000 3000

「ターンエンド。」

どちらも戦闘耐性を持つモンスター。エマーズブレイドかダーク  
ソウルが来れば…！

Alfos

LP3000

Hand: 0

終焉のカウントダウン: 6

Field

XX - セイバーガトムズ ATK4100

XX - セイバーフォルトル ATK2400

魔法・罫

アームズ・エイド

伏せ: 2

「我がターン。カードを1枚伏せてターンエンド。」

Death god

LP2000

Hand: 2

終焉のカウントダウン: 7

Field

魂を削る死霊 DEF200

マシユマロン DEF500

魔法・罫

伏せ：1

「オレのターン！」

まずい 早くしなければ夜が明けてしまう…！死神を引きずり出すまでに時間をかけすぎたか。このままソラの目が覚めればオレは脱出できなくなる。

「冗談じゃねエ。オレはフォルトロールの効果を発動し、墓地の『XX-セイバレイジグラ』を守備表示で特殊召喚。レイジグラの効果発動、こいつが召喚・特殊召喚に成功した時、墓地から『X-セイバー』を回収できる。『X-セイバーパロムロ』を回収し、召喚！」

「アルフォス。」

「心配するな、ソラ。『XX-セイバレイジグラ』に『X-セイバーパロムロ』をチューニング。シンクロ召喚、来い、『フォーミユラ・シンクロン』！このモンスターのシンクロ召喚成功時、オレはデッキから1枚ドロ。」

まだ来ないか…！だがこれで奴を倒す準備は整った。

「トラップ発動。『ガトムズの緊急指令』！フィールドに『X-セイバー』がいる時、自分または相手の墓地から『X-セイバー』2体を選択して特殊召喚する。来い『XX-セイバレイジグラ』、『XX-セイバーフラムナイト』！『XX-セイバーフォルトロール』、『XX-セイバレイジグラ』に『フォーミュラ・シンクロン』を



チューニング！！シンクロ召喚、『ミスト・ウォーム』！

巨大な竜の如き姿をした大蛇が現れた。

ミスト・ウォーム ATK2500

「『ミスト・ウォーム』のシンクロ召喚に成功した時、相手のカードを3枚まで手札に戻す。『魂を削る死霊』『マシユマロン』伏せカードの3枚を手札に戻す！」

「カウンター罨発動。『昇天の黒角笛』ブラック・ホーン、相手の特殊召喚を無効にして破壊する。」

「！」

迂闊だったまさか特殊召喚封じのカウンター罨だったとは…！ミスト・ウォームどころかフォルトロールさえも失った。

「やってくれたな…貴様のせいでオレの計画は台無しだ。ターンエンド。」

Alfos

LP3000

Hand: 0

終焉のカウントダウン: 8

Field

XX - セイバーガトムズ ATK4100

XX - セイバーフラムナイト ATK1300

魔法・罨

アームズ・エイド

伏せ：1

「我がターン。我はカードを1枚伏せ、ターンエンド。」

Death god

LP2000

Hand：2

終焉のカウントダウン：9

Field

魂を削る死霊 DEF200

マシユマロン DEF500

魔法・畏

伏せ：1

「オレのターン。」

「トラップ発動。『グラヴィティ・バインド - 超重力の網 -』、すべてのレベル4以上のモンスターの攻撃を封じる。」

ただでさえ時間が残っていないこの状況で更にデュエルの遅延カードを 面倒な！

「オレはカードを伏せてターンエンド！」

カウントダウンも残り10ターン！早くしなければ。

Alfos

LP3000

Hand：0

終焉のカウントダウン：10

Field

XX - セイバーガトムズ ATK4100

XX - セイバーフラムナイト ATK1300

魔法・罫

伏せ：2

「我がターン。永続魔法『レベル制限B地区』を発動する。フィールドのレベル4以上のモンスターは全て守備表示になる。」

XX - セイバーガトムズ ATK4100 DEF2600

「チッ。。」

「ターンエンド。」

Death god

LP2000

Hand：2

終焉のカウントダウン：11

Field

魂を削る死霊 DEF200

マシユマロン DEF500

魔法・罫

グラヴィティ・バインド - 超重力の網 -  
レベル制限B地区

「オレのターンッ!!」

カウントダウンも折り返しを通過した。残されたターンは5ターン、だがこのターン引いたカードは悪くない。

「魔法発動、『死者蘇生』。蘇れ『XX-セイバーレイジグラ』！  
その効果でフォルトロールを回収し、特殊召喚する。」

「だが、『レベル制限B地区』の効果は受けてもらっぞ。」

XX-セイバーフォルトロール ATK2400 DEF1800

「『XX-セイバーガトムズ』効果発動。レイジグラを生け贄とし、  
貴様の手札を1枚捨てる！フルスラッシャー！」

ガトムズは死神の手札を1枚真つ二つに切り裂いた。

「続いてフォルトロールの効果。墓地よりレイジグラを特殊召喚し、  
墓地にある『XX-セイバーボガーナイト』を回収する。」

「何をしようが無駄な事だ。レベル4以上のモンスターは守備表示  
になり、攻撃できない。如何に高攻撃力のモンスターを並べようと  
も無駄な事。更に、我がフィールドには『マシユマロン』と『魂を  
削る死霊』の2体。仮に攻撃できたところで破壊されることは無い。」

「トラップオープン、『強制脱出装置』。フィールドの『XX-セ  
イバーフォルトロール』をオレの手札に戻し、再度特殊召喚する。」

これでフォルトロールはもう1度効果が発動できる。目に物を見せて  
やる。

「ガトムズの効果！フラムナイトを生け贄とし、貴様の手札を捨て  
る！」

ガトムズが死神の最後の手札を切り裂く。『バトルフェーダー』：その程度のカードでオレを止めようとは笑わせる。

「ボガーナイトを召喚。手札は0、特殊召喚するX-セイバーは無い。『XX-セイバーフォルトロール』の効果発動。墓地から『X-セイバーパロムロ』を特殊召喚。『XX-セイバーレイジグラ』『XX-セイバーボガーナイト』に『X-セイバーパロムロ』をチェーンング！！シンクロ召喚、『XX-セイバーヒュンレイ』！！こいつの効果は覚えているな？『レベル制限B地区』と『グラヴィティ・バインド-超重力の網-』を破壊する。」

「ぬう…！！！」

「ガトムズを攻撃表示に変更してターンエンド。」

Alfos

LP3000

Hand: 0

終焉のカウントダウン: 12

Field

XX-セイバーガトムズ ATK4100

XX-セイバーフォルトロール DEF1800

XX-セイバーヒュンレイ DEF1600

魔法・罫

伏せ: 1

「我がターン。『魂を削る死霊』を守備表示で召喚。ターンエンド。」

Death god  
LP2000  
Hand: 0  
終焉のカウントダウン: 13  
Field  
魂を削る死霊 DEF200  
魂を削る死霊 DEF200  
マシユマロン DEF500

「オレのターン。オレのフィールドの全てのモンスターを攻撃表示に変更。」

勝利の方程式は……

完成した。

「オレは『XX-セイバーフォルトロール』の効果で、墓地から『XX-セイバーレイジグラ』を蘇生し、パロムロを回収、通常召喚する。『XX-セイバーレイジグラ』『XX-セイバーヒュンレイ』に『X-セイバーパロムロ』をチューニング。シンクロ召喚！！出でよ、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果はあまり使われないが…それは…

守備滅殺。

「バトルだ。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『マシユマロン』を攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！！」

マシユマロンはレッドデーモンズの一撃を受けたが、やはり破壊されなかった。

「無駄な事だ。」

「そいつはどうか？『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果発動。守備モンスターを攻撃した時、相手の守備モンスターを全て破壊する！！デモン・メテオ！」

「なんだと！！？」

「これで貴様のモンスターは全滅！！『XX-セイバーフォルトロール』でダイレクトアタック！」

「墓地から『ネクロ・ガードナー』を除外しその攻撃を無効にする。」

「まだオレには『XX-セイバーガトムズ』の、攻撃が残っているッ！！グランドスラッシュャー！」

ガトムズが死神を斬りつけた。

「あと少しのところまで……」おおおおおおおっ！！！！」

Death god LP2000 - 2100

死神が消えたのを確認して、すぐにソラの手を握る。

「急ぐぞ。お前の目が覚めればオレはここから脱出できなくなる！」

「そんなっ！」

ソラは体力的にきついけど、今のアルフォスの言った言葉もあり、全力で走る。

『急げ。残り30秒しかない。今は午前4時だが、死神が消えたことで楽になったソラが一旦目を覚まそうとしている。』

「ソラ、悪い！」

「えっ？きゃあっ！？」

ソラが扉に激突しないようにしっかりと抱きしめて、扉に体当たりしてこじ開ける。そこには黒い渦ができていた。

『突っ込め！』

そこで夢の中のオレの意識は途切れた。



ブルー男子寮、アルフォスの部屋

「何とか間に合ったな。」

意外と時間制限があるのは厳しいものだ。しかし、よく考えたら妹とは言え他人の夢の中に入り込むのはどうなんだろうか。

「…う アルフォス？」

「ソラ、大丈夫か？」

「うん。 ありがとうアルフォス」

ソラはいつもの笑顔で、オレには価値が高すぎる言葉を言ってくれた。

後で聞いた話だが、あの死神は大分前から男子、女子両方のブルー寮で噂になっており、より強力な精霊を従える生徒の夢の中に入り込んで魂を狩るらしい。今回は不運にもソラがその標的になってしまったという事だった。なんにせよ、考えられる最悪の事態は避けられてよかったというべきだ。

…その後、ソラが周りの事お構いなしにオレに常についてくるようになった事以外は。 1人でどこかに行こうとしても、必ずついてくる。だがロキの言った通りに、別に嫌ではないから好きにさせてやることにした。



## 第15話 ブルー寮の死神（後書き）

次回「異世界からの帰還者」

アルフォス「…疲れた。」

ソラ「じゃあ私が治してあげよつか？」

アルフォス「全力で遠慮する。」

ソラ「え〜。…」

カオス「リア充死ね」

アルフォス「妹だから！！彼女じゃないから！」

ソラ「今日の最強カードはコレ」

『XX-セイバーガトムズ』

レベル9 地属性 獣戦士族・シンクロ/効果 ATK3100

DEF2600

チューナー+地属性モンスター1体以上

自分フィールド上に存在する『自分フィールド上に存在する』X-

セイバー」と名のついたモンスター1体をリリースして発動する。

相手の手札をランダムに1枚捨てる。

カオス「強力な攻撃力を持つレベル9のシンクロモンスターだ。特

徴はチューナー同士でシンクロできるところや、レベル9でありながら素材は2体でもシンクロ可能といったところだな。」

アルフォス「ハンドスは無限ループが決まれば相手の手札が一瞬で0になる。ただし暗黒界相手には注意だ。」

ソラ「アルフォス」

アルフォス「抱き着くなあああああつ!!!」

カオス「というわけでアルフォス処刑祭開幕だ。大抵の攻撃では通用しないから、とびきり威力の高いものを頼む。ただし彼女持ちの主人公諸君の攻撃は全く通用しないので、彼女のいないキャラで攻撃することをお勧めする。」

アルフォス「やめろ」

ソラ「大丈夫、私が守るから」

ロキ「なんでブラコンになったの？」

カオス「知らん。」

## 第16話 異世界からの帰還者（前書き）

短かった日常編はここまでにします。

次回からはGXでいうダークネス編に入ります。

とっとと終わらせてオリジナル編スタートにするか、ゆっくりマイペースに進めるかは悩んでいるところですがね。今のところはさっさとオリジナル編に入る方針でいます。

### 最近の出来事

砂糖を吐きながら身も悶えそうでかゆいところに手が届かない感覚の恋愛小説もしくは漫画が読みたいです。

## 第16話 異世界からの帰還者

### 購買

死神退治から2日後。十代達はロキが言っていたよりも1日遅く、今日帰ってくるようだ。今、オレとソラは購買にいる。最も、オレは異世界からの帰還者などどうでもいい。

「アルフォス」

「どうした、ソラ？」

「呼んでみただけ」

「…なんだ。」

今は昼休み。まあいつも通りというべき光景だろう。この2人、何とも楽しげだ。もはや嫉妬深い男子生徒の連中でさえ手を出そうとしない。いや、出せない。アルフォスを処刑しようとしても、ソラの笑顔で毒気を抜かれてしまう。

ちなみに、今いるのは購買の隣にあるあの食堂だ。一応名前は食堂だが、内装はどう考えても洋風の高級レストラン。かなり混んでいるが、オレ達は端の方の2人用の席に座っている。

「ソラ。」

「えっ！？な、何？」

アルフォスがソラの顔に顔を近づけた。そしてしばらく、ソラの瞳をじっと見つめる。

「フフツ、何でもない。」

そしてアルフォスは不敵に笑った。多分、名前だけ呼ばれた事のお返しかなんだろう。ちなみにアルフォスは、オーバーヒートには完全耐性を得たので抱き着かれたりしても悶死はしなくなった。

「むう…いじわる。」

『ぐはあっ！！』

しかしカオスは耐性を得ることなどできない。当事者であれば、慣れさえすればオーバーヒートしなくなるが、第三者はわけが違う。

「かわいいヤツめ。」

オレにはこんな実妹、もつたないくらいだ。

…今更誰にも譲る気はないが。多分「ソラをくれ」とか男に言われたらオレはその男をぶっ潰すんじゃないだろうか。

『実妹にした我に感謝するがいい。』

「（そうだな。お前にも感謝しなければなるまい。）」

すぐに変な考え事をする以外、神力を失い大半の魔法が使用不可になったオレにはこいつは頼りになる。

「ソラ、お前はそろそろ次の実技だろう?」

「うん。行く。」

手を差し伸べてやると、恥ずかしがらずに普通に手をつないできた。元々恥ずかしがることなんてなかったが、なぜオレの方から差し伸べるようになったかと言えば。

昨日ソラを1人で歩かせていたところ、例のあどけない歩き方をしついに何も無いところで顔から転んでしまった。草むらだったから良かったものの、これがコンクリートだと思つとゾツとしたからだ。歩くときのバランスに注意しろと言つたらすぐに治つてきたので、こちらから手を差し伸べるのは最初で最後になるかもしれない。

『ソラには絶対言えないが、昨日の泣き顔可愛かつたな。』

「（妹の泣き顔見て何が「かわいい」だ。最低だな。）」

どちらの言い分も多分正しい(?)。ここは人によつて意見の分かれる事だろう。

ソラをデュエル場に連れて行つたあと、オレは観客席に移動する。

オレは基本的に授業には出ていない。単位はまあ海馬にいろいろ手回しして大丈夫なようにしている。

10分ほどでソラの実技が終了した。結果から言えばソラの圧倒的勝利。やはり天神皇をこの学園の生徒が突破するのは難しいか。

しかし、ソラの他の生徒に対する素っ気なさはどうにかならないか。それこそ普通に生徒と話すようにはなつたが、やはり必要最低限の



事だけだ。まあ、それ以前に他の生徒とは話そうともしないオレよ  
りかはマシなわけだが。

「アルフォスく、勝ったよ！」

「ああ、見てたよ。」

抱き着いてくるのはもはやデフォなのでどうとも思わなくなった。  
ただ、やはり周りの目は気になる。手をつなぐ程度ならともかく、  
さすがに大勢の生徒の前でこれはどうかと思う。もう止める気も起  
きなくなっただけ。

ドオオオオオオオオオオオ！

突如、外に巨大な光が降り注ぎ、爆発音が聞こえた。どうやら異世  
界に旅立っていた連中が帰ってきたらしい。

「きゃっ!?!」

ソラがバランスを崩したので、背中を支えてやる。やはり軽い。

「大丈夫か？」

「ありがと。平気だよ。」

爆発音が聞こえてから生徒たちはその方向に向かう。オレは支えていたソラを起こした。

「よおアルフォス、お前らは行かなくていいのか？」

おそらく爆発音が聞こえた場所に行こうとしているリマが話しかけってきた。

「オレはいい。何が起こっているのか知ってるからな。」

「そっか、じゃあな。」

リマは走って行った。デュエル場に取り残されても何か寂しい気がするので、とりあえずデュエル場からは出る。そうすると、外から騒がしい声が聞こえてきた。森から校舎までは距離があまりなく、よく声が聞き取れる。

「…アルフォス、私達も行こ。」

「気になるのか？」

「うん。」

まあ、こういう事に興味があるのは仕方ない。リマには今さっき行かないと言ってしまったばかりだが、そんなことを気にしていてもどうにもならないだろう。

「ソラが興味あるならオレも行くか。」

森の中

数十人の生徒がそこに集まり、騒がしい。オレは生徒をかき分けてソラと一緒に一番前に出た。

「アレだ。」

ソラはオレの指差した先 異世界から帰ってきた者達の方を見つめた。

「…なんだか個性的な人たちばかりだよ、アルフォス？」

ソラは帰ってきた生徒たちの姿を一目見るなりそう言った。実際、異世界に旅立っていたメンバーが個性的でないと言えば大ウソになるだろう。

「ま、まあそういう連中だ。」

「満足した。行こ、アルフォス。」

ソラがアルフォスの手を引っ張った。アルフォスが少しその場に留まろうとすれば、ソラの力ではもうアルフォスを引っ張る事はできない。アルフォスはそんなことはしないが。

「ああ。転ばないように気をつけるよ。」

「うん！」

この兄妹、既に学園中にその行いがいかなるものなのか広まっている。だがアルフォスはともかくとして、ソラはそんな事を気にしない。現在進行中で周りの多数の生徒の注目を集めていても。

だが、ついに嫉妬中の男子生徒連中の魂に火がついた。

「うおおおおおお！これ以上は許さん。許さんぞルヴォルグ！」

ソラも一応ルヴォルグだが、この学園でルヴォルグと言えばアルフォスの事を指す。ソラは『スカイ』とか、『ソラちゃん』とか呼ばれている。

「ソラ、どうやらオレをご指名のようだ。ちょっと離れてる。」

ソラをオレから離す。まあ、そろそろそう来る頃だろうとは思っていた。何しろ勝手にFCとか立ち上げるような連中だ。ファンクラブ

「ルヴォルグ！貴様いつもソラちゃんを独り占めなどというセコイ真似をしゃがって！オレ達が成敗してやる！」

「これでも一応実兄なんで、何をしようと思つぞ？そもそもオレはソラがやりたいようにやらせてやっているだけであり、こっちから変な真似をしたことは一度もない。」

「問答無用！オレとデュエルだ！オレが勝つたら、ソラちゃんをFに譲ってもらうぞ！」

学園内にソラとアルフォスの件で嫉妬していた男子生徒は少なく見積もっても30人はいるだろう。残りは「兄妹だしそのくらいいいだろう」という常識ある生徒たちだ。とにかく、その30人の中でもこのブルー生徒はアルフォス達や十代達を除けば学園内ではかなり実力のある方で、悪く言えば傲慢、良く言えば自信家だ。

「またこういうパターンか。」

『いいんじゃないのか？ここで成敗して2度とこんな反逆を起こさないようにするの。』

カオスがアルフォスに言う。アルフォスはそれもそうだな、と笑った。

「いいだろう、来るがいい。」

こうして、異世界から帰還したメンバー達がいるこの場の空気を読まないブルー生徒とアルフォスのデュエルが始まった。帰還したメンバーを見に来た生徒たちの中にもこのデュエルで3人組の勝利を願う生徒は多数いるが。

「お前の実力を見せてみる。」

「デュエル！」

A l f o s v s . E n e m y

「先攻はオレが貰うぜ。オレは『霊滅術師カイクウ』を攻撃表示で召喚！ターンエンドだ。」

E n e m y

L P 4 0 0 0

H a n d : 5

F i e l d

霊滅術師カイクウ A T K 1 8 0 0

「オレのターン。オレは永続魔法『機皇強襲』を発動し、『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚。」

「アルフォスく、やっちゃえく」

「...」

なんて気楽なヤツだ。このターンで決着がつくからいいが。

「魔法カード『機皇召集』発動。自分フィールド上に『機皇』モンスターが存在する時、自分のデッキから『機皇』と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。現れる『機皇神マシニクル』?!」

機皇神マシニクル ? A T K 4 0 0 0

白を基調とした、左手が砲になっている永久機関搭載の人型ロボットが出現した。このデッキのエースモンスターだ。

「こ、攻撃力4000!?!」

「バトル。ワイゼル・アインでカイクウと相打ち、マシンクルでダイレクトアタック。ザ・キューブ・オブ・ディスプレイア！」

「1：1ターンKILL：ぎゃあああああああ！！」

Enemy LP40000

周りの大半の生徒が『当然だな』と心の中で思っていたに違いない。まずアルフォスが負けたという記録は学園には1度くらいしか残っていない。次に『妹を賭ける』なんて言われて兄が本気を出さなはずがない。そして何より、2人の実力には差がありすぎた。学園最強と呼ばれる十代でさえ今のアルフォスには完封されかねない。ちなみにデュエルアカデミアには最強候補が何人かいて、全員がアカデミア最強と呼ばれている。アルフォスは「オレが最強？笑わせな」と軽く流すが、アルフォスが最強候補のトップなのは生徒の中では当たり前だった。

「これに懲りて、ソラに手を出すのはやめておけよ。」

アルフォスは呆れたように言うと、ソラを連れてブルー寮に戻って行った。死神の一件以降、ソラはアルフォスの部屋で寝ている。寝顔を見たカオスは勝手に撃沈しているらしい。

「うぐっ…。」

後には悔しそうな顔をしているブルー寮の生徒が立っていた。

## 次の日

「ふああ おはようアルフォス。」

「やっと起きた。オレを抱き枕にするのをやめてくれないか。」  
今現在、アルフォスはソラに背を向けて寝ている状態なのだが、ソラに抱き着かれていますいで起き上がることができないでいる。昨日適当にベッドに寝っ転がって強制睡眠モードに入ったところまでは覚えていますが、その後の事は記憶にない。おそらくソラが勝手に入ってきたのだろう。

「…ヤダ」

朝に弱いソラが少し舌足らずな声で言った。ソラはオレの理性崩壊を狙っているのか？残念だが100%崩壊は無いぞ。

『ぐふっ！』

朝からいきなりカオスが大変な目に…ここまで来たらもはや同情ものだ。

「それよりも早く離してくれ。」

「寒いからもうちょっと。」



「……。」

早く起き上がりたい。人間の感覚ではこの時期がいくらか温暖なアカデミア島とはいえ寒いのは分かるが、オレをそんな用途に使わなくてもいいだろう。

どこかで年が離れている兄妹は仲が良いが、近い兄妹は悪いと聞いた。本当なのか？ オレから振り払ってやればいいのか？ ふむ…しかし仲が良いに越したことは無いしなあ…。

…アルフォスがこんなくだらないことで悩んでいるうちに…5分後。

ソラがやっと離してくれたので、ようやくブルー寮から出ることができた。兄妹で仲のいい事は良い事、と言われるが、ここまできたらどうなんだろうか。今もソラはオレの隣にいる。まあ、下手に離れてどこかに行って勝手に迷子になるような妹ではない分、苦労は少ないが。

それにしたってこの年でこの甘えよう。普通の兄妹なら逆に仲が悪くはないのにどうという事だ。オレがソラをいじめたことがないからなのか。

「ねえアルフォス。」

「どうしたソラ？」

不意にソラが声をかけてきた。

「別荘ってどんなトコ？」

…ああ、この前話したアレの事か。

「気になるなら見に行くか？」

「…ホント？」

「ホント。」

「でも、今日平常授業だよ？」

「…………… たった今鮫島に休むと伝えただぞ。」

まあ今までロクに授業に参加しなかったこともあり、かなり簡単に了承の返事が返ってきた。ソラにオレの手を掴ませる。

「よし、離すなよ？」

「うん」

変身魔法で漆黒の翼を生やして飛ぶ。ソラはオレの能力をいろいろ知っているから普通に驚いたりはしない。最初に見せた時は面白いくらいに驚いていたが。

飛ぶ速さは素のスペックが高いために、その別荘には10分程度で着いた。町からは少し離れているが、かなり大きい屋敷だ。学校まではここからグランドフォースのハイパースローモードで30分くらいか。

「これが別荘？」

「そうだが？」

「……ホントに？お金持ちの屋敷じゃなくて？」

「本当に別荘だ。」

ソラのいう事も尤もだ。これを初見で別荘だと理解するのは無理だろう。なぜなら、それは文字通り『絵に描いたような屋敷』だからだ。マンガやアニメの世界で登場する大金持ちが住んでいそうな屋敷がそこには建っている。アルフォスは普通に別荘に入って行った。ソラもそれを追いかける。

「埃が無いってどういう事？」

ソラが訪ねてきた。確かに埃がないのは不思議に思うか。

「説明が難しいから無理だ。言うなればそういう仕様とでも理解しておいてくれないか？」

「わかった。…お風呂は？」

「風呂なら1階の奥に行ったところに…。」

そこまで言ったところでソラは駆けて行った。オレの中では大理石の天然温泉風呂だったような記憶がある。ソラを追いかけて見に行ったところ、オレの記憶は正しかった。そして次の瞬間、ソラから耳を疑う言葉を聞くこととなった。

「一緒に入る？」

.....  
.....  
.....

「だ、だ……誰が入るかあああああああああああッ！！」

オレの叫びが屋敷中に響いた。

2階

「…で、2階全体が寝室な。部屋数は大体20くらいあるから好きな部屋を使っただけ。」

ソラが1つ1つ部屋を見て回り始めた。

「…な、何が一緒に入ろうだ。冗談じゃない。20秒以上水を浴び続けているとオレは大変なことになるといふのに…。」

『我が魔力のバリアで水を防ぐことはできるが』

「やめろ」

まず20秒というリミットもあるがそれ以前の問題だ。

『ふむ、残念だ。』

「何が残念だ。」

「わっ！」

目の前の1番目の部屋からソラの驚いた声が聞こえ、ガシャーンと何かが割れる音がした。多分、絨毯が何かに引っかけたのだろうか。

「どつしたソラ？」

「…、ごめんなさい！」

何があったか言うよりも先に謝ってきた。若干声が震えている。

「…花瓶か。大丈夫か？怪我とかはしていないよな？」

花瓶の1つや2つどうでもいい。

「…怒らないの？」

「別に。お前に怪我がなかっただけでいい。」

花瓶の破片を大きなものだけ拾って捨て、残りは適当に近くにあった箒で掃き集めて捨てておく。花瓶よりもソラが怪我をする方が問題だ。万が一怪我の跡が残った日には、カオスがどれだけ発狂するかわかったものではない。

「で、部屋はどうだった？」

「気に入った部屋がいくつかあったよ。」

「そうか。部屋は好きなだけ使っていていいぞ。オレはどうせ1つしか使わないからな。」

「じゃあ、アルフォスと一緒に部屋にする。」

ソラは笑顔でそう言った。もう説得しても聞くまい。

「…勝手にしろ。」

言っても聞かないなら諦めるしかない。別にソラが同じ部屋にいたところで問題が起こる可能性は0だろうし、オレの行動にも差支えないだろう。

「……もう昼か。ソラ、どこか行くか？」

「パスタ料理が食べたい。」

「じゃあ行こう。」

ソラを連れて街に出る。飲食店は結構数があり、この時間帯はどこも混む。幸い、ソラのリクエストしたパスタ料理の出るイタリア料理店はお世辞にも空いているとは言えないが席が空いていた。ソラがメニューを開く。かなり悩んでいるように見える。

「アルフォスは何にするの？」

そして、ソラはメニューを迷って決められないのか、オレが何を頼むのか尋ねてきた。

「オレは何もいら…いや、ミートソースで。」

さっきまでは何も食べるつもりが無かったが、いらないと言おうとしたところでソラがジト目で見てきたため、何かを頼まざるを得なくなった。

「じゃあ私もそれにする。」

ソラは店員を呼び、注文する品を伝えた。

「…お兄ちゃん」

「っ!？」

危ない、水を吹くところだった。

「なんだその呼び方？何か欲しい物でも？」

「ううん。こっちの学校に通うようになったら学校ではこう呼ぼうかなって思ってた。」

「な、何故…？」

一般的な兄妹を例にしていえば逆じゃないのか？学校で呼び捨て、家では兄貴とかお兄ちゃんとか名前を呼ばずに『おい』とかそういう呼び方が普通じゃないのか？それが何故学校で「お兄ちゃん」で家で「アルフォス」なんだ？

「何となく。」

「ま、まあ…好きにすればいいんじゃないか？」

理由が何となくという理由なので断れん。はつきりした理由があればそいつを否定する事もできるのだが…。

### デュエルアカデミア

あれから昼食を済ませ、屋敷に荷物を取りに行ってデュエルアカデミア島に戻ってきた。

ふと思いついたが、この時期はそろそろ卒業アルバムと言うものを作り始める頃だった気がする。…卒業アルバムとはなんだろうか。

去年も3年生は羽目を外して何かしていた覚えがあるが…。まあいいか。



今現在はもう放課の時間。冬のために日が沈むのも早い。オレはソラを連れてブルー寮のオレの部屋に戻った。

夕食を済ませた後…。

「アルフォス、ちょっとデスク調整したからデュエルしてくれないかな？」

「ああ、いいぞ。…デュエルディスクどうする？」

ソラはオレの部屋にいる時は、基本的に寝ているか本を読んでいるか、デッキを調整してオレをデュエルに付き合わせるかだ。そろそろ余裕で圧勝というのはできなくなってきた。

「つけなくていいかな。普通にやる。」

「デュエル」

Alfoss vs. Sora

……………数分後。

Alfoss LP4000  
Sora LP-

「…ひどいよ…。」

「手加減したらオレが死ぬからな。ライフ4000で天神皇の能力はシャレにならん。」

アレスの効果は特にまずいだろう。相手モンスターを1ターンに1度破壊し、さらに1度のバトルフェイズに2度の攻撃が可能、モンスター効果を受けない。他の天神皇よりも攻撃的な部分が多いために真っ先に潰さなければすぐオレのライフを0にしに来る。

「実戦なんてそんなものだ、手加減していたらすぐに死ぬ。非情な現実だがそれだけは覚えておけよ？オレと一緒にいるだけで少なからず危険は迫ってくるわけだからな。」

オレの生きる先に敵は星の数以上に存在するだろう。時にはソラ1人で戦わなければならない時も来るかもしれない。

「うう…1人で戦うのはたぶん大丈夫だけど。アルフォスの方が心配だよ。勝手に無茶してそうだもん。」

「どうだろうな。無茶する時もあればさっさと撤退することもあるぞ。時と場合による。」

実際はその引き際を見つけるのが困難だから敵を殲滅して帰ってくるわけだが。撤退するタイミングを簡単に見つけられるならとつくにそうしている。

「まあお前は普通の生き方をすればいい。」

争いをせずに勉強なり恋なりして、好きなように遊んだりして暮らせばいい。オレとソラの道は違う。ソラの道はソラが決める。それがオレについてくるといふ選択なら好きにさせてやるまでだ。

まあソラもドジで天然でブラコンで少し頭がよろしくないところ以外は悪いところがない。別にこの先、オレについてくると言っても困ることもあまりないだろう。最悪の場合は家に待機させておけばいいわけだしな。

『それはどちらかというところの方がいいよな……。』

「（それは言うな）」

ドジなのは…何もないところで転ぶところで、天然なのは普段からブラコンなんて見てればわかる。本当に少しだけが頭がよろしくない（発想が単純なところなど）というのは別にどうでもいい。

最初に会った時に『私と同じ感じがする』『あなたなら私の事を理解してくれそうだから』なんて理由で近づいてくるあたりかなり天然だと思った。

「さて、もう遅い、お前はそろそろ寝ておけ。……アレ？」

もう寝ていた。

ようやくオレの自由な時間が始まる。と言っても、最近はどこか遠い目をして何かを考えていることが多くなっただけらしいが。そうしているオレを見ていたというカオスがそう言っていたのだから、きつと間違いはないだろう。

…実際は何も考えずにじっとしているだけだが。

こうしたごく普通の日々が流れ、1か月の時が経った。十代がこの次元に帰還したことで、新たに動き出す者がいる。

そしてその刺客は、やはりというべきか特殊な力を持つオレとソラのところにも出現するのだった。

次回へ続く。

## 第16話 異世界からの帰還者（後書き）

次回「闇の使徒襲来」

アルフォス「今日の最強カードはコレだ。」

『天神皇帝ゼウス』

レベル10 神属性 幻神獣族・シンクロ/効果 ATK4000

DEF4000

チューナー+チューナー以外のモンスター2体

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、表側表示の幻神獣族モンスターは相手の魔法・罫・効果モンスターの効果を受けない。1ターンに1度、エンドフェイズ時までこのカード以外の自分フィールド上に存在する幻神獣族モンスターの元々の攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする事ができる。このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを特殊召喚する。この効果で特殊召喚に成功した時、相手のライフを半分にする。

カオス「本編では省略されたがソラとのデュエル中にソラが使用したことになっている。」

ソラ「次回からダークネス編だつて。」

ロキ「その先のオリジナル編ではアルフォスがデュエルアカデミアの大学で女の子たちにフラグを立てるんだつて。」

ソラ「それはアルフォスの自由かな。」

カオス「意外と受け入れるのだな。」

ソラ「立てるのは自由だよ？へし折らないとは一言も言ってないよ？」

アルフォス「フラグを立てるのもそうだが、ソラもソラでダメだ…。」

カオス「ソラ、アルフォスが兄妹じゃなければどうする？」

ソラ「えー…彼女ルートに進むんじゃないかな？」

ロキ「それはそれで興味あるかもね。」

ソラ「ロキに興味持たれてもうれしくない」

ロキ「この嫌われようだよ畜生OTL」

カオス「この場合嫌われているというよりも何か別の気がするが…。」

アルフォス「また次回会おう。」

これからの大まかな流れを書くと、

ダークネス編 大学1年編 大学2年編 大学3年編 大学4年編

## 裏の世界

という感じにしようと思ってます。大学編と裏の世界は所謂長編構成にするつもりです。今のところダークネス編はさっさと終わらせ方針で。

裏の世界終了後のことは何も考えていないので、そこで連載終了か、何かアイデアが浮かべば続けるか、もしくは何か新しく書き始めるかのいずれかですね。

いずれにせよ何かしら創作活動をしていないと趣味が遊戯王以外に夜ご飯だけになってしまっているので、何らかの創作活動的な何かは続けるつもりです。それが小説(?)を書くのか、動画でも作り続けるのかはわかりませんがね…。

何が言いたいかというと、わたしは趣味が少ないと鬱で死ぬ人というただです。…どうでもいいですね。

それではまた次回！

See you again .

## 第17話 闇の使徒襲来（前書き）

久々の更新。

アニメと違って主人公のテーマあるじゃないですか。ソラの場合イメージは十六夜バトルですwアルフォスはアポリアの合体かZ・ONEのバトルのどっちかな…。

最近の出来事

台風でオレの精神力がガリガリ削られたぜ…！肉体的にも大雨の中をチャリで走ったんで疲れました。



## 第17話 闇の使徒襲来

### デュエルアカデミア

あれから1か月。十代が帰還し、レッド寮には十代1人が残っている状況。レッド寮の制服は、学園内で十代を含め2人程度しか見ることができなくなっていた。

アルフォスとソラはここ最近、十代同様異世界から帰還した者達の目に触れていない。万丈目達は十代を今は放っておきつつ、アルフォスとソラが姿を見せないことを不思議に思っていた。食堂などでは、時々ソラのみ姿を確認する事はできるがアルフォスははいない。卒業間近ということもあり、進路に悩む生徒もいれば、そんなことは気にせずにあと少しの学園生活を満喫する者もいる。あるいは、また4年間このデュエルアカデミアに残ることを決定しているのか、何も悩みがない生徒さえいる。

いずれの生徒たちも、入学してきた当時とは顔つきが違う。よりピリピリとした厳しい雰囲気や纏う生徒もいれば、陽気になった生徒もいる。当然、最初と比べて性格が暗くなったりした者もいる。

「異世界から帰ってきた十代が姿を見せないのはともかく、ついこの前まで姿を見せていたアルフォスが姿を見せなくなったのは疑問だ。」

アルフォスからは関わろうとしなかったが、学園最強の実力を誇るアルフォスの事は、同じく学園でトップの方にいる万丈目や明日香などの生徒には否が応でも探される。ソラにも事情を聞こうとした事があったが、ソラはアルフォスの事を話そうとしなかった。アル

フォスは学園トップクラスの实力を持つ生徒からは倒すべき最後の相手とされているようだ。

「今日はソラの姿も見えてないザウルス。」

今日はソラも姿を見せていない。

### 森の中

「ほう、ついにオレの目の前にも姿を現したな。」

森の中にはアルフォスが1人で、全身が黒いスーツ、更にサンングラスをつけた男と対峙していた。辺りは闇の霧に包まれており、外部からこの2人を視認する事は不可能だろう。

ここにソラはいない。アルフォスがブルー寮に戻るようにはあらかじめ言っていた。

「しかしカードが集まって人型になるとは何とも気味の悪い。貴様は何者だ？名を名乗れ。」

まさかこいつが十代よりも先にオレのところに見れるとはな。まあ、ヤツにとって脅威の優先度が高い方から抹消しに来るのは分かりきっていた事だが…。

「わたしの名はトゥルーマン、ミスターTとでも呼んでもらおうか。では消えてもらっ前に君の名も教えてもらおう。」

「オレを消す？面白いことを言う。…オレの名はアルフォス。生憎

オレには時間がない。デュエルするなら早くしてもらおう。」

アルフォスはデュエルディスクを展開しない。ダメージを現実化するデュエルで叩き潰しにかかる。

「ディスクを使わないとは珍しい。」

「デュエル」

Alfos vs. Mr. T

「先攻はわたしが貰う。ドロー。わたしは『融合』を発動。手札の『メテオ・ドラゴン』と『沼地の魔神王』を融合し、現れる、『メテオ・ブラック・ドラゴン』！」

メテオ・ブラック・ドラゴン ATK3500

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

Mr. T

LP4000

Hand: 2

Field

メテオ・ブラック・ドラゴン ATK3500

魔法・罫

伏せ: 1

「オレのターン。」

パワー押しの単調なデッキか。この世界の住人ならこの世界の住人だけで肩をつけてもらいたいところだが、オレをも排除しにかかる

のであれば撃退しよう。

「オレはモンスターを1体伏せる。これでターンエンド。」

A l f o s

L P 4 0 0 0

H a n d : 5

F i e l d

伏せ：1

「わたしのターン。『メテオ・ブラック・ドラゴン』で伏せモンスターを攻撃。バーニング・ダーク・メテオ！」

「破壊されたのはエマーズブレイド。コイツが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、デッキからレベル4以下の『X・セイバー』1体を特殊召喚する事ができる。来い、『X・セイバーダークソウル』。」

「

X X - セイバーダークソウル DEF 1 0 0

「：カードを1枚伏せてターンエンド。」

M r . T

L P 4 0 0 0

H a n d : 2

F i e l d

メテオ・ブラック・ドラゴン ATK 3 5 0 0

魔法・罫

伏せ：2

「オレのターン。」

ヤツは前のターンモンスターを召喚しなかった。手札にモンスターが無かったのか或いは…。まあいい。

「『大嵐』！フィールドの魔法・罠カードを全て破壊する！」

「何!?!」

こんなヤツに時間をかけていられない。ソラに闇が襲い掛かれれば、戦闘能力が全くないソラでは太刀打ちできん。天神皇を使用しようとも、相手は闇の力を操る者。現実のダメージを受けたことが無いソラでは…。  
とにかく、早くブルー寮に戻らなければ。

『やっぱりヒロインに戦闘能力があったら面白みがないよな。』

「（今はそんなことを言っている場合じゃねえ!）『XX-セイバーフラムナイト』召喚！ダークソウルにフラムナイトをチューニング！シンク口召喚『氷結界の龍ブリューナク』!！」

「噂のシンク口召喚か。だが攻撃力は2300、『メテオ・ブラック・ドラゴン』には遥かに届かない。」

「ほざけ！ブリューナクの効果発動、手札から『XX-セイバーレイズグラ』を捨て、『メテオ・ブラック・ドラゴン』を手札…つまりエクストラデッキに戻す！ダイヤモンドダスト・ランス！」

空气中に発生した氷の粒が集合し、巨大な槍になりメテオ・ブラック・ドラゴンを貫く。

「なんだと!？」

「ブリーユナクでダイレクトアタック。」

「くっ…」

Mr・T LP4000 1700

流石に闇そのものなだけあるな。現実化したモンスターの一撃をものともせずには受けるとは…。だが暗黒神に比べたら…こんなヤツは温い。

「カードを2枚伏せターンエンド。このエンドフェイズ、墓地へ送られたダークソウルの効果によって、デッキから『XX・セイバーフォルトロール』を手札に加える。」

Alfos

LP4000

Hand: 3

Field

氷結界の龍ブリーユナク ATK2300

魔法・罫

伏せ: 2

「わたしのターン。魔法カード『ドラゴンズ・ミラー龍の鏡』!墓地から『沼地の魔神王』『メテオ・ドラゴン』を除外し、『メテオ・ブラック・ドラゴン』を再び融合召喚!」

「これ以上オレの目の前に居座るんじゃねエ!トラップ発動『強制

脱出装置』！『メテオ・ブラック・ドラゴン』をエクストラデッキに戻す！」

アルフォスはどれだけキレているかによって口調が変わる。この状態だとまだ第1段階と言ったところか。

「なっ!？」

「ハッ、所詮テメエの力なんぞその程度ってことだ。さっさとここを通してもらおう。」

「……ターンエンド。」

「オレのターン。ブリューナクでダイレクトアタック！フローズン・ランス！」

Mr・T LP1700 - 600

ミスターTがバラバラのカードになって消えた。

「また会おうアルフォス君。」

そして、辺りにミスターTの音が響く。

「二度と来るんじゃない。次は殺す。」

それに対し、アルフォスの低い声が響いた。心なしか、そのプレッシャーのあまり空気すら震えたような感じがする。

「ソラは無事だろうか？」

アルフォスはブルー寮に向かって走る。アルフォスの足の速さならばここから5分もかからない。

ブルー寮に着いたアルフォスは、すぐに自室の扉を開ける。

「ソラ、無事か!？」

部屋に入ってアルフォスが目撃したものは、ベッドの上で静かに本を読んでいるソラだった。アルフォスはソラの無事を確認して安堵する。

「あ、アルフォス。おかえり、大丈夫だよ。」

「…無事だったか。」

まだ闇は襲撃してきていない。

だがオレの一安心は、文字通り一安心だった。オレの部屋の空間が破られ、中からさっきの男…ミスターTが再び姿を現した。

「おや、また会ったねアルフォス君。」

「チツ…さっき忠告したばかりだというのに…殺すぞ?」

「フッフッフ、今回はその少女を葬りに来たのだが、どうやら君を倒さないと通してくれないらしいな?」

「…返答は1つ、死ね。」

アルフォスは若干キレ気味に構えた。キレたアルフォスをソラは見たことがあるので、口調の変化にこそ驚かない。



「…アルフォス、私にやらせて。」

それどころか、ソラは自分からミスターTと戦うことを選択した。

「ソラ!？」

「大丈夫。2回も守ってくれたお礼しなきゃ。」

「しかし…!!」

ソラは人差し指をアルフォスの口に当て、クスツと笑った。

「任せといて。アルフォス、自分じゃ気付いてないかもだけど多分疲れてるよ?なんだか『暫く戦わないで休みたい』って顔してる。」

アルフォスは黙った。確かに疲れを知らない器を持っていたとしても、少しくらいは戦闘を拒みなくなる時もある。今まさにアルフォスは、先程のデュエルや天神皇アレスとのデュエルでただでさえ下級神クラスまで弱体化した神力を使っただけで、回復には後2日を要するところ。カオスの力を使えば一瞬で回復できるが、カオスに気を遣ってアルフォスはそれをしていない。

「…相談は終わったかね?」

「もちろん。」

アルフォスの言った通り、私の体力じゃ闇のデュエルには耐えられないかもしれない。でも、それを理由にしてアルフォスばかり戦わせるなんて私にはできない。私が好きなアルフォスは、私が自

分で守らなきゃいけない。  
怖いけど…怖いけど…。

「アルフォス、手を出したら絶縁ね」

「な…」

絶縁って…。

「デュエル！」

S o r a v s . M r . T

「わたしのターン。わたしは永続魔法『未来融合・フューチャー・フュージョン』を発動。デッキから5体のドラゴン族モンスターを墓地へ送り、2ターン後のわたしのスタンバイフェイズ時に『F・G・D』を特殊召喚する。」

「『F・G・D』…。」

元々の攻撃力なら、神以外ではデュエルモンスターズ最高の5000のドラゴンだね。

「カードを2枚伏せ、エンドフェイズ時に通常召喚をしていないこのターン、墓地から『真紅眼の飛竜』を除外し、墓地の『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を特殊召喚。」

ミスターTのフィールドには、全身が銀色の輝きを放っているドラゴンが現れた。

M r . T

LP4000

Hand: 3

Field

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK2800

魔法・罫

未来融合・フューチャー・フュージョン

伏せ: 2

「私のターン、ドロ。」

うん……どうしよう……。

「とりあえず魔法カード『天空の鐘』！手札からチューナー以外の光属性モンスター『ティーターン・クロノス』を捨てて、デッキからカードを2枚ドロ。そして、『ティーターン・レアー』を召喚！」

ソラのフィールドに光の女神が現れた。

「レアーの効果！墓地から『ティーターン・クロノス』を除外して、『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』と『未来融合・フューチャー・フュージョン』をデッキに戻す！」

「なんだと！」

神々しい光の波動に耐えかねたレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンと未来融合・フューチャー・フュージョンが吹き飛び、ミスターTのデッキに戻った。

「レアーでダイレクトアタック！」

「罨カード『リビングデッドの呼び声』！墓地より『ダーク・ホル  
ス・ドラゴン』を特殊召喚。」

ダーク・ホルス・ドラゴン ATK3000

「っ！…攻撃力3000…。カードを2枚伏せてターンエンド。」

…拙いかも。

Sora

LP4000

Hand: 3

Field

ティーターン・レアー ATK1500

魔法・罨

伏せ: 2

「わたしのターン。『ヘル・ドラゴン』召喚！『ヘル・ドラゴン』  
で『ティーターン・レアー』を攻撃！」

「きゃああっ!?!」

Sora LP4000 3500

ソラがバランスを崩して倒れた。闇のデュエルをするにはあまりに  
も少ない体力、幼すぎるその身体による負担は大きい。

「『ダーク・ホルス・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

ダーク・ホルス・ドラゴンが黒い炎を吐く。ソラはとりあえず直撃だけは避けようと、何とか倒れた状況から炎をかわした。

Sora LP3500 500

(い、今は危なかった…。…多分、受けたら私の体力だと死んでたと思う。)

ソラは内心でかなり焦った。ダメージが現実化するデュエルでは、実際に燃えはしないが衝撃などは比較にならない。ソラの思った通り、今のは食らえば間違いなく死んでいた。

「(あー……心臓……もといコアに悪いな。)」

『全くだ。』

しかし手を出したら絶縁と言われている手前、オレには何もできん。

「ターンエンドだ。攻撃を行った『ヘル・ドラゴン』は破壊される。」

Mr.T

LP4000

Hand: 3

Field

ダーク・ホルス・ドラゴン ATK3000

魔法・罫

リビングデッドの呼び声

伏せ:1

「…ドロー！」

あ、足が震えてる…。あはは、ちょっと我慢しすぎたかな。でも何とかなりそう…かな。

「『極天将ディオメデス』を召喚！これでターンエンドかな。」

Sora

LP500

Hand: 3

Field

極天将ディオメデス DEF1000

魔法・畏

伏せ: 2

「わたしのターン。魔法オープン、『トレード・イン』。手札からレベル8の『タイラント・ドラゴン』を捨て、デッキからカードを2枚ドロウする。『アクセス・ドラゴニユート』を召喚し、ゲームから除外。現れる、『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』！」

「…！」

「『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果発動。1ターンに1度、手札か墓地からドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。現れる、『マテリアルドラゴン』！」

全身が黄色めの竜が現れた。

「まじすいー！」

マテリアルドラゴンには破壊効果を無効にする効果がある…。仮にソラの伏せカードが破壊するカードでなかったとしても、奴のフィールドには高攻撃力のドラゴンが3体：ソラが攻撃を防ぎきれぬ可能性は少ないぞ…！

「『マテリアルドラゴン』で『極天将ディオメデス』を攻撃！」

「と、畏発動、『神の加護』！『極天将』を対象にする攻撃を無効にして、デッキから『アローアダイ・エピアルテス』を特殊召喚！更にエピアルテスの効果で、デッキからオートスを手札に加える！」  
…心臓止まりそう。アルフォスが今まで命を賭けた戦いで余裕を見せてきたから大丈夫だと思ってた。…でも、本当の命を賭ける戦いで私にはあれだけの余裕は出せないみたい。きっとアルフォスは戦い慣れてるのかな。

「『ダーク・ホルス・ドラゴン』で『極天将ディオメデス』を攻撃！」

「…ディオメデスが破壊された時に効果発動！デッキから『天神』と名のつく畏を1枚手札に加える。私が加えるのは『天神の贄』！」

「『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』で『アローアダイ・エピアルテス』を攻撃！」

「くっ…。」

ソラのフィールドにモンスターがいなくなった。だが、辛うじてこのターンは凌げた…。後はさっきの天神の贄：アレの効果はオレも

知らない。アレの効果が役に立つことを信じるしかないな。

「ターンエンド。」

Mr.T

LP4000

Hand: 3

Field

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK2800

ダーク・ホルス・ドラゴン ATK3000

マテリアルドラゴン ATK2400

魔法・罫

リビングゲットの呼び声

伏せ: 1

「私のターン、ドロー!」

……………賭けよう。破壊されたら私の負け、破壊されなかったら私の勝ち。



「私は『アローアダイ・オートス』を守備表示で召喚！」

アローアダイ・オートス DEF0

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

Sora

LP500

Hand: 4

Field

アローアダイ・オートス DEF0

魔法・罫

伏せ: 2

「わたしのターン。そろそろ決着をつけさせてもらおう、ソラールヴォルグ。『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果発動！墓地から『ボマー・ドラゴン』を特殊召喚。バトル、『マテリアルドラゴン』で『アローアダイ・オートス』を攻撃！」

アローアダイ・オートスは無抵抗のまま破壊された。でも、きっとその時、私は『勝った』って顔をしていたと思う。

だって…

この伏せカードは破壊されなかったから。

「罨カード、オープン！『天神の贄』！自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、相手ターンでのみ発動可能！」

「アレはさっきソラが手札に加えていた…。」

一体どんな効果を備えているというのか…。

「自分の墓地からチューナーとチューナー以外のモンスター2体を、エンドフェイズまで特殊召喚！私は『アローアダイ・オートス』、『アローアダイ・エピアルテス』、『極天将ディオメデス』を特殊召喚！」

ソラのフィールドに、一気に3体のモンスターが展開された。そのレベル合計は10。

「（なあカオス。……『天神の贄』、強くないか？）」

『ああ、間違いなく強い。そしてソラの伏せカードはアレだろう。』

カードの効果からアルフォスとカオスは、ソラのもう1枚の伏せカードが何であるかを一瞬にして理解する。

「更にもう1枚、速攻魔法『天神生誕』！『天神皇』1体をシンクロ召喚できる！レベル3の『アローアダイ・エピアルテス』と『アローアダイ・オートス』にレベル4の『極天将ディオメデス』をチユーニング！」

ソラのフィールドから3つの輝きが遙か天空に昇る。部屋中にカオスの最上級結界を張り巡らせていなかったら、とつくにブルー寮は消し炭になっている頃だろう。

「遙か空の彼方に進む神の怒り、地上に舞い降り、その力を振るえ！」

天空が白く光る。ソラの口上に呼応しているかのように。

「シンクロ召喚！！！」

フィールドに激しい光が降り注いだ。

「光臨せよ、『天神皇アレス』！！！」

青銅の鎧を身に着け、巨大な槍を装備し、狂乱の笑みを浮かべた神が出現した。しかし以前ののように邪悪な気配は感じられなくなっており、逆に聖なる力が宿っている。

天神皇アレス ATK3500

「攻撃力3500だと！！！」

『一気に形勢逆転だな。』

「（ああ、ライフこそソラの方が圧倒的に負けているが、天神皇の召喚に成功した今、ソラの敗北率は0だ。」

アレスの効果は複数回攻撃と無条件のモンスター除去。更に墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時に復活し、その攻撃力と守備力を500ポイントアップする。…それに、奴の伏せカードが次元幽閉だったとしても、墓地にあるディオメデスの効果でフィールド上の幻神獣族モンスターは魔法・罠カードの効果では除外されなくなっている。

「だが、『ボマー・ドラゴン』で『天神皇アレス』を攻撃！このカードが攻撃する場合、互いのダメージは0になり、戦闘を行ったモンスターを破壊する！」

ボマー・ドラゴンがアレスを爆撃した。しかしアレスは、まったく動じず無傷。

「天神皇はモンスター効果を受けないよ。残念だったね。」

「…ターンエンド。」

Mr・T

LP4000

Hand: 4

Field

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK2800

ダーク・ホルス・ドラゴン ATK3000

マテリアルドラゴン ATK2400

魔法・罠

リビングゲデッドの呼び声

伏せ：1

「私のターン！『極天将カリスト』を特殊召喚。このモンスターは、私のフィールド上に幻神獣族モンスターがいる場合に特殊召喚できる！更に魔法カード『天の宿命』を発動。このカードは私のフィールドまたは墓地に幻神獣族モンスターか『極天将』の名を持つモンスターがいる時、デッキからカードを1枚選んでデッキトップに置くことができるカード。私が置くのは『復讐のオレステース』。」

「『天の宿命』も初めて見るカードだな。しかし『復讐のオレステース』をデッキトップに置いたということは……。」

『ふむ、手札には『嘆きのイピゲネイア』があるのだろうな。』

つまりこのターン、2体目の天神皇が姿を現すということになる。

「『嘆きのイピゲネイア』を召喚するよ。このモンスターの召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローして、それが『復讐のオレステース』だったら特殊召喚できる！ドローするカードは当然さっきデッキの一番上に置いた『復讐のオレステース』だから、イピゲネイアの効果で特殊召喚。」

「再び3体のモンスターを召喚したと!?」

「私、怒ると結構怖いんだよ?」

「(…………)」

……どこら辺が怖いのか2時間ほど問い詰めてもいいだろうか?誰

か教えてほしい。ソラが怒った時にどの辺が怖いのか。

「レベル2『復讐のオレステース』とレベル3『嘆きのイピゲネイア』にレベル5『極天将カリスト』をチューニング!!!」

再び3つの光が天に昇る。そして、天空で1つになった次の瞬間光は拡散した。

「大地を照らし出す光の月を司る女神、困惑する大地の嘆きを鎮め、豊穡を齎せ!」

一瞬だが、世界が光に包まれる。その後、ブルー寮から少し離れた所に天より1本の巨大な光の柱が現れた。

「シンクロ召喚!!!光臨せよ、『天神皇アルテミス』!!!」

光の柱が消え、そこには宝玉が埋め込まれた杖を持った、神々しい光を放つ女神が出現した。アレスの呪縛が解けたこともあってか、前回よりも神々しさを増している。

「アルテミスの効果。1ターンに1度、デッキからカードを1枚ドロウできる。」

ソラはデッキから引いたカードを見てから、少し残念そうな顔をして手札に加えた。どうやら、望んだカードを引けなかったらしい。

「アルテミスの第2の効果を発動。このターン『マテリアルドラゴン』の効果が無効にする!エフェクトブレイク!」

アルテミスの杖の先端から光の光線が放たれ、マテリアルドラゴン

に直撃、その能力を吸収した。

「そしてアレスの効果を発動。1ターンに1度、相手モンスター1体を破壊できる！私は『ダーク・ホルス・ドラゴン』を破壊！ブレイクスピア！」

アレスの放った大槍がダーク・ホルス・ドラゴンの頭を潰して破壊した。

「さあバトル。『天神皇アレス』で『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を攻撃。ウォーエンド・スピア！」

「畏発動、『攻撃の無力化』！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる。」

アレスの槍がバリアに弾かれてアレスの手に戻る。

「…じゃあ私は魔法カード『終焉の起源 - 天神の啓示 -』を発動。次の相手ターン、相手はバトルフェイズを行えない。カードを伏せてターンエンドかな。」

Sora

LP500

Hand: 1

Field

天神皇アレス ATK3500

天神皇アルテミス ATK3500

魔法・畏

伏せ: 1

「わたしのターン。わたしは『龍の鏡』を発動！墓地とフィールドの『ダーク・ホルス・ドラゴン』『タイラント・ドラゴン』『ヘル・ドラゴン』『ボマー・ドラゴン』『マテリアルドラゴン』を除外し、『F・G・D』を特殊召喚する！」

5つの属性に対応する5つの首を持つ巨大なドラゴンが召喚された。

F・G・D ATK5000

「更に手札を1枚墓地へ送り、『D・D・R』を発動。除外された『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を特殊召喚し、このカードを装備する。『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果により、わたしは手札から2体目の『マテリアルドラゴン』を特殊召喚する。カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

Mr.T

LP4000

Hand: 0

Field

F・G・D ATK5000

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン ATK2800

マテリアルドラゴン ATK2400

魔法・罫

D・D・R

伏せ: 1

「私のターン。…そろそろ終わりかな？罫発動、『終焉の起源 - 天の威光 - 』！自分フィールド上に幻神獣族モンスターが2体以上いる時に発動し、次の相手ターンのエンドフェイズ時、私のフィールド上に存在するすべての幻神獣族モンスターの攻撃力の合計分の



ダメージを与える！」

「…攻撃力の合計は7000、7000ポイントのダメージだと！？」

「アルテミスの効果で、デッキから1枚ドロ。更にこのターン、『マテリアルドラゴン』の効果が無効にするよ。そしてアレスの効果！『F・G・D』を破壊する。ブレイクスピア！」

5つ首の竜は、胸に刺さった槍の一突きによって地に沈む。

「余計な事をして負けたくないけど…。」

かといって、何もしないでターンエンドして、次の相手ターンに何かしてきて負けるのもダメ。ここは…ゼウスを召喚して、安心してターンエンドしよう。

「『極天将アマルティア』を召喚！このカードの召喚に成功した時、自分フィールド上の幻神獣族モンスターの数まで、デッキから『テイターン』と名のつくモンスターを特殊召喚できる！『テイターン・クロノス』、『ティーターン・レアー』を特殊召喚！レベル4のクロノスとレアーに、レベル2のアマルティアをチューニング！」

2体の天神皇よりも更に強力な光が天空に昇り、複雑な形の魔法陣を描き出した。

「遙か天空に生まれし最高神、光に救済を、闇に破滅を齎せ！」

魔法陣から無数の雷が辺りに降り注ぎ、天が雷の唸り声をあげた。

「シンクロ召喚！！光臨せよ、最高神！『天神皇帝ゼウス』！！」  
魔法陣から現れたのは、巨大な鎌を持つ神。その重圧が周りの大気をも震わせる。

天神皇帝ゼウス ATK4000

「畏カード発動、『和睦の使者』。このターンわたしのモンスターは戦闘では破壊されず、ダメージは0になる。」

ミスターTはミスターTで、次のターン天神皇が揃ったこの状況を何とかする自信があるようだ。表情からそれを読み取ることができ

る。もつとも、それはミスターTがゼウスの効果を知らないからだ。

「…ターンエンド。」

Sora

LP500

Hand: 2

Field

天神皇帝ゼウス ATK4000

天神皇アルテミス ATK3500

天神皇アレス ATK3500

「わたしのターン。…ふむ、確かに君の力はわたしの予想以上だ。だがこれで終わりにしよう、魔法カード『ブラック・ホール』！フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「（やはり予想通りか。）」

しかし手札が0でよくあのカードを…いや、破壊系のカードを引けると確信していたな。

『そのようだな。』

天神皇帝ゼウスがフィールドにいる時、フィールドの表側表示の幻神獣族モンスターは魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。この効果を知らないからあんな余裕の顔ができてたのか。

「ゼウスの効果。幻神獣族モンスターは魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。」

ブラック・ホールはあの人のモンスターだけを飲み込んで消えた。あゝ…召喚しておいてよかった。

「バカな！？自滅だと！！」

「もう何もないよね。エンドフェイズ時、『終焉の起源 - 天神の威光 -』の効果発動！11000ポイントのダメージを与える！」

天空より雷が降り注ぎ、ミスターTに直撃した。

「ぐあああああつー！！」

Mr・T LP4000 - 7000

「（ほう…奴も神の怒りは苦痛に感じるか。）」

『ブリューナクの攻撃を受けてびくともしなかった奴が叫び声をあげるということは相当なものだろうな。』

奴はまた先程と同じようにバラバラのカードになってどこかに消えて行った。あれでいつ襲撃してくるかわからないから面倒だ。おそらく、今頃は十代のところだろうが…。

「あ、アレ？」

ソラが途端に崩れ落ちて座り込んだ。

「あ、アハハハハ…腰が抜けちゃったみたい。…やっぱり死ぬのは怖いかな？」

いつも通りの声調子ではあるが、ソラの死に対する恐怖の感情はアルフォスにはつきりと伝わってきた。

「…死が怖いなら、オレの後ろにいればいい。」

アルフォスがソラを両脇から抱えて、ベッドに座らせた。

「…うん。」

「無理も無茶もするなよ？しばらく休んでいる。」

「わかった。」

アルフォスはブルー寮を出て、デュエルアカデミア校舎のドーム状の屋根の上に跳躍して上った。すでに日は暮れようとしている。

「1人の時はここが落ち着く。……カオスがいたか。」

「もつとも、実際我らは一心同体のようなもの。お前が消えれば我も消える。逆もまた然り」

「だからお前のビー玉はわざわざオリハルコンにしただろう。ガラス玉が割れて死ぬとか嫌だからな。」

オレの器はオレ1人の魂しか入っていない。スレイが究極神と魂を共有していたが、そのリンクも切れて、それのおかげで本来の究極神の力が解放された。

「……オレ達も永いこと生きてきた。なあカオス、お前は今まで生きてきて、何か光り輝く『モノ』を得ることはできたか？」

「…突然どうした？」

「人間は大体この年頃でそれを見つけていなければ憂鬱になると聞いている。自分が自分であることの証明と言えればいいのか。」

17、18年をただ茫然と生きてきた数多くの人間の青少年達は自分を見失い、闇に墮ちる。その闇こそ、その他のどんな闇よりも深く哀しいモノであることをオレは暗黒神の闇を知ること知った。そして、皆が皆それを見つけられるほど人間は個体差が無いもので

はない。だからそれを見つけた時の人間の顔は、その生涯の中でも最も明るくなる。それが他人からバカにされるような小さなものでも

『……………』

「オレは人間達よりも遙かに永く生きてきたが、未だにそんなものは見つけられていない。……………だがな。」

『？』

「ソラがいれば見つけられる気がする。先程のソラを見て分かった。オレ達のように人間より上位の存在ですら、人間を下に見るほど偉大じゃない。」

『人間と言うものが引き起こす奇跡は儂い。だがその儂さの中には神々をも圧倒する強い意志が込められている。……………今まで神々の掟に反して人間と共に生きた神々は、反逆者として殺されただろう。』

「……………」

『しかしその神々は決して後悔してはいなかった。』

「……………そうか、そういうことか。」

それもすべて、己が信じた道を突き進んだ結果。それを後悔するしないは、己で決めるしかない。ようやくオレにも理解できた。たとえ光り輝くモノなど無くとも、信じた道を歩めばそれが光り輝くモノなのか。

「……………ソラ、カオス。……………礼を言わせてもらおうぞ。」

迷いが吹っ切れた。ソラをこのまま危険な道に連れて行ってもいいのか。そんなこと、オレはとっくに決めていたはずなんだがな。

「…最後の最後まで、オレの当てのない旅の道連れになってくれるか？」

『…気まぐれ。』

「フフツ、やはりその答えか。……………そろそろ戻るか。」

『ああ、そうだな。怖い目に遭って一人で居るから、ソラはもしかしたら泣いているかもしれんぞ？』

「……………マジか。」

その後、カオスの言った通りに一人で泣いていたソラが抱き着いてきて、アルフォスが戸惑ったのは当事者しか知らない。いつものアルフォスならやめるところだが、泣いているソラを引きはがすことはしなかったらしい。

次回へ続く。

## 第17話 闇の使徒襲来（後書き）

次回「雷神の魂」

アルフォス「この次回タイトル……まさか」

カオス「そのまさかだな。」

ソラ「今日の最強カードはコレ」

『終焉の起源 - 天神の威光 -』  
通常罫

フィールド上に幻神獣族モンスターが表側表示で2体以上存在している場合に発動する事ができる。このカードの発動と効果は無効化されない。次の相手ターンのエンドフェイズ終了時に、フィールド上に表側表示で存在する幻神獣族モンスターの攻撃力の合計分のダメージを相手ライフに与える。

ソラ「私の場合は最低でも7000ダメージは堅いかな。」

アルフォス「驚異的なフィニッシュカードだ。天神皇ならばエンドフェイズに蘇生するため、効果の適用タイミングも相性がいいな。」

カオス「今回のソラが使った新カードもなかなかの効果だな。コンボ前提だが。」

アルフォス「そうそう、ダークネス編はさっさと飛ばして5話程度



で終わらずかもしれない。オリジナル編が書きたくてしょうがないんだと。」

ソラ「じゃあまたね。しーゆーあげいん」

## 第18話 雷神の魂（前書き）

久々に更新です。

寒くなってきましたね。作者は早速風邪をひきました。この時期は毎年風邪をひくのであまり苦ではありませんが。

最近の出来事

新しいデュエルトーミナルが稼働しましたね。ガト緊ノーマル再録

OTL

レイヴンノーマルは今まで手に入れられなかったものでうれしいですね。

あとはラヴァルの新しいサポートがぶっ壊れだったり、ラヴァルバ  
ル・チェインがほしかったり…。

## 第18話 雷神の魂

某国

「アルフォス、早く早く！」

「わかったから少し待ってくれ。オレは今少し探し物をしているところだ…。」

アルフォスとソラは4日前、ある国に主にアルフォスの探し物で訪れていた。この日は先日のミスターTとの対決から3日後。北の国ということもあって、かなり寒い。アルフォスも感覚が無いわけではないのでまあ寒く感じているわけだ。

アルフォスの探し物というのは、少し前にこの地域のあたりで大きなエネルギーの反応があり、その原因だった。そしてアルフォスとソラは今、ある山の標高4000m地点に来ていた。

「しかし寒いな…ソラ、寒くないか？」

ソラは人間だから必然的に夜は寝るが、山は雪山だから当然寝たら凍死する。…つまるところ、当然オレが湯たんぼみたいな役割になるわけだ。ちなみに今は昼で、現在登山中。…しかし、いくら凍死しないとはいえオレも寒い。服を着ているように見えていても人間でいえば全裸同然だ。

「大丈夫だよ。」

ソラはカオスが昔使用していた魔導服を着込んでおり、その外見こそ長袖のワンピースで山を登るにはあまりにも軽装に見える。しかしその実態は鎧よりも丈夫で、込められた魔力によって環境に完全適応が可能という優れたもの。この魔導服は形を自由自在に変えることができ、ソラはワンピースを選択した。

山を登り続けてもう4日が経つ。ソラの事も考慮に入れて休憩を取りつつ山を登っているが、未だに探し物は見つからない。

「アルフォス、ちょっと疲れた…。」

「1人で先に走って行くからだろう…迷子になったが最後、2度と帰れないからオレから離れるなよ。」

……………まったく。

「ほう、こんなところまで男女2人で旅か。それも軽装…貴様ら一体何者だ？」

「!？」

オレがソラと一休みしようと思った瞬間、目の前には…多分2mを超えている男が立っていた。そしてその男は、背丈よりも巨大な鉄槌を持っていた。…それも片手で軽々と。

男の姿は金髪で逆立った髪の毛、鋭い眼光を光らせる青い瞳。顔はかなり整った方だと思う。腕には…見たこともないような形のデュエルディスク。男の左側には男の物と思われるD・ホイールが停められている。

「……この山でD・ホイール…貴様も只者じゃないな。貴様、名は？」

「名を名乗る時はまず自分からというだろう？」

「……アルフォス。こいつはソラだ。」

男の鋭い眼光には敵意こそ込められていないが、今すぐにアルフォスとの戦闘を望む意志が込められていた。ソラはプレッシャーにやられたのかアルフォスの後ろに隠れて裾を掴む。

「ふふ……よく聞いてくれた。我が名はトール。」

『トールだと!?!』

「（カオス、知っているのか?）」

『知っているも何も、転生する前は最高神だったヤツだ。お前と常に行動を共にしていた神々の1人だぞ。容姿こそ変わっているが、その手に持っている鉄槌は間違いなく雷神トールの物だ。』

「（で、見た限りバトルマニア…っと。（まあいい、で、そのトールがこんなところで何をしている。オレ達は探し物をしに来ただけだ。」

「…我は武者修行だ。」

「……。」

「……は？武者修行…。見た目バトルマニアかと思ったら本当にバトルマニアか…。」

「ここで会ったのも何かの縁。我とデュエルしろ。」

トールはより一層鋭い目つきでアルフォスを睨んだ。獲物は絶対に逃がさない、そういう眼だ。…それにしても何かの縁…か。因縁とでも言っておくかな。

「……構わないが、オレはオレの前に立ちふさがる連中以外で弱いヤツと戦う気はない。お前は強者か？」

ここまで来てデュエルした相手が弱かったです。じゃ話にならない。

「ハッハッハッハッハッ！我が強者かだと？我が名をその魂に刻み付けてやろう。」

雷神の魂がデュエルディスクを起動した。オレも久しぶりに全力が

出せそうだな。

「オレをがっかりさせるなよ？」

「デュエル！」

Alfos vs. Thor

「オレの先攻。」

さて…雷神とやらの力を拝見しようか。

「オレは『機皇兵ワイゼル・アイン』召喚。更に魔法カード『機皇召集』を発動する。このカードは自分フィールド上に機皇モンスターがいる時、デッキより新たな機皇モンスターを特殊召喚する。出でよ、『機皇神マシニクル？』！」

機皇神マシニクル？ ATK4000

「いきなり攻撃力4000…だがその程度か。つまらんな。」

「ほう？随分と言ってくれるな。カードを2枚伏せ、ターンエンド。」

Alfos

LP4000

Hand: 2

Field

機皇神マシニクル？ ATK4000

機皇兵ワイゼル・アイン ATK1800

魔法・罫

伏せ：2

「フハハハッ、私のターン！私は『星の使い』を攻撃表示で召喚！」

占い師のような恰好をした魔術師……。聞いたこともないカードだな。カオスの言っていた通りこのツールが本当に雷神の魂だというなら、転生時に存在しないはずのカードを持っているのは何ら不思議な事ではないな。

「『星の使い』効果発動。手札からモンスター1体を生け贄とし、このモンスターを除外する事で、生け贄としたモンスターと同じレベルのシンクロモンスター1体をエクストラデッキからシンクロ召喚扱いで特殊召喚する。」

『星の使い』

レベル1 光属性 天使族・効果 ATK100 DEF100

手札のモンスター1体を生け贄に捧げ、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外して発動する。生け贄に捧げたモンスターと同じレベルのシンクロモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する（この特殊召喚はシンクロ召喚として扱う）。この効果によって特殊召喚したモンスターは、このデュエル中攻撃力が500ポイントアップする。ゲームから除外されているこのカードと自分の墓地に存在するカードを全てデッキに戻す事で、ゲームから除外されている自分のシンクロモンスター1体を特殊召喚する。

「何!?!」



「我は手札より『トラゴエディア』を生け贄とし、『星の使い』を除外する。星界の扉が開く時、古の戦神がその魔槌を振り上げん。大地を揺るがし、轟く雷鳴と共に現れよ、シンクロ召喚！」

凄まじいエネルギーによって、山の一角が削れる。オレが感じたのは間違いない、このエネルギーだ。

「光臨せよ、『極神皇トール』！！！」

鉄槌を持つ雷神が出現した。姿こそ何度も見たことはあるが、これほどの力を持つ星界の三極神など…。

極神皇トール ATK3500

「『星の使い』の効果発動。この効果によってシンクロ召喚したモンスターはこのデュエル中、攻撃力を500ポイントアップする。」

極神皇トール ATK3500 4000

「攻撃力4000…マシニクルと並んだか。」

だが…。

「我が化身、『極神皇トール』の効果を起動。このターン相手モンスター1体の効果を無効にし、このカードの効果として使用できる。エフェクトアブソーバー！」

トールの人差し指から雷が放たれ、マシニクルの能力を奪い去る。それも極神皇の方ではなく、雷神トールの方だ。どうやら化身とい

うのは本当のようだな。

「更に魔法発動。『サンダーパイル』！ツールが存在する時、相手に3500ポイントのダメージを与える！」

雷神ツールが傍に立てかけてあつた巨大なハンマー…ミヨルニルを手にして、オレに襲い掛かってきた。

「我が鉄槌、受けきれぬものなら受けきってみろ！」

「チツ、デタラメなヤツめ！このオレを嘗めるなよ！！」

トールの鉄槌を素手で受け止める。大口を叩いていただけあり、かなり重い一撃だ。油断すれば一瞬で叩き潰される。人間の癖にこの力、信じられん。

「アルフォス！」

「…う…おおおおお…な、嘗めるなああああああああああああ  
ああッ！！」

Alfos LP4000 500

ミヨルニルを弾き返し、体勢を立て直す。ソラの目の前で死ねるわけもない。

「なんとというヤツだ…我がミヨルニルを素手で、それも片手で弾き返すとは…。」

モンスターを実体化させて戦うわけではないので、手札は浮かない。

そのため、カードを持っている方の手はミヨルニルを受け止めるのには使えなかった。

アルフォスは腕が麻痺しているのを無理やり動かし、デュエルを続行する。

「……トール、貴様今の一撃はオレだけでなくソラまで飲み込むところだったぞ……。ソラを巻き込んだらどうするつもりだ？」

「……………考えてなかった、スマン。…『極神皇トール』で『機皇神マシニクル？』を攻撃。サンダーパイル！」

「貴様：畏発動、カウンター畏『機皇支配』！このカードは『機皇神』と名のついたモンスターが存在する場合、相手の攻撃宣言時またはカードの効果の発動時に発動し、それを無効にする。その後、デッキから『機皇』とモンスター2体を特殊召喚する。来い、『機皇兵スキエル・アイン』『機皇兵グランエル・アイン』！」

チツ、こいつもバトルマニアというだけあってソラの事など考えていなかったか。かなり焦ったぞ……。ライフはもう800を切った。トールを破壊すればエンドフェイズ時に効果が発動、トールが復活し、オレに800のダメージが与えられオレの敗北。もちろんオレがそんなことで敗北するわけがない。

「永続畏発動、『無情の追撃』。互いに与えられる効果ダメージを倍にする。そしてスキエル・アインは1000以上の効果ダメージを無効にする事ができる。よって、トールを破壊する事によって発動する蘇生効果のバーンダメージは1600となり、スキエル・アインの効果によって無力化される。悪いがその程度のバーンダメージで死ぬわけにはいかないからな。」

本当なら機皇支配は魔法カードのサンダーパイルの時点で使用したかったが……機皇神マシニクルを失っては戦力が落ちる。

本来マシニクルは墓地に機皇帝のパールがあつてこそそのモンスター。それをいきなり呼び出したことで、その破壊耐性を活かすことができな。それだけじゃない。仮に破壊耐性があるうとも、極神皇トールはその耐性効果を奪い取る。相性は悪いな。

「フン、我は手札を全て伏せ、このターンを終えるところ。」

Thor

LP4000

Hand: 0

Field

極神皇トール ATK4000

魔法・罫

伏せ: 3

「オレのターン。」

伏せが3枚か。

「マシニクルの効果発動。手札の機皇帝のパーツを捨て、その効果を得る。オレは『スキエルA5』を捨て、ダイレクトアタックできる効果を得る。」

「永続罫『雷神の桎梏』。相手ターンに1度、相手フィールド上のモンスター1体を選択し、エンドフェイズ時までその効果を無効にする。我は『機皇神マシニクル?』の効果を無効にする!」

再び雷神トールが指先から雷を放ち、マシニクルを麻痺させた。

「おのれ…」

「更に速攻魔法を発動しよう。『神の収束』。自分フィールドの神を選択し、エクストラデッキから神属性のシンクロモンスターを墓地へ送る事で、このデュエル中選択した神は墓地へ送ったモンスター1の効果を得る。我はエクストラデッキから『極神聖帝オーディン』『極神皇ロキ』を墓地へ送り、2体の効果を得る。そしてこのターン、我が受けるダメージを0にする。」

「雷神とは名ばかりで、本当は全ての神々の力を吸収するというわけか。」

オーディンとロキの効果を得た。これで極神皇トールは魔法・罫の効果を受けず、更に攻撃時に魔法・罫の発動と効果を無効にして破壊、墓地から復活した時は罫回収と1枚ドロー、800ダメージ…。更にこのターンのダメージは0、厄介なことこの上ないな。

『我が暗黒神だった頃の雷神はこれほどの力を備えていなかった。どうやら転生したことで、元のスキルを引き継いだうえでのパワーアップを果たしたようだ。神力で言えばスレイだったころの汝と同じくらいだ。』

「（…これは本当に油断などしてられないな。）」

昔のオレという事は世界1つを滅ぼすなんて事は簡単にできる。…もつとも、それでオレに勝てるか？と聞いたら答えは当然Noで返すかな。

「だがオレのフィールドには3体以上の機皇モンスターがいる。よ

つて手札より、このカードを特殊召喚！」

アルフォスのフィールドには機械でできた異形の龍が出現した。機皇神龍アステリスク。機皇神の上位の存在を除けば、間違いなく機皇デッキの第2のエースモンスターだ。

「アステリスクの攻撃力はオレのフィールドの機械族モンスターの攻撃力の合計。更に、相手はアステリスク以外の機械族モンスターを攻撃対象にする事はできず、アステリスクが破壊される場合、他の機械族モンスター1体を墓地へ送る。」

機皇神龍アステリスク ATK0 8600

「攻撃力8600だと!？」

「魔法カード『機皇帝の賜与』を発動し、自分フィールド上に存在する機皇モンスターの数だけドロウする。よって、カードを5枚ドロウ!。カードを2枚伏せ、ターンエンド。」

Alfos

LP500

Hand: 3

Field

機皇神龍アステリスク ATK8600

機皇神マシニクル? ATK4000

機皇兵ワイゼル・アイン ATK1800

機皇兵スキエル・アイン ATK1200

機皇兵グランエル・アイン ATK1600

魔法・罫

無情の追撃

伏せ：2

「我がターン！我はトールの効果により、アステリスクの効果は無効にする！」

三度雷がアルフォスのフィールドに向かう。

「それは通さん。カウンター罠『機皇神の勅命』。このカードは機皇神がいる時にのみ発動でき、相手の発動した効果を無効にして破壊する。そして、デッキより機皇神を1体手札に加える。」

アルフォスのデュエルディスクにセットされているデッキからカードが1枚飛び出し、アルフォスがそれを掴む。そして、トールが放った雷がバリアによって跳ね返されて極神皇トールに直撃、爆発した。

『アルフォス、その機皇神は…。』

「（手加減などしていられん。）」

「フン、我が極神皇を破壊するとは流石だな。我はターンを終了し、『極神皇トール』の効果を発動！トールはエンドフェイズ時に蘇り、得ている効果によってデッキから1枚ドロウする。墓地から回収できる罠は無い。」

「そして本来オレに与えられる800ダメージだが、『無情の追撃』により倍の1600に増加、スキエル・アインの効果によって1000以上の効果ダメージを無効にする。」

Thor

LP4000

Hand: 2

Field

極神皇ツール ATK4000

魔法・罫

雷神の桎梏

伏せ: 1

「オレのターン。オレはマシニクルの効果を発動する。マシニクルは1ターンに1度、相手フィールドのシンクロモンスター1体を吸収できる。」

マシニクルの胸部から、光の縄が飛び出し、極神皇ツールを吸収しようとする。

「そうはいかな。『雷神の桎梏』の効果により、マシニクルの効果を無効にする！」

だが、雷神ツールが放った雷によってマシニクルが機能麻痺し、光の縄が粒子になって消えた。しかし、それでもなおアルフォスは笑う。自分の目論み通りに事が進んだからだ。

「雷神ツール。お前はこのターン、オレにひれ伏すことになる。」

「何?」

「このカードは、自分フィールド上に存在する『機皇神』と名のついたモンスター1体を生け贄に捧げた場合のみ手札から特殊召喚できる。思い知れ、人間の智を超えた無情のマシンの力を。『究極機皇神エクスイレイズ』！」



突如、周囲の大气が震え始めた。空間に罅が入り、強い光が溢れ出す。その光の中から、100mほどの巨大な人型の機械が出現した。背中からは4枚の機械の翼が装備され、左手にはレーザーでできている剣を持っている。頭部はマシンクルと殆ど変わらない。機体は黒を基調としており、恐るべき硬さを誇る。

「な…何だこれは？」

「人智を超えた感情を持たない異世界の産物だ。その攻撃力は…」

究極機皇神エクスイレイズ ATK4000

「4000…マシンクルと変わらないのか。」

「フツ、マシンクルと変わらない？それはどうかな。エクスイレイズの効果発動。1ターンに1度、自分フィールド上と墓地に存在するこのカード以外の機械族モンスターの攻撃力の合計分、このカードの攻撃力をアップする。」

究極機皇神エクスイレイズ ATK4000 20600

「攻撃力が20000を超えただと!？」

「それだけではない。」

機皇神龍アステリスク ATK25200

「そっか…。」

アステリスクは自身以外の機械族モンスターの攻撃力の合計がその攻撃力。だからエクスイレイズが上げればアステリスクのパワーアップにも繋がる。

「雷神トールの魂よ、お前のライフはここまでのようだな。エクスイレイズでトールを攻撃。イレイズジェノサイド！」

究極機皇神エクスイレイズは巨大な剣を光よりも速く振るう。その真空刃が極神皇トールを真つ二つに切り裂いた。

「畏発動、『神の遺産』！幻神獣族モンスターによる戦闘ダメージを0にし、デッキからカードを2枚ドロー！」

「アステリスクでダイレクトアタック！インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

「手札から『星の使徒』の効果を発動。このカードを除外し、相手から受けるダメージをこのターンのみ0にする！」

アステリスクの放った光線を障壁が防いだ。まさか手札からダメージを無効化するカードを持っていたとは…。オレは未だにトールのライフを削っていないのに対し、オレのライフはすでに500、それもたった1枚の魔法カードでここまで削られた。あの狡猾で常に一瞬の隙を突いて敵を葬るロキですらオレのライフを削るのには時間がかかるといふのに…。

「チツ、全くもって面倒だな。カードを3枚伏せ、ターンエンド。」

「このエンドフェイズ、『極神皇トール』は蘇り、『神の遺産』を墓地から手札に加え、デッキから1枚ドローする。」

A l f o s

L P 5 0 0

H a n d : 2

F i e l d

究極機皇神エクスイレイズ ATK20600

機皇神龍アステリスク ATK25200

機皇兵ワイゼル・アイン ATK1800

機皇兵スキエル・アイン ATK1200

機皇兵グランエル・アイン ATK1600

魔法・罫

無情の追撃

伏せ：3

「我のターン！」

これでトールの手札は5枚。しかし、トールの表情に余裕はない。たとえ機皇トールの効果でアステリスクの効果が無力化しようとも、その背後には攻撃力20600を誇る究極の機皇神。更に、アルフォスのフィールドには3枚の伏せカード。安易に攻め込めるわけがないのだ。

「我は『機皇トール』の効果を発動！アステリスクの効果は無効にする。エフェクトアブソーバー！」

機皇神龍アステリスク ATK25200 0

「そしてアステリスクを攻撃する。サンダーパイル！」

機皇トールが鉄槌でアステリスクを粉碎しにかかる。

「……ここまでのようだな。」

「フツハツハツハツ、我が力を思い知ったか！」

「お前のライフがな。『究極機皇神エクスイレイズ』の効果発動。デュエル中1度のみ自分フィールド上に存在するこのカード以外の機械族モンスター3体を除外し、エンドフェイズ時までエクスイレイズのは の攻撃力を得る。この効果を使用したターンのエンドフェイズ時、エクスイレイズを除外し、オレは4000ダメージを受ける。」

グランエル・アインとワイゼル・アイン、アステリスクがエクスイレイズに真つ二つに切られて、そのエナジーコアを吸収された。

究極機皇神エクスイレイズ ATK20600

「そして畏発動、『無情の境地』。このターン相手はエクスイレイズしか攻撃できず、バトルフェイズ中に魔法・罠・効果モンスターの効果を発動できない。また、攻撃可能なモンスターは攻撃しなければならぬ！」

「なんだと…!!」

「迎撃しろ、インフィニティーレイズ!!」

エクスイレイズが極神皇ツールを斬りつける。そして、斬られた箇所が大爆発を起こした。

「ぐおおおおおおおおおおおっ!!」

Thor LP4000 -

トールが片膝を地につけた。

「まさか、我が負けるとは…修行不足か。」

「修行不足かどうかは知らん。だが、これでオレの探し物は見つかった。帰るぞ、ソラ。」

「え？もう見つかったんだ。」

ソラがキョトンとした顔でアルフォスを見る。

「ああ。…雷神トールの魂。その名、オレの魂に刻み付けておいてやる。また近いうちに会おう、新たな脅威が出現した時にな。」

なるほど、世界にはまだこれほどの強者がいたのか。…どうやら、まだ戦いに飽きる必要はないようだ。

「…アルフォス、我を倒したその名、覚えておくぞ。」

アルフォスはソラを連れて、山のふもとまで下りた。

「お待ちしておりました、アルフォス様、ソラお嬢様。」

「ああ、ありがとうローヴァン。」

ふもとで待っていたのは、アルフォスが海馬と相談して雇った執事。ソラもアルフォスも屋敷に住むにあたり、やはりいろいろな情報を素早く伝達したり、屋敷や意外とお転婆なソラ（なお、精神年齢は高校1年生程度）の面倒を見るという意味ではいた方がよい。

アルフォスは普段は大学に通わず、新たな脅威に対応するために自宅にすることが多くなるために、ソラを学校まで送り迎えするために雇ったという面もある。

ちなみに、海馬と相談した理由はより信用できる執事を雇いたかったからだ。どこかのD・ホイールと合体するような執事には任せられなかったらしい。

「ソラ様、言われていた物です。」

車を運転中のローヴァンがソラに箱を渡した。この某国までの足を用意したのもローヴァンだし、特注ドレスを2人が山を登っている間に町で受け取ったのもこのローヴァンだ。

「えへへ、ありがとう」

そう言い、車の中でソラが執事のローヴァンから受け取ったのは、まさにお嬢様が着るようなドレス。発注したのはアルフォスだ。

「微妙に歩くの大変だし、これ着たら走れないよ？」

「構わない。一応家が屋敷だし、ドレスくらいは必要だろ？それに、

「お前が命を賭して戦う必要はない。」

真紅のドレス。デザインなどは全てカオスが担当した。アルフォスは最初、カオスがデザインするということに猛反対していたが、カオスがどうしてもというので、ふざけたデザインにしたら水晶を叩き割るという条件で折れた。

「それにしても意外といいデザインだな。」

実際に見れば、意外とどころかとんでもなくいいデザインだ。とても暗黒の世界に囚われていた神がデザインしたとは思えない。

「お嬢様に大変似合っているかと。」

「アハハ。敬語苦手なんだから、そんな風に無理して敬語使わなくてもいいのに。」

ローヴァンは執事の仕事よりもボディガードの経験の方が濃い。だから、敬語や目上の人物に対する会話はかなり苦手だ。

「そうはいきません。わたしも給料を頂いている身なので。」

いくら言葉遣いが正しくなくても、最低限の礼儀は教え込まれているようだ。

## 空港

空港にはアルフォスの所持している飛行機が停めてあった。流石に

グランドフォースの飛行モードでここまで来る気にはならなくて、一晩で完成させた。運転席にはすでに発進の準備を終えている執事が2人。アルフォスが雇った執事は料理人を含め合計で10人、それぞれが様々な特技を持っていたりする。

「行き先はいかがなされますか？アルフォス様。」

「どうしたものかな……。とりあえず、アカデミアに飛ばしてくれ。そろそろ、闇が動き出したところだ。」

「承りました。」

まずはダークネスを倒す。でないと、その後ろに身を潜めている、さらなる脅威を引きずり出せない。

飛行機が発進し、ソラは楽しそうに地上の様子を見ている。いつの間に着替えたのか、さっきの真紅のドレスを着ている。ワンピースよりもドレスの方が似合う。もっとも、最初見た時は思った以上に似合っていたから目のやり場に困ったが。髪型も普段は降ろしているが、今は大きなリボンでまとめてポニーテールにしている。それでも床につきそうなくらい長い。

「フライト所要時間は？」

「およそ11時間30分程度かと。」

「そうか。オレは少し寝る。」

「了解しました。」

「あ、私も行くー。一緒に寝よ？」



「仕方ないな…到着するまでだぞ？」

アカデミアに到着したら、多分すぐに闇の使徒が襲ってくる。それまでくらい、ソラと添い寝しても罰は当たらないだろう。

「あれ？ソラ、ひょっとして背が伸びたんじゃないか？」

「あー、さっき測ったら157cmだったよ」

「…伸びるの速いな。」

『おそらく、アレスの呪縛が解けて健康体になったことで、今まで伸びていたはずの身長分が、この数日で急激に伸びたのだろう。どっちにしろ小さいが。』

まあ、確かにオレから見ればソラの身長が7cm伸びたところで小さいことには変わりはない。

「（そうなのか。）」

『あと胸がAからBに』

「（水晶叩き壊すぞ。）」

こいつは一体どこを見ているんだ。まったくもって下らんとくろばかり見やがって。…いや、人によってはくだらなくないと抗議するか。とにかく、ソラのそんなところを見ても、どうにもなりはしないだろうに。

『…………』

アルフォスがベッドに入ると、ソラはその端の方に入って毛布をかける。アルフォスは壁に向かって寝転がり、ソラの方を見ようとしていない。

「ねえアルフォス、結局探し物ってなんだったの？」

「…………… ちよつと強大な力を求めてな。」

「…あんまり無茶はしないでね？」

「お前に言われたくない。」

ソラの手を握る。山から下りてもう結構時間が経つのに、ソラの手は氷のように冷たかった。まだ山の気温が残っているように。

「ア…アハハ、バレてたんだ。」

「当然だ。」

アルフォスは呆れたように、ため息交じりで言った。それと同時に、ソラの方を向いて頭を撫でる。ソラは若干恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「でもまあ、よくあの過酷な環境の中でオレについてきたものだ。驚いたぞ。」

「う、うん。」

ソラが恥ずかしそうに短く返事を返し、アルフォスはそれを聞くと、ソラの頭から手を放してまた壁の方を向いた。

「じゃあお休み、ソラ。」

アルフォスはデュエルアカデミアに到着するまで、深い眠りについた。

次回へ続く。

## 第18話 雷神の魂（後書き）

次回「アルフォスvsダークネス」

アルフォス「次回でダークネスと決着&卒業、次の話からはもうオリジナルをスタートするつもりでいる。」

ソラ「随分とハイペースだね。」

アルフォス「まあな。新学期から新しい章が始まるということ、間隔が短いキャラの設定も更新する。ソラに若干変化があったりするし、新しい登場人物の設定を載せたりするしな。」

ソラ「今回の最強カードはコレ」

『究極機皇神エクスイレイズ』  
レベル12 光属性 機械族・効果 ATK/4000 DEF/  
4000

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するレベル12の「機皇神」と名のついたモンスター1体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、このカード以外の自分フィールド上及び墓地に存在する機械族モンスターの攻撃力の合計分、このカードの攻撃力をアップする事ができる。デュエル中に1度、自分フィールド上に存在するこのカード以外の機械族モンスター3体をリリースする事で、このカードの攻撃力をにする。この効果を発動したターンのエンドフェイズ時、このカードをゲームから除外し、自分は4000ポイントダメージを受ける。このカ

ードが自分フィールド上を離れる場合、代わりに自分の墓地に存在する「機皇」と名のついたカードを2枚ゲームから除外し、このカードの攻撃力を2000ポイントダウンする。

ソラ「人智を超えた最強のキリングマシン……。デュエル中1度だけ、攻撃力を にできるよ。」

アルフォス「ただし、攻撃力 の時は2000ポイントダウンできないから、防御効果を適用できない点に注意だ。あと、今までの機皇モンスターと違い、シンクロモンスターに対するメタは持ち合わせていない。」

カオス「いよいよオリジナル編が近づいてきたな。ここからは原作が存在しないから、下手をすれば超展開の連続になる。先に謝っておく、ごめんなさい。」

アルフォス「まあできる限り気を付けるがな。」

カオス「ところで、アルフォスは彼女作らないのか？ 大学というところでは結構付き合いが多かったりするらしいぞ？」

アルフォス「ソラが怖いからやめておく。」

ソラ「酷！……まあ、あながち間違いじゃないかもだけど。………それじゃあまたね！」

第19話 アルフォスvs・ダークネス(前書き)

どうもです。

ダークネスはどう考えても短期決戦になりました。なんと3ターンで終了…しょうがない、大嵐で詰むんだもの(笑)

最近の出来事

ターミナルを回しました。…回さなきゃよかったですw  
ダイガスタエメラルほしいなあ…。

## 第19話 アルフォスvs・ダークネス

### 日本海上空

「もう間もなくで到着致します、アルフォス様。」

「…だつて。アルフォス、早く起きなよ。」

この飛行機は垂直離着陸が可能で、滑走路を必要としないために、到着すればすぐに降りることができる。下部に6つのブースターを装着する事で垂直離陸を行い、ジェットエンジンで推進する。だから滑走路から離陸するまでの時間が省かれ、島の上空にいたらもう到着と同じ。ソラはアルフォスを揺する。しかし反応はなく、アルフォスは未だに起きない。

「…。」

声をかけてもアルフォスからは返事が来ない。そこで、ソラは強硬手段に出ることにした。

「せーのっ！えいっ！」

「…ぐはっ!?!」

ソラは、アルフォスにボディプレスして、アルフォスを起こそうとしたのだ。いくら軽いとはいえ、思い切りダイヴされたら起きないはずがない。

「そ、ソラ？何やってるんだ…。」

「えへへっ、アルフォスにダイヴ」

「こんにやるー…ならお返しはこうだ。」

「あー！痛い、痛いよ！悪かったからごめん！」

アルフォスがソラの下敷きになっているので、アルフォスはソラの腰に手をまわしてそのまま抱きしめる……力を込めて。

「痛いよアルフォス…ひどい。」

結構本気で痛かったのか、ソラは涙目で腰に手を当てて擦る。

「まったく、ダイヴするにしても、ドレスでダイヴなんかするなよ」  
「？」

「はーい…。」

「そんなに沈まなくていいぞ。ほら。」

「へ？」

アルフォスはソラを両手で抱きかかえて、俗に言うお姫様抱っこをする。ソラがアルフォスの首に手をまわしているわけではないから、本当はそう言えないが。

「…思った通り、結構画になるかもな。ローヴァン、写真撮ってく



れ。」

アルフォスは部屋の前で待機しているはずのローヴァンに声をかける。もちろん、ローヴァンをはじめ執事が名を受けてその持ち場を離れることはほとんどなく、すぐにカメラを持って寝室に入ってきた。

「失礼致します。…あの、何をなされているんですか？」

「見ての通り、オレの姫を抱きかかえてみた。…写真撮ってくれ。」

「はあ…かしこまりました。」

パシャリとカメラのシャッター音が鳴り、写真を撮り終わる。

「ありがとう、ローヴァン。持ち場に戻ってくれ。（ああそうだが、カオス。）」

『なんだ？』

「（さっきまでソラと添い寝していてわかったんだが、多分こいつは今まで使ってきたどんな抱き枕よりも使い心地良いぞ。）」

温かいし柔らかいし多分最高だと思う。決してヤマシイ意味は何もない。単純にそう思ったただけだ。

『なんだと…。アルフォス、次の時は我と器の主導権を交代しろ！』

「はっ。」

「（やなこつた。）」

アルフォスは、ソラを下ろしてローヴァンからカメラを受け取ると、持ち場に戻るように指示した。到着までもう5分を切っている。すでに海馬とアルフォスの近くにいる人間、遊城十代以外の世界中の人間がダークネスの中に飲み込まれ、その姿を消している。

「アルフォス、私やつぱり怖い。」

「わかった。じゃあ、オレが守ってやるから絶対にオレの傍から離れるんじゃないぞ。」

ついに飛行機はアカデミアの火山のふもと辺りに着陸した。ソラはアルフォスの手をぎゅっと強く握る。若干の苦笑いを浮かべて、アルフォスは飛行機から降りた。

「なるほど、昼だというのに真つ暗だ。皆既日食は初めて見る。」

しかもこの皆既日食は、自然現象で見られる美しいモノなどではない。太陽の光を遮り、世界を今まさに闇に陥れんとする邪悪なる意思によって引き起こされたモノだ。天神皇という大きな力を持っていても、戦闘や恐怖に対する免疫の全くないソラは、ずっと黙ってアルフォスの手を握ったままだ。暫く歩き、デュエルアカデミア校舎に近づく。すると、アルフォスの目の前に巨大な闇が広がり、黒いローブを着て、全身が骨だけできている暗黒の化身が姿を現した。

「……ついに現れたな、ダークネス。十代の相手は良いのか？」

「その心配は無用。我は闇そのものの、故に複数の相手をする事など

容易。アルフォス「ルヴォルグ、ソラ」ルヴォルグ。汝ら、我が世界に相応しくない者。」

重く、暗い声が響く。そして、ダークネスから5枚の黒い翼が生えてきた。

「故に排除する、か。」

「その通り。この世界の起源、デュエルモンスターズによって我と決着をつけよ。」

「フン。」

面白くない。強敵のはずだが、これほど面白くない相手も初めてだ。やはりオレは、闇に対して友好的に接するのは無理なようだ。この邪念の塊を消し去り、ソラを守る。

「行くぞ、ダークネス。貴様如き、オレの力でねじ伏せてやる。」

「汝、我には及ばぬ。」

「デュエル！」

Alfos vs. Darknes

「オレの先攻。」

我には及ばぬ、か。絶対にならないな。どうやら、守りたいものがすぐ傍にいる時は、普通よりも本気になれるらしい。闇に飲み込まれ同化していた以前のオレにも貴様にも、永久に理解できないことだろうがな。

それに、うちのお姫様は生憎、貴様のようなヤツが大の苦手らしいのでな。こんなデュエルはさっさと決着をつけさせてもらうぞ。

『どつやらドレスを着たソラは汝の中ではくお姫様くで確定しているようだな。』

「（実際そう見えるだろ？）オレは『XX-セイバーダークソウル』を守備表示で召喚。カードを2枚伏せ、ターンエンド。」

A l f o s

L P 4 0 0 0

H a n d : 3

F i e l d

X X - セイバーダークソウル    D E F 1 0 0

魔法・罨

伏せ：2

「我がターン。我はフィールド魔法『ダークネス』を発動。発動時、魔法・罨ゾーンに5枚のカードをセットする。更に『ダークネス・アイ』を召喚。」

「ん？」

何だ、十代の時と同じ手か。これでは次のターン、何の苦勞もなくオレの勝利だな。

「ターンエンド。」

D a r k n e s s

L P 4 0 0 0

Hand : 4

Field

ダークネス・アイ ATK0

魔法・罾

ダークネス

伏せ : 5

「オレのターン。」

「トラップ発動！『虚無』<sup>ゼロ</sup>、『無限』<sup>インフィニティ</sup>！この2枚はこの2枚の間にあるカードを連動して発動させる。発動せよ、『ダークネス1』。」

アルフォスがカードをドロウした直後、ダークネスのフィールドの両端の2枚のカードが表向きになった。更にその間の3枚のカードが表向きになる。最初に発動したのはダークネス1…だが。

「チェーン4、『トラップ・スタン』。このターン、罾の効果は無効にする。」

しかしその3枚のカードは、トラップ・スタンの雷によってその効果を失った。

「なんだと！！」

「残念だったな。魔法発動、『大嵐』。効果は知っているだろう？フィールドの魔法・罾カードを全て破壊する。」

更にダークネスには不幸なことに、フィールドの魔法・罾カードが全て破壊されてしまった。ダークネス系の罾を連動して発動させることに意味のあるダークネスのデュエルは、サイコショックカーなど

はもちろん、トラップ・スタンやサイクロンでさえ致命傷になる。ちなみに、アルフォスは自らのカードを1枚破壊したが、それは聖なるバリア・ミラーフォース-だった。

「もう手はなさそうだな?」  
『XX-セイバーナイト』召喚。  
更に、『XX-セイバーフォルトロール』を特殊召喚する。」

XX-セイバーボガーナイト ATK1900  
XX-セイバーフォルトロール ATK2400

「まさか十代よりも大分遅くデュエルスタートしたのに、十代より早く決着がつくとも思わなかったな、ダークネス?」

「クツ…。」

「実際、十代にはそんな手が通用してもオレやソラには通用しない。数千年後に出直して来い。3体のモンスターとライフ半分を生け贄に、『究極神帝オベリスク』を特殊召喚!」

500mの巨神の出現。ダークネスのライフはモンスター2体の時点で尽きることが決定しているが、ここで手加減をするほどオレは甘くない。

「オベリスクよ、闇を永久に葬り去れ!バニング・クラッシャー!  
!」

オベリスクの巨大な拳が、ダークネス・アイ諸共ダークネスを叩き潰した。

「グオオオオオオオッ!!!」

ダークネスが消えた場所には…たった一枚の黒い羽根が落ちていた。まるで、不吉を知らせるように。

「…終わったか。」

思えばこの3年は、今までの中で最も長い3年だった。永い付き合いだった仲間たちを失い、暗黒神を倒し、墮天使を掃討し。…そして、今現在ソラに出会い、カオスという新たな仲間を迎えてオレはここにいる。オレの経験したあらゆる絶望は、ここで本当に消え新しい未来を手に入れられたのかもしれない。もう神の世界も天使の世界にも戻らない。全てを終わらせたら、オレはソラを連れて、どこかでひっそり暮らそう。以前、誰かと一緒にいた時にそれを望んだように。

「しかし、最後が1ショットキルとはあっさりしていたな。」

「でもアルフォス、私との約束、ちゃんと守ってくれたよ?」

「約束?」

「私を守ってくれてるって約束。」

「ああ、そういえば。」

あれがソラの中では約束だったのか。10分前の事なのに忘れていた。

そんなその場で、その上、口だけの約束を信じていたのか。まあ何はともあれ、ソラを失わなくてよかった。

人間でいえばもう成人近くになって、兄妹でこんな仲なのはおかしいのかもしれない。だが生憎、人間じゃないオレには関係ない。ずっと求めていた他者の温かさを…ソラを、決して失わないようにしよう。

「あ…太陽が戻ったよ、アルフォス。」

眩しい日の光が地球を照らす。太陽の光を遮っていた暗黒の世界は、今十代がダークネスを倒した事で、また闇の世界に逃げ帰って行ったのだろう。

「アルフォス、もう私達、この学園から卒業するんだね。」

「……………そうだな。寂しいか？」

「ううん。アルフォスがいるから、きっと寂しくなんてない。だってアルフォスの事、大好きだもん。」

アルフォスは、おそらく初めて優しい眼差しを見せただろう。儚くも確かな意志が込められたその瞳は、ソラを見つめている間、揺らぐ事は無かった。言ってしまうえば、既にアルフォスはソラに情が移



っていたのだ。それも、スクルドの時よりもはるかに深く。

彼女との出会いから別れまでの大多数が戦争や命を賭けた戦いの記憶しかない上に、スクルド自身、戦女神であったから、戦場に立つのは多かった。故に、より深く戦場に立てないソラに情が移るのは仕方のないことだし、ましてや今のアルフォスにはスクルドはもちろん、ゼウスやオーデインの記憶も残っていない。

アルフォスが守ろうとした神々は、悪く言えばなまじ戦闘力を持つあまり、それに溺れていた面もあった。だからアルフォスは、ソラにスレイの時の神々についての記憶がないながらも、無意識にその影を重ねて、絶対に失うことの無いようにとソラを守る決意をした。

「そうか。嬉しいことを言ってくれるな。」

アルフォスとソラは、暫くの間、2人ならんで日の光に当たっていた。

### 数日後

「これでよし」

今日はとうとう、このデュエルアカデミアを卒業する日。私の以前の記憶はなぜか思い出せないんだけど、アルフォスが一緒にいてくれるからどうでもいい。でも、私自身、ここまでアルフォスに依存しちゃうってことは、きっと今までの記憶に何か悲しいことがあったんだと思う。

そんなことを考えながら、私ソラは、着るのは今日が最後になるであろうデュエルアカデミアの制服を着て、部屋の前で待つてくれているローヴァンに、お屋敷に運び込む荷物を預けてデュエルアカデミアの校舎に向かう。途中でアルフォスに会えたら嬉しいな。

「来たな、ソラ。待つてたぞ。」

校門の前にはアルフォスが待つていた。実はアルフォス、今現在卒業式開始15分前でソラがここまで来たのに対し、2時間前からずっと校舎前の銅像に寄りかかってソラの事を待つていた。アルフォスはアルフォスで、ソラに会いたかったらしい。

「あ、アルフォス！」

ソラは走ってアルフォスにいつものように抱き着いた。もうアルフォスはソラを引き離すことをせずに、まんざらでもない表情をしていた。しかも、右手ではソラの頭を撫でていたりする。

「さてソラ、もうすぐで始まるし、そろそろ入るとしよう。」

流石に時間の事を考慮に入れてアルフォスはソラを軽く諭した。敵対する者には更に容赦のなくなったアルフォスだが、ソラには逆に段々甘くなっている。それは見る者すべてがもうどうにでもなれという表情になるレベルだ。甘くなった理由としては、人間達に感化されたというのが大きい。

「うん。行こ！」

「アルフォス＝ルヴォルグ君。」

「ああ。」

アルフォスは結局、最後の最後まで、教師に対して「はい」と答えたことは無かった。しかし、アルフォスはアルフォスなりにこのアカデミアの教師たちを信用していた。

卒業証書を受け取ると、名前の順で次はソラだ。アルフォスは、ソラが卒業証書を受け取るのを見て、少しだけ笑ったように見える。いつの間にか学園で行われていた武藤遊戯のデッキを賭けたデュエル大会だが、アルフォスはその最優秀生徒の中の1人として、そのデッキを受け取る権利があった。…が。

「オレは辞退させてもらう。オレには、あらゆる時代、あらゆる世界で共に戦ってきたデッキがあるからな。」

結果的に、アルフォスを含めて全員が辞退した。それは、それぞれが自分の持つデッキこそが最強だと信じていることのできているからだという。

そして、卒業生はそれぞれ、自らの決めた道へと進んでいく。アルフォスとソラのように、ドミノ町の大学へ行くことにした生徒もいれば、研究生としてこのアカデミアに残る者、より基本的な事を深く学ぶために、大学の4年課程はこのデュエルアカデミアに残る者など様々だ。

大学へ行くことを選択した生徒達は、この先に襲ってくる新たな脅威と戦うことになる。大学は、海馬やペガサスがそのために建設した学校でもあり、闇のデュエルに対抗できるだけの力を持つ人間を教育し、脅威の襲撃から自信を守る為の技術も教える場所だ。アル

フォスは海馬やペガサスと直接繋がっており、基本的には自由行動だが、他の生徒よりも新たな脅威と戦う数は多くなるだろう。すでに、最初の2週間は大学に行かずに自宅で待機する事が決定している。

もちろん、大学へ入学する前に、事の詳細は全て生徒たちに通知されている。その上で、一般からも入学する人間が多い辺り、ここ最近の異変から自分の身を守りたいと言うものは多い。

「世界最強のデッキは、常に所有者の手にある。各々が信じた最強のデッキで自らの未来を切り開くのだ。」

アルフォスの遺した、在学生、卒業生一同に送った卒業生代表の1人としてのデュエルアカデミア最後の言葉だ。

「オレは、オレに挑戦してきたお前達の成長を楽しみにしている。お前達人間には無限の可能性が残されているからな。それを自分の信じた道に向かって使うがいい。」

言いたいことを全て言ったアルフォスは、自分の席に戻った。

「今夜が、君達がデュエルアカデミア高等部で過ごす最後の夜となるだろう。今夜で悔いが残らないように、宴を楽しんでいくといい。」

さつきも述べたとおり、大学の4年課程をこのデュエルアカデミアに残って学ぶ者達は、もう暫くこの寮に世話になる事だろう。しかし、高等部を卒業する事によって、何かが変わるのとは間違いない。

その夜、ブルー寮

「…オレの部屋もあらかた片付いたな。」

この3年間、アルフォスが世話になったブルー寮の部屋のアルフォスの私物は、もうアルフォスが魔改造を施したデュエルディスク以外は何も残っていない。この部屋に人が住んでいたという痕跡すら残らないように、完全に片づけられていた。それは、アルフォスが最初に入学してきた時と変わらなく見える。

「既にアルフォス様、ソラお嬢様のお荷物は屋敷の方に運んでおきました。」

「ああ、ローヴァン。お前も今日は休んでいいぞ。ご苦労だったな。」

「はっ。」

ローヴァンは一礼すると、部屋から出ていき、港に停めてあったアルフォスの船に乗って屋敷まで戻る。ちなみに、アルフォスはこの短期間で屋敷を改造している。外見が中世ヨーロッパで見られるような城で、内装も屋敷を通り越してどこかの王族の城のようだ。ただ、さすがにそこまでするために山を1つ買って、その敷地に建てる他なかったようだ。それでも大学までそう時間はかからない。ここまで改造した理由は、やはり気まぐれだった。気まぐれで山を1つ削って城を造る辺り、神だった頃の豪快な性格は残っている。

『…汝とソラが、ついに同じ屋根の下で過ごすようになるのか。』

「変な事をしたら許さんぞ？オレが寝る日は今まで通り限界まで神

力を使い果たした日と、ソラに頼まれた日だけだろうがな。」

『もう普通に一緒に寝るような兄妹に何もするつもりなどない。だが、我は今まで通り汝について行くだけだ。』

「フツ、サポートは頼むぞ?」

『もちろんだ。』

「アルフォスく、まだ?」

部屋の外からソラの声が聞こえてきた。いい加減待ちくたびれてしまったらしい。

「ああ、悪い悪い。今行く。」

アルフォスは魔改造した支給用デュエルディスクを持つと、扉を開けて部屋を出た。この支給ディスクも、魔改造した部分を分解して学園に返すようだ。すでにその部分は取り外してあるが。

「遅いよアルフォスく。」

年齢が同じだというのに、ここまで甘えてくる妹も珍しい。大っ嫌いとか言われるよりは絶対良いが。

「待ちきれなくなったのなら先に行けばいいだろう? オレは気にし

ないからな。」

長袖のブルーのドレスを着て、洒落たリボンで髪をツインテールにまとめたソラに言う。それに対し、アルフォスはいつも通りの姿。たまには変身魔法を使ってもいいと思うが、かなり面倒らしい。

「アルフォスと一緒に行くのに意味があるの。」

その言葉を聞き、ソラの後ろについていた、アルフォスが雇った執事の1人であるレーヴェンが苦笑いを浮かべた。

「そうなのか？まあいい、こうして話しているうちにも時間は一刻と過ぎていく。早く行こう。」

たった数分を取り戻すために時空跳躍するのもバカらしい。アルフォスはそう思いながら、ソラの手を握って会場に向かって歩き出した。レーヴェンはその2歩後ろをついて歩く。

「うん。」

会場では、もうパーティーの中盤になっていた。普段よりも可愛らしさを増したその姿に、あっけにとられる生徒は少なくなかった。叶わぬ恋だと知っておきながら告白し、無残に散って行く生徒も何人かいた。

「レーヴェンは何か食べないの？」

料理を少しずつ食べていたソラが、後ろにいるレーヴェンに尋ねた。

「わたしは先程頂きましたので大丈夫です。」

「嘘はダメだよ？」

ソラはレーヴェンの事を気遣って、しつこいだろうと思いつつも訊く。しかし、レーヴェンの返答は変わらない。実際のところ、レーヴェンは嘘をついておらず、アルフォスの船の中で食事をとっていた。

「うん、それならいいんだけど…あれ？アルフォスは？」

「アルフォス様ならあちらに。」

レーヴェンは階段の方を向く。ソラも同じ方向をつられて向き、階段の横にあるベンチに腰かけているアルフォスを見つけた。アルフォスの方向に向かっていくソラに、レーヴェンも黙ってついて行く。

「アルフォス、どうしたの？」

「ん？…ああ、ソラか。いや、なんだ…ちょっとデッキをな。」

そう言って、アルフォスはデッキをアーティスの指輪に格納した。

「もういいのか？」

「うん、私はもういいよ。」

ソラは十分パーティーを満喫したようで、アルフォスに笑顔を見せた。



「そうか。レーヴェン、準備はできているのか？」

「30分前に完了しております。」

「わかった。まあ、遊びに来ようと思えばいつでも来られるしな……。少々名残惜しいが、そろそろ出発しよう。」

アルフォス、ソラ、レーヴェンの3名は、パーティー会場のブルー寮を抜けて港の方に向かう。そこにはアルフォスの垂直離着陸ジェット機が停めてある。ちなみに、ジェット機はアカデミアのヘリポートに止められなかったので、海面スレスレでホバリング待機していた。

そして、今まさにジェット機に乗ろうとしたその時。

「ヒッヒャッヒャッヒャ。この僕にあいさつ無しでお別れとはね。」

アルフォスの後ろからロキが現れた。

「お前達だっつてどうせ大学行きだろう？ここであいさつする必要なんてないだろう。」

「まあ、そりゃそうだけどさ。でも、アルフォスにこいつを渡しておこうと思っつてね。」

ロキは40枚のカードの束…デッキをアルフォスに投げて渡した。バラバラにならないのはロキの神力だろう。

「デッキ？」

「そ。時械神デッキ。七聖龍がある僕には必要の無いものだし。」  
ロキが渡してきたのはとんでもないデッキだった。七聖龍のほかに、仲間達のデッキを回収していたと思うと、アルフォスはため息が出る。

「まあ、受け取っておく。じゃあな。」

「ヒャーハツハハハハハハ！まったね〜！」

ロキは相も変わらず特徴的な笑いを残すと、剣で空間を裂いて消えて行った。

「ソラ、行こうか。」

「うん。」

今度こそジェット機に乗り込み、アルフォスは屋敷に向かって飛んで行った。

新たな脅威の事を頭の片隅で考えながら。

アルフォスはどのような苦境が訪れようと、もう2度と大切な者を失わないと誓って。

ソラはアルフォスについて行くと誓って。

## 第19話 アルフォスvs・ダークネス（後書き）

次回「新たなる日々」

アルフォス「これで1章、並びにGX原作はすべて終了だ。ここから先はオリジナル編になる。」

カオス「前作も含めれば長かったな。全部で196部だ。」

ソラ「長っ！？原作だって182話くらいで終わってたよ？」

カオス「寄り道ばかりしているからこうなる。」

アルフォス「そしてこれからも寄り道だらけになる。多分。」

ソラ「今日の最強カードはコレ！」

『究極神帝オベリスク』

レベル10 神属性 究極神帝族・神ノ効果 ATK4000 D

EF4000

???

ソラ「効果は秘密」

アルフォス「デメリットが増えただけだろう。」

ソラ「どっちかっていうと、メリットが増えたんじゃないかな？」

アルフォス「そうなのか。」

カオス「とりあえず、1章並びにGX原作終了…さあ、祝うか。」

アルフォス「祝うことなの？」

ソラ「多分。」

カオス「そうそう、この前も企画したばかりだが、記念にキャラ貸し出しやろうと思う。今回は…」

1、アルフォス

2、雷神の魂で登場した転生後のトール

3、天神皇の呪縛解放後の真紅の髪の毛のソラ、今回初登場したブルーの長袖ドレス&ツインテールVer.

4、番外編で主に案内役で狩りだされるロキ

カオス「この4人にするか。なんで毎回キャラ貸し出しかということ、それくらいしかやることがないからだ。リクエストがあれば番外編でもよいのだが…。」

アルフォス「1人2キャラまでで、1回きりで頼む。期限は…そうだな、今月中(2011年10月)にしよう。一度感想欄に借りると書き込んでおいてくれれば、使うのは今月中でなくてもいいぞ。もしくは世界観をぶつ壊さない程度の番外編であれば、1話限りやってもいいと思っている。2話以上リクエストがあった場合は、書きやすい方を優先させてもらう。これは作者に文才と根性がないか

ら仕方がない。」

ソラ「今回はキャラ設定で、多分明日中には投稿すると思うよ。」  
新しき日々』はその次ね。」

アルフォス「ではまた次回会おう。ちなみに番外編のリクエストがなければ普通に本編を進ませていく。あまりこういうことは言うべきではないが、アクセス数記念をしようにも投稿日時の間隔が離れすぎていてアクセス数は伸びていないからな、仕方ない。前作が放つておいたらいつの間にか50万を超えていたりはするが…。」

ソラ「な、何はともあれまた次回！じゃあね。」

## キャラ設定Ver.3(前書き)

キャラ設定です。オリジナル編から登場する2人の新キャラを追加しました。

## キャラ設定Ver.3

名前： アルフォス「ルヴォルグ Ulfocellvolg

年齢： 0歳。スレイの時もカウントすれば5兆歳。名義上は18歳

性別：

誕生日： 名義上2月9日

身長：190cm

体重： 70Kg

性格： 気楽

一人称： オレ オレは基本カタカナ表記

容姿： パラドックスの不思議な形をしたほうの眉毛を、普通のほうの形に直して、髪の毛、眉毛、目の色を黒にしている。顔はパラドックス。首から下は手以外肌の露出が無く、真っ黒の服と長ズボン、ロングコートに覆われている。服と器（身体）は直結しており、細部までアンドロイドに近い構造のため、服の着脱は不可（アポリアみたいな感じ）。

デュエルディスク： 無し。Z・ONEとダークネスを足した感じのデュエルスタイル。（ドローはカードが直接手に現れ、モンスター召喚などは空中にカードを置く。デッキや墓地など、手札以外のカードは盗まれないというメリットもあるのでアーティスに内蔵

させている。大学では海馬から直に作ってもらったオーダーメイドのディスクを使用している。

リアルファイト： 神力がスレイの時と比べて下級神クラスまで落ちており、強力だった殲滅魔法のほとんどが使用不可になった。そのため、神力は移動手段の補助や空中飛行など、攻撃以外の事に使用し、変幻自在な武器『アーティス』による接近戦、一撃必殺の狙撃を得意とする。また、器の素の力として異常な防御力・機動性・攻撃力を誇る。だが、神力が落ちた影響で『時空最強』を名乗るほどの力はなくなってしまった。得意技は『時空移動』『空間移動』。

備考： 人格、容姿共に男性の物。地上の生物・神・悪魔・精霊・天使のいずれの類でもなく、見た目こそ人間や神だが、中身は神力がなくとも生き続ける永久機関のようなシステムを搭載し、更に魔法によって器は汚れない。そのため、人間が日常で行うすべての行動・用品を必要としない。永久機関の働きで食したものを直接機動エネルギーに変換する。変身魔法で自らの身長を190cmまで下げているが、本来は2m5cm。ソラの成長に合わせて身長を変化させている。使用デッキは『X-セイバー』『機皇（アニメ版）』『Sin』『時械神』など非常に豊富。

備考2： 気分で山を1つ購入し、そこに屋敷を建て、海馬と相談して執事を15名前後雇った。所持している乗り物は垂直離着陸可能な特殊改造ジェット機が2機と、防弾のオリハルコン製の車が5台、そしてアルフォスのD・ホイール『グランドフォース』。右手の人差し指には、あらゆる武器に形を変え、さらにD・ホイールやデッキなど様々なものを格納できる超魔法金属の指輪『アーティス』を常時着けている。



好きなもの： ソラ、戦闘、普通の平和的日常など

嫌いなもの： 絶望、負の精神など

弱点： 水。飲料水は別だが、20秒以上浴びたりすると器が破損する。魔法によって風呂などに入らなくても済むようになってるのはこのためでもある。

CV： T F 6のアポリア。前回の表記ではイメージがわからなかったので思い切って変更。

名前： ソラ＝ルヴォルグ Sorai＝Lvorig

年齢： 17歳

性別： 女

誕生日： 9月10日

身長： 157cm

体重： 41Kg

性格： 明るい

一人称： 私

容姿： 真紅の、踝の辺りまで伸びている非常に長いふわりとした

髪が特徴。目の色は紫。稀にツインテールになることも。肌の色は不自然なほど白い。道を歩けば10人中8人の男が興味を示すだろう。ちなみにかなり可愛い。

服： デュエルアカデミア制服。休日の際は、長袖で比較的薄めの生地、赤か白のワンピース。アルフォスの屋敷に引っ越してから、毎日様々な長袖のドレスを着るようになった。

お気に入りにはアルフォスから直接貰った青いドレスと、オーダーメイドの真紅のドレス。青いドレスを着る時はツインテールにするようだ。真紅のドレスを着る時はポニーテールのように髪を1つにまとめる。休日はいつも青いドレスを着ている。D・ホイールに乗る時は普通の服を着る。

デュエルディスク： 大学ではアルフォスお手製のデュエルディスクを大切に使っている。

リアルファイト： そもそもしない。

備考： アルフォスが暗黒神と決着を終えて間もなく、この世界に神の手を借りずして転生した少女。戸籍について困っていたのをアルフォスに相談し、妹として入れてもらった。その後カオスの歴史改変によって本物の妹になった。いつも行動する時はアルフォスにくっ付いている。以前に比べて、人と接する事が多くなった。ただ人前でアルフォスに懐くのは辞めていない。

ちなみに、アルフォスの妹になるまでの名前はソラ・ラルニクス・レライア。尚、精神年齢は実年齢・3歳。転生前を含めて人の愛を知らなかったため、アルフォスに可愛がられるようになってから甘えん坊になってしまった。

不老不死の薬によって、年齢の成長は止まっている。カオスからは『ソラ』以外に『天神皇の巫女』と呼ばれている。本

人はカオスの言葉を聞けない普通の人間なのでこう呼ばれているとは知らない。使用デッキは『天神皇』。D・ホイールの名前は『フリリシタ・ストラダー』。

好きなもの： アルフォス、お菓子、高級食

嫌いなもの： 孤独

弱点： リアルファイトはしないし、彼女自身は至って普通の人間（ヘイムダルの薬によって不老不死になったこと以外は）なので、特筆すべき弱点は無し。なお、不老不死と言ってもやはり出血多量や心臓をやられてしまうと死んでしまう。完全な不老不死なんて存在しないという証明のようなものである。

CV： かなり静かで大人しい声。最近少し高くなったようだ。それでも怒鳴ってもかわいい程度にしか思われないうらう。

578

名前： カオス Chaos

年齢： 5兆歳

性別：

誕生日： 10月16日

身長： 1.5cm（ビー玉サイズの水晶）

体重： 60g

性格： 気楽

一人称： 我

容姿： 赤いオリハルコン製のビー玉。

服装： オリハルコン。

デュエルディスク： 無し。ビー玉の前に手札が浮かんでデュエルするという何ともシュールな光景が見られるだろう。

リアルファイト： オリハルコン製の体を生かして猛スピードで突撃。食らったら風穴があくだろう。

備考：原初神。もともと3体の究極神とほぼ同時期に生まれた聖なる神だったが、スレイ同様生命体の闇の心によって深く負の感情に沈み、暗黒神となった。今は暗黒神としての力は消え去り、アルフォスの良きアドバイザー&歴史改変の助手である。結構勝手に計画を企てては実行している節がある。たとえばソラをアルフォスの本当の妹にしたのもカオスの計画だ。だが、邪悪なことをしようとはしないので信頼できる。使用デッキは『暗黒神』。

好きなもの： 光の心を持つ人、素直な人など。

嫌いなもの： 闇、負の感情など。

弱点： ビー玉を叩き割られると死ぬ。でもオリハルコン製なので、通常的手段では割れない。ちなみに、マグマに落ちても大丈夫。

CV： ダークネスの声を少し高めにしたもの。

名前： ロキ L o k i

サブキャラクターに格下げ。それでも頻繁に登場するだろう。メイ  
ンキャラでは唯一、デツキに『カオスソルジャー - 開闢の使者 -  
』を入れてる。七聖龍を操る現段階ではカオスに次いで強大な力を  
持つ神。

CV： ルチアーノ

名前： 海馬瀬人 S e t o K a i b a

備考： 原作と違ってアルフォスによって齎された新たな青眼を使  
用する。

切り札は最近覚醒した『青眼の神龍』ブルーアイズ・デイヴァイン・ドラゴン。これからはメインキャラの  
1人として登場する予定。

『ブルーアイズ・デイヴァイン・ドラゴン  
青眼の神龍』

レベル12 神属性 幻神獣族・儀式/効果 ATK/5000

DEF/5000

「無限進化」により降臨。  
????

『無限進化』

儀式魔法

「青眼の神龍」の降臨に必要。自分フィールド上に存在する「青眼  
の天龍」を生贄に捧げなければならない。このカードの発動後3回

目の自分のスタンバイフェイズ時にこのカードを墓地へ送り、デッキ・手札・墓地から「青眼の神龍」1体を特殊召喚する。このカードの発動と効果は無効化されず、相手のカードの効果を受けない。また、1ターンに1度、自分が受ける戦闘ダメージを0にする事ができる。

名前： 天原 優里 Yuri Amahara

年齢： 18歳

性別： 女

誕生日： 3月19日

身長： 165cm

体重： ????

性格： 明るく積極的

一人称： 私

容姿： 黒目で青い髪。髪の毛はセミロング。体型は普通。

服装： 普段はラフな服装。

デュエルディスク： 大学で支給されるデュエルディスク。

リアルファイト： 初歩的な事ならできる。

備考： デュエルアカデミアアドミノ大学校に通う1年生。大学では新たな脅威と戦う場合、身を守る為に4人（男女2：2）で固まって行動するのが義務付けられており、ソラとアルフォス、雄平と一緒にチームを組むことになる。使用デッキは『除去ガジェット』。雄平とは幼馴染の関係。

好きなもの： 甘いもの、デュエル大会

嫌いなもの： 苦いもの、勝負の敗北、勉強

弱点： 虫。

CV： 龍可の声を結構高くした感じ。元気な声。

名前： 関野 雄平 Y u h e i S e k i n o

年齢： 19歳

性別： 男

誕生日： 6月2日

身長： 173cm

体重： 64Kg

性格： 静かな性格だが、仲間といえる時はよく話す。

一人称： オレ

容姿： 赤目で黒い髪。髪の毛は肩辺りまで伸びており、前髪は眉毛が隠れる程度まで。痩せているように見えて、意外と筋肉がある。ツリ目。

服装： 普段は白い服にネクタイ。コンタクトをつけている。休日などは普通にラフな服装。

デュエルディスク： 大学で支給されるデュエルディスク。

リアルファイト： 5人の大人を瞬く間に倒してしまう程度の実力は持つ。

備考： コンピューターの操作に長けている。デュエルアカデミアドミノ大学校に通う1年生。大学での取り決めによって、アルフォス、ソラ、優里の3名とチームを組むことになる。パワー押しの手つきよりも、頭脳戦のデッキを好んで使用する。使用デッキは『暗黒界』『エンジェル・パーミッション』。優里とは幼馴染。

好きなもの： ハンバーグ（学食でいつも食べている）、レアカード  
嫌いなもの： 熱い性格でしつこい人。

弱点： 恋の話

CV： プラシドの声を若干低く、クールにした感じ。





## キャラ設定Ver.3（後書き）

次回「新たなる日々」

アルフォス「こんな感じだな。オレの身体的特徴の説明は簡単にさせてもらった。」

カオス「海馬瀬人がメインキャラ頻度で登場することになるらしいので、若干詳しく説明してみた。」

ソラ「切り札の紹介だけね。」

アルフォス「新キャラ2人のデッキはまあシンクロを使わないデッキの中では強力な方だと思っぞ。」

ソラ「遅れたけど、今日の最強カードはコレ」

『ブラック・ホール』

通常魔法

フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する。

ソラ「効果は単純明快 説明する必要もないよね。」

アルフォス「サボリたかったただけだろ…まあいい。キャラ設定は今回間隔が短かったな。オレのイメージCVは前回『重大の声を低くした感じ』だったんだが、イメージがTF6のアポリアでど真ん中だったから変更させてもらった。」

カオス「新たな2人のキャラも活躍が楽しみだな。」

アルフォス「超展開の連続になるであろう2章だが、温かい目で作者のことを見守ってやってくれ。」

ソラ「じゃあまた、次回」

第20話 新たなる日々 ~Ghost of Chlonicle編~プロロー

どうもです。

思い出してみれば、今までの話は原作に沿った前座だったのかもしれませんが、2部は暗黒神を倒した直後から始まっていましたが、あの意味では2章やオリジナル編とともに、改めてここからスタートします。

宜しく願いします！

変更点について

デュエル中のアルフォスの名前の英語表記を変更しました。  
Alfos Ulfocceです。

アルフォスの屋敷

現在時刻は午前6時半。デュエルアカデミアを卒業したアルフォスは、ドミノ町に越してきて、春休みを過ごした。今日からはデュエルアカデミアドミノ大学に通うことになる。ただ、アルフォスは海馬瀬人とのちょっとした約束事で最初の1か月の間、大学を休むことになっている。だから今日から大学に行くのはソラだ。ちなみに、アルフォスはここ1か月全く寝ていなくて、ソラの不満を買っている。

大学は基本的に、デッキのテーマによって学部が分かれているが、全ての学部で共通しているのは『新たなる脅威と戦う』事。この新たな脅威については、詳しいことがわかっていない。しかし、生徒たちはすでにそれと戦うことをわかっていてこの学校に入学した。

「アルフォス様。」

朝のこの早い時間にコンコンと、アルフォスとソラの部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「ん？」

「ソラお嬢様を起こしに来たのですが…。」

「ああ、入っただいぞ。」

部屋に入ってきたのは2人の執事。1人はレーヴェン。基本はソラ

の面倒（大学の送り迎えや、朝の弱いソラを起こしに来ること）だ。もう1人はローヴァン。基本はアルフォスの手伝いなどを担当している。また、執事の中ではリーダー格で、海馬やペガサスからの言伝をアルフォスに伝える役目もある。レーヴェンはソラを起こしに来た。

「ローヴァン、どうした？」

「海馬様より言伝でございます。『入学式くらいは出席しろ』と…。」

簡単に言ってくれる。どうせ行かなければ行かなかったで暇だからいいがな。

「わかった、準備しよう。」

ソラが起きたのは30分後の7時。大学まではアルフォスのD・ホイル『グランドフォース』のハイパースローモードで15分、普通の車で40分ほど。よって、必然的にソラ達の方が早く出発する事になる。

「じゃあアルフォス、私は先に行くね？」

準備を終えたソラが、部屋を出るところでアルフォスに声をかけた。

「ああ。レーヴェン、頼むぞ。」

アルフォスは振り返って、ソラの頭に手を置き、険のない優しめの

声で言った。

「はい。」

ソラとレーヴェンは屋敷の正門を出て、車に乗って大学に向かった。

「ローヴァン、紅茶持ってきてくれ。」

最近、全く眠ることの無かった日の朝は必ず飲んでいいる。ただの気休めのようなものだ。もう3か月くらい飲み続けているが、結構飽きないな。種類にはこだわっていないから、いつもローヴァンに任せている。

「かしこまりました。大食堂へお越しく下さい。」

ローヴァンは頭を下げてから部屋を出て行った。アルフォスは大学に行く準備を終えると、大食堂へ行った。既に紅茶が用意されて、湯気が立っている。淹れてから時間は経っていないようだ。

「…あと10分したら出発しようか。」

携帯を見る。この携帯は、本来、今日大学で全員に配られるもので、闇のデュエリストなどと戦う時に、電話番号を登録してある人物全員に緊急事態としてコールが送られる仕組みになっている。アルフォスはソラに、この携帯の電話番号をすでに教えている。アルフォスがこの携帯を持っている理由は、やはり海馬から直接受け取ったからであった。アルフォスはソラに念話を普通に送れば済むし、ソラも天神皇の力を通じてアルフォスと念話ができる。だからアルフォスは、わざわざこれを使おうとはしていない。しかし、できる限り多くの生徒の電話番号を登録しておくようにと大学で注意を受け

るらしいので、一応持つておくに越したことは無い。

「甘いな。」

いつもより砂糖が多いか。…さて、そろそろ時間だ。

「ローヴァン、オレはそろそろ行く。」

「かしこまりました。お帰りは何時頃ですか？」

「わからんが、午後3時くらいに帰ってくると思う。そうだ、いつもの喫茶に寄るから予約しておいてくれ。」

「わかりました。」

アルフォスは正門前に、右手の人差し指につけている指輪、アーテイスの中に格納されている『グランドフォース』を召喚した。かのイリアステル滅四星のパラドックスが使用していたD・ホイールの白だった場所を黒に、黒だった場所を白に反転させたものだ。この時代でD・ホイールを使用するのはせいぜい時空間を移動する時か、未来と通じることのできる敵と戦うことくらいだが…。アルフォスは普通の移動手段としてこれを使っていた。

「んー……。」「

『どうしたアルフォス？』

アルフォスの声をかけたのは、いつもアルフォスの服の裾の辺りに浮いているビー玉サイズの水晶に宿った魂、原初神の力オスだ。



「いや、ソラと一緒に行けばよかったなど。デュエルするわけでもないのにグランドフォースを出した意味が分からない。」

『歴史改変するか?』

「しなくていい。どうせ入学式終了の後に昼を食べに行くって約束しているからな。」

喫茶店で昼というのも悪くはないだろう。アルフォスはそう思いながらも大学に向かって走る。アルフォスがソラと行こうとしている喫茶店は要予約の金持ちしか行かないような場所で、最近見つけたソラを連れて行くのは今日が初めてだ。

『ん?ソラには言っでなくないか?』

「レーヴェンに伝えてある。」

信号に何度か引っかかり、若干待たされるものの、アルフォスは特に気にした様子もなく大学に着いた。大学に着くと、グランドフォースをアーティスの中に格納し、校舎に向かった。後者の中に入り、指定の場所の行くと、既に殆どの生徒が登校してきていた。それもそのはず、アルフォスはゆっくり来たため、入学式開始5分前なのだ。

「...やはり暇だな。」

「遅いよ?お兄ちゃん」

「うおっ!?!?」

いきなり背中から抱き着かれた感じがしたので後ろを振り向くとそこにはソラがいた。そういえば、大学の時は『お兄ちゃん』って呼んでみるとかまるで意味のわからんことを言っていたな。

『可愛いな…どんなコーディネイトをしたのだ、汝は？』

「（やっぱりお前は死ぬべきだと思うぞ。いつオレの器の主導権を握ってソラに何をするかわかったものじゃない。）」

カオスにだけ聞こえるように、テレパシーでカオスの魂に語りかける。人前では必ずこの手段での会話をしている。ちなみに、大したコーディネイトなどしていない。ただオレの好みに合わせてソラに服を買ってやっただけで、服以外は全部ソラが自分で揃えたものだ。

『いや、何もしないぞ。苛めてみたくなったりはするがな。』

「（わかったわかった。）」

この会話、実は2秒もしないうちにやり取りされている。テレパシー同士のために、言葉をしゃべっているわけではないので、その意志疎通するのに時間はかからない。

「オレもソラと一緒に行けばよかったと思っただぞ…ここまで来るのにかなり暇で仕方がなかった…。」

道中話し相手はゼロ、しかも都会に出てくる7分30秒までは山の中。面白いわけがない。空間転移でもしてくるんだった。

「そんなに落ち込まなくても…。」

「いや、落ち込んだじゃない。それよりも…そろそろ時間だ。」

アルフォスとソラは、生徒がパーティー会場のステージの方に召集されたので向かう。海馬コーポレーションの考えることはよくわからなくて、入学式を大学内になぜかあるパーティー会場で行うことにしたという。これでは高等部の時と殆ど変りやしない。

ステージに学園長が立った。まだ若い、黒髪の男だ。新たなる脅威と戦う必要があるから、若くなければならぬというのはよくわかるが…。

「皆さん、ご入学おめでとうございます。私は校長の『アルベルク・リヴァイン』です。みなさんご存知の事とは思いますが、この学校では、最近世界に出現し始めた異変、及びその異変を起こしている集団を排除するという目的も兼ねています。」

校長の話が始まった。海馬は、オレとソラの詳細を学園に一切伝えておらず、今までの高等部での活動なども、高等部で普通に生活していただけで、後は全て無かったことにしている。外に情報が漏れるのを防ぐことで、オレとソラという、現時点ではこの世界最強の戦力を隠蔽するつもりだと言っていた。ちなみに、ロキは別に経歴を隠したりはしていない。ただ、シンクロ召喚については何をしたらかわからないが、完全に隠すことができているらしい。

「しかし、何をとってもまずは皆さんの命が第一。皆さんには、引き際と戦略、その他あらゆる応用を学んでほしいと思います。長い話は嫌われるので以上、後日詳しくお伝えします。では、パーティーを楽しんでいてください。」

それだけ言って、校長はさっさと壇上を下りて行った。若いだけあって、話も短い。それどころか、もうパーティーに加わっている。

ちなみに、入学式はもう終了らしい。しかし、殆どの生徒がパーティーに参加して帰るらしく、楽しそうに談笑している。

「お兄ちゃん…?」

「…なあ、その呼び方やめないか。やはり慣れん。」

「…やっぱり?むー…残念だなあ…。」

ソラが軽く残念そうに俯いた。

「そこのお2人は兄妹なのですか?」

アルフォスとソラは、同時に声がした方向を向いた。そこには、先程まで壇上にいた校長が微笑んでいた。アルフォスよりも身長は低い。今のアルフォスが190cmなのに対し、校長は178cm程だ。

「校長。…まあそんなところだ。」

「その言葉遣い…オーナーから直接聞かされましたが、あなたがアルフォス君で間違いないですね。」

「…。」

海馬め、一体何を校長に吹き込んだ?

「で、そちらは妹のソラさんですね…。オーナーから2人の事は聞かされていますよ。何でも、プロデュエリストを軽く倒すほどの実力を持っているとか…。」

校長は左手に持っていたワインを飲む。どうやら、酒が好きなようだ。しかも強い。

ソラは何も答えず、アルフォスの後ろにくっ付いてしまった。

「…すまない、意外と人見知りなもので。オレでよければ、話し相手になる。」

アルフォスがソラの頭を軽く撫でながら言った。くっ付いているソラにする、アルフォスの癖のようなものだ。

「…では少しだけ、お話に付き合ってください。…単刀直入に言います。『新たな脅威』をどう思っていますか？」

校長は先程の穏やかな表情から一変して、真剣な表情になった。

「生徒に聞くとは…。」

「あなたはオーナーに通じているばかりでなく、インダストリアルイリユージョン社にも通じている。それはおそらく、オーナーがあなた達2人の事を最強の戦力だと思っていらっしゃる。そんな生徒達から話を聞ければ、もしかしたら教育の参考になると思いましますね。」

この校長、やはりこの役職に就く辺り、ある程度だが海馬とは通じているか。まあ当然だな。オーナーの直接建設した教育機関のトップを、何も知らない人間が任されるわけがないか。いや、それどころかこの校長、おそらくある程度の重役だろうな。

「…信じられないかもしれないが、新たな脅威はこの世界のある

場所を拠点として、全ての世界の時空を超えて活動をしていると考えられる。」

「！！」

実は、アルフォスは既に、高等部卒業後の春休みに1度だけ新たな脅威の使者と戦っている。アルフォスはその事を校長に話した。その時はまだ忙しかった海馬には、まだ伝えていない。この事を知っているのは、インダストリアルイリ्यूジョン社会長のペガサス・J・クロフォードとソラ、ローヴァンだけだ。

10分後

「なるほど、そのような事を…。」

アルフォスは新たな脅威の組織名が『<sup>ゴースト</sup>G h o s t    <sup>オブ</sup>o f    <sup>ク</sup>c h r  
<sup>ロニクル</sup>o n i c l e』であること、その目的が強大なデュエリストの力を収集し、何か大きな事をこの世界に起こそうとしている事などを伝えた。

「その使者は未来から現れ、シンクロ召喚などを使用していた。そしてその時の狙いは、ソラが持つ『天神皇』だった。」

どうやら敵は間違っ、オレが天神皇の使い手だと思っていたようだ。結果的にソラに危険が及ばなくてよかった。しかし、ゴースト・オブ・クロニクルは間違いなく神のカードなどの『強大な力が宿っ

たカード』を集めている。現に、オレが戦った使者でさえ、シグナーのしもべであるはずの『スターダスト・ドラゴン』を使用してきた。つまり、敵は特殊なカードを手に入れるだけでなく、複製している。複製したカードに力は宿らないが、十分な戦力にはなるからな。

「シンクロ召喚…オーナーから一応は聞かされています。生徒達にも既に知らせてあります。しかし、聞いたところシンクロ召喚はあなた達も使用可能ですが、その理由を聞きたいですね。」

「ゴースト・オブ・クロニクルと同じだ。ソラは無理だが、オレは時空を超える力がある。だから海馬は、オレとソラを切り札として表の世界では普通の大学生として通している。」

「なるほど…。よくわかりました。」

「だが一つ、これだけは聞いてほしい。オレは確かに使者と戦ったが、ヤツから得られた情報はあまりにも少なすぎる。ただ組織名が判明したに過ぎないレベルだ。ゴースト・オブ・クロニクルは間違いない、歴史に存在したどのような脅威よりも、遥かに強大な集団だ。」

あの下っ端のような男でさえ、オレをライディング・デュエルでクラッシュに追い込んだ。その後は何とか立て直して、ギリギリまで追い詰めたところで、時空転移されて逃げられた。

「これ以上はソラが拗ねてしまうから、悪いがここで終わりにしてくれ。話したいことも全て話したつもりだ。これから、同志としてよろしく頼む。」

「…ええ、宜しく願います。」

校長は最後に、静かに笑ってその場を離れた。

「ソラ、行こう。」

先程までの真剣な声と違って、いつもの穏やかな声のアルフォスに戻った。屋敷では大体、こんな感じだ。普段、敵と戦う時に、容赦なく叩き潰し嘲笑う好戦的性格は、微塵にも見られない。それどころか、たった1人の妹を必ず守ってやると、2度と大切な存在を失わないと誓った、本当のアルフォスの姿があった。

校門に行くと、既にレーヴェンが出発の準備を済ませていた。運転席に座り、エンジンを起動して、シートベルトを締めている。アルフォスとソラは、共に後ろの席に座った。

「ここから、この時間帯の混み具合であれば約2時間になります。仮眠をとるには十分な時間ですよ、ソラお嬢様。」

「え？私、ちゃんと寝てるよ？」

「嘘はいけません。アルフォス様と一緒に寝てくれないからあまり眠れなかったと、毎朝言っておられます。」

「へ！？」

「そうなのか、ソラ？」

ソラは顔を真っ赤にして俯いた。そんな理由で寝不足だということを知ると、若干の罪悪感を覚える。



「じゃあ今だけ寝てやる。レーヴェン。着いたら起こしてくれ。」  
「かしこまりました。」

アルフォスがそのまま腕組みをして寝る。ソラは、暫く顔を赤くしていたが、とうとう眠気に勝てなくなったのか、腕組みをして眠っているアルフォスの肩に頭を預けて寝てしまった。レーヴェンはそれを確認して、少し微笑むと、車を走らせた。余談だが、喧嘩もしたことが無いこの仲の良すぎる兄妹の評判は、ドミノ町の主な高級店や商店街などに知れ渡っていたりする。似ていないし、背の高さが違いすぎるから、最初は皆が兄妹だとは思わずに、カップルか何かだと思っていたらしい。

## 2時間後

「アルフォス様、到着致しました。」

アルフォスはレーヴェンの言葉を聞き、すぐに起きる。自分自身で、しかも好きなタイミングで起きる事ができるから、起こす手間がかからない。…だが、ソラはというと…。

「ソラ？」

未だにアルフォスの肩に頭を預け、静かな寝息を立てて寝ている。

「…どうしたのか。」

せつかく気持ちよさそうに眠っているというのに、起こすのも可哀

想だ。いや、屋敷に戻ってからもう1度一緒に寝てやればいいか。

『どうせ、汝と一緒に寝たいだけなのだろう？』

「（それもないわけじゃないが…まあ変な言い訳はしないことにしよう。）ソラ、着いたぞ。」

「…あれ？アルフォス？……ここどこ？」

「何を寝ぼけている。オレが予約した昼食場所だ。」

アルフォスが先に車を降りて、ソラの手を握って車から降ろした。車はレーヴェンがデパートの駐車場に停めに行く。アルフォスとソラはデパートに入ると、迷わずにエレベーターに乗り、12階に向かった。

「…ここだな。」

店の前に着いたアルフォスは、レーヴェンを待つ。程なくして、レーヴェンがやってきた。

「すみません、遅くなりました。」

「いや、気にしていない。入るとしようか。」

喫茶店の受付で、予約の確認を取ると、窓際の席に向かった。アルフォスとソラが並んで座り、その向かい側にレーヴェンが座る。

「とりあえず、注文はコーヒー3つだ。」

「かしこまりました。その他のご注文がお決まりになりましたら、どうぞお呼びください。」

アルフォスは席に着くなり3人分のコーヒーを注文し、その後、メニューを手に取ってソラに渡した。

「2人とも好きなものを頼んでいいぞ。」

「…ではお言葉に甘えて。」

レーヴェンはアルフォスやソラの好意を無下にしたことは無い。内心、主人に対してここまでしてもらっていいのかと考えていたりするが、そんな考えもアルフォスには筒抜けだった。

「喫茶店なのいろいろあるね。私は…スパゲッティがいいな。」

「ソラ…それ好きだな。」

オレが一緒に行った先で、大抵はスパゲッティを頼んでいる気がする。しかも決まって、味はミートソースだ。

「うん。」

「お客様、コーヒーをお持ちしました。」

ここでウェイトレスがコーヒーを置いて、伝票を裏返しにして去って行った。ソラはアルフォスとレーヴェンに気付かれないようにして伝票を見る。そして次の瞬間には、何も見なかった事にして伝票を裏返しに戻した。なぜなら…。

「（じ、コーヒー3つで12000円..。）」

メニューに値段は書いていない。基本的に、この店に、一般の人間は記念日くらいしか来ないため、一々値段を気にする人の方が少ないのだ。

「ああ、注文が決まったんだがいいか？」

「はい。」

「ミートソーススパゲッティ、サンドイッチ、パエリア。後は日替わりデザートを3つ。」

「かしこまりました。」

サンドイッチを頼んだのはレーヴェンで、パエリアを頼んだのがアルフォスだ。

アルフォスは料理が来るまでの間、この前戦った新たな脅威の使者とのデュエルを思い返す事にした。たったの3ターンで終了したデュエルだったが、得られた情報は今まで少しずつ調べるといっ段階よりもはるかに多かった。

一週間前

この日、アルフォスはほんの暇つぶしでハイウェイを走り続けた。そして、敵は突然、アルフォスの後ろから時空の扉を切り開いて出現したのだ。

「貴様の持つ神：『天神皇』と貴様の魂を頂きに来た。」

敵はそれだけ告げると、すぐに強制デュエルモードを起動してきた。狙いが自分ではなくソラだとわかつている以上、この敵を見逃すわけにはいかない。アルフォスはそう思いながら、最初のカード5枚をドロウした。

「デュエル」  
Ulfoce vs . Emissary of New thre  
eat

「オレの先攻。…貴様は一体何者で、何が目的だ？」

「我々は貴様が新たななる脅威と呼んでいる組織。名を『Ghost of chlonicle』。目的は時空の崩壊と融合。」

「……。」

時空の崩壊…。それだけの事をする力が、この組織にはあるのか。しかしD・ホイールに乗っているというのに仕掛けてきたのはノーマルデュエル。何かライディング・デュエルを避けなければならぬ理由でもあるのか？

「オレはカードを2枚伏せる。更に、モンスターを伏せ、ターンエ  
ンド。」

U l f o c e

L P 4 0 0 0

H a n d : 3

F i e l d

伏せ：1

魔法・罨

伏せ：2

「オレのターン。オレは『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚し、更に『ダーク・リゾネーター』を召喚。レベル5『サイバー・ドラゴン』にレベル3『ダーク・リゾネーター』をチューニング！シンクロ召喚、出でよ『スターダスト・ドラゴン』！」

「スターダストだと…。」

シグナーのしもべが何故ここに…いや、複製したと考えるべきか。

「更に、墓地より光と闇属性のモンスターを除外し、『カオス・ソルジャー』 - 開闢の使者 - を特殊召喚。開闢の使者の効果発動。相手モンスター1体を除外する！そしてスターダストのダイレクトアタック！」

「チツ…」

U l f o c e L P 4 0 0 0 1 5 0 0

少し様子見として出たら調子に乗るとは…次のターンで叩き潰す。

「ハッハッハ！カードを伏せてターンエンド！」

New Threat

LP4000

Hand: 3

Field

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - ATK3000

スターダスト・ドラゴン ATK2500

魔法・罫

伏せ: 1

「オレのターン！このモンスターは自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、生け贄無しで召喚可能！出でよ、時械神サンダイオン」！

時械神サンダイオン ATK4000

「攻撃力4000だと!？」

「『時械神サンダイオン』で『カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - 』を攻撃！」

サンダイオンの創り出した雷の砲撃が開闢の使者に向かう。

「ハッ、罫発動『聖なるバリア・ミラーフォース』！相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する。残念だったなア！」

敵はもう勝利したと言わんばかりに笑う。

「時械神は破壊されない。よって、『聖なるバリア・ミラーフォース』は不発に終わり、攻撃を続行させてもらう。」

「……へ？」

サンダイオンの攻撃を受けた開闢の使者は破壊された。

「『時械神サンダイオン』の効果発動。このカードが戦闘を行った場合、相手に4000ポイントダメージを与える。」

「ぐあああああつー！！」

この時、ヤツは間違いなく倒したと思っただが、その直後に時空の扉に逃げ込まれてしまった。他の時代に余波が及んでいないから、この世界のどこかに飛んだだけなはずだ。

回想終了

「お待たせいたしました。」

ウエイトレスが料理を運んできて、テーブルに置いて行った。アルフォスはそこまで時間をかけずに料理を平らげると、ポッドから2杯目のコーヒーを淹れる。何も飲み食いをする必要のないアルフォスが、自主的に何かを食べようとするのは非常に珍しいが、そういう時、アルフォスは必ず、何かを考えていたりする事が多い。

「アルフォス食べるの速いね。」

ソラがアルフォスの前に置かれている皿を見て言った。ソラのスパゲッティは、まだ半分くらい残っている。



「まあな。」

レーヴェンはサンドイッチなので、そこまで時間もかからず、やはり既に食べ終わっていた。つまり、2人ともソラ待ちだ。

「別に急ぐ必要はないぞ。どうせ帰ってもやる事は無いんだ。」

2杯目のコーヒーを飲み干したアルフォスは、窓の外の景色を眺める。12階ということもあり、町はかなり遠いところまで見渡せる。見る方向によっては、海馬コーポレーションのビルがある。

「ごちそうさま。」

ソラが食べ終え、コーヒーのポッドも空になった。3人とも席を立ち、ソラとレーヴェンが先に店の外に出る。アルフォスは、カードを取り出して店員に渡した。

「45000円になります。」

店員にカードを返され、アルフォスはそれをレーヴェンに預けた。

「この後はどうなされますか？」

「屋敷に帰る。これ以上町を歩いていても、特にやりたいことは無いからな。」

「私もそれでいいかな。」

「かしこまりました。」

レーヴェンが車を運転し、アルフォス達が待っているデパートの1階入り口にやってきた。アルフォス達が乗ったのを確認すると、レーヴェンは屋敷に向かって車を走らせる。

途中、何度か信号にかかり、私有地の山のふもとに着いた。ここから先はアルフォスが所有する土地なので、信号は無い。山の1本道を登った先に、アルフォスの屋敷はある。

「到着致しました、アルフォス様、ソラお嬢様。」

レーヴェンが車の扉を開けて、アルフォスとソラが降りた。空は曇っており、今にも雨が降りそうな天気だ。

「早いところ屋敷に入ろう。いつ雨が降ってくるかわからん。」

アルフォス達は、多少の急ぎ足で屋敷に駆け込んだ。

「おかえりなさいませ、アルフォス様。」

玄関で待っていたローヴァンがアルフォスを見て、頭を上げて言い、持ち場に戻って行った。それと同時に、外では雷が鳴り、雨が降りだした。

「危なかったな。急に雨が降ってくるとは。」

「そうだね。」

まるで突然の襲来者を現すように降り始めた雨は、すぐに勢いを増し始めた。雨の激しい音が、防音壁の屋敷の中にまで聞こえてきた。そう、突然の襲来者の大きな声と共に。

「アルフォス!! ルヴォルグ。オレと戦ってもらおう。」

突然の雨は、その襲来者がこの次元にやってくるためのモンスターを召喚した影響による天候の変異。

「貴様の持つ神の力を賭けてこのオレと戦ってもらおう。オレは Ghost of chlonicleの1人。」

「!!!」

アルフォスはこの2度目のチャンスを逃すべきか否かを考える。そう、敵の目的を探るには、あまりにも少ないチャンスなのだ。

「アルフォス...。」

ソラがアルフォスを心配そうな目で見つめる。もしもアルフォスが死んでしまったら...ソラはそんなことは考えたくなかった。

「いいだろう、オレが相手になつてやる。」

神の力...。

「ソラ、お前は出てくるな。」

アルフォスはソラの頭を撫でて、扉を開けて出て行った。

新たなる日々は、突然の襲撃者との激戦で幕を開けるのだった。

次回へ続く。

次回「未知の脅威」

アルフォス「激動の始まりだ…」

ソラ「いきなりすぎる…。今日の最強カードはコレ」

『時械神サンダイオン』  
レベル10 光属性 天使族・効果 ATK4000 DEF4000

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリース無しで召喚する事ができる。このカードの戦闘によって発生するお互いの戦闘ダメージは0になる。このカードは戦闘及びカードの効果では破壊されない。このカードが戦闘を行った時、相手ライフに4000ポイントダメージを与える。自分のスタンバイフェイズ時、このカードはデッキに戻る。

カオス「恐るべきチート」

ソラ「4000デュエルなら一瞬で終了のカードだね。」

アルフォス「こいつの攻略法だけが思い浮かばん…。」

ソラ「ではまた次回！またね。」

## 第21話 未知の脅威（前書き）

どうも。最近厨二病が悪化してきました。

最近の出来事

特に変化なしですね。ラヴァルバル・チェインが2000円で手に入ったのでよかったということくらいでしょうか。

## 第21話 未知の脅威

### アルフォス邸 庭

ザー…と、雨の音が辺りを包む。しかし、モンスターの召喚によって引き起こされた天候の変異である雨雲と雷雨は、すぐに晴れて消えた。

「逃げずに出てきたことは褒めてやろう。」

そのモンスターの力で時代と次元を超え、この次元に出現した男はアルフォスを見るなり、口の片方を釣り上げて笑う。アルフォスはじっと黙って、その男の事を、鋭い眼で睨み付けていた。普通の人間ならば怖気づいて息をするのすらままならないほど、アルフォスの眼は鋭い。だが、その男はさすがにアルフォス呼び出すほどの度胸があるだけあって、全く動じない。

「オレの神の力を狩りに来たと言ったな？お前達が求めるのは天神皇か？」

「こちらから呼び出したからな、必要最低限の礼儀として、狙う物と目的の詳細くらいは教えておいてやる。貴様が言う通り、我々が狙うのは天神皇と呼ばれる3枚の神。どこの平行世界を探し出そうとも、決して存在しない、時空の特異点たる聖なる神。」

「それを集めて何が目的だ？」

「強大な力ならばたとえ天神皇でなくとも良い。それこそ、平行世界にはごくありふれた存在である星界の三極神でも、オリジナルならばかなりの力を誇るからな。その力を集め、我らは<フェルグレス>を復活させる。その時こそ、この時空の消滅が成立するのだ。」

…この男、オレにこれ程の情報を何の躊躇もなく話して、何か狙いがあるとしてもいうのか？

アルフォスは疑う。この情報がデタラメなものではないかと。しかし、この前に襲撃してきたあの使者との話とも噛み合う。故にアルフォスは、この情報が嘘ではないと思った。だが、それでも不明な点は幾つかある。まずは男が言った<フェルグレス>というもの。そして、男がこの次元にやってくるために召喚したモンスター。時空を超えるほどの力を持つモンスターならば、間違いなく神のカードをも凌駕しかねない。

アルフォスは、これらの事を考えるのは先送りにして、デュエルの準備を始めた。アルフォスはデュエルディスクを使用しない。そして、アルフォスの手に、突然5枚のカードが現れた。それは、アルフォスがいつも右手の人差し指に装備しているアーティスに格納された、アルフォスのデッキの初手5枚だ。

「ほう、ディスクを使わないとは…。」

ディスクを使わないでデュエルを行う存在はかなり珍しい。アルフォスも見たことがあるのは、未来に生きたイリアステル滅四星のZ-ONEくらいだ。だが、アルフォスがディスクを使わないのは、リミッターの外れた、モンスターが実体化するデュエルを行うためだ。アルフォスは目の前に対峙する男を、完全に潰すつもりだ。

「戯言はいい。神の前にひれ伏せ、行くぞ！」



「我が名はメローア。貴様の神、時空消滅のために貰い受ける！」

「デュエル!!!」

Ulforce vs. Meroa

「先攻はわたしが貰う。わたしは『青龍の巫女』を召喚。このモンスターが召喚に成功した時、デッキからランダムにカードを1枚手札に加える。そして相手は、デッキからカードを1枚ドローできる。

」

現れたのは龍を模した服を着た巫女。フードのようなもののせいで顔は見えない。

アルフォスの手に6枚目のカードが現れた。一方で、メローアはデスクから飛び出たカードを1枚手に取った。

『青龍の巫女』

レベル2 水属性 魔法使い族・チューナー ATK/1000

DEF/1000

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分はデッキからカードをランダムに1枚選択して手札に加え、相手はデッキからカードを1枚ドローする。

「更にわたしは、カードを2枚伏せてターンを終了する。」

Mer oa

LP8000

Hand: 4

Field

青龍の巫女 ATK1000

魔法・畏

伏せ：2

「オレのターン！」

ライフは8000…という事は、元々この世界の住人ではないのか。更にあの青龍の巫女というカード…あんなものは見たことが無い。

「オレは『機皇兵ワイゼル・アイン』を召喚。更に魔法発動、『機皇召集』。このカードは自分フィールド上に『機皇』の名を持つモンスターが存在する場合、デッキから『機皇』の名を持つモンスターを特殊召喚する。出でよ、『機皇神マシニクル』？！」

機皇神マシニクル？ ATK4000

ヤツは言った。『強大な力を求めている』。ならば、このデュエルにはきつとデュエルで発生した強大な力を集める意味もある。神の召喚は間違いなく、こいつにエナジーを与える事になる。究極神の存在を明かさない為にも、できれば避けるべきだ。

「機皇神マシニクルで『青龍の巫女』を攻撃！受けてみる、破滅のカザ・キューブ・オブ・デイスペア！」

「畏オープン。永続畏、『バトル・エスケープ』。相手ターンに1度、自分フィールド上に存在するモンスター1体をエンドフェイズ時まで除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする。よって、『青龍の巫女』を除外し、マシニクルの攻撃を無効にする。」

機皇神マシニクルの放った青い無数の立方体によって成されているレーザー攻撃は、攻撃対象を失い、空を切った。

「ならばワイゼル・アインでダイレクトアタック！クオーク・カーブ！」

「この程度…。」

M e r o a   L P 8 0 0 0   6 2 0 0

「オレはカードを2枚伏せ、ターンエンド。」

「このエンドフェイズ時、除外されたモンスター1体を特殊召喚し、特殊召喚された『青龍の巫女』の効果が発動。デッキよりランダムにカードを1枚手札に加え、相手はデッキからドロウする。」

U l f o c e

L P 8 0 0 0

H a n d :   4

F i e l d

機皇神マシニクル ?   A T K 4 0 0 0

機皇兵ワイゼル・アイン   A T K 1 8 0 0

魔法・罫

伏せ : 2

「わたしのターン。わたしは、手札を2枚捨てて魔法カード『青龍の呼応』を発動。デッキより、神属性のカードを手札に加える。」

「神属性のカードだと!?!」

バカナ…通常のメインデッキに入る神のカードは三幻神のみ…ヤツのフィールドには3体のモンスターは存在しないから、今ここで手札に加えて何の意味がある!?!

「わたしは『四神天青龍』を手札に！！」

「何！？」

三幻神以外のメインデッキに存在できる神カード……。しかも、あらゆる次元を旅してきたオレさえ存在を知らない神……！

「この神がどのような存在か、疑問を持っているのだろうか？」

「……。」

アルフォスは答えない。しかし、その沈黙は肯定の意。アルフォスの眼には、疑問の色が浮かんでいる。左眼を機械の様にターゲットを設定し、分析する特殊な眼にモードチェンジするが、その正体が掴めない。元は狙撃用の超遠距離を見渡すための眼であるから、分析を頼りのするのはお門違いだとアルフォスも理解はしている。

「すぐにわかる、貴様の敗北と共に……！わたしは手札より捨てられた永續罫『アグレッシブ・リボン』の効果発動。このカードを墓地からフィールド上に発動し、自分の墓地からモンスター1体を蘇生しこのカードを装備。装備モンスターは攻撃表示以外ではフィールド上に存在できず、効果は無効になり、攻撃力を4000にする！わたしが復活させるのは『青龍兵』！」

青い龍の紋章をかたどったマントを着けた、若い男性の戦士が現れた。鎧の色も青く輝いていて、聖なる力を宿しているのがわかる。

青龍兵    ATK1000    4000

「行け、『青龍兵』！『機皇神マシニクル？』を攻撃！」

青龍兵は大槍で、マシニクルの胸部を貫いた。マシニクルは砲になつていない右手で、青龍兵を殴り倒し、マシニクルの爆発に巻き込まれた。

「マシニクルが1ターンで…！」

「破壊された『青龍兵』の効果発動。このカードは破壊されフィールドを離れた場合、デッキから攻撃力1500以下の『青龍』と名のつくモンスターを特殊召喚する。デッキから『青龍兵』を特殊召喚！」

「こちらは罠カード『機皇転生術』を発動。『機皇神』の名を持つモンスターがフィールド上を離れた場合、デッキから『機皇兵』の名を持つモンスター2体を特殊召喚する。来い『機皇兵スキエル・アイン』、『機皇兵グランエル・アイン』！」

『機皇転生術』

通常罠

自分フィールド上に存在する「機皇神」と名のついたモンスターがフィールド上を離れた場合、デッキから「機皇兵」と名のついたモンスター2体を攻撃表示で特殊召喚する（同名カードは1体まで）。

「『青龍兵』で『機皇兵スキエル・アイン』に攻撃！」

「自爆特攻…！！！」

スキエル・アインは2つの銃口から無数の弾丸を連射し、青龍兵を返り討ちにした。

Mer oa LP6200 6000

「『青龍兵』の効果により、デッキから『青龍の従者』を特殊召喚。こいつが特殊召喚に成功した時、デッキから『青龍の従者』を特殊召喚する。但し、この効果で召喚した従者の効果は発動しない。」

青龍の従者 ATK1100

これでメローアのフィールド上には3体のモンスターが揃った。あの四神天青龍が他の神と同じく、3体の生け贄を必要とするのであれば、ヤツは四神天青龍を召喚するはずだ。

「カードを3枚伏せ、『青龍の従者』2体に『青龍の巫女』をチュ  
ーニング！」

「！！！」

シンクロ召喚か…合計のレベルは8、ヤツは一体何のシンクロモンスターを呼び出してくる？スターダストか？スクラップ・ドラゴンか？いずれにせよ機皇の前でシンクロモンスターの召喚など自殺行為、このデュエル貰った。

「天の道に青き流星流る時、神の到来を告げる使者降臨す。シンク  
ロ召喚、出でよ、『青天龍』！！！」

青く澄み渡った、雲1つ無い天空の遙か彼方より、青く、巨大な龍  
が出現した。それは、神の到来を告げる古の龍の姿だ。

青天龍 ATK3000

『青天龍』

レベル8 水属性 ドラゴン族・シンクロ/効果 ATK/300

0 DEF/2500

『青龍の巫女』+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分は手札が5枚になるようにデッキからカードをドローする。このカードが墓地に送られた時、このカードのシンクロ素材としたモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。この効果によって特殊召喚したモンスターの効果は無効になる。自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事ができる。

「『青天龍』のシンクロ召喚に成功した時、手札が5枚になるようドローする。わたしの手札は1枚、よって4枚ドロー。」

「成程な。」

手札補充の効果を持ったシンクロモンスター：伏せカードを増強し、さらに手札に強力な効果を持つカードを温存しようとしているのか。

「そして『青天龍』の効果発動。このカードを墓地へ送る。」

「!?!」

青天龍は自らの体を青い光の粒子に変え、空气中に散らばせ消えた。しかし、その粒子が再び集合し、3体のモンスターの姿を形作る。

「そしてこいつは墓地へ送られた場合、シンクロ素材にしたモンスターを、効果は無効にして特殊召喚する。よって、3体のモンスター

」が復活。」

「……3体のモンスター……。」

「そう、わたしはこの3体をリリースし、『四神天青龍』を召喚する！出でよ、『四神天青龍』！！」

メローアのフィールド上のモンスター3体が、深い青の色の光線に変化して、遙か彼方へ飛び去った。そして、空気中の水分が天空に集結し、巨大な水の塊を造る。その水の球体の中に、突如巨大な龍が姿を現した。次の瞬間、水の球体は破裂し、中の翼を持たない龍が咆哮と共に出現した。

『グオオオオオオオオツ！！』

その龍は全身が青い姿をしており、神々しい青き光を放つ。

四神天青龍 ATK4000

『四神天青龍』

レベル10 神属性 幻神獣族・効果 ATK/4000 DEF  
/4000

このカードは「四神天」と名のついたカードの効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上に存在するモンスター3体をリリースしなければならない。

????

????

このカードが特殊召喚に成功した時、自分のライフポイントが8000以下の場合、自分のライフポイントを8000にする。このカードは自分フィールド上を離れる場合、ゲームから除外される。



「これが未知の神…。」

神のカードというからには、並大抵の戦術は通用しないか。おそろく、カード効果にもある程度の耐性は持っていると考えられる。そしてこの威圧感…ソラの天神皇、ロキの七聖龍と同等のパワー…。一体どこでこの神は誕生したのだろうか？

「貴様の心が読めるぞ。この神がどこで誕生し、どれ程の時を過ごしてきたか気になっているようだな？教えてやる。この神は、この次元で誕生した。」

「…！」

「今から500年…未来から700年ほど前、まだこの次元ではデユエルモンスターズは成り立っていなかった頃、我々は未来より700年前を訪れ、この神の力を聖地より吸収しカードに封じ込めた。これがこの神の誕生。」

「今から500年前だと…。」

その上、聖地より神の力をカードに封じ込めた。神の力をカードに封じ込め、更にそれを操るなど、例え強固な精神を持つ人間でも可能はずがない。しかし、今オレの目の前に、それを現実に行っている者がいる。この話は信じるしかない。

「ターンエンド。さあアルフォス、貴様のターンだ。」

Mer oa

LP6000

Hand : 4

Field

四神天青龍 ATK4000

魔法・畏

バトル・エスケープ

伏せ : 4

「オレのターン！畏発動、『機皇神の秘宝』。墓地のマシニクルをデッキに戻し、デッキからカードを2枚ドロ。」

手札は7枚。これだけあれば、それ相応の戦術は当然存在する。しかし、ヤツの伏せカードは4枚。その上、未知の力を持つ神『四神天青龍』。どう考えても、一筋縄ではいかない。

「自分フィールド上に『機皇』モンスターが3体以上存在する場合、『機皇神龍アステリスク』を特殊召喚する！」

機械でできた、翼を持たない長い龍が現れた。

「アステリスクの攻撃力は、攻撃表示の機械族モンスターの合計！オレのフィールドには3体の機皇兵がいる。よって、攻撃力は4600！」

機皇神龍アステリスク ATK0 4600

「『機皇神龍アステリスク』で『四神天青龍』を攻撃。インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

「カウンター畏発動、『激流の報復』。自分の墓地から水属性モンスターを全て除外し、除外した数まで相手フィールド上のカードを

破壊する。わたしが除外したのは6体、よって貴様のフィールド上のカードを全て破壊する。」

「なんだと!?!」

激流に飲み込まれて、アルフォスのフィールド上のカードがすべて消えた。アルフォスの表情は、言葉ほど驚愕に満ちてはいない。

「……………」

どうする? ヤツの伏せカードはまだ3枚残っている。下手に動き、妨害されればそれでお終いだ。だが何もしなくても神の一撃でオレのライフは4000ポイント減る。それにこのデュエルはモンスターが実体化している。いくら強固な器と言えど、神の一撃を受けて無傷でいられるわけがない。ここは…。

「カードを5枚伏せ、更に『ワイズ・コア』召喚。ターンエンド。」

U l f o c e

L P 8 0 0 0

H a n d : 1

F i e l d

ワイズ・コア     A T K 0

魔法・罫

伏せ : 5

「わたしのターン。絶望的な状況なのにやけに冷静だな。気でも触れたか?」

「……………」

アルフォスは怒った時も、自らに危機が迫った時も、この絶望的状況でも見た目ほど冷静さ、もしくは鋭い気迫、戦意を失っているわけではない。生命体でないが故、しよとすれば完全な感情のコントロールが可能で、常に緊張、嫉妬、恐怖、悲しみ、悔しさ、欲望、懐古など自分の意志を捻じ曲げる感情をシャットアウトしているアルフォスには、そもそも触れる『気』が無い。

「まあいい、どの道お前はここまでなのだからな。『四神天青龍』  
！天水爪撃！！」

青龍は巨大な爪に超高压水を纏わせ、ワイズ・コアに斬りかかる。

「畏発動！『永久機動』！！自分フィールド上に存在するモンスターを全て除外！自分のデッキから『機皇神マシニクル？』を特殊召喚する。再起動せよ、『機皇神マシニクル？』！！」

しかし、その前にワイズ・コアが消え去り、再び機皇神マシニクルが姿を現す。青龍はマシニクル出現に伴い、一旦突撃を止める。

「さあどうする！マシニクルと青龍の攻撃力は互角、当然戦闘結果は相打ち。そうなれば神を失うことになるぞ！」

アルフォスは、どうせ神の攻撃を止めるだろうと思っていた。仮にここで敵が攻撃を止めた場合、次のターンアルフォスの伏せカードにある畏カード『ファイナルリミット最終手段』が発動し、互いのモンスターは全滅、メローアにその攻撃力の合計である8000のダメージが及ぶ。…アルフォスの算段ではそうなるはずだった。

「攻撃続行！天水爪撃！！」

「何!？」

しかし、敵は攻撃を続行した。超高压水を纏った爪が、軽々しくマシニクルを真つ二つに切り裂く。それと同時に、マシニクルは自爆機能を起動、互いに爆発に巻き込まれ消えた。

「『四神天青龍』はフィールドを離れる場合、ゲームから除外される。だがこれと同時にわたしの罠が発動する。罠カード『四神天の至宝』。このカードは幻神獣族モンスターがゲームから除外された時、その幻神獣族モンスターを特殊召喚する。復活せよ、『四神天青龍』!!!」

天が裂け、次元の狭間から凄まじい量の水と共に、聖なる力を宿す神が再臨した。そして、再臨した青龍は1度目の出現と違い、淡く優しい光をメローアに向け放つ。

Mer o a L P 6 0 0 0 8 0 0 0

「なぜライフが…」

「『四神天青龍』は『四神天』と名のついたカードの効果でのみ特殊召喚が可能。そして、特殊召喚に成功した時、わたしのライフが8000以下であれば8000にする。」

「チッ…」

アルフォスは若干険しい表情になる。ライフ回復の効果を持っており、フィールドを離れば除外、サポートカードで復活。メローアの伏せカードもまだ2枚残っているという事実から、今現在の戦況

が厳しいことを思い知らされる。

「バトルフェイズ中の特殊召喚によって、青龍はまだ攻撃が可能だ。  
『四神天青龍』でアルフォスにダイレクトアタック！天水爪撃！！」

爪の大きさは1本1本がアルフォスよりも大きい。その爪が、アルフォスに襲い掛かる。アルフォスは何とか逃れようとするが、やはり逃れきれずに右腕を失う。

「！！！」

アルフォスに痛覚は無い。アルフォスの右腕があつた場所に、みるみる黒い光が集まり、元の右腕を形作り、完全に再生させる。その光景を見たメローアは、驚きを隠しきれずにいた。

「オレの体は少々特殊だな。意志や意識、感情は人間に等しいモノでも、生命体の概念から外れた存在だ。」

U l f o c e    L P 8 0 0 0    4 0 0 0

「畏カードオープン、『痛覚変換』。自分が戦闘ダメージを受けた時、その戦闘ダメージ以下の攻撃力を持つ『機皇』モンスター1体を、デッキ・手札・墓地から特殊召喚する。来い、『機皇神マシンニクル？』！！」

「くどい！畏発動。『四神天の断罪』！相手のモンスターを特殊召喚する効果を含むカードの発動、またはモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚を無効にして破壊する！」

アルフォスが開いた次元の扉を、四神天青龍がその神力を用いて封

じ込めた。

「まだ終わらん。速攻魔法発動、『無情の後継者』！」

アルフォスの勢いは衰えない。ここまで何度か妨害を受けたが、その影響を見せないほどにアルフォスの戦況を立て直す速度は速かった。

「墓地から機械族モンスター1体を守備表示で特殊召喚する。蘇れ、機皇神マシニクル！」

機皇神マシニクル？ DEF4000

「まだ機皇神を蘇生させようとするか！カウンター罠、『悲感の警告』！『バトル・エスケープ』をデッキに戻し、相手の魔法・罠の効果を無効にし破壊する！」

「またしても…。」

悲感の警告は自分フィールド上のカード1枚をデッキに戻すことで相手が発動した魔法・罠カード1枚の発動と効果を無効化し破壊するカード。あれだけの伏せカードなら、在っても不思議な事ではないか。

「ならば速攻魔法、『平行未来』を発動。自分の魔法・罠カードが墓地へ送られた場合に発動し、デッキからフィールド魔法を発動する。この効果によって発動したフィールド魔法は、相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。」

地平線の向こうに、一筋の光が昇る。それが段々と太くなって行き、

最後には非常に眩しい閃光を残して消える。閃光が収まった場所にあつたのは、頂上が見えないほど高い、巨大な塔だった。

「なんだあれは…。」

「…『神の巨塔Cruel gods』。遙か天空に続く神の庭。」

クリスタルによって造られた、何人たりとも近づくことの許されない巨塔。

「その効果により、自分フィールド上に存在するモンスターは魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。」

『神の巨塔Cruel gods』  
フィールド魔法

このカードは「平行未来」の効果でのみ発動する事ができる。このカードが表側表示で存在する限り、フィールド魔法カードを発動する事はできない。自分フィールド上に存在するモンスターはこのカード以外の魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない。自分フィールド上に召喚・特殊召喚された機械族以外のモンスターは、3回目の自分のエンドフェイズ時にゲームから除外される。

「だが、神の影響を受けた機械族以外のモンスターはその負荷に耐えられず、3回目のオレのエンドフェイズに除外される。」

残酷な神はいつだってそうだ。救いの手を差し伸べておいて、また新たな災いを齎す。この巨塔はそうした神々が住んでいた。だが、そうした災いすら受け付けない無情のマシンは、神の意志を跳ね除けて進化を遂げた。機械族が除外されないのは、その名残だ。



「……そして最後の1枚、『神意の真相』。3枚以上の魔法・罫力カードが発動したターン、このカードの発動は無効化されない。このカードの第2の効果によって、墓地より、機械族モンスター1体を特殊召喚する。『機皇神マシニクル？』を特殊召喚。メローア、その程度の神にすぎるお前にオレは倒せない。」

攻略可能な道がある限り、アルフォスは止まる事を知らない。ただひたすら、退かずにその道を行くのみ。純粋な力と感情を持つアルフォスを、汚れた感情を持った人間が倒すことなど、神の手でも借りない限りできない。それも、たった1体の神の手では足りない。『神意の真相』は、アルフォスの『最終手段』ファイナルリミットでもあった。第1の効果で、互いのフィールドのモンスターをすべて破壊し、その攻撃力の合計分のダメージを相手に与える効果が存在した。

「…フツ、少しわたしの攻撃を耐え、マシニクルを復活させたからと言っていい気になるな。手札を全て伏せ、わたしはターンを終了する。」

Mer oa

LP8000

Hand: 0

Field

四神天青龍 ATK4000

魔法・罫

伏せ: 5

「オレのラストターン！」

アルフォスはこのターンが最終ターンだと宣言し、カードをドロ―した。

「何がラストターンだ。わたしのフィールドには、まだ神が残っているぞ。」

それに対し、メローアは余裕の口ぶりだ。当然、5枚の伏せカードはその殆どが妨害系の罫。アルフォスがそれを掻い潜れるはずがないと踏んでいる。だが、その余裕は1分もしないうちに無くなるのだった。

「『機皇神マシニクル？』を生け贄とし、『究極機皇神エクスイレイズ』を特殊召喚!!！」

光の中から、100mほどの巨大な人型の機械が出現した。背中からは4枚の機械の翼が装備され、左手にはレーザーでできている剣を持っている。頭部はマシニクルと殆ど変わらない。機体は黒を基調としており、恐るべき硬さを誇る。

究極機皇神エクスイレイズ ATK4000

「だが攻撃力は4000…!青龍と互角。それこそ、戦闘結果は相打ちだ!」

さつきとは逆の状況。そして、その時は本当に相打ちとなり、マシニクルも青龍も一度は倒れた。だが。

「それはどうかな?『究極機皇神エクスイレイズ』の効果発動。1ターンに1度、フィールドと墓地の機械族モンスターの攻撃力を得る。よって攻撃力は8600ポイントアップする!」

「なに!?!」

究極機皇神エクスイレイズ ATK4000 12600

「悪いな。無情な神はオレに勝利を齎すようだ。ライフ8000では、一撃でライフゼロだな。」

「…どうやらそのようだな。今回は貴様に勝利を譲ってやる。」

そう言うと、メローアは青龍の力を利用して時空の扉を開いた。

「逃げられると思うなよ。エクスイレイズ、オレに火の粉を振りかけた愚か者を滅殺せよ！イレイズブラスターカノン！！」

エクスイレイズが剣のエネルギーを飛ばして大爆発を起こす。

「青龍は貴様に預けておいてやる。」

メローアは、エクスイレイズの攻撃の攻撃が自らに届く前に、青龍のカードを投げた。青龍の力がエクスイレイズの攻撃を阻止し、メローアはその隙に時空の扉の向こうに消えた。

Mer o a LP8000 - 600

U l f o c e W i n

アルフォスは逃げられた事を特に気にしている様子はない。それよりも、手に取った青龍のカードの方が気になるようだ。

「『四神天青龍』…。」

カードにはテキストが書かれていない。おそらく、デュエルの時の

みカードに記されるものだろう。アルフォスはカードをしまい、荒れた庭の時間を巻き戻して元に戻した。

「このカードもそうか。」

以前、ソラの天神皇を一時だが扱った。その時同様、この神のカードもオレに反発する。

『スマン、暫く昼寝していたのだが、何かあったのか？』

「…肝心な時に役に立たんな。まあいい、Ghost of chlonicleから神を1枚奪った。」

『これがそのカードか。…我らに反発の意思を見せているな。どちらかというと、究極神に対してか。』

「そうだろうな。神は自分より強大な力を持つ神の存在を否定したくなるものだからな。」

「アルフォスっ！」

屋敷の玄関扉がボタンという大きな音を立てて開き、精一杯に叫んだであろう、しかし可愛げのある聞きなれた声が聞こえた。

「大丈夫!？」

「無問題だ。ああ、これをローヴァンに渡してくれ。」

アルフォスは四神天青龍を投げ、走ってくるソラに渡した。ソラは一瞬、反応しきれずに飛んできたカードに驚いたが、何とか落とさ

ずを受け取った。

「びっくりした…いきなり投げないでよ。」

「悪いな。」

さっきの同じ言葉とはまるで違う、普段の軽い感じがアルフォスに戻った。アルフォスは戦闘時には一切の余計な感情を消し去る癖があり、日常と戦闘時のアルフォスを両方見た時に、その豹変に驚く者は少なくない。しかも、メローアと戦ったアルフォスはまだ冷静だった。冷静さを失ったアルフォスは、プレイングミスは絶対にしないが、敵に回した者が生きて帰ったことは無い。ソラはカードを受け取ると、アルフォスの無事を確認して安心したのもあり、やたらと上機嫌で中に戻って行った。

「…カオス、下らん話に少しだけ付き合ってくれ。…オレがなぜソラを妹にしたかわかるか？」

何も妹でなくてもいいはずなのだ。姉でもいいし、養子でもいい。だが、アルフォスはあえてソラを妹にした。

「……わからんな。身近な人が欲しかったんじゃないのか？」

「それなら彼女とかそういう関係でも良いわけだ。オレがソラを兄妹にしたのにはそれなりの理由がある。」

オレはその真意をカオスに告げる。オレは彼女などそう言った関係は、暗黒神を倒した時から懲りている。それは、大切な何かが記憶と共に消えた時の空虚な心が悲鳴を上げたからだった。確かに、兄妹でも大切な存在に変わりはないが、愛した恋人を目の前で失い、

絶望に打ちひしがれるよりは、まだ耐えられると思った。そして、もう1つの理由。それはソラとの約束を守るには、一番やりやすい位置にあるから。あと、彼女にするには背が低い。

「だが、今のソラを見て分かってしまった。赤の他人だったソラでさえ、身近になればなるほど失う恐怖が纏わりつく。」

天神皇は狙われている。それはつまり、ソラに危険が迫っている証拠でもある。

『成程…ところで妹でもよかったのなら姉でもよかったのではないか?』

カオスはアルフォスがなぜソラを兄妹にしたのか理解したところで、第2の疑問をぶつけた。アルフォスはそれに対して

「年上の姉弟は気に食わん。」

と、冷然と返した。

『…そういうわけがあったのか。』

「下らん話はここで終わりだ。これでオレの手にはGhost of chlonicleのキーパーツであるう神が1枚。奴らはおそらく、あのカードを取り戻しに来るだろう。」

預けておいてやると言った以上、神を取り戻しに来ないわけがない。オレはGhost of chlonicleと戦う決定的な理由を手に入れた。ようやく、空気を掴むようなこの戦いの火蓋が切つて落とされた。

「なににせよ、あの神のせいで結構力を持って行かれた。少し休もう。」

アルフォスは屋敷の扉を開けた。

「アルフォス」

「ぐはあっ!？」

開けたと同時に、多分待ち伏せしていたのであろうソラが、全力で抱きついてきた。アルフォスにしてみれば、神の魔力である神力を使った後のコレは、微妙に響いただろう。

「な、なんだ…?」

「何となく」

上機嫌なソラの考えている事は、アルフォスにすらわからないのだった。

次回へ続く。

## 第21話 未知の脅威（後書き）

次回「大学の4人グループ」

カオス「アルフォスに彼女を作ろうかと作者が考えているそうだ。」

アルフォス「やめる。ソラ1人で充分だ」

ソラ「えー…私、妹だけとそれでもいいなら…」

アルフォス「何か勘違いしていないか？」

ソラ「へ？……今日の最強カードはコレ（´・`・´）」

『四神天青龍』

レベル10 神属性 幻神獣族・効果 ATK/4000 DEF  
/4000

このカードは「四神天」と名のついたカードの効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上に存在するモンスター3体をリリースしなければならない。

???

???

このカードが特殊召喚に成功した時、自分のライフポイントが8000以下の場合、自分のライフポイントを8000にする。このカードは自分フィールド上を離れる場合、ゲームから除外される。

アルフォス「まだ効果の隠れた部分はあるが、ヒントを与えておく



と、このうち1つはカード効果への耐性だ。」

ソラ「大学1年次編では重要なキーカードだから、まだ効果は秘密かな。」

アルフォス「1年次とはどれくらいの予定なのだ？」

ソラ「25〜40話くらいかも…」

アルフォス「長いな…。」

ソラ「ではまた次回。しーゆーあげいん」

カオス「アルフォスの事はLoveかLikeか答える、ソラ。」

ソラ「大好きだよ？多分Love」 英語をよくわかってない

カオス「そうなのか。これは彼女ルートあるのかもしれん…。」

ロキ「ねーよ！」

## 第22話 行動チーム(前書き)

前回の次回予告からサブタイ変えました。内容は変えてないです。

最近の出来事

特に何もありません。

## 第22話 行動チーム

午前7時。アルフォスは入学式には出たものの、これから1か月ほどはGhost of chlonicleの出方を窺わなければならない。そのため、海馬コープレーションから直接、暫く休学するとメッセージが来ていた。よって、今日こそ大学に行くのはソラ1人だ。

しかし、ソラはまだ起きない。いつものようにレーヴェンが起こしに来たが、悪戦苦闘している。

「ソラお嬢様…いい加減起きてください…。」

若干諦めかけた顔でレーヴェンがソラに声をかけ続ける。珍しくソラの隣で寝ていたアルフォスは、レーヴェンの声でソラよりも先に起きてしまった。

「どうしたレーヴェン？」

「お嬢様が起きてくれないんです…もうお時間なのに…。」

アルフォスはそれを聞くと、苦笑いを浮かべてこう言った。

「まあ、少しくらい遅れてもいいんじゃないか？オレのD・ホイールならここから10分もしないうちに到着するから、寝坊したって大丈夫だろう。」

「しかし…。」

「後でオレがソラを送って行くから気にしなくていい。」

レーヴェンはため息をついて部屋を出て行った。寝ているソラを起すのは気が引けるし、遅れたところで特に何かあるわけでもない。それならもう少しくらいは寝かせてやってもいいだろう。どうせ今日大学の課題は、行動を共にするメンバー4人を決めるのと多少の実技のみ。講義もシンクロ召喚を扱うソラには、基本的なカードの所有種類数が違いすぎるから、参考程度でしかない部分もある。

「さて…コーヒーでも飲むか。」

最近はずつかり、暇さえあれば飲むようになってしまった。つい3週間前までは何も飲み食いをしなかったはずなのに。

内線からローヴァンの携帯に電話をかけ、コーヒーを持ってきてくれと頼む。このくらいは自分でやれと言われそうだが、ローヴァンは嫌な顔1つせずに、数分後に持ってきた。

「アルフォス様、本日のスケジュールは？」

「ああ…とりあえず、あと少ししたらソラを大学に送る。その後は暇だな。」

ちなみに、アルフォスは今日ソラを大学に送るという予定を入れなければ、完全にフリーだった。送った後にどこかに寄って、何か買ってこようかとも思ったアルフォスだが、流石にGhost of chronicleのことも考えるとそんな悠長な事はしていられなかった。

「わかりました。何かありましたら、何なりとお伝えください。」

ローヴァンは頭を上げて部屋を出て行った。その5分くらい後に、ようやくソラが起きた。コーヒーはとっくに飲み終えている。

「うん…。あ、アルフォスおはよう。」

「…早いとはお世辞にも言えないがおはよう。」

まだ眠そうにしているソラの頭を、目覚まし代わりに少し撫でてやると、目をこすりながらゆっくりと歩いて、下の食堂に向かった。階段から落ちそうな感じがしたので、オレもソラについて行くことにした。尤も問題無く食堂に着いたが。

ソラはマイペースにゆっくりと朝食を済ませていつものドレスに着替える。見た目ほど動きにくくはないらしい。しかし、この青いドレスは特注とドレスの名を借りてアルフォスが作った魔導服だ。動きやすいのは当たり前と言えば当たり前だろう。赤の方は真正銘のオーダーメイドで、普通のドレスと変わらない。青いドレスがアルフォスの手作りだとソラが知ったらとても喜ぶだろう。だが、意外とシャイなアルフォスは、教えるのを嫌がる。

「アルフォス、準備できた。」

「よし。ところでソラ、お前もそろそろ町で遊びたいと思う頃だろう。」

「へ？別にそんな事ないけど…。」

「そう遠慮するな。お前にこれを渡しておく。好きなだけ使っていぞ。」

アルフォスはアーティスに格納されていた黒いカードを取り出すと、ソラに手渡した。ソラはキョトンとした表情でカードを受け取る。

「何これ？」

「ブラックカード。海馬から2枚贈られてきた。」

1枚あれば十分な代物を、なぜ2枚も寄こしたのかは理由がわからない。それでもソラとオレに1枚ずつと考えれば辻褄は合うか。

「ブラックカードって…あの？」

「そう、アレの事だ。」

「も、もらえないよ！」

「知らんな、それはもうオレの物じゃない。要らないなら捨てればいいんじゃないか？」

こうでも言わないとソラは受け取らない。それを知っているアルフォスは、多少言い方をきつくしてでも、これを使うにしろ使わないにしろ、ソラが好きなだけ遊んでくれればいいと思っている。

ソラは渋々受け取ると、持って行く肩掛けの小さなカバンの中に入っている、財布のカード入れに入れた。

「…全部使っちゃうかも。」

「安心しろ、1000年かけても使い切る事はできんだろうからな。準備ができたなら行くぞ？」

「うん。」

アルフォスがグランドフォースの2人乗りするのは初めての事だ。ソラがアルフォスに落ちないように、ぎゅっとしがみついた。

「飛ばすから気をつける。」

アルフォスはグランドフォースの永久機関とジェットエンジンを0Nにし、凄まじい勢いで走る。このまま永久機関のエネルギーを利用して天空を走る事もできるが、人目に触れるのは拙い。

「きゃあああああああ!!」

アルフォスはソラの悲鳴をお構いなしに、更にスピードを上げる。公道の曲道をドリフトで曲がり、反対車線から向かってくる車はジャンプで飛び越えた。その結果、5分もしないうちに大学に到着した。

「あ…め、目が回る…。」

ソラが気分悪そうにグランドフォースから降りた。アルフォスは、少々やりすぎたな、という少し困った表情をして、バランスが取れなくなったソラを支える。乗り物にどれだけ慣れていても、これは酔うだろう。

「き、気持ち悪い。」

「……何だ、その…悪かった。」

アルフォスはソラを大学の玄関まで送ると、グランドフォースに乗

って屋敷の方に走って行った。ソラは大学の玄関の壁に寄りかかって休憩する事にした。

「……………」

どうにか調子を取り戻したソラは、集合場所のパーティー会場に行く。そこでは丁度、校長が大学での行動班を作るという説明を終えた所だった。ソラは予め、アルフォスから聞いていたので何もわからないことは無かった。

「アルフォスからは好きに組んでいいって言われてるけど…どうしよう。」

私は人とうまく話せないし、いつもアルフォスの後ろにくっ付いていただけ。そういうグループとか決めるのも、アルフォスに頼っていた。周りは、デュエルしてから自分の強さと同じくらいの人達同士で組み始めてる。

「ねえ、その人。」

不意に、1人の男の人を連れてた女の人に声をかけられた。背は私よりは高い。黒目で青い髪の毛のセミロングで、ラフな格好の人。男の人の方は赤目の黒髪で肩辺りまで伸びていて、ツリ目。白い服にネクタイをつけていて、大人っぽい。身長も170cmくらいかな。

「へ!？」

「私とデュエルしてくれないかな? チームを組むためにあなたの実力を知りたいんだけど…。」



女の人は特に人見知りする事もなく、気楽に話しかけてくる。けれど、私はうまく返事ができずに、はいと答えただけだった。本当はアルフォスの事を伝えなきゃいけないはずなのに…。

「あなた、名前は？」

女生徒はソラのいかにもお嬢様という恰好を見ても、特に気にしていない。男子生徒は多少気にしているらしい。

「そ、ソラ…。」

「ああ、あの入学式でとても背の高い人と仲良くしていた子ね。あの人は今日、一緒じゃないの？」

「その…今日は休みなんだ…。」

「でも、チームはあの人と一緒になるつもりなんですよ？それなら私達2人と組めば丁度4人ね。デュエルで実力が合えばの話だけど。」

ソラの説明を必要とせず、この女生徒はソラがアルフォスと組むと勝手に判断していた。ソラはそれに安堵した。

「どう？デュエル、受けてくれないかな。」

「いいよ…。」

ソラはアルフォスが別れ際に置いて行った、手作りのデュエルディスクを展開した。非常にコンパクトで、カードゾーンは腕に着ける本体から右側に向かって一方的に伸びており、円柱状の金属に魔法・

罨ゾーンこそ見られるものの、モンスターカードゾーンが見受けられない。しかし、デッキをセットすると、永久機関が起動して、光線のできているモンスターカードゾーンが、骨組の先に扇状に広がって作られた。

「すごいデュエルディスクね。誰が作ったの？」

「アルフォスだよ。」

「へえ〜…まあいいわ。始めるわよ。私の名前は天原優里、よろしくね。」

「よ、よろしく。」

「『デュエル！』」

S o r a v s . Y u r i

「先攻は私ね。ドロー、私は『グリーン・ガジェット』を攻撃表示で召喚。このカードが召喚に成功したから、デッキから『レッド・ガジェット』を手札に加える。カードを2枚伏せてターンエンドよ。」

優里は初手を見て、迷うことなく最初のターンを終えた。

Y u r i

L P 4 0 0 0

H a n d : 4

F i e l d

グリーン・ガジェット A T K 1 4 0 0

魔法・罨

伏せ：2

「私のターン。」

デュエルともなると、ソラはさっきのオドオドした態度ではなくなつた。

「私はチューナー『極天将ディオメデス』を召喚！」

アルフォスはシンクロ召喚を使用していたとソラに言っていた。ソラは最初遠慮したが、ソラのデッキはシンクロ召喚をすることが前提のデッキなので、シンクロ召喚しなければ勝利は難しい。そのため、仕方なしに使うことにした。

「カードを2枚伏せてターンエンドだよ。」

ソラのフィールドには神話の英雄と伏せカードが2枚現れた。

Sora

LP4000

Hand：3

Field

極天将ディオメデス ATK1000

魔法・罫

伏せ：2

「見たこともないモンスターね。あなたがシンクロ召喚を使う噂の生徒かな。私のターン！私は『レッド・ガジェット』を召喚。効果でデッキから『イエロー・ガジェット』を手札に加える。そして手札から魔法カード『地割れ』を発動。『極天将ディオメデス』を破

壊！」

優里はやはり手札を見て考える時間が圧倒的に少ない。

「カウンター罠、『神の護封壁』！相手が発動した魔法・罠の効果  
を無効にして破壊する！そして、デッキから『アローアダイ・エピ  
アルテス』を特殊召喚！」

神話の巨人が出現し、ソラのデッキからカードが1枚飛んで、ソラ  
の手札に舞い込む。

「エピアルテスの特殊召喚に成功した時、手札に無ければデッキか  
ら『アローアダイ・オートス』を手札に加える。」

アローアダイ・エピアルテス DEF0

「私は『レッド・ガジェット』でディオメデスを攻撃！」

「く…！」

Sora LP4000 3700

「更に『グリーン・ガジェット』でエピアルテスを攻撃！」

今の一撃でソラのフィールドは全滅したが、ソラはクスツと笑った。

「罠発動、『聖魂の宿命』！このカードは自分フィールド上に存在  
する光属性モンスターが2体以上破壊されたターン、デッキ・手札・  
墓地から破壊されたモンスターを1体以上含む光属性のモンスター  
3体を特殊召喚できる！」

「なっ!？」

「私が特殊召喚するのは『極天将ディオメデス』、『アローアダイ・エピアルテス』、『アローアダイ・オートス』の3体!」

フィールド上に光が満ち、先程散って行ったモンスター2体と、新たな巨人が姿を現した。その後、満ちていた光はゆっくりと消えていく。

「……ターンエンドよ。」

Yuri

LP4000

Hand: 4

Field

グリーン・ガジェット ATK1400

レッド・ガジェット ATK1300

魔法・罫

伏せ: 2

「私のターン!」

ソラの周りに凄まじい魔力が集まって行くのが目に見えて分かる。ソラは魔力が無いため、これはソラ自身のものではない。

「レベル3の『アローアダイ・オートス』、『アローアダイ・エピアルテス』にレベル4の『極天将ディオメデス』をチューニング!遙か空の彼方に迸る神の怒り、地上に舞い降り、その力を振るえ!」

3体のモンスターの魂が天に昇り、天空が神々しい白さを見せる。集まった魔力が極限にまで高まり、天空で大爆発した。

「シンクロ召喚！！光臨せよ、『天神皇アレス』！！」

フィールドに激しい光が衝撃と共に降り注ぐ。

「な、何なの！？」

優里も驚きを隠せない。普通のシンクロ召喚ならば衝撃も何もなく、ただモンスターが召喚されるだけだ。だがソラのは違った。青銅の鎧を着込み、両手には巨大な槍を構え、狂乱の笑いと残虐な破壊の力を備えた男神が光臨した。それに呼応するかのようにこの町の大気が震える。ところが、その見た目に反して神から感じられる力は聖なるものだった。

天神皇アレス ATK3500

「天神皇…アレス？」

優里は神に気を取られていた。しかし、次の瞬間には我に返り、予め伏せていた対策の手段を発動する。優里もデュエルアカデミアの

生徒であつたので、三幻神の効果くらいは学校で少し聞いた事はあり、それと同等の存在とも言える異種の神に、平凡な畏が効くとは思っていなかった。

「でも！畏発動、『奈落の落とし穴』！！アレスの攻撃力は3500、よって破壊され、ゲームから除外！」

「破壊はできても除外はさせない！墓地の『極天将ディオメデス』の効果。このカードが墓地にある限り、自分フィールド上の幻神獣族モンスターは魔法・畏カードの効果で除外されない。」

アレスは破壊されてしまったものの、除外はされなかった。ところがソラは、切り札の1体をたった1枚の畏によつて破壊されたことに関して特に何も思っている様子はない。墓地へ送らせる事こそ、天神皇の本当の力を引き出すための条件でもあるからだ。

ソラは自らの手札をもう1度見て、次の手を考える。ソラは優里のデッキをく除去ガジェット>>と読んでおり、下手に動けば伏せカードの餌食になると思っていた。そして、その考えは決して間違いではなかった。

「…私はこれでターンエンド。このエンドフェイズ時、墓地の『天神皇アレス』の効果発動！墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時にこのカードを特殊召喚して、攻撃力・守備力を500ポイントアップする。」

「…やっぱり、神属性のカードだけあつて、除去に対して何の耐性もないわけじゃなかったか。」

Sora

LP3700

Hand : 3

Field

天神皇アレス ATK4000

「私のターン。」

優里は手札を見る。しかし、さっきまでとは違って、真剣な表情で考えている。大抵のカードの効果は覚えていたために、いざ効果を知らないカードが出てくると、下手には動けない。アレスの攻撃力は4000、一歩間違えれば一瞬でライフは0になってしまう。それに、優里はまだエンドフェイズ時に蘇生する効果以外は何もわかっていない。

「私は2体のガジェットを守備表示に変更し、『イエロー・ガジェット』を守備表示で召喚。効果でデッキから、『グリーン・ガジェット』を手札に加える。カードを2枚伏せてターンエンド。」

優里は効果を知る為に敢えてモンスターを全て守備表示に変更する事にした。1ターンの経過時間は、思考していたのにも拘らず短い。

Yuri

LP4000

Hand : 3

Field

グリーン・ガジェット DEF600

レッド・ガジェット DEF1500

イエロー・ガジェット DEF1000

魔法・罫

伏せ : 3



「私のターン！私は『天神皇アレス』の効果発動。アレスは1ターンに1度、相手モンスター1体を破壊する。『レッド・ガジェット』を破壊！ブレイクスピア！！」

アレスに怒りの矛先を向けられて睨み付けられたレッド・ガジェットは、アレスの投げた大槍に粉碎された。

「ノーコストのモンスター破壊！？」

「それだけじゃないよ。アレスは1ターンに2度の攻撃ができる。バトル！アレスで『イエロー・ガジェット』と『グリーン・ガジェット』を攻撃！ウォーエンド・スピア！」

大槍を光速で縦に振り、その真空波がガジェットを真っ二つにした。

「1ターンで3体のガジェットが全滅するなんて…。」

本来存在しないはずの神を除けば、現世で最強と謳われた三幻神でさえ、1ターンで3体のモンスターを破壊するには多少なりとも工夫が必要になる。その能力は全体的に判断すればアレスを遙かに凌駕しているが、アレスは戦闘面という一点に関して絶大な破壊力を持っている。そして天神皇は素材指定が殆どないシンクロモンスター。よって、墓地蘇生カードなどを使用しない限りは三幻神より召喚が速い。それらを全て考えれば、圧倒的速さで召喚される割に恐ろしい能力を持っている天神皇アレスは、シンクロを使用できないこの時代の人間たちにとっては脅威だ。

「バトルは終了するよ。メインフェイズ2、私は手札から『極天将カリスト』を特殊召喚する。このモンスターは自分フィールド上に幻神獣族モンスターがいる時に特殊召喚できるよ。カードを2枚伏

せてターンエンド。」

ソラは手札を1枚残して、いつものマイペースな調子を崩さずにターンエンドを宣言した。優里はソラが何を狙っているのかあまり理解できず、次に何の手を撃てばいいのかわからずに困惑していた。

Sora

LP 3700

Hand : 1

Field

天神皇アレス ATK 3500

極天将カリスト ATK 2000

魔法・畏

伏せ : 2

「私のターンね、ドロー。」

…天神皇アレスの効果は大体分かった。第一に、1度のバトルフェイズ時に2回の攻撃ができる効果。第二に相手モンスター1体をノココストで破壊する効果。そして一番厄介なのがエンドフェイズ時に墓地にいれば何度でも蘇ってくる効果。しかも攻守アップのオマケ付きで。これで全ての効果をさらけ出してくれたなら良いけど…これ以上効果があつたら厄介な事この上ないわね。それに、あの子のフィールドには神以外のもう1体のモンスターがいる。可愛い顔して恐ろしい能力を持つモンスターを平気で操るなんて…。

「私は畏カード『リビングデッドの呼び声』を発動。その効果で、墓地の『イエロー・ガジェット』を攻撃表示で特殊召喚する。本来なら効果でデッキからガジェットを手札に加えるところだけれど、私はこの効果を使用しない。」

「効果を使わないの？」

「ええ。魔法発動、『同胞の絆』！同胞の絆は1000ライフポイント払う事で、デッキから自分フィールド上に存在するモンスター1体と同じレベル・種族のモンスター2体を特殊召喚できる。攻撃と生け贄はできなくなるけどね。私は『レッド・ガジェット』『グリーン・ガジェット』の2体を特殊召喚！」

Yuri LP4000 3000

「またモンスターが3体…。」

このままターンエンドしても、次のターンにはアレスの効果とカリストの攻撃、その後のアレスの2回攻撃で終わっちゃうのに…。それにリビングゲッドの呼び声で特殊召喚したイエロー・ガジェット以外は攻撃にも生け贄にも使えない。そんな事をして一体何の意味が…？

「フフツ、その疑問の答えはこれ！魔法カード『ブレイブアタック』！このカードは自分フィールドのモンスター1体に他の攻撃表示モンスターの攻撃力を束ねるカード。その代りにエンドフェイズ時、この効果を受けたモンスターを全て破壊するわ。『グリーン・ガジェット』と『レッド・ガジェット』の攻撃力を『イエロー・ガジェット』に加算！」

イエロー・ガジェット ATK1200 3900

「足りないよ！アレスの攻撃力4000には届かない！」

更にかリストには相手のバトルフェイズ開始時に相手モンスターを選択して、そのモンスターの攻撃を封じる能力がある。1体でしか攻撃できないなら、かリストの効果で十分止められる。

「まだよ。罨カード、『エフェクトショック』！このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上のモンスター全ての効果を無効にし、その攻撃力を500ポイント下げる！」

「そんな!?!」

天神皇アレス    ATK4000    3500  
極天将かリスト    ATK2000    1500

「最後に速攻魔法『墓地封印』！手札を1枚捨てて、このターン墓地で発動するお互いの効果を無効にする。これでアレスが墓地へ行っても復活はできないわ。」

「……………!!」

「バトルよ! 『イエロー・ガジェット』で『天神皇アレス』を攻撃!!」

アレスの投げた大槍をイエロー・ガジェットが弾き、そのまま体当たりで天神皇アレスを攻撃した。耐えきれなかったアレスは地に伏した。

「くうっつっ…!!」

Sora    LP3700    3300

天神皇が倒された…。まだアルフォスだって完全に封じたことが無いのに…。

「私はこれでターンエンド。このエンドフェイズ時に『ブレイブアタック』の効果を受けた3体のガジェットは全て破壊。でも、アルスは完全に封じたわよ。」

これで戦況は私の方が圧倒的に有利になったはず。自分のフィールド上が1枚のリバースカードを残しながら空きなのは心許ないけど…仕方がないわね。

Yuri

LP3000

Hand: 0

Field

魔法・罫

伏せ: 1

「私のターン…。」

こんな方法で天神皇を封じるなんて…。墓地のディオメデスの効果で幻神獣族モンスターは魔法・罫カードの効果では除外されないし、元々モンスターの効果は受けない。例えばバウンスカードでデッキに戻されても、もう1度シンクロ召喚すれば問題ないって思ってた。

「魔法カード『天空の鐘』を発動。手札のチューナーじゃない光属性モンスター1体を墓地へ送って、デッキからカードを2枚ドロ―。私が墓地へ送るのは『極天将ディオメデス』。」

必要がなくなつた2枚目のディオメデスを墓地へ送って、ソラはデ

ツキからカードを2枚ドロ―した。

「私は伏せてあつた魔法カード『天の宿命』を発動。自分のフィールドまたは墓地に、幻神獣族モンスターか『極天将』がいれば、デツキからカードを1枚選択してデツキの一番上に置く。」

ソラはデツキを見て、最後から5番目のカードを手に取つてデツキをシャツフルした後、そのカードをデツキトップに置いた。

「そして『ミューケーナイ・イピゲネイア』を召喚！」

ソラのデツキもずっと構築が同じなわけではない。このカードは『嘆きのイピゲネイア』のほぼ上位互換のカード。今まで入れていなかったのは、ソラが昔、まだカオスの歴史改変によつて記憶を失う前に『真に呪縛が解けるまでは、呪縛を解いてくれる人が少しでも簡単に私を倒せるように』と思つての事だった。しかし呪縛が解け、記憶を失つてからは忘れていたようで、カードは先日、屋敷に引越してきた時に偶然ソラの荷物から見つけられたものだった。

「このカードの召喚に成功した時、デツキから1枚ドロ―して、それが『ミューケーナイ・オレステース』か『極天将』だったら特殊召喚ができる！それ以外なら、ドロ―したカードをデツキに戻して、ランダムにデツキからカードを手札に加える事ができる！」

「デツキトップのカード…つて事は！」

さっきのカードの効果でこの子はデツキトップを操作していた。それなら、ドロ―されるカードは必然的にあの子が狙っているカード！仮にそうでなくても、普通に1枚ドロ―で、場合によっては更なる手札交換ができる。

「ドローしたカードは『ミューケーナイ・オレステース』だから特殊召喚！」

再びソラのフィールドには、チューナーを含めた3体のモンスターが揃った。

「レベル合計は10…まさか…!?!」

「『ミューケーナイ・イピゲネシア』と『ミューケーナイ・オレステース』に『極天将カリスト』をチューニング！」

3つの光が天空に昇り、互いにぶつかり合って四散した。

「大地を照らし出す光の月を司る女神、困惑する大地の嘆きを鎮め、豊穡を齎せ…！」

一瞬、世界が光に包まれる。その後、地上から天空に向かって巨大な光の柱が出現した。

「シンク口召喚…!光臨せよ、『天神皇アルテミス』…!」

光の柱が爆発し、宝玉の埋め込まれた杖を持つ、神々しく優しい光を放つ女神がその姿を現した。

天神皇アルテミス ATK3500

「攻撃力は3500…アレスと同等ね。」

恐らくアレスと同じようにエンドフェイズ時に蘇る効果を持っているんでしょけど…。その他の効果までは同じじゃないわね。

「アルテミスの効果発動！1ターンに1度、デッキからカードを1枚ドローできる。…そろそろこのデュエルも終わりにしよっか。」

ソラは、これから発動する効果と特に関係があるわけではないが、ドローしたカードともう1枚の手札を見ながらそう言った。この2人以外でこういった手段をとってグループを作ろうとしていた生徒達は、8割がた決まっているようだった。中には記念にカラオケや昼食をしようと言って、下校を始めるグループもある。

「どうやって…。」

この伏せカードは最後の防衛手段「聖なるバリア・ミラーフォース」だ。何もしないで攻撃してくれば、1ターン私のライフが0になるのを免れる。

「アルテミスの第2の効果！1ターンに1度、相手フィールド上のカードを1枚選択して、その効果をエンドフェイズ時まで無効にする！私が無効にするのはその伏せカードだよ！」

「なっ!?!」



優里には想定外の効果だった。破壊でもされない限りはもう1ターン自分のターンを迎えると考えていて、次のターンにどう動くのかさえ考えていたはずが、全て無駄になってしまった。

「『天神皇アルテミス』のダイレクトアタック！ジャッジメント・ブレイク！！」

「きゃああああああああっ！！」

Y u r i L P 3 0 0 0 - 5 0 0

S o r a W i n

「…強いじゃない。失礼なんだけど、昨日あんなにあの背の高い人と仲良くしていて甘えていたから、デュエル自体はそんなに強くないんじゃないかって思ってた。」

「……。」

「…改めてお願いするわ。チーム組んでくれないかな？」

「…うん。」

ソラはまた黙り込む。人付き合いは苦手な方だ。優里はそれを察し、校長の名簿にチームの登録を済ませた。

「多分、話が苦手だったと思うんだけど…そうだったら無理させちゃってごめんね。」

優里は終始黙っていた男子生徒を連れて、校舎を出て下校していった。ソラはソラで、特にする事もなくなってしまったので、アルフォスにメールを送った。

『私、ちよつとだけデパートに寄ってから帰るね。』

アルフォスからの返事は1分もしないうちに帰ってきた。

『わかった。気をつけるよ。』

ソラはその後、校舎の外でレーヴェンが用意して待っていた車に乗り、町へ向かった。

その頃…

アルフォスはソラからのメールに返信すると、すぐに空間モニターを消した。この時代では空間モニターは普及どころか開発すらされていないが、春休み中に未来から持ち込んだため、アルフォスだけが使用できていた。メールや通信、ネットワークの互換性機能はこの時代に移動してから改造して取り付けたものだ。

アルフォスは今、海馬コーポレーションの前にいる。数時間前、ソラを大学に送り、屋敷に戻って間もなく、海馬から直接連絡があり、本社に来いと言われた。アルフォスはそう言われた途端にその理由がなんであるかを大体理解した。アルフォスは緊急に呼び出された仕返しなのだろうか、アーティスを剣に変えてその場で縦に1回振り、空間を切り裂く。

「受付など面倒だな。」

『全くだ。』

その空間の裂け目に入ると、裂け目が閉じ、アルフォスの進行方向に別の裂け目が出現して、そこに入る。出ると、そこは海馬コーポレーションの社長室だった。

「待っていたぞ。」

特に驚くこともなく、海馬はアルフォスに対応した。

「神の解析だろうか？」

「そうだ。これで神のカードのデータは一応バックアップを取った。これは貴様に返してやる。」

海馬はカードを1枚投げる。アルフォスはそれを2本指で挟んで受け取った。

「『四神天青龍』…。」

「この神が持つ謎の力を辿ったところ、世界中にあと3枚、同じ力を持つカードがある事が判明した。『四神天白虎』 『四神天朱雀』 『四神天玄武』 という名のカードがな。」

「…あと3枚か。Ghost of chronicleがこの4枚を使って何を企んでいるかは知らないが…。」

「そうだ。ヤツらの計画を止めるためにも、残り3枚を回収しなけ

ればならない。当然、大学はおるか、世界中のデュエリストに情報を求める。」

海馬の手の回し用は異常なほど速く、既に世界中の海馬コーポレーション支部や、ペガサスのインダストリアルイリユージョン社にも協力を仰いでいた。ペガサスに協力を仰ぐのを、一瞬だが渋ったらしい。

「当然、貴様が所持しているそのカードを取り戻しに向こうから来る事もあるだろう。」

「そんな事は分かっている。用が済んだならオレは帰るぞ。」

アルフォスは踵を返し、再び剣を振った。海馬は用が済んだのか、特に止める様子はない。なのでアルフォスも、躊躇することなく空間転移を行い、海馬コーポレーションの前に停めてあるグランドフォースに乗り、自分の家に帰って行った。

「（四神天は青龍を含め4枚…。その全てを回収できれば、Ghost of Chronicleの計画は大きくずれるか崩壊するだろう。）」

「だが、4枚もあるとわかった以上、集めるのは容易ではない。カードの名前こそわかってても、行方までは分からなかったのだからな。」

敵の勢力も全て不明。暗黒神の時の様に相手の情報が全て知れているからこそその戦略は通じない。今までで最も戦いにくい敵である事は確かだ。ましてや、それが神のカードを狙っているならソラも…。いや、ソラはオレが守ればいい。

「……。」

アルフォスはその後、屋敷に帰ったが、自室に入ると四神天青龍のカードを見ていた。窓からは昼の太陽の光が差し込んでいる。

「もう昼か。ソラが帰ってくるころだな。」

寿命が存在しないアルフォスが時間を気にするのは、ソラの為以外では絶対と言っていていいほどない。

案の定、玄関先の車の停まる音が聞こえ、ソラが帰ってきた。

「ただいまー」

「帰ってきたか。昼食は済ませたのか？」

「まだ。一緒に食べよ？」

アルフォスはソラと1階の大食堂に行った。最初の方こそ、何も食べないと拒否していたアルフォスだったが、こちらに越して来てからは一切断らずに昼食を共にしていた。大学が特殊なコースを取っていない限りは基本的に午前で終了なので、アルフォスは午後、ソラという話し相手ができて暇を潰せる事を楽しみにしており、ソラはソラでアルフォスと一緒に昼食を食べることができの喜んでるようだ。ちなみに大食堂の献立はシェフのお任せにする事もできるが、自分で注文したりできる。執事たちも頻繁に利用しているようだ。

「今日は何にするの？アルフォス。」

「ソラの好きなものでいい。」

「じゃあ今日は私もお任せ。」

「そうか。」

暗黒神を倒してからアルフォスは、自分が何のためにたった1人、生命体の概念を外れてまでこの世界に残されたのかを疑問に思っていた。その答えとなる結論を幾つか導き出したが、今のアルフォスなら『以前は失敗して失くしてしまったものを、今度は絶対に失くさない為』という結論が最も答えに近いと言っだろう。

次回へ続く。

## 第22話 行動チーム（後書き）

次回「メローア強襲！」

アルフォス「今回はソラメインの話だったな。」

ソラ「今日の最強カードはコレ」

『天神皇アレス』

レベル10 神属性 幻神獣族・シンクロノ効果 ATK3500  
DEF3500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを全てゲームから除外する。1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる。このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。このカードは相手のモンスター効果を受けない。このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを墓地から特殊召喚する。この効果によって特殊召喚に成功した時、このカードの攻撃力と守備力を500ポイントアップする。

アルフォス「シンクロ素材縛りは極めて緩い神のカード、天神皇の1体だ。」

ソラ「シンクロ召喚に成功した時に相手フィールド上の守備表示モンスターを全て除外する効果と、1ターンに1度のノーコストモンスター除去、2回攻撃の3つの戦闘向けの効果があるよ。」

アルフォス「モンスター効果を受けない上に、墓地へ送られる限りはエンドフェイズ時に何度でも復活し、そのたび攻撃力・守備力は4000になる。」

カオス「総じて、シンクロモンスターであることも含め非常に強力な神だ。」

ソラ「一度召喚しておけば、大体有利になると思うよ。」

アルフォス「ではまたな。」

今回は珍しくソラメインになりました。アルフォスは自宅待機を通告されているのでアルフォスメインで書いても仕方がないですし…。



## 第23話 メローア強襲！！ 前編（前書き）

この話は前後編に分けました。前置きが長くなったからです。

### 最近の出来事

カード1枚にサイフポイントがガリガリ削られていく絶望…そして  
デッキが完成する希望…。

## 第23話 メローア強襲！！ 前編

「……良い天気だな。」

アルフォスが窓の外を見て呟いた。現在時刻は午前9時、ソラは既に大学に行った後だった。ソラという話し相手がいなくなったアルフォスには暇しか残されていない。執事は敬語しか使ってこないから話しくいし、一人でシュミレーションデュエルなどしてもつまらない。結局、アルフォスはソラがいなくなつて寂しいのだ。カオスはまだ眠っていて、話し相手にはならない。

「暇だ。」

ここまで暇を持て余したのも久々だろうな。前はいつだったろうか。遠い昔の事なので、もう思い出すに思い出せない。その場所も、なぜ暇を持て余していたのかすら記憶に残っていない。

アルフォスはただ、部屋の中から窓際に立ち、ボーっと天空を見つめる。

部屋の隅には、記憶を失う前にいた仲間が使っていたであろう机と椅子。キングサイズのベッドの横には小さい椅子が置いてある。その机の上には、アルフォスが調整していたのだろう。新しいデッキが1つ置かれていた。真剣勝負でも、命を賭けた危険なデュエルでも、同じデッキばかり使っていては、いつかは勝てなくなるし、ワンプターンでつまらない。そう思ったアルフォスは、新たに1つのデッキを作った。その試行錯誤に昨日は7時間以上費やしてしまい、結局ソラと一緒に寝ようという誘いを断ってしまった。そのせいもあってか、ソラは今朝、微妙に不機嫌だった。

その寂しさに呼応するかのようには、窓から心地いい風が廊下に向か

って吹き抜けていく。アルフォスは風に当たろうとも、心地いいと思うどころか、何も感じていないが。

「アルフォス様、いつものコーヒーを置いておきますね。」

気を遣ったローヴァンがコーヒーを淹れて、アルフォスとソラの部屋の前にある台に、下請け皿ごと置いて行った。アルフォスはその湯気を暫く見つめていたが、コーヒーを手に取って飲み始めた。

「苦いな。」

砂糖が入っていないのだろうか。砂糖などの加減はその日その日で任せているから、毎日変わる。しかし、砂糖が入っていないというのはあまりない。別に砂糖が欲しいわけじゃない。

コーヒーを飲み終えたアルフォスは、少し散歩でもしようかと、異常なまでに広い庭に出る。庭は飛行機が3機入っても、まだ少し余るくらいの広さはある。元々山だった土地を平らにしたのだから、何らおかしい事でもない。

こちらに越して来てから、アルフォスの服装は前を閉められない黒のロングコートと服、長ズボンになっている。ただ、ズボンと靴が直接繋がっている時点で、時代によってはアンドロイドなんじゃないかと疑う科学者はいるだろう。そのロングコートの内ポケットから、アルフォスはカードを1枚取り出した。最近気になってやまない『四神天青龍』のカードだ。ここ最近は何も肌身離さず持っている。気に入ったわけでもなければ使うわけでもない。ただGhost of chronicleの刺客に盗まれるのを防ぐためだ。

「……………」

前回の刺客が来てから、もう大分時間が経つ。そろそろこのカード

を取り返しに来てもいい頃だとは思っているが…いつまで経っても来る様子はない。かといって、こちらから動くこうにも相手は時空を自由自在に移動するだけの力を持つ集団。それをこちらから仕留めに行くなど、あまりにも無謀。

庭を出て、それでもまだ自分の敷地の森の中を歩きながら、アルフォスはそう考えていた。

「…ん？」

さっきまでの森の雰囲気、静かで穏やかなものから、急に嫌なものに変わった。虫の知らせのようだ。そして、突如アルフォスの眼の前から真空の刃が飛んできて、アルフォスを襲う。

「フン…。」

アルフォスは慌てる事もなく、片腕で真空の刃を受け止める。受け止めた腕に傷は一切ない。その後、更に2発飛んできたが、周りの木々を切ったのみで、アルフォスには当たらなかった。

「何者だ？」

誰もいない前方に向かって、アルフォスはそう言った。当然だが、返事は返ってこない。しかし、カードが1枚飛んできた。アルフォスはそれを掴んで、何のカードなのか確認する。

「『青天龍』…。」

このカードには見覚えがある。いや、ついこの前、このカードを使う人間とデュエルしたばかりだ。しかもその持ち主は、四神天を操っていた。…ヤツだ。

「来いと言っているのか。」

この先には湖がある。極めて透明度が高く、透き通った綺麗な湖だ。アルフォスは四神天青龍を持つているのを確認すると、その湖に向かって歩き出した。距離は200m位だろう。

森がざわめく。まるで、アルフォスに行くなと警告しているかのようだ。しかしアルフォスは、その警告を気に留めることなく進む。道が開けて、ついに湖が姿を現した。その湖を背に、1人の男が立っていた。

「やはり貴様か、メローア。」

アルフォスは拾った青天龍をメローアに向かって投げる。メローアはそれを2本の指で挟み掴むと、自分のコートの裏にあるデッキホルダに入れた。

「四神天を返してもらおうか。」

メローアはデュエルディスクを起動し、デッキをセットした。アルフォスはディスクを持っていないが、メローアに向き合った。その手に5枚のカードが現れる。

「オレだけ賭けるのも不公平な話だな。オレが勝利した場合には貴様のエクストラデッキを貰おうか。」

「デュエル！」

Ulfocevs・Meroa

「わたしの先攻。わたしはレベル10の『青龍の宣告者』を手札から特殊召喚する。」

メローアのフィールド上に、背丈よりも長い杖を持ち、全身をローブに包んだ魔導師が現れた。メローアの使用する人型のモンスターは、いずれもローブなどに身を包んで顔が見えないらしい。

青龍の宣告者 ATK3000

「レベル10のモンスターを特殊召喚だ……。」

「このモンスターは自分の墓地にカードが無い時のみ、手札から特殊召喚する事ができる。その場合、レベルと攻撃力は半分になるがな。」

青龍の宣告者 LV10 5 ATK3000 1500

「わたしはチューナー『青天の従者』を召喚。『青龍の宣告者』に『青天の従者』をチューニング！神託に従いし大いなる龍よ、神に代わり裁きを下せ！シンクロ召喚！」

メローアのフィールドに、青い雷が降り注ぐ。

「出でよ、『蒼雷龍』！」

その雷が、巨大な龍を形作り具現化した。翼と非常に長い体を持ち、凄まじい雷のエネルギーを纏っている青い龍だ。

蒼雷龍 ATK2800

『蒼雷龍』

レベル9 水属性 雷族・シンクロ/効果 ATK/2800 D  
EF/3000

水属性チューナー+チューナー以外の水属性モンスター1体

このカードはフィールド上に存在する限り、ドラゴン族としても扱う。このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに自分の墓地に存在する水属性モンスター1体をデッキに戻す。また、相手が魔法・罫・効果モンスターの効果を発動した時、自分の墓地に存在する水属性モンスター1体をデッキに戻す事で、その効果を無効にする。自分の墓地に水属性モンスターが存在しない場合、このカードは破壊される。このカードが破壊された時、デッキからレベル10の水属性モンスター2体を自分フィールド上に特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効になり、攻撃できない。

「この龍は…。」

青天龍と同じ類の龍か？攻撃力は2800…低くはない。

「カードを1枚伏せ、わたしはターンエンドだ。」

Mer oa

LP8000

Hand: 3

Field

蒼雷龍 ATK2800

魔法・罫

伏せ:1

「オレのターン。」

1ターン目からレベル9の強力なシンクロモンスターを召喚したか。だが、オレの前でそのようなもの、無駄なだけだ。

「魔法発動、『ブラック・ホール』！フィールド上のモンスターカードを全て破壊する。消えろ、『蒼雷龍』！」

空中に巨大な黒い重力場が出現し、蒼雷龍を飲み込もうとする。ところが、蒼雷龍は口から雷をブラック・ホールに向けて放ち、それを消滅させた。

「『ブラック・ホール』が消えた！？」

アルフォスが一瞬だが、目を見開いて驚いた。

「『蒼雷龍』の効果が起動したのだ。わたし墓地の水属性モンスターをデッキに戻す事で、相手の魔法・罫・モンスター効果を無効にする。」

「そついう事か。」

つまり、シンクロ召喚に成功した時点から数えて、最低でも2回効果を発動できる。更にターンを重ねれば重ねるほど、水属性モンスターが墓地へ送られれば、その分だけ相手の動きを封じられるのか。長期戦には強いな。

今のブラック・ホールでヤツの墓地には水属性モンスターが残り1体。だから無効にできるのは後1回ということになる。



「オレは手札から『炎熱伝導場』発動。デッキから『ラヴァール』2体を墓地へ送る。さあどうする?」

このデッキは昨日試行錯誤していたデッキの1つ。連続シンクロを狙うラヴァールを中心にしたデッキだ。…ちなみに多少の改造はしたが、デッキはソラから貰った。その代わりにX-セイバーデッキをソラに持たせ、これで交換と言うことにしてもらった。

「…送るがいい。」

「オレは『ラヴァール・ランスロット』と『ラヴァール炎火山の侍女』を墓地へ送る。更に、墓地へ送られた侍女の効果で、デッキから2枚目、3枚目の侍女を墓地へ送り、最後の侍女の効果で『ラヴァール炎湖畔の淑女』を墓地へ送る。」

ラヴァール炎火山の侍女は墓地へ送られた時、墓地に他のラヴァールがいれば更にデッキからラヴァールモンスターを墓地へ送る事ができる。これによって、炎熱伝導場で最大5枚のデッキ圧縮が可能になる。

「ラヴァールデッキか。冷酷な見た目に反して炎属性デッキとはな。」

「生憎このデッキのカードは元々オレの物ではないのでな。」

ソラの容姿なら、炎属性のデッキも合っただろうな。尤も、ラヴァールはそのソラが天神皇以外にオレと出会う前に、スターダストドラゴンノバスターと共に使っていたらしいデッキだが…。

「何?」

「オレは手札から『真炎の爆発』を発動。墓地から守備力200の炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚し、エンドフェイズ時に除外する！」

「何だと…！」

ここで無効にしたら蒼雷龍は破壊されてしまう…。2ターン目で破壊させるのはまだ早い。ここは召喚させるべきだな。

「…フン、特殊召喚するがいい。」

「オレは墓地から『ラヴァル炎火山の侍女』3体と『ラヴァル・ランスロット』、『ラヴァル炎湖畔の淑女』の5体を特殊召喚する。」

アルフォスの鋭い視線が蒼雷龍を捉えた。

「『ラヴァル・ランスロット』に『ラヴァル炎火山の侍女』をチューニング。シンクロ召喚、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！破壊効果は使用しない。」

ヤツの伏せカードは気になるが、ここで攻めなければまたヤツの墓地に水属性モンスターが増えるだけだ。蒼雷龍はこのターンで倒す。

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』に『ラヴァル炎火山の侍女』をチューニング。シンクロ召喚、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』。極め付けた。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に『ラヴァル炎火山の侍女』と『ラヴァル炎湖畔の淑女』をダブルチューニング！シンクロ召喚。『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』！」

強力なパワーと効果を兼ね備えた、紅蓮の悪魔竜が現れた。その効

果はメローアも当然知っている。アルフォスはデュエル開始時から依然、まるで感情を持たない機械の様に冷静沈着のままだ。それに反して、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンのシンクロ召喚の衝撃で湖が激しく波を打つ。

「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃力はオレの墓地のチューナー1体につき500ポイントアップする。墓地のチューナーは4体、よって攻撃力は5500になる。」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン    ATK 3500    5500

「バトルだ！『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』で『蒼雷龍』を攻撃。バーニング・ソウル！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが炎を纏って、巨大な龍に突進する。しかし、その途中で蒼雷龍が守りの態勢に入った。

「カウンター罠、『青龍の加護』。自分フィールド上に存在する水属性モンスターが攻撃または効果の対象になった時、手札を2枚捨てる事でそれを無効にして、対象になったモンスターを守備表示にする。わたしは手札の『青龍の巫女』と『青龍兵』を墓地へ送り、『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃を無効にし、『蒼雷龍』を守備表示に変更。」

「チツ、ターンエンド。」

余計に水属性モンスターが墓地に送られてしまったか。これでメローアの墓地に水属性モンスターは3体：オレの効果をも3回まで無効にできる。それも、次のメローアのターンで、更に水属性モンスターが墓地へ送られればその分だけ無効にされる数が増える…。だが

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は5500、そう簡単にはフィールドを離れることは無い。それでも蒼雷龍を倒せなかったのは痛手だな。

Ulforce

LP8000

Hand: 3

Field

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK5500

「わたしのターン。」

アルフォスのフィールドにはスカーレット・ノヴァ・ドラゴン1体のみ。対して、メローアのフィールドには蒼雷龍が1体のみ。攻撃力ならばスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの方が遙かに上だが、蒼雷龍は1ターンに1度であるが戦闘で破壊されず、魔法・畏・モンスター効果を無効にできる。状況は圧倒的にメローアの有利。しかし今のメローアの手札には、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンを退けるカードは無かった。

「…わたしは墓地の『青龍の加護』の効果を発動。このカードを除外し、デッキからカードを1枚ドロウする。」

…このドロウでもスカーレット・ノヴァ・ドラゴンを倒せるカードは引けなかったか。まあいい。まだ蒼雷龍は3回まで効果を無効にできるからな。

「ターンエンド。」

Meropa  
LP8000  
Hand: 3  
Field  
蒼雷龍 DEF3000

「オレのターン。」

メローアがカードをドロリただけでターンエンドを宣言するのは、アルフォスの予想通りだった。何故なら蒼雷龍は高レベルのシンクロモンスター。アクセルシンクロの素材にもできないレベルの上、青龍の加護の追加効果こそ予想外だったが、メローアの手札は3枚だ。そんな中で、新たにシンクロモンスターを召喚するだけの手札が揃うとは思っていなかった。だが、それはアルフォスと同じ事。効果で蒼雷龍を倒すだけの手札は揃っていない。

「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃！バーニング・ソウル！」

「『蒼雷龍』の効果発動！墓地から『青龍の巫女』をデッキに戻し、戦闘での破壊を免れる！」

「何!?!」

戦闘破壊耐性まで兼ね備えているのか。だがその耐性を発揮するには、やはり水属性モンスターをデッキに戻す必要がある。ならスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃で、1ターンに1体削る事はで

きるな。

「…オレはモンスターを伏せ、ターンエンド。」

U l f o c e

L P 8 0 0 0

H a n d : 3

F i e l d

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン    A T K 5 5 0 0

伏せ：1

「わたしのターン。わたしは『青龍將軍』を攻撃表示で召喚。」

大槍を構え、他の青龍モンスターと比べて強力そうな青年が現れた。

青龍將軍    A T K 1 8 0 0

「『青龍將軍』の効果発動。デッキの上からカードを3枚墓地へ送る。但し、この効果で水属性モンスターが墓地へ送られなかった場合、わたしは手札を全て墓地へ捨てる。」

メローアはデッキの上から3枚を引き、それを公開して墓地へ送った。送られたのは青龍兵と青龍の巫女、青龍將軍の3枚だった。

「『青龍將軍』はこの効果を発動した場合破壊される。」

「面倒な…！」

これでヤツの墓地には水属性モンスターが6体。だから魔法・罫・モンスター効果及び戦闘破壊を無効にするのは計6回ということになる。

「わたしはカードを1枚伏せ、『蒼雷龍』を攻撃表示に変更。貴様の裏側表示モンスターを攻撃する。雷槍撃！」

蒼雷龍が手に雷の大槍を創り出し、アルフォスの裏側表示モンスターを貫こうとする。しかし、アルフォスの狙いは当然、蒼雷龍を攻撃表示にする事だった。

「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の効果発動！エンドフェイズ時まで除外し、相手モンスターの攻撃を無効にする。」

このくらいで無効にしてくるとは思っていない。無効にしてくれればしてくれたで好都合だし、無効にしなければこちらのモンスターが破壊され、更にラヴァルモンスターが墓地へ送られるだけの事だ。

「『蒼雷龍』の効果により、わたしの墓地から『青龍兵』をデッキに戻して『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の効果は無効にする！攻撃は続行、裏側表示モンスターを撃破する。」

「だがこれで、貴様の墓地から水属性モンスターが1体減った。そして貴様が破壊したのは『ラヴァルのマグマ砲兵』、特別強力な効果を持っていたわけでもない。」

「…ターンエンド。」

Merora

LP8000

Hand: 3

Field

蒼雷龍 ATK2800

魔法・畏

伏せ: 1

「オレのターン！オレは『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』で『蒼雷龍』を攻撃！バーニング・ソウル！」

「畏カード発動、『青天の霹靂』！相手が攻撃を宣言した時、対象モンスターの攻撃力が攻撃モンスターの攻撃力を1000以上回っている場合、その攻撃によって発生する戦闘ダメージを0にし、攻撃モンスターを破壊する。更に『蒼雷龍』は墓地から『青天の巫女』をデッキに戻し、戦闘での破壊を免れる。」

突然の雷がスカーレット・ノヴァ・ドラゴンを襲ったが、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンはそれをものともせず、軽く弾いた。

「バトル終了。」

青天の霹靂…あの程度の効果では既存のカードの完全下位互換にしかならない。となれば、当然何らかの追加効果を備えていると考えべきだ。追加効果にもよるが、万が一スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが除去された時のためだ。

「カードを2枚伏せ、オレはこれでターンエンド。」

「この瞬間、墓地の『青天の霹靂』の効果を発動する。」



「エンドフェイズ時に効果発動だと!？」

「このカードは墓地に存在する場合、エンドフェイズ時に墓地から水属性モンスター1体をデッキに戻す事で、手札に戻す事ができる。わたしは『青龍將軍』をデッキに戻し、このカードを手札に戻す。」

「スカレット・ノヴァ・ドラゴンが除去されなかっただけ良しとしよう。だがあの罫、蒼雷龍との相性は悪い。両方を発動させていけば、水属性モンスターが途切れるのは時間の問題だな。残りの水属性モンスターは3体、どうにもならない程ではない。」

U l f o c e

L P 8 0 0 0

H a n d : 2

F i e l d

スカレット・ノヴァ・ドラゴン    A T K 5 5 0 0

魔法・罫

伏せ：2

「わたしのターン。カードを1枚伏せ、わたしは手札から『青龍の恩恵』を発動する。このカードは全ての手札をデッキに戻し、デッキからカードを5枚ドロウする。」

メローアは残り2枚の手札を全てデッキに戻し、デッキをシャッフルすると新たにカードを5枚引いた。ここまでのデュエルはまだ冷戦状態と言っている。だが、ここでメローアが動き出す。

「わたしは魔法カード『水雷の鉄槌』を発動。このターンのみ、『蒼雷龍』の攻撃力を『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』と同じにする！」

大気を震わせながら、蒼雷龍に雷と水のエネルギーが吸収されていく。

蒼雷龍 ATK2800 5500

「『蒼雷龍』で『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃！雷撃撃！」

「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』の効果発動。エンドフェイズ時まで除外し、相手の攻撃を無効にする。」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは自らを炎に包んで、この次元から消えようとする。しかし、蒼雷龍が放った水のプレス攻撃で、炎がかき消された。

「『蒼雷龍』の効果によって、墓地から『青龍將軍』をデッキに戻し、その効果を無効にする。」

そのまま蒼雷龍の雷の槍がスカーレット・ノヴァ・ドラゴンを貫こうとして飛んでいくが、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは攻撃態勢になり、灼熱の炎を吐いた。2つの攻撃が互いにぶつかり、大爆発した。

「くっ…攻撃力は互角…だが。」

蒼雷龍には戦闘耐性が備わっている。よって破壊されるのはアルフ

オスのスカーレット・ノヴァ・ドラゴンだけだった。それでも、メローアの墓地の水属性モンスターは残り1体。アルフォスがあと1回だけ蒼雷龍以上の攻撃力で攻撃を仕掛けるか、メローアに多大な被害を及ぼす効果のカードを発動すれば、メローアの墓地の水属性モンスターは尽きる。

「『蒼雷龍』の効果によって、墓地から『青天の従者』をデッキに戻し、戦闘での破壊を免れる。よって破壊されるのは貴様の『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』だけだ。『水雷の鉄槌』を使用したターン、わたしはモンスターの召喚と新たなカードの発動はできない。カードを1枚伏せてターンエンド。」

Mer oa

LP8000

Hand: 3

Field

蒼雷龍 ATK2800

魔法・罫

伏せ: 1

「オレのターン！」

オレのフィールドにモンスターは無い。しかし、これで残りの水属性モンスターは1体。このターンで確実に葬る事ができる。

「オレは魔法カード『死者蘇生』を発動。オレの墓地から『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』を復活させる！」

「そうはさせん、『蒼雷龍』の効果発動！墓地から水属性モンスター1体をデッキに戻し、相手のカード効果を無効にする。」

アルフォスの死者蘇生は、雷に打たれて消え去った。その次の瞬間、蒼雷龍の体に罅が入り始めた。

「ん!？」

「『蒼雷龍』の効果。：墓地に水属性モンスターが存在しなくなった時、このカード破壊する。」

最後には、無残にも砕かれてしまった。

「ほう、わざわざ破壊する手間が省けたな。」

「それはどうかな?『蒼雷龍』が破壊された時、自分のデッキからレベル10の水属性モンスター2体を選択し、モンスター効果を無効にして特殊召喚する。来い、『青龍の宣告者』!『青天の警告者』!」

全身をローブに包んだ魔術師が2人現れた。片方は雷の模様をかたどった杖を、もう片方は水の宝玉を埋め込んだ杖を持っている。

青龍の宣告者 ATK3000

青天の警告者 ATK3000

「攻撃力3000のモンスターが2体:。」

しかし効果は無効になっている上に、レベル10の最上級モンスター1。シンクロ素材にも使用できるわけがない。一体何を狙っている

…。まあいい、蒼雷龍を葬っただけでもオレの優勢に変わらない。

「魔法発動、『真炎の爆発』。墓地から『ラヴァルのマグマ砲兵』  
『ラヴァル・ランスロット』、『ラヴァル炎火山の侍女』3体を特殊  
召喚。『ラヴァルのマグマ砲兵』に『ラヴァル炎火山の侍女』をチ  
ューニング。シンクロ召喚、『TGハイパー・ライブリアン』！」  
眼鏡をかけ、本を持ったモンスターが現れた。シンクロ召喚を行う  
デッキにやら殆ど投入されているだろうから、メローアもライブラ  
リアンを見た途端に反応を見せた。

「ライブリアン…！」

「効果は知っているようだ。オレは『フレムベル・ヘルドッグ』  
を召喚。ヘルドッグに侍女をチューニング。シンクロ召喚、『A・  
O・Jカタストル』！ライブリアンの効果により、モンスターが  
シンクロ召喚された場合、オレはカードを1枚ドロウする。」

アルフォスの手に新たにカードが1枚現れた。アルフォスはそのカ  
ードをそのまま目の前に投げる。カードはすぐに空中で止まり、モ  
ンスターが現れた。

「このカードは自分フィールドにチューナーがいる時、手札から特  
殊召喚できる。『ブースト・ウォリアー』を特殊召喚。『ブースト・  
ウォリアー』に侍女をチューニング。シンクロ召喚！来い、シンク  
ロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』！」

レーシングカーのような形をしたモンスターがアルフォスのフィー  
ルドに現れる。ライブリアンと合わせて、シンクロ召喚成功時に  
カードを1枚ドロウする効果がある為、アルフォスの手札に更にカ

ードが2枚現れた。そして、フォーミュラ・シンクロンが2つの黄金の輪に変化し、ライブラリアンとカタストルがその輪の中に入った。

「『A・O・Jカタストル』『TGハイパー・ライブラリアン』に『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング。」

アルフォスはアルフォスで自分専用のデルタアクセルシンクロモンスターを持っているが、シンクロ素材制限によってそれを召喚する事は出来なかった為、今は妥協する事にした。妥協と言っても、デルタアクセルシンクロよりそのランクは高い位置に存在するが。

「リミットオーバーアクセルシンクロ！！出だよ、『シューティング・クエーサー・ドラゴン』！！」

現れたのは神々しい光を放つ巨大な白いドラゴン。非常に長い角と翼、鋭い5本指を持ち、足は指が無く、刺突用の大槍の様に先近づくほど段々と丸みを帯びて細くなっている。

シューティング・クエーサー・ドラゴン    ATK4000

「カウンター罠オープン、『青龍の託宣』！このターン相手モンスターは攻撃できず、効果を発動する事も出来ない。」

「チツ…ターンエンド。」

ここまで互いにダメージを受けていない。そしてこのフィールド状況…明らかに先手を取った方が有利となる。その状況でシューティング・クエーサー・ドラゴンを召喚した今、これを突破するのは容易な事ではないはずだ。

U l f o c e

L P 8 0 0 0

H a n d : 2

F i e l d

シューティング・クエーサー・ドラゴン    A T K 4 0 0 0

魔法・罫

伏せ：2

「わたしのターン。どうやら序章は終わったようだな。わたしは自分フィールド上にレベル10のモンスターが2体存在する事によって、手札からレベル10の『蒼雷の預言者』を特殊召喚する。」

蒼雷の預言者    A T K 3 0 0 0

「だが3体いても全て攻撃力は3000、『シューティング・クエーサー・ドラゴン』に及ばない。」

「いや…ここからが本番だ。わたしはレベル10のモンスター3体をオーバーレイ…！3体のモンスターによってオーバーレイ・ネットワークを構築。」

「何だと!?!」

この召喚方法はまだこの次元では存在していないはず…!

「エクシーズ召喚!出でよ、『闇黒青龍』…!」

天空から1つの巨大な黒い球が舞い降りてきた。その黒い球が、見えのある龍の形に変わる。

「なんだ…これは…黒い『四神天青龍』…?」

黒い球が成した龍の形は、全身が闇のエネルギーでできた四神天青龍だった。その周りに、青い色の球体が3つ飛び回っている。

闇黒青龍 ATK4000

「アルフォス、神のカードは返してもらおうぞ。」

後編へ続く。



第23話 メローア強襲!! 前編(後書き)

次回「メローア強襲!!」 後編

アルフォス「なぜラヴァルなんだ。」

カオス「実はソラの初期設定では真紅の髪。炎使いのイメージということでラヴァルとフレムベルの混合デッキで行こうと思っていたらしい。しかしそれでは毎回毎回、爆発クエーサーで終わるからやめたんだと。」

アルフォス「それでオレに回ってきたわけか。フレムベルで投入されているのはカウンターとヘルドッグだけのようだが…?」

カオス「言うな。」

アルフォス「じゃあオレが寂しがりやな感じにされているのはなぜだ。」

カオス「実際そうだろうか?」

アルフォス「……………」

ソラ「今日の最強カードはコレ!」

『蒼雷龍』

レベル9 水属性 雷族・シンクロ/効果 ATK/2800 D

EF/3000

水属性チューナー+チューナー以外の水属性モンスター1体

このカードはフィールド上に存在する限り、ドラゴン族としても扱う。このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに自分の墓地に存在する水属性モンスター1体をデッキに戻す。また、相手が魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時、自分の墓地に存在する水属性モンスター1体をデッキに戻す事で、その効果を無効にする。自分の墓地に水属性モンスターが存在しない場合、このカードは破壊される。このカードが破壊された時、デッキからレベル10の水属性モンスター2体を自分フィールド上に特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効になり、攻撃できない。

ソラ「ライフは削れなかったけど、アルフォスを追い詰めたメモリアのエースカードだね。ドラゴン族として扱うのって意味あるの？」

アルフォス「さあ？」

ソラ「それになんとか黒い青龍が出てきたけど、アルフォス大丈夫かなあ…？」

カオス「負けて闇逝き決定だな。」

ソラ「そんな…。」

アルフォス「いや、そんな冗談を本気にして泣くな。オレのライフはまだ8000だし、ここにいるだろう？」

ソラ「うん…。」

アルフォス「もう少しお前の力を借りるぞ、ソラ。」

ソラ」「うんーじゃあまた次回。とーびーこんでいにゅーど」

第23話 メローア強襲！！ 後編（前書き）

後編です。

最近の出来事

もう10月も終わりですね。だんだん寒くなってきました。今年の冬は去年よりもずっと寒いそうです。

## 第23話 メロリア強襲！！ 後編

Turn Player: Meroa

LP 8000

Hand: 3

Field

闇黒青龍 ATK4000

Ulfoce

LP 8000

Hand: 2

Field

シューティング・クエーサー・ドラゴン ATK4000

魔法・罫

伏せ: 2

「闇黒青龍。」

アルフォスの目の前には、真っ黒な四神天青龍が浮遊している。それが現れた次の瞬間くらいから、周りの空気が嫌なものに変わっていくのがわかった。それどころか、澄んだ湖の水が黒くなり、周りの木々が枯れ始めた。

「湖が…黒く…。」

黒い四神天青龍…闇黒青龍の周りから、闇の瘴気が流れ出していくのがわかる。木々を枯らせているのも、湖の水を黒く変えているの

も、この闇の瘴気に他ならない。

「四神天青龍は水を司る神聖な力を持つ神のカード。それが暗黒の力を得て闇黒青龍になるのだ。水の恩恵をもたらす神が闇に染まれば水も闇に染まり、水の恩恵を受けている者達もただでは済まない。」

メローアはそう言うが、やはり完璧に具現化しているわけではない為、木々が枯れていく範囲はそう広くなかった。ソリッドビジョンである以上、闇黒青龍を倒せば枯れた木々は生命力を取り戻すことができるだろう。逆に言えば、もしもこのデュエルで闇黒青龍を倒せなかった場合、枯れた木々や黒く染まった湖はそのままと言う事になる。アルフォスも、自分の庭を穢されて、その原因を逃がすつもりなどない。

「バトルだ。」

メローアがバトルを宣言した瞬間、闇黒青龍が咆哮を上げる。四神天青龍の時と同じように、周りの大気が震えた。しかし、今度は待機だけでなく、心なしか山全体が闇黒青龍に対して恐怖しているかのようだ。

「『闇黒青龍』で『シューティング・クエーサー・ドラゴン』を攻撃。闇黒爪撃！！」

闇の瘴気を纏った巨大な爪がシューティング・クエーサー・ドラゴンを襲う。シューティング・クエーサー・ドラゴンは手に光の力を集めて、巨大なエネルギー光線として放った。しかし、互いの攻撃が衝突する前に消えた。

「何!？」

アルフォスはなにも発動していない。なぜ攻撃が消えたのかわからず驚いた。

「『闇黒青龍』の効果だ。このカードのオーバーレイユニット…つまりエクシース素材を取り除き、バトルを終了する事で、相手に4000ポイントのダメージを与える。」

アルフォスは咄嗟に闇黒青龍を見た。周りの飛んでいた3つの光の内1つが消えている。そして、闇黒青龍がブレス攻撃のチャージをしていた。

「させん!『シユートイニング・クエーサー・ドラゴン』の効果発動、1ターンに1度、魔法・罫・モンスター効果を無効にして破壊する!」

シユートイニング・クエーサー・ドラゴンは再びその手に光のエネルギーを集める。闇黒青龍が闇のブレスをアルフォスに向かって吐きだし、シユートイニング・クエーサー・ドラゴンはそのブレスに向かって光の光線を照射した。今度は互いの攻撃が衝突して爆発したが、どちらのモンスターも破壊されていない。本来、効果が無効にされれば攻撃は続行されるところだが、闇黒青龍はシユートイニング・クエーサー・ドラゴンの効果を受けておきながら破壊されておらず、更に続行されるべき攻撃も止まった。

「『闇黒青龍』のバトル終了効果はコストか。そしてカード効果では破壊されないらしいな。」

「しこ名答。『闇黒青龍』はカード効果に対して破壊耐性がある。」

『闇黒青龍』

ランク10 闇属性 ドラゴン族・エクシーズ/効果 ATK/4000 DEF/4000  
レベル10モンスター×3

このカードはカードの効果では破壊されない。モンスターの攻撃宣言時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、バトルフェイズを終了する事で、相手ライフに4000ポイントダメージを与える。このカードがエクシーズ素材の無い状態で戦闘を行う場合、戦闘を行う相手モンスターの効果を無効にする。このカードがフィールド上を離れた時、デッキ・手札・墓地からレベル4以下のチューナー1体とチューナー以外のモンスター2体を攻撃表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたモンスターはこのターンカードの効果を受けず、戦闘では破壊されない。このカードのエクシーズ召喚が無効にされた場合、自分は手札を全てデッキに戻す。その後、デッキからカードを5枚選択して手札に加える。

「わたしは手札から魔法カード『エクシーズ・キャプチャ』を発動する。このターン失われたオーバレイユニットを全て復活し、デッキからカードを2枚ドロウする。カードを1枚伏せてターンエンド。」

Mer oa

LP8000

Hand: 3

Field

闇黒青龍 ATK4000



魔法・罾

伏せ：1

「オレのターン。」

アルフォスは手札を見る。先程までの蒼雷龍が存在した時ほど、自分の行動を制限されているわけではない。しかし、破壊を常套手段とするこのデッキにとって、闇黒青龍の破壊耐性は厄介なものだった。お互いのフィールド上にはそれぞれのエースモンスター。どちらも攻撃力は4000ポイントで、戦闘を行えば相打ちになる。だが、闇黒青龍は自身の効果によりバトルを終了して4000ダメージを与える。それがわかっているアルフォスは、メローアの伏せカードの事も含めて安易に動く事ができなくなっていた。そこでアルフォスは手札にはなくとも、墓地にはメローアの伏せカードを破壊する手段がある事を思い出した。

「墓地の『ラヴァル炎湖畔の淑女』の効果を発動させる。墓地のこのカードと『ラヴァル・ランスロッド』を除外し、貴様の伏せカードを破壊！」

アルフォスの目の前に次元の裂け目が現れ、そこから炎がメローアの伏せカードに向かって放射された。だが、メローアはその伏せカードを表に返した。

「罾発動、『エフェクトショック』！このターン相手モンスター全ての効果を無効にし、攻撃力を500ポイント下げる。」

その罾は、前にソラが優里とデュエルした時に、優里が使っていた物でもあった。メローアもその有用性からか採用していたようだ。

アルフォスはソラのデュエルの内容までは聞いておらず、このカードの効果を知らなかった。

「チツッ。」

雷がシューティング・クエーサー・ドラゴンを襲った。アルフォスは無効にしたところで無駄な事がわかっているので、シューティング・クエーサー・ドラゴンの効果を発動しなかった。

シューティング・クエーサー・ドラゴン    ATK4000    3500

「オレはこのターン、他に何もせずターンエンド。」

アルフォスは闇のデュエル開始時に大学の同じチームメイトに強制的に送られる非常用の連絡携帯を持っているが、その電源と位置特定機能の電源をOFFにしている。ONにしていれば、とくに大学全体にGhost of chronicleの出現が知れ渡り、応援が来ていてもおかしくない時間なのだ。何故OFFにしているのかと言えば、それはアルフォス自身のプライドと、今回襲撃してきた相手がメローアだったからと答えるだろう。

Ulfoce

LP8000

Hand: 3

Field

シューティング・クエーサー・ドラゴン    ATK4000

魔法・罫

伏せ: 2

「わたしのターン。わたしは『青龍の代行者』を召喚。このカードの召喚に成功した時、自分フィールド上に『青龍』と名のつくモンスターが存在する場合、相手フィールド上のカードを1枚破壊する。『シユールディング・クエーサー・ドラゴン』を破壊！」

魔法陣がシユールディング・クエーサー・ドラゴンの下に描かれ、封印しようとする。だが、シユールディング・クエーサー・ドラゴンは光の障壁を作り、魔法陣を弾いた。

「『シユールディング・クエーサー・ドラゴン』は1ターンに1度、相手の魔法・罫・モンスター効果を無効にして破壊する。」

しかし、アルフォスはこれが何を意味するのか分かっている。神の一撃を直接その身に受ければ、無事では済まないのもわかっている。だがアルフォスは、当然それをまともに食らおうなどと思っていない。

「バトル。『闇黒青龍』で『シユールディング・クエーサー・ドラゴン』を攻撃。闇黒爪撃！この瞬間、『闇黒青龍』の効果発動。バトルを終了し、オーバーレイユニット1つを取り除く事で、相手に4000ポイントのダメージを与える。食らえ、神の一撃を！！死爪滅殺！」

闇のエネルギーが闇黒青龍の爪に集まり、その爪が振るわれた。爪の軌跡が5本の巨大な衝撃波となってアルフォスを襲う。アルフォスはアーティスを剣に変え、衝撃波の1つと剣をぶつける。残りの4本はアルフォスに当たる事なく通り過ぎ、山の木々を切り刻んでいった。

「ぐ。。。」

思った以上に重い一撃に、アルフォスは温存していた力の8割を出す。眠っているカオスの力を発動して、剣に乗せて再度振るうと、衝撃波は消滅した。今のを食らえば、間違いなく真つ二つになっただろう。仮に受けたとしても、勿論永久機関の機能で再生はできるが、相当な力を失う事になる。

U l f o c e   L P 8 0 0 0   4 0 0 0

「今の一撃を耐えたか。流石は未知の材料で完成されたアンドロイドと言ったところだな。」

「フン：オレの肉体はとうの昔に滅びている。こつでもしなければ、いくら神の力があると言えど、肉体が滅び生きてはられないのである。」

「フツ、そこまでして自らの妹を守るか。」

メローアはアルフォスがどれ程の永い時を生きているか知らない。精々、20年程度の事だと思っているだろう。ところが、アルフォスの時間は神の世界に君臨した時から既に止まっているので、あながち20年程度と言うのは間違いではない。5兆年の時を生きると言っても、生身の体で生きていたのは封印される前の、ほんの20年程度の話だからだ。そこからは繰り返し器の進化を遂げて生きてきたに過ぎない。

「お前にオレの考えは永久に理解できまい。」

「だろうな。わたしはこれでターンエンドだ。後一撃『闇黒青龍』」

の攻撃を食らえば終わりだな、アルフォス。」

Mer oa

LP8000

Hand : 3

Field

闇黒青龍 ATK4000

「オレのターン。オレは『シューティング・クエーサー・ドラゴン』で『闇黒青龍』を攻撃。ザ・クリエーション・バースト！」

シューティング・クエーサー・ドラゴンの手に光が集まり、闇黒青龍めがけて迸る。闇黒青龍は両手をかざすようにして、その中心部分に闇の球体を生み出し、それを光にぶつけた。

「『闇黒青龍』の効果発動。オーバーレイユニットを1つ取り除き、バトルを終了する事で、相手に4000ポイントのダメージを与える。」

「『シューティング・クエーサー・ドラゴン』の効果発動。1ターンに1度、カード効果を無効にして破壊する！」

シューティング・クエーサー・ドラゴンの胸部の緑色の球体が激しく緑色の閃光を放ち、闇黒青龍が作るうとしていた、自らを包み込む障壁をかき消した。アルフォスの狙いは、効果を無効化できるターンに闇黒青龍のエクシーズ素材を減らすことだ。

「そんな事をして無駄だと言う事がわからぬか。」

「わからんな。オレはカードを1枚伏せ、ターンエンド。」

U l f o c e

L P 4 0 0 0

H a n d : 3

F i e l d

シューティング・クエーサー・ドラゴン     A T K 4 0 0 0

魔法・罾

伏せ：3

「わたしのターン。わたしは『青龍の突撃兵』を召喚する。このモンスターは生贄にする事で、相手モンスター1体を破壊する事ができる。」

三つ又の槍を持った若い戦士が現れた。顔は全身を包む鎧によって見えない。

「いや、そうはさせん。罾発動、『神の宣告』。ライフ2000をコストに、その召喚を無効にして破壊する!!」

「ならば構わん、『闇黒青龍』で『シューティング・クエーサー・ドラゴン』を攻撃。闇黒爪撃!!」

「何!?!」

お構いなしに効果を発動し、自らのエクシーズ素材を0にするというのか…。

「『闇黒青龍』の最後のオーバーレイユニットを取り除き、バトルを終了。4000ポイントのダメージを与える！」

「こちらは『シューティング・クエーサー・ドラゴン』の効果が発動し、それを無効にする。」

これで闇黒青龍のエクシーズ素材は0になった。だが、自らエクシーズ素材を0にする事に何の意味もないわけがない。一体何を狙っている…。どちらにせよシューティング・クエーサー・ドラゴンはフィールドを離れた時、シューティング・スター・ドラゴンを特殊召喚する効果がある。何かしらの効果があつたとしても、追加攻撃でライフを大きく削れるだろう。

「これでわたしはターンエンド。」

Mer oa

LP8000

Hand : 3

Field

闇黒青龍 ATK4000

「オレのターン。バトルだ！」

アルフォスは手札に現れたドローカードを確認せずにバトルフェイズへの移行を宣言した。四神天青龍の時と同じように、鋭い眼光が闇黒青龍を捉えた。

「『シユールディング・クエーサー・ドラゴン』よ、『闇黒青龍』を葬り去れ。ザ・クリエーション・バースト！」

シユールディング・クエーサー・ドラゴンの光の光線と、闇黒青龍の闇のプレス攻撃が衝突して大爆発した。今度こそ、互いのモンスターが破壊されたのが確認できた。

「『シユールディング・クエーサー・ドラゴン』はフィールドを離れた時、『シユールディング・スター・ドラゴン』を特殊召喚できる。『シユールディング・スター・ドラゴン』を特殊召喚し、メローアをダイレクトアタック！」

召喚されたシユールディング・スター・ドラゴンは、メローアに向かって突進した。しかし、その突進は途中で止まってしまった。アルフォスは大ダメージを叩き込めるこのチャンスにおいて、なぜシユールディング・スター・ドラゴンが攻撃を止めたのか理解できない。」

「何だ！？」

「『闇黒青龍』の効果が発動した。このカードはフィールドを離れた時、デッキ・手札・墓地からチューナー1体とチューナー以外のモンスター2体を特殊召喚する。わたしは手札から『青龍の巫女』と『青龍の守護者』2体を特殊召喚した。この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、カード効果を受けず戦闘でも破壊されない。効果は無効だがな。」

青龍の巫女 レベル2 ATK1000  
青龍の守護者 レベル4 ATK200

「だが戦闘ダメージは受けてもらう。『シユールディング・スター・





3つの光が天空に昇り、海の方から巨大な水柱が上がった。その水柱が次第に球体になって行き、その球体を包む混むような、同じく球体型の魔法陣が現れた。

「天に君臨する大いなる力、天をも貫く槍と共に、この世界に光臨せよ!!」

魔法陣に罅が入り、巨大な光が溢れ出してくる。

「これは…!!」

「シンクロ召喚!!光臨せよ、『天神皇ポセイドン』!!」

球体は粉碎され、その中から老年の、背丈よりも巨大な3つ又の大槍を持ち、全身を鎧に包んだ身長5mほどの神の力を持ったモンスターが現れた。光臨した時は周りに纏っていた水の球体の障壁が一瞬にして吹き飛ぶ。凄まじい力が、闇黒青龍の時とは比べ物にならない程大気を震わせる。

「バカな…4体目の天神皇だと…。」

アルフォスは初めて目に見えるような驚きを見せた。今までソラの

持つ3体の天神皇が全てだと思っていたが、新たな天神皇の光臨。  
アルフォスはすぐに冷静になった。

天神皇ポセイドン ATK3500

「知らないのか？天神皇は12の神々からなるレベル10のシンクロモンスター群。それをすべて集める事もGhost of chronicleの目的の1つ。」

『天神皇ポセイドン』

レベル10 神属性 幻神獣族・シンクロ/効果 ATK/3500 DEF/3500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在する魔法・罫カードを全ゲームから除外する。1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。このターン、このカードが相手に与える戦闘ダメージを0にする事で、このカードは相手フィールド上に存在するモンスター全てに1回ずつ攻撃する事ができる。このカードは相手のモンスター効果を受けない。このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを特殊召喚する。この効果によって特殊召喚に成功した場合、相手は次のターンのエンドフェイズ時まで魔法・罫カードを発動する事ができない。

「ならばこの場で闇黒青龍とその天神皇もオレが回収させてもらおう。」

アルフォスはデュエル開始時にメローアに、自分が勝利した場合は

メローアのエクストラデッキを全て頂くという条件を付けている。その条件でアルフォスは四神天青龍を賭けているのだ。尤も、アルフォスは天神皇はともかくとして、闇黒青龍は微塵にも欲しいと思っ  
ていない。

「わたしに勝利する事ができれば晴れて貴様のものになるだろう。わたしは『天神皇ポセイドン』で『シユールティング・スター・ドラゴン』を攻撃。トライデント・ラツシュ!!!」

「…!!!」

確かソラの天神皇はモンスター効果を受け付けない効果があったはずだ。メローアの天神皇も敵のものとはいえ、神の1つ。モンスター効果を受けないのが全ての天神皇の共通効果だとしたら、シユールティング・スター・ドラゴンの効果は通用しない。…ならばここは大人しく戦闘破壊されるべきだな。

「オレは『シユールティング・スター・ドラゴン』の効果を使用しない。」

「ならばそのまま戦闘破壊させてもらおう!」

シユールティング・スター・ドラゴンが巨大な三つ又の槍に串刺しにされ、天神皇ポセイドンが槍の先端から水のエネルギーを放出し、シユールティング・スター・ドラゴンを内部から粉々にした。

U l f o c e   L P 2 0 0 0   1 8 0 0

「カードを1枚伏せてターンエンド。」

Mer oa

LP4900

Hand: 0

Field

天神皇ポセイドン ATK3500

魔法・罫

伏せ: 1

「オレのターン。」

手札は5枚、フィールド上にモンスターは存在せず、伏せカードが2枚。ヤツのフィールドには天神皇ポセイドンと伏せカードが1枚…。このデュエル、貰った。

「メローア、貴様が切り札を公開した以上、オレも公開しなければ不公平と言うものだな。」

「…ほう、ラヴァルデッキでまだ何かあるのか？」

「見ていればわかる。魔法発動、『真炎の爆発』！」

3枚目の真炎の爆発だ。これ以上はもう、大量展開からラッシュをかける事はできない。

「蘇れ、『ラヴァル炎火山の侍女』、『ラヴァルのマグマ砲兵』、『フレムベル・ヘルドッグ』！」

アルフォスのフィールド上にまたも5体のモンスターが展開された。

そして、侍女3体が光の粒子となって消える。

「オレは『ラヴァル炎火山の侍女』3体とオレのライフ半分を神への供物とする。」

「神だと!?!」

メローアは心底驚いた。自分が持っているデータには、そんな召喚条件の神のカードは無いからだ。しかし、それについて考える時間をアルフォスは与えない。

「光臨せよ、『究極神帝オベリスク』!!!」

空間に罅が入り、ガラスが勢いよく割れるように、空間が割れ、天空の裂け目が姿を現した。その裂け目の中から、500m程の、デユエルモンスターズを知っているものなら誰でも知っている三幻神の1体、オベリスクが現れた。しかし、常に青いエネルギーを纏っている上に、三幻神のオベリスクとはサイズも力も違いすぎる事から、別物だと言う事が見て取れる。

究極神帝オベリスク ATK4000

U l f o c e LP1800 900

「データにはない神：一体どれ程の力を備えているのだ…。」

「それを教える義務はない。『究極神帝オベリスク』の効果発動。自分フィールド上のモンスター2体を生け贄に、相手フィールド上に存在するすべてのモンスターを墓地へ送り、相手のライフを半分にする。」

フレムベル・ヘルドッグとラヴアルのマグマ砲兵がエネルギー体に変わり、オベリスクの拳に集まった。

「何だと…！だが、天神皇はモンスター効果を受けない。その神の効果は不発だ！」

「それはどうかな。究極神帝は、フィールド上・除外ゾーン・墓地に存在する時、モンスターとして扱わない。よって、モンスター効果ではない為、モンスター効果を受けない天神皇と言えどこの効果から逃れる事はできない。放て、オメガバースト！！」

オベリスクの巨大な拳から、それに見合うエネルギー弾が撃たれ、ポセイドンを粉々にする。その衝撃がメローアのライフを半分削って行った。

「ぐおおおおお！？」

Mer o a L P 4 9 0 0 2 4 5 0

「この効果を使用したターン、神は攻撃できない。オレはこのままターンエンド。」

「このエンドフェイズ時、『天神皇ポセイドン』は蘇る！更にこの効果で復活した時、相手は次のターンのエンドフェイズ時まで魔法・罠カードを発動できない。」

透明度が戻り、綺麗な水に戻った湖の底から天神皇ポセイドンが現れた。周りを見渡してみれば、闇黒青龍のせいで枯れた木々が、枯れる前の状態に戻っている。

U l f o c e

L P 9 0 0

H a n d : 4

F i e l d

究極神帝オベリスク    A T K 4 0 0 0

魔法・罠

伏せ：2

「くっ…わたしのターン！」

メローアの様子が変わった。先程までの驚異的な余裕が失われ、明らかに焦りが見られる。メローアの手札どころか、デッキにも、もう究極神帝を倒すことのできるカードは残っていないのだ。しかし、メローアはサレンダーを選択しない。1%くらいは神を倒す可能性が残っていると考え、手札にある魔法カードにその可能性を託すことにした。

「どうしたメローア。余裕がなくなってきたな？」

それに対し、この高攻撃力のモンスターが並んでいるデュエルでラ



イフ残り1900のアルフォスは、デュエル開始時からずっと変わらない冷静さでメローアに話しかける。

「おのれ…このわたしが任務を失敗し、尻尾を巻いて逃げると言うのか。冗談じゃない！わたしは逃げん、逃げんぞ！畏カード発動、  
『インフルーエンス・ゴッド』！このターン、墓地に存在するランクまたはレベル10以上のモンスターの属性を神にする。更に魔法カード発動、『ゴッドフォース・オーバードライブ』！！フィールド上に存在する神属性のモンスターの攻撃力を2倍にする！」

天神皇ポセイドン ATK3500 7000

「そして墓地に存在する神属性のモンスターを全て除外し、その攻撃力分攻撃力をアップする！わたしの墓地に存在するのは『闇黒青龍』『青龍の宣告者』『青天の警告者』『蒼雷の預言者』の4体、よって攻撃力は…！！！」

天神皇ポセイドン ATK7000 20000

「攻撃力…20000…！！！」

「そうだアルフォス、貴様のライフはここまでだ！！絶望して死んでゆけ！『天神皇ポセイドン』で『究極神帝オベリスク』を攻撃！インフィニティートライデントラッシュュ！！！」

巨大なトライデントの先端から、高密度のエネルギー弾が発射されて、オベリスクを破壊した。メローアはこの光景を見て勝利を確信する。……………だが。

「フッ。」

煙が晴れて立っていたのは、ダメージを全く追っておらず、相変わらず冷静なアルフォスだった。だがアルフォスは、微笑を浮かべていた。

「なぜ…なぜライフが0になっていない!!」

メローアの怒鳴り声がプレッシャーと共に飛ぶ。しかしアルフォスは全く動じない。

「神が戦闘を行う場合、ダメージステップ終了時までオレが受ける全てのダメージを0にする。よって、本来発生するはずの16000ポイントの戦闘ダメージは0になった。」

メローアはそれを聞いた後、ショックを受けたのか動かなくなった。エンドフェイズに移行したことになるのか、天神皇ポセイドンが力を使い果たしたようでゲームから除外された。ゴッドフォース・オーバードライヴのデメリットとして、発動ターンのエンドフェイズ時にフィールドの全ての神属性モンスターを除外する。

「オレのターン。魔法カード発動、『魔法石の採掘』。手札2枚を捨て、墓地から『死者蘇生』を回収して発動する。蘇れ、『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』!!」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK3500 5500

「『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』のダイレクトアタック!バニング・ソウル!」

「ッ!!」

実体化したスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃が直撃し、メロアは燃えながら吹き飛び、湖に落下した。通常ならば死んでもおかしくないが、最後の最後に神の力を行使して、自らの命だけは守ったようだ。メロアが立っていた位置には、メロアの持っていたカードが落ちていた。スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃を受ける直前に、デュエルディスクごと外していたらしい。

「…約束通り、貴様のエクストラデッキは貰っていく。」

アルフォスはメロアのエクストラデッキをアーティスに格納した。…たった2枚、蒼雷龍と青天龍を残して。回収したカードは、神を除けばシンクロ召喚を使う時代なら誰でも持っている、汎用性の高いシンクロモンスターカードだった。

「その2枚はお前のエースだろうからな。せめて残しておいてやる。」

アルフォスはそう言い残して、湖を後にした。アルフォスが去った後、メロアは湖から上がるとふらつく体を無理やり動かし、カードを全て回収して、次元の扉に消えて行った。

次回へ続く。

## 第23話 メローア強襲！！ 後編（後書き）

次回サブタイ未定

アルフォス「4枚目の天神皇か。」

カオス「勘のいい人なら、最初にアレスとアルテミス、ゼウスが出た時点で何となく予想はしていたとは思うが…。」

アルフォス「最初にゼウスを出している時点で予想は無理だろう。わからないが。」

ソラ「今日の最強カードはコレ」

『天神皇ポセイドン』

レベル10 神属性 幻神獣族・シンクロ/効果 ATK/3500 DEF/3500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在する魔法・罨カードを全ゲームから除外する。1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。このターン、このカードが相手に与える戦闘ダメージを0にする事で、このカードは相手フィールド上に存在するモンスター全てに1回ずつ攻撃する事ができる。このカードは相手のモンスター効果を受けない。このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを特殊召喚する。この効果によって特殊召喚に成功した場合、相手は次のターンのエンドフェイズ時まで魔法・罨カードを発動する事ができない。

ソラ「闇黒青龍も強かったけど、まさか4枚目の天神皇が出るなんて…。戦闘ダメージを0にすることで、バーサーク・デッド・ドラゴンみたいな効果を得るよ。あとは天神皇共通の効果として、モンスター効果を受けないのとエンドフェイズ時に復活するね。この効果で復活したら、相手は次のターンのエンドフェイズ時まで魔法・罠を発動できなくなる効果も持ってるね。」

カオス「シンクロ召喚成功時の効果はデッキにもよるが厄介だな。永続魔法や永続罠を多用するデッキだと致命傷になりかねない。」

アルフォス「Ghost of Chronicleは12枚すべてを集めるのも目的の1つらしいな。こちらも四神天だけでなく、天神皇の回収もしなければならなかったか。」

カオス「どちらにせよ、情報のない今は待つしかあるまい。」

アルフォス「そうだな。ではまた次回会おう。」

ソラ「シーユアゲイン」 ちょっと発音がよくなった

## 第24話 北辰の空に在る魂（前書き）

今回はリクエストを頂いた、カオスがアルフォスの器の主導権を握っているときの話です。本当は番外編にしようとしたのですが、話のつなぎと展開にはもってこいなので本編にしました。

リクエストありがとうございます。また機会があれば、リクエストを募集したいと思います。

### 最近の出来事

カラクリを作り始めました。クエーサーは出ないけど展開力があって、プレイしていて楽しそうなので。

## 第24話 北辰の空に在る魂

某国

「ふむ…この辺りだな。」

この日、アルフォスはある国を訪れていた。それは以前同様、当然の強い力が発動したからだ。今現在戦っている謎の相手であるGhost of chronicleの可能性であることも考えれば、この力の発動を追わない手はなかった。なお、ソラはいつも通り大穴通いだ。

そして今日、このアルフォスには少々問題がある。

『そうだな……。』

普段はアルフォスのロングコートの裾の辺りに浮いている、カオスの魂が封じ込められてアルフォスとの直接の精神リンクを行っている水晶玉。しかし、この日、この水晶玉にはアルフォスの魂が入っていた。ちなみに、器の声はアルフォスのものなので、器の魂がカオスでも声は変わらない。

「どうだ、水晶玉の居心地は？」

アルフォスはこの前のメローアとのデュエルで、莫大な量の力を使い果たし、今現在、強制回復モードになっている。ところが、その強制回復モードになっている最中に今回の強大な力が発動したため、

アルフォスはやむを得ずカオスに器の行動を任せ、自分は水晶玉の中で集中回復を図る事にしたのだ。器が入れ替わった時点でカオスはソラに自己紹介してみたが、ソラの頭には『?』マークしか浮かばず、カオスはかなり落ち込んだ。

『狭い。』

アルフォスはかなり不機嫌な様子だ。今なら放つプレッシャーだけで人間を殺せてしまっただろう。そのくらいアルフォスの言葉は一言一言が暗い。カオスが生身の人間だったら冷や汗を掻くところだろう。

「まあそういうな。今回ばかりは仕方がないだろう、汝もそのまま強大な力と戦うわけにはゆくまい。」

『チツ……。』

心底嫌そうな舌打ちをしてアルフォスは黙り込んだ。カオスはそれに触れず、町の外に移動する。触ればもしかしたらアルフォスの怒りが爆発するかもしれないからだ。カオスは平野を通り過ぎ、1時間ほど歩いたところで荒廃した土地に着いた。現れるとすれば、人気が無いこの辺りだろう。カオスは辺りを見渡すが、特に何もおかしいところはない。

『反応していた地点から大分通り過ぎたぞ。貴様何のつもりだ?』

「いや…ここでいい。」

カオスが静かに言った直後、前方に激しい竜巻が出現し、すぐに消えた。その竜巻が消えた所には、1人の男が立っていた。まだ若く、



銀髪の鋭い眼光を持つ、赤いマントを着け、白いローブを身に着けている。

『この力は…!!』

アルフォスもカオスも、その身に受けるプレッシャーに脅威を感じている。プレッシャーならば、アルフォスと真正面から張り合えるかもしれない。

「貴様、何者だ？」

カオスはその男に問う。もしもGhost of chronic  
leの一員なら、ここで排除するつもりだ。

「我が名はオーデイン。お前達は何者だ。」

「!!」

カオスはその名を聞いて驚愕した。トールに続き、今度は転生した最高神の一柱に出会ったのだ。果たしてそれは、どれ程少ない確率だろうか。

「我の名はカオス。お前の力を追ってここまで来た。」

「ほう、わたしの力を…ならば貴様、デュエリストか。」

オーデインと名乗った男は澄んだ目で何もかも見通しているかのよう  
にカオスを見つめる。

「…不思議だ、何も見えん。」

そしてオーデインは、わずかに驚いた表情をした。相手の心を見通す力がカオスに通じなかったからだ。無論、カオスはオーデインがそんな能力を発動したなどとは知らない。

「貴様何の目的であるような強大な力を行使した？」

「それに答える義務はない。だがわたしをデュエルで倒せば教えてやらない事もない。」

「面白い、我と戦おうというのか。」

カオスはアルフォスと違ってデュエルディスクがある。漆黒の翼を模した、独特の形のデュエルディスクだ。オーデインの方は、背中にかけていた大槍を手にすると、それに念を送った。大槍の形が変わり、形こそ一般的だが、オーロラ色のデュエルディスクがオーデインの腕に装着される。

「行くぞ。」

「デュエル！」

Chaos vs . Odin

「わたしの先攻。わたしは『ダイヴァイン・ビショップ』を攻撃表示で召喚する。」

真っ白なローブを着ている老人が現れた。その手には杖が握られており、その先端には砂時計が取り付けられている。

「『ディヴァイン・ビショップ』の効果発動。自分のメインフェイズ毎に、『ディヴァインカウンター』を1つ置く。」

砂時計の砂が一定量落ちた。

「わたしはカードを1枚伏せてターンエンド。」

Odin

LP8000

Hand: 4

Field

ディヴァイン・ビショップ ATK1900

魔法・罫

伏せ: 1

「私のターン。私は『暗黒王メレス』を召喚。」

王族の服を着てはいるが、既に肉体が朽ち果ており、闇の瘴気の塊によって人の形を成しているモンスターが現れた。カオスのモンスターは基本的に生身の人間であることは無く、闇で形を成しているものが多い。

「『暗黒王メレス』の効果発動。このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下の『暗黒』と名のつくモンスターを特殊召喚できる。我はチューナーモンスター『暗黒調律師』を特殊召喚。レベル4の『暗黒王メレス』にレベル3の『暗黒調律師』をチューニング。」

通常のシンクロ召喚とは違い、輪が緑色ではなく黒い。更に、その輪の中に入ったモンスターは光の星ではなく、黒い星に変わった。しかし、見た目こそ禍々しいが邪悪なものは一切感じられない。

「地獄の世界の覇権を握りし絶望の皇よ、地上の聖者をその力により滅せよ！シンクロ召喚、現れるがいい、『地獄狂皇ディアボロス』！！」

漆黒の龍が現れた。所々、闇がはがれており、そこからはエメラルド色の鱗が見られる。死ぬ前は美しかったのだろうか。

地獄狂皇ディアボロス ATK2700

「『地獄狂皇ディアボロス』の効果発動。1ターンに1度、エンドフェイズ時まで相手モンスター1体の攻撃力を0にする。ダークネス・カージユ！」

ディアボロスの黒いプレス攻撃がディヴァイン・ビショップの力を奪い去った。

ディヴァイン・ビショップ ATK1900 0

「ディアボロスでビショップを攻撃。」

「畏オープン、『インフェルノ・ウォール』！バトルフェイズを終了し、わたしはデッキから1枚ドロ！」

炎の壁がディアボロスの攻撃を阻んだ。カオスは少し顔を顰め、手札から2枚のカードを取り出した。

「2枚伏せてターン終了。」

Chaos

LP8000

Hand: 2

Field

地獄狂皇ディアボロス ATK2700

魔法・罨

伏せ: 2

「わたしのターン。このメインフェイズ、『ダイヴァイン・ビショップ』に2つ目の『ダイヴァインカウンター』を置かせてもらおう。」

更に一定量の砂時計が落ちた。次も同じ量が落ちるなら、砂時計は完全に落ちるだろう。しかし、オーデインが手札から発動した魔法カードの影響で、その『次』を待つ必要はどこにもなかった。

「魔法発動、『ゴッドブレイド』！このカードは自分フィールド上の『ダイヴァイン・ビショップ』に『ダイヴァインカウンター』を置き、その攻撃力を300ポイントアップする。」

最後の砂時計が落ちた。そしてダイヴァイン・ビショップが光の粒子と化して、天に昇華する。良い天気だった空に暗雲が立ち込め、雨模様に変化した。

「なんだ…？」

カオスは空を見上げた。そして対峙しているオーデインは、ニヤリと笑う。

「『ダイヴァイン・ビショップ』の効果発動。ダイヴァインカウンターが3つ乗ったこのカードはゲームから除外され、エクストラデッキから『極神聖帝オーデイン』1体をシンクロ召喚扱いとして特殊召喚する!!」

「何だと!?!」

天空から、赤いマントを着けており、白い服の山よりも巨大な老人が現れた。その背丈よりも大きい金色の槍グングニルを持ち、隻眼が地上を見下ろす。

極神聖帝オーデイン ATK4000

『極神聖帝オーデイン』

レベル10 神属性 幻神獣族・シンクロ/効果 ATK/4000 DEF/3500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する幻神獣族モンスターが受ける魔法・罫カードの効果が無効にする事ができる。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、エンドフェイズ時に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローする事ができる。

「更にこの効果でシンクロ召喚した『極神聖帝オーデイン』は、このデュエル中モンスター効果を受けない。」

カオスはソリッドビジョンであるにも拘らず、極神聖帝オーデインから放たれる凄まじい重圧をその身に受け戦慄する。普段ならアルフォスもカオスもそのプレッシャーを押し返して無力化するが、それができない程、極神聖帝オーデインの力は激しいものようだ。だが、普通の星界の三極神相手にカオスが怯むことなど絶対にならない。雷神トールの使用していた極神皇トールの時と同じように、異常なまでの強化が施されている。

「あの時と同じか。」

「…？まあいい、『極神聖帝オーデイン』で『地獄狂皇ディアボロス』を攻撃！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

槍で突くと言うよりも、轢き殺すと言った方が正しいくらいの勢いと大きさを持った槍が地獄狂皇ディアボロスに向かう。直撃までも起こらずに、地獄狂皇ディアボロスは槍の一突きで破壊されてしまった。

「ぐおおおおおつ！！？」

Chaos LP8000 6700

思った以上の衝撃がカオスを襲い、その威力を受け止めきれずに後ずさりした。

『（カオス、貴様極神聖帝如き相手に負けるつもりか！？）』

「（うるさい、黙っておけ。）『地獄狂皇ディアボロス』のモンスター効果発動。このカードがフィールド上を離れた時、デッキからレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。来い、『リバイバルダーク』！」

真っ黒な球体が現れ、それが地獄狂皇ディアボロスに姿を変えた。

「『リバイバルダーク』の効果発動。特殊召喚に成功したこのカードを墓地へ送り、このターン破壊された闇属性のシンクロモンスター1体を特殊召喚する。我は『地獄狂皇ディアボロス』を復活させた。」

「フン、攻撃力2700では神の攻撃力4000には届かん。わたしはカードを1枚伏せてターンエンド。」

Odin

LP8000

Hand: 4

Field

極神聖帝オーディン ATK4000

魔法・罫

伏せ: 1

「我のターン！」

相手のフィールドには攻撃力4000の極神聖帝オーディンと伏せカード1枚。対し、私のフィールドには攻撃力2700の地獄狂皇ディアボロスと伏せカードが2枚。オーディンが<本物>ならば、



相手ターンでも魔法・罫を無力化してくる。ここは…。

「罫カード『暗黒疾風波』発動。汝の手札を1枚ランダムに捨て、その効果を決定する。」

疾風の刃がオーデインの手札を1枚貫いた。そのカードが宙を舞い、オーデインの墓地へ送られる。

「モンスターカードか。モンスターカードの時、我は手札を1枚墓地へ送り、デッキから1枚ドロウする。そして『地獄狂皇ディアボロス』の効果発動。このカードを破壊する！」

「何！？自分の効果で破壊するだど！？」

「そう、そして『地獄狂皇ディアボロス』の効果でデッキからレベル4以下のモンスター『暗黒使徒』を特殊召喚。このカードは特殊召喚に成功した時、デッキから同名カードを可能な限り特殊召喚する。更に2体の『暗黒使徒』を特殊召喚！そして、この効果で特殊召喚した『暗黒使徒』はチューナーではなくなる。」

「レベル4のモンスター3体…。」

カオスが特殊召喚しようとしているのはレベル8か12か…わたしの知る中に、通常の素材で召喚できるレベル12のシンクロモンスターなどいないが…。

「レベル4の『暗黒使徒』2体にレベル4『暗黒使徒』をチューニング。」

辺りに激しい闇の雷が降り注ぎ、結界を描く。その中心から、真つ

黒な鎧を全身に着けた人型の石像が出現した。そして、みるみる石像に罅が入り、砕けていく。

「暗黒世界の戦士よ、光満ちる世界の精鋭を殲滅しろ！シンクロ召喚、『暗黒戦士ジエノサイドサーヴァント』！」

見た目こそ変わらないが、真つ黒な鎧を着た人型の闇が動き出した。

暗黒戦士ジエノサイドサーヴァント ATK4500

『暗黒戦士ジエノサイドサーヴァント』

レベル12 闇属性 戦士族・シンクロ/効果 ATK/4500

DEF/4000

レベル4チューナー+闇属性のレベル4モンスター2体

このカードは1ターンに1度、魔法・罫・効果モンスターの効果を受けない。このカードが相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊し、破壊したモンスター1体につきカードを1枚ドローする。このカードがフィールド上を離れた場合、フィールド上に存在するカードを全てゲームから除外する事ができる。

「バトル。我は『暗黒戦士ジエノサイドサーヴァント』で『極神聖帝オーディン』を攻撃。暗黒送葬撃！」

ジエノサイドサーヴァントが巨大な剣を極神聖帝オーディンの心臓部分めがけて投げ、クリーンヒットした。しかし、オーディンは、極神聖帝オーディンの超過ダメージによる衝撃を受けてなお、涼しい顔をしている。

O d i n   L P 8 0 0 0   7 5 0 0

「我はこれでターンエンドだ。」

「このエンドフェイズ、わたしの墓地から『極神聖帝オーディン』を特殊召喚し、デッキから1枚ドロウする。」

C h a o s

L P 6 7 0 0

H a n d :   3

F i e l d

暗黒戦士ジェノサイドサーヴァント   A T K 4 5 0 0

魔法・罫

伏せ：1

「わたしのターン。わたしは『極神聖帝オーディン』で『暗黒戦士ジェノサイドサーヴァント』を攻撃。ヘヴンズ・ジャツジメント！」

極神聖帝オーディンはグングニルでジェノサイドサーヴァントを狙う。狙いの軌道は逸れることなく、ジェノサイドサーヴァントを捉えている。

「バカな！？攻撃力はジェノサイドサーヴァントの方が上！」

ジェノサイドサーヴァントはそれを返り討ちにしようとして、剣を構えた。向かってきたグングニルを真正面から弾き返すつもりだ。

「畏カード発動、『極星宝メギンギョルズ』！我が化身『極神聖帝オーデイン』の攻撃力を2倍にする！」

極神聖帝オーデイン ATK4000 8000

「クツ…！！畏発動、『暗黒結界』！戦闘ダメージ1000ポイントにつき、カードを1枚ドローする！」

グングニルがジェノサイドサーヴァントを貫き、衝撃波がカオスを襲った。

「がああああああつ！！！」

Chaos LP6700 3200

「わ、我が受けたダメージは3500、よって3枚ドロー！…このカードはカードの効果でドローした時、手札から特殊召喚できる！出でよ、『ダークネスダイバー』！」

フィールドに限りない深さを持つ漆黒の小さな池が出現し、その池から、ダイバーの姿をした闇の塊が現れた。

「カオスツ！お前まさか負けるつもりか！？」

アルフォスの憤怒の声が響いた。オーデインには聞こえないようだ。それに対し、カオスは若干焦っていた。手札には今現在、対抗できる手段がない。しかし、アルフォスが気にしているのはデュエルの勝敗だけではない。アルフォスの器の損傷も気にかけている。

「（黙っておけ！）」

アルフォスはこの局面でカオスの思考の邪魔をするわけにもいくまいと、カオスの言葉に従って黙る事にした。

「わたしはカードを1枚伏せてターンエンド。」

O d i n

L P 7 5 0 0

H a n d : 4

F i e l d

極神聖帝オーディン ATK4000

魔法・罫

伏せ：1

「私のターン！スタンバイフェイズ時に『ダークネスダイバー』の効果発動、汝の伏せカードを破壊する！」

オーディンの伏せカードがいきなり割れた。

「フン、2枚目のメギンギョルズか。我は『ダークネスダイバー』を生け贄に効果を発動。デッキからレベル4の『暗黒』または『ダークネス』と名のついたモンスター2体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になり、シンクロ素材にもできない。我は『暗黒尖兵』2体を特殊召喚する。」

長槍を持った暗黒の兵士が現れた。

「レベル4のモンスター2体…だがシンクロ素材にもできず、効果

も無効。何をする気だ。」

「こつするのだ。レベル4のモンスター2体をオーバーレイ！」

黒い魔法陣の中に、2体のモンスターが吸い込まれていった。

「何!？」

「オーバーレイ・ネットワークを構築。エクシーズ召喚、出でよ」  
暗黒守護龍ディオボロス」！」

そして、2体のモンスターが吸い込まれていった魔法陣から全身が黒い結晶によって覆われ形を成している漆黒の龍が姿を現した。目と額の宝石のみが赤い。竜の周りには2つの黒い光が飛び交っている。

暗黒守護龍ディオボロス DEF3000

「エクシーズ召喚…だと!!」

オーデインが今までの涼しい顔から一変し、驚愕の表情に変わった。しかし素早く冷静さを取り戻し、表情も落ち着いたものになった。

「『暗黒守護龍ディオボロス』の効果発動。このカードのオーバーレイユニットを取り除き、守備力を1500ポイントアップする。」

ディオボロスの周りに飛び交っていた黒い光が1つ、ディオボロスに食われた。

暗黒守護龍ディオボロス DEF3000 4500

「ディオボロスは守備表示のまま戦闘を行う事が出来、更に守備力を攻撃力として扱う。」

「!！」

「『暗黒守護龍ディオボロス』で『極神聖帝オーディン』を攻撃！  
ディオボロス・ヘルフレア！」

黒い火炎が極神聖帝オーディンを包み、大爆発した。その跡には何も残っていない。しかし、オーディンはその光景を見て笑った。

Odin LP7500 7000

「ほう…我が化身を一撃で吹き飛ばすとは…素晴らしいパワーだ。」

「その余裕がどこから来るか不思議だな。我はカードを3枚伏せターン終了だ。」

天空から極神聖帝オーディンが神々しい光と共に再臨した。そしてオーディンはデッキからカードを1枚ドローする。対してカオスは、表情が厳しいもの変わった。次のターンで勝敗が決まると思ったからだ。

Chaos

LP3200

Hand: 3

Field

暗黒守護龍ディオボロス DEF4500

魔法・罾

伏せ：3

「わたしのターン！わたしは魔法カード『極星の神託』を発動。わたしの場に神がいる時、相手モンスター1体を破壊する。『暗黒守護龍ディオボロス』を破壊！」

「チツ：カウンター罾、『インフェルノ・バースト』！『暗黒』モンスターがカード効果で破壊された場合、相手ライフに守備力分のダメージを与える。汝には4500ポイントのダメージを受けてもらう！」

「しまった！！」

暗黒守護龍ディオボロスが破壊されたが、その爆風が炎の柱になってオーデインに襲い掛かった。ここにきて、ようやくオーデインが大きな声を上げて反応らしい反応を見せたことになる。しかし、カオスはそれに『よし』とは思わない。勝敗はこのターンで完全に決定するからだ。それも自分の勝利で。

「ぐっ…！」

Odin LP7000 2500

「そして『暗黒守護龍ディオボロス』が破壊された時、我は2000ポイントのダメージを受ける。」

Chaos LP3200 1200



「だが、わたしにはまだ『極神聖帝オーディン』の攻撃が残っている。ゆけ、『極神聖帝オーディン』！ヘヴンズ・ジャッジメント！」

グングニルがカオスめがけて放たれた。しかし、ここでカオスは勝利を確信して笑みを浮かべ、自らのフィールド上にセットしてあるカードを1枚表にした。

「畏発動、『デビルズ・スピリット』！相手のダイレクトアタックによるダメージを無効にし、その数値分相手にダメージを与える。代償として、我の墓地と手札のカードを全てゲームから除外するがな。悪魔に魂を売ってでもこのデュエルは貰う。」

「わたしが負けただと…！」

Odin LP2500 - 1500

オーディンは襲いくる衝撃に対しては何の反応も見せず、片膝を地面に折った。そして、歩いてくるカオスを見上げる。

「さあ話してもらおうか、ここでなぜ強大な力を行使したのかを。」

「……先日、わたしのもとに1人の男が現れた。その男はわたしを見るなり、神のカードをよこせと闇のデュエルを仕掛けてきたのだ。だからわたしはお前の言う強大な力を使い、その男を撃退した。それだけの事だ。」

「…男の詳細は？」

「Ghost of chronicleと名乗っていたのは覚え

ている。後は、神のカードのほかにく天神皇の巫女>を知らないかと訊かれたな。何やら、天神皇の巫女をキーとして<フェルグレス>とか言うものを起動すると聞いた。」

「『天神皇の巫女』……だと!？」

カオスは驚愕した。当然、本来の器の主であるアルフォスの方が、驚愕の度合いは大きい。しかし、アルフォスは敢えて黙っている。

「なんだ、知っているのか？」

「いや、まだ予想の域を出ん。天神皇の巫女たる証のようなものはないのか？」

「ふむ…真紅の長髪と天神皇の頂点に立つカードを持っているとしか聞いていないな。これで何かわかるか？」

「!?!……身内だ。」

こうなると不可解な点がある。生い立ちすら不明なソラが、なぜ天神皇の巫女なのか。ソラ自身、転生前の前世で孤児でありながら人に見捨てられる最悪の人生を歩んでいた。では、ソラが天神皇を手に入れたのはいつになるのか。少なくとも、アレスの呪いを受けていた事から、この世界に転生する以前から持っていたというのは確かな話になる。

「…そうか。話せることは全て話した。わたしはまた、旅に出るでしょう。縁があればまた会おう。」

オーデインは竜巻を巻き起こし、共に消えた。

「…汝はどうする？」

『…：オレは…：本来の神として責務を果たすならば、時空の危険分子としてソラを殺さなければならぬ。しかし…：しかし…：』

アルフォスは今までになく苦悩していた。既に、出会った時に交わした約束以前に、ソラに情が移っている。スレイだったなら、容赦なくソラ抹殺を実行していたところだろう。しかし、アルフォスはスレイには存在したあらゆる危険分子は即刻処分するという考え方を捨てている。前世も、アルフォスに会うまではこの世界に来てからも孤独だった少女をアルフォスは殺す事ができないでいる。

「汝は時空の平和とたつた1人の少女の命を天秤にかけ、どちらを取る？とる方は当然、決まっているだろう。」

そんな事は既に理解している。だが、それを取ってしまったらオレにとっては最悪の結末を迎える。人間は時に、世界と1人を天秤にかけ、いともたやすく1人を取るか、両方を救うという。そう、今の段階ならば、まだ両方を救うという選択肢はある。しかし、窮地に追い込まれた時にどうする？オレはたつた1人の妹との約束を果たせずに抹殺するか、この時空全ての存在を消すかを選択する事になる。

『オレは…：。』

ソラとの付き合いはまだ1年も経っておらず、非常に短い。Ghost of Chronicleの言っていた事が本当の事ならば「フェルグレス」の復活は時空の滅亡を意味する。3か月程度の付き合いの少女を殺すことくらい…：。

『オレには無理だ…。オレは両方を天秤にかけた時、世界をとるな  
どできない。』

しばしの静寂が訪れ、カオスが口を開いた。

「それでいい。」

『…何？』

「我は何も、世界を救う方をとれなどとは言っていない。汝の情が  
ソラに移っているのは知っている。そんな中、ソラを殺せなどと言  
うわけがなかるう。その選択に決まっている。」

敵の目的を突然知り、それを知った直後に世界か妹か決めると言わ  
れて、アルフォスはそんな大規模なものを選べない。スレイを名乗  
っていた時は幾度となく、2つを天秤にかけ常に世界をとってきた。  
しかし、世界ではない方をとったのは今回が初めてだ。

「それに、ソラをとったからと言って世界が滅亡するわけでもない。」

カオスは町に向かって歩き出した。暫く歩いただろうか。ここでア  
ルフォスはある事に気付いた。

『待て、カオス。貴様、どこへ向かっている？』

元々アルフォス達は、用事が済み次第直接空港に向かう予定だった。  
ところが、カオスは明らかに別の方向へと向かっていく。先程まで  
のセリフも、80%は本気だが、アルフォスの気を逸らすための罠

だ。

「……………少しくらい女の子と交流を」

『良いわけないだろう！いい加減早く帰らなければ、ソラの機嫌が悪くなる！』

「汝はいつも器の主導権を握っているが、我はこんな時くらいしか表に出れんだ！少しくらい自由にさせる！」

『ふざけるな。オレのチカラも完全に回復した。器の主導権は返してもらおう。』

アルフォスは強引にカオスを水晶玉に封じ込め、自分の魂を器に戻した。カオスは心底悔しそうにしていたという。この後、アルフォスはカオスの言うことを無視して、寄り道無しで屋敷に帰ったらしい。

次回へ続く。

## 第24話 北辰の空に在る魂（後書き）

次回「第二の四神天<朱雀>前編」

アルフォス「今回は転生後のオーデインが相手だったな。」

カオス「正直、作者としてもデュエル構成が微妙に納得いかないよ  
うだが、次の話からの四神天朱雀編で返上しようとしている。今回  
は大目に見てほしい。」

ソラ「今日の最強カードはコレ」

『極神聖帝オーデイン』

レベル10 神属性 幻神獣族・シンクロ/効果 ATK/400

0 DEF/3500

チューナー+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フイ  
ルド上に存在する幻神獣族モンスターが受ける魔法・罠の効果を無  
効にする事ができる。フィールド上に表側表示で存在するこのカー  
ドが破壊され墓地へ送られた場合、エンドフェイズ時に特殊召喚す  
る事ができる。この効果で特殊召喚に成功した時、デッキからカー  
ドを1枚ドローする事ができる。

ソラ「不死の効果を持つ星界の三極神の1体だよ。アニメ版は自分  
から破壊しても復活するし、ノーコストだから強いね。」

アルフォス「実際に召喚されれば厄介なのは間違いないな。ただし、  
トリシューラやブリューナクには耐性がないからサポートが必要だ

る。」「

ソラ「じゃあまたね」

第25話 第二の四神天 朱雀 前編（前書き）

四神天朱雀の登場です。

第3、第4は暫く先の話になりそうですがね。

最近の出来事

D T 1を回したらラス・オブ・ネオスが出てきました（ ; ; ）



アルフォス達は今、アルフォスの巨大戦艦に乗って南極に向かっている。この日はソラに加えて、ドミノ校のチーム2人もついてきていた。海馬コーポレーションがついに四神天朱雀のありかを突き止め、ドミノ校の校長に極秘で伝えられ、回収にこの4人が向かう事になったのだ。校長がこの4人を推薦した理由は言うまでもないが、アルフォスがいるからと言う事になる。もちろん、その理由はこの4人に伝えられてはいない。ちなみに移動手段は本来、飛行機で済まそうとしていたのだが、敵地においてそれは心許ないというアルフォスの意思でこうなった。操縦する際はアルフォスの永久機関がリンクしているため、アルフォス自身の意思で動かすことができるが、今はオートモードだ。

「へえ、あの人アルフォスなんだ…。」

優里は窓の近くの席に座って、地上を見下ろしているアルフォスを見ながら、ソラに話しかけた。ソラは軽くうなずき、その後に優里は更に質問した。

「…どんな関係？恋人なの？」

「へ！？…アルフォスはお兄ちゃんだよ？大好きだけど」

「へえ、そうなんだ。」

優里は、それなら入学式の時に甘えていたのも納得がいくと思った。

恋人関係なら、露骨に甘える事は殆どないだろう。優里は続けてからかうように言ってみた。

「恋人じゃないなら私が貰ってもいいかな？」

「だ、ダメだよ！」

この2人の会話に時々、黙っている雄平が目を向けてため息をつく。アルフォスは何の反応も見せず、ただ窓の下を見下ろしているだけだ。周りから見れば、何を考えているか全くわからない。しかし、無表情と言っわけではなく、顔をよく見なければわからない程度の微笑を浮かべていた。その視線の先は海が広がっている。

「冗談よ。…ところで、行き先はどこなの？詳しいことは知らされていないんだけど…。」

校長はソラと雄平、優里には行き先を伝えていない。アルフォスのみ、海馬瀬人からローヴァンを通して伝えられている。

「アルフォスなら知ってると思うよ？」

「行き先が気になるのか？」

アルフォスが相変わらず窓の下を見たまま、口を開いた。優里とソラ、雄平の3名はそれに対して首を縦に振った。アルフォスは暫く間をおいてから一言だけ言った。

「……………南極だ。」

3人はその言葉に耳を疑った。仕方ないだろう。今現在、アルフォ

スが作ったドレスと言う名の魔導服を着ているソラと、どれだけ寒くとも凍死しないアルフォスを除く2人は、南極の地を歩くにはあまりにも軽装だ。事前に知らせてくれなければ、それなりの装備もできないだろう。但し、本当の目的地は南極大陸よりさらに少し南に行った場所に、突如現れたという神殿となる。

「安心しろ、それなりの装備は用意してある。…いい加減座ったらどうだ？体力は少しでも温存しておくべきだぞ？」

「じゃあそうする。」

ソラはアルフォスの座っているソファに腰かけて、そのまま上半身だけを倒して寝っ転がり、視線を窓の外に向けたままのアルフォスの膝に頭を乗せた。アルフォスは特に反応を見せない。いや、既に日常でもよくある事なので、反応する必要が無いと言ったところか。ただ、まんざらでもない様子ではある。

「アルフォス君はソラの事、どう思ってるの？」

優里は思い切ってアルフォスに質問してみた。どんな返答が来るかは予想ができておらず、しかしどんな答えが返ってきてきても驚かない自信はあった。

「どう思ってる…か。前にも友人に聞かれたんだが、その時に返した答えは『好きなヤツ』だったかな。嫌いになる要素なんてどこにもないからな。」

嫌いでなければ好きなのだろうというのがアルフォスの答えだ。ちなみに、この友人は当然、カオスの事を言っている。ソラは今、顔が赤いだろう。

「へえ…まあ、嫌いなわけないか。」

優里は納得できる答えを聞いたようで、満足したらしく、続けて質問してくることは無かった。高校生ならともかく、大学生で、その上同学年でここまで仲のいい兄妹は非常に珍しいだろうが、入学式の時点でアルフォスに甘えているソラを見つけた優里と雄平は、それも特に何とも思っていない。

「ああ、そうだ。ソラ、この前は助かったぞ。ありがとう。」

アルフォスが言っているのは、先日のメローア戦の事だ。ソラからラヴアルデッキを貰って改造し、それによって勝利した。結果論にすぎないが、メローアの使用したカードの効果の事を考慮すれば、X・セイバーでは苦戦しただろう。

アルフォスはソラにデッキを返そうとしたが、ソラはそれを制止した。

「それはアルフォスが持つて。そのデッキはアルフォスの方が使いこなせそうだし。」

アルフォスはデッキをアーティスに戻した。その代わりに、カードを1枚アーティスから取り出した。

「では、これはお前が持つておけ。新たな力になってくれるはずだ。」

ソラは、最初は遠慮しようとしたが、せっかくなるといふアルフォスの好意を無下にできずに受け取る事にした。受け取り、カードを確認したソラは上半身を起こして驚いた。

「これって!？」

「『天神皇ポセイドン』。前に襲撃者と一戦した時の戦利品だ。もう少してオレの体が真つ二つになるところだった。」

「真つ二つ!？なんで!？」

ソラと優里の声が入り交わった。

「巨大なドラゴンの爪に襲われた。モンスターが実体化するデュエルだったからな。アーティスで防御しなければ命はなかったな。」

ソラは以前、命を賭けたデュエルをしたことがある分、その重さがよくわかる。優里は優里で、想像だけではできていた。アルフォスが平気でそう言った事を言うのは、やはりソラや優里、雄平とは違って戦い慣れているというのがあるだろう。

「なんで緊急事態のコールをしなかったの？チームメイトには緊急時に使える専用の回線が回されているはずよ？」

「戦い慣れていないお前達を、いきなり過酷な神々の戦いに巻き込むわけにもいきまい。相手は神の力を自由自在に操るデュエリスト、勝つためにはこちらも神の力を解放する必要がある。」

とは言え、戦い慣れていないソラにも、容赦のないメローアを倒すのは無理な話だろう。実力派のメローアを倒すには、オレにしかできなかつただろうな。もちろん、この3人も経験さえ積みめば、神を操る事の出来るソラは倒せるレベルまで、残り2人は互角程度の勝負なら可能だろう。

「そういうわけもあって、できればお前達、特にソラには命を賭けたデュエルはしてほしくないというのが正直なところだな。」

死に対しての恐怖が強いソラは当然、敵の精神攻撃に弱い部分がある。そこを突かれれば、負けに直結しかねない。更に華奢なソラの体では、いくら魔導服による防御効果があると言えど、ダメージが実体化するデュエルはとも耐えられたものじゃない。何より、天神皇の巫女として狙われているソラを Ghost of chro nic le に晒すわけにはいかない。

「それでも、私と雄平は覚悟してここにきてるわ。」

「……それならいい。」

「アルフォス…私は…。」

ソラは俯いた。他のメンバーができているのに対し、死に対する覚悟を未だにする事ができないのを、足手まといだと思っている。アルフォスはソラの考えていることを見透かしたように、ソラの頭に手を置いた。

「お前はそれでいい。」

アルフォスはその一言だけ言って、頭から手を放し、後は何も言わなかった。前に言った事を思い出せというニュアンスがある。それをソラが憶えているかどうかは定かではないが、おそらくは憶えているだろう。

外は、かなり雲が多くなってきた。戦艦内部だというのに、雷の轟音も聞こえる。

「…嵐だな。戦艦にして正解だった。」

飛行機だったら墜落の危機だろう。それでもかなり艦が揺れている。

「きゃあっ！」

「危ないぞ。」

バランスを崩して倒れそうになったソラをアルフォスが支えた。優里と雄平は座席に深く座っていたために倒れはしない。その代わりに、より強い揺れを体感する事にはなる。

「今更だけど… たったの4人で巨大戦艦なんて規格外よね。」

揺れに耐えるために、せめて何か話そうと優里が話題を持ち出した。この戦艦、人が500人乗っても定員数には届かないほどの巨大さを誇る。どこにこんなものを保管していたのかと聞きたいが、アルフォスは答えないだろう。

「少数精鋭のような感じだろ。オレ達が精鋭かどうかはともかく。」

揺れに耐えられなくなったのか、おそらく戦艦に搭乗してから初めて雄平が喋った。暫くして、戦艦の揺れが収まった。嵐が止んだわけではなく、アルフォスが制御したのだ。優里と雄平は、ようやくと言った様子で一息ついた。

「やっと収まった…。でも、なんで急に嵐なんか…。」

「わからん。」

敵地が近いのか、四神天がオレと言う存在を寄せ付けまいとしているのか。どちらにしろ、この嵐は何者かの意思で故意に起こされている。嵐が雨から猛烈な吹雪に変わった。窓の下は既に、巨大な氷の大地が広がっている。

4時間ほど経っただろうか。南極大陸を通り過ぎようとした時、赤い建物が見えた。いや、赤いのは確かだが、それはこの猛吹雪の中、消えずに燃え盛っている炎でできている。

「あれが神殿か。」

何らかの結界が張られているのがわかる。神によって人を寄せ付けまいと張られたものようだ。…だが、その程度の結界ではオレの侵攻は止められんぞ。

「主砲発射。」

戦艦に取り付けてある巨大な砲に、青いエナジーが収束する。永久機関エネルギーを搭載する事によって完成した、大抵のものは粉碎できる強力な砲撃だ。アルフォス以外のメンバーは、そんなものが取り付けてあるとは知らないので当然驚いた。

放たれた主砲は、神殿の周囲10m程度の場所に張られてある結界と、大きな爆発音を立てて衝突した。しかし、結界の硬さは予想以上で、なかなか罅が入らない。

「……硬いな。神が創っただけのことはある。」

アルフォスは主砲エネルギー再装填のために、撃つのをやめた。しかし、ここでアルフォスは確実に自分達の方が先を越してこちらに來ているとわかった。もしもGhost of Chronicle



eに先を越されていたなら、結界などもう存在しないからだ。

「だが、神には神を衝突させるだけだな。」

「…そうだね。」

ソラは、別に自分に向けられていないアルフォスの言葉に返事をした。

「…手伝ってくれるのか？頼むぞ。」

「うん。」

ソラはデュエルディスクを起動し、アルフォスは手に1枚のカードを出現させた。優里と雄平は、神殿に入る準備をしている。

「…出でよ、『究極神帝オシリス』！」

「召喚、『天神皇アレス』！」

戦艦の外に現れた究極神帝は、この前まで500mだったはずが、地上から測ったとしても雲の上くらいまではある。未来では、極神聖帝オーデインと同じくらいと言えはわかる者もいるだろう。見た感じでは4000〜5000mくらいか。天神皇アレスは変わらず3m程度だ。視界が悪く、人間の目では外が見えないが。

「オシリス！結界を砕け、サンダー・ジャッジメント！」

「アレス、ウォーエンド・スピア！」

結界と巨大な雷、アレスの大槍が激突した。先程の主砲によるダメージが残っていたのか、はたまた神の一撃が重かったのか、結界はいとも容易く砕け散った。

「…よし。」

ソラとアルフォスは神を戻すと、優里と雄平と一緒に神殿の扉をこじ開けて入った。南極大陸のすぐ側、地球の最南端だというのに、中は27度という気温だ。

「……南極大陸の近くにしては暑いわね。神のカードの力って、ここまで凄いものなの？」

「当然だな。本来、これから回収する神はこの世界には存在しないはずの神だ。突然現れた神である以上、凄まじい力を持っていたとしても、何ら不思議な事ではない。」

後は、この温度になる物理的な理由として、地下にマグマがある可能性だ。もしもそうなら、地下の温度は半端ではないだろう。一応水くらいは持つてきておいたが、魔導服すら着ていない人間の体で持つのだろうか。

「とにかく、時間が無い。行くぞ。」

神殿の地下に続く階段を下りる。途中で、アルフォスが足を止めた。

「どっつしたの？」

「…分かれ道だ。」

この先は2本の道に分かれていた。

「…2人1組で行くのが理想的ではあるが…お前達は3人で左の道へ行け。戦い慣れていないなら人数は多い方がいい。」

アルフォスはそれだけ言い残し、ソラ達の反論の暇を与えずに右の道へ進んでしまった。ソラ達は仕方なく、左の道へ進むことにした。

~~~~~アルフォスルート~~~~~

「……暑いな。」

徐々に気温が上がってくるのがわかる。地下に近づいているようだ。階段を降り切ると、円形のマグマが溜まっている場所があり、その中心部分には円形の巨大な足場がある部屋に辿り着いた。この先の道はないらしい。行き止まりだと思って引き返そうとしたアルフォスの足が止まった。ここまで進んできた道が、マグマに沈んでいったのだ。残された足場は、周りをマグマに囲まれており、アルフォスが立っているこの床のみとなる。それどころか、足場だけが消えたならば飛んで引き返すことが可能なのに、進んできた道までもが巨大な金属の壁によって閉ざされてしまっていた。

「クツクツクツ、待っていたぞ。アルフォス!!ルヴォルグ!」

「!?!」

アルフォスは驚き、振り返った。そこには、1人の男が立っている。非常に長い銀髪と、鋭い赤のツリ目。赤い服に身を包んでいる。

「オレの名は<グラン>…。青龍のカードを我々Ghost of chronicleに返してもらおう。後は…気に食わんが、メロアの敵討ちとさせてもらおうか。」

「Ghost of chronicle…神殿内部に侵入していたのか！生憎、青龍を返すわけにはいかないのだな。貴様がその気ならば、ここで排除してくれる！」

グランは片刃の大剣を引き抜き、剣の腹を上側にして浮かせた。剣がそのままデュエルディスクになるらしい。その証拠に、刀身の根元にはデッキをセットする場所が、柄には<8000>と表示されている。刃ではない方には、魔法・罠カードをセットする場所があるのが確認できた。

「デュエル！」

U l f o c e v s . G r a n

「先攻はオレが貰う。オレは、『不死鳥の化身』を攻撃表示で召喚し、カードを2枚伏せる。ターンエンドだ。」

グランの目の前に、カラス程度の大きさの不死鳥が現れた。

G r a n

L P 8 0 0 0

Hand : 3

Field

不死鳥の化身 ATK1500

魔法・罫

伏せ : 2

「オレのターン！オレは『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃表示で召喚する。そして永続魔法『異常機動』を発動。このカードがある限り、機皇モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。」

機皇兵ワイゼル・アイン ATK1800 2800

「バトル。『機皇兵ワイゼル・アイン』で『不死鳥の化身』を攻撃！クオーク・カーブ！」

ワイゼル・アインがレーザーでできた剣で、不死鳥の化身を切り裂いた。不死鳥の化身の斬られた箇所が爆発し、グランに爆風が襲い掛かる。

「グッ…だが、『不死鳥の化身』は破壊された場合、デッキの同名カードを可能な限り特殊召喚する。」

Gran LP8000 6700

「フン、オレはカードを1枚伏せてターンエンド。」

Ulfoce

LP8000

Hand : 3

Field

機皇兵ワイゼル・アイン ATK2800

魔法・畏

異常機動

伏せ : 1

「オレのターン。オレは2体の不死鳥を生け贄に捧げる！来い、不死鳥王フェネクス・ロード」！

冠を抱く巨大な不死鳥が現れた。翼は激しい炎に包まれており、灼熱の風を常に巻き起こしている。

不死鳥王フェネクス・ロード ATK3000

「フェネクス・ロードでワイゼル・アインを攻撃！フェネクス・ストーム！」

フェネクス・ロードは翼に纏っている灼熱の炎をワイゼル・アインに放った。ワイゼル・アインが溶けて爆発した。

「チツ…！」

Ulfoce LP8000 7800

「フェネクス・ロードは破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージをエンドフェイズ時まで自身に加え、もう1度攻撃できる！ダイレクトアタック、フェネクス・ストーム！」

不死鳥王フェネクス・ロード ATK3000 4800

「させん！『異常機動』の効果発動。このカードを墓地へ送り、このターンフィールド上を離れた機皇モンスターを全て特殊召喚する。来い、ワイゼル・アイン！」

グランは構うことなく攻撃を続行し、ワイゼル・アインは灼熱の炎を受けた。しかし、今度は無傷だ。守備表示の為、アルフォスにダメージが及ぶ事もない。

「このターン、『異常機動』の効果で特殊召喚されたモンスターは破壊されない。更にもう1枚、『アタック・メモリー』！相手モンスターが攻撃したダメージ計算後、そのモンスターの攻撃力以下の機械族モンスターをデッキから特殊召喚する。」

アルフォスのフィールド上に、無数の立方体が収束した。

「光臨せよ、『機皇神マシニクル』?!！」

立方体の枠組みだけだったものが具現化し、白を基調とした巨大なロボットになった。

「機皇神か…メローアが随分手を焼いたそうだな。オレはバトルを終了し、このままターンエンド。」

Gran

LP6700

Hand: 3

Field

不死鳥王フェネクス・ロード ATK3000

魔法・畏

伏せ：2

「オレのターン。オレは『機皇兵グランエル・アイン』を召喚。グランエル・アインの効果発動、1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力または守備力をエンドフェイズ時まで半分にする。」

「させるとでも思うか！畏発動、『不死鳥の警告』。相手モンスター1体の効果の発動を無効にし、デッキに戻す。」

グランエル・アインが炎の波にのまれた。

「ならば機皇神マシニクル！フェネクス・ロードを粉碎せよ、ザ・キューブ・オブ・デイスペア！」

無数の立方体の集合体でできた光線がフェネクス・ロードを貫いた。そのまま光線は、勢いこそ弱まったがグランに直撃した。

「うおおおおお！！！」

Gran LP6700 5700

「『不死鳥王フェネクス・ロード』の効果発動。フィールドを離れた時、デッキから『不死の戦士』と『不死鳥の巫女』を1体ずつ特殊召喚する。」

メローアが使用していた、全身をローブと鎧に包んだモンスターが現れた。だが、ローブと鎧の色は燃えるような赤だ。



不死の戦士 ATK2200  
不死鳥の巫女 ATK1500

「…オレは2枚伏せてターンエンド。」

U l f o c e

L P 7 8 0 0

H a n d : 1

F i e l d

機皇神マシニクル ? ATK4000

魔法・畏

伏せ : 2

「オレのターン。手札を全て捨て、畏カード『不死鳥再生』を発動。墓地から『不死鳥王フェネクス・ロード』を守備表示で復活。そしてレベル5の『不死の戦士』にレベル3の『不死鳥の巫女』をチェーンング!!」

「シンクロ召喚!!」

「クツクツク…灼熱の翼により、命ある者の魂を焼け!シンクロ召喚、出でよ!!」『炎天龍』!!」

周りのマグマが吹き出し、龍の形を作る。全身が炎によってできた、巨大な龍が出現した。その熱気と熱風がこの部屋全体を包み始めた。

炎天龍 ATK3000

『炎天龍』

レベル8 炎属性 ドラゴン族・シンクロ/効果 ATK/300  
0 DEF/2500

『不死鳥の巫女』+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上に存在するカードを全て破壊し、手札が5枚になるようにデッキからカードをドローする。このカードが墓地へ送られた時、このカードのシンクロ召喚に使用したモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。自分フィールド上に存在するこのカードを墓地へ送る事ができる。

「『炎天龍』…『青天龍』の同類か。」

「ほう…すぐに察するあたり、流石と言ったところか。『炎天龍』の効果発動。シンクロ召喚に成功した時、オレのフィールドのこのカード以外のカードを全て破壊し、手札が5枚になるようにカードをドローする。オレの手札は0、よって5枚ドローする。」

「だがマシニクルの攻撃力は4000、更にマシニクルは相手のシンクロモンスターを吸収する効果がある。その効果は『炎天龍』を自ら墓地へ送る事で回避できるだろうが、『四神天朱雀』が無い貴様のデッキでは攻撃力4000を超える事は出来まい。」

「…フッ。」

アルフォスは知らないが、確かにグランのデッキでは機皇神の攻撃

力を超えるカードは入っていない。しかし、グランからすれば、アルフォスとデュエルしている時点で目的は果たしているのだ。何故なら、ここでアルフォスを足止めする事こそがグランの目的なのだから。それに、マシニクルを倒すならば何も攻撃力を超える必要があるわけでもない。

「魔法発動、『不死鳥の炎翼』！『炎天龍』がいる時、相手モンスター1体を除外する。」

「畏発動、『防衛機能』！機械族モンスターが効果対象になった時、デッキの機械族モンスター1体を特殊召喚し、そのモンスターに対象を変える！デッキから『ワイゼルA5』を特殊召喚し、『ワイゼルA5』を対象を変更。」

マシニクルの前に現れたワイゼルA5がマシニクルに向かった炎を受け、爆発した。

「無駄だ。墓地から畏発動、『不死鳥の執念』！墓地の『不死鳥の炎翼』を除外し、相手モンスター1体を破壊する。」

「！」

グランは炎天龍の効果発動時に不死鳥の執念を巻き込んで破壊していたのか。賭けになるが、成功すればそれは無駄なあがきになる。

「畏発動、『無情の埋葬』！デッキの上から5枚めくり、その中の『機皇』または『T』『A』『G』『C』と名のつくモンスター1体を墓地へ送る事で、相手モンスター1体を破壊する。」

アルフォスはデッキの上からカードを一気に5枚引き抜き、空中に

ばら撒く。その中から1枚を掴んで墓地へ送り、次にその他のカードを取ってデッキに戻した。

「オレが墓地へ送ったのは『グランエルC5』！『炎天龍』を破壊する。」

炎天龍にグランエルC5の破片が無数に刺さり、炎天龍は力尽きてマグマの中に沈んでいった。

「だが根本的な解決にはなっていないぞ！マシンニクルを破壊する！」

部屋の周りのマグマが吹き出し、マシンニクルを襲う。しかし、マシンニクルは右腕を前に出し、障壁を起動した。マグマはその障壁に弾かれて消えた。

「機皇神マシンニクルの効果発動。墓地の機皇帝のパーツを除外し、マシンニクルの破壊を無効にする！貴様の手など無意味だ。」

「『炎天龍』の効果発動。このカードが墓地へ送られた時、素材モンスターを可能な限り特殊召喚する！そして『不死の戦士』は墓地から特殊召喚された時、相手モンスター1体を破壊する。」

蘇った戦士から剣がはなたれ、マシンニクルのコアに直撃し、その機能を停止させた。

「チツ…」

2枚のリバー스는結局無駄になったか。

「『不死の戦士』と『不死鳥の巫女』でダイレクトアタック！」

「くっ…」

ダメージが現実化しているが、この程度なら大したことないな。それに比べ、こちらは現実化しているのがダメージではなく攻撃とモンスター。ヤツがどこまでオレの攻撃を耐え凌げるか…。だが先程のマシニクルの攻撃を直撃で受け平気であるあたり、耐久力はあるようだ。

U l f o c e    L P 7 8 0 0    4 1 0 0

「オレは1枚伏せてターンエンド。」

G r a n

L P 7 8 0 0

H a n d :    3

F i e l d

不死の戦士    A T K 2 2 0 0

不死鳥の巫女    A T K 1 5 0 0

魔法・畏

伏せ：1

「オレのターン。」

機皇帝の賜与…そして機械転生法。ならばやる事は1つか。

「オレは『機械転生法』を墓地に存在する『機皇神マシニクル』？」

を対象に発動。レベルが選択したモンスターと同じになるように手札・デッキ・墓地から機械族モンスターを特殊召喚し、その効果を無効にする。更に、選択したモンスターはデッキに戻す。オレは『機皇兵ワイゼル・アイン』、『機皇兵スキエル・アイン』、『機皇兵グランエル・アイン』の3体を特殊召喚。」

「ほう…。」

「更に魔法発動、『機皇帝の賜与』。機皇モンスター1体に着き、カードを1枚ドロウする。よって3枚ドロウ。オレの場に機皇モンスターが3体以上いる時、手札のこのカードを特殊召喚できる。出でよ、『機皇神龍アステリスク』!!!」

マグマの底から、機械の翼を持たない龍が現れた。初見では龍に見えるかどうかは怪しいところだ。

「アステリスクの攻撃力はオレのフィールドの機械族モンスターの攻撃力の合計となる。」

機皇神龍アステリスク    ATK0    4600

「攻撃力4600…。」

「『リミッター解除』発動。バトル、『機皇神龍アステリスク』で『不死の戦士』を攻撃。インフィニティー・ネメシス・ストリーム!!!」

放たれた光線は不死の騎士ごとグランを飲み込んだ。アルフォスはグランの安否を確認する間もなく、ワイゼル・アインで巫女を切り裂き、更にスキエル・アインとグランエル・アインで止めを刺しに

かかった。

Gran LP7800 800 - 1300 - 6900

「ウオオオアアアアアアアッ!!」

グランは光の粒子になって消えた。その粒子も完全に消えると、アルフォスの入ってきた方ではなく、その反対方向…つまり、アルフォスの進行方向の壁が崩れて道ができ、そこに続くようにマグマの底から足場が浮かんできた。

「消えた…ヤツは本物ではなかったのか？」

人間だったら吹き飛ばされた時点でマグマに放り込まれるはず…光の粒子になったと言う事は、幻影か、本体からの分身か…どちらにせよ、こちらのルートは外れた。本物がソラ達の方にいるとしたら、ソラ達が危ない。

「急ごう。」

アルフォスは目の前に続く平らな道を、D・ホイールのグランドフォースを起動して進んでいった。

~~~~アルフォスが別れた後~~~~

「行っちゃった…。」

ソラはアルフォスの進んだ道を見ながらそう言った。

「追いかけてもいいよ?」

「うん。後で会えるし…私達は左に行こう?」

ソラは無理に作ったような笑みを浮かべて左に進んだ。優里と雄平はそれに黙ってついて行く。内心、アルフォスの行った先に対して嫌な予感がしていた。

進めば進むほど、徐々に暑くなってくる。私は魔導服のおかげで汗をかいて水分を失う事はないけど、他の2人はそうじゃなくて、水を飲みながら進んでる。

「ソラ…よくその格好でいられるわね…。」

「うん…まあ、ね。」

他愛のない会話をしながら3人は進んでいく。そして、先程のアルフォスが辿り着いた部屋と全く同じ形をした部屋に辿り着いた。少し違うのは、進行方向と右方向の2つに道がある事だ。

「…広い場所に出たわね。周りはマグマ、落ちたら命はないわ。」

優里が言った直後に、岩が進んできた道を塞ぎ、道がマグマに落ちて退路が絶たれた。

「道が…。」

ソラは仕方なく、周りを見回した。そして、進行方向の開けている



道の先に祭壇があり、祭壇に1枚のカードが浮かんでいるのを発見した。

「『四神天朱雀』…?」

ソラは祭壇に近づいて、朱雀のカードを取ろうとした。しかし、突然右の方向から飛んできたカードによって、その手が弾かれた。

「きゃっ!?!」

「そのカードを貴様に渡すわけにはいかな。」

ソラの目の前に、突然1人の男が現れ、朱雀のカードを掴んでいた。それは、スレイがあつたのと同じ、非常に長い銀髪と、鋭い赤のツリ目。赤い服に身を包んでいる。こちらのグランが本物で、アルフォスが戦ったグランが偽物と言う事になる。

「オレの名はGhost of chronicleが一人<永炎えいえん>のグラン」。『四神天朱雀』はオレが貰う。」

「そうはさせない!」

「当然よ。」

「オレ達は、そいつを回収するために来たんだ。」

ソラ達はそれぞれのデュエルディスクを起動した。グランは、それを見て笑みを浮かべて、アルフォスの時と同じように、大剣をデュエルディスクとして起動した。

「ならば、この朱雀の実験台になってもらう。お前達にはそれぞれ8000のライフ。オレにはその3倍、24000ポイントのライフでスタートする。」

『デュエル！』

Sora & Yuri & Yuhai vs. Gran

~~~~十数ターン後~~~~

「そんな……！！」

Sora LP4000

Yuri LP0

Yuhai LP0

Gran LP7500

優里と雄平は既にライフ0になり気絶している。闇のデュエルでなにから負けても命を失うことは無いが、ダメージは相当なものだ。そして今現在、ソラのフィールドはから空き。グランのフィールド上には、四神天朱雀が存在していた。

四神天朱雀 ATK4000

「ここまでだ小娘。『四神天朱雀』のダイレクトアタック。炎熱翼撃！！」

「きゃああああああああああつ！！！」

S o r a L P 4 0 0 0 0

~~~~~

「今のはソラの声か…！！！」

アルフォスは最大出力でグランドフォースを走らせ、ソラ達の声がした方へ向かった。そして、先程まで自分がいたのと同じ形の、開けた場所に出て驚愕した。優里と雄平は倒れて気絶、その向かい側にはグランが立っていた。脇にソラを抱えて。

「…どういう事だ、何があった！！？」

「ほう、オレの分身を倒したか、アルフォス。」

「貴様…ソラを返せ！」

アルフォスは怒りを隠すことなくグランにぶつけた。

「ならば、『四神天青龍』を渡し、オレと神を賭けてライディング・デュエルしてもらおうか。そうすれば小娘は返してやる。」

ソラはその言葉に反応した。

「ダメ！！私の事はどうでもいいから、そのカードを渡しちゃ…！」

しかし、アルフォスはその言葉を聞いたと同時に、既に四神天青龍をグランの方に向けて投げていた。グランはそのカードを受け取り、確かに四神天青龍であることを確認すると、ソラをアルフォスの方向に向かって片手で投げた。

「っ！」

アルフォスはソラを受け止め、そっと降ろした。

「どうして私なんか…」

「『私なんか』だと？その『私なんか』を…オレにとって最も大切な者を捨てると言うのか？カード1枚でお前が死なないと言うなら、それがどんなカードでも安い。」

その後、アルフォスはそっとソラを抱きしめてから、一言だけ耳元で囁き、ソラを離してグランと向き合い、グラントフォースを起動した。

「アルフォス…」

ソラはアルフォスを心配そうな目で見つめた。しかし、アルフォスは振り返らずにグラントフォースに乗り、ライディング・デュエルの準備を完了させた。

「さあ行くぞ、グラン。四神天は貴様らに渡すわけにはいかない。」

「ハハハハッ、来いッ!!」

「ライドイング・デュエル! アクセラレーション!!」

U l f o c e v s . G r a n

2人がD・ホイールに乗り走り始めると、周りの風景が変わり、異空間に飛んだ。ただ一直線に光の道があり、周りには星々がある。星々の光が無ければここは真っ暗だろう。

「オレのターーーンッ!!」

アルフォスの手札に、カードが1枚現れた。

次回へ続く。

## 第25話 第二の四神天 朱雀 前編（後書き）

次回「第二の四神天 朱雀」

中編になるか、後編になるかはまだわかりません。

アルフォス「第二の四神天の登場だな。」

ソラ「私達3人が束になっても勝てなかった…ごめんねアルフォス。」

アルフォス「いや、むしろ24000ものライフと神を相手によく戦ったというべきだ。」

ソラ「うん…。じゃあ気を取り直して、今日の最強カードはコレ」

『炎天龍』

レベル8 炎属性 ドラゴン族・シンクロ/効果 ATK/300  
0 DEF/2500

『不死鳥の巫女』+チューナー以外のモンスター2体以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上に存在するカードを全て破壊し、手札が5枚になるようにデッキからカードをドローする。このカードが墓地へ送られた時、このカードのシンクロ召喚に使用したモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。自分フィールド上に存在するこのカードを墓地へ送る事ができる。

ソラ「グランって人のエースシンクロモンスターだね。効果は前に

出てきた『青天龍』に似てるよ。」

アルフォス「手札増強効果と自身が墓地へ送られたときに素材モンスターを特殊召喚する効果、自身を墓地へ送る効果だな。」

ソラ「レベルは8、激戦区だけどこの効果なら採用できるかな。」

アルフォス「2枚の四神天が揃ったヤツのデッキは、どれ程の力を誇るのだろうか…。どの道、オレの神で粉碎するだけだな。」

ソラ「じゃあまたね。」

第25話 第二の四神天 朱雀 後編(前書き)

今回は大分前に行ったソラのルート予想アンケートの結果を本編で発表します。

最近の出来事

インゼクターは驚異的なテーマですね。



第25話 第二の四神天 朱雀 後編

スピード・ワールド2は後攻プレイヤーのターンからスピードカウンターが置かれていく。そして魔法の発動にはこのスピードカウンターが必要不可欠だが、オレには関係のない話だ。

ヤツのデッキは、さっきの分身と同じと仮定すれば四神天朱雀に特化した不死鳥デッキ。ソラ達3人を相手に勝利すると言う事は、相当の強さを誇っている。油断すればオレも危ないか。…なら、神には神だ。力を貸してもらおうぞ、ソラ。

「オレは『フレムベル・ヘルドッグ』を攻撃表示で召喚。」

「何…機皇デッキじゃないかと?」

「ターンエンド。」

一度手の内を明かしている敵に同じ手が通用するとは思っていないからな。そう何度も同じデッキを使うと思うなよ。

U l f o c e

L P 8 0 0 0

S p c : 0

H a n d : 5

F i e l d

フレムベル・ヘルドッグ    A T K 1 9 0 0

「オレのターン。オレは魔法カード『Sp・四神天の対価』を発動する。このカードはスピードカウンターが1個以上ある時、デッキの『四神天』を除外し、デッキから『四神天』と名のつくカードを1枚手札に加える。デッキより『四神天朱雀』を除外し、『四神天青龍』を手札に加える。」

「朱雀を除外？」

まさか：あのカードには青龍と同じく特殊召喚成功時に何らかの効果があるのか。そして、四神天はおそらく、四神天と名のつくカードの効果でしか特殊召喚できない。四神天にはそれぞれ互換性があると考えていいだろう。

「更に魔法発動、『炎神の導き』。このカードは手札を1枚捨てる事でデッキから炎属性のレベル4モンスター1体を特殊召喚する。来い、『不死鳥兵』！」

グランのフィールドに不死鳥を模った兜を装備している槍を持った兵士が現れた。…なるほど、青龍兵と同じようナリクルーターか？

「『不死鳥兵』で『フレムベル・ヘルドッグ』を攻撃！」

「迎え撃て、ヘルドッグ。」

ヘルドッグは不死鳥兵の槍をかわし、腕に食らいつき地面に押し倒した。

Gran LP8000 7600

「ヘルドッグの効果発動。戦闘でモンスターを破壊した時、デッキの守備力200以下の炎属性モンスター1体を特殊召喚できる。『ラヴアルのマグマ砲兵』を特殊召喚。」

「こちらは『不死鳥兵』の効果発動。戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の『不死鳥』と名のつくモンスター1体を特殊召喚する。『不死鳥の召喚士』を特殊召喚。」

やはり顔は見えないが、不死鳥の紋様があるローブを着た女性モンスターが現れた。

「メインフェイズ2に移行しよう。『不死鳥の召喚士』の効果で、1ターンに1度、手札を1枚捨てる事で手札からレベル3以下のチューナーモンスター『不死鳥の巫女』を特殊召喚する。」

「モンスター2体…!!」

「レベル5の『不死鳥の召喚士』にレベル3の『不死鳥の巫女』をチューニング。灼熱の翼により、命ある者の魂を焼け！シンクロ召喚、出でよ、『炎天龍』!!」

1度は見た炎の龍が現れた。本物というだけあって、偽物とは感じられるプレッシャーが違う。

「『炎天龍』の効果により、手札が5枚になるようドローする。オレの手札は2枚、よってカードを3枚ドロー。…2枚伏せてターンエンド。」

LP7600

Hand: 3

SpC: 1

Field

炎天龍 ATK3000

魔法・罨

伏せ: 2

「オレのターン！オレは『ラヴァル炎火山の侍女』を召喚。見せてやろう、オレのアクセルシンクロを！まずは『ラヴァルのマグマ砲兵』に『ラヴァル炎火山の侍女』をチューニング。シンクロ召喚、『TG - ハイパー・ライブリアン』！」

マントを付けた司書が現れた。未来の世界ではこのモンスターが出てくるだけで真っ先に破壊の対象になる。

「そして魔法カード『ハイパースピードスペルHSP - 真炎の爆発』！スピードカウンターが0以上ある時、墓地から守備力200の炎属性モンスターを可能な限り特殊召喚する。甦れ、マグマ砲兵、侍女！」

ハイパースピードスペルは基本的にスピードカウンターを必要としない。ライディング・デュエルではかなり有利になる。

「む…!!」

アクセルシンクロ…チューニング・スター・ドラゴンか？

「自分フィールドにチューナーがいる時、手札の『ブースト・ウオリアー』を守備表示で特殊召喚できる。『ラヴァルのマグマ砲兵』

に『ラヴァル炎火山の侍女』をチューニング。シンクロ召喚、『A・O・Jカタストル』！」

アルフォスのフィールド上をグランが睨み、歯を噛みしめる。できればアクセルシンクロはさせたくないが、止める方法がない。そんなところだろう。

「ライブラリアンの効果により、モンスターがシンクロ召喚に成功した時、デッキから1枚ドロ。そして『ワン・フォー・ワン』を発動。手札から『ラヴァル・キャノン』を墓地へ送り、デッキから『ラヴァル炎火山の侍女』を特殊召喚。『ブースト・ウォリアー』に『ラヴァル炎火山の侍女』をチューニング！」

「シンクロチューナーを召喚するつもりか…。」

「天を焼く轟炎、地上への審判を下せ。シンクロ召喚、シンクロチューナー『ライトニングフレア・キューブ』！」

四角い透明な箱のようなものの中で、光の炎が激しく燃え盛っている。

「ライブラリアンの効果により、デッキから1枚ドロする。」

アルフォスはグランドフォースのスピードを最大にし、光速を超えて走り出した。辺りに光が満ち、アルフォスがグランドフォースごと消えた。

「『TG・ハイパー・ライブラリアン』、『A・O・Jカタストル』に『ライトニングフレア・キューブ』をチューニング。天地創造の時、覇龍が舞う！混沌より生まれし力、人智の限界を超えて姿を現

せ！デルタアクセルシンクロ！！」

アルフォスが元のスピードに戻って、グランの目の前から現れた。アクセルシンクロの存在を知っているグランは消えた事に対して驚くことはなかったが、現れた龍に驚愕した。その龍は、アルフォスと共に現れるどころか、この異空間の壁をガラスのように壊して、更に別の次元から現れたのだ。その漆黒の翼竜の胸部に埋め込まれている宝石には、黒い爆炎が封じ込められているのがわかる。

「出でよ、『カオスノヴァ・ドラゴン』！」

カオスノヴァ・ドラゴン    ATK4000

『カオスノヴァ・ドラゴン』

レベル12    闇属性    ドラゴン族・デルタアクセルシンクロ/効果

ATK/4000    DEF/4000

「ライトニングフレア・キューブ」+チューナー以外の闇属性シンクロモンスター2体以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。このカードはこのカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで、1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。1ターンに1度、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚または魔法・罫・効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する事ができる。このカードがフィールド上から離れた時、エクストラデッキから「ハイパーノヴァ・ドラゴン」1体を特殊召喚する事ができる。

「なんだ…これは…。」

「これこそオレのデルタアクセルシンクロモンスター。このカードは1度のバトルフェイズにシンクロ素材にしたチューナー以外のモンスターの数まで攻撃できる。更に1ターンに1度、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚または魔法・罫・効果モンスターの効果の発動を無効にして破壊できる。」

「!!!」

「食らえ、『カオスノヴァ・ドラゴン』の攻撃！カオスエクスポロージョン！」

カオスノヴァ・ドラゴンが宝石の中の爆炎を収束し、口から放ったその弾丸は真つ直ぐに炎天龍に向かっていく。炎天龍に直撃した弾丸は黒い大爆発を起こした。

「罫発動、『ジェノサイド・フレア』！炎属性モンスターが破壊された時、フィールド上のすべてのカードを破壊する。」

Gran LP7600 6600

「『カオスノヴァ・ドラゴン』の効果によってそれを無効にし、破壊する！」

成程、これによってカオスノヴァ・ドラゴンの効果を半強制的に使用させる事で、炎天龍の素材蘇生効果を阻害させないつもりなのか。

「チエーン3、『炎天龍』の効果で墓地から素材にしたモンスターをすべて特殊召喚する。『不死鳥の巫女』『不死鳥の召喚士』を準備表示で特殊召喚。」

「だが、『カオスノヴァ・ドラゴン』はもう1度攻撃できる。『不死鳥の巫女』を攻撃。カオスエクスプロージョン！」

「畏発動、『フェニックスシールド』！墓地の『炎天龍』を除外し、このターンオレのモンスターは破壊されない。」

カオスノヴァ・ドラゴンの黒いプレス攻撃が、紅蓮の業火の盾で防がれた。アルフォスはモンスターを破壊できなかった事が気になったのか、相手も気付かないほど一瞬だけ顔を顰めた。

「ターンエンド。」

U l f o c e

L P 8 0 0 0

S p c : 2

H a n d : 3

F i e l d

カオスノヴァ・ドラゴン    A T K 4 0 0 0

フレムベル・ヘルドッグ    A T K 1 9 0 0

「オレのターン。…神を見せてやろう。まずは魔法発動、『フェニックス・ブラスト』。自分フィールドに『不死鳥』と名のつくモンスターがいる時、相手のカードを1枚除外する。『カオスノヴァ・ドラゴン』を除外！」

火の鳥がカオスノヴァ・ドラゴンに突っ込んだが、宝石から爆炎が放出されて消し飛んだ。



「その効果は無効にさせてもらった。」

「だが、墓地へ送られた『フェニックス・ブラスト』にはもう1つの効果がある。このカードを除外し、『フェニックストークン』1体を特殊召喚する。そして、オレのフィールド上のモンスター3体を生け贄に捧げ……。」

膨大なエネルギーがこの空間に集まり始めた。エネルギーは水となり、巨大な青い龍がその水の中から現れた。

「生誕！『四神天青龍』！！」

四神天青龍 ATK4000

「だが神とカオスノヴァの攻撃力は互角。どうするつもりだ？」

こちらは破壊されたとしても、後続のハイパーノヴァ・ドラゴンが特殊召喚できる。相打ちに持ち込めば、確実にこちらが有利！

「『四神天青龍』で『カオスノヴァ・ドラゴン』を攻撃！天水爪撃！！」

アルフォスの言葉を無視し、グランはカオスノヴァ・ドラゴンと四神天青龍を相打ちにした。

「『カオスノヴァ・ドラゴン』の効果によって、エクストラデッキから『ハイパーノヴァ・ドラゴン』を特殊召喚する。」

カオスノヴァ・ドラゴンがそのまま赤くなったような龍が現れた。その他の変化では、埋め込まれている宝石が緑色になり、中に普通

の爆炎が封じ込められていることくらいか。

ハイパーノヴァ・ドラゴン ATK3400

『ハイパーノヴァ・ドラゴン』

レベル10 炎属性 ドラゴン族・アクセルシンクロ/効果 AT

K/3400 DEF/2900

シンクロチューナー+チューナー以外のシンクロモンスター1体

相手のターンに1度、相手フィールド上のカード1枚を選択して発動する。選択したカードの効果が無効にし、このカードをゲームから除外する。この効果で除外したこのカードは、エンドフェイズ時にフィールド上に戻る。

「ターンエンド。」

グランはそのままターンエンドの宣言をした。

奴のフィールドはがら空き。このままハイパーノヴァのダイレクトアタックで大ダメージを叩き込めるが……。奴はなぜ、苦勞して召喚した四神天を相打ちにした？

Gran

LP6600

Spc: 3

Hand: 2

「オレのターン。」

アルフォスがドロ―した次の瞬間、空間に罅が入り、何か巨大なものが現れた。アルフォスはそれを見た瞬間に何であるかを理解する。現れたのは赤い炎の冠を抱く巨大な不死鳥だった。体全体が炎でできており、周囲に熱風が吹き荒れる。

「…なぜ!？」

「『四神天青龍』の効果が発動した。除外されたターンの次のスタンバイフェイズ時に、除外されている朱雀を特殊召喚できる。」

『四神天青龍』

レベル10 神属性 幻神獣族・効果 ATK/4000 DE  
F/4000

このカードは「四神天」と名のついたカードの効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上に存在するモンスター3体をリリースしなければならない。このカードは魔法・罨・効果モンスターの効果の対象にならず、フィールド上のカードを戻す効果を受けない。このカードが自分フィールド上を離れた次のターンのスタンバイフェイズ時、ゲームから除外されている「四神天朱雀」または「???」1体を特殊召喚する。このカードが特殊召喚に成功した時、自分のライフポイントが8000以下の場合、自分のライフポイントを8000にする。このカードは自分フィールド上を離れる場合ゲームから除外される。

「そして朱雀は特殊召喚に成功した時、墓地からモンスター1体を特殊召喚できる。オレは『炎天龍』を守備表示で復活。」

『四神天朱雀』

レベル10 神属性 幻神獣族・効果 ATK/4000 DE  
F/4000

このカードは「四神天」と名のついたカードの効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上に存在するモンスター3体をリリースしなければならない。このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にならず、戦闘を行った場合破壊される。このカードが自分フィールド上を離れた次のターンのスタンバイフェイズ時、ゲームから除外されている「??」または「四神天青龍」1体を特殊召喚する。このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在するモンスター1体を特殊召喚する。このカードは自分フィールド上を離れる場合ゲームから除外される。

「ソラはこいつにやられたのか…。」

アルフォスは朱雀を睨み付けた。

「貴様だけはズタズタに切り刻んでくれる！オレは……何だ！！？」

いきなり次元の壁が崩れ、この異空間が崩壊し始めた。

「…デュエルはここまでだな。神の力にこの空間が耐え切れなくなつたらしい。」

「何!？」

2台のD・ホイールが走っているこの光の道の先が、一層強い輝き

を放ち、元の空間…マグマに囲まれた部屋に繋がった。

「ぐああああああっ！！！」

アルフォスはスピードを落とせず、無理やりグランドフォースを横転させてマグマに落ちるのを防ぎ、グランは四神朱雀が置いてあった祭壇の前でギリギリ、ドリフトしながら止まった。

「アルフォスっ！！！」

ソラが倒れたアルフォスに駆け寄った。グランは神のカードをアルフォスから奪い取るうとして、アルフォスの人差し指にはめられているアーティスを狙って歩き出す。

「くっ…！！」

アルフォスは地面に叩き付けられた反動で動けない。アルフォスは究極神だけでもと思い、3枚の神をアーティスから取り出して直接手に持った。

「…そうだ！！」

しかし、ソラがその3枚のカードをアルフォスの手から取るうとした。当然アルフォスは、グランに気づかれないように小声で止めにかかる。

「よせ！これは人間が触れたら…！！」

究極神は人間が触れれば即座にその力に耐えきれず、命を失ってしまふ。しかし、ソラはアルフォスの言葉に返した。

「でも、これを奪われたらアルフォスは死んじゃうんだよ!？」

アルフォスの命はこの3枚の究極神によって保たれている。3枚とも失えば、アルフォスは間違いなく命を失う事になる。

「しかし…!」

ソラはアルフォスの手の3枚のカードを取った。次の瞬間、3枚のカードは強い輝きを放つ。

「きゃあああああっ!?!」

「むっ!?!」

グランは何事かと驚いて足を止めた。輝きが収まると、何とソラは無傷でそこにいた。アルフォスは即座に体力を回復させて立ち上がった。

「なぜ究極神に触れて…!」

究極神は自らが創ったもの…つまりアルフォスにしか操ることはおろか、触れる事もできない。だが、ソラは神に触れて無傷でいる。カオスもアルフォスも驚愕した。一方で、グランは何か攻撃が来るのかと身構えた。そしてソラが、驚きの言葉を口にした。

「全部……全部思い出した。」

「何!？」

アルフォスは焦る。カオスと共に消したソラの記憶が戻った事が、アルフォスにはショックだった。だが、続けてソラが言った言葉は、そのアルフォスとカオスが考えていた記憶についての事だけではなかった。

「前世の更に前：私がどこで生まれたのかも。施設でじゃなくて生まれれた時に貰った名前も。全部。」

この言葉にグランが反応し、攻撃では無いとわかった瞬間、アルフォスに突進した。だがアルフォスは、一瞬驚いたものの、すぐにアイリスを剣に変えて、グランの振り下ろした大剣をを防いだ。次の瞬間にはアルフォスが押し、グランを薙ぎ払った。今度はグランが地面に叩き付けられた反動で、少しの間動けない。ソラはその間に話を続ける。

「私は…私が生まれた時に貰った本当の名前は…“イヴ”」

「“イヴ”…。」

その昔、神の園から追放された少女の名…。

「それで…私を生んだ…ううん、創ったのは紛れもなく…この3枚

の究極神だよ。」

「何だと!!!??ではお前は紛れもなく...。」

エデンより追放されたイヴと同名だが、究極神によって誕生したならイヴの生まれ変わりであるという可能性はゼロだ。

「うん、アルフォスの妹って事になるね。」

ならば天神皇は1回以上転生した後に手に入れたという事になる。そんなことを考えなくとも、オレにとってもカオスにとっても喜ぶべき事実だろう。それに、神に触れる事ができたというのが何よりの証拠。こんな状況でなければ飛び上がるだろうな。

「...ソラ...。いや、イヴか。イヴ、お前は一体、いつ誕生した?」

「アルフォスが暗黒神を倒した直後、記憶をなくした時だと思う。それからすぐに過去に飛ばされて、その時間軸で3回は転生したかな。」

「貴様...よくもやってくれたな...!!」

だがここで、グランが起き上った。そのままアルフォスに突っ込む。

「アルフォスには指1本触れさせない!アレス、お願い!」

イヴは咄嗟に天神皇アレスを呼び出し、グランと対峙させた。グランは止むを得ず、突っ込んでいた勢いを急停止した。その隙にイヴはアルフォスに究極神を返した。



「小娘：貴様あ！！」

グランはアレスの攻撃を回避し、召喚者であるイヴを狙う。突然の不意打ちにイヴはダメかと目を瞑ったが、その攻撃はアルフォスに阻まれた。アルフォスは恐ろしいほどの冷酷な表情でグランを見据えた。グランは一瞬だが、その表情に恐怖して思わずアルフォスから離れた。

「イヴ、2人を連れて外に出ろ。グランはオレ一人で片づける。」

「でも…！」

「安心しろ、オレは必ず戻る。」

人間の体力では、この空間にいるのもう限界のはずだ。イヴも魔道服で水分を失うのを防いでいる状態。暑くないわけではないから、いつ体力がなくなるかわからない。

「…絶対だよ？」

「ああ。」

アルフォスが返事をする、イヴは意識は回復していたが、体の動かない2人に華奢な肩を貸して、このマグマの部屋から脱出していた。

「…さあ、これでこの空間にはオレと貴様だけだ。」

アルフォスは部屋の出口すべてに魔力の弾丸を飛ばして崩れさせ、逃げられないようにした。

「さっきの決着と行こうか。四神天など蹴散らしてくれる。」

この部屋の入口を崩したせいで、建物全体の構造に影響しただろう。この神殿も、もって残り15分くらいか。…早めに決着をつけるとしよう。

「貴様の力では古の神である四神天には及ばない事をその魂に刻んでやるわ！」

「デュエル！」

U l f o c e v s . G r a n

「オレの先攻。オレは『炎熱伝導場』を発動。デツキから『ラヴァルのマグマ砲兵』と『ラヴァル炎火山の侍女』を墓地へ送って、侍女の効果を発動する。デツキから続けて2枚の侍女を墓地へ送り、最後にマグマ砲兵を墓地へ送る。」

アルフォスの手には5枚のカードが現れ、それをグランに公開すると、アーティスに戻した。

「一気に5枚…！」

「魔法発動、『真炎の爆発』！！」

マグマが火柱として上がり、火柱が収まると、そこには5体のモン

スターがいた。アーティスから現れた5体のモンスターカードがはじき出され、アルフォスの目の前で消えた。空中がアルフォスの力ードゾーンだ。

「神を見るがいい、オレのフィールド上のモンスター3体を神への供物にする！！」

神殿全体が究極神のエネルギーを受けて揺れる。そのせいで、ついに神殿内部の洞窟が崩れてしまった。だが、そんなことは2人とも気にしていない。

「遙か次元の彼方より、究極の力を得て光臨せよ！！神光臨、『究極神帝オシリス』！！」

アルフォス達にはわからないが、神殿の外の天空から、4000mを超える赤い龍が現れた。その姿は三幻神の1体、オシリスの天空竜でもあるが、その力は三幻神の最高位、ラーの翼神竜と比較しても大きさ、パワー共に遙かに上回る。

「『究極神帝オシリス』の攻撃力は手札×1000、よって4000だ。更に、残った侍女とマグマ砲兵でシンクロ召喚。来い、『A・O・Jカタストル』！」

アルフォスは手加減する事は全くなく、次のターンにはもうグラン

を倒すつもりだ。周りのマグマは勢いを増し、後5分もすればこの部屋全体を飲み込むくらいの噴火をするだろう。

「ターンエンド。」

「オレのターン!!」

グランがデッキの一番上のカードに手をかけ、ドロージュウとした時だった。

「待て、グラン!!」

突然グランとアルフォス両者の間に、空間の裂け目ができ、中から見覚えのある姿の男が現れた。

「メローア!？」

アルフォスはいよいよ追いつめられたかと思い、身構えた。しかしメローアは、アルフォスにデュエルを挑んでは来ないで、グランと向き合った。

「こいつに挑むのはやめろ。」

「何だと!？」

「こいつは四神天で勝てるほど甘い相手じゃない。この神殿ももう

持たない、脱出するべきだ。」

「敗北者が何を言う。こんな青二才、四神天の力をもってすれば！」

「アルフォスは我々とは次元が違う。今は退いてリベンジするべきだ。」

2人の口論を目前にして、アルフォスはかなり暇そうに立っている。その間にも、マグマはせりあがってきており、アルフォスはマグマで部屋が満ち溢れようと耐えられるが、メローアとグランは人間。マグマに巻き込まれて平気なはずがない。

更に、リベンジの意見を肯定させるかのようにマグマが噴き出す。いつ部屋がマグマで溢れてもおかしくない状況まで来てしまった。

「……チツ、アルフォス！！こいつは貴様に預けておいてやる！いずれ貴様は殺す、覚悟しろ！」

グランはデュエルを強制終了し、次元の扉の彼方に消えた。アルフォスは飛んできた四神天青龍のカードを取り、封じていた出口の岩を破壊した。アルフォスが部屋を出た直後に、マグマが噴出した。

「急がなければ……！」

アルフォスは走って出口に向かう。来た時とは比べ物にならないスピードで階段を駆け上がり、神殿から脱出した。外は視界が見えないほどの大雪が降っていたが、アルフォスが脱出した直後に神殿が崩壊し、マグマが出てきたことで、赤いマグマの色だけは鮮明に見える。

「アルフォス、早くっ！」

イヴが大声でアルフォスを呼んだ。急いで戦艦に乗り、マグマに巻き込まれないように上空に飛び立つ。

「……………間一髪だった。……………ぐはっ!？」

アルフォスがイヴに思いきり抱きつかれ、バランスを崩して背中から倒れた。

「心配した…。」

「それは悪かったな。だが、カードは取り返してきたぞ。…朱雀は持って行かれたがな。」

青龍がまだこちらの手にあると聞いて、優里と雄平は安堵したが、朱雀を持って行かれたというのは厳しい事実だ。今回の任務は四神天朱雀の回収。それは失敗したという事になるからだ。

だがアルフォスにとっては、今回は朱雀を見逃したのを踏まえても、南極に来た意味はあった。ソラだった少女の生い立ちのすべて、転生してからつけられたのではなく、元から持っていた本当の名前がわかったからだ。アルフォスはようやく、かつての仲間達ですら開けなかった『スレイ』の固い心を、イヴがいとも簡単に開いた理由を理解した。

「それでも、アルフォス君が無事でよかった。」

命とカードは代えられない。だからアルフォスはイヴが人質になった時に、迷わず四神天青龍を渡した。今の優里のセリフは、それと同じような意味だ。

「はあ……オレはGhost of chronicleがこじま  
で強いとは思ってなかった。帰ったらデッキの強化だな。」

雄平は今回の敗北が身に染みたようだ。

これから襲いくる敵も、更なる強さを備えてくることは安易に想像  
できる。優里と雄平は、自身の実力を高めるために、より勉強する  
事を心のうちに決めた。

アルフォスとイヴは、個々の実力はもう伸びないレベルまで到達し  
てしまっているので、万が一タッグデュエルをする事になった時の  
事を想定して、連携を強化する事にした。

次回へ続く。

第25話 第二の四神天 朱雀 後編（後書き）

次回「アルフォス&イヴ vs 優里&雄平」

イヴ「ソラ改めイヴです。よろしく」

カオス「さあ、大分前に行ったルートの予想アンケートの結果は妹ルートで決定だ。答えてくれた人に礼を言う。」

アルフォス「さらに義妹ではなく実妹：超展開もここまで来ると慣れっこだな」

イヴ「それは…まあいいや、今日の最強カードはコレ」

『四神天朱雀』  
レベル10 神属性 幻神獣族・効果 ATK/4000 DE  
F/4000

このカードは「四神天」と名のついたカードの効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上に存在するモンスター3体をリリースしなければならない。このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にならず、戦闘を行った場合破壊される。このカードが自分フィールド上を離れた次のターンのスタンバイフェイズ時、ゲームから除外されている「??」または「四神天青龍」1体を特殊召喚する。このカードが特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在するモンスター1体を特殊召喚する。このカードは自分フィールド上を離れる場合ゲームから



除外される。

イヴ「第2の四神天、朱雀だね。特殊召喚に成功したとき、自分の墓地からモンスター1体を蘇生できるよ。」

アルフォス「だが朱雀は戦闘を行った場合破壊される。それも能動的に青龍に繋げられると思えばメリットだな。」

カオス「なににせよ、今回のアルフォスの苦戦ぶりからして、かなりの強さを誇るだろう。先が怪しくなってきたな。」

アルフォス「不吉なことを言うな。」

イヴ「じゃあまたね!」

## 第26話 模擬タッグデュエル（前書き）

遅れました。ここ最近いろいろありましてですね・・・。

### 最近の出来事

カラクリはパーツが集まらないなあ…。

ドラゴニックレギオンはデッキとしての成り立ちはアレですがパーツは優秀ですね。2〜3箱買おうと思います。

## 第26話 模擬タッグデュエル

四神天朱雀回収の任務失敗より数日後。アルフォスだけが知っていた『ソラは義妹』という事実が覆され、本来の名前はイヴであり、真正正銘の実妹であることが判明してからというもの、アルフォスから避けがちだったイヴの誘いをアルフォスは断らなくなった。例えば、一緒に寝るとか、街に買い物に行くなどだ。義妹と思い込んでいた少女に対する、他人だったゆえの素っ気なさが消えたのだ。任務失敗の翌日の後始末が大変だった。海馬コーポレーションと大卒への報告は、アルフォスは平気な様子だったが、優里と雄平は悔しそうにしていた。また、海馬が多少機嫌を損ねたりと面倒な事もあったりした。

今日は日曜日で、大学は休み。更に任務に参加した4人には追加で3日の休みがある。アルフォスとイヴは、今は庭でティータイム中、優里と雄平が来るのを待っている。2人を呼んだのは他でもない、タッグデュエルの連携の確認と強化のためだ。そのついでに、イヴが持っている余りのカードの中に、2人が気に入ったものがあれば強化に使ってみるといふプランもある。4人の敗北は大学の生徒達や教師陣の戦意にダメージを与える結果となった。

「四神天青龍はまだこちらの手にある。白虎と玄武さえこちらで回収できれば…。」

「チャンスはあるよね。」

アルフォスとイヴは適当な事を話しながら、紅茶を飲む。アルフォスが目の前に置いてあるクッキーを1つ摘まんだ。感想も何も言わ

ない上に、表情1つ変わらない。しかし、次のを掴まんだのを見ると、どうやら気に入ったようだ。

ちなみに、イヴはアルフォスとお揃いの色である黒いドレスを着ている。アルフォスに無理を言っ作ってもらったものだ。

あれからの変化としては、イヴの体は半分くらいが人間と同じ構造をしているかなり特殊なアンドロイド体であり、服の着脱と入水が可能など以外は、殆どアルフォスと同じ特徴があるという事がわかった。そんな特徴と、常時発動している魔法を知らないイヴは、今まで普通の人間と同じように風呂に入り、食事をして生きてきた。

もちろん、習慣になっっているそれはこの先も変わらないだろう。ただイヴは、アルフォスのように戦闘用の形態になる事もできないし、力も弱く、コアは人間の心臓がある部分にあるなど、殆どが普通の人間に近い。アルフォスのアンドロイド体が性別無しのタイプなのに比べて、イヴは女性タイプだったり、違いは多数ある。アンドロイド体の機能が起動したのは、イヴが記憶を取り戻したのと同時だ。それまでは心臓や血管に当たる部分がコアや特殊な管である事以外は、何もかもが人間と同じだった。

アルフォスは一体、なぜイヴがアンドロイド体だとわかったのか。それは記憶を取り戻したイヴの体内で永久機関装置の反応を見つけたからだ。もしもこれを感知できなければ、常にイヴについて歩き、生活を観察していない限り、アルフォスは未だにイヴを普通の子だと思っっていたことだろう。

しかし、アンドロイド体の耐久度などは人間と変わらない故に、生活が今までと変わることはない。

「まあ、暫くは待つんだな。…こんな話はやめよう、面白くない。」

アルフォスは剣を太陽の光に掲げて見ながらそう言った。鋭い光が反射されて、屋敷の窓に当たっている。

「…こんなところか。」

剣を指輪に戻して、コーヒーを飲む。……今日は苦い。

「あ、このカードくない？」

イヴがアルフォスの目の前に置いてあったカードを1枚指さして言った。デッキ調整をしているうちに抜けたものだろう。

「ん？ああ、いいぞ。」

「ありがと。」

椅子に座ってコーヒーを飲みながら、見た目は年頃の兄妹がデッキ調整をしているのは何とも珍妙な光景だ。

「お嬢様、アルフォス様、おかわりはいかがですか？」

横からレーヴェンが訊いてくる。アルフォス達は、優里たちがここに来るまでもう少し時間があることを見越して、もう1杯飲むことにした。2人はレーヴェンにおかわりを頼むと、テーブルの上の菓子を食べる。ちなみに、レーヴェンがアルフォスよりもイヴの事を先に呼ぶのは、レーヴェンがイヴのお付きのためにいつもの事だ。

「んー…なかなか来ないね。」

「ここまで距離があるから当たり前といえば当たり前だな。」

「おかわりをお持ちしました。」

「うん。」

イヴが2人分のコーヒーを受け取った。

「はい。」

「ああ。」

イヴからコーヒーを受け取ると、アルフォスは自分の目の前にカップを置いた。そうすると、イヴは自分が思っていたことをアルフォスに話した。

「最初に会った時の事を覚えてる？」

「まだ最近の事だ…忘れるわけがない。」

人間の脳と違ってメモリーはリセットや破壊、コアに干渉でもしない限り、その記憶を失わないからな。

「あの時…私と同じ感じがするって言ったよね。」

「そうだな。多分、その感じはオレ達が兄妹の関係だったからなんだろうな。」

「…言おうと思ってたのに。」

「それは悪かったな。」

先日、実妹だとわかった時には喜びよりも驚愕の方が強かった。随分と歳の離れた兄妹もいるものだな。生身で生きていた時代の事し

か数えなければ3歳差か。

アルフォスは多数の考え事をしながらコーヒーを飲む。だが、その考え事の中に敵の事は一切ない。この前まで多少陰りがあつたくらゝの笑顔から、その陰りが消えた事が喜ばしいようだ。

「……………ん？」

車の走る音が聞こえる。どうやら、使いに出した執事が、優里と雄平を連れて帰ってきたらしい。

「やっと来たか。待ちくたびれたぞ。」

アルフォスはコーヒーを一気に飲んでカップの中身を空にすると、席を立ちあがって、玄関に立ってかけてあつたデュエルディスクを取りに向かう。その間に優里と雄平は車から降りた。

「…この様子だと、さっきまで二人でおやつでも食べていたようね。今日は服の色までお揃いなんて…」

優里が周囲を見渡して、テーブルに置かれている2つのコーヒーカップと、残っている菓子の盛り合わせを見ながらそう言い、更に決して嫌味ではないが、仲が良くていいわね、と加えた。

そんな話は聞こえていないアルフォスがデュエルディスクを持って戻ってくる。

「待っていたぞ。タッグ用の調整はしてきたな？」

「当然だ。」

珍しく雄平が返事をした。いつもなら優里が返事をするところだろ

う。前回の敗北から何かを学んだらしく、自信ありげな様子だ。

「…自信があるのはいいことだ。だが……………」

オレは多少プレッシャーを放つ。…なるほど、このくらいでは怯まないか。グランのプレッシャーは相当なものだったみたいだな。

「その自信、オレ達を相手にどこまで持つかな…。」

「そう簡単には負けないわよ。」

自信ありげなのは優里も同じか。

「デュエルの前に一応タッグデュエルのルールを説明しておこうか。ライフは共有で16000ポイント、フィールドと墓地、手札などは共有しない。ターンは例えてオレから始まり、次にお前たちのどちらか、イヴ、そしてまたお前たちのどちらかという順だ。」

「OKよ。」

「そして…オレはこのデュエルディスクを使う。通常の500倍の体感ダメージを負う改造デュエルディスクをな。」

イヴがデュエルディスクを玄関まで取りに行っている間にデュエルディスクの説明をする。イヴに聞かれたら、そんなものをつけるのはやめると言われるからな。

「…!!」

「わかるだろう、100ポイントのダメージは50000ポイント



分の体感ダメージになるわけだ。」

闇のデュエルでもここまで体感ダメージは酷くない。だが神の一撃はライフの残りに関係なく、現実にオレの体力を奪っていく。それに慣れるための練習のような感じだ。

「だがオレの体は少々特殊でな、その程度のダメージでは微動だにしないぞ。遠慮はいらない、死ぬ気でかかってこい。」

敗北から何を学んだのか、オレに見せてもらおう。限界を超えられなくとも、敗北から学ぶ事は多々あるはずだ。

「お待たせ。」

「さて…イヴも戻ってきたことだし、始めるとしよう。オレ達にとってはどうでもいい話だが、お前達にも時間という都合があるだろうしな。」

「悪いけど、負けたくないから…本気で行くよ?」

イヴは本気だ。イヴはその時、アレスに意識を乗っ取られていたから知らないが、アルフォス以外に負けた事のないイヴがグランに負けた時に受けたショックは意外に大きいものだった。

「いいわ、そっちに神のカードがあるなら、いい練習になる。」

「その通りだ。手加減はしない。」

イヴが新型のデュエルディスクを展開した。以前アルフォスが使用していた、永久機関を搭載したデュエルディスクを利用して作られ

たもので、イヴの前に浮いている。作った目的は2つ、腕の負担にならないというメリットと耐久性の向上のみ。

「アルフォス…あんたのその無駄な技術力には脱帽するわ。」

「…良い意味で受け取っておこう。」

オレのこのアンドロイド体でさえ、オレ自身で造ったものだ。デュエルディスク1つ作るなど造作もない。

『デュエル！』

U l f o c e & a m p ; E v e   v s .   Y u r i & a m p ; Y u  
h e i

「先攻は私がもらうわね。私はカードを2枚伏せて、『イエロー・ガジェット』を召喚するわ。このモンスターが召喚に成功した時、デッキの『グリーン・ガジェット』を手札に加える。ターンエンドよ。」

流れるような手順で優里はさっさとターンを終える。やはり思考時間は極めて短い。以前とあまり変わらない戦術にアルフォスは疑問符を浮かべた。変わったところといえば、ガジェットを守備表示で召喚したところくらいだろうか。

Y u r i

L P 1 6 0 0 0

H a n d :   4

Field

イエロー・ガジェット DEF1200

魔法・罫

伏せ：2

「私のターン。……あれ？」

イヴは手札を見て呟いた。イヴから見たら手札事故だ。

「…困ったなあ。魔法カード『天空の鐘』！手札からチューナー以外の光属性モンスター『アローアダイ・エピアルテス』を捨てて、デッキから2枚ドロ。『極天将ディオメデス』を召喚、カードを1枚伏せてターンエンド。」

Eve

LP16000

Hand：4

Field

極天将ディオメデス ATK1000

魔法・罫

伏せ：1

「オレのターン、ドロ。…『暗黒界の狂王ブロン』召喚。カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

「ほづ。。」

暗黒界か、味のあるデッキを使う……。だが、一順目なら攻撃できないといえど、ブロンを攻撃表示とは笑止。

Y u h e i

L P 1 6 0 0 0

H a n d : 3

F i e l d

暗黒界の狂王ブロン ATK1800

魔法・罫

伏せ：2

「オレのターン!!」

その場にいるだけで突き刺さるような感覚に陥るほどの冷たいプレッシャーが優里と雄平を襲う。グランのプレッシャーとは全く違う方向で恐ろしいものだ。グランが押し潰すようなプレッシャーを放つのに対し、アルフォスののは相手を貫く。相手の自信を粉々にする鋭い槍が、アルフォスの全身から放たれているのだ。だが、優里と雄平の表情は崩れない。

「この程度の重圧ならば自信は砕けないか。グランとの戦闘経験はお前達を大きく成長させたみたいだな。来い、『機皇兵ワイゼル・アイン』!更に永続魔法、『Machine emperors battle mode』と『Machine emperors emergency call』発動。そしてカードを伏せターンエンド。」

U l f o c e  
L P 1 6 0 0 0  
H a n d : 2  
F i e l d  
機皇兵ワイゼル・アイン    A T K 1 8 0 0  
魔法・罨  
M a c h i n e    e m p e r o r s    b a t t l e    m o d e  
M a c h i n e    e m p e r o r s    e m e r g e n c y    c a l l  
伏せ：1

「私のターン、ドロー。」

ワイゼル・アインの攻撃力は1800…私達のモンスターじゃ、精々相打ち…。でも、攻撃力が足りないなら他で補う。

「魔法発動、『ガジェット・ジャンク』！手札からガジェットモンスターを墓地へ送って、そのモンスターの攻撃力の2倍分、相手モンスターの攻撃力を下げる！」

優里がグリーン・ガジェットを捨てた事で、緑色の光線がワイゼル・アインに向かう。

「面白い真似をする…。だがカウンター罨発動、『機皇槍突天』。相手が攻撃または効果の発動をした時、それを無効にして相手フィールド上のモンスターを2体まで破壊する事ができる。但し、この効果を発動する時、手札とフィールドから『機皇』と名のつくカードを1枚ずつ墓地へ送る。オレは手札の『機皇神マシニクル』？」  
とフィールドのワイゼル・アインを墓地へ送る。」

しかし、それは突然現れた高速回転をしている円形の何かによって止められ消滅した。更にその物体が回転を止め、十数の何かに分裂し、アルフォスの周囲に止まる。それは16個の金属の刃だった。先端の方は優里たちのフィールドに向いている。アルフォスがイエロー・ガジェットと暗黒界の狂王ブロンに目を向けると、刃はその2体に向かい、それぞれを串刺しにした。更に槍が引き抜かれ、再び円形のカッターになって襲いかかり、2体のモンスターは真つ二つになった。

「…エグい罠を使うわね。」

イヴが軽く青ざめるほどのえげつなさはあるらしい。イヴには悪いことをしたな。

「でもこのターン、私はモンスターを召喚してない。『レッド・ガジェット』召喚！効果でデッキの『イエロー・ガジェット』を手札に加えるわ。『レッド・ガジェット』でアルフォス君にダイレクトアタック！」

「永続魔法『Machine emperors emergency call』の効果発動。機皇モンスターが墓地へ送られたターンに1度、墓地から機皇モンスター1体を守備表示で特殊召喚する。光臨せよ、『機皇神マシニクル』?!！」

「機皇神!?!攻撃は中止よ!！」

マシニクルの守備力は4000、たとえリミッター解除を使ったとしても、レッド・ガジェットではマシニクルの守備力を超えられない。当たり前前の判断か。

「ターンエンド。」

Yuri

LP 16000

Hand : 3

Field

レッド・ガジェット ATK 1300

魔法・畏

伏せ : 2

「私のターン！」

うーん…攻撃してくればアレスを召喚できたんだけどなあ…。アルフォスのフィールド上には機皇神マシニクル…多分狙われるのは私だし、ダメージを受けてアルフォスの足を引っ張りたくない。

「私は『アローアダイ・エピアルテス』を召喚。その効果で、手札に無い『アローアダイ・オートス』をデッキから手札に加えるよ。エピアルテスで『レッド・ガジェット』を攻撃！」

「待てイヴ！」

「へっ!?!」

アルフォスが突然止めるが、既に攻撃宣言は終了している。優里が微笑に笑った。

「かかったわね!畏発動、『カウンターギア』!ガジェットが攻撃

対象になった時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊するわ  
！」

無数のギアが出現し、高速回転を始めた。

「その効果は拒否する！永続魔法『Machine emperors battle mode』第1の効果を発動。自分フィールド上の機皇モンスター1体を生け贄に捧げ、相手が発動したカードの効果が無効にする！『機皇神マシニクル？』を生け贄にする。そして『Machine emperors emergency call』の効果により、ワイゼル・アインを墓地から復活。」

しかし、ギアはマシニクルが自爆した破片によってすべて撃ち落とされ、その間にエピアルテスはガジェットを攻撃して破壊した。

「くっ……。」

「『極天将ディオメデス』でダイレクトアタック！」

Yuri LP16000 15800 14800

「この瞬間『Machine emperors battle mode』第2の効果発動。相手にダメージを与えた時、その数値分だけ自分フィールド上の機皇モンスターの攻撃力をアップする。与えられたダメージは合計1200、よってワイゼル・アインの攻撃力は1200ポイントアップし、3000になる。」

機皇兵ワイゼル・アイン ATK1800 3000

「レベル4で攻撃力3000!？」



まずいわ…これ以上ダメージを与えられたら、アルフォス君の機皇モンスターは手が付けられない。早いところあの永続魔法を除去しないと。…幸い雄平のデッキは暗黒界。あのカードが墓地へ送られれば、永続魔法は破壊できる。

「お前達が何を考えているのかは手に取るようにわかるぞ…。暗黒界デッキならば龍神グラファの効果によって、オレのフィールドの永続魔法を破壊できると思っっているのだろうか…それは無駄な事だ。」

「なっ!?!」

「この2枚の永続魔法は自分の墓地の機皇と名のつくカードを墓地へ送る事で、1ターンに1度破壊を免れる効果がある。」

2枚とも破壊するには少々骨が折れるだろうな。

「『Machine emperors emergency all』第2の効果を発動。自分フィールド上の機皇モンスターの攻撃力を0にする事で、ダウンした攻撃力以下の攻撃力を持つモンスターを互いにデッキまたは手札から特殊召喚する。」

ダウンしたワイゼル・アインの攻撃力は3000、よってオレを含めて4人ともデッキから攻撃力3000以下のモンスターが召喚できる。この本当の狙いは…。

「オレは『機皇兵グランエル・アイン』を特殊召喚する。」

「なら、私はデッキの『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚

するわ。」

攻撃力3000以下…私のデッキならすべてのモンスターが召喚可能。ここで大型モンスターを特殊召喚しておけば、少しは壁になるはず…。

「オレはデッキの『暗黒界の龍神グラファ』を特殊召喚。」

…アルフォス、オレ達に最上級モンスターを特殊召喚させてまで何を狙っている？

「私は、手札の『アローアダイ・オートス』を特殊召喚！メインフェイズに移行して、レベル3のアローアダイ2体にレベル4のディオメデスをチューニング！！」

「…！！」

「フツ…。」

そう、これがオレの狙い。いち早くイヴの天神皇を光臨させることで、フィールド上を制圧するのを兼ねて、イヴの守りを堅くする。天神皇を召喚できなければイヴの守りは弱いからな。

「遙か空の彼方に迸る神の怒り、地上に舞い降り、その力を振るえ！シンクロ召喚！」

激しい魔力の奔流が庭全体を包み込む。次第に膨張して、天空に迸った後、大爆発した。

「『天神皇アレス』!!」

爆発が収まった場所には、イヴが常に最初に呼び出す天神皇の姿があった。

「アレスの効果!1ターンに1度、相手モンスター1体を破壊できる。私は、グラファを破壊!ブレイクスピア!」

鋭い4mほどの槍が、漆黒の龍を貫き、地に沈めた。雄平の表情は冷静なまま崩れない。イヴはグラファの効果を知らないが故に、オートレスではなくグラファを破壊する事を選んだ。

「ターンエンド。」

Eve

LP16000

Hand: 4

Field

天神皇アレス ATK3500

魔法・畏

伏せ: 1

「オレのターンだな。」

ふむ…イヴのフィールドには前回優里を追いつめた天神皇アレス。あいつは破壊してもエンドフェイズ時に蘇ってくる。なら、墓地から除外するカードが来ない限りは破壊するのは無意味だな。

「オレは『暗黒界の尖兵ベージ』を召喚。そしてベージを手札に戻し、墓地の『暗黒界の龍神グラファ』を復活！」

「!?!」

「やはりそうきたか…。」

イヴがグラファを破壊したのは何らかの策があるからだと思っていたが…単純に効果を知らないだけだったか。まあいいだろう。

「グラファでワイゼル・アインを攻撃！」

闇のプレス攻撃がワイゼル・アインとアルフォスを飲み込んだ。

「ぐっ…おおおおおお!!?!」

アルフォスが勢いよく吹き飛び、後ろの森の木に叩き付けられる。イヴが何か恐ろしいものを見る目で、吹き飛ばされたアルフォスを見た。勿論、なぜ通常のデュエルで吹き飛ぶのか不思議に思っているのだ。

U l f o c e    L P 1 6 0 0 0    1 3 7 0 0

「な、なんで…!?!」

「くっ…思ったよりも威力は大きいな。体感ダメージ500倍は出力が大きかったか？」

実際にアルフォスが受けたのは2700の500倍…135万ポイ

ント分のダメージだ。攻撃力4000前後の神の一撃を身に受けるよりも堪えるだろう。

イヴは何が起きたのかとアルフォスのそばに駆け寄った。今の独り言は、声が小さかったために聞こえているわけがなかった。

「大丈夫!？」

「……ああ。」

アルフォスはゆっくりと起き上がると、元の位置に戻るために歩き出した。しかし、予想よりもダメージは大きいようだ。イヴの掛け声に対する返事が僅かに遅れたのがその証拠。普段なら考えてから返事をしない限りは即答だ。見た目は無傷なために、ダメージの深さは非常に判断しにくい。

イヴは暗い表情で、戻っていくアルフォスについていく。イヴからしてみれば、何も起こらないはずのデュエルで異常な事が起こってアルフォスが傷ついている。それだけで表情を暗くするには十分な理由だった。

「……イヴ、心配かけて悪いな。だが、ダメージに慣れておかなければ、いざという時に参ってしまうのだ。」

神の一撃は例え攻撃力4000でも、対戦相手の命を奪うほど強力なものだ。オレはそう簡単には倒れないだろう。だが、もしかしたらイヴの盾になる日が来るかもしれない。

雄平はこの威力を目の当たりにして、本当に本気でデュエルを続けているのかと迷う。しかし、その考えは、すぐにアルフォスに見透かされてしまった。

「さあどつした、まさか多少異常事態が発生したからと言って、ここで中断するつもりか？」

「……………。オレはこれでターンエンド。」

Y u h e i

L P 1 4 8 0 0

H a n d : 4

F i e l d

暗黒界の龍神グラフィア     A T K 2 7 0 0

魔法・罫

伏せ：2

「そつだ、それでいい。オレのターン！」

とは言つたものの…思っていたよりはダメージが大きい。あまり食らいすぎると、流石に破損場所の修復には時間がかかるか。

「オレは『スカイ・コア』を召喚。魔法発動、『機皇槍刃撃』！自分フィールドの機械族モンスター1体を破壊し、このターン、自分フィールド上の機皇モンスターに貫通効果を与える。」

巨大な槍がスカイ・コアに突き刺さり、スカイ・コアは機能停止とともに爆発した。貫通効果は意味がないが、アルフォスの狙いは機皇帝の召喚にある。

「そして『スカイ・コア』が破壊されたことよつて効果発動。手札・デッキ・墓地より、『機皇帝スキエル』、『スキエルT』、『ス

スキエルA』 『スキエルG』 『スキエルC』 を召喚。合体せよ、スキエル！」

青い色の5体のパーツがそれぞれ変形合体し、ドラゴンのような姿のロボットになった。

「スキエルの攻撃力は、各パーツの攻撃力の合計。よって2200…だが、オレは『Machine emperors emergency call』 『Machine emperors battle mode』 の効果を発動。1ターンに1度、機皇帝のパーツを墓地へ送り、そのパーツの名を持つよりレベルの高いパーツを手札・デッキ・墓地から特殊召喚する。オレは『スキエルA』を墓地へ送り、『スキエルA3』を、『スキエルA3』を墓地へ送り、『スキエルA5』を特殊召喚する。」

機皇帝スキエル      ATK0    2600

「レベル1で攻撃力2600…！」

「『スキエルA5』の効果によって、機皇帝はダイレクトアタックが可能になる！機皇帝スキエルで雄平にダイレクトアタック。ブルーブラスターカノン…！」

青いエネルギーの光線がグラフィアを避け、雄平に直撃した。

「くっ…！」

Yuhei    LP14800    12200

「そして、『Machine emperors battle

mode』の効果によって与えた戦闘ダメージ分、機皇モンスターの攻撃力を上げる。」

機皇帝スキル      ATK2600      5200

「攻撃力が5000を超えた…。」

「オレはこれでターンエンド。機皇相手には苦戦しているようなら、四神天に勝利するなど夢のまた夢！お前達の全力を見せてみる。」

U l f o c e

L P 1 3 7 0 0

H a n d :      0

F i e l d

機皇帝スキル      ATK5200

スキルT      ATK600

スキルA5      ATK1400

スキルG      DEF300

スキルC      ATK400

魔法・罫

M a c h i n e      e m p e r o r s      b a t t l e      m o d e

M a c h i n e      e m p e r o r s      e m e r g e n c y      c a l l

「私のターン！」

このままじゃ本当に機皇帝に手が付けられなくなる。かといって、イヴの天神皇アレスを放置するわけにもいかない。悔しいけれど、殆ど隙がないわ。せめて攻撃力5000を超えている機皇帝だけで



も倒さない」と。

私のフィールドにはマシンナーズ・フォートレスがいる…。これで機皇帝に自爆特攻をしかけられれば、スキエルを倒せる。でもあの永続魔法：Machine emperors emergency callの効果で、今度は機皇神マシニクル？を蘇生させられる。天神皇はモンスター効果を受けないから論外。八方塞とはこの事ね。

「優里、機皇帝を攻撃するんだ。」

「へ？」

突然、雄平が機皇帝に攻撃するように指示をした。しかし、優里はわけがわからず困惑する。

「成程…。」

機皇帝はスキエルGの効果で相手の攻撃を無効にできるが、それは対象を取る効果。フォートレスはモンスター効果の対象になった時、相手の手札を見て1枚捨てる効果がある。それを利用して、スキエルGの効果を使用させ、イヴの手札をハンデスするか、機皇帝を葬られるかの選択を強いるわけか。イヴの伏せカードはおそらく、極天将か天神皇が攻撃対象になった時に発動するカード。攻撃を防ぐ手立てはスキエルG以外無い。あとは…雄平のあの伏せカードの中に機皇帝、もしくは天神皇に対抗する手段があるのだろうか。

「わかったわ、『マシンナーズ・フォートレス』で『機皇帝スキエル』を攻撃！」

「迎え撃て、機皇帝スキエル！」

アルフォスはスキエルGの効果を使用せず、マシンナーズ・フォートレスを返り討ちにすることにした。イヴの手札の公開を防ぐのと、ダメージを優先したためだ。何より、優里と雄平もわかつている事だが、スキエルが倒されたとしても機皇神マシニクルを召喚できるスキエルが倒されても問題は殆どないのだ。

「速攻魔法、『禁じられた聖杯』！機皇帝スキエル本体の効果は無効にし、攻撃力を400上げる！」

「だがそれでも攻撃力は3000、届きはしない。」

「どうかしら？伏せていた速攻魔法、『リミッター解除』！フォートレスの攻撃力を2倍にする！」

「！！」

マシンナーズ・フォートレス	ATK	2500	5000
機皇帝スキエル	ATK	5200	3000

フォートレスの主砲がスキエルを撃ち貫き、撃墜した。その爆発がアルフォスを巻き込む。

「グッ……………ッッ！！」

U l f o c e    L P 1 3 7 0 0    1 1 7 0 0

爆風に耐え切れずに、アルフォスは地面に叩き付けられた。痛覚こそ存在していないが、アンドロイド体に多少の外傷が見られる。しかし、傷はみるみる回復し、すぐになくなった。

「（アンドロイド体のコアにまでダメージが及ぶとは思わなかったぞ…。出力の設定ミスだな。」Machine emperor emergency call」の効果によって、墓地から「機皇神マシニクル？」を復活させる。」

正直、自分の失敗とはいえかなりマズい。コアが破損したらアンドロイド体は機能停止してしまう…。仕方あるまい……………戦闘形態を解除しよう。

アルフォスは自身の内部にある永久機関のエネルギーの8割を自身の強化に回し、戦闘形態になる。それをよそに優里はターンエンドの宣言をし、それと同時にマシンナーズ・フォートレスは破壊された。永久機関エネルギーを利用していないアルフォスのアンドロイド体は、素でも絶大な耐久力を誇る。しかし、素での耐久力にはやはり限界があるようだ。

Yuri

LP 12200

Hand : 4

Field

魔法・罫

伏せ : 1

「私のターン、ドロー！」

何でかわからないけど、アルフォスだけ凄く辛そうなダメージを負ってる…。これ以上アルフォスが苦しむのは見たくない。アルフォ

スは戦闘形態になったみたいだけど、それだけダメージが大きいのかな…。

「アレスは1ターンに2回攻撃できる！優里に2回ダイレクトアタック！ウォーエンド・スピア！」

「甘いわよ！罨発動、『ギア・バリアフォース』！自分の基地にガジェットモンスターがいる時、相手モンスター1体の攻撃を無効にして破壊、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。」

「フツ、『Machine emperors emergency』第3の効果発動。このカードを破壊し、デッキから『Machine emperors genocide mode』を発動する。発動された『Machine emperors genocide mode』の効果によって、マシニクルを破壊し、その攻撃力の半分ダメージを負うことで、相手が発動した効果を無効にする。」

Machine emperors genocide mode  
はその永続効果で自分フィールド上の機皇モンスター1体を破壊し、その攻撃力の半分ダメージを受ける事によって、相手のカード効果を無効にできる。マシニクルをコストにするのは少々重いが…、このターン、確実にライフを削るためだ。2000ポイントくらいはいいだろう。

『Machine emperors battle mode』  
永続魔法

このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、1度だけ自

分フィールド上に存在する「機皇」と名のついたモンスター1体を生け贄にする事で、相手が発動したカードの効果が無効にする。また、相手が戦闘ダメージを受けた場合、その数値分自分フィールド上に存在する「機皇」と名のついたモンスターの攻撃力をアップする。1ターンに1度、自分フィールド上に存在する「T」「A」「G」「C」と名のついたモンスターを墓地へ送る事で、墓地へ送ったモンスターのカード名を含むモンスター1体を自分の手札・デッキ・墓地から特殊召喚できる。このカードが破壊される場合、1ターンに1度だけ代わりに自分の墓地から「機皇」と名のついたカードをゲームから除外する。

『Machine emperors emergency call』

#### 永続魔法

1ターンに1度、自分フィールド上に存在する「機皇」と名のついたモンスターがフィールド上を離れたターンに発動できる。フィールド上を離れたモンスター以外の自分の墓地に存在する「機皇」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。1ターンに1度、自分フィールド上に存在する「T」「A」「G」「C」と名のついたモンスターを墓地へ送る事で、墓地へ送ったモンスターのカード名を含むモンスター1体を自分の手札・デッキ・墓地から特殊召喚できる。このカードを墓地へ送る事で、デッキから「Machine emperors genocide mode」1枚を選択して発動する事ができる。この効果は相手ターンでも発動できる。このカードが破壊される場合、1ターンに1度だけ代わりに自分の墓地から「機皇」と名のついたカードをゲームから除外する。

『Machine emperors genocide mode』

e

## 永續魔法

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「機皇」と名のついたモンスター1体を破壊し、その攻撃力の半分のダメージを受ける事で、相手が発動したカードの効果が無効にして破壊する。このカードを墓地へ送る事で、自分のデッキ・墓地からレベル4以下の「機皇」と名のついたモンスターを3体まで特殊召喚する事ができる。この効果によって特殊召喚されたモンスターは攻撃できず、生け贄及びシンクロ素材とする事もできない。この効果を使用したターン、相手モンスターの攻撃は全て自分への直接攻撃になる。この効果は相手ターンでも発動できる。このカードが破壊される場合、1ターンに1度だけ代わりに自分の墓地から「機皇」と名のついたカードをゲームから除外する。

「アルフォス!？」

マシンクルが爆発し、爆風がアルフォスを襲う。

「フン…。」

U l f o c e    L P 1 1 7 0 0    9 7 0 0

しかし、爆風はアルフォスを避けた。戦闘形態のバリアによって、爆風を防いでいたのだ。イヴはそれを見て、安心したように胸を撫で下ろした。

「忘れてはいまいな？アレスの2回攻撃は確実に通るといふ事を。」

「きゃあっ!!」

Yuri LP12200 5200

2本の大槍が優里を貫いた。アルフォスと違って、最低限の体感システムしか起動していないので、見た目に反して殆ど影響はない。

「私はこれでターンエンド。」

Eve

LP9700

Hand: 5

Field

天皇帝アレス ATK3500

魔法・雷

伏せ: 1

「オレのターンだな。オレは魔法カード『暗黒界の雷』を発動、イヴの伏せカードを破壊し、その後手札から1枚捨てる。オレが捨てたのは『暗黒界の龍神グラフィア』、よって効果発動だ。」

イヴの伏せカードである神の加護が破壊された。その後に雄平の墓地から闇のエネルギーが現れ、アルフォスの永続魔法Machinemperors genocide modeを包み、破壊しようとする。

「グラフィアはカード効果で捨てられた時、カードを1枚破壊する。」

だが、次の瞬間、その闇はMachine emperor genocide modeが放った光によってふり払われてしまった。イヴとしては、神の加護を使う機会はないだろうと踏んでいた。破壊された事については特に何も思っていない。

「Machine emperor genocide mode」の効果で、墓地から『機皇帝スキエル』を除外。破壊を免れる。」

「なら『暗黒界の尖兵ベージ』を召喚。手札に戻し、墓地からグラフアを復活。更に、『死者蘇生』を発動し、もう1体グラフアを蘇生させる。2体の『暗黒界の龍神グラフア』でアルフォスにダイレクタアタック！」

「……………」

Ulfoce LP9700 4300

龍神グラフアのブレスを難なく弾き返したアルフォスは、涼しい顔でそう言った。先程までの強烈なダメージが通用しない程の防御力を誇るエネルギーを周囲に張り巡らしているからだ。

「（反応がなくなった？さっきまであんなに吹っ飛んでいたのに…。）  
カードを2枚伏せてターンエンド。」

Yuhai

LP5200

Hand: 1



Field

暗黒界の龍神グラフア ATK2700

暗黒界の龍神グラフア ATK2700

魔法・罫

伏せ：3

「オレのターン。」

雄平の残り1枚の手札は尖兵ベージ。ならば警戒するべきは2枚の伏せカード…しかし。このターンで終わりにしよう。

「オレは『Machine emperor's genocide mode』の効果発動。このカードを墓地に送り、デッキからレベル4以下の「機皇」モンスター3体を特殊召喚する。ただし、特殊召喚されたモンスターは攻撃できず、生け贄とシンクロ素材にできない。」

「一気に3体!?!」

だが攻撃は封じられ、生け贄にもシンクロにも使えない…。何を狙ってるんだ？

「出でよ、『機皇兵スキエル・アイン』、『機皇兵グランエル・アイン』、『機皇兵ワイゼル・アイン』!魔法発動、『機皇帝の賜与』、オレのフィールドの機皇モンスター1体につき、カードを1枚ドローする。よって3枚のカードをドロー。」

「手札補充…!」

「マズいわね…。」

「…………そろそろ幕を下ろそう。自分フィールド上に3体以上の機皇モンスターが存在する場合、『機皇神龍アステリスク』を特殊召喚する。」

現れたのは、機械でできた黄色の機体の長い龍のようなモンスターだ。

「アステリスクの攻撃力は、オレの場の攻撃表示の機械族モンスターの合計。更に相手はアステリスク以外の機械族モンスターを攻撃対象にできない。」

機皇神龍アステリスク ATK 4600

「バトル。『機皇神龍アステリスク』で『暗黒界の龍神グラフア』を攻撃。インフィニティー・ネメシス・ストリーム！」

「油断したな。速攻魔法、『禁じられた聖杯』！アステリスクの効果果を無効にする！！！」

「何！？」

機皇神龍アステリスク ATK 4600

アステリスクの放った光線を、グラフアは何という事もなさそうに弾き、黒いプレス攻撃を返す。それはアステリスクをいとも容易く破壊した。

Ulfoce LP 4300 1600

しかし、次の瞬間、アルフォスの後ろから黒い光が溢れだした。

『!?!?!?』

その光景にイヴさえも驚く。こんな光景は見たことがないからだ。

「…………。お前達がグランとのデュエルで得たもの…見せてもらった。

」

プレッシャーに動じず砕けない精神力、容赦のない戦術。どれをとってもレベルは高かった。

「だが…それだけでは足りないぞ。」

四神天に対抗する事はもう十分可能だろう。だが…オレとイヴに勝つにはまだ足りない。

「速攻魔法発動。」

アルフォスの後ろから溢れだした黒い光は、そのまま時空の裂け目を作り出した。

「『Machine gods time paradox』。このカードは機皇神が相手によって破壊された時、手札を1枚捨てて発動できる。」

その裂け目から5つの巨大なパーツが空間から飛び出して変形合体し、機械で作られている赤い翼竜がその姿を現した。胸の部分には他の機皇帝同様『』の形の空洞があり、その中でコアが回転して

いる。

「手札・デッキ・墓地から『時空機皇龍Hell Trance』を特殊召喚する。」

『Machine gods time paradox』  
速攻魔法

自分フィールド上に存在する「機皇神」と名のついたモンスターが相手によって破壊された場合に手札を1枚捨てる事で発動する事ができる。自分の手札・デッキ・墓地から「時空機皇龍Hell Trance」1体を特殊召喚する。このカードの発動に対し、魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

『時空機皇龍Hell Trance』  
レベル12 闇属性 機械族・効果 ATK/5000 DEF/5000

このカードは通常召喚できない。「Machine gods time paradox」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した場合、相手フィールド上に存在するカードを全てゲームから除外し、除外したカード1枚につき800ポイントダメージを相手ライフに与える。このカードが相手のカード効果によって自分フィールド上を離れる場合、代わりに墓地に存在する機械族モンスター1体をゲームから除外する。この効果は無効化されない。

「時空…機皇龍…!?!」

「オレ達をここまで追い詰めたのは驚いたからな。こちらもちり札

を召喚させてもらった。ちなみに、『Machine gods time paradox』に対してカード効果を発動する事はできない。そしてこれはバトルフェイズ中の特殊召喚。よって、攻撃権が残っている。」

「そして、ここで私のカードを発動するよ。『天神の桎梏』！このカードは幻神獣族モンスターがいる時、相手モンスター1体の攻撃力をエンドフェイズ時まで0にできる！」

「なっ！！！」

グラファに天空から雷が降り注ぎ、その力を完全に奪い去った。

暗黒界の龍神グラファ ATK2700 0

「『時空機皇龍Hell Trance』で攻撃力0になったグラファを攻撃。インフィニティー・トランス・ブラスター！」

翼竜の口から赤い極太のエネルギー光線が発射され、グラファを消し飛ばして雄平を飲み込んだ。

「うわああああああっ！！！」

Y u h e i LP5200 200

「くっ…だがライフは残った！」

次のターンがあれば、まだ逆転の目途は…

「『時空機皇龍Hell Trance』の効果発動。相手モンス

ターを戦闘で破壊した場合、相手フィールド上のカードを全て除外し、1枚につき800ポイントのダメージを与える。除外するカードは3枚、よって2400ポイントのダメージを受けてもらう。トランス・ストーム！」

Hell Tranceの周りに無数の光弾が出現し、優里達ごとフィールド上を爆撃した。その後のフィールド上には何も残っていない。

Yuri & Yuhai LP200 - 2200

「……………悔しいな。あと少しだったのに。」

雄平が冷静に言った。しかし、拳を握りしめているところを見ると、その悔しさは相当なものようだ。

「流石アルフォス君…というところね。」

「いや、賜与によるドロワーがあれば、もしかしたかもしれないぞ。」

戦闘形態を解除したアルフォスがそう言った。

「イヴのサポートがなければ、ライフを削りきることもできなかったからな。」

「…それよりも…アルフォス。何で現実のダメージが発生したのかな…。」

「…デュエルディスクの出力設定を間違えた。」

アルフォスは適当に嘘をついて誤魔化した。結果論だが間違えたというのは正しいかもしれない。アルフォスは最初、コアにダメージを負うほどの出力ではないと踏んでいたからだ。

「出力設定？」

「…ふむ。」

アルフォスはデュエルディスクを腕から取ると、デッキを取り出し、出力メーターを1にして玄関の方に放り投げた。先端の方が玄関前の芝生に突き刺さった。

「あんまり乱暴に扱っちゃだめだよ？」

「む…悪い。……外で立ち話もあれだ、イヴ。中へ連れてこい。」

「片付けたら行くー。」

アルフォスは表情を変えずに踵を返して、デュエルディスクを回収するとそのまま屋敷の中に入っていった。イヴは2人を、約束通りカードを見せるために屋敷に連れて入った。

二人が帰った後、散らかったカードを片付けるのに苦労したのはアルフォスとローヴァンだったそうだ。

次回へ続く。





## 第26話 模擬タッグデュエル（後書き）

次回「時空界の鍵」

イヴ「心配させないでよ……。」

アルフォス「…悪いな。だが、時に好きなヤツの盾になることはありうるぞ。」

イヴ「へ！？……そ、その…それって私のこと？」

アルフォス「お前以外に誰がいるんだ？まず好きじゃなかったらオレと一緒に暮らさせはしないぞ。……お前相手に恋はしないだろうが。」

イヴ「私はアルフォスのこと大好きなのに」

アルフォス「……それは多分、恋とは言わない…さて…今回の最強カードだ。」

『時空機皇龍 Hell Trance』  
レベル12 闇属性 機械族・効果 ATK/5000 DEF/5000

このカードは通常召喚できない。「Machine gods time paradox」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードが相手モンスターを戦闘で破壊した場合、相手フィールド上に存在するカードを全てゲームから除外し、除外したカード1

枚につき800ポイントダメージを相手ライフに与える。このカードが相手のカード効果によって自分フィールド上を離れる場合、代わりに墓地に存在する機械族モンスター1体をゲームから除外する。この効果は無効化されない。

アルフォス「エクスイレイズほどの破壊力はないが、一度モンスターを破壊できればそのまま勝利することもできるだろう。」

イヴ「S i n t ウルース・ドラゴンみたいなポジションかな。見た目はかっこいいよ。」

アルフォス「ではまたな。」

## 第27話 時空界の鍵（前書き）

どうも。

いよいよ冬休みが近づいてきました。受験生の方々はさぞお忙しいことでしょう…。わたしも全日暇というわけにはいかなさそうです。

最近の出来事

カラクリはちよつと諦めようと思ってます。集まりそうにないので…友達にパーツあげようかな…。



かしくない時間だ。

「何で泣いてるんだ？」

アルフォスはとりあえず、椅子から立ち上がって、イヴの傍による。すると、イヴがいきなり抱きついてくる。

「……何だ、怖い夢でも見たか？」

イヴの頭に手を置き、アルフォスは更に声をかける。

「黙っていたらわからないぞ？話してみろ。」

イヴは予知夢を見るような能力どころか、物を浮遊させる初歩的な特殊能力すらない。大方、イヴが夜中に飛び起きて泣くと言えばオレが消し飛ぶような夢でも見たのだろうが……。流石に人間の年に換算して17、18歳にもなって、そのくらいで泣くのはどうなんだ？

『汝は家族が兄一人でそれがいなくなったらどう思う？』

「（む…起きたのかカオス。それは愚問だぞ。）」

今までのオレの経験上からすると、錯乱して大陸一つを灰にしかなない。

『そうだろう？夢とはいえ、兄が消し飛ぶのはつらいものだと思うぞ。我にはわからないがな。』

「（わからないのか。）」

そもそも、イヴがそんな夢を見たとか決めつけるのは早い。イヴのこの反応から見て間違いないだろう。作業の途中だが…仕方がない、イヴも離してくれそうにないし、オレも寝てやるか。

アルフォスはイヴの隣に横になると、いつもは背を向けるが、今日は面を向けて目を瞑り、強制睡眠モードに切り替えた。

その日の朝。

「……………ヴ、…イヴ！」

「…あれ？アルフォス？」

「いい加減離してくれ。起きられん。」

3時ごろの抱き着かれたままの体勢で寝ていたらしく、アルフォスは目覚めた時にイヴにしがみつかれていた。もうその状態で20分は起きていることになる。

「ごめん…。」

「いや、別に怒ってないから謝る事はない。」

その代わりに…遅刻確定だがな。まあ講義を1つ休んだところで、この前の任務を理由にして適当に言いくるめれば、単位などはどう

にでもなるし、オレはそもそもいつでも大学を退学する事もできる。

「さて…遅くなったが朝食にしよう。」

ちなみに、イヴが大学に行く時に出発している時間の事を考えると、いつもなら今頃は大学にいるだろう。

『そういえばアルフォス。なぜソラの名がイヴになっている？』

「（ん？ああ、お前は知らなかったのか。ここ最近は何も覚えていないからな。前世以前の記憶を取り戻し、自分の名前を思い出したただけだ。」

『…では無理やり実妹にしていたこともばれたのか？』

アルフォスはこの質問が来るのを待っていた。事実を話し、カオスがどのような反応をするかずっと楽しみにしていた。

「（よくぞ聞いてくれた。……正真正銘の実妹だぞ。」

カオスが5秒ほど黙り込み、再び一言言った。

『P a r d o n n ? ？』

「（いや、だから実妹だと）」

『キタアアアアアアアア！！』

「（……。）」

ちよ、聴覚が：頭の中に直接声が響いて：ただでさえ、地の底から湧いてくるように厳格な声なのに：聴覚機能が崩壊しそうだ。だが反応が期待通りだから、これ以上余計なことは言わずに許してやるう。

『やはり長生きはするものだな！我は久々にこのような喜びを得たぞ。』

「（い、いい加減少し黙れ。）」

このままでは本当に聴覚機能の自己再生が必要になる。

『む、すまんすまん。』

それだけ言つとカオスは再び黙る。起きてはいるようだ。イヴの準備も終わったことだし、出発しようか。

アルフォスは大学に到着し、いつも通りに過ごしていた。しかし、昼。アルフォスが人気のない廊下からイヴと待ち合わせている食堂に向かう途中…。

「キツヒヤツヒヤ！！」

アルフォスに聞き覚えのある笑い声が聞こえてきた。アルフォスが1か月休校していたために、学校内で群を抜いて成績トップの、それでいてシンクロモンスターを使って大暴れしているロキだ。アルフォスとの再会は実に1か月半くらいだろうか。



「…ロキか。オレに一体何の用だ？」

「君のかわいい妹をたぶらかしに…キツヒヤツヒヤ、冗談だよ。」

途中まで言ったところで、アルフォスの視線の雰囲気が変わったので最後まで言う事なくロキは冗談だといった。

「お前には絶対に渡さんぞ…。」

「僕にはセレナがいるし。キツヒヤツヒヤ。で、用ってのはね、これの事さ。」

ロキがアルフォスに何かの欠片を投げた。アルフォスはそれを手に取り、見回す。手のひらサイズで、不思議な文様が刻まれた欠片だ。

「僕がちよつとGhost of chronicleの奴を叩きのめしたら、そいつを置いて逃げて行つたよ。当然、用途も首を絞めて吐かせただけだ。」

ロキによると、この欠片は全部で255個存在し、すべて集めると一つの鍵になるといふ。この鍵を集めているのがGhost of chronicleで、鍵の名は「時空界の鍵」というわけだ。そして、この欠片を集める時点で最も苦勞するのが、どの時代のどの場所、どの世界に存在するか全くわからないという事だ。

「こんなものをどう集めると？」

「さあね。あともう一つ。ツールとオーディンにあったよ。」

「ほう…オレもだ。」

「ある賭けをしてデュエルしたら、見事ボコボコにやられちゃってね。で、その賭けの内容ってのが、僕のいるマンションの隣の空き部屋を拠点にしたいから、僕負担で借りろって事なのさ。」

「……………」

つまり、今ロキの住んでいるマンションの両隣の部屋はツールとオーディンが住んでいるという事か…。記憶がないが、確かロキ達3人は、星界の三極神を操る北欧の三神…。この前、何かしらの資料に書いてあったし、3人ともそれぞれ三極神のカードを所持しているから間違いない。

「しかし、七聖龍があつて敗北するとはな。」

「何言つてんの？七聖龍なんか使うわけないじゃん。」

アルフォスは訳が分からなくなった。賭けをしているなら、ロキが本気を出さないはずがない。今までずっとそうだったからだ。

「さてと。もう昼だから、僕はセレナのところに行かせてもらおうよ。バイバイ」

周りに人がいないのをいいことに、ロキはレーヴァテインを一振りして、空間の裂け目からどこかへ転移した。アルフォスは理由を訊こうとしたが、先にロキに逃げられてしまった。

その後すぐに、アルフォスはイヴを待たせている事を思い出し、少しだけ急いで食堂に向かった。

「…どこだ？」

食堂についたものの、イヴの姿が見当たらない。もう食べ終わったのだろうか。

「アルフォス、遅い！」

後ろから不意に声をかけられて振り向く。誰も見当たらないが、視線を下におろすと、そこにはイヴがいた。

「悪いな、少しロキが…。」

「何でロキ？」

「ああ、この鍵の欠片をオレに渡しに来たようだ。」

欠片をちらつかせて、すぐにしまった。イヴは鍵の事を深く追及する事なく、さつさと空いている2人用の席に座った。食べたいものは何でもいらしく、アルフォスに適当に頼む事にしたようだ。喋らずともその意思を理解したアルフォスは、食堂の窓口の方に歩いて行った。昼は流石に執事が学校内に来ることはなく、屋敷で休んでいる。アルフォス達が不在の時は、家に3人執事がいれば、残り自由時間となっている。

窓口から何かを持ったアルフォスが席に戻ってきた。

「待たせたな。」

「ありがとう。」

アルフォスからカレーを貰うと、イヴはテーブルに置いてあったスプーンを取って食べ始めた。アルフォスはコーヒーだけだ。アルフォスが昼に殆ど飲み食いをしないのは、イヴもよく知っているので、以前のようにとやかく言ったりしない。

「イヴ…悪いが、オレは午後の講義に参加できなくなった。」

アルフォスとイヴはコースが同じなために、講義もすべて一緒だ。参加できなくなった場合は必ず伝えるようにしている。

「何で？」

「海馬コーポレーションから来いと言われた。」

用件を話さないあたり、重要なのだろう。他人に聞かれてもいい適当な内容なら、そもそもまず、オレの空間モニターにメールを送ってきたりしない。

「む…。」

「まあ、そう不機嫌になるな。お前が帰るころには家にいるさ。」

コーヒーを一気に飲むとアルフォスは立ち上がって、イヴの頭に軽く手を乗せてから、昇降口の方に歩いて行った。

その後、イヴの周りに女子が数人集まってきて、アルフォスが彼氏かどうかが訊かれたらしい。

昇降口。

アルフォスはいつものようにグランドフォースを起動せず、カオスの力を使って海馬コーポレーションの社長室の目の前まで瞬間転移した。空間モニターに書いてあった約束の時間は、メールが送られてきた時間の5分後。D・ホイールで走っていたのでは間に合わない。

「海馬、来たぞ。」

アルフォスはノックをせずドアを開けて、社長室に入った。海馬は特に気にした様子もなく、パソコンの画面に向いていた視線をアルフォスに向けた。

「来たな。呼んだ用件は他でもない、これの事だ。」

スクリーンが下りてきて、ある欠片の映像が映し出された。その欠片は、形こそ違いが、先程ロキに貰ったばかりの、例の鍵の欠片だ。それを見て、アルフォスはこう言った。

「…どうしてオレは一日に二回も同じ話を聞く羽目になるのか。」

「ふうん、知っていたのか。なら話は早い。」

「…まさか」

「そのまさかだ、お前にはこの鍵を集めてもらう。」

わけを聞けば、これはデュエルモンスターズ創造者のペガサス直々の頼みでもあるらしい。直接会ったことはあっただろうか？

「タダではやらないぞ。せめてこの世界にある鍵の欠片の場所くら

いは教えてもらわないとな。」

「それならすべて調べがついている。この世界にあるのは15個だ。」

海馬はオレに何かのメモリーカードを投げてきた。どうやら、鍵の場所が記されているものらしい。しかし、この世界で15個となると、かなり骨が折れそうだ。…イヴに何て言ったらいいんだろうか。いや、確かロキはGhost of chronicleの連中もこれを集めているといった。なら、全くとは言えないが、こちらから探しに行かずとも、1個持つておけば奴らは賭けの対象となる四神天か鍵の欠片を持つてくるはず。それを奪えばいい話だろう。

「（ロキが持つてきたのは1個、多分別の世界のだろう。海馬が持つているのが1個だから、あと14個…。）」

一々飛行機に乗るのも面倒な上に、戦艦を出すなどもつてのほか。大陸間移動ならカオスの力を使えばよいのではないだろうか。この後、海馬がこれで用事は終わりだと言って、帰ったアルフォスがイヴが帰ってくるまで暇だったのは言うまでもないだろう。

~~~~~数日後~~~~~

「……………」

何が楽しくてこんな砂漠地帯に来なければならんのだ。もうかれこれ1時間は歩きっぱなしだぞ。

「まあ、エジプトだからな。」

アルフォスは今、1個目の時空界の鍵の欠片を探すために、エジプトの砂漠を訪れていた。イヴを砂漠につれてくるつもりはなかったので、適当な理由をつけて家に描いてきた。多少不機嫌そうな顔をしていたが、それでも連れてこなくてよかったとアルフォスは思っている。

「（当然エジプトに来たなら冥界の扉を拜んで行くんじゃないのか？）」

「…。」

あんな瓦礫の中に埋まってしまった扉をどう探せというのだ。…鍵の欠片の反応場所はデュエルキング武藤遊戯のもう一つの人格である、アテムが冥界に還った王家の墓方面だから、一応目的地としては一致するが…。まあ、少しくらいなら見て行ってもいいか。アルフォスはそう結論付けて、王家の墓に向かった。そこでアルフォスが目にした光景は、驚きの物だった。

「…そんなバカな。」

王家の墓は…冥界の扉の安置場所はあの後崩れ去ったはずだ。そのはずなのに、何事もなかったかのように元通りになっている。あれだけ崩れれば人間の手で直すのは不可能。ならば…。

「時空界の鍵の欠片の魔力によるものか。」

時空界というだけあって、時間を操作するのは朝飯前です…ってわけか。面白い。

「…中は意外と狭いな。」

呼吸機能は元々ついてないから関係ないが、空気が籠っている。人間の体には悪そうだ。それどころか歪んだ魔力反応も…。

「ん？あれか。」

アルフォスは階段を降り切って、部屋を見回すと、冥界の7つの千年アイテムを納める石板の上に、欠片が一つ浮いているのを見つけた。

そして、それを手に取ろうとしたまさにその時。

「それを渡すわけにはいかな。」

「…またお前か。」

アルフォスの目の前に現れたのは、以前強引にデュエルを終わらせて消えたグランだった。アルフォスは面倒な奴が来たと思いつながら、さっさと欠片を手に取って懐に仕舞ってしまった。グランは次の瞬間、アルフォスを真つ二つにせんと大剣を振りかぶりながら飛びかかってきた。

「大振りだな。」

アルフォスはそれを軽くかわし、地下から脱出した。その直後に、



魔力が切れた神殿が不気味な音を立てて崩れ始めた。グランはアルフォスを追って神殿を脱出する。グランも出たところで、神殿は完全に瓦礫に埋もれてしまった。

「逃がしはしないぞ、アルフォス。」

「それはこっちのセリフだ。以前は状況が状況だったからな。ここならクレーターが一つできようとも、誰も文句は言うまい。」

言うが早いか、アルフォスがアーティスを指輪から剣に変化させ、横に振った。発生した衝撃波がグランに向かう。

「人間の体力で、いつまでこの砂漠地帯の気温に耐えていられるか楽しみだな。」

おまけに今は夏になりかけの時期。大暴れして、十分も耐えられるとは思えない。

「なめるなああッ!!」

「嘗めてなどいない。が、暴れるなら一人でやってくれ。」

アルフォスはカオスの神力を使って、空に飛び立った。当然、グランがそれを追いかけて来れるはずがない。おちよくなるように空中を浮遊してグランを見下すアルフォスに、グランは憤慨した。

「この…墜ちろ!!」

グランは大剣をアルフォスのいる方面に向かって縦に振り、衝撃波を飛ばした。

「遊びはここまでにしようか。妹……イヴを痛めつけてくれたこの前の礼をしなればな。」

アルフォスは衝撃波を一蹴して消し去ると、地上に降りた。

「気に入らんが、かたき討ちとさせてもらうか。」

アルフォスがグランに向かって突撃した。振り下ろされた剣を、グランは何とか大剣で防ぐ。が。

「そんなものでオレの一撃を防ぎきれるとでも思ったか！」

大剣はいともあっさりと言つ二つに割られてしまい、剣の先の部分が飛んで、砂漠に刺さった。前回とは違って、デュエルディスクではないようだ。

「む…オレはデュエルディスクを叩き切るつもりだったんだがな。やはり貴様もデュエルで葬るとしようか。」

フェイクに残念そうな顔をしながら、アルフォスの手に5枚のカードが現れた。

気に入らないというのはかたき討ちではない。イヴがグランに敗北したという事実だ。

「前回のようにはいかないぞ。」

イヴ以外にオレと対等に戦えるヤツはなかなかいないからな。叩きのめすついでに楽しむとするか。…イヴと言って思い出した。土産を頼まれていたな。買って帰らないとまた機嫌を損ねる…まったく、

扱いの難しいヤツだ。普段は可愛いヤツだが、一人にした時の愚痴を言い出したら止まらん。

「フン、四神天の力を味わわせてやるわ！」

グランは隠し持っていた大剣をデュエルディスクとして起動した。

『デュエル!!』

U l f o c e v s . G r a n

「オレの先攻。オレは『Sin World』を発動。」

瞬間、周囲の風景が反転した。

「何!?これは…!!」

「攻撃力だけの四神天と愚かなお前を倒すにはこのデッキが丁度いい。」

アルフォスの頭上に黒い歪みができ、元となる融合モンスターのサイバー・エンドとシンクロモンスターのスターダストが吸い込まれていった。

「元となるモンスターを墓地へ送り、『Sinサイバー・エンド・ドラゴン』『Sinスターダスト・ドラゴン』を特殊召喚。」

アルフォスの背後に、黒い鎧を装備した巨大な機械竜と星屑の竜が現れた。

「カードを3枚伏せてターンエンド。」

U l f o c e

L P 8 0 0 0

H a n d : 0

F i e l d

S i n サイバー・エンド・ドラゴン    A T K 4 0 0 0

S i n スターダスト・ドラゴン    A T K 2 5 0 0

魔法・罫

S i n W o r l d

伏せ：3

「…正気かよ、最初から攻撃力4000と2500だと…。オレのターン！」

くっ…あんなデッキと長期戦などやってられるか。こんな沙漠地帯で長期戦などしていたら、オレでも体力が持たん。

「魔法カード『アトミック・フレア』発動！相手がデッキから2枚ドロローして発動する。相手フィールド上のカードを全て破壊し、1枚につき1000ポイントのダメージを与える！」

2枚ドロローした後、巨大な火球が空から落ちてきた。しかし、アルフォスのフィールドに落ち、爆発しようとしたその瞬間、火球は星の光に包まれて消える。

「Sin スターダストの効果発動。エンドフェイズまで生け贄とす

る事で、破壊効果を無効にして破壊する。」

フツ、長期戦を避けるのに必死だな。まあ、この暑さとSinのパワーを見れば当然の事か。もちろん、オレも長期戦をするつもりはない。イヴを傷つけてくれたヤツを長く生かしておくつもりはないからな。

ついでにくオレをシスコン呼ばわりするカオスもな。誰がシスコンだ。

「お前にはここで死んでもらう。畏発動、『Sin Transition』。このカードはSinモンスターが墓地へ送られた場合に発動し、デッキからSinモンスターをその召喚条件に従って特殊召喚できる。出でよ、『Sinレッド・デーモンズ・ドラゴン』。」

Sinレッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000

『Sinレッド・デーモンズ・ドラゴン』  
レベル8 闇属性 ドラゴン族・効果 ATK3000 DEF2000

このカードは通常召喚できない。エクストラデッキから『レッド・デーモンズ・ドラゴン』1体を除外した場合のみ特殊召喚する事ができる。このカードが攻撃したダメージステップ終了時に表示形式（攻撃表示、守備表示）を1つ宣言する。このカードを除く、フィールド上に存在する選択した表示形式のモンスターを全て破壊する。フィールド魔法が表側表示で存在しない場合、このカードは攻撃できず、効果が無効になり、自分は魔法カードを発動する事ができない。

翼と頭部に黒と白の鎧を装備した悪魔竜が出現した。グランがSinレッド・デーモンズを視界に映した時に、砂漠の熱で揺らいで見えるのは、生身の体が熱に耐えられず、意識が朦朧としているからだ。対し、アンドロイド体のアルフォスは汗もかかず、暑そうな表情さえしない。

「オレは『四神天虚無影』を発動。デッキの『四神天』を特殊召喚する。来い、『四神天朱雀』！！」

「！！」

砂漠の空に、全身が炎に包まれた不死鳥が舞う。

「このターン、四神天は攻撃できず、エンドフェイズ時に除外される。カードを2枚伏せ、更にモンスターを伏せる。ターンエンド。」

不死鳥は黒く染まり、尾の方から透けるように消えて行った。そして、破壊効果を無効にしたSinスターダストがアルフォスのフィールドに舞い戻る。

Gran

LP 8000

Hand : 1

Field

伏せ : 1

魔法・罫

伏せ : 2

「オレのターン。」

四神天は今、除外ゾーンに存在する。グランの伏せカードには四神天を呼び出すカードがあるのだろう。イヴを敗北させたその力…絶対にオレの物にする。

「オレは『究極宝玉神レインボー・ドラゴン』を墓地へ送り、『Sinレインボー・ドラゴン』を特殊召喚。Sinサイバー・エンドは貫通能力がある。行け、『Sinサイバー・エンド・ドラゴン』！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「畏発動、『不死鳥の炎壁』。戦闘ダメージを0にし、デッキからランダムにカードを1枚選択して手札に加える。」

Sinサイバー・エンドの3つの首から一発ずつ火球が撃ち出されたが、グランのモンスターの目の目に現れた灼熱の壁に阻まれ弾かれた。

「小賢しい。『Sinレインボー・ドラゴン』！オーバー・ザ・レインボー!!!」

虹色のプレス攻撃は阻まれる事なく、グランの裏側守備表示モンスターを貫いた。しかし、次の瞬間、再び天に不死鳥が舞う。更に、破壊した紅蓮のローブを身に着けた魔術師のようなモンスターも蘇った。

「破壊された『四神天の従者』の効果発動。このカードが破壊された墓地へ送られる場合、除外された四神天を特殊召喚する。そして特殊召喚された『四神天朱雀』の効果によって、オレは自分の墓地からモンスター1体を特殊召喚できる。『四神天の従者』を守備表示

で復活！」

「まだSinnレッド・デーモンズの攻撃が残っている。『Sinnレッド・デーモンズ・ドラゴン』！『四神天の従者』を攻撃、アプソリユート・パワー・フォース！」

手に炎をまとったSinnレッド・デーモンズ・ドラゴンは、それを惜しむことなく四神天の従者にぶつけた。そして、破壊されかけの四神天の従者と大空を舞う不死鳥に、巨大な隕石が衝突し、2体とも押し潰された。

「Sinnレッド・デーモンズは攻撃したダメージ計算後、表示形式を一つ宣言し、その表示形式のモンスターを全て破壊する。オレは守備表示を宣言した。」

そして、四神天の従者の効果が発動するのは「このカードが破壊される場合」。よって、その段階ではまだ四神天朱雀は除外されていないため、朱雀を復活させる事はできない。

「更に罨発動、『Sinn Spirit』。相手モンスターを破壊したターン、デッキから『Sinn』と名のついたモンスターを特殊召喚する。『Sinnパラレルギア』召喚！」

「そのモンスターは…！」

「『Sinnレインボー・ドラゴン』に『Sinnパラレルギア』をチューニング！時空の歪みより生まれし混沌、秩序の世界を破滅へ導け！シンクろ召喚…！」

大地が歪んだような景色を見せ、衝撃波と共に空中に黒い渦が誕生



した。

「『S i n n デイマイズ・ドラゴン』!!!」

黒い鎧こそ装備していないが、全身が薄い黒い金属に覆われた、邪悪な風貌のドラゴンがらわれた。背には鋭い棘が何本も生えており、胸のあたりには青い鱗が見える。

『S i n n デイマイズ・ドラゴン』

レベル12 闇属性 ドラゴン族・シンクロ/効果 ATK450  
0 DEF4500

「S i n n パラレルギア」+チューナー以外の「S i n n」と名のついたモンスター1体

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。このカードのカード名は「S i n n パラドクス・ドラゴン」としても扱う。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在するフィールド魔法カードは魔法・罫・効果モンスターの効果を受けない。このカードを対象とする魔法・罫・効果モンスターの効果を無効にして破壊する。相手はこのカード以外の「S i n n」と名のついたモンスターを攻撃対象にできない。

「攻撃力4500だと!?!」

「カードを1枚伏せてターンエンド。人間の体力ではそろそろ限界だろうな。サレンダーして四神天を置いて逃げるなら今のうちだぞ?」

簡単にダメージは与えんぞ。殺る時は一瞬だ。

U l f o c e

L P 8 0 0 0

H a n d : 1

F i e l d

S i n デイマイズ・ドラゴン A T K 4 5 0 0

S i n サイバー・エンド・ドラゴン A T K 4 0 0 0

S i n レッド・デーモンズ・ドラゴン A T K 3 0 0 0

S i n スターダスト・ドラゴン A T K 2 5 0 0

魔法・罫

S i n W o r l d

伏せ：1

「誰が獲物を目前にして退くものか、オレのターン！」

奴のフィールドは最低でも攻撃力2500…どうやら、妹がオレにやられたのがよほど悔しかったようだな。とにかく、逃亡の準備だけはしておこう。メローアの忠告など受け入れるつもりはなかったが、こいつはメローアが言っていた以上にヤバい相手だ。あの鋭い眼光…狙った獲物は確実に仕留めるタイプだ。それも相手に何の抵抗もさせずに。

「『フェニックス・ロード・ウイング』を特殊召喚。このカードは相手フィールド上にレベル8以上のモンスターが3体以上存在する場合、手札から特殊召喚できる。そして、攻撃力は相手フィールド上に存在する攻撃力の最も低いモンスターを倍にした数値となる。」

フェニックス・ロード・ウイング A T K 5 0 0 0

四神天に似ている不死鳥が現れた。違うのは、尾が一本なところだろうか。

「だが貴様は、『Sinデイマイズ・ドラゴン』以外のSinを攻撃できない。よって、そのモンスターの攻撃は強制的にデイマイズ・ドラゴンに向かう事になる。」

「構わぬ！『フェニックス・ロード・ウィング』で『Sinデイマイズ・ドラゴン』を攻撃！プロミネンス・バーニング！」

「む…。」

Ulfoce LP8000 7500

「臆することなく攻めてきたその度胸は認めてやる。だがそれは、貴様に破滅の扉を開かせたようだ。畏発動、『Sin Parade Shift』！『Sinパラドクス・ドラゴン』が破壊された時、ライフを半分払い、『Sinトゥルス・ドラゴン』を特殊召喚する！『Sinデイマイズ・ドラゴン』はパラドクス・ドラゴンとしても扱う。よって、『Sinトゥルス・ドラゴン』を特殊召喚！」

Ulfoce LP7500 3750

Sinトゥルス・ドラゴン ATK5000

「攻撃力5000!!!」

「ラストターン！『Sin トウルース・ドラゴン』で『フェニックス・ロード・ウイング』を攻撃。この時、『Sin トウルース・ドラゴン』は墓地から『Sin パラレルギア』を除外し、破壊を免れる。」

不死鳥と黄色の巨大なドラゴンが相打ちになったが、トウルース・ドラゴンの方は衝突の直前にパラレルギアを盾にする事で破壊を免れた。

「止めだ！行け、『Sin レッド・デーモンズ・ドラゴン』、『Sin スターダスト・ドラゴン』、『Sin サイバー・エンド・ドラゴン』！！」

「そうはいかんど、オレはGhost of chronicle  
が幹部の一人、永炎のグラン！ここでは死なん！」

Gran LP8000 - 1500

グランはどこから取り出した大剣を突き立て、わずかに自分の盾とし、その間に時空にひずみを完成させてそこから逃亡した。

「おのれ…殺れなかったか。……イヴ…。」

エネルギーの大半を使ったアルフォスは拳を強く握って離すと、そのまま空港まで歩き、飛行機に乗って帰った。自分の帰りを待つ人がいる場所に。帰りもカオスの力を使って帰れば良い話だが、アルフォスは基本的に気まぐれで、どんな行動をするか予測するのはイヴでも難しい。

「イヴ、帰ったぞ。」

帰国したアルフォスは寄り道をせずに戻ってきた。エジプトには3日くらい居たことになる。

「お帰りー」

「お帰りなさいませ。大変でしたよ、お嬢様が2時間ごとにアルフォス様がお帰りになられていないのかとわたしの携帯電話にメールを送ってくるものですから…」

「レーヴェン、言わないでよー!」

「まあ怒るなイヴ。オレもお前がいなければ暇な事が多いからな。今か今かと帰りを待っているのはよくあるぞ。」

そついいながらイヴに買ってきた土産を渡す。イヴは少しだけ照れながら、土産を受け取ってくれた。∴仲が悪くなければカオスが言う事もわかる気がする。

次回へ続く。

## 第27話 時空界の鍵（後書き）

次回「時の三姉妹の魂」

アルフォス「めずらしくSinを使ったな。」

イヴ「せっかくもらったんだし、たまにはいいんじゃないかな。今日の最強カードはコレ」

『Sinデイマイズ・ドラゴン』

レベル12 闇属性 ドラゴン族・シンクロノ効果 ATK450

0 DEF4500

「Sinパラレルギア」+チューナー以外の「Sin」と名のついたモンスター1体

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。このカードのカード名は「Sin パラドクス・ドラゴン」としても扱う。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在するフィールド魔法カードは魔法・罫・効果モンスターの効果を受けない。このカードを対象とする魔法・罫・効果モンスターの効果を無効にして破壊する。相手はこのカード以外の「Sin」と名のついたモンスターを攻撃対象にできない。

イヴ「フィールド魔法を守る効果と、自身を対象にする効果を無効にして破壊する効果を持つてるよ。」

アルフォス「こちらを主軸にする場合はSinブルーアイズと打点に頼りないSinスタダストを積まなくてもいいという利点はある。ただし、シンクロ素材になるSinレインボーはメインデッキ

を圧迫するから注意だ。」

イヴ「結局グランには逃げられちゃったけど……」

アルフォス「そうだ、グランで思い出した。オレはカオスも滅さなければな」

カオス「なぜ!?!」

アルフォス「シスコン呼ばわりという大罪」

カオス「いや、事実 何でもありません。」

アルフォス「…チツ」

イヴ「じゃ、じゃあまたね!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8054s/>

---

遊戯王 The Ultimate GOD Force

2011年12月16日02時45分発行